

# 平田遺跡（第19・22次）

—平田送水場改築に伴う発掘調査報告書—

2013年3月

鈴鹿市考古博物館

# 平田遺跡（第 19・22 次）

～ 平田送水場改築に伴う発掘調査報告書 ～



## 例 言

- 1 本書は、三重県鈴鹿市平田本町一丁目地内に所在する平田遺跡（第19次・22次）の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、鈴鹿市水道局の「第5期拡張事業計画」にかかる平田送水場の改築工事に伴う事前の埋蔵文化財の記録保存として実施したものである。
- 3 調査は、平成20年9月8日～平成20年9月20日に範囲確認調査を行い、その結果に基づいて本発掘調査を実施した。第19次調査は平成22年2月2日～平成22年7月7日、第22次調査は平成22年11月18日～平成23年2月25日に行った。
- 4 発掘調査は鈴鹿市が主体となって実施した。なお、発掘調査にかかる土工及び調査補助は株式会社二友組に委託した。

### 【平成21年度 発掘調査体制】

調査担当 鈴鹿市文化振興部 考古博物館

組織及び構成 館長

主幹兼埋蔵文化財グループリーダー

埋蔵文化財グループ副主幹

事務職員

嘱託職員

調査補助 株式会社 二友組

現場代理人

調査補助員

東口 元

新田 剛

村木 修・服部真佳

田部剛士・吉田隆史

吉田真由美・伊藤 洋

下島健弘

山本雅徳・鈴木淳子

### 【平成22年度 発掘調査体制】

調査担当 鈴鹿市文化振興部 考古博物館

組織及び構成 館長

主幹兼埋蔵文化財グループリーダー

埋蔵文化財グループ副主幹

事務職員

嘱託職員

調査補助 株式会社 二友組

現場代理人

調査補助員

東口 元

新田 剛

服部真佳

田部剛士・吉田隆史・米川梨香

吉田真由美・打田知之

作田一耕

荒井英樹・中北敦子・鈴木淳子・石橋忠治

### 【平成23・24年度 屋内整理体制】

組織及び構成 館長

主幹兼埋蔵文化財グループリーダー

埋蔵文化財グループ副主幹

事務職員

嘱託職員

東口 元

新田 剛

服部真佳

田部剛士・吉田隆史・米川梨香

吉田真由美・小川陽子（平成24年度～）

- 5 発掘調査及び本書の作成のための整理作業の参加者は、以下のとおりである。

〔現地調査〕川崎雅則，嶋倉浩一，黒田和英，野元克己，久富正登，松岡洋二，藪野勝久，石川初治，笹井喜次，岩田充広，戎井由光，大塚由己，岡本一夫，柿村嘉晴，上 正彦，川井祐司，川上正博，北口洋，坂口金太郎，佐渡高重，佐藤 勝，島 哲司，田居正勝，瀧岡佳司，寺田幸夫，時任義明，中内和夫，長尾 潤，中上登志夫，中迫 勲，中島秋雄，中島利男，野田米蔵，服部 浩，林 信幸，福井 亨，藤田安夫，堀口晃二，前川 博，松尾清嗣，松下忠幸，丸井和雄，南川美明，山崎幸博，湯田克己，吉田正春，渡辺初男，飯田みさを，橋本 守，大井康雄，加藤忠昭，諸岡日出土，山中洋子，内山 至，別所 稔  
(順不同・敬称略)

〔屋内整理〕永戸久美子，加藤利恵，横内江里，前出みさ子，市橋明子

- 6 現地調査にかかる全ての費用及び本書の製本費は、鈴鹿市水道局が負担した。
- 7 現地調査は吉田隆が担当した。また、調査にかかる庶務を服部が担当した。

- 8 航空写真撮影については、吉田隆の計画・監修の下に株式会社二友組が実施した。
- 9 遺物実測、トレース、採拓、写真撮影は、新田・吉田隆・吉田真・永戸・加藤・横内・前出が実施した。
- 10 発掘調査にかかる出土遺物及び遺構図面、写真資料等の調査記録は、全て鈴鹿市考古博物館において保管している。
- 11 本書の執筆及び全体の編集は、吉田隆が行った。
- 12 概要については他にも公にされているが、本書を以って正式な報告書とする。
- 13 調査地点は、三重県鈴鹿市平田本町一丁目 57-2・58-2・59-2 の一部、60, 62-2 の一部、63-1, 63-2, 63-3, 64, 65, 66, 67, 68, 69, 70, 71, 72, 73, 74-1, 74-2, 74-3, 75・76-1・76-2・77 の一部、78, 80-2, 81-1, 81-2, 82-1, 82-2, 83, 84, 85, 86, 87-1, 87-3, 88-1・88-2・88-3・90-1・91-2 の一部、96-1・97・99 の一部、100, 101, 102, 103, 104・105-1・105-2・107-2・108-3 の一部で、全て周知の埋蔵文化財包蔵地である平田遺跡の範囲内である。
- 14 調査及び報告書刊行にあたっては地元各位を始め、下記の方々のお世話になった。記して感謝申し上げます。  
三重県教育委員会文化財保護室，三重県埋蔵文化財センター，株式会社二友組，牧田地区平田町自治会・水谷正治，  
牧田地区弓削町自治会・沢田 学，愛知県埋蔵文化財センター・永井邦仁 (順不同・敬称略)

## 本文目次

I 前言	1	4 中世の遺構	107
II 位置と周辺の環境	2	5 その他の遺構と遺物	134
III 調査の方法	6	(1) 時期不明遺構	134
1 調査区の設定	6	(2) その他の出土遺物	140
2 試掘調査 (第 19 次)	6	(3) SX22031 について	144
3 解体工事 (第 22 次)	6	VI 結語	167
4 遺構の名称と記号	13	1 縄文時代晩期前半の建物について	167
5 基本層序	13	2 弥生時代後期～古墳時代初頭の集落と墓域について	170
IV 調査の経過	14	3 古代の道路遺構について	171
V 遺構と遺物	23	4 川俣氏と古代の遺構について	175
1 縄文時代の遺構	23	5 中世の屋敷地について	176
2 弥生・古墳時代の遺構	35	参考文献	181
3 古代の遺構	73		

## 図版目次

Fig. 1 平田遺跡範囲図 (S=1/5,000)	1	Fig.27 SK22030 土層断面 (S=1/50)	30
Fig. 2 位置と周辺の遺跡 (S=1/50,000)	3	Fig.28 SD22028 平面 (S=1/50)	30
Fig. 3 調査区配置図 (S=1/2,500)	5	Fig.29 SK22009・30・SD22028・SX22014 出土遺物 (S=1/4)	30
Fig. 4 調査前現況図 (S=1/500)	7	Fig.30 SX22014・P'57・94 平面 (S=1/50)	31
Fig. 5 調査区設定図 (S=1/600)	8	Fig.31 P'57 遺物出土状況 (S=1/20 遺物：S=1/6)	31
Fig. 6 19 次遺構配置図 (S=1/300)	9	Fig.32 P'57・94 出土遺物 (S=1/4 石器：S=2/3)	32
Fig. 7 22 次遺構配置図 (S=1/400)	11	Fig.33 縄文時代の遺構出土遺物 1 (S=1/4 石器：S=2/3)	34
Fig. 8 19 次西壁①・②土層断面 (S=1/20)	13	Fig.34 縄文時代の遺構出土遺物 2 (S=1/4 石器：S=2/3)	35
Fig. 9 遺構配置図 (S=1/400)	21	Fig.35 弥生・古墳時代の主要遺構配置図 (S=1/500)	36
Fig.10 縄文時代の主要遺構配置図 (S=1/500)	24	Fig.36 SH19001 平面 (S=1/100)	37
Fig.11 SA19091・99 平面 (S=1/50)	25	Fig.37 SH19001 土層断面 (S=1/50)	37
Fig.12 SA19091 土層断面 (S=1/50)	25	Fig.38 SH19001 出土遺物 (S=1/4)	38
Fig.13 SA19091・99 断面 (S=1/50)	25	Fig.39 SH19012・57 平面 (S=1/100)	38
Fig.14 SB19086 平面 (S=1/50)	26	Fig.40 SH19012・57 土層断面 (S=1/50)	39
Fig.15 SB19086 土層断面 (S=1/50)	26	Fig.41 SH19057 出土遺物 (S=1/4)	39
Fig.16 SB19086 断面 (S=1/50)	26	Fig.42 SH19014・53 平面 (S=1/100)	41
Fig.17 SA19091・SB19086・90・94 出土遺物 (S=1/4)	27	Fig.43 SH19014 土層断面 (S=1/50)	41
Fig.18 SB19090 平面 (S=1/50)	27	Fig.44 SH19053 土層断面 (S=1/50)	42
Fig.19 SB19090 土層断面 (S=1/50)	27	Fig.45 SH19014 遺物出土状況 (S=1/20 遺物：S=1/6)	43
Fig.20 SB19094 平面 (S=1/50)	28	Fig.46 SH19014・53 出土遺物 (S=1/4)	43
Fig.21 SB19094 土層断面 (S=1/50)	28	Fig.47 SH19053 遺物出土状況 (S=1/20 遺物：S=1/6)	44
Fig.22 SB19094 断面 (S=1/50)	28		
Fig.23 SB22033 平面 (S=1/50)	29		
Fig.24 SB22033 断面 (S=1/50)	29		
Fig.25 SK22009 平面 (S=1/50)	30		
Fig.26 SK22030 平面 (S=1/50)	30		

Fig.48	SH19015 平面 (S=1/100)	44	Fig. 88	SD19004 平面 (S=1/100)	70
Fig.49	SH19015 遺物出土状況 (S=1/20 遺物 : S=1/6)	44	Fig. 89	SD19004 土層断面 (S=1/50)	71
Fig.50	SH19015 土層断面 (S=1/50)	45	Fig. 90	SD19004 出土遺物 (S=1/4)	72
Fig.51	SH19015 出土遺物 (S=1/4)	45	Fig. 91	SK19066 平面 (S=1/50)	72
Fig.52	SH19018 平面 (S=1/100)	47	Fig. 92	SK19066 土層断面 (S=1/50)	72
Fig.53	SH19018 土層断面 1 (S=1/50)	47	Fig. 93	SK19066 出土遺物 (S=1/4)	72
Fig.54	SH19018 土層断面 2 (S=1/50)	48	Fig. 94	弥生・古墳時代の遺構出土遺物 (S=1/4)	73
Fig.55	SH19018 出土遺物 (S=1/4)	48	Fig. 95	古代の主要遺構配置図 (S=1/500)	74
Fig.56	SH19034・SK19033・SD19010 平面 (S=100)	49	Fig. 96	SA19044 平面 (S=1/100)	75
Fig.57	SH19034 断面 (S=1/50)	50	Fig. 97	SA19044 土層断面 (S=1/50)	75
Fig.58	SD19010 土層断面 (S=1/50)	50	Fig. 98	SA19044・SB19095・22032 出土遺物 (S=1/4)	75
Fig.59	SH19034 出土遺物 (S=1/4)	50	Fig. 99	SB19095 平面 (S=1/50)	76
Fig.60	SH19058・59 平面 (S=1/100)	50	Fig.100	SB19095 土層断面 (S=1/50)	77
Fig.61	SH19058・59 土層断面 (S=1/50)	51	Fig.101	SB19095 断面 (S=1/50)	77
Fig.62	SH19058・59 出土遺物 (S=1/4)	51	Fig.102	SB22032 平面 (S=1/50)	78
Fig.63	SH19060・61 平面 (S=1/100)	53	Fig.103	SB22032 断面 (S=1/50)	78
Fig.64	SH19060・61 土層断面 (S=1/50)	53	Fig.104	SD19020 平面 (S=1/100)	79
Fig.65	SH19060 遺物出土状況 (S=1/20 遺物 : S=1/6)	54	Fig.105	SD19020 土層断面 (S=1/50)	79
Fig.66	SH19060・P516 出土遺物 (S=1/4)	55	Fig.106	SD22021・22 平面 (S=1/100)	80
Fig.67	SB19089 平面 (S=1/50)	56	Fig.107	SD22021・22 土層断面 (S=1/50)	80
Fig.68	SB19089 土層断面 (S=1/50)	56	Fig.108	SX22005 平面 (S=1/100)	80
Fig.69	SB19093 平面 (S=1/50)	58	Fig.109	SX22005 土層断面 (S=1/50)	80
Fig.70	SB19093 土層断面 (S=1/50)	58	Fig.110	SD22021・SX22005 出土遺物 (S=1/4)	80
Fig.71	SB19093 断面 (S=1/50)	58	Fig.111	SK19073・SX19074 平面 (S=1/50)	81
Fig.72	SB19093 出土遺物 (S=1/4)	58	Fig.112	SK19073・SX19074 土層断面 (S=1/50)	81
Fig.73	SB19087・SX19002・38 平面 (S=1/100)	59	Fig.113	SK19073・SX19074 遺物出土状況 (S=1/20 遺物 : S=1/6)	82
Fig.74	SB19087 土層断面 (S=1/50)	59	Fig.114	SK19073・SX19074 出土遺物 (S=1/4)	83
Fig.75	SB19087 断面 (S=1/50)	60	Fig.115	SX19017 平面 (S=1/100)	84
Fig.76	SX19038 土層断面 (S=1/50)	60	Fig.116	SX19017 土層断面 (S=1/50)	84
Fig.77	SX19002 土層断面 (S=1/50)	60	Fig.117	SX19017 遺物出土状況 (S=1/20 遺物 : S=1/6)	85
Fig.78	SX19002・13 出土遺物 (S=1/4)	60	Fig.118	SX19017 出土遺物 (S=1/4)	86
Fig.79	SX19013 平面 (S=1/50)	61	Fig.119	SX19035・SK19129・P142 平面 (S=1/50)	88
Fig.80	SX19013 土層断面 (S=1/50)	61	Fig.120	SX19035 遺物出土状況 (S=1/20 遺物 : S=1/6)	88
Fig.81	SX22015・P'124 平面 (S=1/50)	62	Fig.121	P142 遺物出土状況 (S=1/20 遺物 : S=1/6)	88
Fig.82	SX22015・P'124 遺物出土状況 (S=1/20 遺物 : S=1/6)	63	Fig.122	SX19035・P142 出土遺物 (S=1/4)	89
Fig.83	SX22015・P'124 出土遺物 (S=1/4)	64	Fig.123	SX19048・P266 平面 (S=1/50)	90
Fig.84	SD19115・116・22002 平面 (S=100)	66	Fig.124	P266 遺物出土状況 (S=1/20 遺物 : S=1/6)	90
Fig.85	SD19115・116・22002・22 次 2 区東壁 ①土層断面 (S=1/50)	67	Fig.125	P266・315・342・461 出土遺物 (S=1/4)	91
Fig.86	SD22002 遺物出土状況 (S=1/20 遺物 : S=1/6)	67	Fig.126	P342 平面 (S=1/50)	93
Fig.87	SD19115・116・22002 出土遺物 (S=1/4)	68	Fig.127	P342 遺物出土状況 (S=1/20 遺物 : S=1/6)	93

Fig.128	P461 平面 (S=1/50)	93	Fig.165	SD19023 土層断面 (S=1/50)	119
Fig.129	P461 遺物出土状況 (S=1/20 遺物 : S=1/6)	93	Fig.166	SD19023 出土遺物 (S=1/4)	119
Fig.130	P315 平面 (S=1/50)	94	Fig.167	SD19024 平面 (S=1/100)	119
Fig.131	SD19122 ~ 124・127・22001・ SK22010・P'37 平面 (S=1/150)	95	Fig.168	SD19024 土層断面 (S=1/50)	119
Fig.132	SD19122 ~ 124・127・22001・ SK22010・22 次 2 区東壁②土層断面 (S=1/150)	96	Fig.169	SD19024 遺物出土状況 (S=1/20 遺物 : S=1/6)	120
Fig.133	SD19122・127・22001・SK22010 出土遺物 1 (S=1/4)	97	Fig.170	SD19024 出土遺物 (S=1/4)	120
Fig.134	SD19122・127・22001・SK22010 出土遺物 2 (S=1/4)	98	Fig.171	SE19025 平面 (S=1/50)	122
Fig.135	P'37 遺物出土状況 (S=1/20 遺物 : S=1/6)	98	Fig.172	SE19025 土層断面 (S=1/50)	122
Fig.136	P'37 出土遺物 (S=1/4)	98	Fig.173	SE19112・SK19113 平面 (S=1/50)	122
Fig.137	SD19009・21・22・SC19011・ SB19036 平面 (S=1/100)	101	Fig.174	SE19112・SK19113 土層断面 (S=1/50)	122
Fig.138	SD19009・21・22 土層断面 (S=1/50)	102	Fig.175	SE19025・112・SK19113 出土遺物 (S=1/4)	123
Fig.139	SB19036 土層断面 (S=1/50)	102	Fig.176	SK19029・30 平面 (S=1/50)	124
Fig.140	SD19009 出土遺物 (S=1/4)	102	Fig.177	SK19031・32 平面 (S=1/50)	124
Fig.141	SF19016 平面 (S=1/50)	103	Fig.178	SK19031 土層断面 (S=1/50)	124
Fig.142	SF19016 土層断面 (S=1/50)	103	Fig.179	SK19032 土層断面 (S=1/50)	124
Fig.143	SF19016 出土状況 (S=1/20)	104	Fig.180	SK19029 ~ 32 出土遺物 (S=1/4)	125
Fig.144	P353 平面 (S=1/50)	104	Fig.181	SA19098 平面 (S=1/50)	126
Fig.145	P353 出土遺物 (S=1/4)	104	Fig.182	SA19098 土層断面 (S=1/50)	127
Fig.146	古代の遺構出土遺物 1 (S=1/4)	106	Fig.183	SA19098・SB19084 出土遺物 (S=1/4)	127
Fig.147	古代の遺構出土遺物 2 (S=1/4)	107	Fig.184	SB19084 平面 (S=1/50)	128
Fig.148	中世の主要遺構配置図 (S=1/500)	108	Fig.185	SB19084 土層断面 (S=1/50)	128
Fig.149	SD19007・8 平面 (S=1/150)	109	Fig.186	SB19084 断面 (S=1/50)	128
Fig.150	SD19007・8 土層断面 (S=1/50)	109	Fig.187	SB19104・SX19003 平面 (S=1/50)	129
Fig.151	SD19007・8 出土遺物 (S=1/4)	110	Fig.188	SB19104 断面 (S=1/50)	129
Fig.152	SD19005・6・SK19049・SX19100 (S=1/150)	111	Fig.189	SX19003 土層断面 (S=1/50)	130
Fig.153	SD19005・6 土層断面 (S=1/50)	112	Fig.190	SB19104・SX19003 出土遺物 1 (S=1/4)	131
Fig.154	SX19100 土層断面 (S=1/50)	112	Fig.191	SB19104・SX19003 出土遺物 2 (S=1/4)	132
Fig.155	SK19049 土層断面 (S=1/50)	112	Fig.192	中世の遺構出土遺物 (S=1/4)	134
Fig.156	SD19005 出土遺物 1 (S=1/4)	113	Fig.193	その他の遺構配置図 (S=1/500)	135
Fig.157	SD19005 出土遺物 2 (S=1/4)	114	Fig.194	SA19037 平面 (S=1/50)	136
Fig.158	SD19006 出土遺物 (S=1/4)	114	Fig.195	SA19037 断面 (S=1/50)	137
Fig.159	SK19049 出土遺物 (S=1/4)	114	Fig.196	SB19088 平面 (S=1/50)	137
Fig.160	SX19100 平面 (S=1/50)	115	Fig.197	SB19088 土層断面 (S=1/50)	137
Fig.161	SD22011・12 平面 (S=1/100)	117	Fig.198	SB19096 平面 (S=1/50)	138
Fig.162	SD22011・12 土層断面 (S=1/50)	118	Fig.199	SB19096 土層断面 (S=1/50)	138
Fig.163	SD22011 出土遺物 (S=1/4)	118	Fig.200	SB19106 平面 (S=1/50)	139
Fig.164	SD19023 平面 (S=1/100)	118	Fig.201	SB19106 土層断面 (S=1/50)	139
			Fig.202	その他の出土遺物 1 (S=1/4)	141
			Fig.203	その他の出土遺物 2 (S=1/4)	142
			Fig.204	その他の出土遺物 3 (S=1/4)	143
			Fig.205	SX22031 平面 (S=1/150)	145
			Fig.206	SX22031 断面 (S=1/100)	146
			Fig.207	諸戸水道貯水槽平面 (S=1/150)	147
			Fig.208	諸戸水道貯水槽断面 (S=1/150)	148

Fig.209 平地式住居 (S=1/100)	167	Fig.215 平田遺跡道路遺構の走行方向 (S=1/40,000)	174
Fig.210 掘立柱建物 (S=1/100)	168	Fig.216 平田遺跡屋敷地 (S=1/800)	175
Fig.211 弥生・古墳時代の集落と墓域 (S=1/400)	169	Fig.217 屋敷地と内部施設 (S=1/300)	176
Fig.212 南山遺跡第2次調査区 (S=1/200)	170	Fig.218 SX19003・100・SB19104 (S=1/100)	177
Fig.213 平田遺跡道路遺構 (S=1/1,000)	171	Fig.219 糶屋垣内遺跡屋敷地 (S=1/600)	179
Fig.214 SC19011 と路面上の古代遺構 (S=1/200)	172	Fig.220 雲出島貫遺跡居館 (S=1/1,500)	180

## 表 目 次

Tab.1 遺構一覧 (1)	149	Tab.3 遺物一覧 (2)	166
Tab.2 遺構一覧 (2)	150	Tab.4 報告書抄録	巻末
Tab.3 遺物一覧 (1)	151		

## 写 真 図 版 目 次

PL.1 19次調査区全景 真上から	SX19017 下層遺物 北東から / SD19020・24 完掘 北東から / SD19024 遺物 南から / SE19025 全景 北から
PL.2 22次調査区全景 真上から	
PL.3 19次調査区全景 西から / 19次調査区遠景 北から	PL.10 SH19034 完掘 北から / SX19035 遺物 南 から / SB19036 完掘 北から / SA19037 完掘 北から / SA19044 完掘 東から / S H19058 検出・59 完掘 東から / SH19058・ 59 完掘 北から / SH19060 完掘・61 検出 東から
PL.4 22次調査区全景 西から / 22次調査1区全景 真上から	PL.11 SH19060・61 完掘 東から / SH19060 遺物 北から / SK19073 遺物 北から / SX1907 4 遺物検出 北から / SX19074 遺物 北から / SB19084 完掘 北東から / SB19086 完掘 北から / SB19090 完掘 南から
PL.5 22次調査2区全景 真上から / 22次調査3 区全景 真上から	PL.12 SA19091 完掘 北西から / SA19099 完掘 北西から / SB19093 完掘 北から / SB19 094 完掘 南東から / SB19095 完掘 南から / SA19098 完掘 北東から / SX19100 完掘 西から / SB19106 完掘 北から
PL.6 SH19001 完掘 西から / SX19002 完掘 北東 から / SX19003・SB19104 完掘 西から / SD19004 検出 北東から / SD19004 完掘 北 東から / SD19005・6 完掘 北から / SD19 005 東西完掘 北から	PL.13 SE19112・SK19113 完掘 北から / SD1911 5・116 完掘 北西から / P142 遺物 南から / P142 下層遺物 南から / P266 遺物 南 から / P342 遺物 南から / P461 遺物 南から / SD22001 完掘 西から
PL.7 SD1907・8 完掘 東から / SD19009 検出 北 東から / SR19011 完掘 北東から / SD190 10 完掘 北東から / SH19012 検出・57 完掘 北東から / SH19012・57・SD19023 完掘 北 西から	PL.14 SD22001 土層 南西から / SD22002 完掘 北から / SD22002 遺物 東から / SD2201 1・12 完掘 南から / SX22014 完掘 北か
PL.8 SX19013 完掘 北西から / SH1914 完掘・53 検出 南西から / SH19014・53 完掘 南から / SH19014 土坑遺物 南から / SH19053 土 坑遺物 北から / SH19015 完掘 南から / SH19015 遺物 東から / SF19016 検出 南東 から	
PL.9 SF19016 焼土・炭化物検出 北西から / SF19 016 完掘 南東から / SX19017・SH19018 完 掘 北西から / SX19017 遺物 北東から /	



	ら / SX22015 完掘 西から / SX22015 遺物 西から / SB22032 完掘 西から	PL.19	石器・縄文土器
PL.15	P'37 遺物 西から / P'57 遺物 東から / P'124 遺物 南から / SX22031 全景 東から / SX22031 全景 北東から / SX22031 全景 南西から / 19 次調査区通路部分南～南東部全景 西から / 19 次調査区通路部分北～東部全景 北から	PL.20	石器・縄文土器・弥生土器・土師器
PL.16	19 次調査区試掘トレンチ全景 西から / 22 次調査 1 区全景 西から / 22 次調査 1 区全景 東から / 22 次調査 1 区 TP1 全景 北から / 22 次調査 1 区 TP2 全景 北から / 22 次調査 1 区 TP3 全景 北から / 22 次調査 1 区 TP4 全景 北から	PL.21	弥生土器
PL.17	22 次調査 1 区 TP5 全景 北から / 22 次調査 1 区トレンチ 1 南部全景 南東から / 22 次調査 1 区トレンチ 1 北部全景 北から / 22 次調査 1 区トレンチ 2 西部全景 南西から / 22 次調査 1 区トレンチ 2 東部全景 北西から / 22 次調査 2 区全景 北から / 22 次調査 3 区全景 南から / 19 次調査区作業風景(西から)	PL.22	弥生土器・須恵器・土製品
PL.18	SX19003TP4 掘削 南から / SF19016 掘削 南西から / 19 次調査区現地説明会風景 南東から / 19 次調査区現地説明会風景 東から / 19 次調査区調査前 西から / 19 次調査区調査前 東から / 22 次調査 1 区調査前 北東から / 22 次調査 2 区調査前 南西から	PL.23	縄文土器・弥生土器・土師器
		PL.24	縄文土器・弥生土器・須恵器・土製品
		PL.25	弥生土器・土師器・須恵器・黒色土器・山皿
		PL.26	弥生土器・土師器・須恵器・黒色土器・灰釉陶器
		PL.27	弥生土器・土師器・須恵器・土製品
		PL.28	土師器・須恵器・黒色土器
		PL.29	土師器・須恵器・黒色土器・土製品
		PL.30	縄文土器・石器・弥生土器・土師器・須恵器
		PL.31	石器・弥生土器・土師器・須恵器・黒色土器・灰釉陶器・製塩土器
		PL.32	弥生土器・土師器・灰釉陶器・緑釉陶器・山茶碗・青磁・白磁
		PL.33	土師器・山茶碗・山皿・青磁・瓦・土製品
		PL.34	土師器・山茶碗・山皿・青磁・白磁
		PL.35	土師器・灰釉陶器・山茶碗・山皿・青磁・白磁・瓦
		PL.36	土師器・山茶碗・山皿・青磁・白磁・土製品
		PL.37	弥生土器・土師器・須恵器・灰釉陶器・山茶碗・山皿・常滑焼
		PL.38	縄文土器・弥生土器・須恵器・山茶碗・山皿・瓦
		PL.39	土製品

## 凡 例

- ・遺構の平面規模は、遺構検出面で計測している。
- ・遺構の深さについては、特に断りがない限り、遺構検出面から底面までを計測したものとす。
- ・出土資料に対しては、それぞれに実測番号・報告番号を付与しており、当該報告書に掲載した資料については、報告番号に基づいて収蔵管理を行っている。
- ・弥生時代後期～古墳時代中期の土器については、財団法人愛知県埋蔵文化財センター・赤塚次郎氏の分類による「八王子古宮式」・「山中式」・「廻間式」・「松河戸式」に依拠している。
- ・「八王子古宮～廻間式期」の土器については、本来であれば「弥生土器」と「土師器」に区分する必要があるが、その線引きについては研究者によって諸論があり、また帰属時期を明確に分けられない資料が存在するため、本書では一括して「弥生土器」との表記に統一するものとする。なお、これ以降の時期の資料については、「土師器」と表記している。

## I 前言

鈴鹿市水道局による「第5期拡張事業計画」は、水源水量の過不足及び配水池容量の不足、基幹施設の耐震化等、鈴鹿市の人口及び需要水量に適合するべく計画・実施されている。市民生活の維持に必要な不可欠となるライフラインとしての水源及び水質を確保するため、配水施設の増補強及び浄水施設の改良、送水施設の強化等を中心とする施設整備を図り、より一層の安全給水体制の確立を目指すものである。この事業計画の中において、老朽化の著しい平田送水場の改築事業が行われることが確定した。

計画箇所は周知の埋蔵文化財包蔵地（平田遺跡）の範囲内であった（Fig.1）。そのため、遺跡の範囲確認を目的とし、平成20年9月に範囲確認調査を実施した。範囲確認調査は事業対象地約9,000㎡に対し、長短9本のトレンチを設定して行った。その結果、殆どのトレンチで遺構及び遺物が検出され、事業対象地の大部分の範囲内に遺跡が広がっていることが確認された。平田送水場の改築に付随して実施される造成工事によって、現況の大幅な変更が避けられないことが判明したため、速やか

に設計変更の協議を行ったものの、変更は困難であるとの結論に至った。

平成21年12月、正式に平田送水場改築工事に伴う発掘通知書を受理し、遺跡の破壊に繋がる範囲を絞り込むことで本格的な発掘調査の対象とし、記録保存を行うこととなった。今回は平田送水場改築工事にかかる平田遺跡第19・22次調査の結果を報告するものであり、平田送水場改築工事に伴う調査はこれを以って完了することになる。総調査面積は5,040㎡に達する。



Fig.1 平田遺跡範囲図 (S=1/5,000)



## II 位置と周辺の環境

平田遺跡は鈴鹿川右岸の河岸段丘上に位置し、約45,000㎡の範囲に広がる (Fig.2)。この段丘は標高約22 mを測り、北側の鈴鹿川へ向かって舌状に張り出す地形をなす。眼下の鈴鹿川によって形成された谷底平野との比高は4～5 m程度である。現在においても、当該河岸段丘上には閑静な住宅街が広がり、北側の谷底平野では主に水田が営まれている。

平田遺跡では、縄文時代晩期前半に本格的に遺跡が形成される。舌状台地の先端部である第19・22調査区を中心に集落が経営されたものと考えられる (Fig.3)。やや数を減らすものの、縄文時代晩期後半の凸帯文の頃の土器も比較的まとまる。鈴鹿市内においては、全体的に縄文時代の遺構・遺物は希薄であるが、平田遺跡から南西方向へ約4.7km隔絶した保子里遺跡及び北一色遺跡において、大きな成果が得られている。保子里遺跡及び北一色遺跡は、鈴鹿川中流域の右岸段丘上に所在し、遺物の出土は縄文時代前期に遡る。縄文時代中期末～後期初頭頃になると竪穴住居が検出され、比較的多量の遺物が出土することから、本格的な集落経営が開始されたものと考えられている。保子里遺跡では、縄文時代後期中葉の緑帯文期の土器がよく出ており、晩期には竪穴住居も確認されている。平田遺跡と同様、縄文時代晩期の土器も比較的まとまりを見せ、鈴鹿川に向けて張り出す台地上の先端部に位置する立地条件も共通しており、非常に興味深い。その他、東庄内A・B遺跡、起A遺跡等で縄文時代中期後半、東庄内A遺跡で後期前半、長者屋敷遺跡等で晩期の遺構及び遺物が点在する様相を示す。

弥生時代の平田遺跡は、前～中期の明確な遺構は検出されておらず、暫く空白期間が生じる。その後、弥生時代後期～古墳時代初頭に入ると、竪穴住居及び方形周溝墓、掘立柱建物を中心とする生業を確認できる。第1次調査では弥生時代後期の方形周溝墓から、縄文時代晩期前半の石刀がほぼ完形で出土している。出土状況からは供献された可能性が考えられ、興味深い事例である。但し、過去の調査における該当時期の遺構は希薄であり、第19・22次調査区の成果が卓越する。竪穴住居が密集するような密度ではないが、この舌状台地の先端部を中心とし、特に古墳時代初頭に集落が隆盛したものと考えられる。鈴鹿市内における弥生時代後期～古墳時代初頭の集落遺跡を概観すると、鈴鹿川左岸段丘上には弥生時代後期を中心とする磐城山遺跡、南山遺跡、一反通遺跡、青谷遺跡等が存在する。この地域は、特に同時期の集落域を点的に乗せる台地である。中でも、磐城山遺跡は弥生時代後期前半の八王子古宮式の段階から始まる大規模な集落遺跡で、後期後半の山中式の頃に隆盛を誇った後、

廻間式期に入って急速に衰退する。農地改良工事に先立つ本発掘調査が平成22年度から継続的に実施され、竪穴住居の累積棟数は既に100棟を超過する。検出棟数は調査の進展に従いながら、年々増加の一途を辿っているが、非常に濃密な遺構密度を誇る上に、竪穴住居が複雑に重複している特色がある。段丘上における集落の継続性や土地への固執を考える上で、大いに刮目されるべき遺跡である。南山遺跡では、弥生時代後期の竪穴住居及び方形周溝墓が検出され、集落域と墓域が近接して存在する例として興味深い。一反通遺跡は弥生時代前～後期に継続して営まれた遺跡で、突線紐式銅鐸片の出土が著名であり、鈴鹿川流域における弥生時代の拠点集落として位置付けられている。鈴鹿川を挟んだ右岸の十宮古里遺跡 (旧称：神戸中学校遺跡) では、幅3 mを超える大溝に対し、意図的に破碎させたと見られる土器群が投棄されており、水に関わる祭祀の可能性が想定されている。特に廻間I式期の一括資料が出土し、重要な成果が得られている。また、伊勢湾を望む岸岡山丘陵付近においては、岸岡山Ⅲ遺跡及び天王遺跡が代表的な遺跡として挙げられる。岸岡山Ⅲ遺跡では、山中式～廻間I式を中心とする竪穴住居を80棟以上検出している。天王遺跡は、弥生時代後期には二重の環濠が巡る集落が検出されている。前述の一反通遺跡及び南山遺跡、磐城山遺跡も同時期の環濠集落である。なお、この時期においては、周辺の平野や沖積地の低地帯の集落が終焉し、岸岡山Ⅲ遺跡や磐城山遺跡のような比較的高地の丘陵上へと変遷する現象が確認できる。

古墳時代前期以降、平田遺跡では再び空白期間となる。この時期の遺構は未検出であり、出土遺物も少なく、具体的な生業が確認されるのは飛鳥時代になってからである。概ね7世紀後半～8世紀前半に竪穴住居群が分布し、8～9世紀代には掘立柱建物群へと変遷したことが分かっている。また、古代においては、道路遺構が遺跡内を縦貫する。道路面は削平されているものの、2条の側溝が等間隔の幅員を保って並行する。これが直線的に延伸する様相を呈しており、計画的に造られた官営道路であると考えられている。道路遺構と重複し、これを削平するのが第1次調査で確認された四面廂付掘立柱建物である。三重県内屈指の規模を誇り、国司や郡司クラスの居宅や官衙関連施設の可能性が想定されている。その他にも、円面硯及び緑釉陶器、畿内系土師器等が出土しており、単純な集落しては片づけられない成果が並ぶ。なお、平田遺跡近辺においては、『続日本後紀』の記述から、平安時代前





Fig.2 位置と周辺の遺跡 (S=1/50,000) ※国土地理院25,000分の地形図利用



期頃に川俣県造の一族が居住していたとされている。鈴鹿郡の有力豪族である川俣氏についての詳細は明らかではないが、一般集落とは様相を異にする遺構及び遺物の数々は、その関係性が大いに想定される。

平田遺跡は古代の鈴鹿郡に所在するが、河曲郡とのほぼ境にある。近辺においては、古代遺跡の本発掘調査の事例は少ないが、東方へ約4km離れた河曲郡の萱町遺跡では、平成19年に行われた第2次調査で大きな成果が得られている。個人住宅建築にかかる狭隘な調査区にも関わらず、8世紀後半～9世紀の一括資料が得られている。出土遺物には黒色土器及び緑釉陶器、鞆の羽口、製塩土器、暗文が施された土師器等、官衙的要素の強いものが並ぶ。平成17年の第1次調査においても、円面硯が出ていることから、地方豪族の居宅や郷クラスの施設の存在が想起されている。

平田遺跡では道路が廃絶し、そして9世紀代の遺構が衰退して以降、10～11世紀頃の遺構密度は希疎となる。再び人々の生活が活性化するのは、鎌倉時代に入ってからとなる。中世前期を中心に広範な敷地規模を誇る屋敷地が存在し、その内部には掘立柱建物及び井戸、土坑等が検出され、また青磁及び白磁等の出土から、一定以上の有力者が居住したものと想定される。屋敷地は二重の区画溝で分けられる特徴を有しており、その性格は非常に興味深い。鈴鹿市内の中世の調査成果を鑑みると、平田遺跡から東方約2kmの位置に所在する竹野一丁目遺跡におけるものが卓逸する。当該遺跡は鈴鹿川右岸の低位段丘上に存する鎌倉時代の遺跡であり、鈴鹿市初の事例となる中世の水田及び畦畔、用排水路、総柱掘立柱建物等が検出されている。総柱掘立柱建物からは貿易陶磁及び石硯等が出土し、在村領主の屋敷地と推定されている。また、人名の「よね」や「兎」の絵が描画された墨書山茶碗の出土も見られる。ほぼ正方位の溝による区画の中で、微高地に建物、その周囲には井戸を配置し、豊富な水脈を活用した水田や畑を営む13世紀代の村落風景の様相が確認されている。竹野一丁目遺跡の周辺には、同じく鎌倉時代の遺跡である竹野遺跡及び三日市東遺跡、三日市南遺跡が分布する。

平田遺跡における中世の様相は、13世紀中葉、降っても13世紀代を以ってほぼ収束するものと見られる。調査結果を鑑みると、それ以降の生活の痕跡を示すものは殆どない。しかし、埋蔵文化財包蔵地としては、平田遺跡の南西に隣接し、中世後期の城館である平田城跡が存在する。応仁元年（1467年）に平田氏が当地に城を築いたとされ、これが滅亡するまでの100年間余、勢力を誇っていたものと考えられている。現在においては、僅かに痕跡を留めるのみであり、過去の調査でも該当期

の遺物が散見される程度と乏しい結果しか得られていない。なお、本調査区から南西約100mに所在する高まりは、当初は前方後円墳の御門垣内古墳として周知されていたものの、第1次調査の結果、土塁であることが確認されている。平田城跡と何らかの形で関連するものであろうか。

平田遺跡では、近年に調査地南側を中心として開発事業が進み、平成16年以降、24次に及ぶ本発掘調査が行われている。宅地造成及び個人住宅建築等に先立つこれまでの調査結果では、前述したように縄文時代～中世に至る幅広い成果を得られている。長期間にわたって営々とこの地が利用されてきたのみならず、極めて重要な成果を内包する。平田遺跡周辺に目を向けると、本発掘調査の事例はあまり多くはないが、同じく鈴鹿川右岸において、点的に実施されている。本調査区から東へ約850mの弥生時代～中世の岡田南遺跡において、平成10年に調査が行われ、古墳時代の土坑墓及び古墳周溝、奈良～平安時代の掘立柱建物、中世の溝等が検出されている。土壙墓からは、勾玉2点及び管玉1点に加え、ガラス玉103点等が出土している。また、本調査区から南東約500mの岡太神社遺跡にて、6次にわたる調査の結果、平安時代の溝及び土坑、中世の区画溝及び井戸、道路状遺構等が検出されている。過去には区画溝を検出するに留まっていたが、平成24年に実施された第6次調査では、その内部に初めて掘立柱建物の確認に至っている。区画内には、井戸及び土坑等が造られており、鎌倉～室町時代を主とする集落の様相を考える上で、重要な知見が得られている。平田遺跡の東方には、縄文時代及び古代の天神遺跡、中世の岡田遺跡が広がる。鈴鹿川の中流域におけるこれらの遺跡は低～中位段丘上に立地し、鈴鹿川に程近い微高地という立地条件において、古来より複合的に人々の生業が営まれてきたことが分かる。

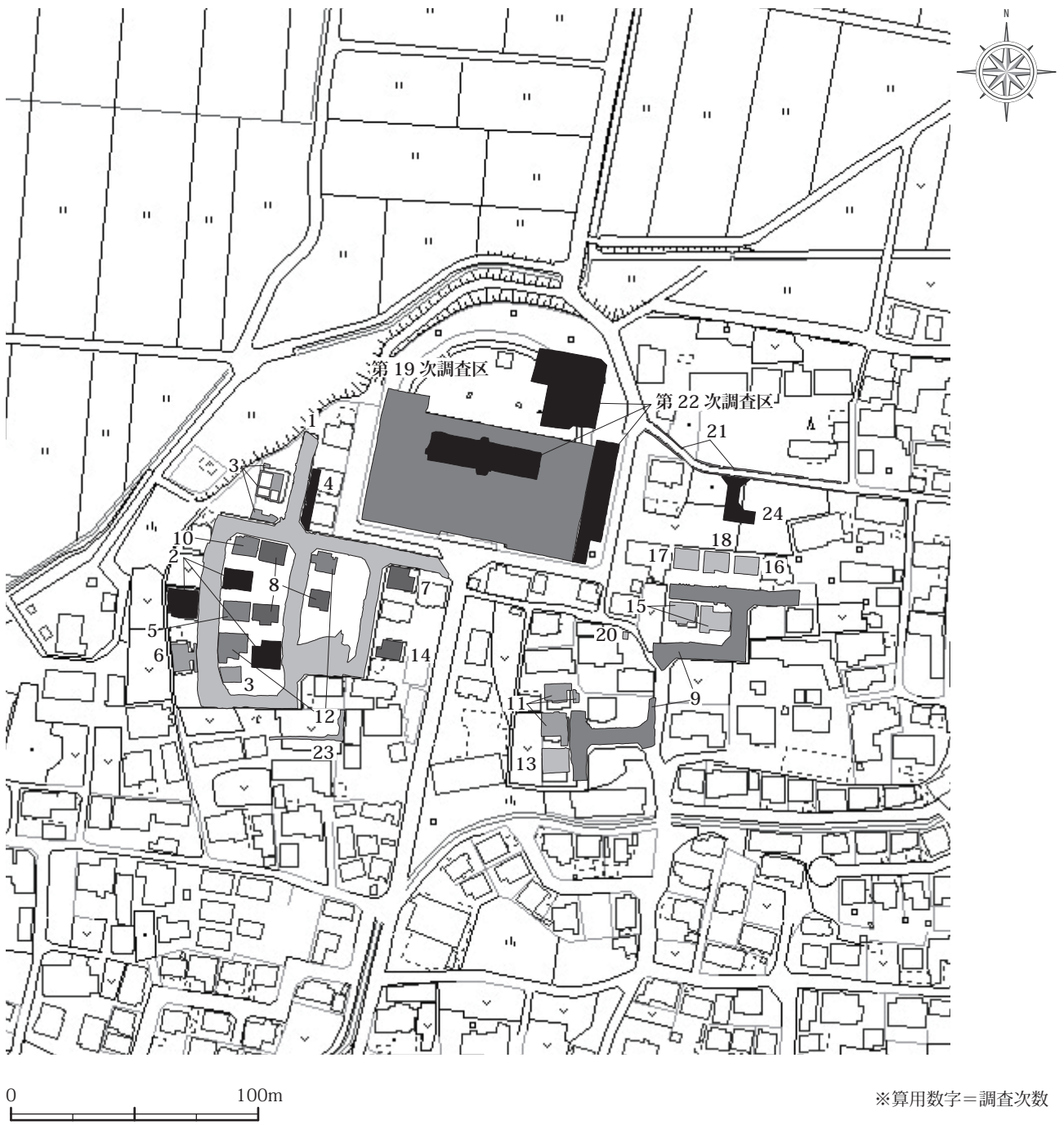


Fig. 3 調査区配置図 (1/2,500)

### Ⅲ 調査の方法

#### 1 調査区の設定

調査地内には直近まで稼動していた既存建物（平田送水場建物等）が存在する（Fig.4）。その解体時期の問題から、調査を2期に分けて実施することになった。第1期は既存建物部分を除く3,660㎡を対象とし、平成22年2月2日から平成22年7月7日にかけて、第19次調査として行った（Fig.6）。

第2期は第19次調査で確認できなかった範囲を対象とし、中央部及び東部の既存建物解体後の下面、北東部に新設される建物部分に対して実施した。調査次数は22次を数える。第22次調査は調査区が飛び地状に3箇所に分断されるため、混乱を避けるべく、中央部既存建物下面を1区、東部既存建物下面を2区、北東部新設建物部分を3区と設定し、計1,380㎡に対して調査を実施した（Fig.7）。なお、1区は既存建物の基礎梁によって分かれるため、TP1～6に細分した。

また、国土座標第VI系に基づき、3m四方のグリッドを設定した（Fig.5）。グリッドは調査区全体を網羅するように配置し、基点となる北西隅をA1と称した。グリッドに対しては西から東へA～ALの連続するアルファベットを、北から南に向へ連続する1～30の算用数字を付与し、これらのアルファベットと算用数字を組み合わせた2桁、若しくは3桁の記号を以って各グリッドの呼称とした。なお、国土座標第VI系の交点（X=-123780.000 m, Y=49230.000 m）がグリッドK2と符合する。

#### 2 試掘調査（第19次）

平成22年3月12日、第19次調査と並行して試掘調査を実施した。当初は調査地北西部において、水槽升埋設箇所に対する埋蔵文化財の包蔵状況の確認を目的としていた。水槽升については、全てを高さ3.0m程度の土盛に覆われ、また過去の工作物であるために図面がなく、その規模や配置、深さ等の詳細が不明であるためである。しかし、鈴鹿市水道局の事業の中で、第19次調査後に行われる既存建物解体にかかる進入路敷設により、調査地外道路との高低差を解消するべく、調査地北西部が面的に削平される計画であることが判明する。遺構面に影響が及ぶことが確実であるため、併せて試掘調査の対象として設定した。

試掘調査は、長さ17m、幅0.7mの東西試掘溝（トレンチ）を1箇所設定し、重機（0.25㎡）を用いて東から行った（Fig.6）。

調査の結果、水槽升埋設箇所については、その西際を掘削したものの、水槽升底端の検出には至らなかった。

水槽升は地山面より更に掘り込んで埋設され、その設置箇所全面が削平されていることが確認された。加えて、水槽升埋設時の掘り方によって、水槽四方3m程度の範囲が広く攪乱されていることが判明した。

しかし、水槽升の掘り方以西は削平を免れており、地山を明確に掘り込んだピットが複数検出された。遺物の出土はなかったが、確実に遺構が存在することから、当該進入路敷設にかかる事業で影響を受ける範囲である約119㎡を試掘拡張部とし、第19次調査の対象範囲に追加した。

#### 3 解体工事（第22次）

第19次調査の終了後、調査区内に存する建物の解体工事が行われた。当該工事によって遺構面に影響が及ぶことを避けるべく、協議を行った結果、地上に露出する建物部分のみを対象として先行して解体し、建物の基礎部分については地中にそのまま残す形で行われた。

解体工事終了後、現地を確認したところ、1区について、想定した単純な布基礎構造ではなく、布基礎の内部がコンクリートの独立基礎等によって補強施工された重厚な造りであることが判明した。部分的に露出した基礎断面を確認するに、その掘削深度が予想以上であり、最悪の場合は1区全面の遺跡が失われていることも想定された。

しかし、遺構の遺存状況を確認するため、布基礎内部の空闲地を一部先行して調査（トレンチ1・2）を行った結果、基礎の下面には造成土（黄色砂質土）が入られ、その下層から包含層及び地山が遺存していることが確認された。建物の外周及び内部の基礎梁と各々の掘り方を中心とする範囲については攪乱されているものの、それ以外の範囲には遺構が残っていることを確認した。

結果として、1区全面に対する調査を予定通り実施する必要が生じた。調査の遂行にあたっては、既に遺構が破壊されている箇所の基礎については残すとしても、内部の基礎等の解体・撤去が避けられない。即刻協議を行い、トレンチ1・2の遺構掘削及び測量等の調査を終えた段階で一度埋め、埋めた土を緩衝材とすることで遺構面を十分に保護しながら、別途で解体を行うことになった。

なお、1区中央部及び東部にて先行して行ったトレンチ調査の範囲については、遺構平面図等に対して、青色のラインを以って表現している（Fig.7）。

1区の解体工事と並行して2・3区の調査を行った結果、調査の進行は2区→3区→1区の順となった。



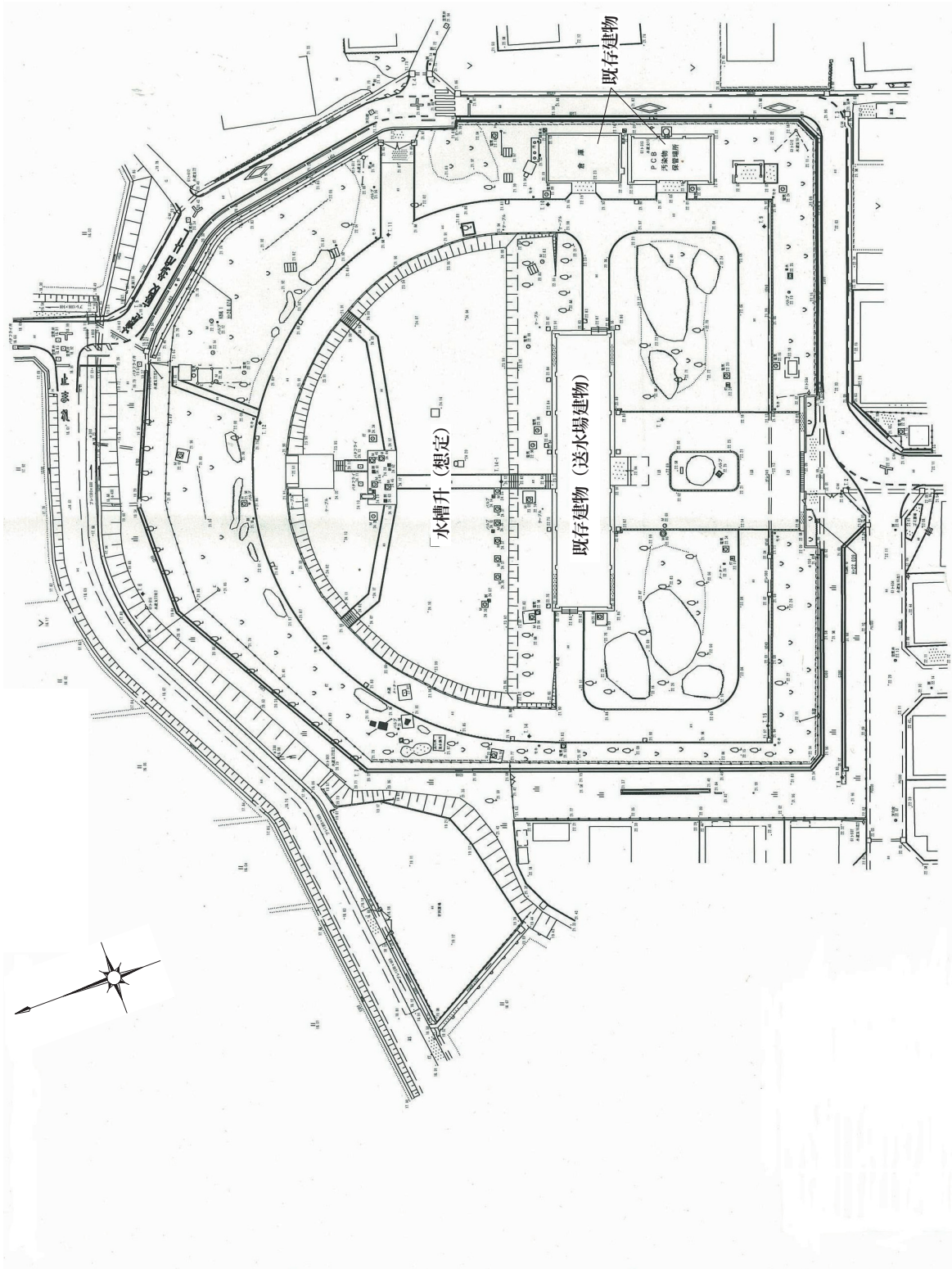


Fig.4 調査前現況図 (S=1/500)

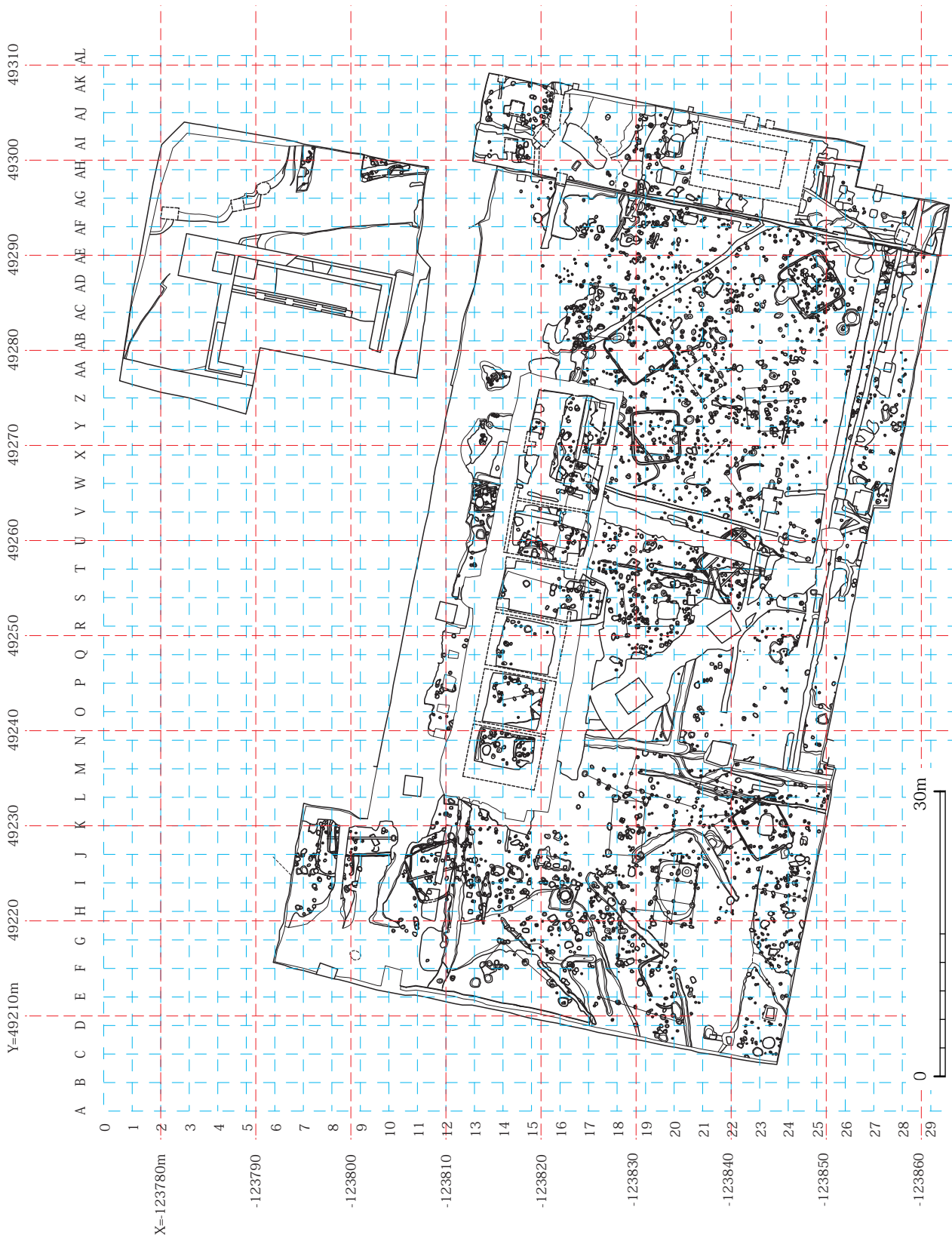


Fig.5 調査区設定図 (S=1/600)



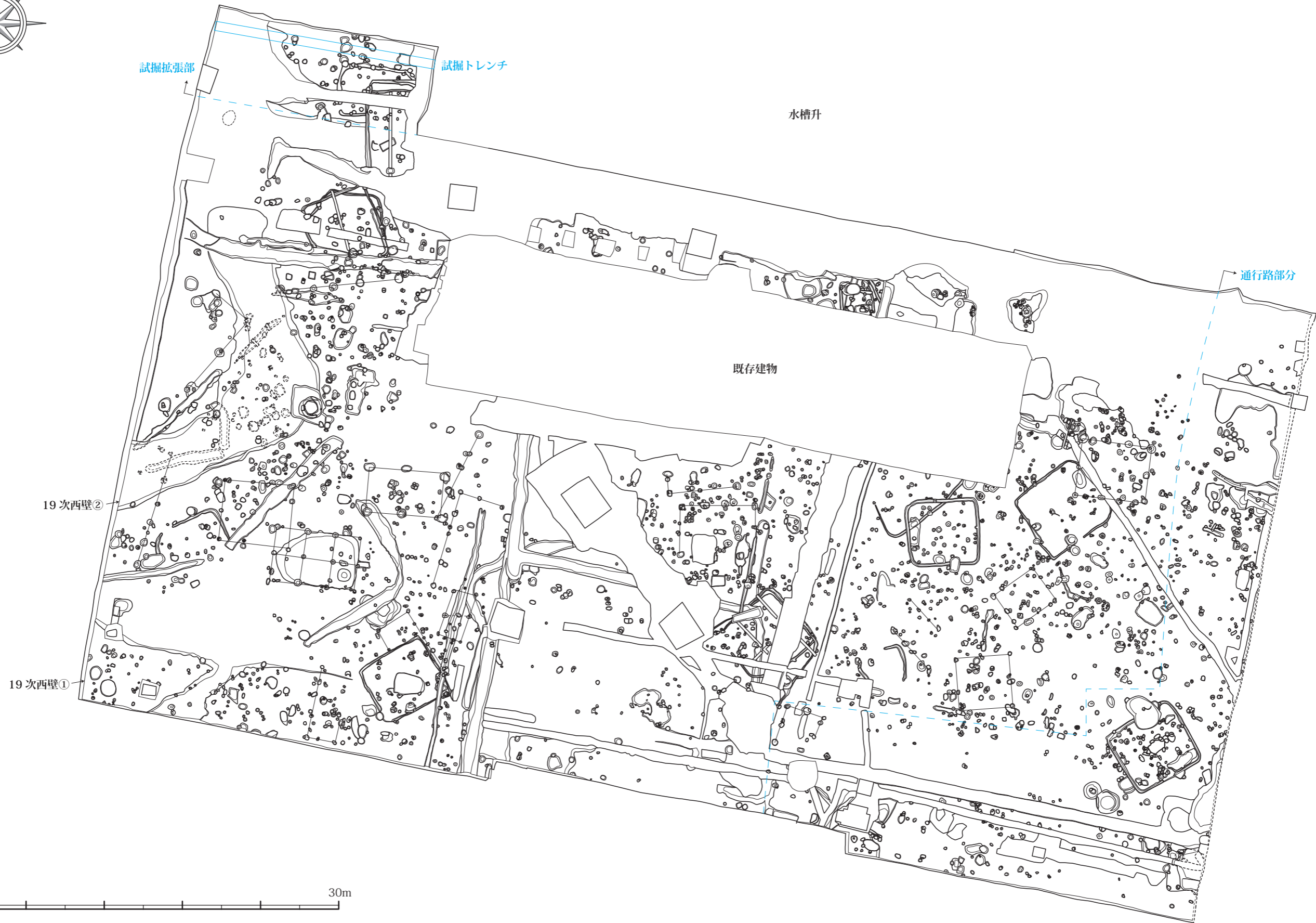
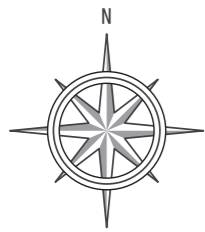


Fig.6 19次遺構配置図 (S=1/300)





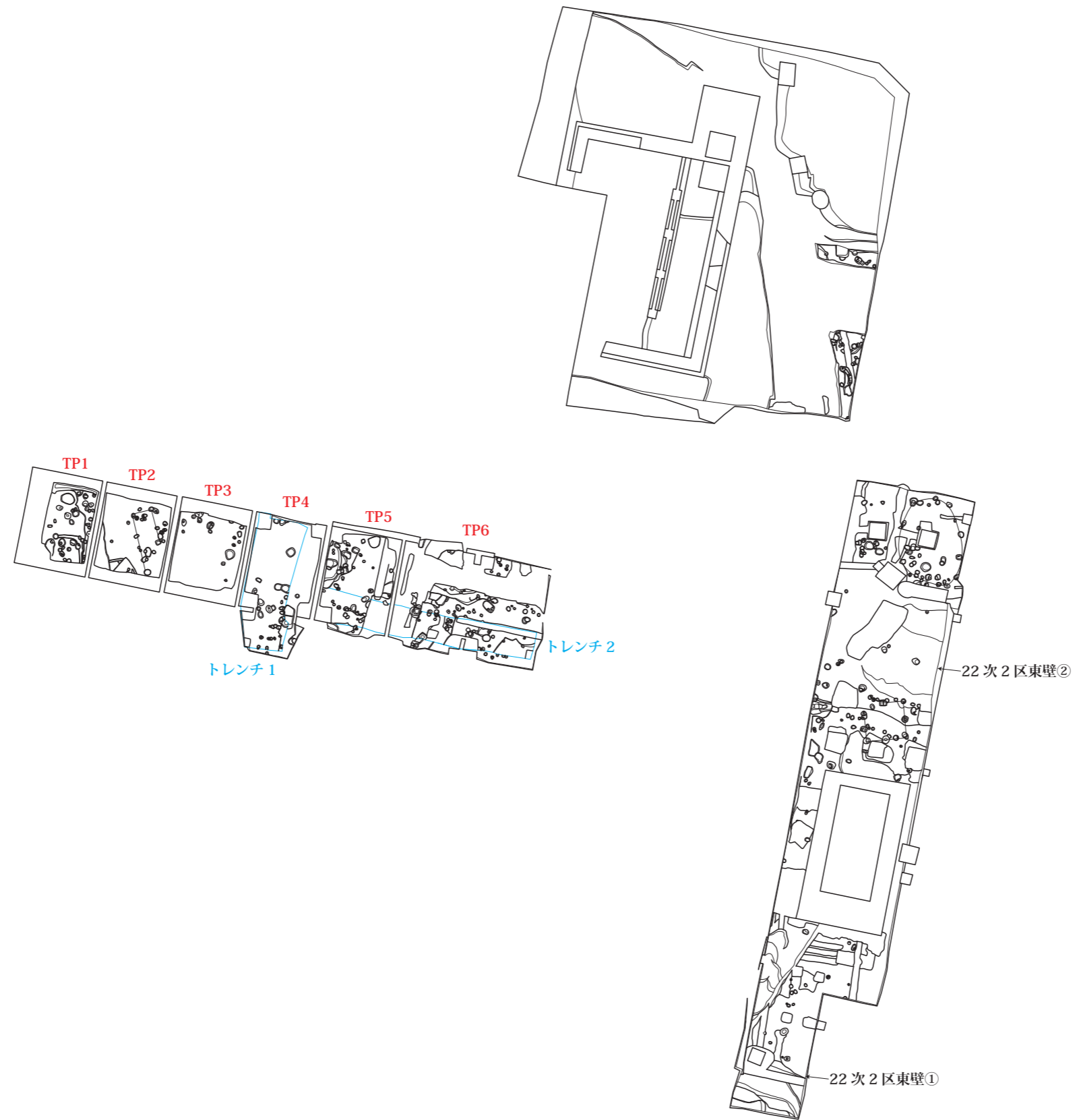
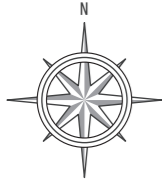


Fig.7 22次遺構配置図 (S=1/400)



#### 4 遺構の名称と記号

検出した遺構に対しては、調査時に認識した遺構の性格を考慮した上で、以下の遺構記号を先頭に配した。

##### 【遺構記号・性格】

SH・・・ 竪穴住居 SD・・・ 溝 SK・・・ 土坑 SA・・・ 柵列  
 SB・・・ 掘立柱建物 SC・・・ 道路遺構 SE・・・ 井戸  
 SF・・・ 土器焼成坑 P (pit)・・・ ピット・柱穴  
 SX・・・ その他の遺構（方形周溝墓・橋状遺構・性格不明の遺構等）・攪乱

遺構記号の後には、算用数字の 001 から順の通し番号で遺構番号を付与した。遺構番号は調査の進行に従って機械的に与えているため、遺構の時期等を示すものではない。本書においては、調査の段階で付した番号をそのまま使用している。また、遺構番号の先頭には調査次数を示す数字を付し、3桁の遺構番号と組み合わせた5桁の表記としている。

なお、ピットに限っては遺物が出土するもの、また柵列及び掘立柱建物、竪穴住居等の遺構を構成するものに対して遺構番号を付与しているが、調査次数を割愛して表しており、それ以外の遺構とは峻別して独自に1から順の通し番号を付している。そのため、第19・22次調査で同一名称のピットが存在することになるが、第22次調査で確認したピットに対しては、記号の末尾に'を付け加えることで混同を避けている。

##### 《例》

SD 22 001・・・ 遺構の性格を表す記号+調査次数+遺構番号

P1・・・第19次調査 P1

P'1・・・第22次調査 P1

#### 5 基本層序

基本層序は、第1層が表土、その直下いわゆる黒ボク土が堆積する。場所によっては黒ボク土の上面に旧耕作土の堆積を確認できる。第19次調査区西壁及び第22次調査2区東壁において、それぞれ2箇所ずつ土層断面の確認を行っているが、その確認地点及び土層の堆積状況の詳細については図面の通りである (Fig.6～8)。22次調査2区東壁①・②については、後述するSD22001・2の項を参照されたい (Fig.85・132)。遺構面の検出は、表土を0.1～0.25 m、黒ボク土を0.2～0.3 m除去した基盤層 (地山) の上面である。

地山面は、粘質の強い明黄褐色シルト層 (10YR6/8) が主体であるが、場所によってはシルト層が薄く、また

は完全に失われ、その下位に堆積する砂礫層が露出するところも存在する。段当調査区は鈴鹿川中流域右岸の河岸段丘の縁辺部に立地し、総じて水捌けが良い特徴がある。

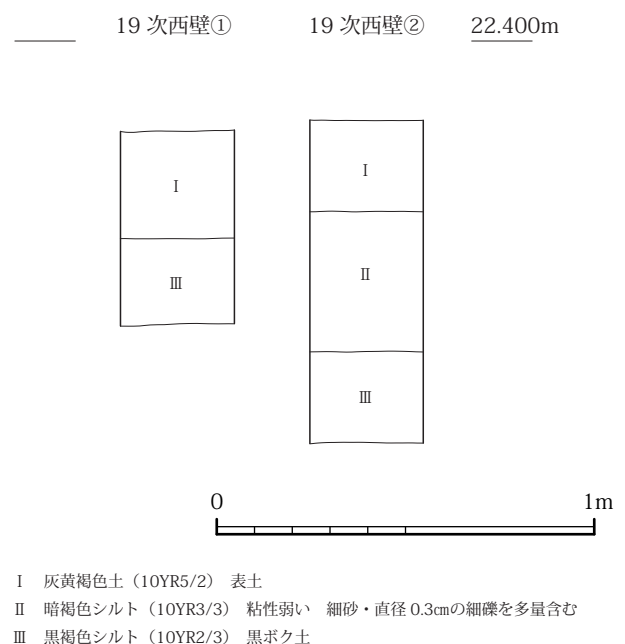


Fig.8 19次西壁①・②土層断面 (S=1/20)

## IV 調査の経過

第19次調査は平成22年2月2日に着手し、平成22年7月7日に終了した。約5ヶ月間の調査において、発掘作業員延べ1,568人を要した。文化財保護法（昭和25年法律第214号、以下「法」と呼称）にかかる手続きは、法第99条に基づく報告を平成22年2月5日付け鈴考第1093号、法第108条に基づく発見届等の手続きを平成22年7月8日付け鈴考第384号にて行っている。

続く第22次調査は平成22年11月18日に着手し、平成23年2月25日に終了した。約3ヶ月間の調査において、発掘作業員延べ481人を要した。法第99条に基づく報告は平成22年11月18日付け鈴考第855号、法第108条に基づく発見届等の手続きを平成23年3月24日付け鈴考第1281号にて行っている。

以下に調査日誌を抄録することで、調査の経過に代える。

### 【第19次調査日誌】

平成22年1月22日 重機（0.45m<sup>3</sup>）を搬入する。

1月25日 仮設トイレを搬入する。

1月26日 監督員詰所及び作業基地を搬入する。

1月27日 発掘用具を搬入する。

2月1日 重機（0.25m<sup>3</sup>）を搬入する。

2月2日 重機（0.45m<sup>3</sup>）を使用し、調査区南西隅より表土掘削を開始する。ダンプトラック（4t）を搬入する。調査地北側を掘削排土置場とし、重機（0.25m<sup>3</sup>）によって整地作業を行う。調査区内への基準点・水準点移設を開始する。

2月3日 基準点・水準点移設を完了する。調査補助のため、発掘作業員を若干名（2人/日程度）投入する。

2月4日 範囲確認調査の結果通り、遺構が面的に広がることを確認する。

2月5日 調査区西部に竪穴住居等、比較的大型の遺構が存在することを想定する。その埋土は土器片を多く含む。

2月8日 送水場建物及びそれに付随する施設（小～中型水道升・管、水銀灯等）によって部分的に攪乱されているが、遺構は濃密に分布することを確認する。

2月9日 雨天につき、終日作業中止。ベルトコンベアを搬入する。

2月10日 ダンプトラック（2t）を搬入する。幅1m程度の東西溝（後のSD19007）と竪穴住居（後のSH19060・61）が重複することを確認する。

2月12日 前日の降雨に伴う雨水の排水作業を行う。竪穴住居（後のSH19060・61）付近から弥生土器高坏

が出土し、廻間式期の時期を想定する。

2月15日 雨天につき、終日作業中止。

2月16日 前日の降雨に伴う雨水の排水作業を行う。完形に近い山皿が出土し、中世遺構の広がりを見込める。

2月17日 中央部を攪乱された方形竪穴住居（後のSH19001）を確認。

2月18日 南北溝2条（後のSD19005・6）が東西に並ぶことを確認する。鎌倉時代に比定され得る山茶碗が出土し、中世の区画範囲を想定する。

2月19日 北東-南西方向の溝状遺構を確認し、道路遺構側溝の可能性を考へるも、逆L字状に北西方向へ湾曲したため、方形周溝墓（後のSX19002）と判断する。

2月22日 中世南北溝2条（後のSD19005・6）の西側表土に山茶碗及び山皿がよく含まれ、当該溝の以西に中世遺構がまとまる可能性が高いと考へる。

2月23日 調査区東部において焼土を3箇所検出し、竪穴住居の存在（後のSH19014）を確認する。

2月24日 調査区南東隅において、竪穴住居とそれに後出する土坑状遺構を確認する。土坑状遺構からは須恵器瓶類が出土する。調査区南東隅にて検出した遺構については、大部分が通路路部分に広がると想定されるため、現状においては検出のみに留める。

2月25日 焼土及び炭化物を多く含む土坑（後のSF19016）を確認する。

2月26日 雨天につき、終日作業中止。ダンプトラック（2t）を搬出する。

3月1日 調査区北西隅より、グリッド設定を開始する。

3月2日 発電機を搬入する。

3月3日 本日より発掘作業員を本格的に投入する。調査区南西隅より遺構検出を開始する。検出した遺構に対しては、順に遺構記号及び遺構番号を付す。遺構略測図の作成を開始する。周溝状の大溝SD19004を検出し、様々な可能性を考へる。試掘対象部の表土掘削を開始する。

3月4日 雨天につき、終日作業中止。

3月5日 前日の降雨に伴う雨水の排水作業を行う。試掘対象部の表土掘削を終え、送水場建物北側の表土掘削を開始する。

3月8日 不定形的大型土坑状不明遺構SX19003を検出し、表面には青磁が露出している。送水場建物北側は、水槽埋設に伴う掘り方によって面的に削平されているが、送水場建物に沿うように黒ボク土が堆積する状況である。

3月9日 雨天につき、終日作業中止。

3月10日 前日の降雨に伴う雨水の排水作業を行う。当初竪穴住居の重複を一考していたSH19001が単独で

存在することを確認する。降雨により、午後に1時間程度作業を中断する。

3月11日 前日の降雨に伴う雨水の排水作業を行う。SX19013がSD19005・6に先行することを確認する。調査区西部の遺構検出を4割程度終え、清掃作業を行った後、遺構検出写真撮影を実施する。

3月12日 調査区全面のグリッド設定を完了する。調査区中央部は遺構密度がやや薄いことを確認する。調査地北西部において試掘調査を実施する。

3月15日 試掘調査にかかる図面作成及び写真撮影等の記録作業を行う。送水場建物北側から廻間式期に帰属すると見られる弥生土器壺の完形品が出土する。降雨により、15時30分を以って作業中止。

3月16日 前日の降雨に伴う雨水の排水作業を行う。SH19012・57が重複するが、埋土からはその新旧関係は不明であり、攪乱とSD19023等の遺構も絡むため、大変茫漠としている。

3月17日 調査区中央～東部の遺構検出を終え、清掃作業を行った後、遺構検出写真撮影を実施する。過去調査との図面合成を行い、SD19009が道路遺構の東側側溝になると判断する。西側側溝については、SD19004と重複すると想定されるため、今後慎重に検出することとする。

3月18日 最新の中世遺構から順に遺構掘削を開始することとし、SD19007の掘削を開始する。遺存状態良好な山茶碗数点に加え、上層からは重複するSH19060・61の遺物が出土する。SD19004内の遺構を再検出する。

3月19日 調査区東～北東部の遺構検出を終え、清掃作業を行った後、遺構検出写真撮影を実施する。SD19008の掘削を開始する。SD19008は非常に浅く、部分的に残るのみである。

3月23～25日 雨天につき、終日作業中止。

3月26日 前日までの降雨に伴う雨水の排水作業を行う。SD19005・6の掘削を開始する。SD19005は深く、しっかりと掘り込まれる溝である。

3月29日 送水場建物北側の表土掘削を終え、試掘拡張部の表土掘削を開始し、これを完了する。通行路部分を残し、表土掘削を終える。SD19006・7・8の掘削を完了する。SD19005は東西方向へも分岐するため、引き続きこれを掘削する。SD19004の上面において検出したSD19021・22に対し、道路遺構の西側側溝になると判断する。SD19020・21の掘削を開始する。SD19009・20・21の道路遺構を総称し、SC19011と呼称する。

3月30日 重機(0.25m<sup>3</sup>)を搬出する。SD19004の掘削に向け、これに後出する遺構の記録作業を優先して行

うこととする。SD19004内に検出したピット群の掘削を開始し、追って遺構平面図作成、遺構測量作業を始める。SD19007・8付近の清掃作業後、遺構完掘写真撮影を実施する。SD19009・22・24の掘削を開始する。SD19005は東西方向への分岐のすぐ南側において部分的に浅くなる様相である。

3月31日 SD19024から山茶碗及び山皿、土師器鍋、白磁等が良好に出土したため、清掃作業後、遺物出土状況写真撮影を実施し、遺物出土状況図作成を開始する。SX19003、SF19016の掘削を開始する。SD19005・9・20の掘削を完了する。SD19005・6付近の清掃作業後、遺構完掘写真撮影を実施する。SD19005は東西方向が埋没した後、新たに南北方向へ開掘されていることを確認する。

4月1日 SD19010、SH19014の掘削を開始する。SD19010は断面形状が箱形状に掘り込まれている。SF19016は中央～西部で特に焼土が集中する。SX19003から完形の山皿3個体に加えて、常滑焼及び青磁等が比較的多く出土しており、慎重に掘削を進める。

4月2日 雨天につき、終日作業中止。

4月5日 SH19015の掘削を開始する。SD19010・21・22の掘削を完了する。SD19024の遺物出土状況図作成を完了する。SH19015床面直上に弥生土器高坏の良好な資料を確認する。慎重に掘削を継続する。

4月6日 SH19001、SK19025、SD19026～28の掘削を開始する。SD19024の掘削を完了する。SD19009・21・22の遺構完掘写真撮影を実施する。SD19026～28は途切れているため、それぞれ別に遺構番号を付したが、走行方向及び幅、深さが近似しており、同一の溝と考える。

4月7日 SK19029・30の掘削を開始する。SD19026～28の掘削を完了する。SD19026～28は形状的に溝と捉えたが、遺物が全く出土せず、埋土の状況からも攪乱であると考え、SX19026～28に遺構記号を変更する。また、SK19025は予想以上に深く下がり、直立に掘り込まれ、井戸であると判断する。SE19025と遺構記号を変更する。遺物には山茶碗等が見られ、中世に帰属するものと考えられる。

4月8日 SK19031～33の掘削を開始する。SX19003の掘削を完了する。SH19014に付帯する土坑から弥生土器甕及び壺、高坏等が良好に出土したため、遺物出土状況写真撮影を実施し、遺物出土状況図作成を開始する。SF19016の焼土及び炭化物に対し、清掃作業後、遺物出土状況写真撮影を実施する。遺物出土状況図作成を開始し、これを完了する。

4月9日 SH19034、SX19041、SK19043の掘削を開



始し、掘削を完了する。SX19002・13・35の掘削を開始する。SE19025は安全面を考慮し、検出面から約1.25m掘り下げたところで掘削を中止する。清掃後、遺構完掘写真撮影を実施する。SB19036を認識する。

4月12日 雨天につき、終日作業中止。

4月13日 前日の降雨に伴う雨水の排水作業を行う。SB19036の遺構完掘写真撮影を実施する。SD19004, SX19038の掘削を開始する。SK19029・30・33, SX19035の掘削を完了する。

4月14日 SD19042, SX19048の掘削を開始する。SX19002・13, SK19031・32, SD19042の掘削を完了する。SA19037・44を認識する。SK19032からは青磁及び山茶椀、山茶椀鉢等の中世遺物がよく出ている。

4月15日 SK19045の掘削を開始する。SH19001, SX19038, SK19045の掘削を完了する。SB19084～87を認識する。SA19037・44の遺構完掘写真撮影を実施する。SH19034について、既に掘削済みのSK19033を土坑として付帯すると想定し、再検出したところ、周壁溝の南西コーナーを確認し、これを完掘する。

4月16日 降雨により、午前中を以って作業中止。SK19046・47の掘削を開始し、掘削を完了する。SB19088を認識する。

4月19日 SK19049・50の掘削を開始する。SK19049・50, SX19048の掘削を完了する。P142から土師器坏及び黒色土器等が良好に出土したため、清掃作業後、遺物出土状況写真撮影を実施し、遺物出土状況図作成を開始する。

4月20日 雨天につき、終日作業中止。ダンプトラック(4t)を搬出する。

4月21日 建設水道常任委員会の視察を受ける。前日の降雨に伴う雨水の排水作業を行う。SX19051, SK19052・54・55の掘削を開始し、掘削を完了する。試掘拡張部を含む調査区北西部の遺構検出を終え、清掃作業を行った後、遺構検出写真撮影を実施する。P266から土師器甕等、古代の遺物が良好に出土したため、清掃作業後、遺物出土状況写真撮影を実施する。遺物出土状況図作成を開始する。P142・266の遺物出土状況図作成を完了する。SB19089・90を認識する。

4月22日 雨天につき、終日作業中止。

4月23日 前日の降雨に伴う雨水の排水作業を行う。調査区北東部及び送水場建物北部の遺構検出を終え、清掃作業を行った後、遺構検出写真撮影を実施する。重複するSH19012・57, SD19023・SX19056の新旧関係を慎重に検討する。P315から円面硯の出土を確認する。

4月26日 重複するSH19058・59, SH19060・61について、それぞれ新旧関係を慎重に検討する。SH19057

・59・60, SD19023, SX19056の掘削を開始し、SX19056の掘削を完了する。SA19091・SB19093・94を認識する。

4月27日 雨天につき、終日作業中止。

4月28日 前日の降雨に伴う雨水の排水作業を行う。SD19064, SK19065の掘削を開始し、SD19023・64, SK19065の掘削を完了する。良好な資料であるSH19015床面直上の弥生土器高坏・甕, SH19015に後出するP342の黒色土器椀及び土師器坏等に対し、清掃作業後、遺物出土状況写真撮影を実施し、遺物出土状況図作成を開始する。

4月30日 SK19066～68の掘削を開始し、掘削を完了する。SH19015の遺物出土状況図作成を完了する。SH19015床面を十分に精査するも、明確な支柱穴の確認には至らない。連休を控えるため、調査区全面のシート養生を充分に行う。

5月1～5日 連休により、終日作業中止。

5月6日 P342の遺物出土状況図作成を完了する。P461から土師器甕や須恵器壺等が良好に出土したため、清掃作業後、遺物出土状況写真撮影を実施する。遺物出土状況図作成を開始し、これを完了する。SH19014・57の掘削を完了し、清掃作業後、遺構完掘写真撮影を実施する。SD19075・80, SK19071の掘削を開始し、SD19075の掘削を完了する。SB19095, SA19099を認識する。

5月7日 SH19053, SK19072の掘削を開始する。SX19074に土師器甕・壺等の良好な資料を確認する。降雨により、午前中を以って作業中止。

5月10日 SH19012, SK19076の掘削を開始し、SK19071・76の掘削を完了する。降雨により午前中を以って作業中止。

5月11日 SK19073・77の掘削を開始し、SH19015, SK19077の掘削を完了する。SK19073から土師器甕等が多量に出土したため、慎重に掘削を行う。断続的な降雨が強まり、14～15時に作業を一時中断する。

5月12日 SD19081, SK19078・79の掘削を開始し、SD19080・81, SK19078・79の掘削を完了する。SH19053に付帯する土坑から弥生土器甕の台部が3個体良好に出土したため、清掃作業後、遺物出土状況写真撮影を実施する。

5月13日 航空写真撮影日を5月19日に決定し、それに向けた清掃作業を調査区南西隅から開始する。SH19059, SD19004の掘削を完了する。SH19058・59, SK19073の清掃作業を開始する。

5月14日 SH19060床面から弥生土器高坏等が良好に出土したため、清掃作業後、遺物出土状況写真撮影及び

遺物出土状況図作成を開始する。SH19053の遺物出土状況図作成を完了する。SH19058, SD19070, SK19083の掘削を開始し, SH19012, SK19072・83の掘削を完了する。SH19058・59, SK19073の清掃作業を終え, SH19059の遺構完掘写真, SH19058の遺構検出写真, SK19073の遺物出土状況写真撮影を行う。SK19073の遺物出土状況図作成を開始する。SH19058は周壁溝が北辺で一部二重になり, 拡張の痕跡であると判断する。

5月17日 SK19101, SX19074・103の掘削を開始し, SH19053・58・60, SD19070, SK19073・101, SX19103の掘削を完了する。SH19060の遺物出土状況写真撮影及び遺物出土状況図作成, SK19073の遺物出土状況図作成を完了する。SH19060の遺構完掘写真撮影を実施する。

5月18日 調査区全面の清掃作業を完了する。SH19061の掘削を開始する。良好な資料であるSX19074の土師器甕に対し, 遺物出土状況写真撮影を実施する。遺物出土状況図作成を開始し, これを完了する。SX19074の掘削を完了する。

5月19日 航空写真撮影を実施する。SH19015・53の遺構完掘写真撮影を実施する。降雨により, 午前10時30分を以って作業中止。

5月20日 雨天につき, 終日作業中止。

5月21日 前日までの降雨に伴う雨水の排水作業を行う。明日に控える現地説明会の会場設営及び準備等を行う。SK19105の掘削を開始し, 掘削を完了する。SB19104, SX19100を認識する。SH19001・12, SX19002・3・13, SF19016の遺構完掘写真撮影を行う。遺構略測図作成を完了する。発電機を搬出する。

5月22日 現地説明会を実施する。100名の参加を得る。SH19061の掘削を完了し, 清掃作業後, SH19058・61, SD19004, SA19099, SB19084・86～91・93～95・104, SX19100の遺構完掘写真撮影を実施する。

5月24日 雨天につき, 終日作業中止。

5月25日 重複遺構プラン確認用のベルトの撤去を行う, 補足調査として, SH19001・14・15・18・57に対し, その貼床を一部外して測量作業を行う。

5月26日 補足調査終了。

5月27日 遺構平面図作成及び遺構測量を完了する。本日を以って, 通行路以外の部分の調査を終了する。整地, 掘削排土の移動, 埋戻し作業を開始する。通行路部分の調査に向け, 仮駐車場の設営を開始する。

5月28日 ブルドーザー(D3)を搬入し, ベルトコンベアを搬出する。整地及び仮駐車場の設営を完了する。

5月31日 調査区南西隅より, 通行路部分の表土掘削

を開始する。遺構の性格について見直しを行う。P180は深く直立に掘り込まれ, 井戸であると判断してSE19108, P63は規模が大きいため, 土坑であると判断し, SK19109とそれぞれ遺構記号を変更する。それに伴い, P63・180は欠番とする。

6月1日 重機(0.45m)及びダンプトラック(4t)を搬入し, ブルドーザー(D3)及びベルトコンベアを搬出する。調査区南部には攪乱が多く, 遺構密度が予想以上に低いことを確認する。

6月2日 通行路部分の表土掘削を完了する。遺構密度は調査区東部において高く, 竪穴住居が存在する可能性が考えられる。

6月4日 ダンプトラック(4t)を搬入する。

6月7日 通行路部分の遺構検出及び遺構掘削, 遺構略測図の作成を開始する。調査区南部の遺構検出を終え, 清掃作業を行った後, 遺構検出写真撮影を実施する。遺構検出写真撮影を実施する。SB19106を認識する。

6月8日 調査区南東部の遺構検出を終え, 清掃作業を行った後, 遺構検出写真撮影を実施する。降雨により, 午前1時間程度作業中止。

6月9日 通行路部分の遺構平面図の作成を開始する。調査区東部の遺構検出を終え, 清掃作業を行った後, 遺構検出写真撮影を実施する。SX19107の掘削を開始する。大型の土坑状の遺構であるが, その性格は不明である。株式会社二友組による安全パトロールを受け, 問題点及び改善点等なしとの結果を得る。

6月10日 通行路部分の遺構測量を開始する。調査区北東部の遺構検出を終え, 清掃作業を行った後, 遺構検出写真撮影を実施する。SX19017・110, SK19111, SH19018の掘削を開始し, SX19110, SK19111の掘削を完了する。

6月11日 通行路部分の遺構検出を完了する。SK19112・114の掘削を開始し, SX19107の掘削を完了する。SX19017から土師器甕等の古代遺物が良好に出土したため, 清掃作業後, 遺物出土状況写真撮影及び遺物出土状況図作成を開始し, これを完了する。

6月14日 雨天につき, 終日作業中止。ダンプトラック(4t)2台を搬出する。

6月15日 前日の降雨に伴う雨水の排水作業を行う。SD19115の掘削を開始する。SK19112は予想以上に深く下がり, 井戸の可能性を考える。降雨により, 13時30分を以って作業中止。

6月16日 通行路部分の遺構略測図の作成を完了する。前日から朝までの降雨に伴う雨水の排水作業を行う。SD19116, SX19117の掘削を開始し, SK19114の掘削を終える。SD19115・116は同一遺構になる可能性



があるが、攪乱によって南北で分断されるため、別遺構として取り扱うこととする。

6月17日 重機(0.45m<sup>3</sup>)を搬出する。SK19113・120, SX19119の掘削を開始する。SK19113はSK19112に先行し、埋土や掘り方の状況が近似しているが、明らかに浅いことを確認する。

6月18日 SX19121の掘削を開始し、SD19116の掘削を完了する。SX19017から再度土師器甕等が良好に出土したため、清掃作業後、遺物出土状況写真撮影及び遺物出土状況図作成を開始する。遺物出土状況写真撮影を完了する。降雨により、9時20～40分に作業を一時中断。その後雨足が強まり、11時30分を以って作業中止。

6月21日 前日までの降雨に伴う雨水の排水作業を行う。SD19122～124・127の掘削を開始し、SK19113, SX19017・117・119の掘削を終える。SX19017の遺物出土状況図作成を完了する。SK19112は深く掘り込まれ、井戸であると判断してSE19112と遺構記号を変更する。安全面を考慮し、検出面から約0.9m程度掘り下げたところで掘削を中止する。

6月22日 前日から早朝にかけての降雨に伴う雨水の排水作業を行う。SK19125・126の掘削を開始し、SK19120, SX19121, SD19115・123・127の掘削を終える。SH19018は内部に多数のピットを確認し、また焼土範囲を複数検出する。

6月23日 雨天につき、終日作業中止。

6月24日 前日の降雨に伴う雨水の排水作業を行う。SD19122・124, SK19125・126の掘削を完了する。

6月25日 SH19018の掘削を完了する。通行路部分全面の遺構掘削を完了する・清掃作業を行った後、遺構完掘写真撮影を行う。また、個別遺構としてSX19017, SH19018, SD19115・116, SD19122～124・127の遺構完掘写真撮影を実施する。

6月28日 遺構の重複する箇所や土層観察用に設定したベルトの撤去作業を実施する。

6月29日 遺構平面図作成、遺構測量を完了する。通行路部分の埋戻し及び調査区全面の整地作業を開始する。

6月30日 ダンプトラック(4t)を搬入する。

7月5日 ダンプトラック(4t)を搬出する。

7月7日 通行路部分の埋戻し及び調査区全面の整地作業を完了する。本日を以って、現地調査の全てを完了する。監督員詰所を撤去し、発掘用具を搬出する。

7月9日 重機(0.45m<sup>3</sup>)を搬出する。

7月24日 作業基地及び仮設トイレを撤去する。

## 【第22次調査日誌】

平成22年10月29日 調査区(1～3区)設定。

11月11日 監督員詰所及び作業基地、発掘用具、仮設トイレを搬入する。調査区内への基準点・水準点移設を開始する。

11月12日 調査区内への基準点・水準点移設を終了する。

11月17日 重機(0.45m<sup>3</sup>)を搬入する。

11月18日 重機(0.45m<sup>3</sup>)を使用し、1区の表土掘削を開始する。既存建物基礎の空閑地に対してトレンチ1・2を設定し、表土掘削を行う。

11月19日 既存建物の基礎に比較して検出面が深く、遺構面が部分的に削平されながらも、完全には滅失していないことが判明する。攪乱は布基礎及び基礎梁部分を中心とする範囲に留まるものと想定する。遺構面に十分な配慮をしながら基礎を撤去する必要性が生じたため、1区トレンチ1・2の表土掘削を終了して一時保留とし、今後の協議の進展を待って措置することとする。

11月22日 雨天につき、終日作業中止。ベルトコンベアを搬入する。

11月24日 2区の表土掘削を開始する。重厚なコンクリート塊である東部既存建物の基礎による攪乱が広範であることを確認する。基礎による掘削深度は、現況GL-2m程度まで及ぶ。第19次調査のSD19115・116の東続きの溝(後のSD22002)を検出する。

11月25日 調査補助のため、発掘作業員を若干名(5人/日程度)投入する。2区南部よりグリッド設定を開始する。既存建物や送水場に付随する施設(小～中型水道升・管、水銀灯等)により、部分的に攪乱されているものの、遺構は比較的濃密に分布することを確認する。

11月26日 2区中央部付近において、幅約10mに及ぶ大型の溝状遺構(後のSD22001)の存在を確認する。その埋土は土器片を多く包含している。

11月29日 2区の表土掘削を完了する。2区北部は削平を免れ、遺構検出面が浅いことを確認する。

11月30日 2区南部より遺構検出を開始する。検出した遺構に対しては、順に遺構記号及び遺構番号を付す。1区建物基礎の解体工事に伴う協議を行い、今後の調査進行にかかる方針を策定する。

12月1日 本日より発掘作業員を本格的に投入する。1区の表土掘削を再開する。1区トレンチ1・2の遺構検出を開始する。2区のグリッド設定を完了し、南部から遺構略測図の作成を開始する。2区南部の遺構検出を完了し、清掃を行った後、2区南部及びSD22002の遺構検出写真を撮影する。

12月2日 1区トレンチ1及びトレンチ2西部の遺構

検出を完了し、清掃を行った後、遺構検出写真を撮影する。1区トレンチ1・2のグリッド設定を開始し、完了する。

12月3日 前日夜間～早朝の降雨に伴う雨水の排水作業を行う。1区西部には包含層が残存しており、遺構面が遺存する可能性が高いことを確認する。降雨により、14時を以って作業中止。

12月6日 1区トレンチ2中央～東部の遺構検出を完了し、清掃を行った後、遺構検出写真を撮影する。1区トレンチ1・2の遺構略測図作成を開始し、完了する。1区の表土掘削については、今後の解体工事に備えるべく、掘り切らずに途中で留める。

12月7日 2区の作業を一旦中断し、1区トレンチ1・2の調査に注力する。1区トレンチ2から遺構掘削を開始する。SX22003の遺構掘削を開始する。2区中央部の遺構検出を完了し、清掃を行った後、2区中央部及びSD22001の遺構検出写真を撮影する。

12月8日 SX22005の掘削を開始する。SX22005はやや大型となる方形土坑状の遺構である。下面には複数のピットを検出する。

12月9日 2区の遺構掘削を開始する。SD22002・6の掘削を開始する。SX22003・5について、SX22003は攪乱であり、SX22005は古代の竪穴住居の可能性を想定する。

12月10日 2区の遺構検出を完了する。3区の表土掘削を開始する。SX22003・5、SD22006の掘削を完了する。1区トレンチ1・2の遺構掘削を完了し、清掃作業の後、遺構完掘写真撮影を行う。2区北部の清掃を行い、遺構検出写真撮影を行う。SD22002は深く掘り込まれ、大型の周溝状遺構であると判断する。

12月11日 ダンプトラック(2t)を搬入する。

12月13日 雨天につき、終日作業中止。

12月14日 1区トレンチ1・2の遺構平面図作成を開始し、完了する。2区の遺構略測図作成を完了する。3区で大型の構造物(後のSX22031)の埋没を確認する。SD22007の掘削を開始し、完了する。SD22002から弥生土器のミニチュア高坏が出土する。

12月15日 1区トレンチ1・2の遺構測量を開始し、完了する。SD22002は検出面から0.5m以上下がり、検出範囲も広大であるため、掘削に難航する。SD22002から弥生土器受け口甕が出土する。

12月16日 1区の建物基礎の解体工事を開始する。SD22001、SK22008の掘削を開始し、SK22008の掘削を完了する。P'37から土師器坏が良好に出土したため、清掃作業後、遺物出土状況写真撮影を実施し、遺物出土状況図作成を開始する。

12月17日 P'37の遺物出土状況図作成を完了する。SD22001から土師器甕・坏・皿、須恵器甕・坏・高坏等が出土する。上層からの出土ではあるが、7～8世紀頃の年代観を考える。3区には構造物に加え、直径1mを超過する礫及びコンクリート塊等のガラが多量に埋設されており、表土掘削が非常に難航する。P'35から緑釉陶器、P'40から灰釉陶器が出土する。

12月20日 雨天につき、終日作業中止。

12月21日 SK22009の掘削を開始し、完了する。SD22001からの出土遺物は多量であるが、北部の上層からは弥生器壺及びサヌカイト製石鏃の混入を確認する。

12月22日 3区について、遺構面が面的に攪乱されていることを確認する。SD22002底面直上からへばり付くように弥生土器高坏の良好な資料が出土する。遺物出土状況の記録をとるべく、清掃作業を開始する。

12月24日 SD22002から出土した弥生土器高坏の清掃作業を終え、遺物出土状況写真撮影を実施する。遺物出土状況図作成を開始し、完了する。SD22002の掘削を完了する。SD22001は7世紀の埋没を想定する。

12月27日 1区の建物基礎の解体工事が完了する。SK22010の掘削を開始し、SD22001の掘削を完了する。P'57から縄文土器深鉢が良好に出土したため、清掃作業後、遺物出土状況写真撮影を実施する。遺物出土状況図作成を開始し、完了する。

12月28日 中世溝の区画範囲を外れる2区においては、中世遺物の出土が殆ど無いことを確認する。年末年始の休暇に備えて調査区全面の養生を充分に行い、休暇中の警備体制を確立する。

12月29日～1月3日 連休により、終日作業中止。

平成23年1月4日 1区について、中途に留めていた表土掘削を再開する。1区西部より遺構検出を開始する。P'94から縄文時代晩期の深鉢及び石刀が出土する。

1月5日 2区の遺構掘削を完了する。1区西部の遺構検出を開始し、グリッド設定を開始する。第19次調査のSD190005・7の続きとなるSD22011・12を検出し、中世区画溝の北東コーナーを確認する。SX22014及びSB22032・33の存在を認識する。

1月6日 1区の遺構略測図作成及び遺構掘削、2区の遺構平面図作成を開始する。1区西部の清掃を行った後、遺構検出写真を撮影する。個別遺構として、SD22011・12の遺構検出写真撮影を行う。SD22013の掘削を開始する。

1月7日 1区の表土掘削を完了する。SD22011・12、SX22015・16の掘削を開始する。SD22011から山茶碗及び土師器鍋等が出土し、埋土色及び形状、位置関係

のみならず、出土遺物からも中世に帰属することが確実となる。SX22015 から弥生土器壺、P'124 から弥生土器壺が良好に出土したため、清掃作業を開始する。

1月11日 1区のグリッド設定を完了する。SD22017の掘削を開始する。SX22016の掘削を完了する。P'124から出土した弥生土器壺の清掃作業を終え、遺物出土状況写真撮影を実施し、遺物出土状況図作成を開始する。SX22015と共に、埋葬施設である可能性が高いものとする。

1月12日 1区東部の遺構検出及び2区の遺構測量を開始する。SD22011の掘削を完了する。SX22015から出土した弥生土器壺の清掃作業を完了する。遺物出土状況写真撮影を実施し、遺物出土状況図作成を開始する。1区東部において、点的に攪乱されていることを確認する。

1月13日 1区東部の遺構検出を完了し、清掃作業の後、遺構検出写真撮影を行う。個別遺構として、SX22019の遺構検出写真を撮影する。3区の表土掘削を完了する。SX22015及びP'124の遺物出土状況図作成を完了し、その掘削を完了する。3区については、遺構の遺存状態がかなり不良であることを確認する。

1月14日 1区の遺構略測図及び2区の遺構平面図作成を完了する。SX22018・19、SD22021・22、SK22020の掘削を開始し、SK22010・20、SD22011～13・17、SX22016の掘削を完了する。攪乱と目されるSX22018から山茶碗が出土する。

1月17日 前日～早朝の降雪に伴う雪の除去作業を行う。SX22024の掘削を開始し、SD22021の掘削を完了する。

1月18日 SX22024の掘削を完了する。SX22019・24は底面が不整であり、平面プランも茫漠としており、木根等による攪乱の可能性を考える。

1月19日 調査区全面の航空写真撮影日を1月25日に決定し、それに向けた清掃作業を1区西部から開始する。SK22023の掘削を開始する。

1月20日 3区の遺構検出及び遺構略測図作成、グリッド設定、遺構掘削を開始する。3区の遺構検出及びグリッド設定を完了し、清掃を終えた後、遺構検出写真を撮影する。SX22018、SD22022、SK22023の掘削を完了する。

1月21日 SX22019の掘削を終え、1区の遺構掘削を完了する。2区の遺構測量を完了する。1区の清掃作業を終え、2区の清掃作業を開始する。3区の遺構略測図作成を完了する。SD22026～28、SK22029・30の掘削を開始し、SD22028の掘削を完了する。

1月24日 2区の清掃作業を終え、3区の清掃作業を開始する。SD22026・27、SK22029・30の掘削を完了

し、3区の遺構掘削を終える。

1月25日 調査区全面の清掃作業を再度行い、完了する。航空写真撮影を実施する。1区全面及びSD22013、SX22015、P'124の遺構完掘写真撮影を行う。

1月26日 2区全面及びSD22001・2・11・12・21・22・26、SX22014・16・31、SB22032・33、P'57の遺構完掘写真撮影を行う。

1月27日 3区全面及びP'37の遺構完掘写真撮影を行う。

1月28日 3区の遺構平面図作成を開始する。

2月2日 ダンプトラック(2t)及び発掘用具、ベルトコンベアを搬出する。

2月3日 3区の遺構平面図作成を完了し、1・3区の遺構測量を開始する。

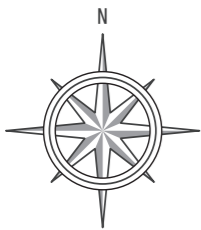
2月14日 1・3区の遺構測量を完了する。遺構の重複する箇所や土層観察用に設定したベルトの撤去作業を実施する。調査区全面の埋戻しを開始する。

2月25日 調査区全面の埋戻しを完了する。本日を以って、現地調査の全てを完了する。

2月28日 重機(0.45m<sup>3</sup>)を搬出する。

3月10日 監督員詰所及び作業基地、仮設トイレを搬出する。





【遺構名の表記】  
・遺構数が多く遺構密度が濃密であるため  
遺構面の表記については代表的なものに  
対してのみ行っている

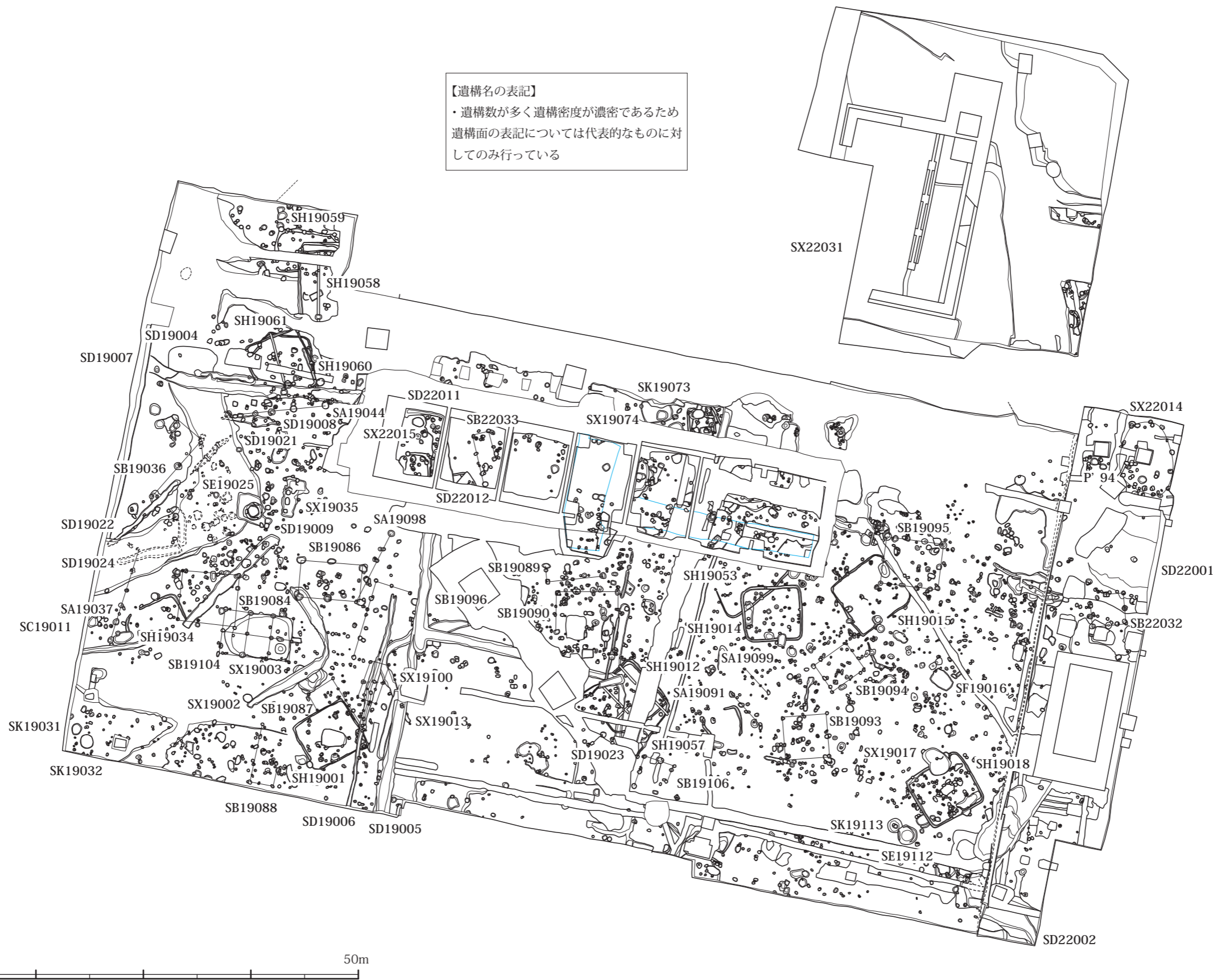


Fig.9 遺構配置図 (S=1/400)



## V 遺構と遺物

平田遺跡第19・22次調査の結果、縄文時代から中世に至るまでの長期間に跨る遺構及び遺物の確認に至り、これらの時代を複合する遺跡であることを再認識した。過去に平田城に関連する室町時代の埋蔵文化財包蔵地として周知されていた内容とは大きく異なり、よりバリエーションに富んだ充実したものとなった。

調査は第19・22次に跨り、更に第22次調査は1～3区に細分される。これは先に述べた通り、建物の解体・新設を起因とする便宜上の区分であり、全て平田送水場改築に伴う一連の事業を原因とする。

そこで、本章では遺構の時期毎に大まかに区分し、一括して報告することとする。遺構は縄文時代晩期の建物、弥生時代後期～古墳時代初頭の竪穴住居及び方形周溝墓、奈良～平安時代の道路遺構及び土坑、溝、鎌倉時代の溝及び井戸等が中心となる。

出土した遺物量は、整理箱（コンテナバット：53×33×10cm）換算で第19次調査64箱、第22次調査21箱であった。調査面積及び遺構密度を勘案すると、やや寂しい結果となった。

### 1 縄文時代の遺構 (Fig.10)

縄文時代の遺物については、該当期の遺構以外にも、表土や他の遺構に比較的良好に混入しており、後世に大きく削平されている状況が窺われる。縄文土器は比較的全体に万遍なく分布するが、第19次調査区東部～第22次調査2区において密度を増す傾向にある。縄文時代中期末の北白川C式期に遡る資料を数点検出したに留まり、遺跡の中心は滋賀里2～3式の縄文時代晩期前半代となる。以降、縄文時代晩期後半から弥生時代初頭頃の凸帯文期のものが散見される程度である。

#### 【柵列 SA19091 (Fig.11～13)】

**構成** P292・294・343・345。

**重複** P294→P344。

**平面・規模** 検出した規模は3間である。総長3.8mで、柱間は北から1.3m+1.0m+1.5mを測る。主軸方向はN-42°-Wを向く。構成するピットの規模は、直径0.2～0.5mの円形状を呈し、検出面からの深さは0.17～0.3mを測る。

**遺物** P292から縄文土器深鉢(1・2)が出土した(Fig.17)。P294からも縄文土器片が出土しているが、図化でき得る資料はなかった。

**縄文土器深鉢(1・2)** 共に外面に条痕が施され、胎土には金雲母を包含する。1は粘土紐の接合痕の観察が可能で、外傾接合である。2は下部が粘土紐の接合部分で剥落している。

**時期・性格** 1・2は縄文時代晩期前半の滋賀里式の所産である。

#### 【柵列 SA19099 (Fig.11・13)】

**構成** P331・697(698?)・699・700。

**重複** P699→P698。

**平面・規模** 検出した規模は3間で、総長3.2mを計測する。柱間は北から1.1m+1.0m+1.1mとほぼ均一である。主軸はN-45°-W方向である。構成するピットの規模は直径0.15～0.5mの円形状で、検出面からの深さは0.08～0.23mを測る。

**遺物** P331から縄文土器片が出土したが、実測可能なものはなかった。他のピットからは一切遺物が出ていない。

**時期・性格** 破片資料のみの出土であるが、SA19091と主軸方向をほぼ同一にするため、同時期に属すると判断される。SA19091・99は約2.5mの間隔を保ちながら並行する。これらの内側にピットがもう1列ずつ同方向に並び、建て替え等の可能性が考えられるが、遺物の出土がないために判然としない。

#### 【掘立柱建物 SB19086 (Fig.14～16)】

**構成** P226・232・233・237・696。

**重複** P696→SX19002。P235→P254(SA19098)。

**平面・規模** 1間×2間の側柱建物である。梁間3.4m、桁行5.7mを測り、平面形は長方形を呈する。主軸方向はW-5°-Sを示す。構成するピットの規模は、直径0.65～0.8m、検出面からの深さ0.4～0.55mを測る。ピットは全て円形状を呈し、その掘り方は大振りである。

**遺物** P226から縄文土器深鉢(3・4)、P233から縄文土器深鉢(5)、P237から縄文土器深鉢(6)が出土した(Fig.17)。なお、P226・696からも縄文土器片が出ているが、図化には至っていない。

**縄文土器深鉢(3～6)** 3は破片資料につき、天地を逆に誤認している可能性がある。4は体部下方向の資料で、底部に向けてやや厚手となる。5は特に金雲母を多く含んでおり、粘土紐の接合痕の観察が容易で、外傾接合である。6は内外面を横位のケズリで調整される。

**時期・性格** P696が古墳時代初頭のSX19002で埋没し、P235が中世のSA19098を構成するP254に後出する。5・6は縄文時代晩期前半に属すると考えられる。柱の掘り方が比較的大型で深いことに特徴がある。調査段階でP696はSK19045としていたが、整理作業において変更したため、遺構番号19045は欠番となった。

#### 【掘立柱建物 SB19090 (Fig.18・19)】

**構成** P263・278・280・281・701(702?)・703。

**重複** P281→P60。P703→SX19051。

**平面・規模** 側柱建物で、2間×3間の規模を検出した。



Fig.10 縄文時代の主要遺構配置図 (S=1/500)



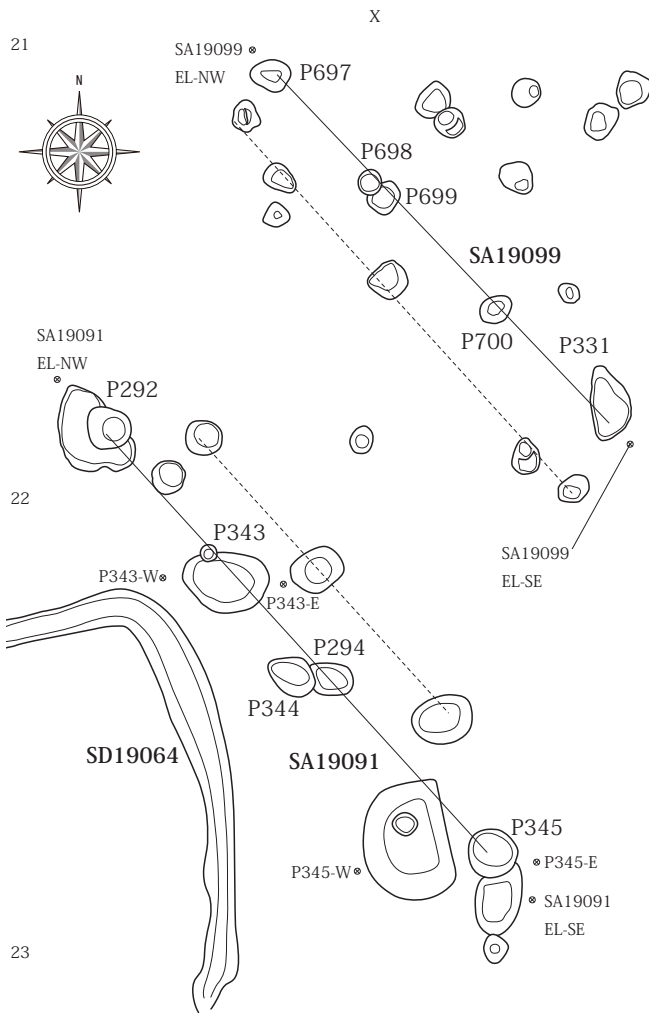
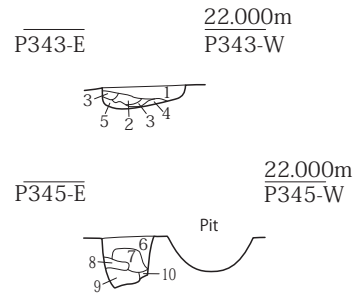


Fig.11 SA19091・99 平面 (S=1/50)



- 1 黒褐色細砂 (10YR2/3)
- 2 黒褐色シルト (10YR2/3) と褐色シルト (10YR4/6) が混在
- 3 褐色シルト (10YR4/6) 粘性強い
- 4 黒褐色シルト (10YR2/3) 粘性弱い
- 5 黒褐色シルト (10YR2/2) 粘性強い
- 6 黒褐色細砂 (10YR2/2)
- 7 黒褐色シルト (10YR2/3) 地山ブロックを含む
- 8 褐色シルト (10YR4/6) 黒褐色土を含む
- 9 黒褐色シルト (10YR2/2) 地山ブロックを含む
- 10 褐色シルト (10YR4/6) 黒褐色土を少量包含する

Fig.12 SA19091 土層断面 (S=1/50)

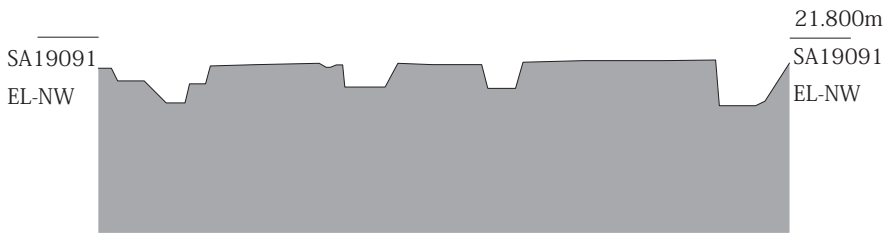


Fig.13 SA19091・99 断面 (S=1/50)



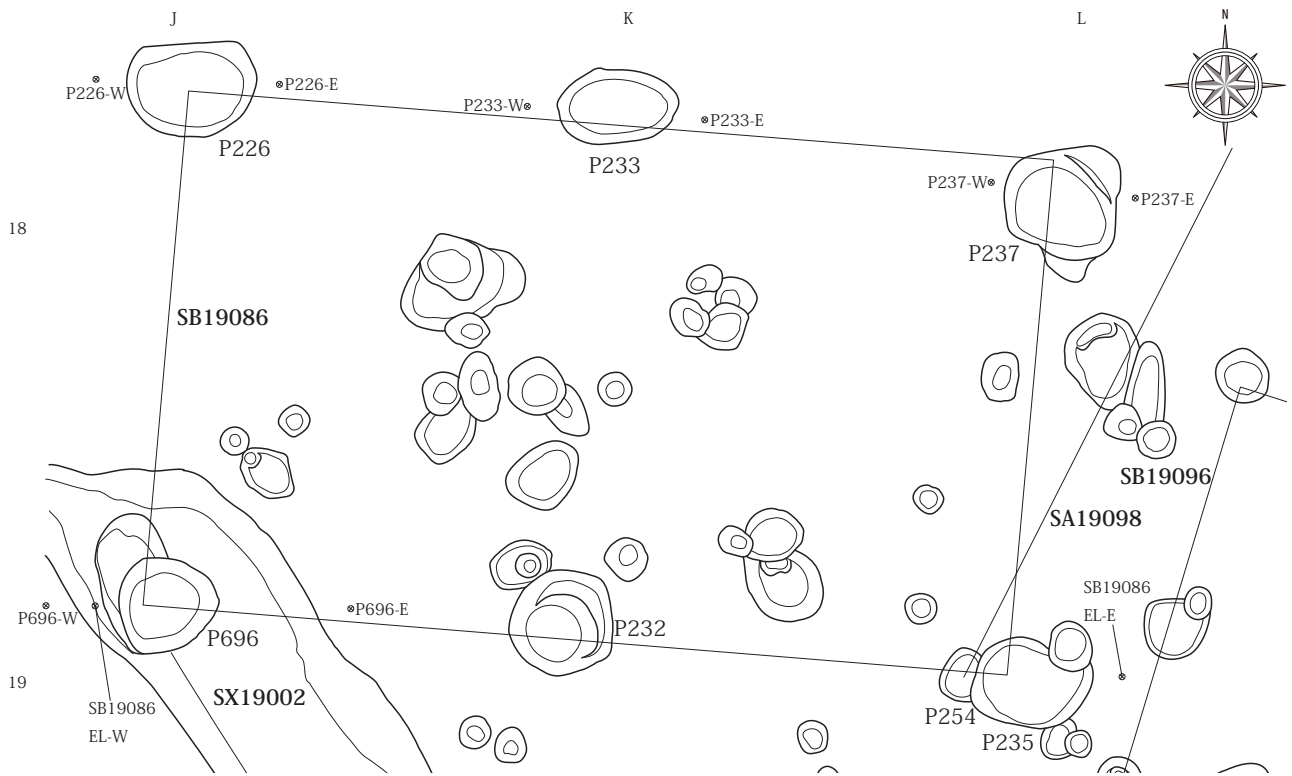
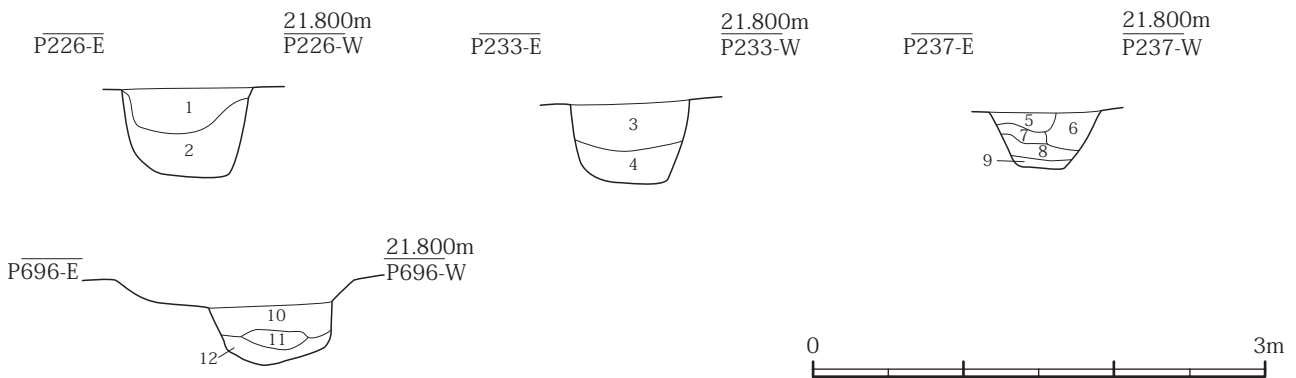


Fig.14 SB19086 平面 (S=1/50)



- |  |  |
|--|--|
| <p>1 黒褐色細砂 (10YR2/3) 直径3cm大の礫を多量含む 土器片が混入</p> <p>2 黒褐色シルト (10YR3/1) 直径0.5～4cmの礫を多量包含する</p> <p>3 黒褐色シルト (10YR2/2) 直径1～5cmの礫を多量含む 炭化物を微量含む</p> <p>4 黒褐色シルト (10YR2/2) 粗砂を少量包含する 直径1～5cmの礫を多量含む 土器片が混入</p> <p>5 黒褐色シルト (10YR2/2) 地山ブロック・礫を少量含む</p> <p>6 黒色シルト (10YR2/1) 地山ブロック・土器片を含む 直径2～3cmの礫を含む</p> | <p>7 黒色シルト (10YR2/1) 地山ブロックを多量包含する</p> <p>8 黒褐色シルト (10YR2/2) 地山ブロック・直径1cmの礫を少量含む</p> <p>9 黒褐色シルト (10YR2/2) 粗砂が混じる 地山ブロック・直径1cmの礫を少量含む</p> <p>10 黒褐色シルト (10YR2/2) 粗砂が混じる 直径0.5cmの礫を多量含む</p> <p>11 暗褐色シルト (10YR3/3) 直径0.5cmの礫を含む</p> <p>12 黒褐色シルト (10YR3/2) 直径0.5cmの礫を含む</p> |
|--|--|

Fig.15 SB19086 土層断面 (S=1/50)

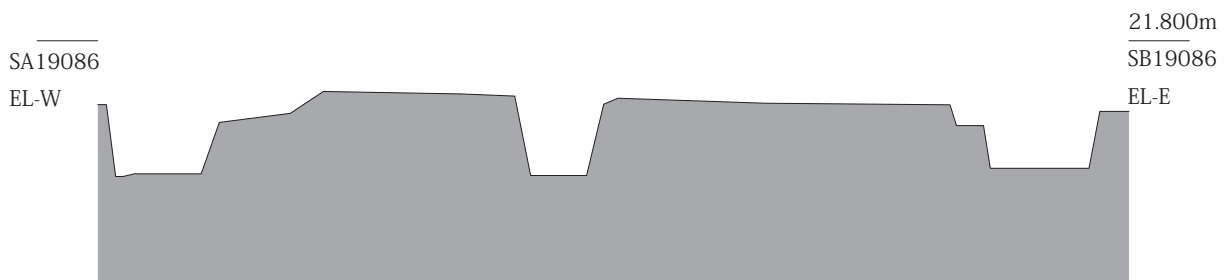


Fig.16 SB19086 断面 (S=1/50)

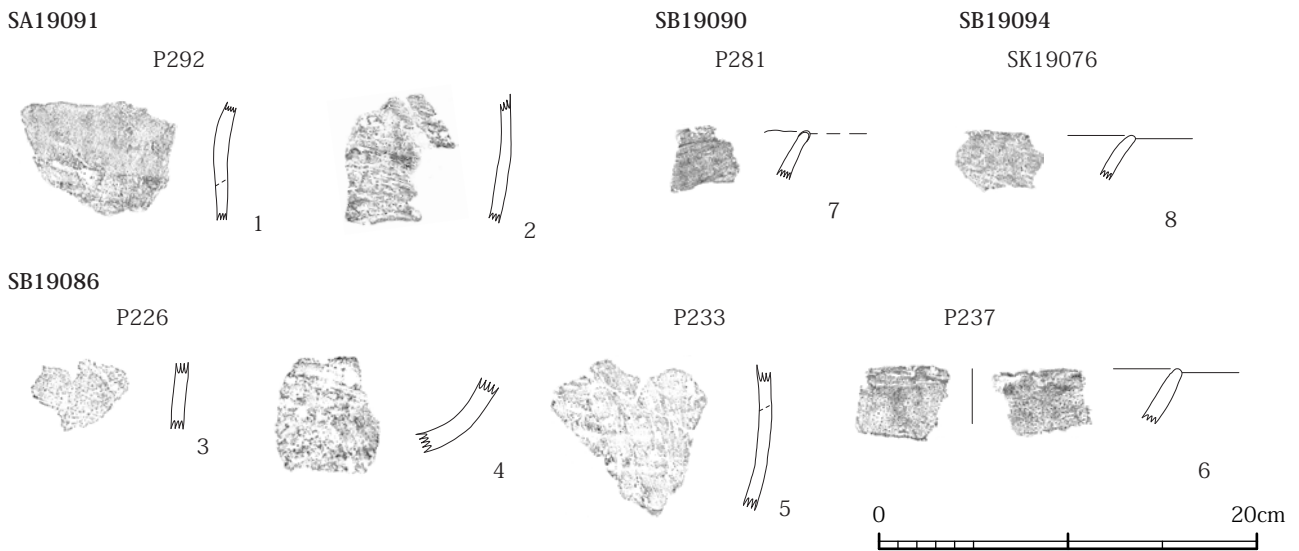


Fig.17 SA19091・SB19086・90・94 出土遺物 (S=1/4)

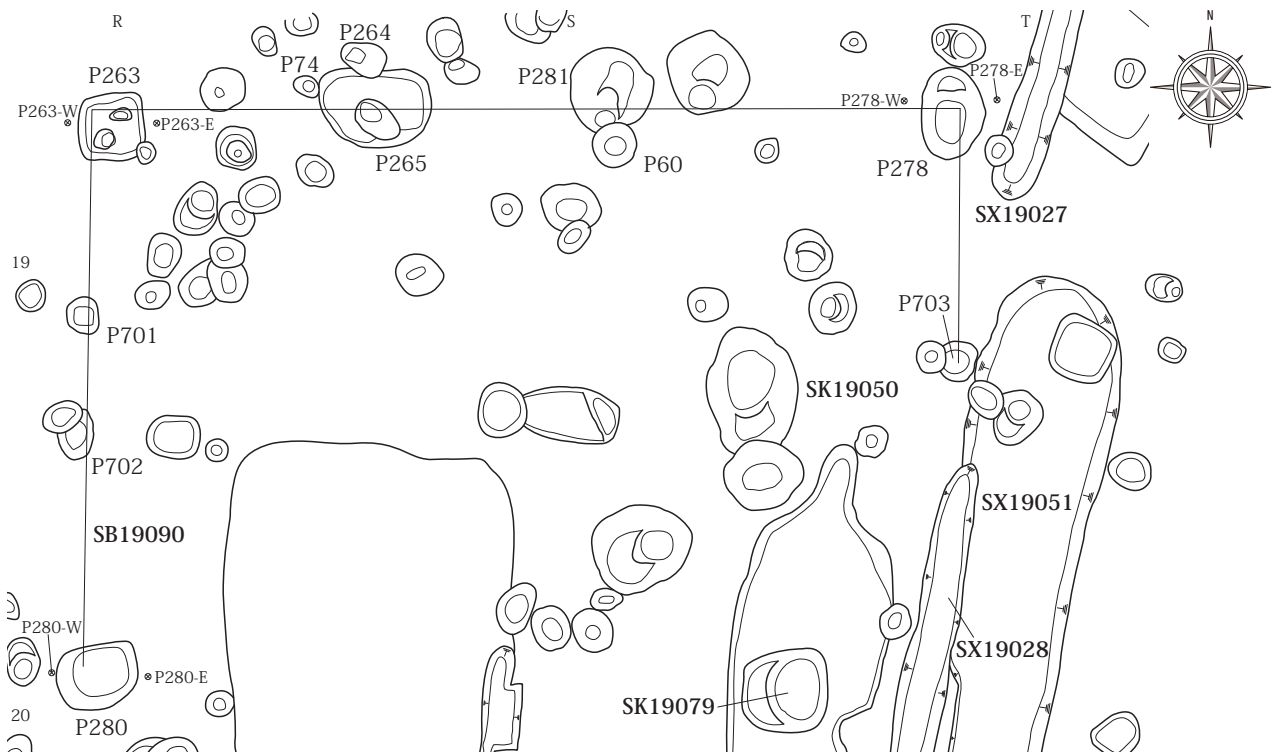


Fig.18 SB19090 平面 (S=1/50)

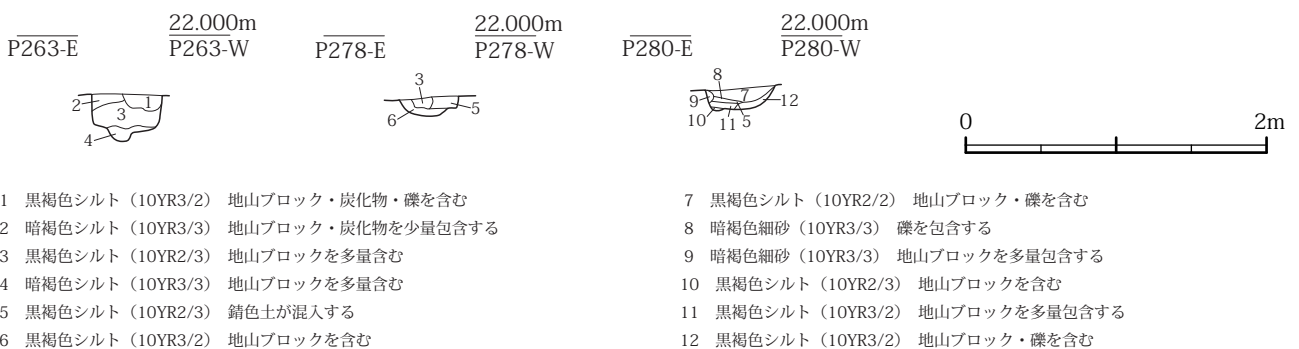


Fig.19 SB19090 土層断面 (S=1/50)

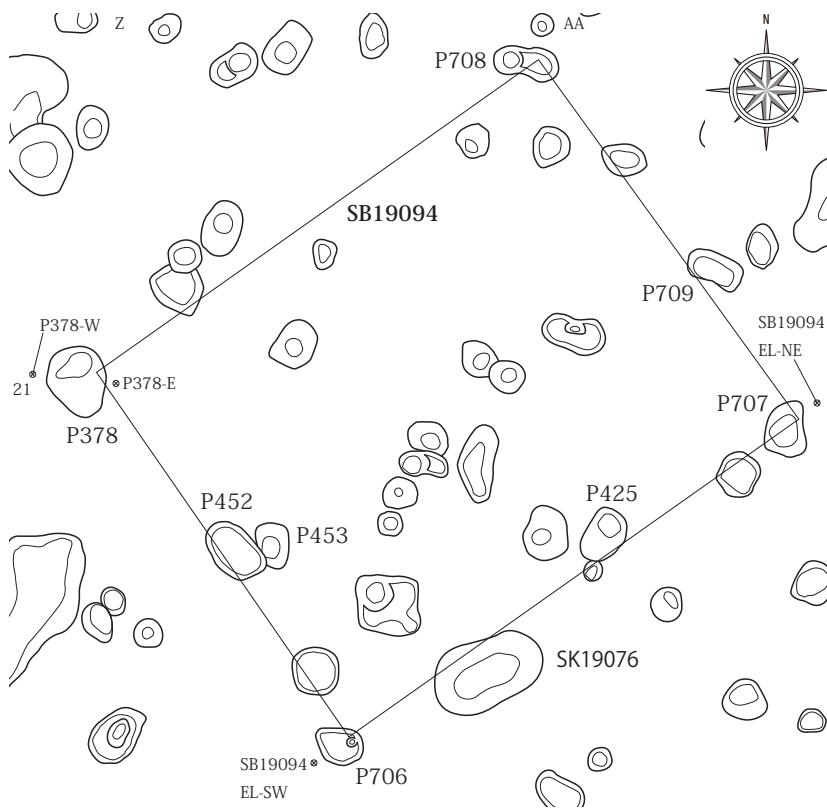
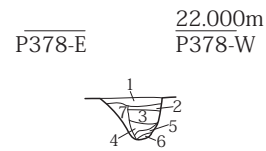


Fig.20 SB19094 平面 (S=1/50)



- 1 黒褐色細砂 (10YR2/3) 粘性強い 地山ブロック・礫を少量包含する
- 2 黒褐色シルト (10YR2/2) 地山ブロックを多量含む 礫を少量包含する
- 3 黒褐色シルト (10YR2/2) 締まり強い 地山ブロック・直径 0.6cmの礫を少量含む
- 4 黒褐色シルト (10YR2/2) 地山ブロックを多量含む
- 5 褐色シルト (10YR4/4) 礫を少量含む
- 6 褐色細砂 (10YR4/6) 粘性強い
- 7 褐色細砂 (10YR4/4) 粘性強い

Fig.21 SB19094 土層断面 (S=1/50)

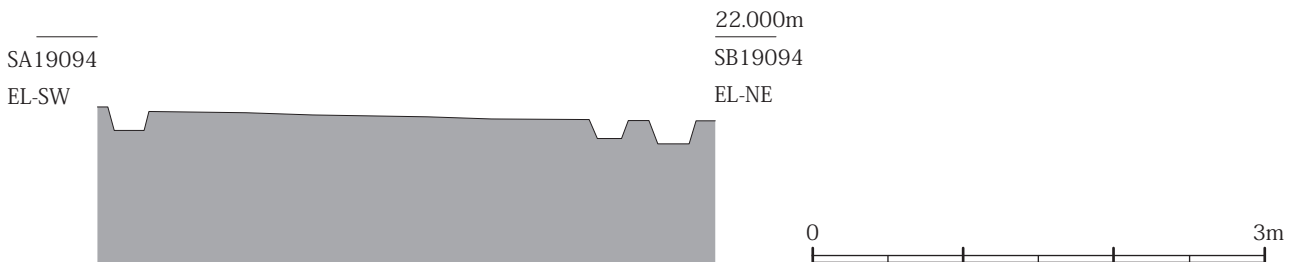


Fig.22 SB19094 断面 (S=1/50)

南北 5.7 m, 東西 3.7 mを測るが, 南北方向に更に広がる可能性を残す。しかし, SB19090 南側にはピットが多く, 加えて攪乱によって茫漠としているために不明である。主軸はN-1°-Wとほぼ正方位を向く。構成するピットの規模は, 直径 0.4 ~ 0.7 mを測り, 検出面からの深さは 0.05 ~ 0.35 mとやや幅がある。

**遺物** P281 から縄文土器深鉢 (7) が出土した (Fig.17)。縄文土器深鉢 (7) 口縁部上端にキザミを有するが, 磨滅のために痕跡を留めるのみである。

**時期・性格** 7は縄文時代晩期前半に帰属するものと考えられる。また, P281 に後出するP60からは縄文土器が出土しているが, 破片資料につき, 詳細な時期比定は困難である。P703 に後出するSX19051 は後世の攪乱である。

【掘立柱建物 SB19094 (Fig.20 ~ 22)】

**構成** P378・425・452・706 ~ 709, SK19076 ?。

**重複** P453 → P452。

**平面・規模** 2間×2間の側柱建物になろう。検出範囲は南北 2.9 m, 東西 3.6 mを測る。主軸はW-35°-N方向を向ける。構成するピットは, 直径 0.2 ~ 0.4 mの円形状を呈し, 検出面からの深さは 0.25 ~ 0.35 mを測る。

**遺物** P425・452 から縄文土器片が出土したが, 図化できる資料はない。SK19076 から縄文土器深鉢 (8) が出土した (Fig.17)。

**縄文土器深鉢 (8)** 口縁部の破片資料で, 内外面にケズリ調整が施される。

**時期・性格** 2×2間の側柱建物を想定しているが, 北辺中央部のピットは未検出である。P452 に切られるP453 から縄文土器細片の出土があるが, 帰属時期を特定する資料はない。南辺の柱筋上にはSK19076が存在する。長軸 0.75 m, 短軸 0.45 m, 検出面からの深さ 0.29 mの規模を有し, 8が出土している。縄文時代晩期前半

に属すると考えられ、SB19094の所属時期の詳細を示す可能性がある。なお、SK19076の埋土は、SB19094を構成するピットと同色の黒褐色土である。

【掘立柱建物SB22033 (Fig.23・24)】

構成 P'125・126・129・713～716 (717?)・718

重複 P'718→P'127。

平面・規模 南部は既存建物によって攪乱を受けているため、南方向への延伸は特定できない。少なくとも1間×4間の側柱建物になろう。梁間1.5mを測り、桁行は4.7m以上になる。主軸方向はN-13°-Eを示し、平面形は長方形をなすものと見られる。構成するピットは円

形状を呈し、直径0.25～0.5m、検出面からの深さ0.1～0.65mを測る。

遺物 P'129から縄文土器片が出土したが、破片資料のため、図化には至っていない。

時期・性格 縄文時代の遺構であることを前提とすれば、その他の遺構と同様、縄文時代晩期前半代に属する可能性が高いと思われる。但し、縄文土器の出土がP'129に留まるため、確証を得ることはできない。P'718に後出するP'127からは土師器片が出土している。

【土坑SK22009 (Fig.25)】

重複 SK22009→P'39。

平面・規模 長軸1.3m、短軸0.75mを測り、検出面からの深さは0.1mを測る。北西部が北方向へ突出した不整形形状を呈する。

遺物 縄文土器深鉢(9)が出土した(Fig.29)。

縄文土器深鉢(9) 体部一部の遺存に留まり、内外面をケズリ調整される。

時期・性格 9は多くの縄文時代の遺物と同様、縄文時代晩期前半に属する可能性が考えられる。南東部をP'39によって切られる。P'39からも縄文土器深鉢(36)が出土している。SK22009及びP'39はほぼ同色の黒褐色土(10YR2/2)で埋没する。

【土坑SK22030 (Fig.26・27)】

重複 ピット(遺物なし)→SK22030。

平面・規模 南北0.8m、東西1.0mを検出したが、北部が攪乱されるため、南北方向の規模は不明である。南部はやや隅丸方形に収斂する。検出面からの深さは0.45mを測る。

遺物 縄文土器深鉢(10)が出土した(Fig.29)。

縄文土器深鉢(10) 口縁部は直線的なプロポーシオンを呈する。金雲母を多量含む。

時期・性格 10は縄文時代晩期前半に属するものと考えられる。SK22030の西側にはSK22029が存在するが、大部分が削平され、遺物の出土もないために詳細は明らかでない。

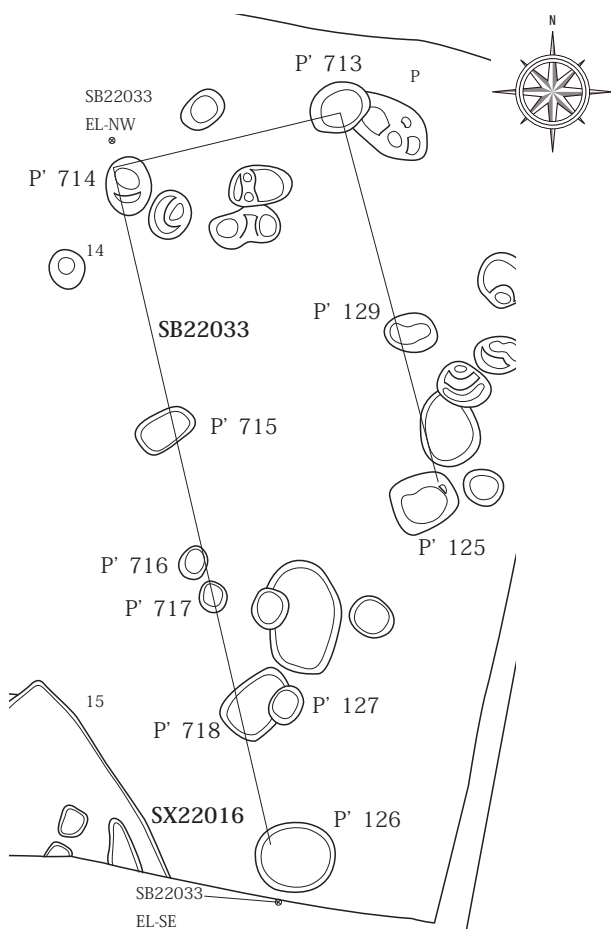


Fig.23 SB22033 平面 (S=1/50)

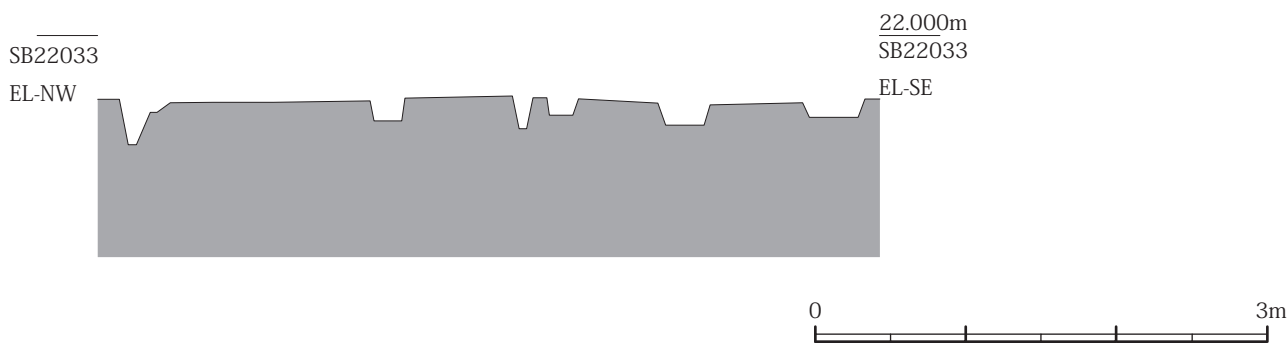


Fig.24 SB22033 断面 (S=1/50)

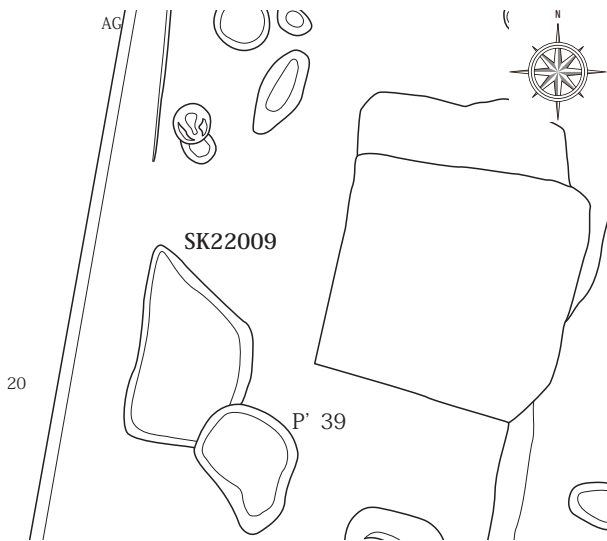


Fig.25 SK22009 平面 (S=1/50)

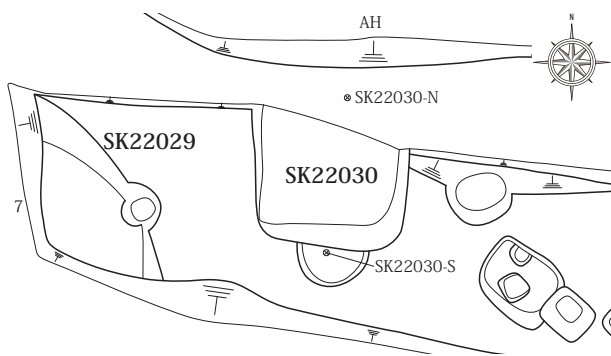
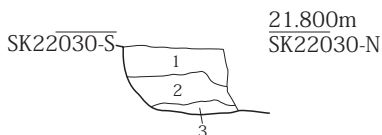


Fig.26 SK22030 平面 (S=1/50)



- 1 黒褐色シルト (10YR3/1) 小礫を少量含む 直径0.2～0.5cmの地山ブロックを微量包含する
- 2 黒褐色シルト (10YR3/1) 小礫を多量含む 直径0.5～1.5cmの地山ブロックを多量含む 1より僅かに赤みを帯びる
- 3 黒褐色シルト (10YR3/1) 小礫を少量含む 直径0.5～1.5cmの地山ブロックを少量含む 1よりやや色調が暗い

Fig.27 SK22030 土層断面 (S=1/50)

【溝 SD22028 (Fig.28)】

重複 SD22028 → SD22026, P'192。

平面・規模 上部を現代の攪乱によって削平され、更に後出する SD22026 によって埋没するため、本来の形状を留めるものではない。更に北部は P'192 によって切られる。SD22026 底面からの深さは 0.05 m である。

遺物 縄文土器深鉢 (11) が出土した (Fig.29)。

縄文土器深鉢 (11) 凸帯文土器である。口縁部端部が剥落しているが、口縁部端部からやや下がった位置に素文凸帯が貼り付けられる。

時期・性格 11 は縄文時代晩期後半に帰属する。なお、細片資料であるが、先行する SD220026 からも凸帯を施文された縄文土器深鉢が出土しており、ほぼ同時期に比定し得る。共に溝として捉えてはいるものの、周囲の攪乱の影響が強く、全容は不明である。

【平地式住居 SX22014 (Fig.30)】

構成 P'55・56・59・65?・66・80・91・102・106・710・711・712 (76?)・713。

重複 P'66 → P'63。

平面・規模 ピット群が概ね等間隔に並びながら、楕円形状にまとまるため、建物の可能性を想定した。建物範囲は南北 6.7 m、東西 5.0 m に広がる。主軸方向は N-3°-E と正方位に近い。柱間はほぼ 1.2 m 前後に収まるが、一部 2.0 m に達する箇所もある。構成するピットは 12 基を数えるが、周囲の攪乱の影響のために未検出である

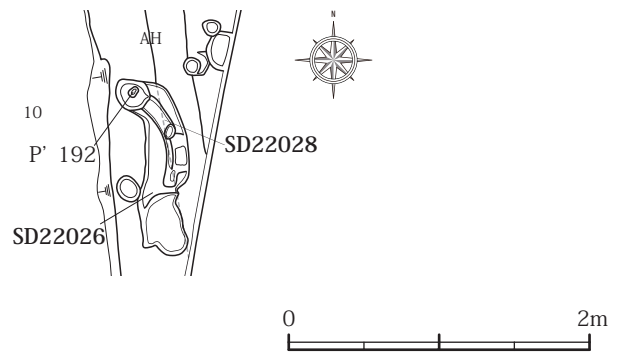


Fig.28 SD22028 平面 (S=1/50)

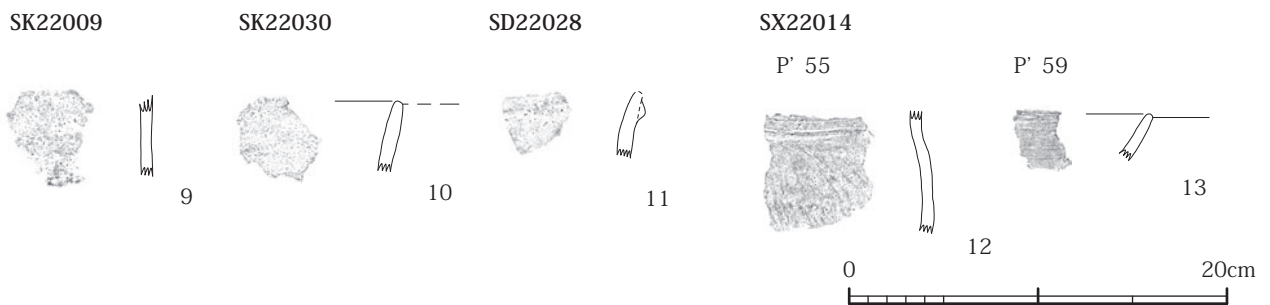


Fig.29 SK22009・30・SD22028・SX22014 出土遺物 (S=1/4)

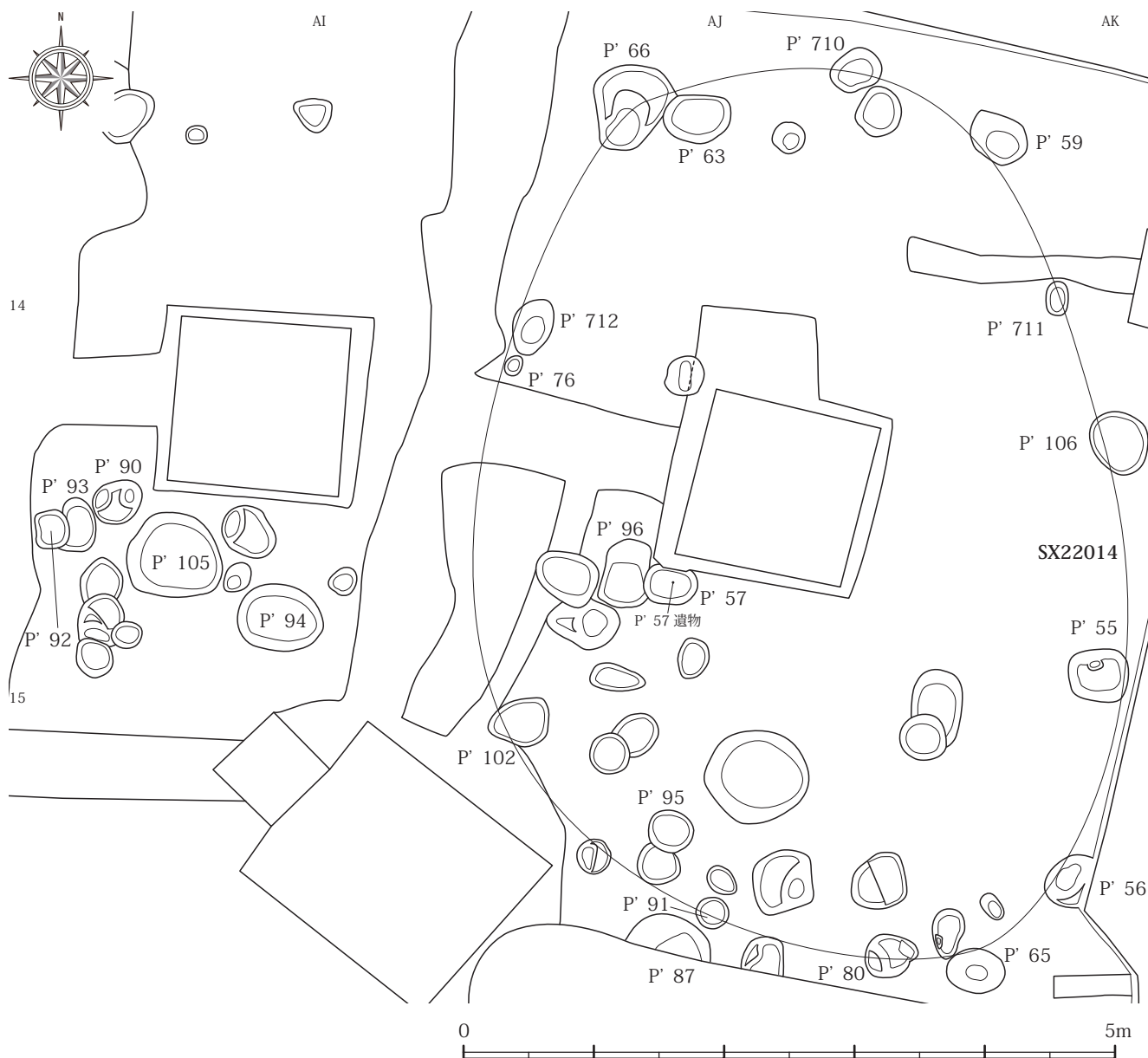


Fig.30 SX22014・P'57・94 平面 (S=1/50)

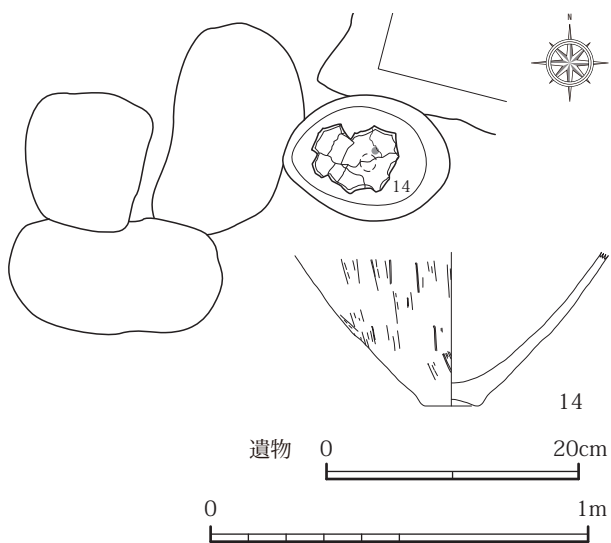


Fig.31 P'57 遺物出土状況 (S=1/20 遺物：S=1/6)

ものの、P'102とP'712の間にもう1基存在すると見られ、またP'65も加わる可能性がある。ピットは全て円形状で、直径0.35～0.65mを計測し、検出面からの深さは0.1～0.3mに落ち着くが、P'710のみ0.05mと浅い。

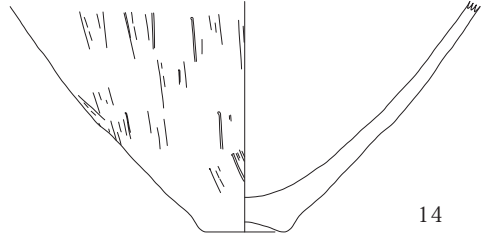
**遺物** P'55から縄文土器深鉢(12)、P'59から縄文土器深鉢(13)が出土した(Fig.29)。図化資料ではないが、P'56・65・66・91・102・106からも縄文土器片が出ている。

**縄文土器深鉢(12・13)** 共に内外面をケズリによって調整される。12は頸部で剥落しているが、上方は口縁部に向けてやや外反傾向を示す。

**時期・性格** ピットが整然と配置され、これらから縄文土器が出土することから、平地式住居の可能性を考えた。当該調査区内において唯一の検出となるが、平地式住居

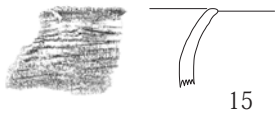


P' 57

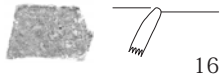


14

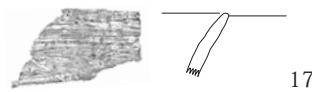
P' 94



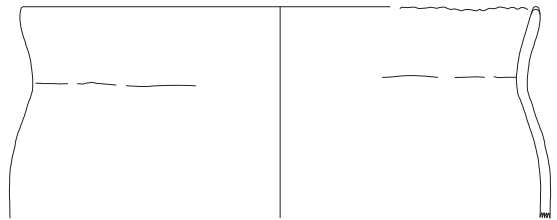
15



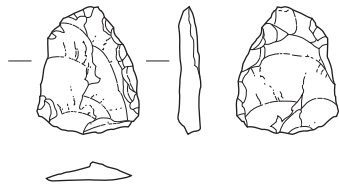
16



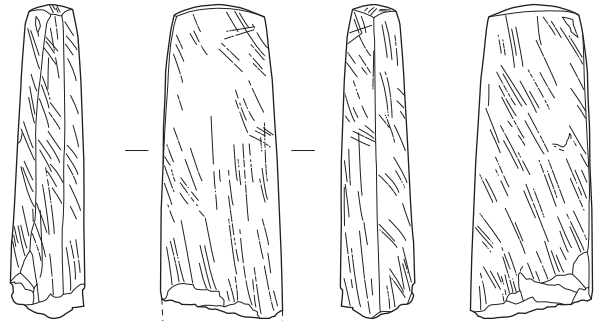
17



18



19



20



Fig.32 P'57・94 出土遺物 (S=1/4 石器:S=2/3)

となれば、非常に貴重な事例となる。住居内部のほぼ中央部は現代の攪乱によって失われている。12・13は縄文土器晩期前半に帰属すると考えられる。また、P'66に後出するP'63からはほぼ同時期に比定し得る縄文土器深鉢(38)が出ている。SX22014が存在する2区北部は縄文時代の遺構密度が高く、特に滋賀里式の段階に位置付けられるものが殆どである。SX22014の内部には縄文時代晩期前半のP'57が、すぐ南側にも同時期のP'87がある。また、後述するが、西側においてもP'90・

93・94・105から縄文時代晩期前半の遺物が出土しており、その関連性が注目される。

【ピットP'57 (Fig.30)】

重複 P'57 → P'96。

平面・規模 直径0.4mを測り、円形状を呈する。北部は現代の攪乱により失われている。検出面からの深さは0.1mである。

遺物 縄文土器深鉢(14)が出土した (Fig.32)。

縄文土器深鉢(14) 底部の完形資料である。底部はや

や上げ底である。外面はケズリ調整され、内面にはナデが施される。

**時期・性格** 14は縄文時代晩期前半の滋賀里式の段階に位置付けられる。P'57のほぼ中央部において、上を向けて据え置かれるように出土した(Fig.31)。P'57に後出するP'96からは、時期を特定できる遺物の出土がない。

#### 【ピットP'94 (Fig.30)】

**重複** なし。

**平面・規模** 長軸0.65m、短軸0.5mを測る楕円形状のピットである。検出面からの深さは0.35mである。

**遺物** 縄文土器深鉢(15～18)、石鏃(19)、石刀(20)が出土した(Fig.32)。

**縄文土器深鉢(15～18)** 全て胎土には金雲母を包含する。15は口縁部が強く外反する。16は粘土紐の接合部を境に口縁部下方が剥落する。17は口縁部が外反し、端部を丸く収める。18は口縁～頸部が良好に遺存する資料で、頸部は緩やかに湾曲する。口縁部上端にはキザミを有しており、キザミは工具による小波状をなす。

**石鏃(19)** サヌカイト製品で、肉眼観察では金山産であることが分かる。完形資料であるが、未完成品の可能性も考えられる。両面に素材面を残す。

**石刀(20)** 緑色片岩製の直刀形で、よく研磨されている。基部のみ遺存しているが、被熱後に欠損したものと考えられる。なお、第1次調査では、縄文時代晩期前半の石刀が弥生時代後期の方形周溝墓から出土している。溝の縁辺に長軸を揃えた特徴的な出土状況を示しており、非常に興味深い。三帯の文様帯を有するほぼ完形品であり、平成23年3月15日付けで鈴鹿市指定文化財に指定されている。

**時期・性格** 出土遺物の特徴から、縄文時代晩期前半の所産であると考えられる。建物等を構成するものではない単独のピットであるが、石刀を含む該当期の良好な資料を得ることができた。同時期の建物状遺構であるSX22014とは約1.2m隔絶する。

#### 【縄文時代の遺構出土遺物】

前に触れた遺構以外にも、縄文時代の土器が多数出土した遺構が存在する(Fig.10)。ここでは、掘立柱建物等にまとまるものではないが、遺構(ピット)から単独で出土した縄文土器及び該当時期の石器を中心に順に記述する(Fig.33・34)。

**縄文土器深鉢(21～29・31～41・43・44・46～48)** 21は体部下方の資料で厚手である。22は口縁部上端に工具による小波状のキザミをもつ。直径0.4mm程度の礫を含み、金雲母を多量に包含する。25は底部が剥落する。体部はほぼ直線的に外反する。26は口縁部が

外反し、金雲母を多量に含む。内面は横方向の条痕で調整される。27は内面に煤が付着する。天地を逆にしていう可能性もある。29は内面に条痕が施されるが、二枚貝で調整した後に巻貝による施文の意匠が観察できる。31・32は口縁部上端にキザミを有しており、工具の使用によって小波状を呈する。32は外面に横位の条痕で調整される。33は金雲母を多量に包含し、口縁部端部が外方へ摘み出される。口縁部端部からやや下げて凸帯文が貼り付けられ、凸帯上には指頭による長大なキザミが施される。粘土紐の接合痕の観察が容易で、外傾接合であることが分かる。35は粘土紐の接合痕が2箇所観察でき、共に外傾接合である。37は口縁部上端に小波状のキザミを有し、口縁部端部から下がった位置に凸帯が施文される。凸帯文は高く明瞭であり、貝殻によるキザミが施される。39は口縁部が外反し、口縁部端部に素文凸帯が貼り付けられる。40・41は多量の金雲母を包含する。43は金雲母を多量に含む。外面の条痕は、口縁部には二枚貝を使用して横位であるのに対し、体部は縦方向に、そして目の細かい異なる工具を用いている点に特徴がある。44・46・47は金雲母を多量に包含する。44は口縁部端部が剥落し、46はやや上げ底である。

**縄文土器鉢(30)** 黒色磨研土器で、横位のミガキが密に施される。計測不能であるが、口径は非常に大きい。口縁部の外方への開きが強く、深鉢か浅鉢になるか判別できない。体部に向けて屈曲が強い。

**石鏃(42・50)** 共にサヌカイト製品である。肉眼観察では、50は二上山産であると推定される。42は先端部、50は逆刺部を欠く。

**剥片(45)** サヌカイト製で二上山産と推定される。主要剥離面に微細剥離が観察できるが、背面は疎らである。

**石錐(49)** 二上山産のサヌカイト製品であると推定できる。基部を欠損する。

上記の殆どの遺物が縄文時代晩期前半に位置付けられるが、凸帯文土器である37・39は縄文時代晩期後半の所産である。そして、33は弥生時代前期の垂式遠賀川土器の前段階に相当する資料である。

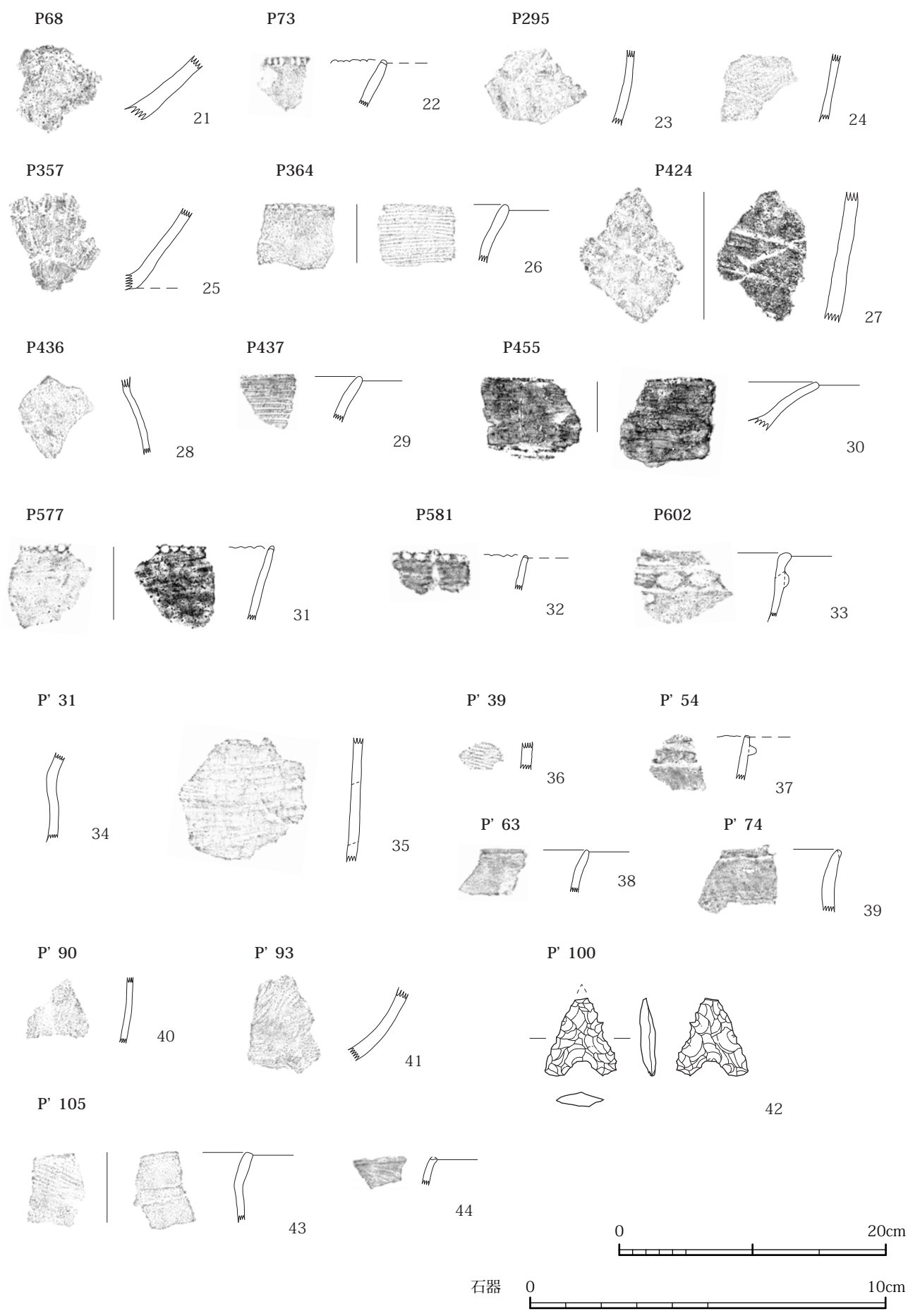


Fig.33 縄文時代の遺構出土遺物 1 (S=1/4 石器 : S=2/3)

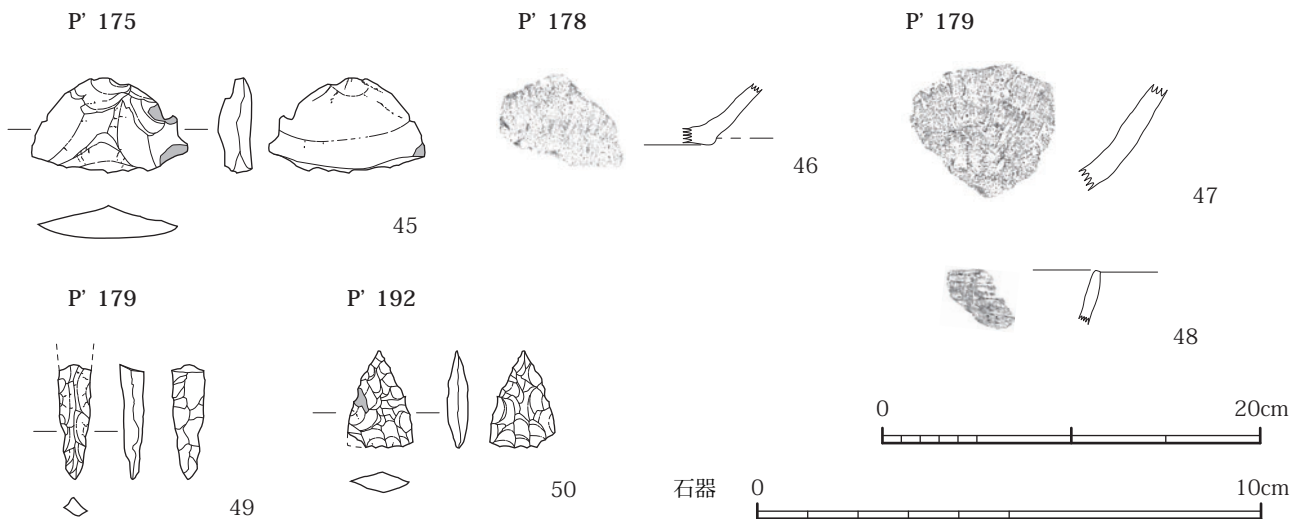


Fig.34 縄文時代の遺構出土遺物 2 (S=1/4 石器 : S=2/3)

## 2 弥生・古墳時代の遺構 (Fig.35)

弥生～古墳時代と題して一括して扱うが、実際は弥生時代後期後半の山中式期から古墳時代初頭の廻間式期の遺構が大部分を占め、特に廻間Ⅰ式期の資料が中心となる。ここでは八王子古宮～山中式期を弥生時代後期、廻間Ⅰ～Ⅱ式期を古墳時代初頭、廻間Ⅲ式期を古墳時代前期として取り扱うことにする。なお、遺物の表記については明確に区分けできないものも多数存在し、また混同を避けるべく、廻間式期以前の時期に比定でき得るものは一括して弥生土器とする。この時期の遺構は第19次調査区を中心とし、ほぼ全域に万遍なく分布する。

### 【竪穴住居 SH19001 (Fig.36・37)】

**区割** 北西～南東。

**重複** P175 → SH19001 → SD19006, P183。

**平面・規模** 東西 5.6 m, 南北 5.0 m を測る。方形で床面積は 24.4㎡ である。主軸方向は W-29° -N を向く。

**壁・周壁溝** 南東コーナーは一部攪乱され、SD19006 と重複する南東部のプランはやや不整である。検出面から床面までの深さは北壁で 0.1 m, 南壁で 0.05 m と非常に浅い。周壁溝は幅 0.1～0.25 m, 床面からの深さ 0.01～0.05 m を測る。壁沿いをほぼ一周するが、南西コーナー付近で部分的に途切れる。

**貼床** 床面の全面に貼床を検出した。貼床は粘質の強い黒褐色土と地山を混ぜた土によって施され、その厚さは南西・北東・南東部で 0.06 m であるのに対し、北西部では 0.09cm とやや厚い。

**主柱穴** P184・186～188。直径 0.25～0.5 m, 床面からの深さ 0.15～0.3 m の円形状を呈し、SH19001 の平面形と同様の形に配される。南東部主柱穴である P187 のみ底面に礫が埋設されていた。

**土坑** 南辺の中央からやや西寄りの位置にあり、長軸 0.

75 m, 短軸 0.7 m を測る。周壁溝と一体化し、周壁溝底面から 0.24 m 下がる。

**屋外溝** 付帯なし。

**火処** 地床炉を付帯する可能性が考えられるが、想定箇所の床面中央部が後世の攪乱を受けて完全に失われており、確認することができない。

**遺物** 弥生土器甕 (51)・壺 (52・55)・高坏 (53・54) が出土した (Fig.38)。なお、SH19001 北東部において、土師器壺 (56)・土師器鍋 (57・58) の混入を確認した。

**弥生土器甕 (51)** 受け口甕で口縁部端部の立ち上がりは明瞭で、やや内湾傾向である。口縁部外面に刺突文が施文されるが、磨滅のために痕跡を留めるのみである。

**弥生土器壺 (52・55)** 52 は口縁部一部を残す資料である。磨滅の影響を受けているものの、外面は本来、密にタテヘラミガキ調整が施されていたものと考えられる。55 は口縁部端部の垂下が弱く、口縁部外端面には凹みを有する。

**弥生土器高坏 (53・54)** 共に有稜高坏で、53 は坏部上段が剥落している。54 は坏部上下段の接合方法の観察が可能で、内外面をタテヘラミガキ調整される。

**土師器壺 (56)** 小型の壺で口縁部のほぼ完形資料である。口縁部の外反が強い。

**土師器鍋 (57・58)** 共に南伊勢系の鍋で、口縁部端部の折り返しがやや厚手である。57 は小型である。58 の口縁部は短い。

**時期・性格** 中世の SD19006 に先行する。前後する P175・183 からは帰属時期を特定する遺物の出土がない。51・54 は古墳時代初頭の廻間Ⅰ式期に帰属するものと考えられる。混入遺物である 56 は、5 世紀前半の松河戸Ⅱ式に属する可能性が考えられる。混入遺物であ





Fig.35 弥生・古墳時代の主要遺構配置図 (S=1/500)

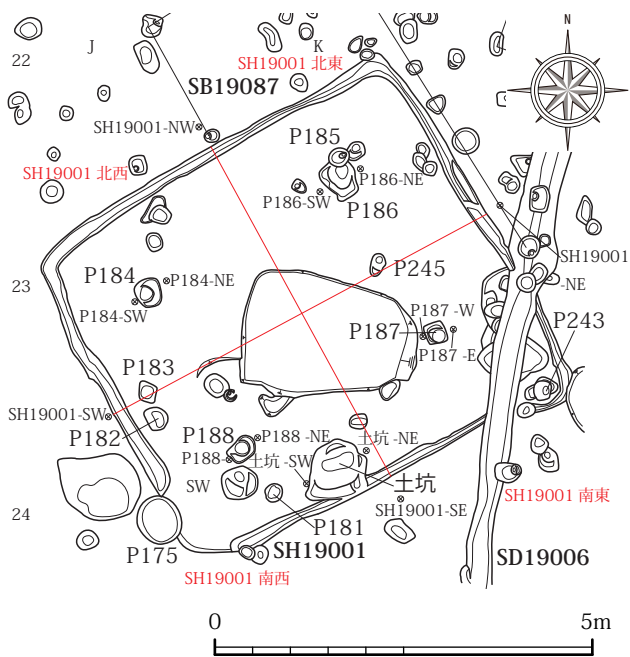


Fig.36 SH19001 平面 (S=1/100)

る 57・58 は、伊藤裕偉氏による土師器鍋編年（以下、伊藤編年と呼称）の第 1 段階に比定でき、その年代観は 12 世紀後半～ 13 世紀前半に求められる。中世の区画範囲内に位置することから、関連性が強く想定される。

【竪穴住居 SH19012 (Fig.39・40)】

重複 SH19012 → SH19057, SD19023, SX19056, P777・509。

平面・規模 東西 5.9 m, 南北 5.6 m を測る。方形のプランで、床面積は 28.6㎡程度である。全体的に攪乱の影響が強く、また重複する SH19057 に大部分を切られている。主軸方向は W-42°-N を向く。

壁・周壁溝 SH19057 によって北東・南東コーナーは削平される。SH19057 の床面において周壁溝下部が埋没する様相を呈している。周壁溝は幅 0.15 ～ 0.3 m を測り、SH19057 の床面から 0.05 m 下がる。北西コーナーで一部西辺が途切れる。

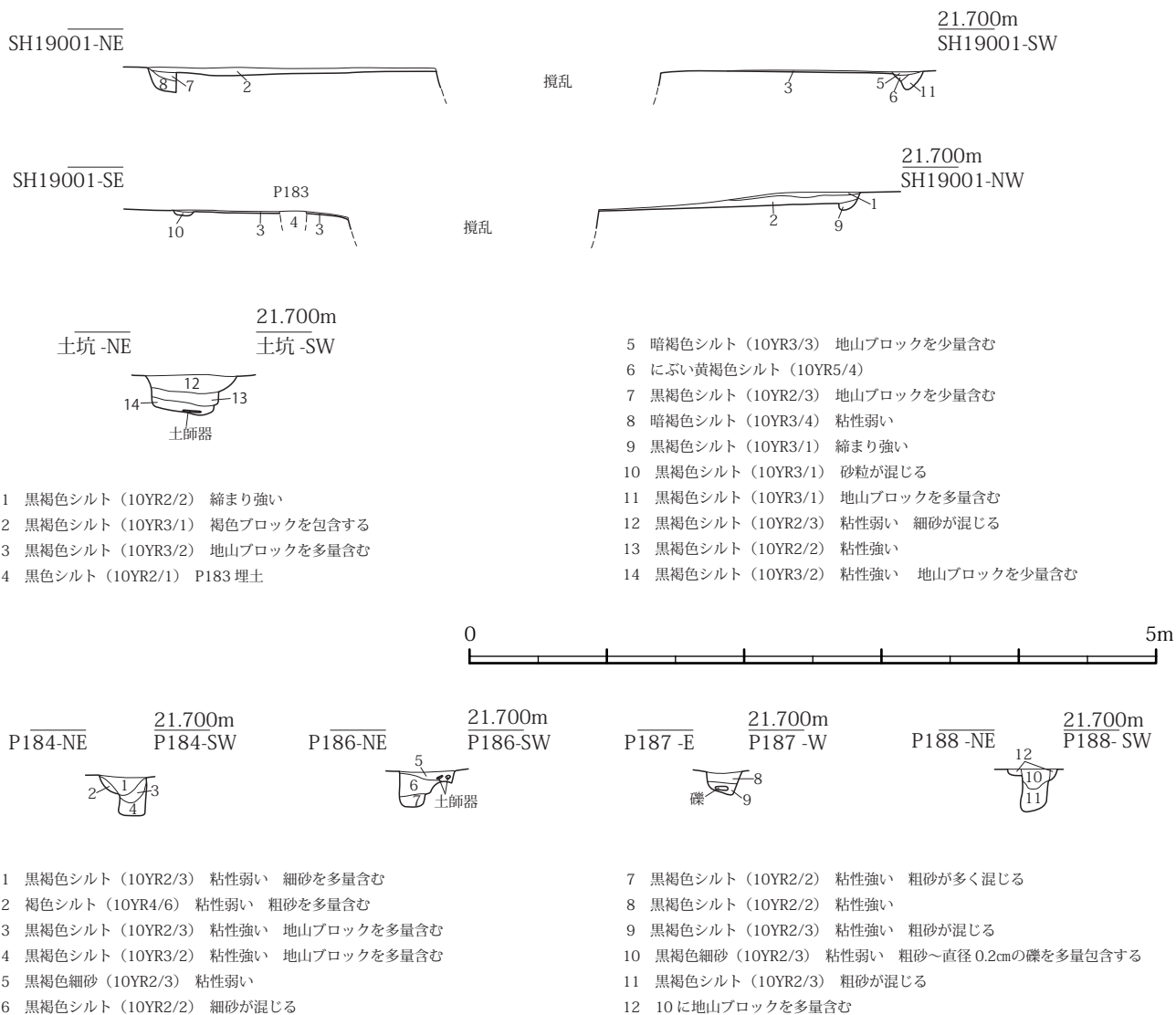


Fig.37 SH19001 土層断面 (S=1/50)

SH19001

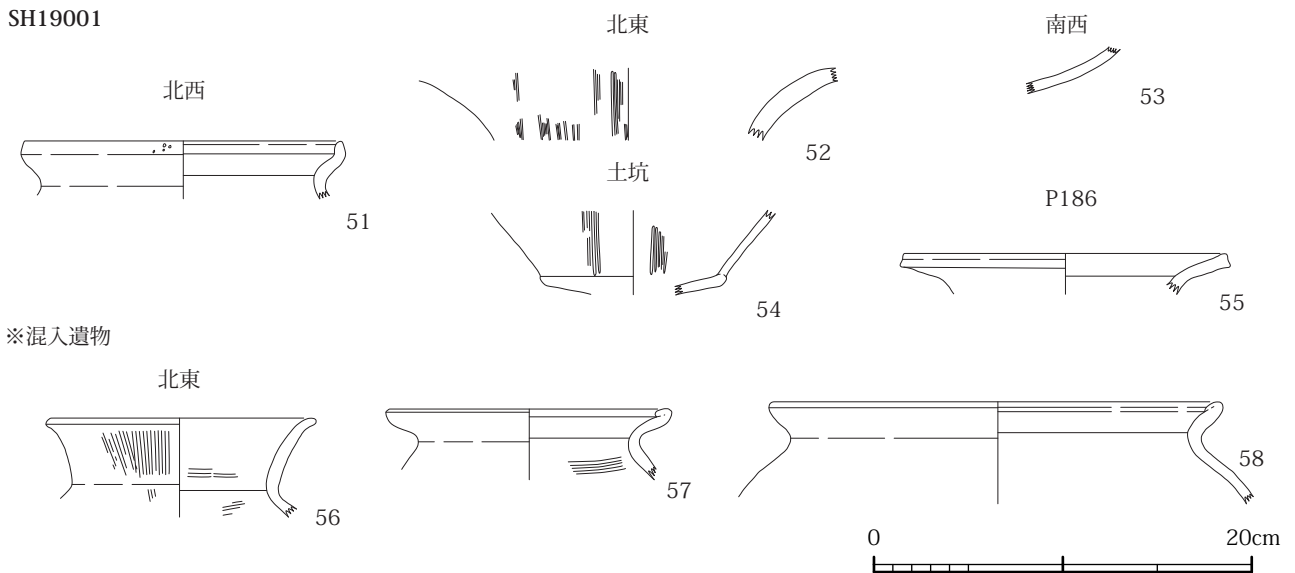


Fig.38 SH19001 出土遺物 (S=1/4)

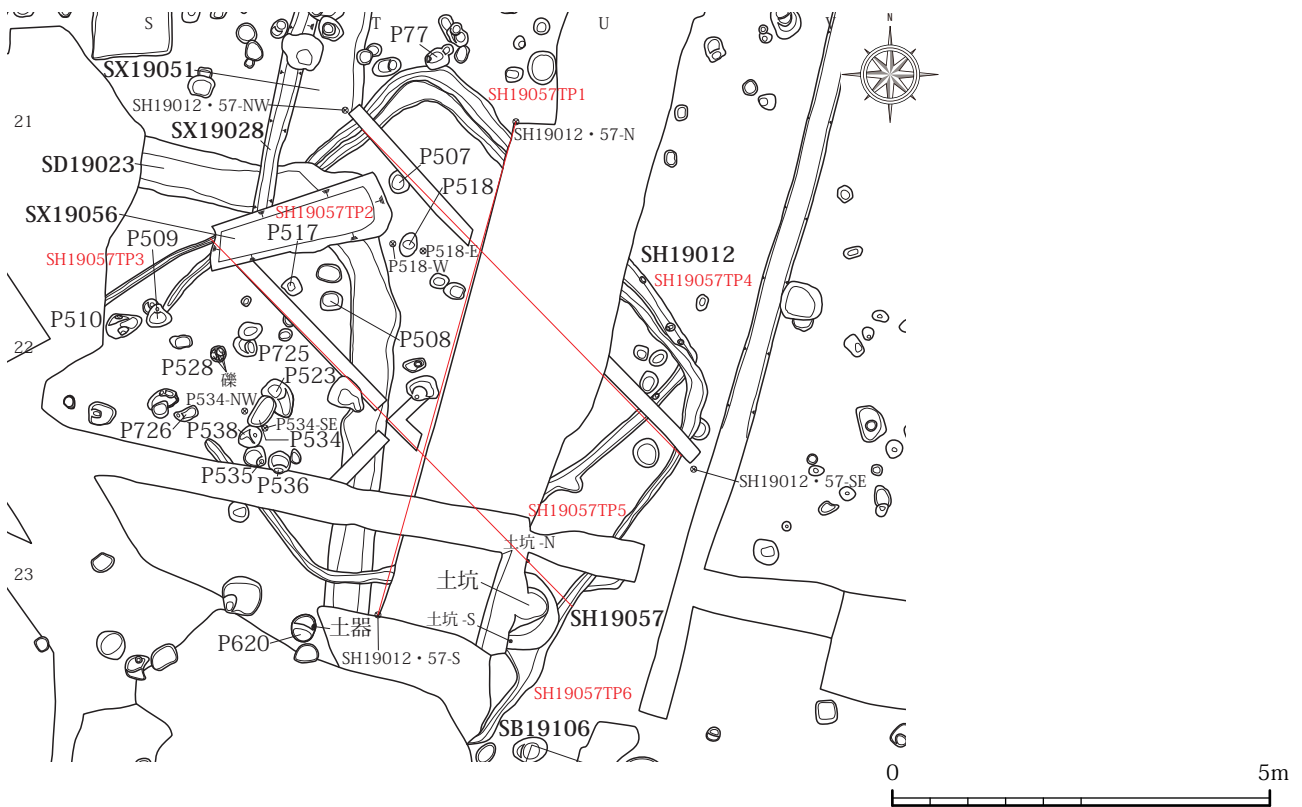


Fig.39 SH19012・57 平面 (S=1/100)

貼床 付帯なし。

主柱穴 SH19057 と重複するため不確定であるが、SH19012 の平面形を意識すると、P507・528・725 が候補として挙がる。直径 0.2 ～ 0.3 m の円形状を呈し、SH19057 床面からの深さ 0.1 ～ 0.16 m を測る。P528 底面には直径 0.1 m 程度の礫が埋設され、SH19057 床面から礫上面までの深さは 0.12 m を測る。南部主柱穴は攪乱によって失われているものと考えられる。

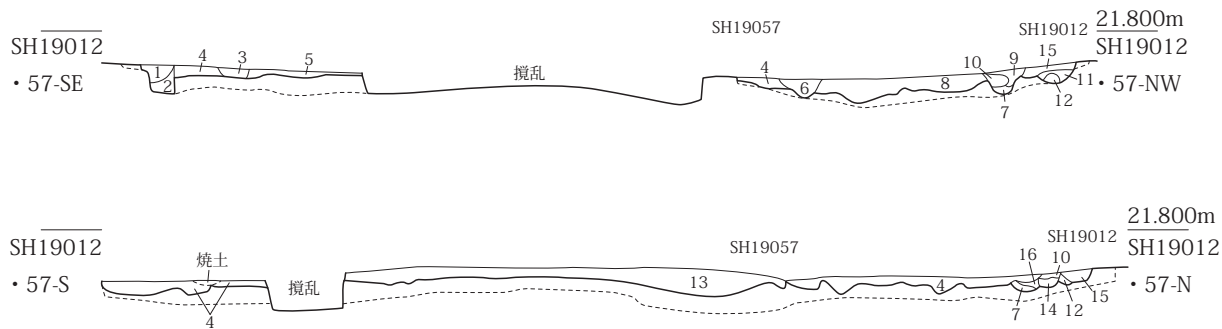
土坑 付帯なし。

屋外溝 付帯なし。

火処 付帯なし

遺物 弥生土器片の出土のみで、凶化可能な遺物はない。

時期・性格 古墳時代初頭頃の SH19057、中世の SD19023 に先行する。出土遺物が乏しいため確証はないが、SH19012 の廃絶後、やや軸を変えて SH19057 に建て替えたものと推測される。



- |  |  |
|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>1 黒褐色シルト (10YR2/2) 地山ブロック・直径0.5cmの礫を含む</li> <li>2 暗褐色シルト (10YR3/3) 暗褐色細砂 (10YR3/4) が混入 粘性強い 礫を含む</li> <li>3 暗褐色細砂 (10YR3/3) 地山ブロック・直径0.5cmの礫を含む</li> <li>4 黒褐色細砂 (10YR3/2) 粘性強い 地山ブロック・礫を含む</li> <li>5 黒褐色細砂 (10YR3/2) 地山ブロック・礫を含む</li> <li>6 暗褐色細砂 (10YR3/3) 粘性強い 地山ブロック・炭化物・礫を含む</li> <li>7 黒褐色細砂 (10YR2/2) 粘性強い 地山ブロック・礫を含む</li> <li>8 にぶい黄褐色細砂 (10YR4/3) 地山ブロックを多量含む 礫を含む</li> <li>9 黒褐色細砂 (10YR3/2) 地山ブロック・炭化物・礫を含む</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>10 黒褐色細砂 (10YR3/2) 粘性強い 地山ブロックを多量含む 炭化物・礫を少量含む</li> <li>11 黒褐色細砂 (10YR2/2) 地山ブロックを含む 炭化物・礫を少量含む</li> <li>12 黒褐色細砂 (10YR3/2) 粘性強い 地山ブロックを多量含む 礫を含む</li> <li>13 黒褐色細砂 (10YR2/2) 粘性強い 地山ブロックを少量含む 礫・土器片を包含する</li> <li>14 黒褐色細砂 (10YR2/2) 地山が班状に混じる 礫を含む</li> <li>15 黒褐色細砂 (10YR3/2) 粘性強い 地山ブロック・炭化物・礫を少量含む 土器片を包含する</li> <li>16 褐色細砂 (10YR4/4) 礫を含む</li> </ul> |
|--|--|

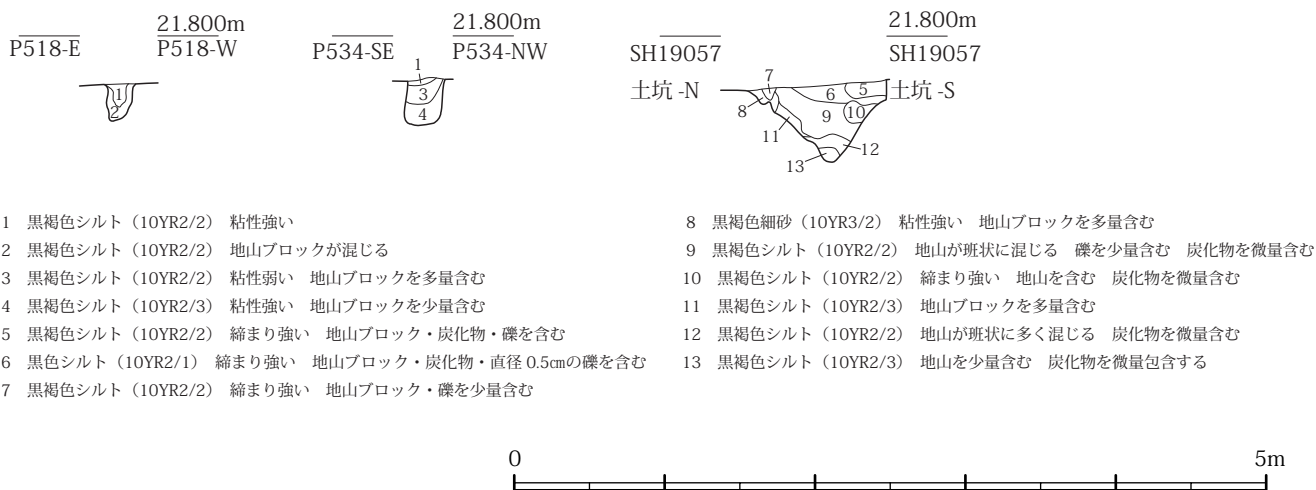


Fig.40 SH19012・57 土層断面 (S=1/50)

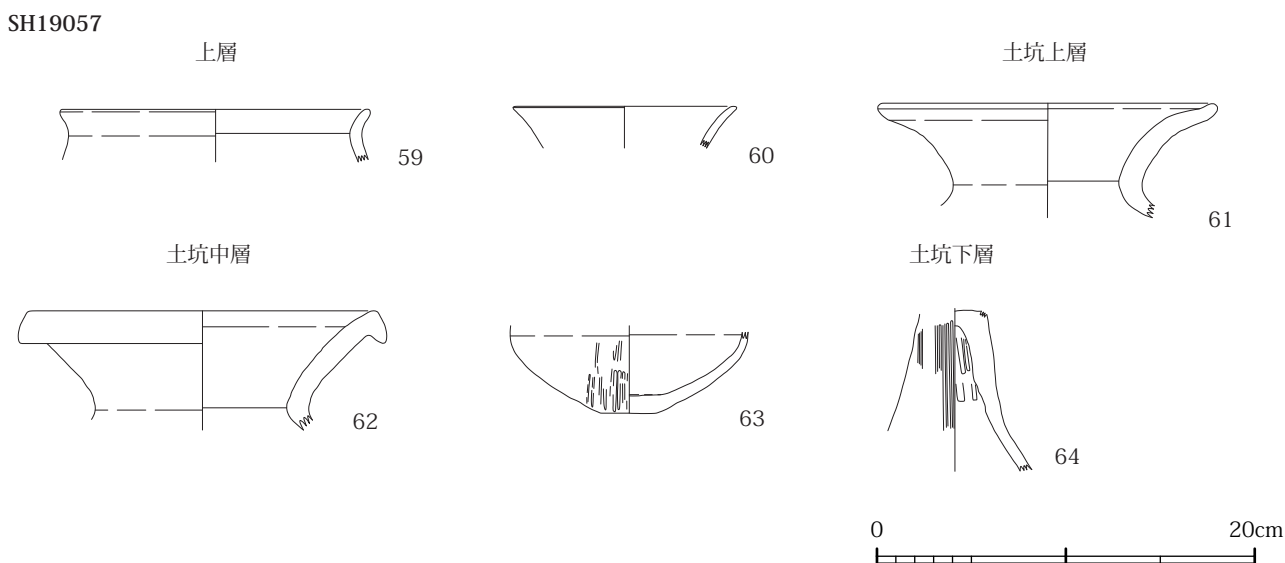


Fig.41 SH19057 出土遺物 (S=1/4)



### 【竪穴住居 SH19057 (Fig.39・40)】

区割 TP1～6。

重複 P508→SH19012→SH19057→SD19023, SX19056。

平面・規模 北西・南西コーナーの検出には至らなかったため、東西方向及び床面積等の規模は不明である。また、北辺を基準にすると、南辺がやや不整で外側に開く。南辺東部における計測では、南北方向は約6.2mになり、主軸はN-43°-E方向を向く。後世の遺構や攪乱によって削平されている箇所が多い。

壁・周壁溝 北東・南東コーナーを検出したが、西辺は未検出である。検出面から床面までの深さは北壁で0.07m、南壁で0.04mと浅い。周壁溝は0.1～0.3mを測り、床面からの深さは0.05～0.1mを計測する。

貼床 床面のほぼ全面に確認でき、黒褐色土と地山の混在土が用いられている。貼床の厚さは全体的に0.03～0.04mとほぼ均一である。

支柱穴 SH19057の全形が特定できないため、確実には言えない。北東部支柱穴のP518を確定とすると、それと対になる北西部支柱穴は、北辺及び南辺の傾きに合わせてP534・726の可能性が考えられる。円形状の掘り方で、直径0.15～0.45m、床面からの深さ0.1～0.4mを測る。

土坑 周壁溝南辺と接して存在する。南北1.0mを測り、西半を攪乱されているため、東西方向の全体の規模は不明であるが、0.58mを検出した。周壁溝底面から0.43m掘り込まれる。南部はややテラス状に段掘りされ、この箇所の周壁溝底面からの深さは0.06mを測る。

屋外溝 周壁溝南辺が土坑と繋がった後、やや南方向へ軸を変えて屋外へ延びる様相を確認した。攪乱の影響で周壁溝の土坑以西の状況は不明であるが、屋外溝が付帯する可能性は高いものと考えられる。屋外溝の幅は0.15mを測り、周囲の検出面からの深さは0.08mである。SH19057屋外の南西方向へ1.4m走るが、攪乱によってその延長は確認できない。

火処 付帯なし。

遺物 弥生土器甕(59)・壺(60～63)・高坏(64)が出土した(Fig.41)。

弥生土器甕(59) くの子甕で、内外面をヨコナデ調整される。

弥生土器壺(60～63) 60は非常に薄手に作られ、磨滅のために調整が不明瞭である。61は口縁部端部を丸く収めて面をもたず、口縁部内面には凹みを有する。62は口縁部端部の垂下が強い。63は小型で精緻な作りであり、外面のタテヘラミガキは底部近くにまで及ぶ。体部最大径は下方に位置しよう。

弥生土器高坏(64) 土坑下層からの出土品で、脚部は下方へ向けて強く外反する。

時期・性格 下面には縄文時代のP508やほぼ同時期と見られるSH19012が埋没する。そして、中世のSD19023に先行する。出土遺物はあまり多くないが、廻間I式期の段階に相当するものと考えられる。

### 【竪穴住居 SH19014 (Fig.42・43)】

重複 SH19053→SH19014→ピット(遺物なし)。

平面・規模 東西5.5m、南北5.1mを測り、方形の竪穴住居である。床面積は23.5㎡を計測する。主軸方向はW-2°-Nとほぼ正方位を示す。

壁・周壁溝 検出面から床面までの深さは北・南壁共に0.04mを測る。南辺が一部攪乱される。周壁溝は幅0.2～0.25mを測り、床面からの深さは0.08～0.13mである。壁に沿いながら一周する

貼床 床面のほぼ全面に貼床が施されている状況を確認した。また、西部で一部、地山ブロックを多く含む埋土7が集中的に堆積する状況を観察した。南北1.5m、東西0.7mの範囲内において、床面から0.15m落ち込む様相である。何らかの事情による地山の陥没に対し、厚く貼られている状況が窺われる。SH19014床面には黒褐色土と地山の混入土である埋土7が広く存在し、床面の凹部に合わせて数cm程度貼られたことが分かる。

支柱穴 P366・394(704?)・431・432。直径0.2～0.3m、床面からの深さ0.25～0.48mを測る。全て円形状である。形状及び埋土の様相からP366・394・431・432を支柱穴と考えたが、北西部のP394がやや北方向に外れるため、平面形を意識するとP704が妥当であるかもしれない。P704は直径0.2mを測り、床面から0.42m掘り込まれる。

土坑 南辺中央部やや西寄りの箇所に位置にし、長軸0.9m、短軸0.65mを測る。周壁溝と一体化し、周壁溝底面から0.13m下がる。弥生土器甕・壺・高坏等が比較的まとまって出土している(Fig.45)。

屋外溝 付帯なし。

火処 床面中央部を中心に焼土を3箇所検出した。全て円形状の掘り込みとして遺存する。焼土1・2は直径0.4m、焼土3は直径0.25mを測り、床面からの深さは0.05～0.1mである。何れも僅かな掘り込みと焼土の硬化面を検出した。地床炉の可能性が高いと考えられ、造り替えられたのであろうか。

遺物 弥生土器甕(65～71)・壺(73)・高坏(74)・鉢(72)が出土した(Fig.46)。土坑からの出土品が中心となる。

弥生土器甕(65～71) 65・66・68・69は受け口甕である。65の口縁部端部の立ち上がりは明瞭で、ほぼ直立する。66は口縁部上端に明瞭な面を有し、口縁部

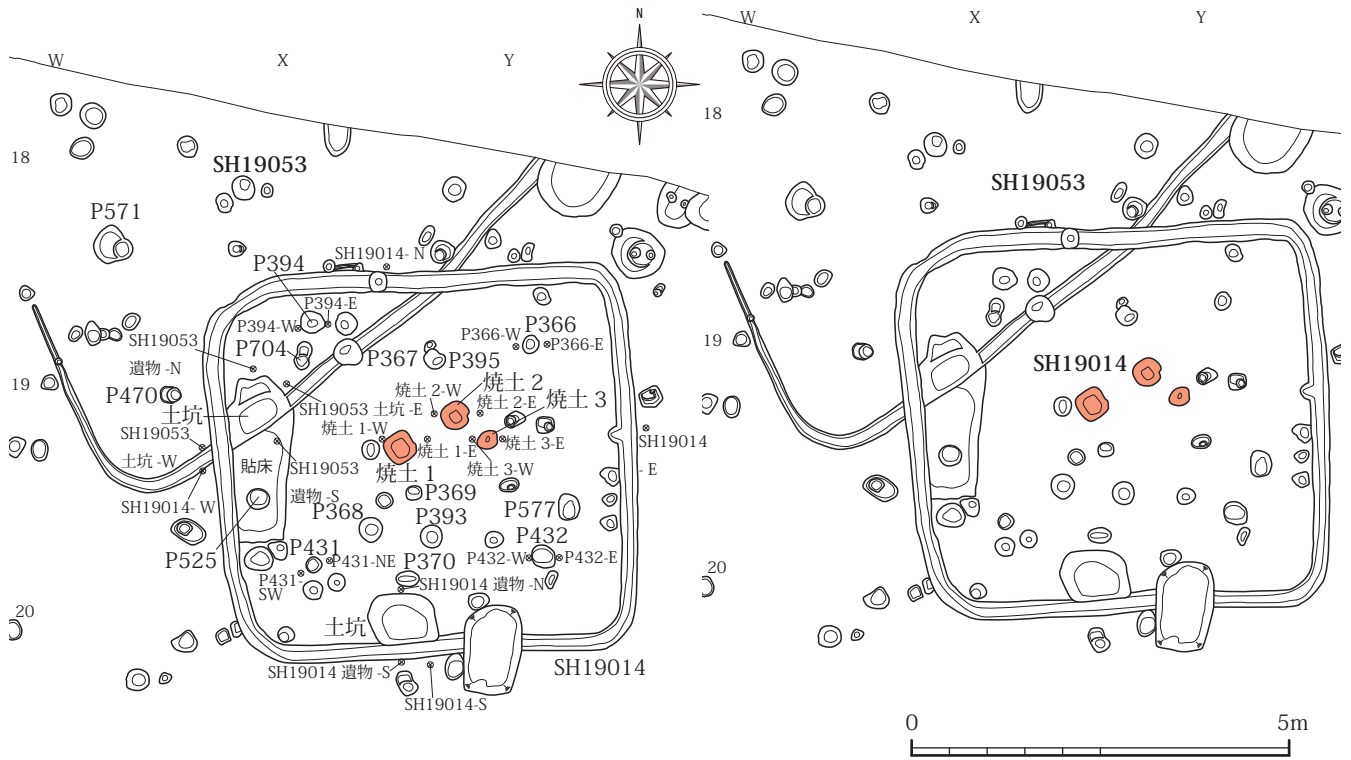
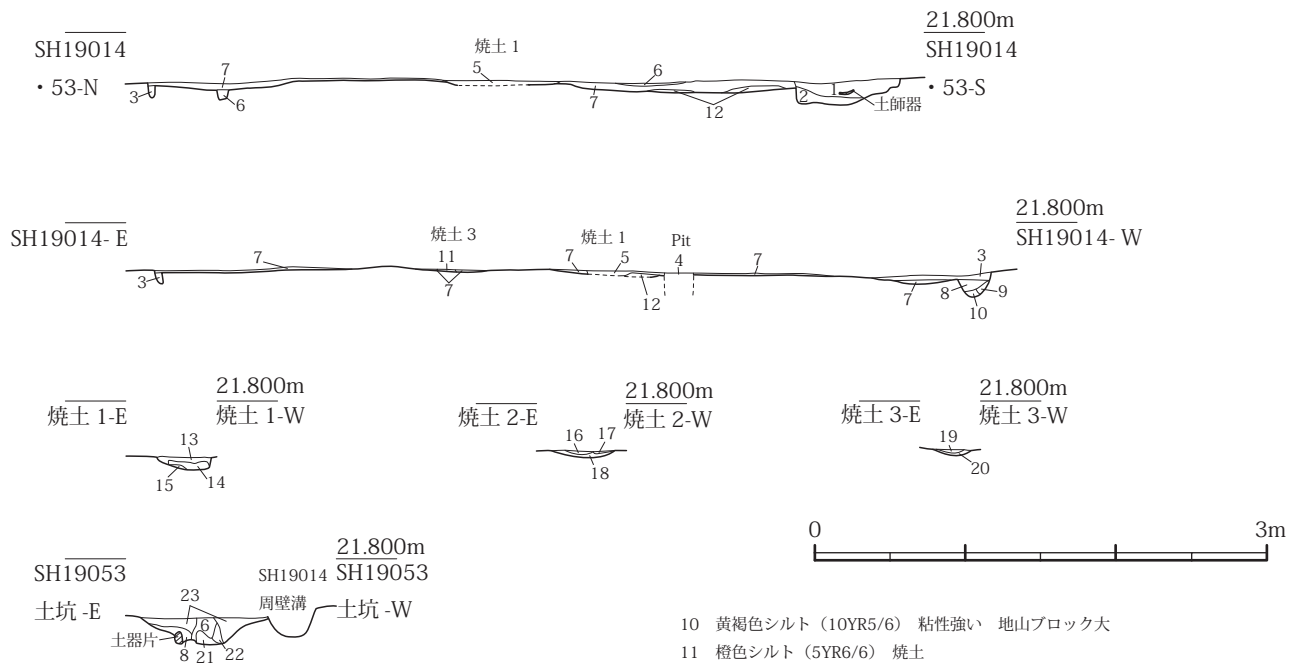


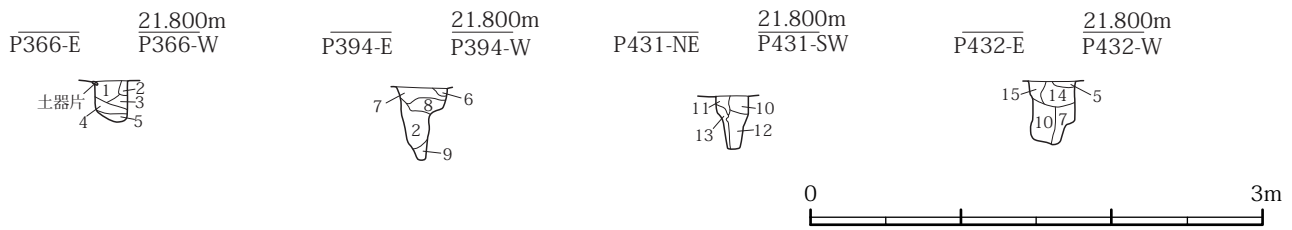
Fig.42 SH19014・53 平面 (S=1/100)



- 1 黒褐色細砂 (10YR2/3) 粘性弱い 地山ブロックを少量含む
- 2 黒褐色細砂 (10YR2/3) 粘性強い 地山ブロックを多量含む
- 3 黒褐色細砂 (10YR2/3) 粘性強い
- 4 黒褐色シルト (10YR2/2) 粘性強い
- 5 黒褐色シルト (10YR2/2) 粘性強い 焼土を多量含む
- 6 黒褐色細砂 (10YR2/3) 粘性弱い
- 7 黒褐色細砂 (10YR2/3) 粘性弱い 地山ブロックを多量含む
- 8 黒褐色細砂 (10YR2/3) 粘性強い 地山ブロックを少量含む
- 9 黒褐色細砂 (10YR3/2) 粘性強い 地山ブロックを少量含む

- 10 黄褐色シルト (10YR5/6) 粘性強い 地山ブロック大
- 11 橙色シルト (5YR6/6) 焼土
- 12 黄褐色シルト (10YR5/6) 粘性強い 地山
- 13 黒褐色細砂 (7.5YR3/1) 硬化 暗褐色細砂 (7.5YR3/4) が混在
- 14 黒褐色細砂 (7.5YR3/1) 硬化 暗褐色細砂 (7.5YR3/3) が混在
- 15 暗褐色細砂 (7.5YR3/3)
- 16 暗褐色細砂 (7.5YR3/4) 硬化 締まり強い
- 17 黒褐色細砂 (7.5YR2/2) 硬化 明褐色細砂 (7.5YR5/6) が混在
- 18 褐色細砂 (7.5YR4/4)
- 19 黒褐色細砂 (7.5YR3/1) 硬化 締まり強い 褐色細砂 (7.5YR4/3) が混在
- 20 褐色細砂 (7.5YR4/3) 硬化 締まり強い
- 21 黒褐色シルト (10YR2/3) 粘性強い
- 22 明黄褐色シルト (10YR6/6) 細砂を含む 粘性強い 地山ブロック大
- 23 黒褐色シルト (10YR2/2) 粘性強い 地山を粒状に包含する

Fig.43 SH19014 土層断面 (S=1/50)



- |   |  |
|---|--|
| <p>1 黒褐色シルト (10YR2/2) 地山ブロック・礫を少量含む</p> <p>2 黒褐色シルト (10YR3/2) 地山ブロックを多量含む 礫を含む</p> <p>3 黒褐色シルト (10YR3/1) 地山が斑状に混じる</p> <p>4 黒褐色シルト (10YR2/3) 粘性弱い 地山ブロックを含む</p> <p>5 黒褐色シルト (10YR2/2) 粘性弱い 地山ブロックを多量含む</p> <p>6 黒褐色細砂 (10YR2/2) 粘性強い 地山ブロックを少量含む</p> <p>7 黒褐色細砂 (10YR2/2) 粘性弱い 地山ブロックを多量含む</p> <p>8 黒褐色シルト (10YR3/1) 地山ブロックを多量含む 礫を少量含む</p> | <p>9 黒褐色シルト (10YR3/2) 細砂を含む 地山ブロックを含む</p> <p>10 黒褐色シルト (10YR2/2) 地山が斑状に混じる</p> <p>11 黒褐色シルト (10YR3/1) 粘性弱い 地山ブロックを多量含む</p> <p>12 黒褐色シルト (10YR2/2) 地山ブロックを多量含む</p> <p>13 黒褐色シルト (10YR3/1) 地山ブロックを多量含む</p> <p>14 黒色シルト (10YR2/1) 粘性弱い 地山が斑状に混じる 礫を少量含む</p> <p>15 黒褐色シルト (10YR3/2) 地山が斑状に混じる 礫を少量含む</p> |
|---|--|

Fig.44 SH19053 土層断面 (S=1/50)

端部はやや内側へ突出する。口縁部外面は被熱によって黒変している。68・69は薄手に作られ、68の口縁部端部の立ち上がりは弱く、僅かに内湾傾向を示す。69は口縁部外面に刺突文が施文され、口縁部端部の立ち上がりはやや外反する。67は台部で底部端部を丸く収める。外面はタテハケ調整が行われる。70は小型の甕で、体部は緩やかな丸みを帯びる。71はくの字甕で、内外面のハケ調整は磨滅のために不鮮明である。

**弥生土器壺 (73)** 底部の完形資料で、底面中央部がドーナツ状に上げ底される。

**弥生土器高坏 (74)** 外面にはタテヘラミガキ調整が観察でき、ハの字状に開脚する。

**弥生土器鉢 (72)** 小型で頸部の屈曲は弱い。口径が体部最大径を凌駕する。口縁部端部はやや内湾する。

**時期・性格** 古墳時代初頭のSH19053に後出するが、出土遺物を見ると時期差は大きくないものと考えられる。同じく同時期に比定できるSH19015との距離は2.8mと比較的近接する。

**【竪穴住居 SH19053 (Fig.42・44)】**

**重複** SH19053 → SH19014, P367・559, ピット (遺物なし)。

**平面・規模** 南西コーナーと西・南辺の一部のみを検出した程度で、全体の規模は不明である。東部は既存建物によって攪乱されるため、広がりは特定できない。方形の竪穴住居であると思われる、主軸方向は概ねW-24°-Nを向こう。検出範囲は東西7.0m、南北3.0mと東西方向に長大である。

**壁・周壁溝** SH19014によって削平されており、壁立ちはなく、周壁溝のみの確認に留まる。周壁溝は幅0.07～0.2m、床面からの深さ0.05mを測る。南辺の大部分はSH19014床面で埋没する。

**貼床** 付帯なし。

支柱穴 周壁溝内部で複数基のピットを検出したが、SH19053の規模及び範囲が不明であるため、不確定である。P470が南西部支柱穴になるか。P470は直径0.2mの円形状を呈し、床面からの深さは0.35mを測る。土坑 南辺西部に所在する。SH19014によって西部を削平されているため、検出範囲は東西0.8m、南北0.75mである。周壁溝と一体化しながら、周壁溝底面から0.12m下がる。弥生土器甕が出土している。

**屋外溝** 付帯なし。

**火処** 付帯なし。

**遺物** 弥生土器甕 (75～77) が出土した (Fig.46)。

**弥生土器甕 (75～77)** 全て台部の完形品である。75は薄手の作りであり、外面にはタテヘラミガキ調整が密に施される。底部端部は内湾する。76・77は底部端部の平坦面が明瞭に認められる。内面天井部が下方へ突出し、粘土を上部から円盤充填させる製作方法が認められる。76の内面はクモの巣状に密にハケ調整される。

**時期・性格** 75は廻間I式期に帰属するものと考えられる。後出するSH19014とはほぼ同時期に位置付けられよう。SH19053を切るP367・559からは時期を特定できる遺物が出ていない。付帯する土坑からは台付甕の台部のみが3個体、重なり合うように出土している点が特徴的である (Fig.47)。台部以外の出土はなく、非常に興味深い。

**【竪穴住居 SH19015 (Fig.48・50)】**

**区割** 北西～南東。

**重複** P412・438・570 → SH19015 → P330・342・406～408 (SB19095)・474・537。

**平面・規模** 南北5.5mを測る。東辺の大部分を攪乱されているため不明であるが、東西方向は6.2mまで広がり、床面積は29.6㎡程度になると推測される。主軸はW-37°-N方向に向ける。

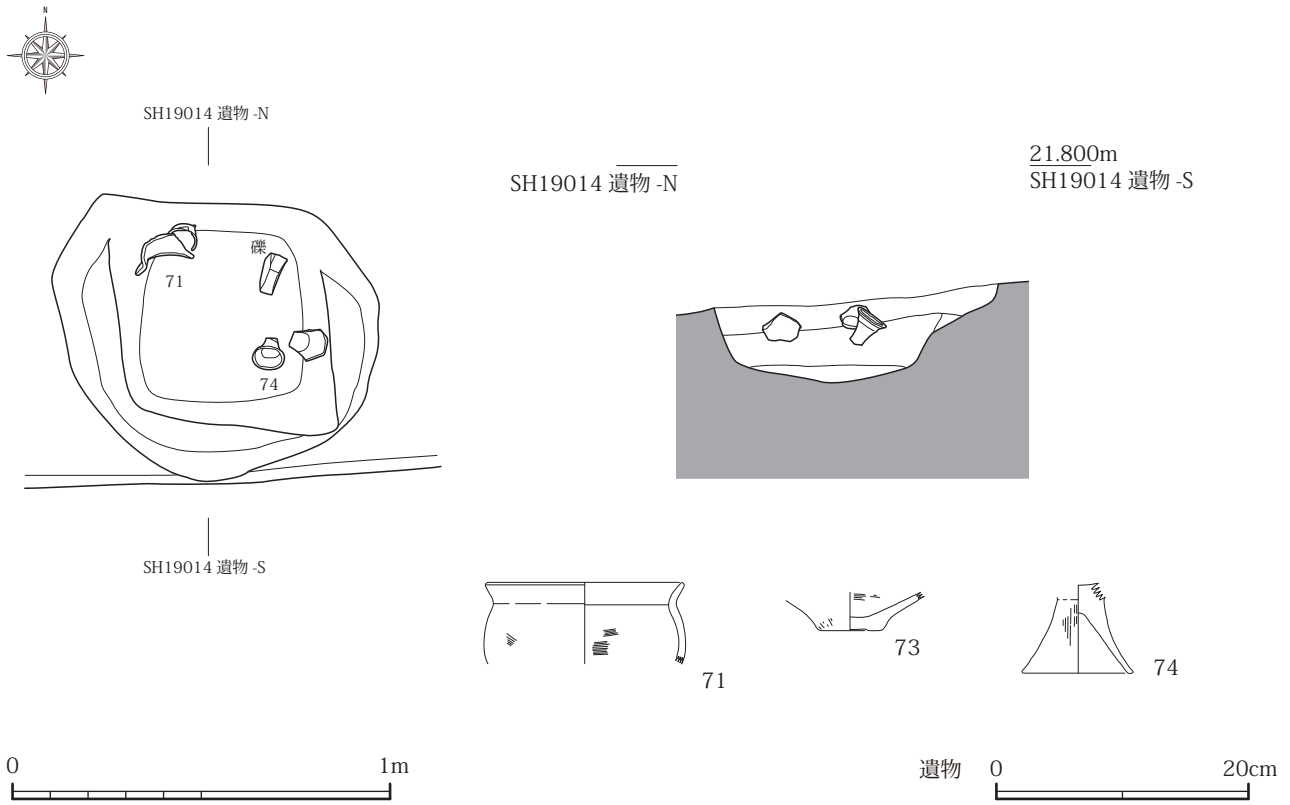


Fig.45 SH19014 遺物出土狀況 (S=1/20 遺物 : S=1/6)

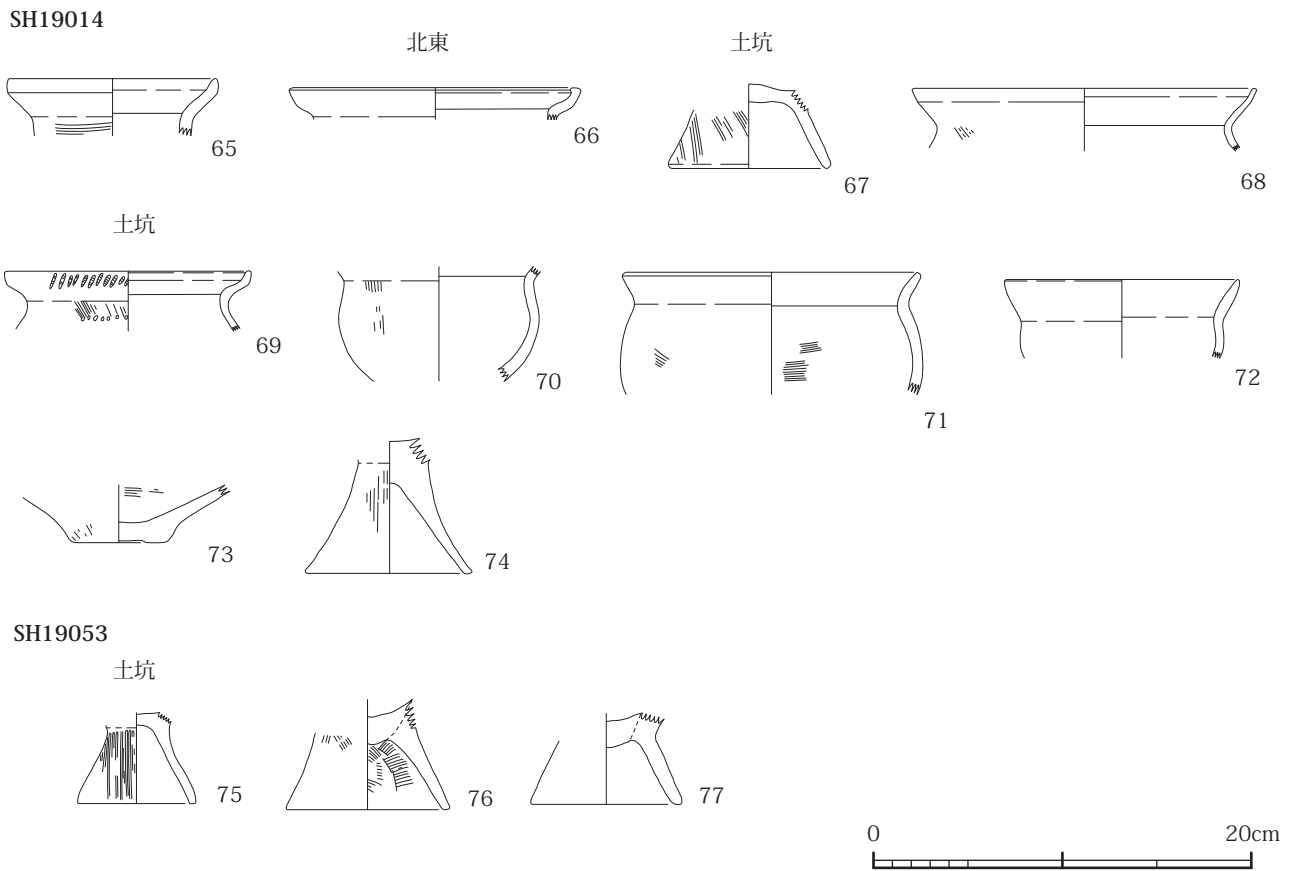


Fig.46 SH19014・53 出土遺物 (S=1/4)



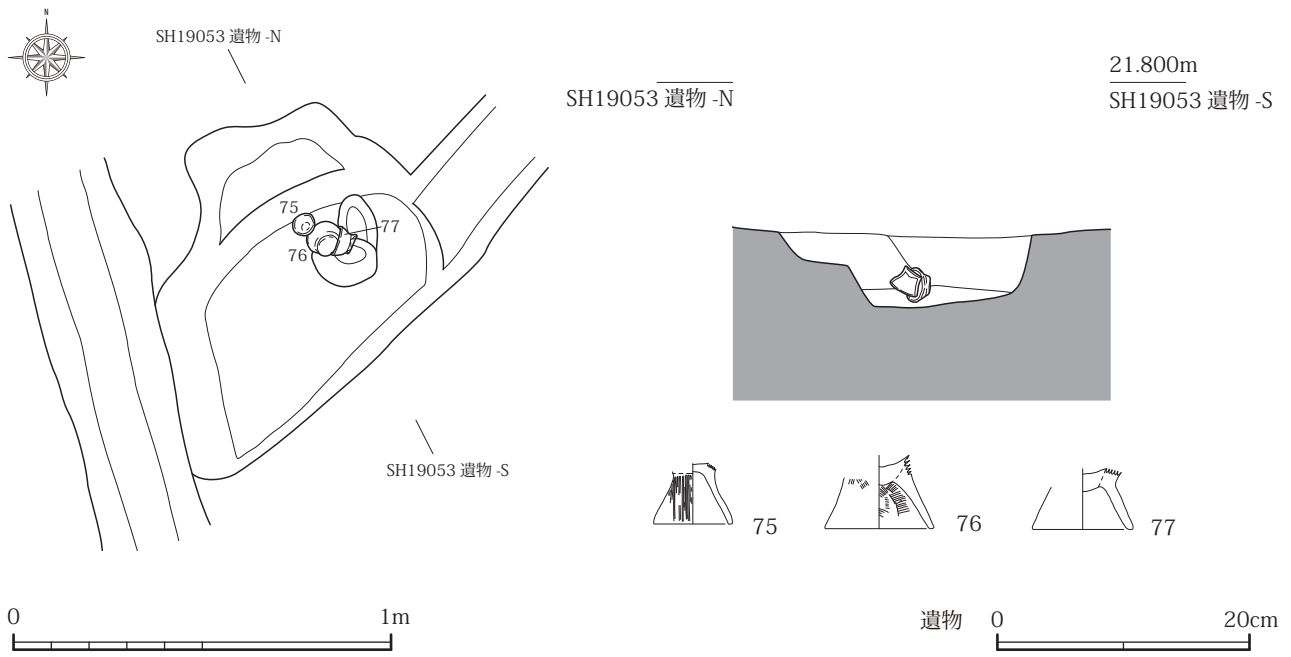


Fig.47 SH19053 遺物出土狀況 (S=1/20 遺物 : S=1/6)

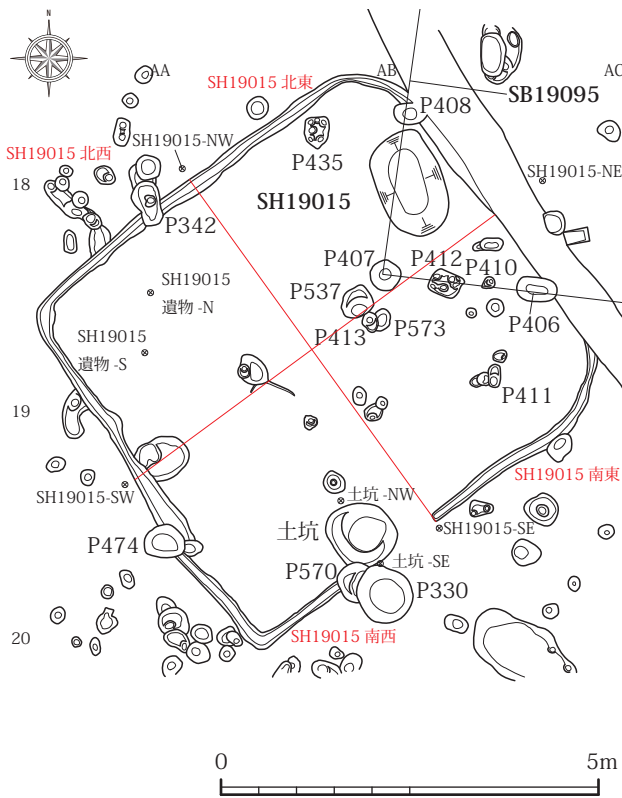


Fig.48 SH19015 平面 (S=1/100)

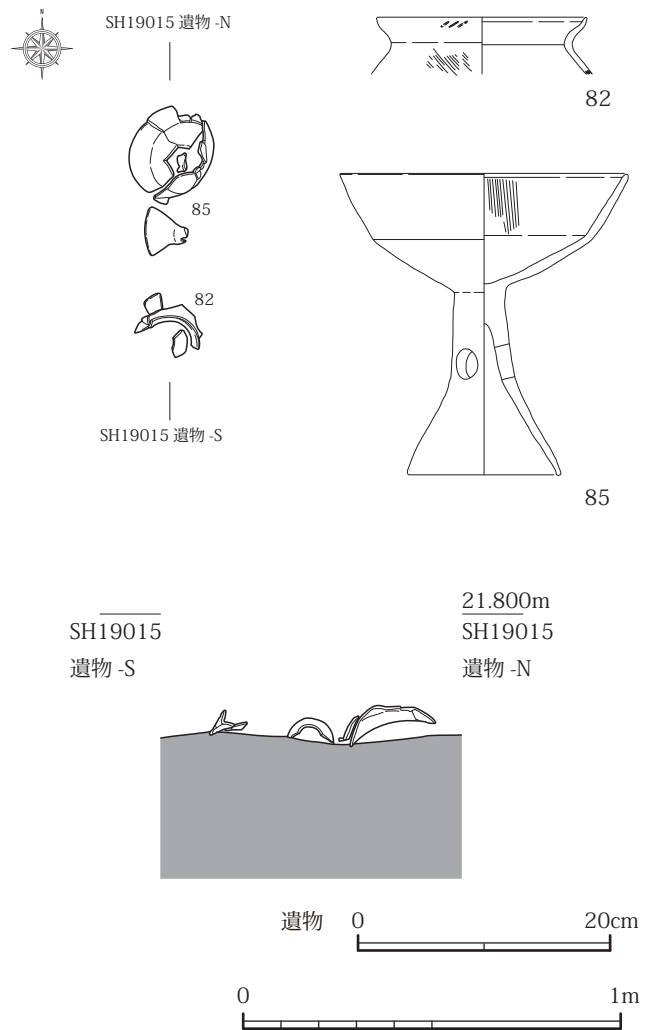
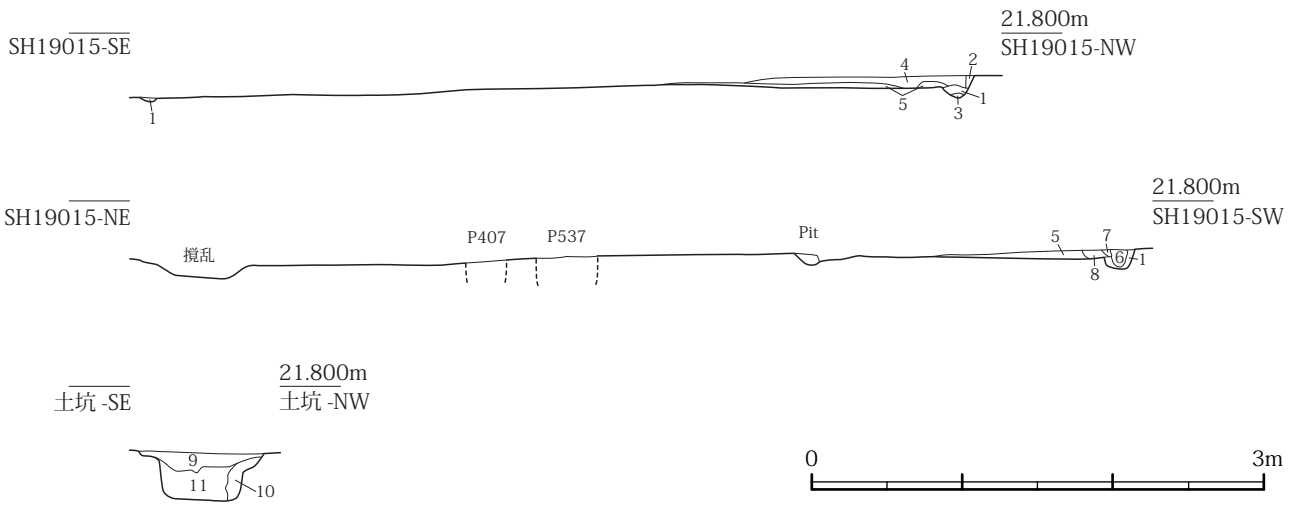


Fig.49 SH19015 遺物出土狀況 (S=1/20 遺物 : S=1/6)



- |   |   |
|---|---|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>1 黒褐色シルト (10YR2/1) 炭化物・地山ブロックを少量含む</li> <li>2 黒褐色細砂 (10YR2/3) 粘性強い 地山ブロックを多量含む 礫を含む</li> <li>3 黒褐色細砂 (10YR2/3)</li> <li>4 黒褐色シルト (10YR2/2) 地山ブロック・礫を含む</li> <li>5 黒褐色細砂 (10YR2/2) 粘性強い 地山ブロック・礫を多量含む 炭化物を含む</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>6 黒褐色細砂 (10YR2/2) 粘性強い 地山が班状に混じる</li> <li>7 黒褐色シルト (10YR2/2) 地山が班状に多く混じる 礫を含む</li> <li>8 黒色シルト (10YR2/1) 炭化物・地山ブロック・礫を含む</li> <li>9 黒褐色シルト (10YR2/2) 地山が班状に混じる 直径0.5cmの礫を含む</li> <li>10 黒褐色シルト (10YR2/3) 地山が班状に多量混じる 直径0.5cmの礫を含む</li> <li>11 黒褐色シルト (10YR2/2) 地山が班状に混じる 直径0.5cmの礫を多量含む</li> </ul> |
|---|---|

Fig.50 SH19015 土層断面 (S=1/50)

SH19015

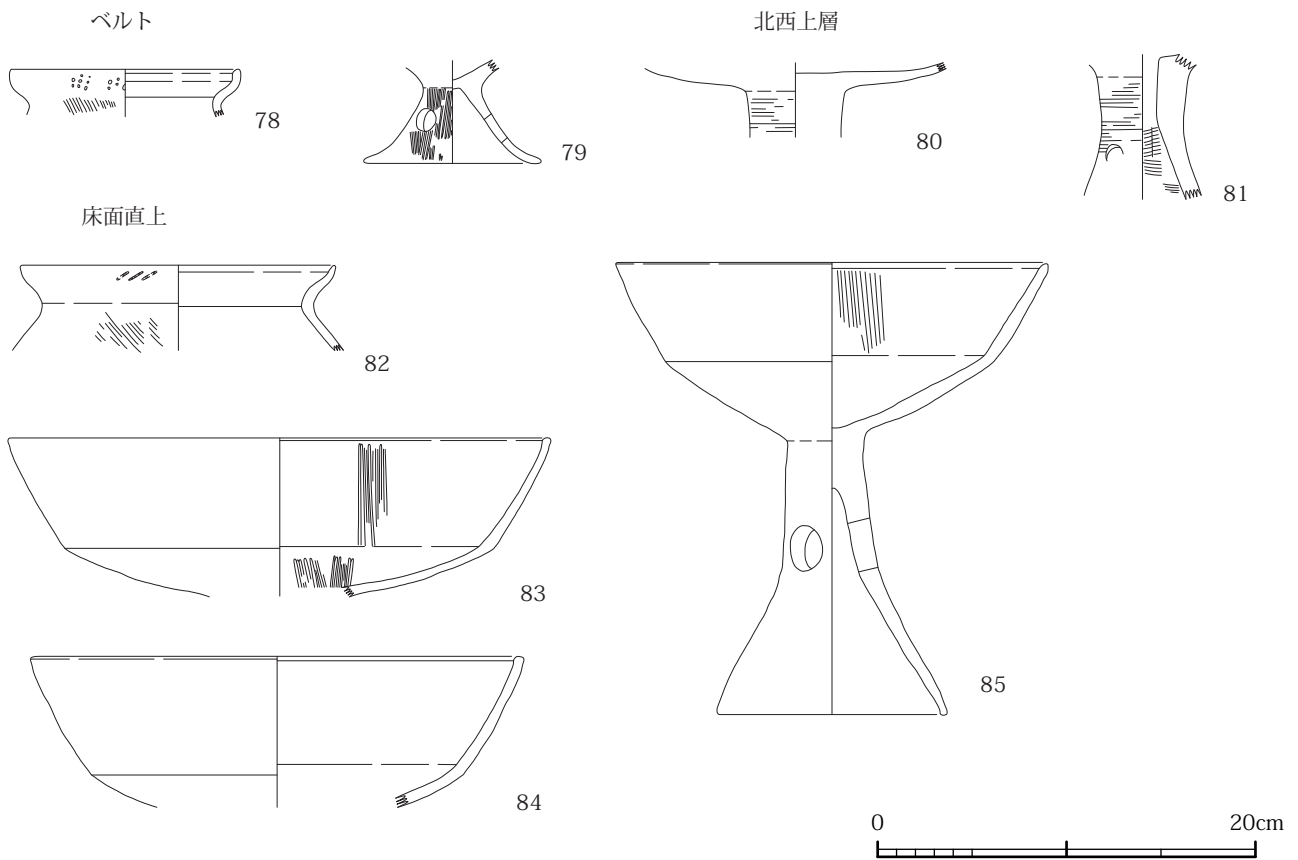


Fig.51 SH19015 出土遺物 (S=1/4)

**壁・周壁溝** 検出面から床面までの深さは北壁で0.05 m, 南壁で0.02 mを測る。周壁溝は南辺中央部付近で薄く途切れ, 西辺のP474重複部付近でやや不整となる。周壁溝の幅は0.15～0.3 m, 床面からの深さは0.03～0.1 mを計測する。

**貼床** 床面の全面に貼床を検出した。貼床には黒褐色土と地山の混入土が用いられ, 粘質性が非常に高い。当該混入土が床面全面に厚く, 染み状に広がる様相を呈したため, 竪穴住居の内部施設の検出には大変難航した。その厚さは南部で0.08 mであるのに対し, 北部では0.12～0.15 cmとやや厚い。他の竪穴住居に比べて厚く施される点に特徴がある。

**支柱穴** P411。北東部支柱穴は攪乱によって失しているものと見られる。床面を幾度に亘って慎重に検出したものの, 西部の支柱穴の確認には至らなかった。P411は長軸0.3 m, 短軸0.15 mの楕円形状で, 床面から0.12 m掘り込まれる。

**土坑** 南辺中央部やや西寄りの位置にあり, 長軸0.9 m, 短軸0.8 mの円形状を呈する。周壁溝と繋がって一体となるものと見られる。西部が段掘りされており, 中段となるテラス状の箇所は周壁溝底面より0.05 m低く, 土坑底面はそこから更に0.25 m掘り込まれる。

**屋外溝** 付帯なし。

**火処** 付帯なし。

**遺物** 弥生土器甕(78・82)・高坏(79～81・83～85)が出土した(Fig.51)。

**弥生土器甕(78・82)** 共に受け口甕で, 口縁部外面には刺突文が施文される。78の口縁部端部の立ち上がりは直立し, 口縁部上端には内傾面を有する。頸部外面には一部煤が付着する。82の口縁部端部の立ち上がりは長く, 緩やかに外方へ開く。

**弥生土器高坏(79～81・83～85)** 79は椀形高坏の脚部で, 3方に円孔が穿かれる。脚部はハの字状に大きく外反し, 外面は密にタテヘラミガキ調整される。80・81は外面に櫛描直線文が施され, 坏部との接合部は円盤充填される。81は底部端部へ向けて内湾傾向である。83～85は有稜高坏で, 稜が僅かに観察できる。84は胎土に直径0.3～0.5 cmの礫を包含する。85はほぼ完形に復元された。坏部上段は直線的に外反し, 内面にはタテヘラミガキ調整が見受けられる。脚部は円形透孔を3方向有し, 底部端部は内湾する。

**時期・性格** 縄文時代のP412・438・570に後出し, 古代のP342・SB19095に先行する。他の重複遺構からは時期を掴める遺物の出土はなかった。北西部の床面直上からは, 弥生土器甕・高坏が良好に出土し, 時期決定の決め手となった(Fig.49)。82～85は古墳時代初頭

の廻間I式1段階に帰属する。

**【竪穴住居SH19018 (Fig.52～54)】**

**区割** TP1～4。

**重複** SK19120, P649・662・681・687→SH19018→SX19017, SK19126, P675・677・682・690・692。

**平面・規模** 東西5.8 m, 南北5.3 mを測り, 方形の竪穴住居である。床面積は26.0 m<sup>2</sup>を計測する。主軸方向はW-30°-Nである。

**壁・周壁溝** 検出面から床面までの深さは北壁で0.02 m, 南壁で0.06 mを測る。周壁溝は幅0.2 m, 床面からの深さ0.05～0.1 mを計測する。北辺の一部がSX19017・P682に切られるが, 本来は壁沿いを一周するものと思われる。

**貼床** 床面の全面に貼られる。黒褐色土と地山を混入された粘質土を貼床としている。なお, 床面北東部のSK19125及び南東部のSX19121については, 土坑状の落ち込みに対し, 黒褐色土と地山の混入土が単層で堆積しており, SH19014と同様, 貼床の痕跡であると考えられる。SK19125は長軸0.9 m, 短軸0.5 mを測り, 床面からの深さは0.05 mを計測する。SX19121はSK19125より広範で, 長軸2.5 m, 短軸1.0 mの不整形形状を呈し, 床面から0.12 m下がる。共に何らかの事情で生じた床面の落ち込みを解消する意図が考えられる。

**支柱穴** 床面には非常に多数のピットが存在するため, 大変茫漠としている。調査時点においては, 支柱穴候補として複数基のピットの記録を取ったが, 何れも見当が外れている可能性がある。竪穴住居の平面形を意識すると, やや位置を外すものもあるが, P644・648・684・705が支柱穴となる可能性が高いと判断される。これらのピットは全て円形で, 直径0.2～0.4 m, 床面からの深さ0.08～0.23 mを測る。

**土坑** 他の竪穴住居と同様, 南辺のほぼ中央部に落ち込みを確認した。但し, 本来の土坑の形は東部のみ残し, 多数の掘り込みがピット状に重なり合う状況を検出した。掘り込みに対してはそれぞれピット番号を付与し, P666～674としたが, 東西・南北共に1.4 m程度の範囲内において, これらが重複しながら連なる。最も深い土坑中央部のP667は, 周壁溝底面から0.3 m下がる。

**屋外溝** 付帯なし。

**火処** 床面中央部は後出するSK19126で攪乱されているため不明であるが, 西部に焼土を2箇所確認した。共に楕円形状の掘り込みが認められ, 床面から0.02 mと僅かに下がる。焼土1は長軸0.6 m, 短軸0.4 m, 焼土2は長軸0.55 m, 短軸0.2 mを測る。焼土1は焼土が

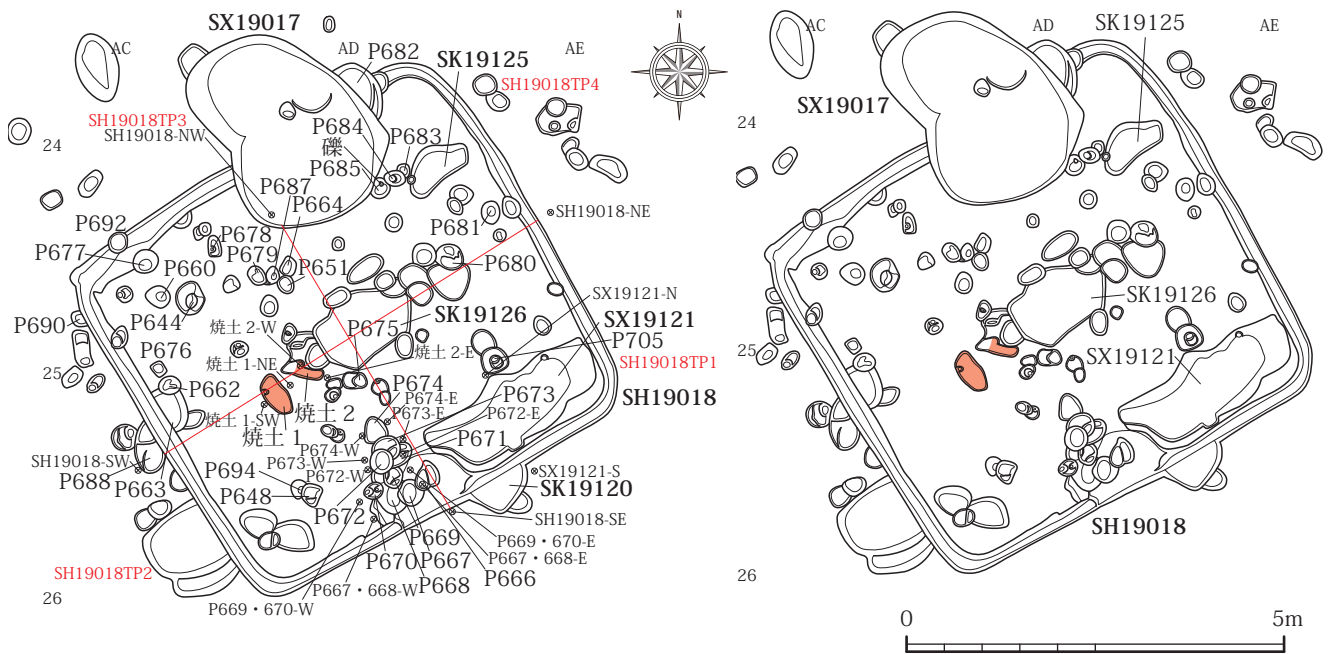


Fig.52 SH19018 平面 (S=1/100)

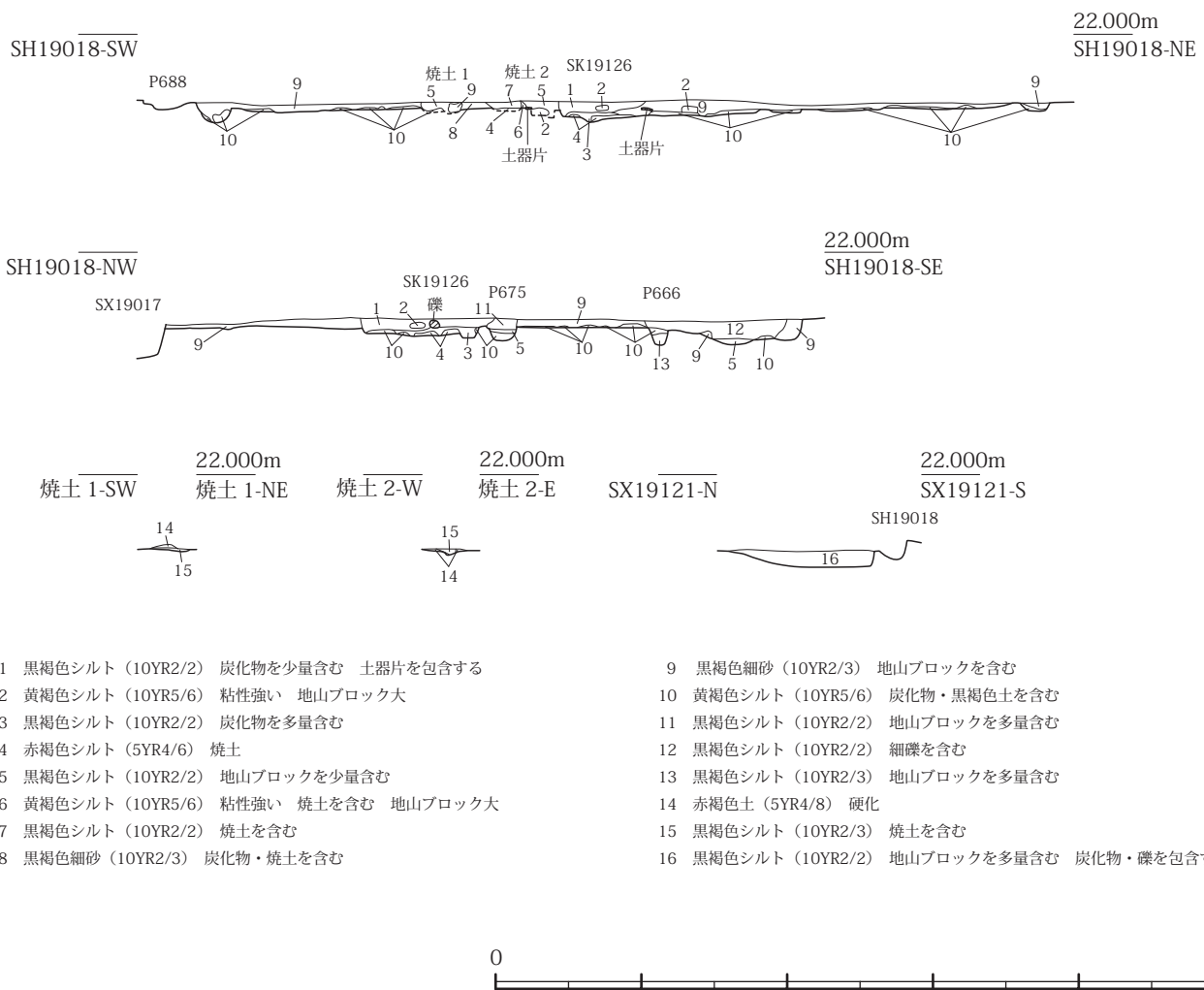


Fig.53 SH19018 土層断面 1 (S=1/50)

- 1 黒褐色シルト (10YR2/2) 炭化物を少量含む 土器片を包含する
- 2 黄褐色シルト (10YR5/6) 粘性強い 地山ブロック大
- 3 黒褐色シルト (10YR2/2) 炭化物を多量含む
- 4 赤褐色シルト (5YR4/6) 焼土
- 5 黒褐色シルト (10YR2/2) 地山ブロックを少量含む
- 6 黄褐色シルト (10YR5/6) 粘性強い 焼土を含む 地山ブロック大
- 7 黒褐色シルト (10YR2/2) 焼土を含む
- 8 黒褐色細砂 (10YR2/3) 炭化物・焼土を含む

- 9 黒褐色細砂 (10YR2/3) 地山ブロックを含む
- 10 黄褐色シルト (10YR5/6) 炭化物・黒褐色土を含む
- 11 黒褐色シルト (10YR2/2) 地山ブロックを多量含む
- 12 黒褐色シルト (10YR2/2) 細礫を含む
- 13 黒褐色シルト (10YR2/3) 地山ブロックを多量含む
- 14 赤褐色土 (5YR4/8) 硬化
- 15 黒褐色シルト (10YR2/3) 焼土を含む
- 16 黒褐色シルト (10YR2/2) 地山ブロックを多量含む 炭化物・礫を包含する



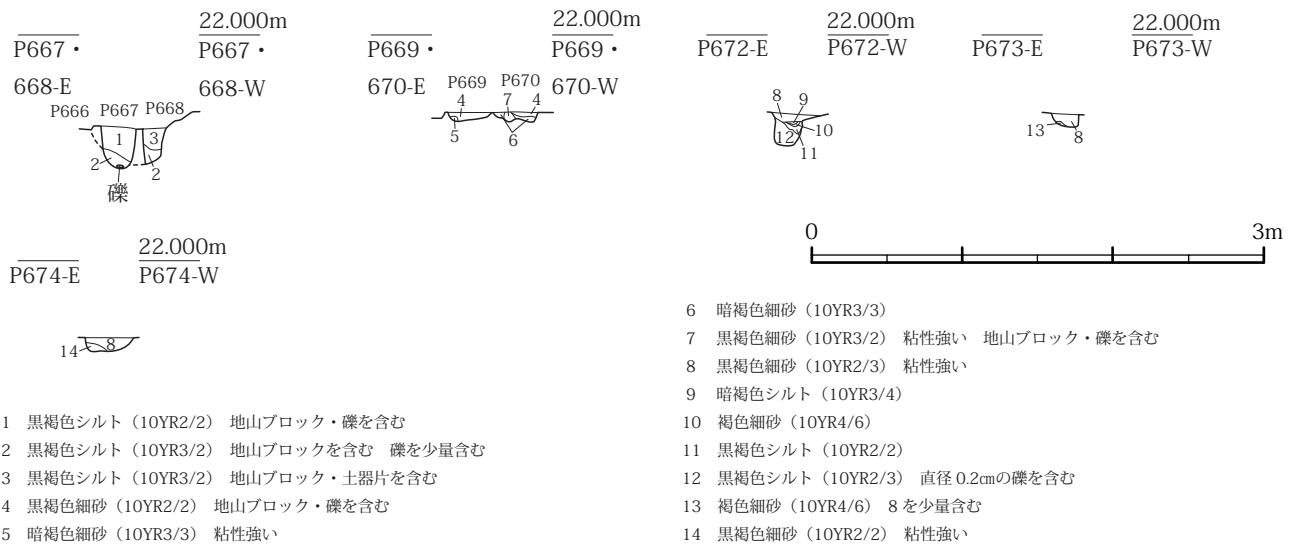


Fig.54 SH19018 土層断面 2 (S=1/50)

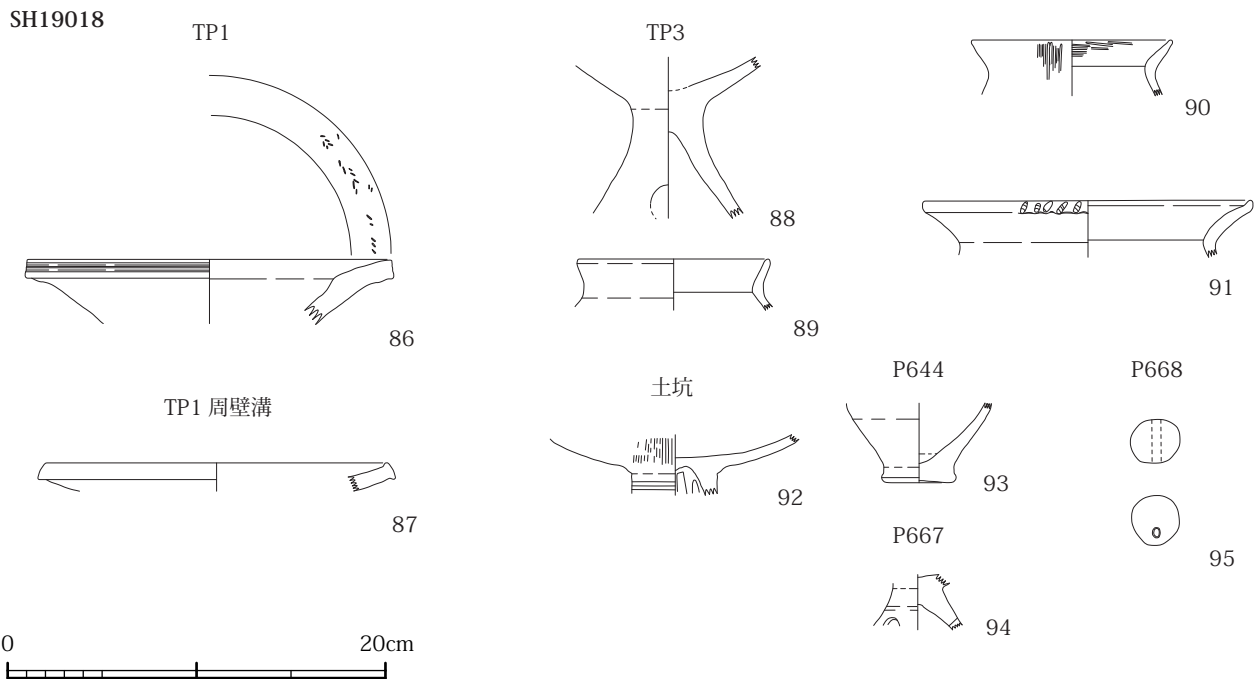


Fig.55 SH19018 出土遺物 (S=1/4)

硬化面として床面から0.02 m盛り上がった状態で検出された。地床炉であると考えられる。

**遺物** 弥生土器甕(89～91)・壺(86・87・93)・高坏(88・92・94), 土錘(95)が出土した(Fig.55)。

**弥生土器甕(89～91)** 全てくの字甕で、頸部の屈曲が強い。89の口縁部端部は内湾傾向を示す。90は小型土器である。内外面を丁寧にヘラミガキされ、精緻な作りである。91は口縁部端部を上方へ摘み上げ、口縁部外端面には刺突文が施される。刺突文の影響で、口縁部外端面下部が波状を呈する。

**弥生土器壺(86・87・93)** 86は口縁部外端面が明瞭で、

擬凹線文が2条施される。口縁部内端面は2条の刺突羽状文で装飾される。87は口縁部端部が肥厚し、僅かに垂下する。口縁部外端面に施文された凹線文は磨滅のために痕跡を残すのみである。93は小型の壺で僅かに上げ底される。磨滅によって、外面のタテヘラミガキ調整は不明瞭である。

**弥生土器高坏(88・92・94)** 88・84はハの字状に開脚し、88は1方、94は3方に円形透孔が穿孔される。88は底部端部に向けて内湾指向である。94は脚部の開きが早い。92は脚部外面に櫛描直線文が3条以上施され、坏部外面のタテヘラミガキ調整は磨滅している。

土錘 (95) 球形状を呈し、完形資料である。直径 0.4 cm の円孔が貫通し、その断面は直線的である。穿孔位置は中心からやや外れる。

時期・性格 縄文時代の P649・662・681・687 に後出し、古代の SX19017 に先行する。他の重複遺構については、時期の絞り込みに繋がる遺物の出土はない。88・89 は廻間 I 式期の所産であると考えられる、また、91 は山中式後期からの系譜で、廻間 I 式 1 ~ 2 段階で終焉する資料である。

#### 【竪穴住居 SH19034 (Fig.56・57)】

重複 SH19034 = SK19033, SH19034 → SD19009, P20 (SB19084)・P129。

平面・規模 東西 5.5 m を測り、主軸方向は W-23° -N を示す。南半が完全に削平されているため、全体の規模は不明である。

壁・周壁溝 後世に整地された影響で、竪穴住居の壁立ちは見受けられない。周壁溝は北東コーナーのみ明瞭に遺存しているが、北西コーナーはやや不整で曲がり早い。北辺は北西コーナー付近で部分的に途切れる。周壁溝の幅は 0.15 ~ 0.3 m、床面からの深さは 0.12 m を計測する。

貼床 付帯なし。

主柱穴 P31・719。直径 0.25 ~ 0.45 m、床面からの深さは 0.16 ~ 0.36 m を測る。共に円形状である。P31 の底面には直径 0.2 m の礫が埋没する。SH19034 は南半が削平されているため、南部主柱穴は特定できない。位置関係及び深さから、P24・192 が候補として挙がるが、P192 からは古代の土師器甕 (341) が出土しているため、適当ではない。

土坑 西辺中央部やや北寄りの位置には、SK19033 が存在し、埋土色・質からも候補として有力である。長軸 1.9 m、短軸 1.05 m を測り、楕円形状を呈する。SH19034 の周壁溝と繋がって一体化し、周壁溝底面から 0.08 m 下がる。但し、SK19033 は SH19034 屋外の西方向へ広がる。

屋外溝 付帯なし。

火処 付帯なし。

遺物 P179 から弥生土器甕 (98)、SK19033 から弥生土器高坏 (96・97) が出土した (Fig.59)。

弥生土器甕 (98) 胎土には金雲母を多量包含する。非常に薄手に作られ、S 字甕の台部になると思われる。

弥生土器高坏 (96・97) 共に磨滅によって調整は不明瞭である。96 はハの字状に脚部を開き、円孔を 1 箇所のみ残す。天井部内面には僅かな窪みが観察できるが、棒状工具による刺突の痕跡であると考えられる。

時期・性格 古代の SD19009、中世の SB19084 に先行する。98 は S 字甕の台部であるが、96・97 の出土と他の竪穴住居との関係から、概ね廻間 I 式期の段階に比定できる。なお、SK19033 は SH19034 の屋外へ広がるが、例えば SH19057 の土坑から溝が派生して屋外へ延びるように、同様の屋外溝的な機能を有するものと判断される。

#### 【溝 SD19010 (Fig.56・58)】

重複 P754 → SD19010。

平面・規模 幅 0.5 m、検出面からの深さ 0.4 m を測り、断面は逆台形に近い形状を呈する。調査区外西へ延びるため、全長は掴めないが、検出した長さは 7.8 m である。土層観察用に設定したベルト付近で僅かに北方向に湾曲

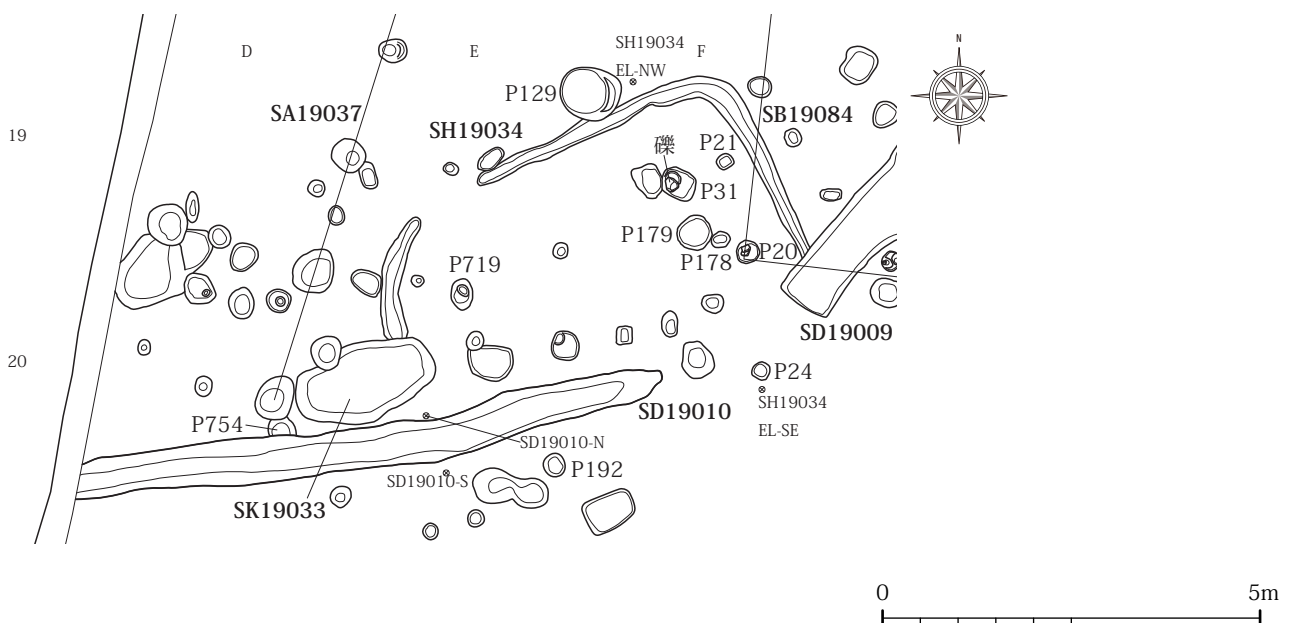


Fig.56 SH19034・SK19033・SD19010 平面 (S=1/100)

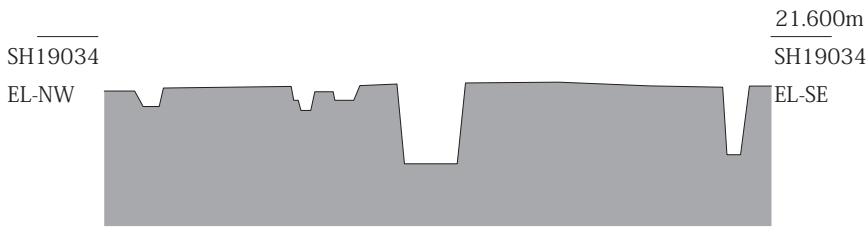
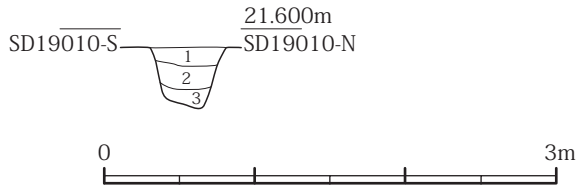


Fig.57 SH19034 断面 (S=1/50)



- 1 黒褐色シルト (10YR2/3) 粘性弱い
- 2 黒褐色シルト (10YR2/3) 地山ブロックを多量含む
- 3 暗褐色シルト (10YR3/3) 細砂を含む

Fig.58 SD19010 土層断面 (S=1/50)

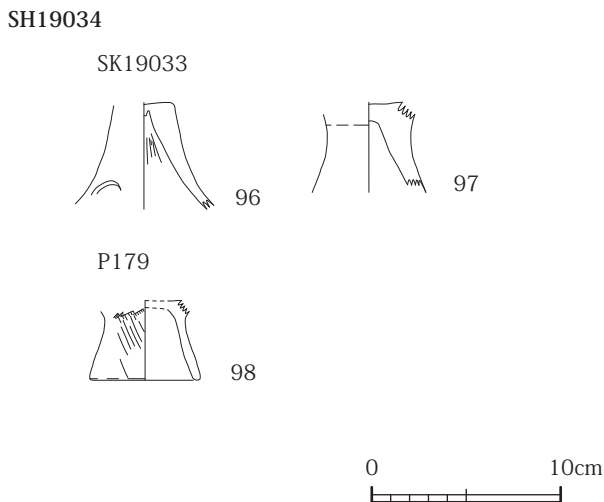


Fig.59 SH19034 出土遺物 (S=1/4)

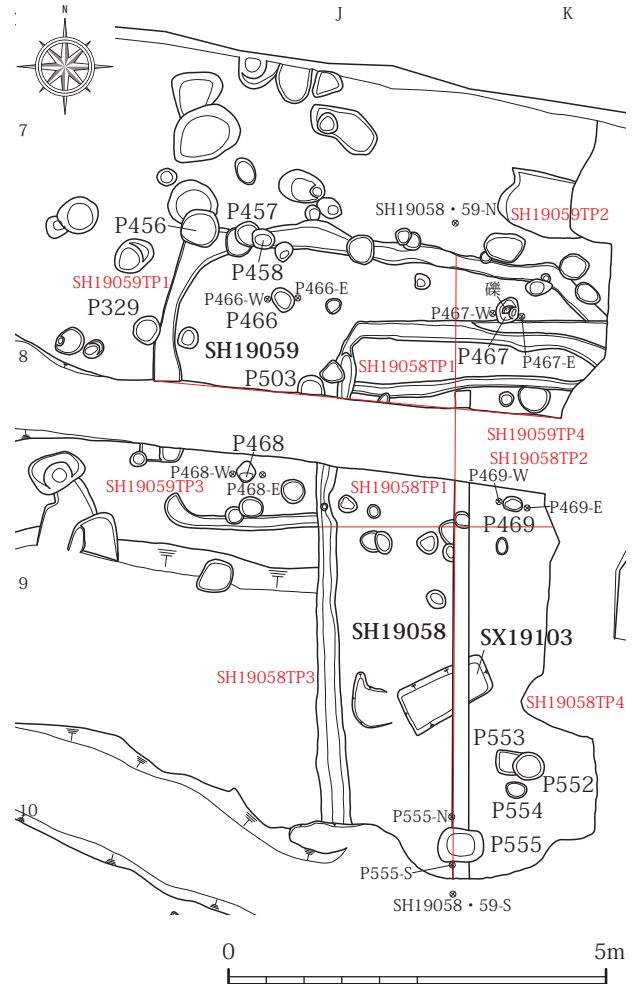


Fig.60 SH19058・59 平面 (S=1/100)

するが、主軸方向は概ね W-10° -N を向けよう。しっかりと掘り方の溝であるものの、東部で忽然と途切れ、以東にはその痕跡を残さない。

**遺物** 弥生土器高坏等の細片資料が出土している程度であり、実測可能なものはなかった。

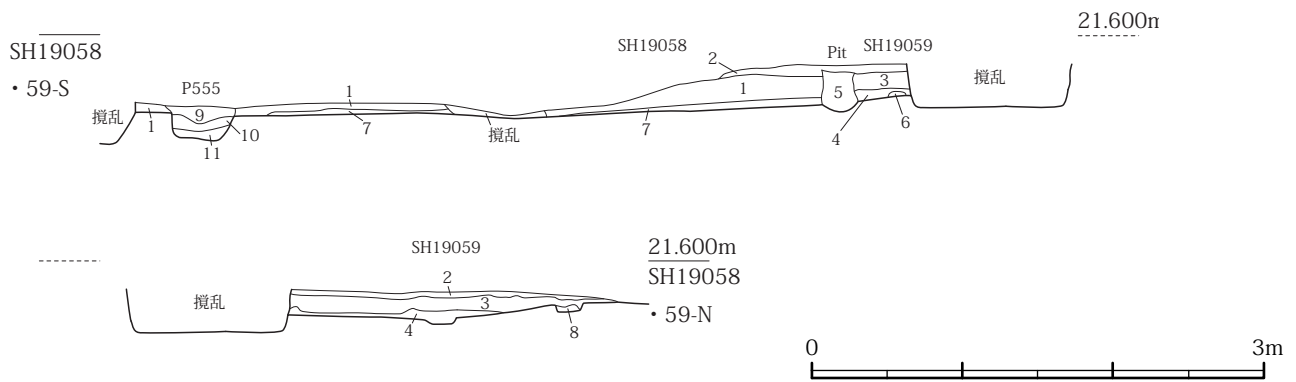
**時期・性格** 出土遺物の特徴から、概ね山中～廻間式の埋没が考えられる。位置的には SH19034 の内部を走ることになるが、新旧・関係性は不明である。なお、先行する P754 から遺物は出土していない。

**【竪穴住居 SH19058 (Fig.60・61)】**

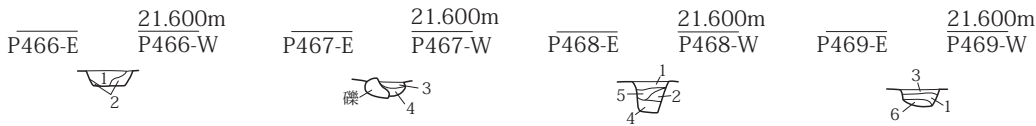
**重複** SH19058 → SH19059, SX19103, P503・555・ピット (遺物なし)。

**平面・規模** 南部及び東部が面的に攪乱されているため、全体の規模は不明である。東西 3.8 m、南北 7.4 m の範囲を検出した。主軸方向は正方位に近く、N-2° -E 程度を示すものと見られる。

**壁・周壁溝** 北部は SH19059 によって埋没し、南部及び東部は削平される。検出面から床面までの深さは西壁で 0.1 m を計測する。周壁溝は北西コーナーのみ遺存している。周壁溝の幅は 0.25 ~ 0.35 m、床面からの深さは 0.05 ~ 0.1 m を測る。検出範囲における北辺東部のみ幅 0.4 ~ 0.5 m とやや幅広に掘削され、テラス状を呈する。床面から中段となるテラス状の箇所までの深さは 0.05 m である。北辺においては、周壁溝を二重に検出



- |  |  |
|--|--|
| 1 暗褐色細砂 (10YR3/3) 地山ブロック・礫を含む          | 7 黒褐色細砂 (10YR4/6) 粘性強い 直径 0.5cmの礫を多量含む |
| 2 灰黄褐色細砂 (10YR5/2)                     | 8 暗褐色細砂 (10YR3/3) 粗砂を包含する              |
| 3 黒褐色細砂 (10YR3/2) 粘性強い 地山ブロック・炭化物・礫を含む | 9 褐色細砂 (10YR4/4) 地山ブロックを多量含む           |
| 4 暗褐色細砂 (10YR3/3) 礫を含む                 | 10 暗褐色細砂 (10YR3/4) 地山ブロックを含む           |
| 5 暗褐色細砂 (10YR3/3) 地山ブロック・炭化物・礫を含む      | 11 黒褐色シルト (10YR2/2) 細砂を含む 地山ブロックを少量含む  |
| 6 褐色細砂 (10YR4/4) 礫を含む                  |  |



- |   |                                 |
|---|---------------------------------|
| 1 暗褐色細砂 (10YR3/3) 粘性強い 地山ブロック・直径 0.4cmの礫を含む | 4 暗褐色細砂 (10YR3/3) 直径 0.5cmの礫を含む |
| 2 黒褐色細砂 (10YR3/2) 地山ブロック・礫を含む               | 5 褐色シルト (10YR4/6) 礫を含む          |
| 3 暗褐色細砂 (10YR3/3) 粘性強い 地山ブロック・炭化物・礫を含む      | 6 黒褐色細砂 (10YR3/2) 直径 0.5cmの礫を含む |

Fig.61 SH19058・59 土層断面 (S=1/50)

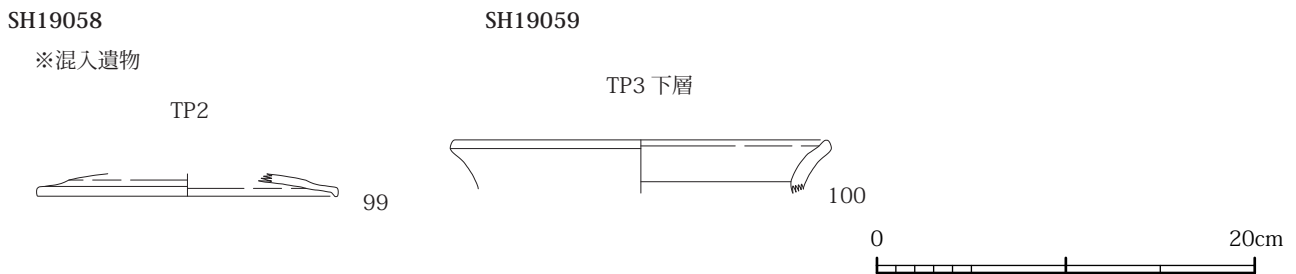


Fig.62 SH19058・59 出土遺物 (S=1/4)

した。内溝は幅 0.15 m、床面からの深さ 0.02 ~ 0.03 mとやや狭く浅い。

**貼床** 付帯なし。

**支柱穴** 床面には複数基のピットを検出したが、何れも床面からの深さ 0.1 m以下と浅く、全体の規模及び範囲が不明であるため、特定には至らなかった。北部が攪乱されるが、北西部支柱穴はこの箇所位置していた可能性も考えられる。

**土坑** 付帯なし。

**屋外溝** 付帯なし。

**火処** 付帯なし。

**遺物** 弥生土器片が出土したが、出土量も少なく、図化の対象となる遺物の出土はない。攪乱の影響と思われるが、須恵器坏蓋 (99) の混入を確認した (Fig.62)。

**須恵器坏蓋 (99)** 天井部及び宝珠摘みが剥落している。扁平な天井部を有するものとみられ、口縁部端部は内側へ強く屈曲する。

**時期・性格** 弥生時代後期～古墳時代初頭頃の SH19059 に切られるが、その他の重複遺構からの有意な情報はない。また、時期の決め手となる出土遺物にも恵まれない。混入品である 99 は猿投窯編年の I25 ~ MN32 窯式の段階に位置付けられ、8 世紀代の年代観である。なお、北辺が二重に回るが、これを同一箇所における竪穴住居の拡張であるとするならば、その拡張範囲は 0.15 m を計測する。SH19058 は内部施設が西壁と周壁溝のみであるが、南北方向が 7.4 m以上に達し、竪穴住居であると仮定すると、大型のものとなる。



### 【竪穴住居 SH19059 (Fig.60・61)】

**重複** SH19058 → SH19059 → P329・456～458・ピット (遺物なし)。

**平面・規模** 南辺及び東辺の大部分が未検出であるため、全形は不明であるが、北辺東部がやや南方向へ湾曲しており、東辺の位置は概ね推測が可能となる。南北 4.0 m とやや小振りであるのに対し、東西方向は 6.0 m 程度に達するものと見られる。床面積 20㎡弱の長形状を呈する竪穴住居になろう。主軸方向は W-8°-S を指す。

**壁・周壁溝** 検出面から床面までの深さは北壁で 0.05 m、西壁で 0.02 m を測る。周壁溝は北西コーナーのみ遺存している。攪乱の影響で東辺を失し、西辺も部分的に削平される。幅 0.2～0.4 m、床面からの深さは 0.03～0.06 m を計測する。本来であれば先行する SH19059 上面に南辺の延長が続くはずであるが、慎重に検出したものの、その確認には至らなかった。

**貼床** 付帯なし。

**主柱穴** P466～469。全て円形状を呈し、直径 0.25～0.3 m とほぼ均一で、床面からの深さ 0.1～0.2 m を測る。北東部主柱穴の P467 のみ、底面に礫が埋没されていた。礫の大きさは直径 0.1 m 程度で、SH19059 床面からの深さは 0.12 m を測る。

**土坑** 付帯なし。

**屋外溝** 付帯なし。

**火処** 付帯なし。

**遺物** 弥生土器甕 (100) が出土した (Fig.62)。

**弥生土器甕 (100)** 受け口甕である。口縁部端部の立ち上がりは緩やかに直立する。磨滅のために文様は剥落しているものと見られる。

**時期・性格** 他の竪穴住居との時期差は大きくないものと考えられるが、出土遺物が限定されるため、帰属時期の詳細を掴むことはできない。概ね弥生時代後期～古墳時代初頭頃の竪穴住居であると考えたい。

### 【竪穴住居 SH19060 (Fig.63・64)】

**重複** SH19061, SK19082 → SH19060 → SD19007・130, SK19105, P109・516・529, ピット (遺物なし)。

**平面・規模** 東西・南北共に 5.7 m を測り、正方形の竪穴住居である。床面積は 28.6㎡を計測する。主軸方向は W-21°-N 方向を向く。

**壁・周壁溝** 検出面から床面までの深さは北壁で 0.1 m を測り、西壁で 0.2 m とやや壁立ちが明瞭である。南西・北東コーナー及び西辺の一部が攪乱されている。南辺は SD19007 によって殆どを失われ、SD19007 南壁にその一部が遺存しているが、P109 に切れ、以東は痕跡を留めない。周壁溝は幅 0.2～0.3 m、床面からの深さ 0.03～0.12 m を測る。本来は壁沿いを全周するものと考え

られる。なお、東辺において、周壁溝を部分的に二重に検出し、内溝が外溝によって切られる状況を確認した。内溝は幅 0.3 m、床面からの深さ 0.1 m を測り、外溝の規模と大差はない。

**貼床** 付帯なし。

**主柱穴** P152・568・727・728。全て円形状を呈し、直径 0.2～0.6 m、床面からの深さ 0.12～0.2 m を測る。形状及び埋土の様相からこれらを主柱穴と考えたが、SH19060 の平面形を意識するとやや歪である。P515 も候補に挙げられよう。P562 は直径 0.2 m を測り、床面から 0.15 m 下がる。

**土坑** 床面南部のやや西寄りに所在し、長軸 0.7 m、短軸 0.6 m を測る円形状の土坑である。周囲を含めた全体が SD19007 によって埋没するが、SH19060 の周壁溝南辺の想定ライン上に位置するものと考えられ、他の竪穴住居に付帯する土坑と同様の形状を示すものと考えられる。床面からの深さは 0.5 m で、部分的に遺存する周壁溝南辺からの深さは 0.45 m を測る。北部はテラス状に段掘りされ、底面から 0.2 m 上がる。

**屋外溝** 付帯なし。

**火処** 付帯なし。

**遺物** 弥生土器甕 (104・106～108・110～112・121・124・126)・壺 (101～103・109・113～120・123)・高坏 (105・122・125・127) が出土した (Fig.66)。なお、TP2 上層には土師器皿 (128) が混入している。また、後出する P516 からは、弥生土器高坏 (129) が出土している。

**弥生土器甕 (104・106～108・110～112・121・124・126)** 104・121 はくの字甕である。頸部の屈曲は弱く、口縁部は端部に向けてやや内湾する。106・107・112・126 は台部で、106・126 は体部との接合部が上方から円盤充填される。107・112 は底部端部に内湾傾向の意匠が観察できる。108 は受け口甕で、口縁部端部の立ち上がりは短く、ほぼ直立する。口縁部端部は内傾面を有する。110・111 はくの字甕で、口縁部端部を丸く収める。124 はミニチュア土器の台部で、非常に薄手で丁寧に作られる。

**弥生土器壺 (101～103・109・113～120・123)**

101 は内外面をヨコナデ調整され、口縁部端部は明瞭に内湾する。102・103・118 は底部で、全て上げ底されるが、103 の上げ底は僅かに観察できる程度である。109 は体部上半と底部を欠く資料であるが、体部最大径は中位になろう。113・120 は小型の壺の底部である。114～116 は全て TP2 上層から出土した口縁部の資料で、114 は口縁部端部がやや垂下して外端面を形成する。115 は薄手の作りで、口縁部は直線的に外反する。117 は小型

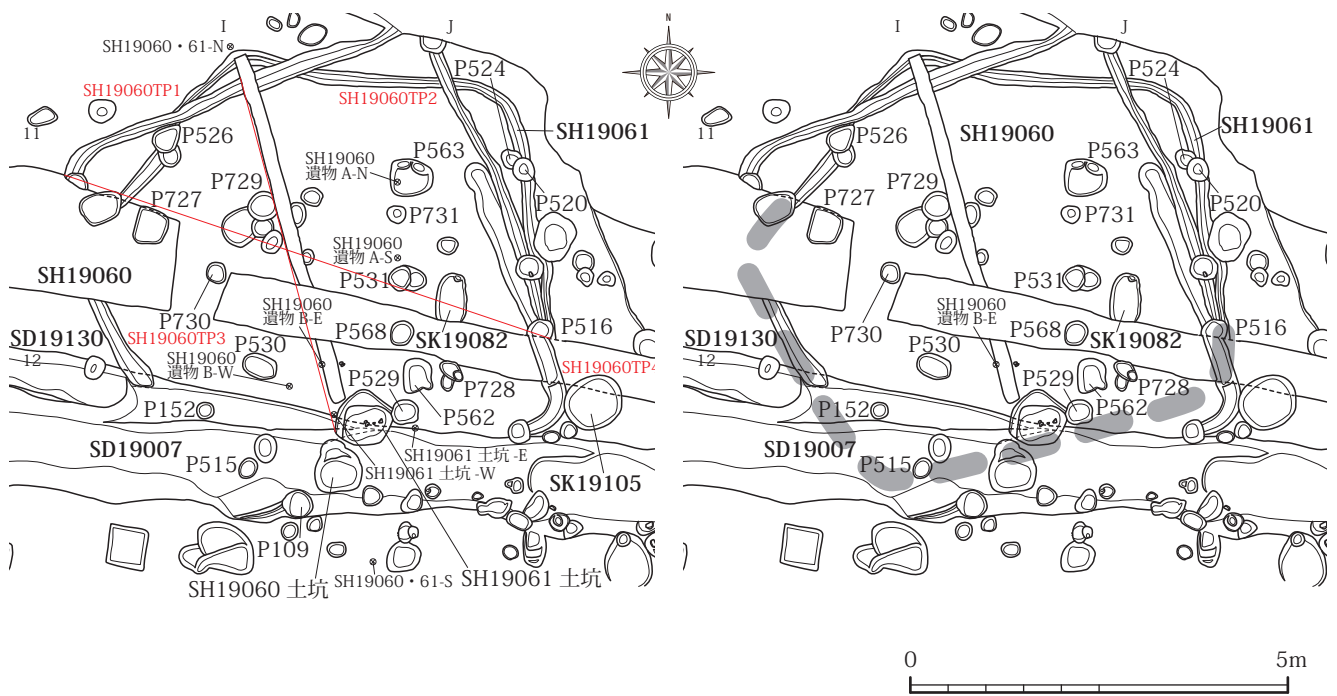
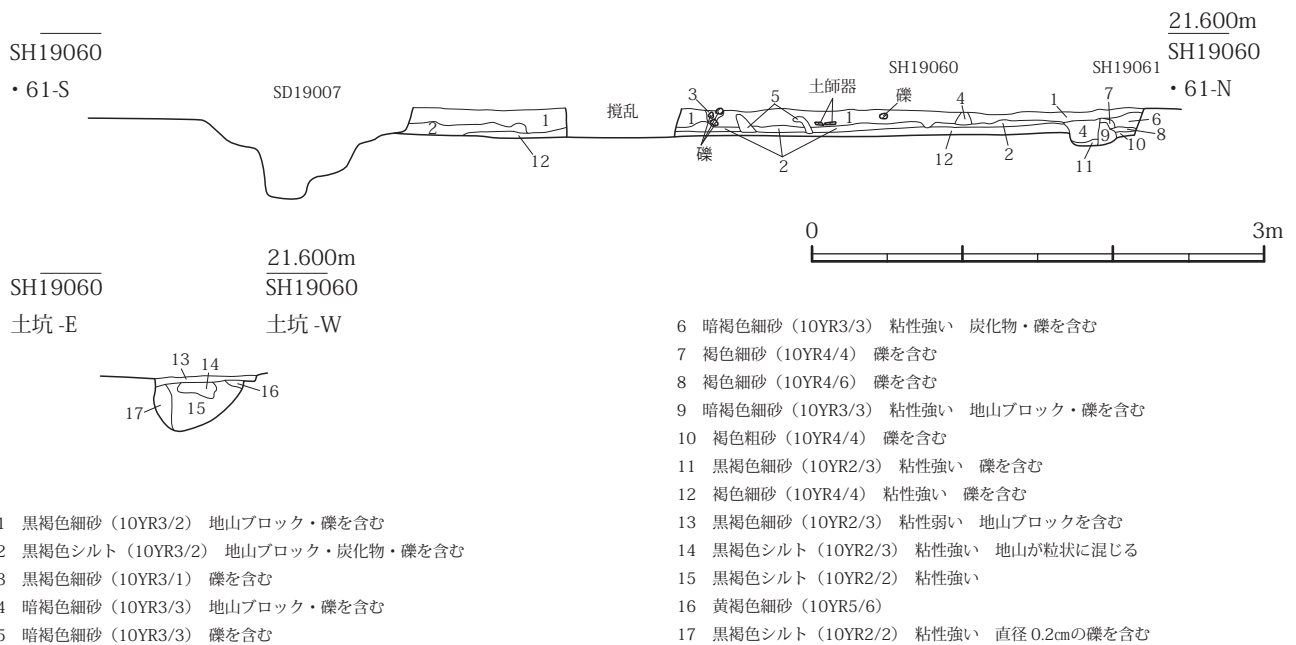


Fig.63 SH19060・61 平面 (S=1/100)



- 1 黒褐色細砂 (10YR3/2) 地山ブロック・礫を含む
- 2 黒褐色シルト (10YR3/2) 地山ブロック・炭化物・礫を含む
- 3 黒褐色細砂 (10YR3/1) 礫を含む
- 4 暗褐色細砂 (10YR3/3) 地山ブロック・礫を含む
- 5 暗褐色細砂 (10YR3/3) 礫を含む

- 6 暗褐色細砂 (10YR3/3) 粘性強い 炭化物・礫を含む
- 7 褐色細砂 (10YR4/4) 礫を含む
- 8 褐色細砂 (10YR4/6) 礫を含む
- 9 暗褐色細砂 (10YR3/3) 粘性強い 地山ブロック・礫を含む
- 10 褐色粗砂 (10YR4/4) 礫を含む
- 11 黒褐色細砂 (10YR2/3) 粘性強い 礫を含む
- 12 褐色細砂 (10YR4/4) 粘性強い 礫を含む
- 13 黒褐色細砂 (10YR2/3) 粘性弱い 地山ブロックを含む
- 14 黒褐色シルト (10YR2/3) 粘性強い 地山が粒状に混じる
- 15 黒褐色シルト (10YR2/2) 粘性強い
- 16 黄褐色細砂 (10YR5/6)
- 17 黒褐色シルト (10YR2/2) 粘性強い 直径0.2cmの礫を含む

Fig.64 SH19060・61 土層断面 (S=1/50)

土器で、底部は上げ底状を呈する。体部最大径は中位に作られる。123の口径はやや小振りで、口縁部端部の垂下は僅かに認められる。土器で、底部は上げ底状を呈する。体部最大径は中位に部を丸く収める。124はミニチュア土器の台部で、非常に薄手で丁寧に作られる。  
**弥生土器高坏 (105・122・125・127)** 105は有稜高坏である。稜は比較的明瞭に観察できる。内外面には密にタテヘラミガキ調整が施され、脚部には1箇所の円形透孔を有する。122・125・127は脚部で、122・127

は1方、125は3方の円孔が穿かれる。122の外面には17条以上の櫛描直線文が施文され、125外面のヘラミガキ調整は密である。127は脚部天井部が薄く作られる。  
**土師器皿 (128)** 口縁部内外面が強くヨコナデ調整され、口縁部内面に段が生じている。口縁部内外面のヨコナデは1単位観察可能である。  
**弥生土器高坏 (129)** 3方向に円孔が穿孔される。脚部は下方に向けて外反を強くする。

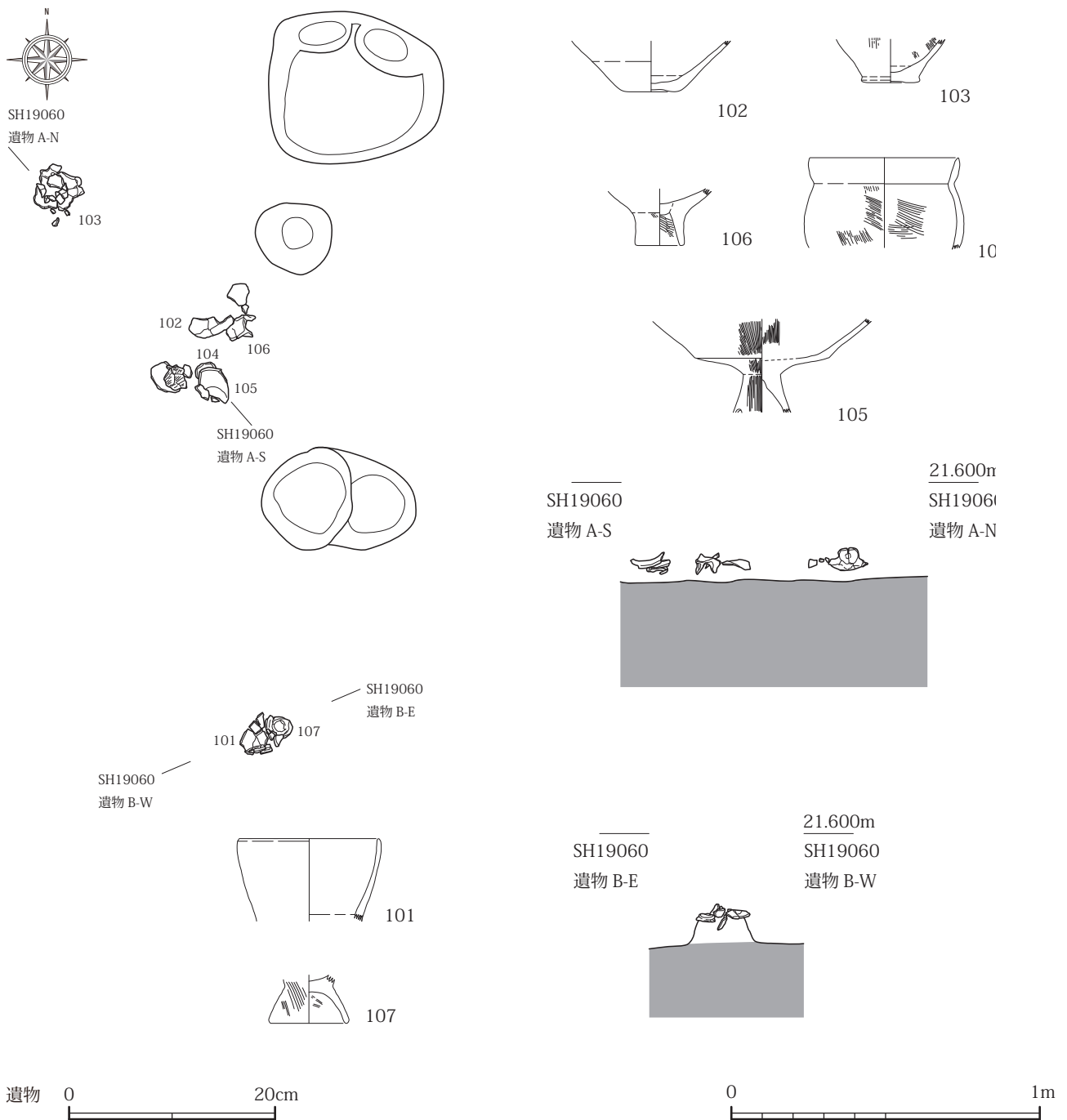


Fig.65 SH19060 遺物出土状況 (S=1/20 遺物 : S=1/6)

**時期・性格** ほぼ同時期の可能性がある SH19061 を切り、古代の灰釉陶器碗 (337) が出土した P109, 中世の SD19007 に先行する。SH19060 からは比較的多量の遺物が出土し、特に床面に近いレベルから良好な遺物の出土に恵まれた (Fig.65)。105 は廻間 I 式 1 ~ 2 段階の所産であると考えられる。加えて、端部が内湾傾向を示す 101・104・121 等が出土し、また SD19007 には SH19060 のものと考えられる弥生土器甕 (369・370) が混入しており、該当時期における生計の営みを確認できる。

**【竪穴住居 SH19061 (Fig.63・64)】**

**重複** SH19061 → SH19060, P516・520・526・529, ピット (遺物なし)。

**平面・規模** 周壁溝北辺がやや北方向へ張り出す歪な形状を呈しており、五角形状の平面プランを想定した。大部分が後出する SH19060 によって削平されているため、確証を得ないが、五角形の竪穴住居であると仮定すると、北辺の突出部が五角形の先端部分に相当する。東西 5.1 m, 南北 4.6 m の範囲を検出し、主軸は N-20° -E 程度の方向を向こう。

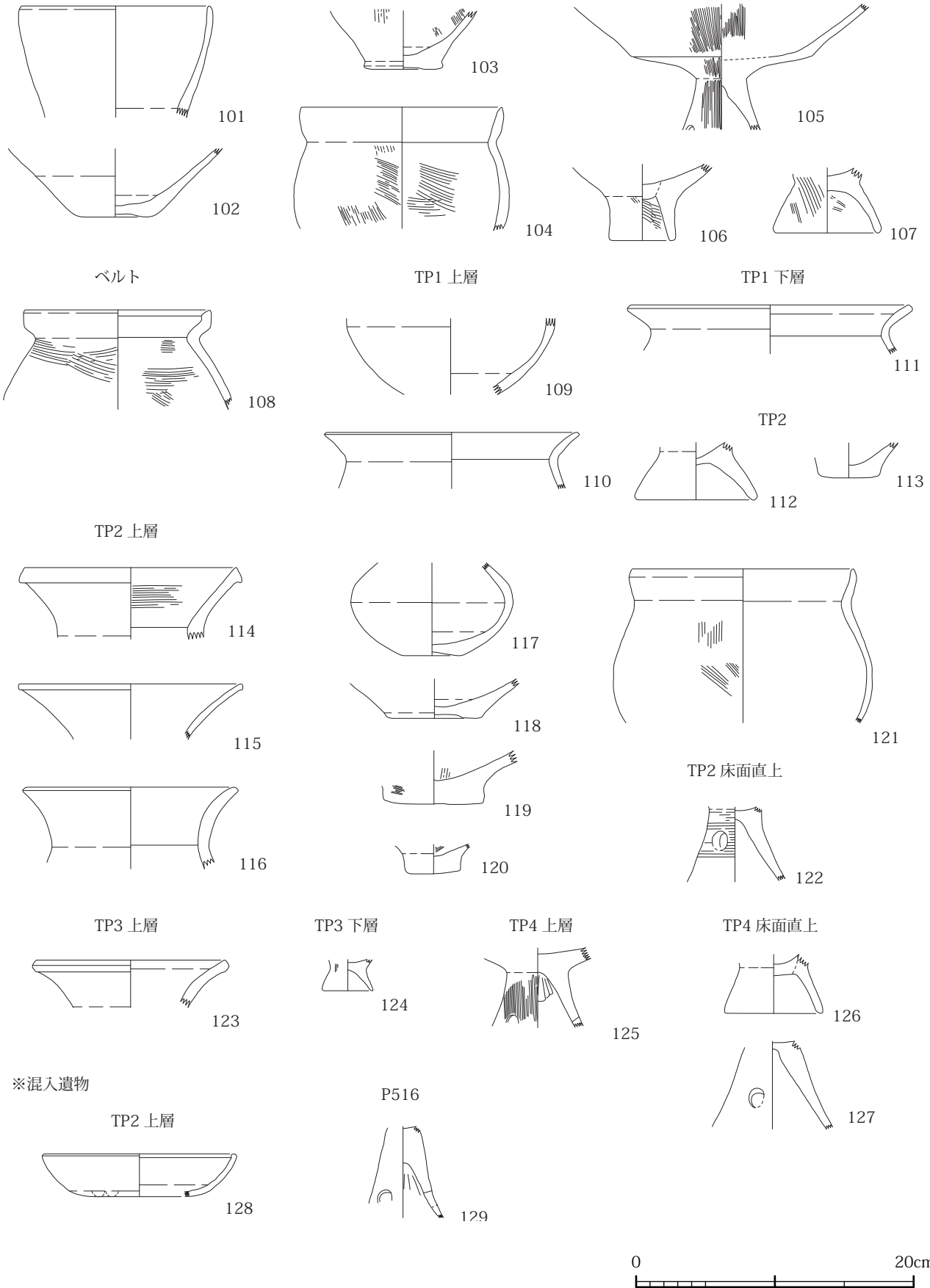


Fig.66 SH19060・P516 出土遺物 (S=1/4)



**壁・周壁溝** 検出面から床面までの深さは北壁で0.07 mである。後出するSH16060の方が床面レベルを低く造られているため、床面は僅少な遺存に留まる。周壁溝は幅0.15～0.2 mを測り、床面からの深さは0.06 mを計測する。北辺及び東辺の一部を残すのみである。

**貼床** 付帯なし。

**支柱穴** 五角形の平面プランを想定すると、P530・568・729～731が妥当である。全て円形状を呈する。概ね直径0.25～0.45 mを測り、下面のSH19060床面からの深さは0.06～0.09 mと浅い。本来の深さは失われているものと考えられる。南東部支柱穴は、近似した深さを示すSK19082によって攪乱されている可能性が考えられる。

**土坑** 南辺想定ライン上のほぼ中央部に位置し、長軸0.8 m、短軸0.75 mの円形状を呈する。SD19007によって南半が埋没し、東部をP529に切られる。SH19060床面からの深さは0.44 mと深い。北部が段掘りされてテラス状をなすが、この箇所はSH19060床面から0.1 m下がる。周壁溝とは接点がないが、その底面からは十分な深さをもつ。

**屋外溝** 付帯なし。

**火処** 付帯なし。

**遺物** 弥生土器片が出土したのみである。検出範囲が限定されることもあり、遺物の出土量は乏しい。

**時期・性格** 古墳時代初頭のSH19060に先行する。廃絶後にSH19060に建て替えた可能性を考えると、やや古手の時期に遡るのであろうか。その他の重複する遺構からは、時期の絞り込みに繋がる遺物は出土していない。なお、比較的近隣の五角形の竪穴住居となると、岸岡山Ⅲ遺跡や四日市市山奥遺跡等においてそれぞれ1棟ずつ検出されており、非常に興味深い。共に周壁溝及び炉、土坑等の内部施設を備え、支柱穴を5基付帯する。五角形の先端部を北方へ向け、土坑が南部に備わることの特徴がある。山奥遺跡の竪穴住居からは出土遺物が少ないものの、岸岡山Ⅲ遺跡の例では非常に多量の遺物と共に未加工の軽石が多く出土している。SH19061の詳細は不明であるが、五角形の先端を北方向へ向け、南辺に土坑を付帯する点が共通している。SH19060に切られるため、遺物の多寡については判断できない。山奥遺跡は山中式後期、岸岡山Ⅲ遺跡は山中式中期、共に弥生時代後期の所産である。SH19061も同時期に比定できるのかもしれない。

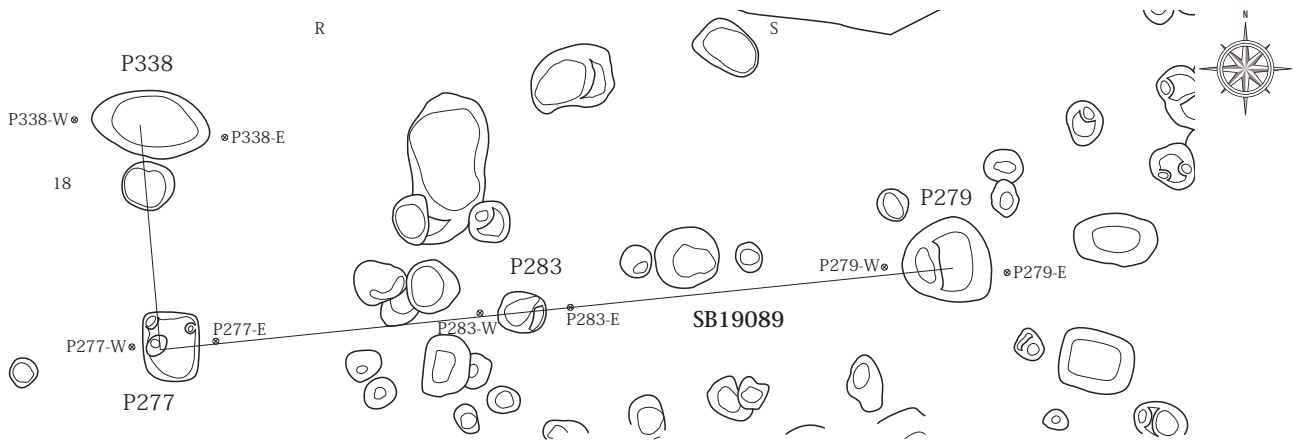
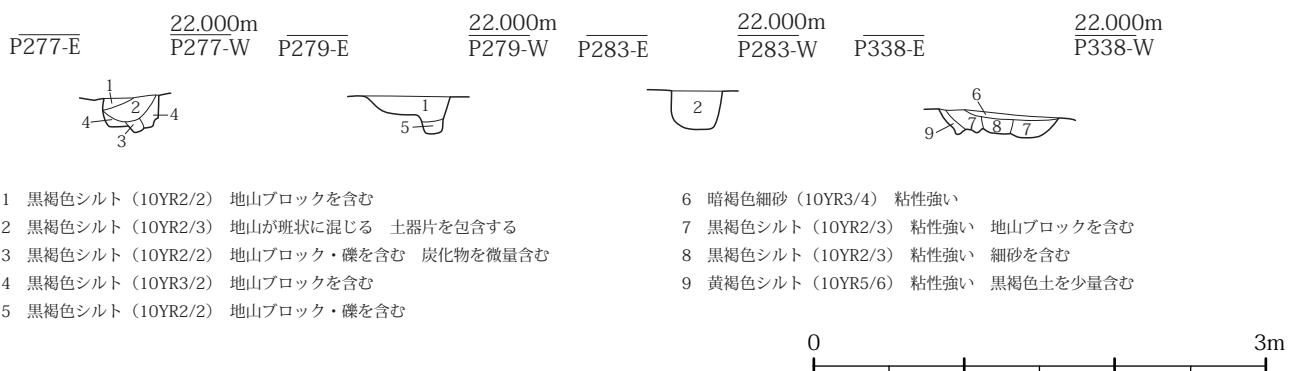


Fig.67 SB19089 平面 (S=1/50)



- |   |                                   |
|---|-----------------------------------|
| 1 黒褐色シルト (10YR2/2) 地山ブロックを含む            | 6 暗褐色細砂 (10YR3/4) 粘性強い            |
| 2 黒褐色シルト (10YR2/3) 地山が斑状に混じる 土器片を包含する   | 7 黒褐色シルト (10YR2/3) 粘性強い 地山ブロックを含む |
| 3 黒褐色シルト (10YR2/2) 地山ブロック・礫を含む 炭化物を微量含む | 8 黒褐色シルト (10YR2/3) 粘性強い 細砂を含む     |
| 4 黒褐色シルト (10YR3/2) 地山ブロックを含む            | 9 黄褐色シルト (10YR5/6) 粘性強い 黒褐色土を少量含む |
| 5 黒褐色シルト (10YR2/2) 地山ブロック・礫を含む          |                                   |

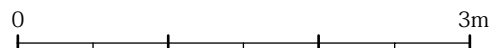


Fig.68 SB19089 土層断面 (S=1/50)

### 【掘立柱建物 SB19089 (Fig.67・68)】

**構成** P277・279・283・338。

**重複** なし。

**平面・規模** 1間×2間の建物範囲を確認したが、北東部のピットは未検出である。検出範囲は南北1.5m、東西5.3mを測る。主軸はW-6°-N方向を向ける。構成するピットは、直径0.3～0.8mの円形状を呈し、検出面からの深さは0.1～0.32mを測る。北側は既存建物によって広く攪乱されているため、遺構の広がり特定することはできない。

**遺物** 図化可能なものではないが、P279から弥生土器高坏、P283から弥生土器壺が出土した。

**時期・性格** 出土遺物は多くないが、その特徴から弥生時代後期～古墳時代初頭の年代観が想定できる。

### 【掘立柱建物 SB19093 (Fig.69～71)】

**構成** P334・351・359・373～375・720。

**重複** ピット(遺物なし)→P359。P373→ピット(遺物なし)。P720→土坑状遺構(遺物なし)→P319。

**平面・規模** 2間×2間の側柱建物である。梁間4.0m、桁行4.1mを測り、正方形の平面形である。主軸方向はW-4°-Nを示す。構成するピットの規模は、直径0.25～0.35mを測り、検出面からの深さは0.12～0.3mを計測する。慎重に検出を行ったが、南辺中央部のピットの確認には至らなかった。

**遺物** P359から弥生土器甕(130)が出土した(Fig.72)。その他のピットから遺物は一切出土していない。

**弥生土器甕(130)** 受け口甕である。口縁部端部の立ち上がりは明瞭で、やや外側へ開く。内外面は丁寧にヨコナデ調整される。

**時期・性格** 130は古墳時代初頭に属すると見られるが、弥生時代後期の山中式期に遡る可能性も残す。重複遺構からの遺物出土がなかったため、それ以上の手掛かりはない。

### 【掘立柱建物 SB19087 (Fig.73～75)】

**構成** P201・204～206・721・722・723。

**重複** SX19038→P205。P721→SD19006。

**平面・規模** 少なくとも1間×4間の側柱建物であると考えられる。梁間2.7m、桁行5.2mの規模を検出し、長方形の平面形を呈するものと見られる。主軸方向はN-32°-Eである。構成するピットは、直径0.2～0.4mの規模であり、検出面からの深さは0.05～0.42mと幅がある。

**遺物** P201から弥生土器の細片が出土したのみである。その他のピットから遺物は一切出土していない。

**時期・性格** 詳細な時期比定に繋がる遺物はない。確かであるのは、中世のSD19006に遡ることのみである。

しかし、主軸方向が近隣に所在するSH19001及びSX19002とほぼ同一であるため、これらと近い時期になる可能性が高いものと考えられる。但し、新旧関係は不明であるが、SH19001と一部重なるため、やや前後するものと見られる。南方向へ更に延びる可能性があるが、東辺及び西辺の延長上には共に攪乱範囲が存在しており、判然としない。

### 【風倒木 SX19038 (Fig.73・76)】

**重複** SX19038→SX19002, P205 (SB19087)。

**平面・規模** SX19002によって北部を攪乱されているが、幅0.6～1.1mの溝状の遺構が急激に湾曲する形状を呈する。検出面からの深さは0.3mを測る。南西部でやや段が形成され、この中段部分の検出面からの深さは0.1mを計測する。

**遺物** 出土遺物は全くない。

**時期・性格** 一切の遺物出土がなかったため、帰属時期の詳細は不明である。古墳時代初頭のSX19002に先行する。埋土の状況も近い。近隣に所在する古墳時代初頭のSH19001やSX19002と類似した埋土で埋没するが、全体的に地山ブロックを含む点が特徴的である。これらと近い時期の風倒木痕であると判断される。

### 【方形周溝墓 SX19002 (Fig.73・77)】

**区割** TP1～4。

**重複** SX19038, P696 (SB19086)→SX19002→ピット(遺物なし)。

**平面・規模** 溝が逆L字状に湾曲して配され、方形周溝墓と判断した。後世に整地された影響で北辺及び西辺の痕跡は確認できない。検出した規模は南辺8.6m、東辺7.2mであり、主軸はW-29°-N方向を向く。周溝は幅0.6～1.2mを測り、検出面からの深さは0.15～0.22mを計測する。周溝の幅は南東コーナー付近でやや狭まり、0.4～0.5mになる。

**遺物** 弥生土器高坏(131)が出土した(Fig.78)。131はTP3・4の境となる土層断面SX19002Aの南側に設定したサブトレンチ北からの出土品である。

**弥生土器高坏(131)** 脚部下半のみ遺存する資料で、外面は丁寧にタテヘラミガキ調整される。3方向に円形透孔が穿かれる。

**時期・性格** 131は概ね廻間式の段階に比定でき、廻間I式期の所産であるSX19013との時期差は少ないものと見られる。SX19013とは比較的近い主軸方向を示しており、また同じく廻間I式期のSH19001の主軸とは全く同方向を向く。主体部は後世の遺構によって破壊されたものと思われ、明確な痕跡は残されていなかった。東辺北部の下面には縄文時代のSB19086を構成するP696が埋没する。なお、SX19002東辺北部にはSK19

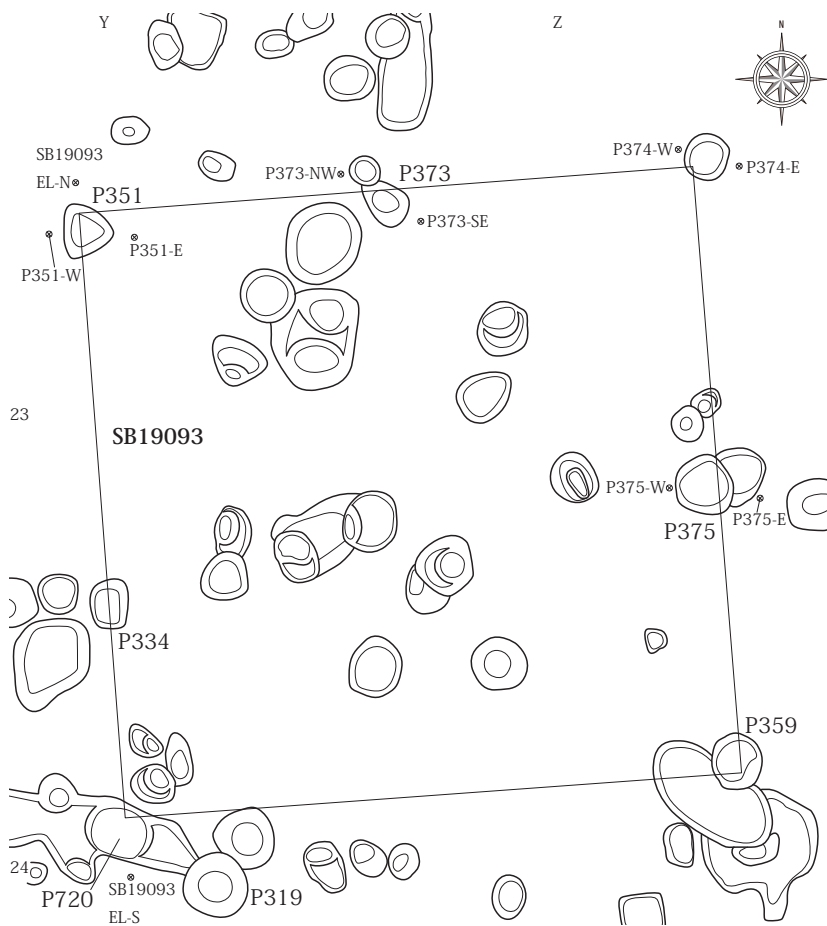


Fig.69 SB19093 平面 (S=1/50)

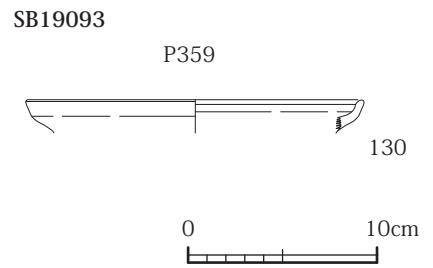
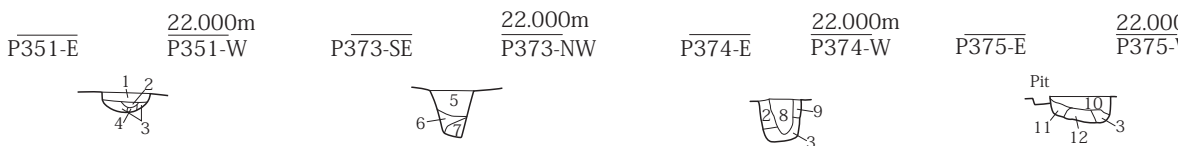


Fig.72 SB19093 出土遺物 (S=1/4)



- |  |  |
|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>1 黒褐色シルト (10YR2/3) 地山ブロック・礫を含む</li> <li>2 黒褐色シルト (10YR2/2) 地山ブロック・礫を少量含む</li> <li>3 黒褐色シルト (10YR3/2) 地山ブロックを多量含む</li> <li>4 黒褐色シルト (10YR2/2) 地山ブロック・礫を多量含む</li> <li>5 黒褐色シルト (10YR2/2) 地山が班状に混じる 炭化物・礫を少量含む</li> <li>6 黒色シルト (10YR2/1) 地山が班状に少量混じる</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>7 黒色シルト (10YR2/1) 地山を微量含む</li> <li>8 黒褐色シルト (10YR2/2) 地山ブロック・炭化物・礫を微量含む</li> <li>9 黒褐色シルト (10YR2/2)</li> <li>10 黒褐色シルト (10YR2/3) 炭化物を少量含む</li> <li>11 黒褐色シルト (10YR2/3) 地山が班状に多量混じる 礫を含む</li> <li>12 黒褐色細砂 (10YR2/2) 粘性強い 地山ブロックを多量含む</li> </ul> |
|--|--|

Fig.70 SB19093 土層断面 (S=1/50)

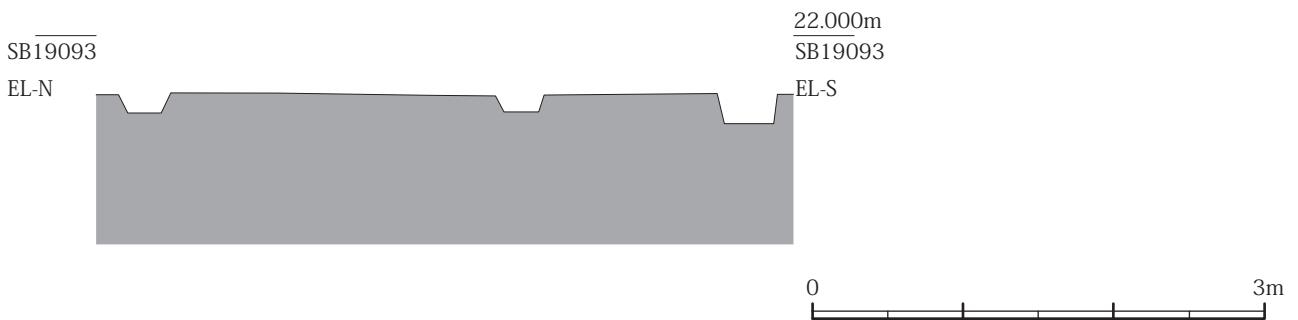


Fig.71 SB19093 断面 (S=1/50)

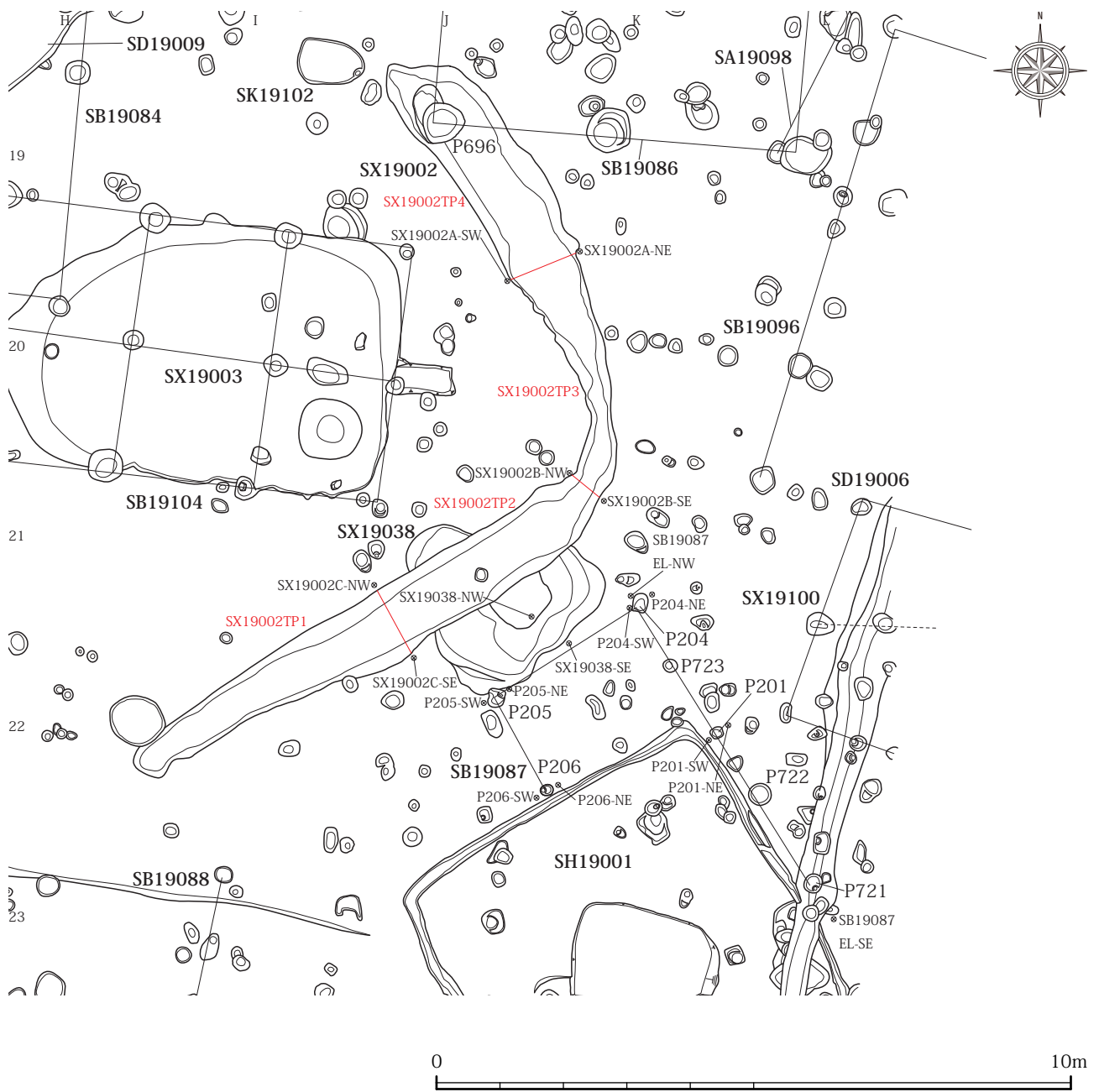
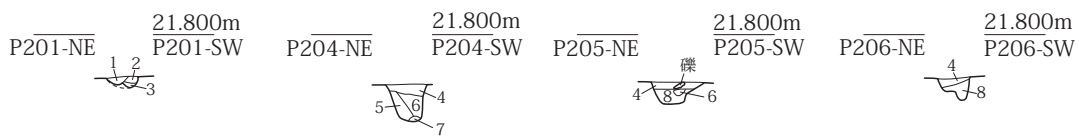


Fig.73 SB19087・SX19002・38 平面 (S=1/100)



- |   |                                |
|---|--------------------------------|
| 1 黒褐色シルト (10YR2/3) 地山ブロック・直径 0.3cmの礫を含む | 5 黒褐色シルト (10YR2/3) 地山ブロックを多量含む |
| 2 暗褐色シルト (10YR3/3) 礫を包含する               | 6 黒褐色シルト (10YR2/2)             |
| 3 暗褐色シルト (10YR3/4) 礫を少量含む               | 7 暗褐色シルト (10YR3/4)             |
| 4 黒褐色シルト (10YR2/2) 地山ブロック・礫を少量含む        | 8 黒褐色シルト (10YR2/3) 地山ブロックを少量含む |

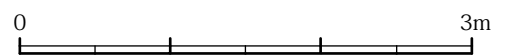
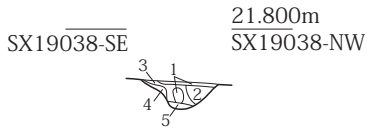


Fig.74 SB19087 土層断面 (S=1/50)



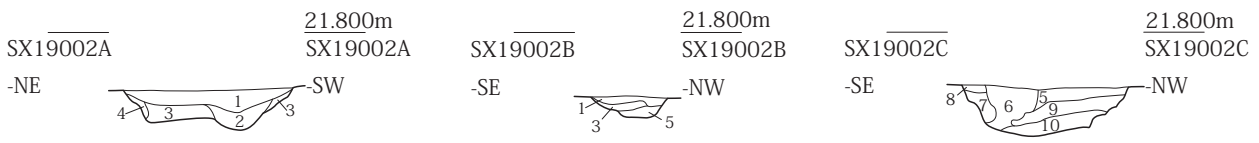


Fig.75 SB19087 断面 (S=1/50)



- 1 黒褐色細砂 (10YR2/2) 粘性強い
- 2 黒褐色シルト (10YR2/3) 粘性強い 細砂・地山ブロックを多量含む
- 3 黒褐色シルト (10YR3/2) 粘性強い 地山ブロックを少量含む
- 4 暗褐色シルト (10YR3/3) 粘性強い 地山ブロックを少量含む
- 5 黒褐色シルト (10YR2/3) 粘性弱い 細砂を含む

Fig.76 SX19038 土層断面 (S=1/50)



- 1 黒褐色シルト (10YR2/2) 粘性やや強い 地山ブロックを少量含む
- 2 黒褐色シルト (10YR2/3) 粘性強い 直径0.2～0.5cmの礫を少量含む
- 3 黒褐色シルト (10YR2/2) 粘性弱い 地山ブロックを多量含む
- 4 明黄褐色細砂 (10YR6/6)
- 5 黒褐色シルト (10YR2/3) 粘性弱い 地山ブロックを少量含む

- 6 黒褐色シルト (10YR2/2) 粘性やや強い 地山ブロックを多量含む
- 7 黒褐色シルト (10YR2/2) 4と地山ブロックを含む
- 8 黒褐色シルト (10YR2/2) 4が混在
- 9 黒褐色シルト (10YR2/3) 粘性やや強い
- 10 黒褐色シルト (10YR3/2) シルト粘性強い

Fig.77 SX19002 土層断面 (S=1/50)

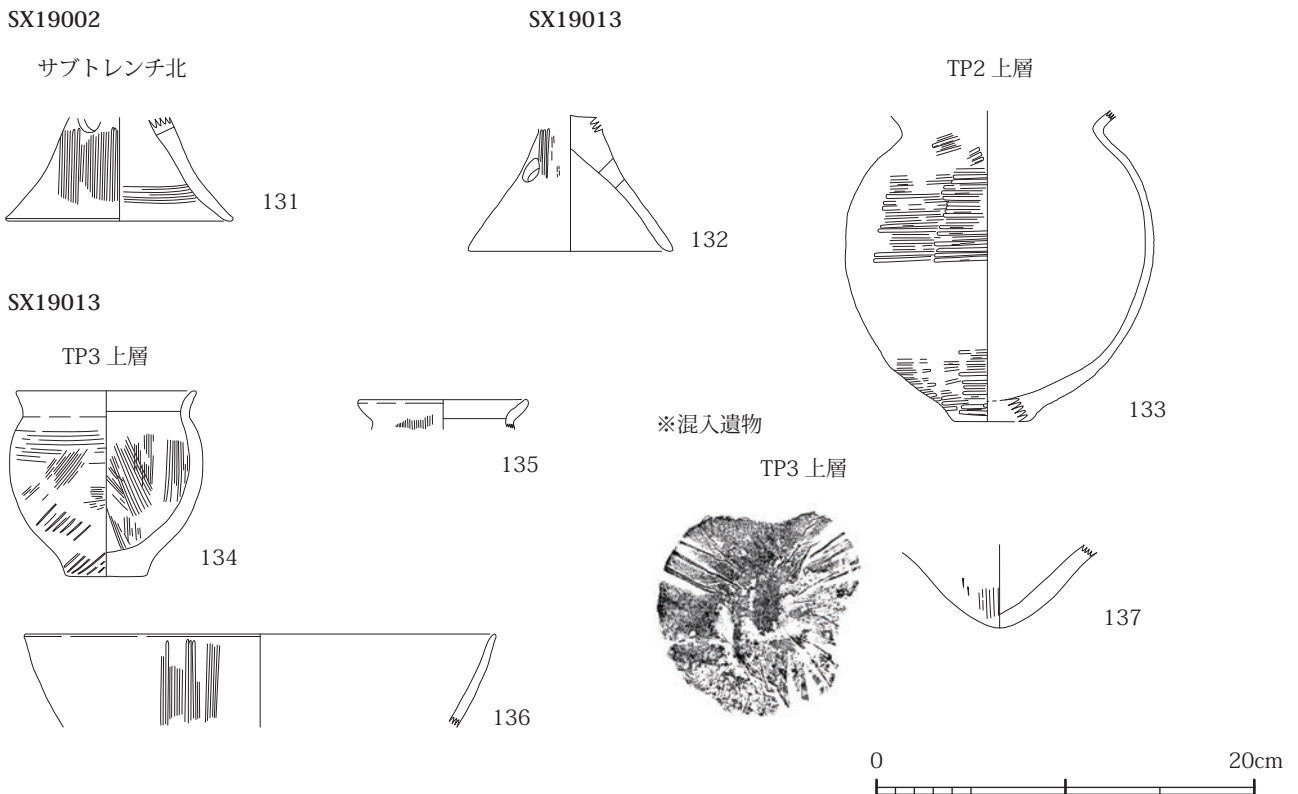


Fig.78 SX19002・13 出土遺物 (S=1/4)

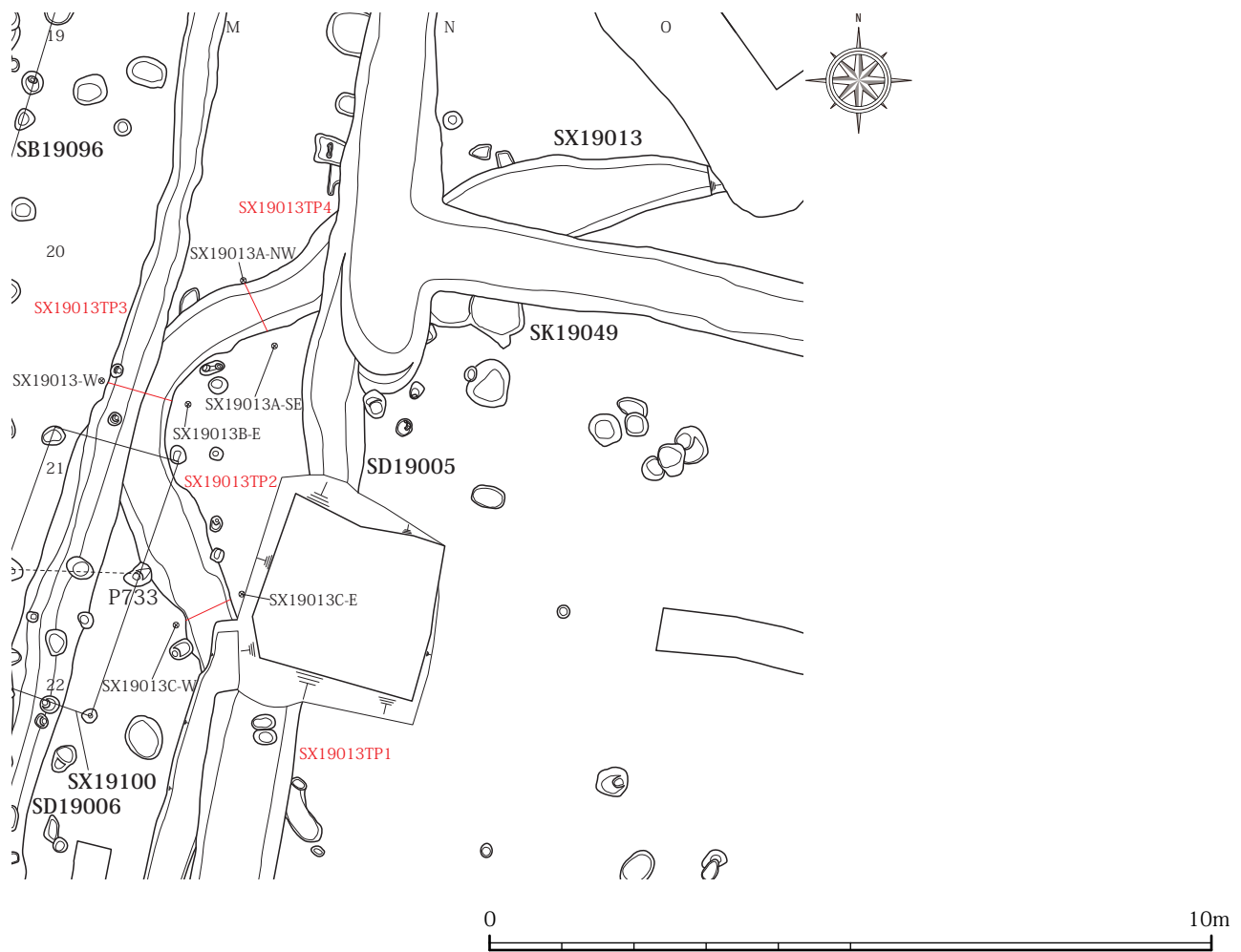
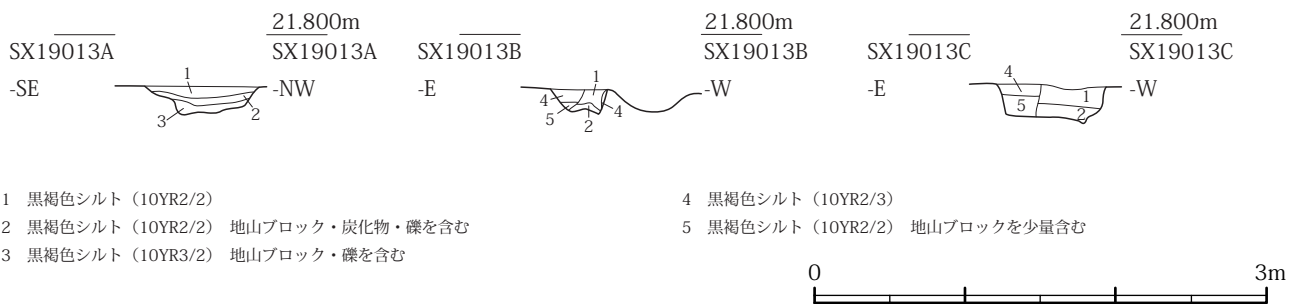


Fig.79 SX19013 平面 (S=1/100)



- 1 黒褐色シルト (10YR2/2)
- 2 黒褐色シルト (10YR2/2) 地山ブロック・炭化物・礫を含む
- 3 黒褐色シルト (10YR3/2) 地山ブロック・礫を含む

- 4 黒褐色シルト (10YR2/3)
- 5 黒褐色シルト (10YR2/2) 地山ブロックを少量含む

Fig.80 SX19013 土層断面 (S=1/50)

102が近接するが、これはSX19002周溝の一部である可能性が高いと判断される。SX19002とSK19102との距離は0.35mと狭く、開口部と言うよりも、本来は繋がっていたものとする方が妥当であろう。出土遺物は全体的に少ない。

**【方形周溝墓 SX19013 (Fig.79・80)】**

区割 TP1～4。

重複 SX19013 → SD19005・6, P733 (SX19100), ピット (遺物なし)。

平面・規模 周溝がL字状に湾曲する様相を確認した。

東辺及び南辺は完全に削平されているものと考えられる。また、北辺は東部を後世の攪乱によって失われ、西辺も後世の遺構及び攪乱によって分断されており、東西8.0m、南北6.4mの範囲を検出した。周溝は幅0.7～1.2m、検出面からの深さ0.12～0.22mを測る。主軸方向はW-22°-Nを示す。

遺物 弥生土器甕 (133～135)・高坏 (132・136) が出土した (Fig.78)。TP3上層には縄文土器深鉢 (137) の混入を確認した。

弥生土器甕 (133～135) 全て小型のくの字甕である。

133は頸部の屈曲が強く、体部の丸みが強い。内面のヨコハケ調整は磨滅のために痕跡化している。体部外面には横位のタタキが観察できるが、体部上方～頸部にはナメタタキが右肩上がりに施される。134は頸部が緩やかに屈曲し、ほぼ直口に近い形状を呈する。内面は密にタテハケ調整され、外面には粗いハケが縦と斜め方向に施される。あたかもハケによってタタキを模写したような意匠を感じ取ることができる。135は口縁部端部がやや内湾する。

**弥生土器高坏 (132・136)** 共に外面が縦方向のヘラミガキによって調整される。132は3方に円孔が穿孔され、脚部端部は僅かに内湾傾向を示す。136は有稜高坏の坏部上段であり、坏部は比較的深いタイプのものになるろう。

**縄文土器深鉢 (137)** 尖底の深鉢で、外面は縦方向のケズリ調整される。やや小振りである。

**時期・性格** 中世のSD19005・6・SX19100に切られる。132～134・136は廻間Ⅰ式期の所産である。断片的な検出に留まるため、開口部や陸橋の有無は不明である。埋葬施設の確認にも至らなかった。小型の弥生土器甕が供献されている点が特徴的である。SX19002とは4.7mの距離を保つ。

**【土器棺墓 SX22015 (Fig.81)】**

**重複** なし。

**平面・規模** 長軸1.1m、短軸0.85mを測り、検出面からの深さは0.17mを計測する。円形状の平面形態で、主軸方向をW-19°-Sに向ける。

**遺物** 弥生土器壺(138・140)・甕(139)が出土した(Fig.83)。

**弥生土器壺 (138・140)** 共に広口壺である。138は頸部の屈曲が強く、口縁部端部は僅かに垂下する。頸部外面には凸帯文が施され、凸帯文上は刺突文で装飾される。口縁部内面はハケをナデ消ししている。140は大型製品で良好に復元された。外面は密にハケ調整されるが、内面は磨滅が顕著である。体部最大径はほぼ中位におかれ、僅かに上げ底される。

**弥生土器甕 (139)** くの字甕の小型品である。非常に薄手の作りである。外面のタテハケ調整は磨滅のためにほぼ痕跡化している。

**時期・性格** 140は廻間Ⅱ式、若しくは廻間Ⅲ式に帰属し、古墳時代初頭～前期の所産であると判断される。土器棺墓であると考えられ、棺身にはこの壺を用い、土坑の中央～東部において、直立するように出土した(Fig.82)。また、140の南西部には別個体である138が接し、口縁部を下に向けた状態で出土している。墓壙の上部が失われているため、状況は不明であるが、供献さ

れた可能性が高いものと判断される。大型の広口壺を棺身とした乳幼児の埋葬施設である可能性が高いものと思われる。

**【ピット P'124 (Fig.81)】**

**重複** なし。

**平面・規模** 直径0.5mを測り、円形状を呈する。検出面からの深さは0.5mである。

**遺物** 弥生土器甕(142)・高坏(141)が出土した(Fig.83)。

**弥生土器甕 (142)** くの字甕で、頸部が強く屈曲する。口縁部上端に面を有するが、上端面の中央部はやや凹む。台部は剥落しているが、体部との接合部は上方から粘土を円盤充填される。体部内外面はハケ調整されるが、上方が横位であるのに対し、体部下方は不定ハケ調整される。

**弥生土器高坏 (141)** 有稜高坏で、胎土は金雲母を多量に包含する。坏部上段のみの遺存で、内外面にはタテヘラミガキ調整が施される。口縁部上端に明瞭な面をもち、口縁部は端部に向けて内湾傾向を示す。

**時期・性格** 141は古墳時代初頭の廻間Ⅰ期に所属する可能性が高い。142はP'124のほぼ中央部で破片資料がバラバラに積み重なる出土状況を呈する(Fig.82)。出土状況には特段有意な点は見受けられなかったが、良好に復元された。調査当時はSX22015から0.7m隔絶した真南において、同時期に比定でき得る資料が良好に出土したことにより、その関係性を大いに想定したが、SX22015より遡ることが判明した。

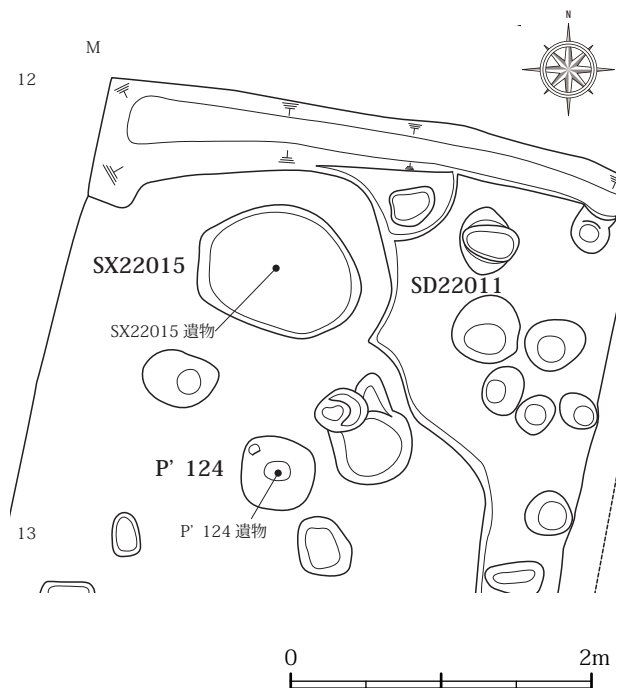


Fig.81 SX22015・P'124 平面 (S=1/50)

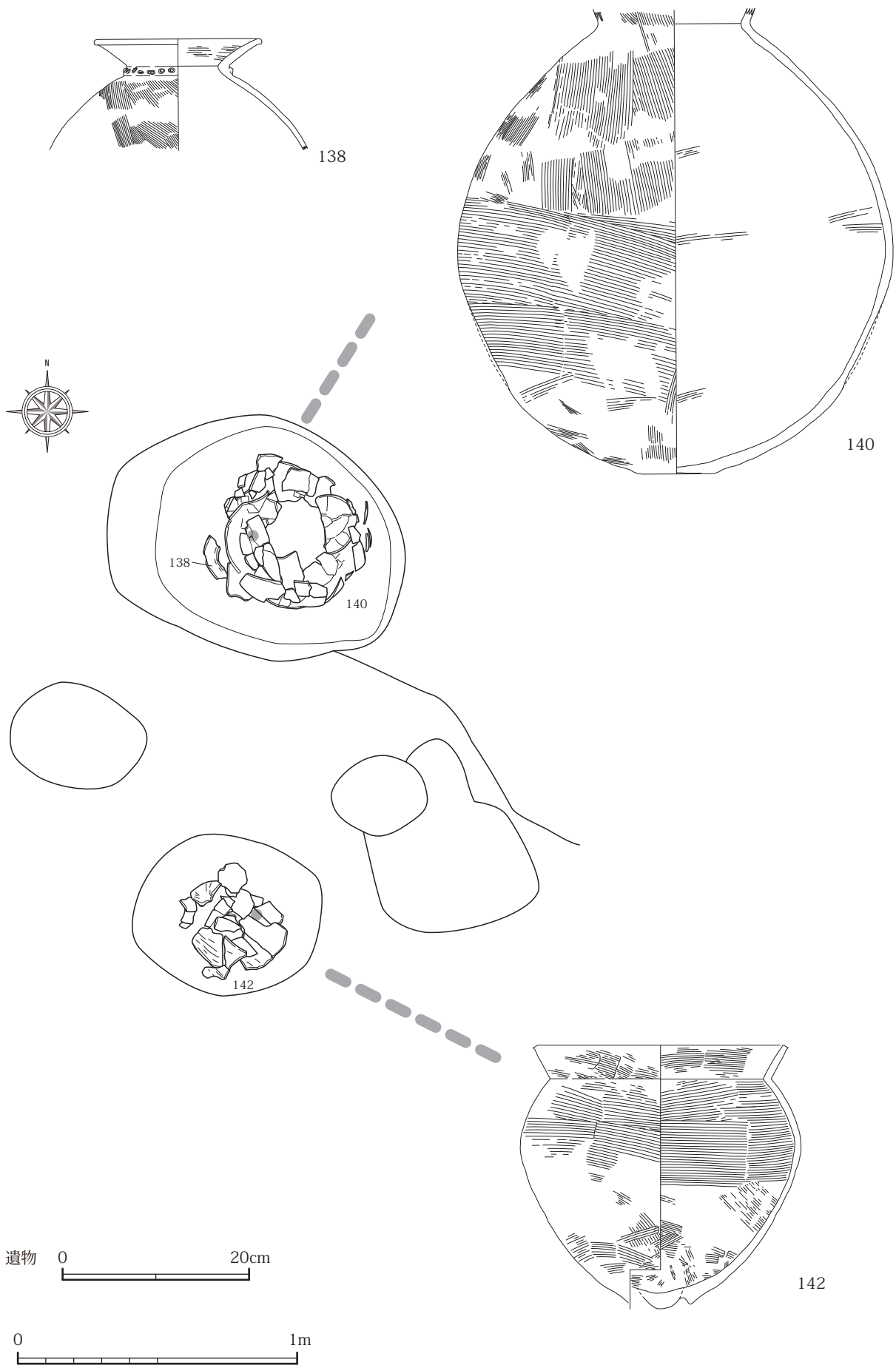
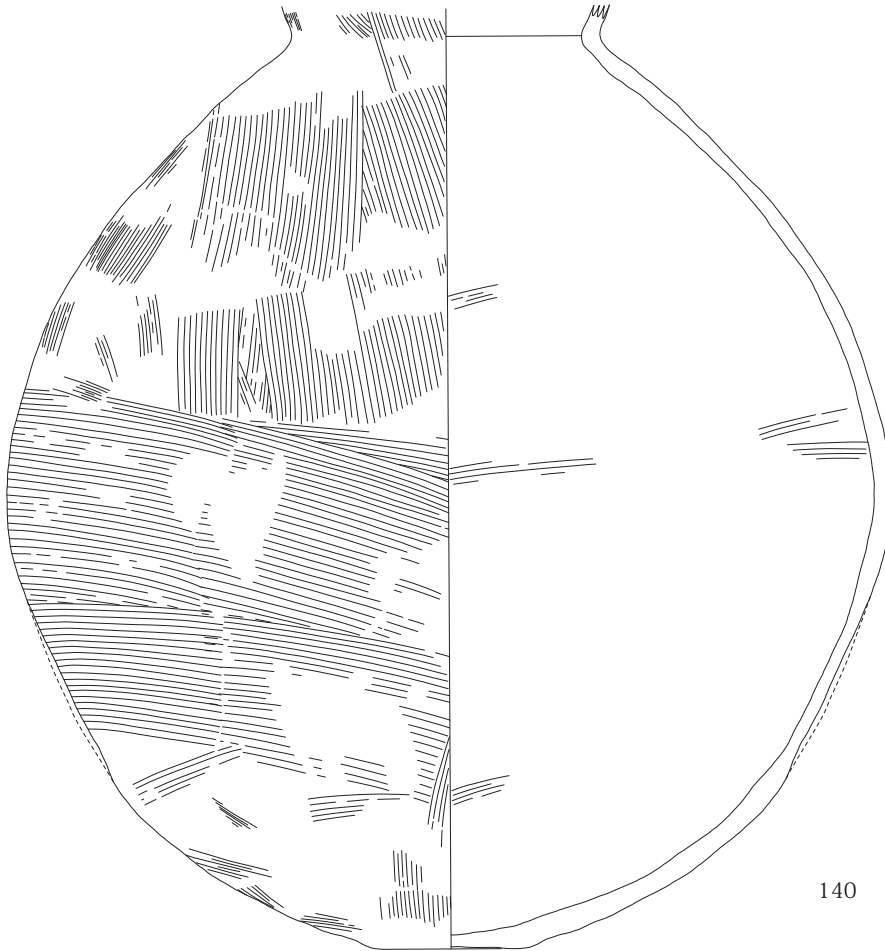
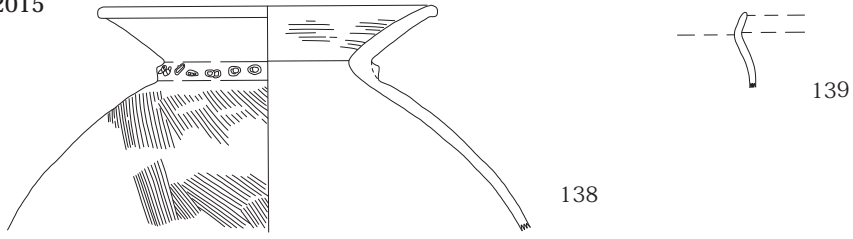


Fig.82 SX22015・P'124 遺物出土状況 (S=1/20 遺物:S=1/6)



SX22015



P' 124

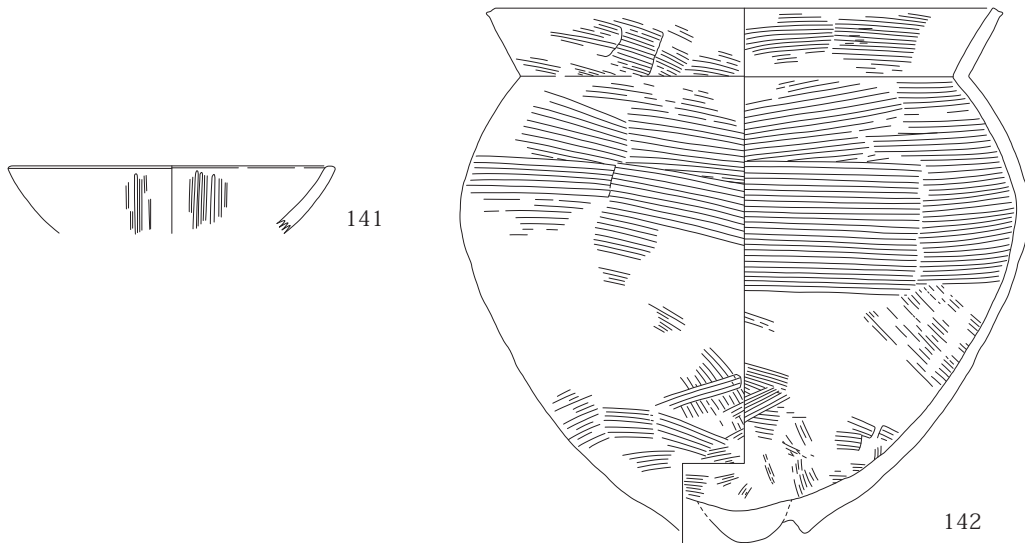


Fig.83 SX22015・P'124 出土遺物 (S=1/4)

### 【溝 SD19115 (Fig.84・85)】

重複 SD19115 → P622・689, ピット (遺物なし)。SD19115 = SD19116・22002。

平面・規模 北部が攪乱で失われ、南部は調査区外へ続く。幅 2.8 m以上を測り、検出した長さは 2.4 mである。検出面からの深さは 0.5 mを測る。南西部はやや外側へ開き、検出面から 0.22 mの深さでテラス状に段掘りされる。攪乱を挟んで北側に部分的に検出した SK19118 は、遺物の出土がないものの、形状や埋土の様相から SD19115 の北続きとなる可能性が高いものと考えられる。

遺物 遺物の出土が殆どない。攪乱の影響か、縄文土器深鉢 (164) の混入を確認した程度である (Fig.87)。

縄文土器深鉢 (164) 底部外面は一部剥落する。胎土には多量の金雲母が観察できる。

時期・性格 古墳時代初頭の SD22002 と一連の溝であると考えられる。後述するが、全体的に湾曲する形状を呈しており、SD19116・22002 と接続し、周溝状の遺構を形成するものと判断される。

### 【溝 SD19116 (Fig.84・85)】

重複 ピット (遺物なし) → SD19116 → ピット (遺物なし)。SD19116 = SD19115・22002。

平面・規模 北部は第 22 次調査 2 区へと延長し、南部は攪乱の影響で途中で途切れる。検出した規模は幅 2.2 m, 長さ 7.3 mを測る。検出面からの深さは 0.4 mを計測する。中央部がやや内側へ湾曲するが、概ね直線的に延びる。

遺物 弥生土器高坏 (144)・器台 (143) が出土した (Fig.87)。

弥生土器高坏 (144) 3 方に円形透孔をもつ。ハの字状に脚部を開き、外面にはタテヘラミガキ調整を観察できる。

弥生土器器台 (143) 1 方に円孔が穿かれる。受け部には穿孔が認められる。穿孔は焼成前に施されたものと考えられる。

時期・性格 古墳時代初頭の SD22002 と同一の溝であり、遺構の中心は SD22002 である。

### 【溝 SD22002 (Fig.84・85)】

区割 TP1 ~ 4。

重複 SD22002 = SD19115・116。

平面・規模 北部は既存建物によって完全に削平され、南部は調査区外の南東方向へ広がるため、全体の規模・形状は不明である。全体的に攪乱の影響が強く、特に TP2 ~ 3 付近に顕著である。形状及び位置関係を鑑みると、SD19115・116 と一連の溝を形成し、L 字状に湾曲する溝になると思われる。幅 3.2 ~ 4.0 mを測り、検出

した総長は 19.4 mに達する。検出面からの深さは 0.45 ~ 0.7 mと幅があるが、底面は複数回掘削されて階段状に凹凸が生じている。TP3 の第 19 次調査区との境において、弥生土器高坏が良好に出土した箇所が最も深まる。主軸方向は W-40° -N から N-34° -E 方向へ弧を描くように展開する。

遺物 弥生土器甕 (145 ~ 153)・壺 (154・155)・高坏 (156 ~ 160・163)・器台 (161), 土錘 (162) が出土した (Fig.87)。また、攪乱の影響によるものか、縄文土器深鉢 (165・166・168 ~ 171・174), 須恵器坏 (167), 弥生土器高坏 (172・173) の混入遺物を確認した。特に TP3 に縄文土器がよく混入している。

弥生土器甕 (145 ~ 153) 145・147・148 は受け口甕である。口縁部端部の立ち上がりは明瞭で、145・148 は外反する。145 は口縁部外面に刺突文が施文され、147 はほぼ直立する口縁部端部が外端面を形成し、この箇所が刺突文で装飾される。148 は小型土器で、頸部の屈曲が強い。薄手で丁寧な作りである。146 は口縁部上端に明瞭な面を有し、口縁部内面はやや凹む。150 は口縁部の外反が強く、外面はタテヘラミガキ調整される。151 は頸部の屈曲が強く、口縁部端部は内湾する。器面の風化が著しく、調整の観察は困難である。152 は小型製品で、体部には 2 箇所の接合痕が確認できる。527 は台部で、底部端部には平坦面を有する。底部は端部に向けて内湾傾向を示し、内面にはやや粘土がはみ出す。

弥生土器壺 (154・155) 154 は口縁部内面が 3 列の刺突羽状文で装飾される。155 は底面中央部がドーナツ状に上げ底され、内面のハケは密である。

弥生土器高坏 (156 ~ 160・163) 156 は有稜高坏で、内外面はタテヘラミガキ調整が丁寧に施される。158 はミニチュア製品の脚部で、ハの字状に脚を開ける。159 は外面が密にヘラミガキ調整され、天井部内面には棒状工具による刺突痕が 2 箇所確認される。160 は開脚が早く、円形透孔が 1 箇所遺存する。163 は椀形高坏の坏部で、脚部が剥落している。体部は緩やかな丸みを帯び、口縁部は外反する。内外面はタテヘラミガキ調整される。

弥生土器器台 (161) 受け部には直径 0.4cmの円孔が穿かれ、脚部と繋がる。磨滅により、外面のタテヘラミガキ調整はほぼ痕跡を残すのみである。

土錘 (162) 棒状の形状で、途中で欠落しているため、部分的に遺存する。直径 0.4 ~ 0.5cmの円孔がほぼ直線的に貫通する。穿孔位置はほぼ中心である。

縄文土器深鉢 (165・166・168 ~ 171・174) 165・166・168 は凸帯文土器である。165・168 は口縁部端部からやや下がった位置に凸帯文が施文され、165 は凸帯上に貝殻によるキザミが確認できる。165 の凸帯は厚



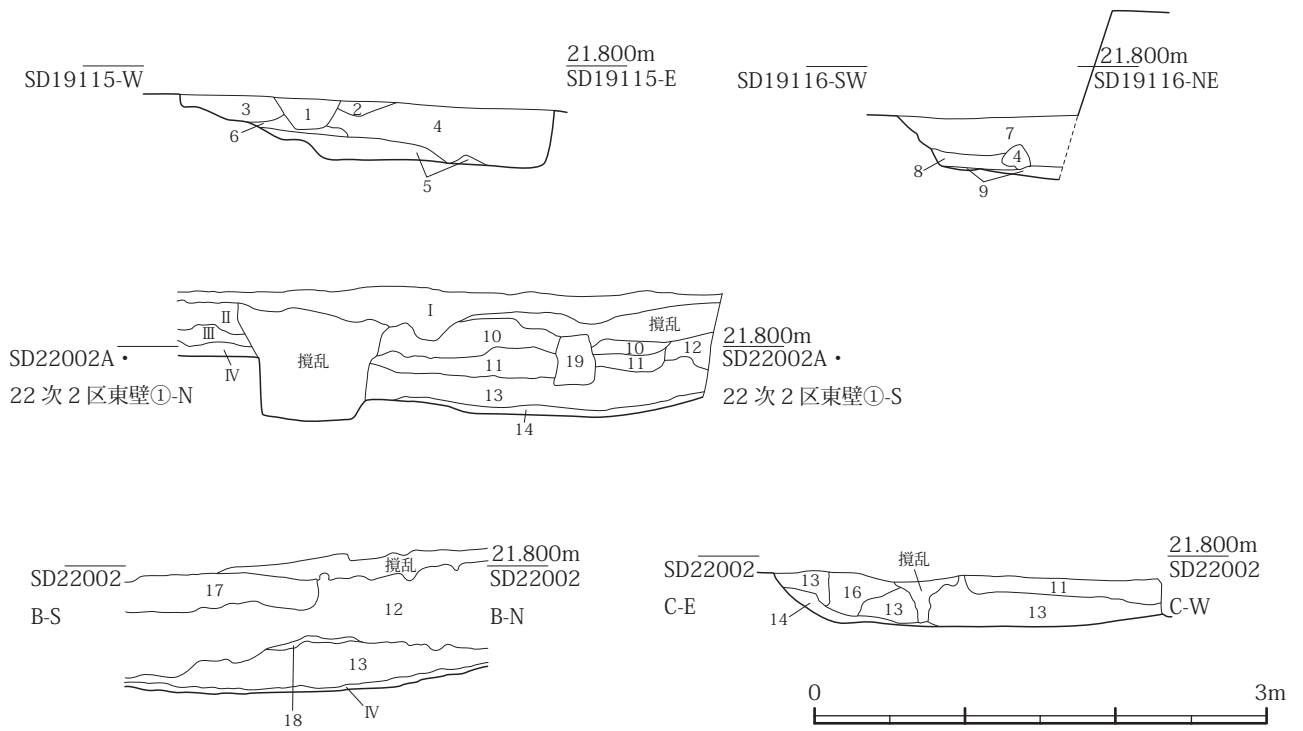
Fig.84 SD19115・116・22002 平面 (S=1/100)

く大きい。166・168・174には素文凸帯が貼り付けられる。166は口縁部の外反が強く、3帯の凸帯文が観察でき、その断面は蒲鉾状に緩やかに突出する。165・168は縄文時代晩期後半の所産であるが、166は遠賀川系弥生土器の変容壺になり、弥生時代前期頃に降る可能性のある資料である。169は縄文時代晩期前半の深鉢で、口縁部は外反する。口縁部上端にはキザミを有し、工具の使用によって小波状をなす。内面はケズリ、外面は横位の条痕で調整される。170は縄文時代中期末の北白川C式の時期に比定される。横位の沈線文を3条1組として施文している。171は素文凸帯が3条貼り付けられる。凸帯は断面形状が三角形に尖り、凸帯文間のピッチも狭く、凸帯文期のものとはその性格を異にする。文様構

成は3条を1組とする意匠であり、本来の沈線文を凸帯文で代用したものであろうか。

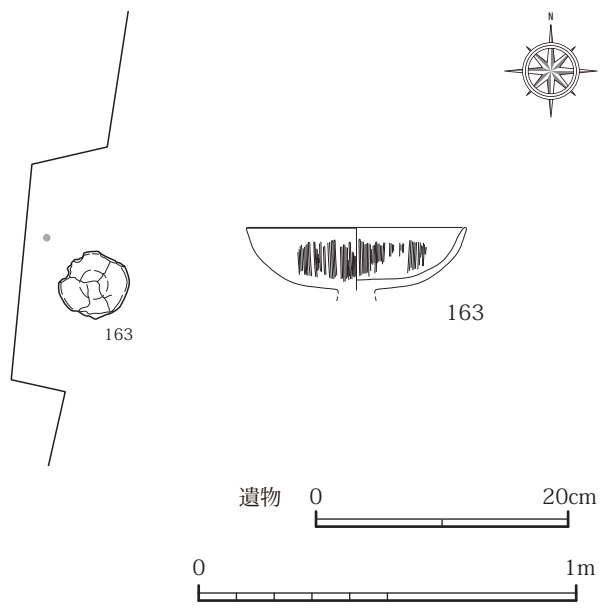
**須恵器坏 (167)** 坏身の底部資料である。高台は高く貼り付けられ、ハの字状に開く。体部内面には自然釉がかかる。7～8世紀に属するものと考えられる。

**弥生土器高坏 (172・173)** 172はワイングラス形高坏で、坏部は丸みが強い球形状を呈する。薄手の作りであり、口縁部端部は外反する。173は有稜高坏で、明瞭な稜を有する。坏部上段が強く外反し、坏部は比較的浅い。口縁部上端には明瞭な面をもつ。共にSD22002をやや遡る弥生時代後期の混入遺物である。172は山中式中～後期に盛行し、173は山中式前～中期のものである。  
**時期・性格** 145・148・153・163は廻間I式期で、



- I 灰黄褐色土 (10YR5/2) 表土
- II 黒褐色土 (10YR3/2)
- III 黒褐色シルト (10YR3/2) 黒褐色シルト (10YR2/2)・地山ブロックを多量含む
- IV 明黄褐色シルト (10YR7/6) 黒褐色シルト (10YR3/2)を少量含む
- 1 黒褐色シルト (10YR2/2) 地山が斑状に混じる 礫を含む
- 2 黒褐色シルト (10YR3/2) 地山ブロックを多量含む 礫を含む
- 3 黒褐色細砂 (10YR2/2) 粘性強い 地山ブロックを多量含む 礫を含む
- 4 黒褐色細砂 (10YR2/1) 粘性強い 礫を含む
- 5 暗褐色細砂 (10YR3/3)
- 6 黄褐色細砂 (10YR5/6) 粘性強い
- 7 黒褐色細砂 (10YR2/2) 粘性弱い
- 8 黒褐色シルト (10YR2/3) 粘性弱い
- 9 褐色細砂 (10YR4/6) シルト混在 黒褐色土を少量含む
- 10 黒褐色シルト (10YR3/1) 黒色シルト (10YR2/1)・細礫を少量含む
- 11 黒褐色シルト (10YR3/2) 細礫を多量含む 焼土を微量含む
- 12 黒色シルト (10YR2/1) 焼土を少量含む
- 13 黒褐色シルト (10YR2/2) 黒色シルト (10YR2/1)・細礫を多量含む 焼土を微量含む
- 14 灰黄褐色シルト (10YR4/2) 黒褐色シルト (10YR2/2)・黒色シルト (10YR2/2)・細礫・礫を多量含む
- 15 黒褐色シルト (10YR3/2) 黒褐色シルト (10YR2/2)を多量含む 地山ブロックを少量含む
- 16 黒褐色シルト (10YR3/2) 地山ブロックを少量含む
- 17 暗褐色シルト (10YR3/3) 粘性やや弱い 細礫を少量含む
- 18 にぶい黄褐色シルト (10YR4/3) にぶい黄褐色シルト (10YR7/4)を多量含む 焼土を微量含む
- 19 黒褐色シルト (10YR3/2)

Fig.85 SD19115・116・22002・22次2区東壁①土層断面 (S=1/50)



特に 163 は廻間 I 式 1 ~ 2 段階に所属する。163 は椀形高坏坏部の良好資料で、SD22002 最深部となる TP3 の底面直上において、据え置かれるように出土した (Fig.86)。口縁部を上方に向けているが、接続する脚部は未確認であり、打ち欠いた後に据えられた可能性がある。SD22002 は、北側の既存建物に伴う攪乱以北には現れないため、プラン通りにそのまま周溝状に湾曲するものと見られる。周溝の内部は調査区外となるため、その詳細は不明である。

Fig.86 SD22002 遺物出土状況 (S=1/20 遺物 : S=1/6)



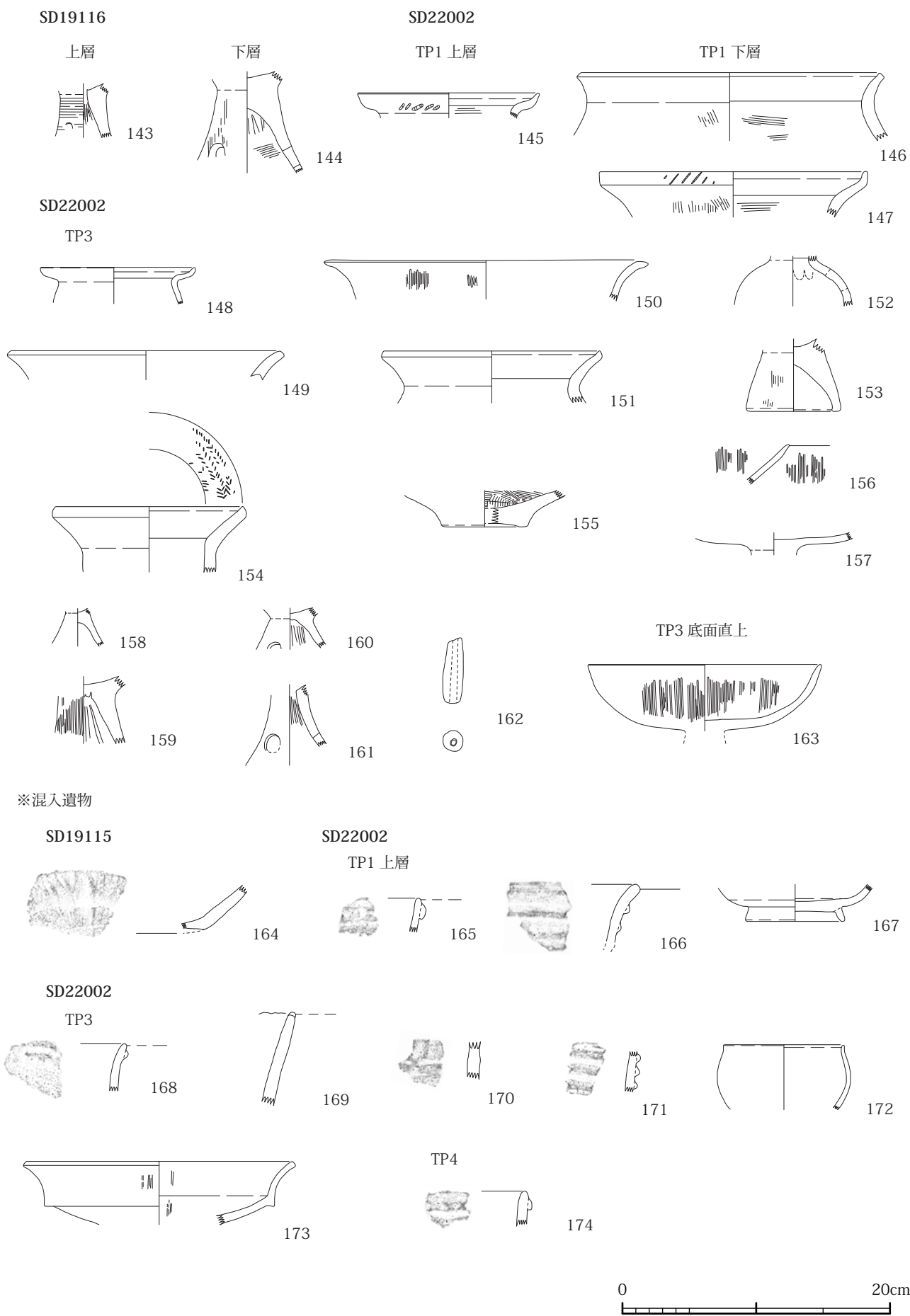


Fig.87 SD19115・116・22002 出土遺物 (S=1/4)

### 【溝 SD19004 (Fig.88・89)】

区割 TP1～4。

重複 ピット(遺物なし)→SD19004→SD19007・8・20・21・22・24, P132 (SA19044), P32・750・751 (SA19037), P155 (SB19036), SE19025, SX19048, P1・2・4～10・12・17・28・29・49・65・70・71・86・88～90・116～119・122・125・126・144・532・544, ピット(遺物なし)。

平面・規模 主に古代～中世の遺構によって切られており、広大な遺構範囲の上面にはその時期の生業が確認できる。南部は調査区外南西方向へ延びるため、全体の形状は不明であるが、大規模に掘削された溝である。北部は北方向へ行くに従い、徐々に深さを浅くする。SD19007 との重複箇所以北になると、溝の掘り込みが検出面とほぼ一体化して失われ、4層の黒褐色粗砂の広がりを掘むに留まった。幅は3.8～4.4 m程度を測るが、コーナー部分でやや内側へ広がり、7.0 mにまで達する。調査区内における長さは28.6 mを測る。主軸はW-24°-NからN-72°-E方向へと、L字状に強く湾曲する。検出面からの深さは南～中央部で0.4～0.5 m、北部で0～0.3 mを測る。

遺物 弥生土器甕(176・178)・高坏(175・177・179)が出土した(Fig.90)。175はTP1・2の境となる土層断面SD19004Cの東側に設定したサブレンチ南からの出土品である。全体的に古代から中世における遺物が多く混入している。当該混入遺物は上層からの出土で、土師器皿(180・184)、須恵器坏(182)・坏蓋(183)、黒色土器椀(181)、山皿(185)である。

弥生土器甕(176・178) 176はくの字甕で、頸部の屈曲が強い。178は受け口甕である。口縁部端部の立ち上がりは明瞭で、全体的に外反傾向を示す。

弥生土器高坏(175・177・179) 175・177は外面が櫛描直線文で装飾され、175は17条以上、177は12条以上の文様が確認できる。175は太く施文され、厚手で重厚な作りである。177は内面の絞り痕が密である。175・179は1方向の円形透孔を有する。

土師器皿(180・184) 180は口縁部端部をやや上方へ摘み上げ、口縁部内面は凹みをもつ。184は口縁部が外反し、端部を丸く収める。共に12～13世紀の所産である。

須恵器坏(182) 口縁～体部は直線的に外反する。高台の有無は不明である。猿投窯編年のK14窯式の段階で、9世紀前半に位置付けられる。

須恵器坏蓋(183) 天井部の膨らみは乏しく、凹線によって口縁部と天井部が区別される。口縁部端部には内傾面をもつ。陶邑窯跡群編年のTK10段階に相当するも

のと考えられる。

黒色土器椀(181) 内面のみ黒化処理を行う内黒であり、緻密なヘラミガキが施される。口縁部内面は僅かに凹められる。9世紀の所属である。

山皿(185) 口縁部は外反し、底部はやや厚手に作られる。底面には墨書が観察できる。墨書は磨滅のために薄く、剥離もしているため、判読が困難であるが、「上上」と読める。同様の文字は他に2個体出土している。藤澤良祐氏による山茶椀製品編年(以下、藤澤編年と呼称)の5型式に相当し、12世紀後半～13世紀初頭のものである。

時期・性格 大規模な溝であるが、古代の道路遺構の路面上に位置し、更に中世の屋敷地の区画範囲内にあるため、それまでの間に大幅に整地されたものと考えられる。上面にはその他にも、後出する遺構が多数存在する。上層には特に古代～中世の遺物の混入が顕著であるため、これらに伴うことは間違いない。SD19004が本来機能していたと見られる時期の遺物の出土量は乏しく、凶化可能遺物に至っては更に限定され、遺構の広がり反比例して乏しい結果となった。弥生時代後期～古墳時代初頭に帰属するものと考えたい。その性格については、当初に古墳の周溝、または流路を想定したが、古墳よりも遡るものと考えられる。土層断面の観察でも、埋土の主体は細砂であるが、最下層となる7・9層にシルト層が堆積しており、流水の根拠には弱い。また、第19次調査区の西側は第1次調査区北部に該当するが、その結果においても、SD19004の延長等、関連するような結果は得られておらず、周知の古墳も存在しない。該当期の環濠集落が広がる可能性も極めて低いと考えられる。SD19004は、竪穴住居を中心とする集落と同時期かそれよりもやや古い時期に存在したことは確実であるが、その関係性は不明である。

### 【土坑 SK19066 (Fig.91・92)】

重複 SK19066→P422・423, ピット(遺物なし)。

平面・規模 長軸3.8 m, 短軸2.0 mを測り、検出面からの深さは0.15 mを計測する。南部にやや張り出す楕円形状を呈し、主軸方向はW-46°-Nを向く。後出するピットによって切られる。

遺物 弥生土器壺(186)が出土した(Fig.93)。

弥生土器壺(186) 小型の壺で、内外面をタテヘラミガキ調整される。口縁部端部は内湾する。

時期・性格 186は廻間I式の段階で、古墳時代初頭の所産である。後出する遺構からは時期の比定に有意な遺物の出土はない。

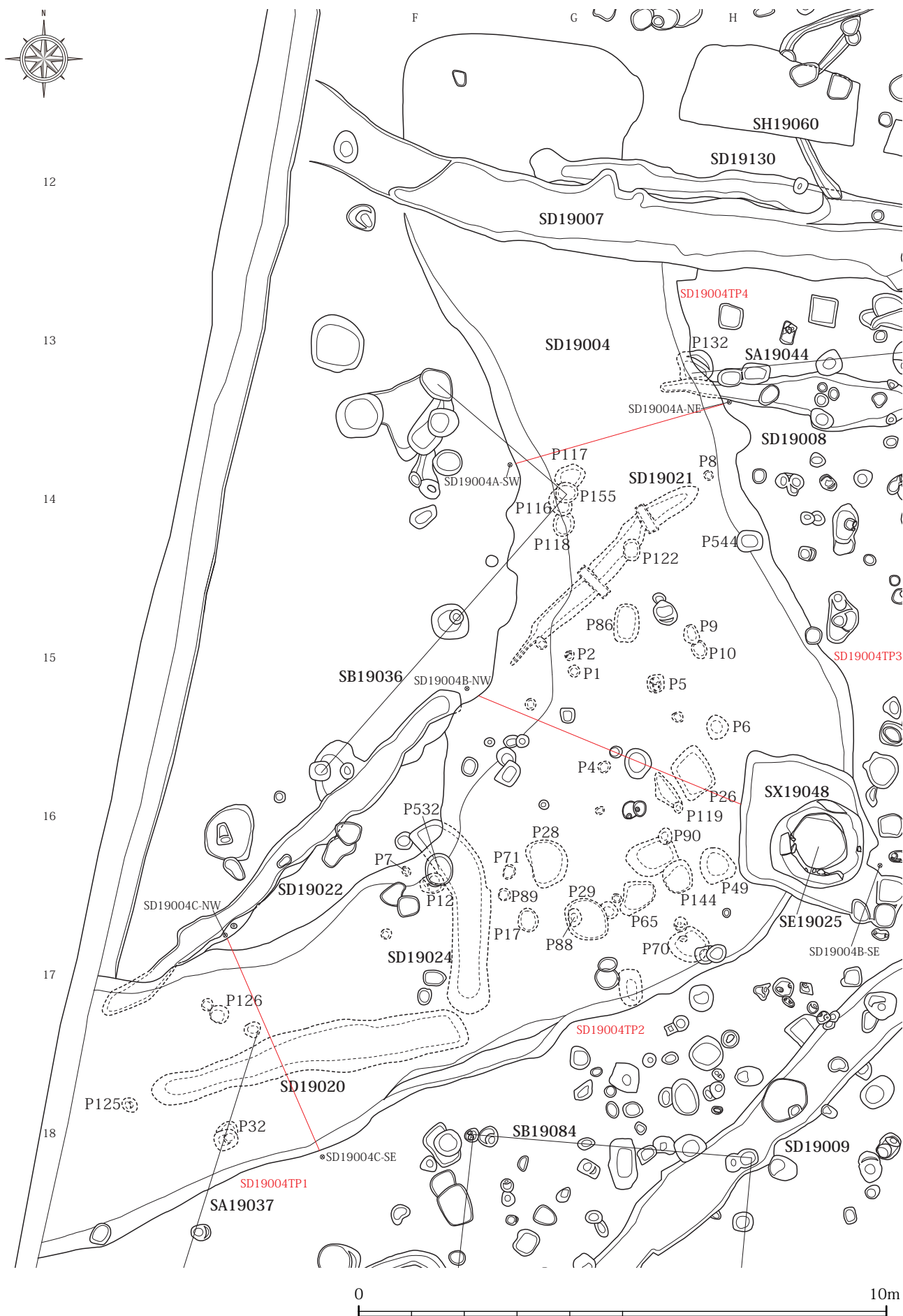
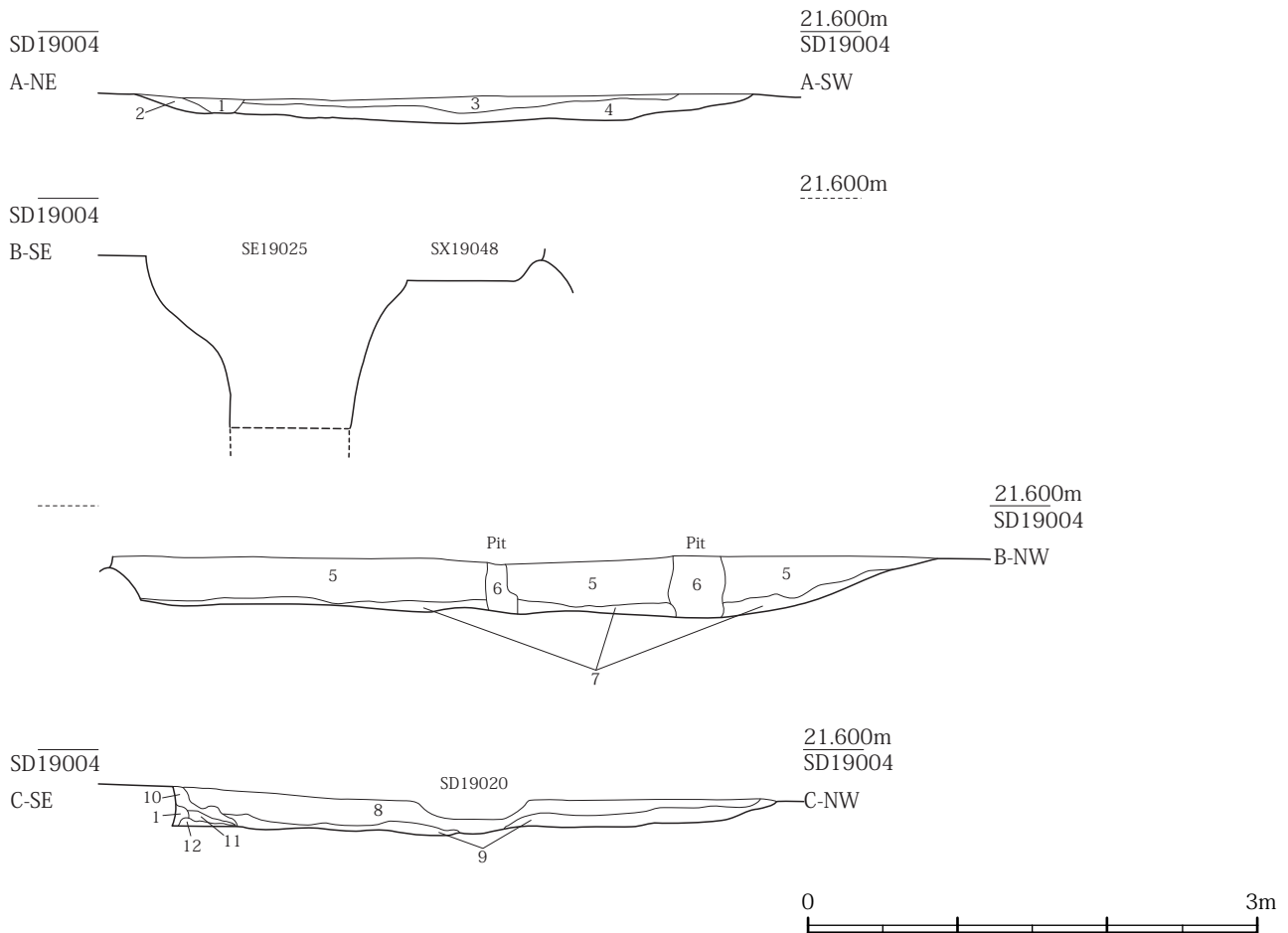


Fig.88 SD19004 平面 (S=1/100)



- |  |   |
|--|---|
| <p>1 黒褐色細砂 (10YR2/2) 礫を含む</p> <p>2 黒褐色細砂 (10YR3/2) 粘性強い 地山ブロックを含む</p> <p>3 黒色細砂 (10YR2/1) 礫を含む</p> <p>4 黒褐色粗砂 (10YR3/1) 礫を含む</p> <p>5 黒褐色細砂 (10YR2/1) 粘性強い 地山ブロック・炭化物・礫を少量含む</p> <p>6 黒褐色細砂 (10YR3/1) 粘性強い 地山ブロック・礫を少量含む</p> | <p>7 黒褐色シルト (10YR2/2) 地山ブロック・礫を多量含む</p> <p>8 黒褐色細砂 (10YR2/1) 粘性強い 地山ブロック・礫を含む</p> <p>9 黒褐色シルト (10YR2/2) 地山ブロックを多量含む 炭化物・礫を少量含む</p> <p>10 黒褐色シルト (10YR2/2) 地山が斑状に混じる 礫を含む</p> <p>11 黒褐色シルト (10YR2/3) 地山ブロック・炭化物・礫を含む</p> <p>12 褐色シルト (10YR4/4)</p> |
|--|---|

Fig.89 SD19004 土層断面 (S=1/50)

【弥生・古墳時代の遺構出土遺物】

上記の遺構以外にも、弥生後期～古墳時代初頭の遺構が分布する (Fig.35)。以下には、竪穴住居及び掘立柱建物等にまともでないピットや土坑等から出土した弥生土器について記載する (Fig.94)。図化資料は、比較的残りの良い台付甕の台部や高坏の脚部が多くを占める。

**弥生土器甕 (188・193～195・200・201)** 188・193・194は台部である。188は内外面が被熱によって黒変し、底部端部には平坦面を有する。193は台部の完形品で、内外面にはハケ調整を観察できる。194は体部との接合部が円盤充填される。195は受け口甕で、口縁部端部の立ち上がりは明瞭に直立する。内外面には被熱による黒変を観察できる。200・201はくの字甕で、共に頸部外面が刺突文で装飾される。200は直径0.5cmの礫を包含する。201は頸部の屈曲が強く、刺突文の上下

部にタテハケ調整が施される。

**弥生土器壺 (192・196・198・199)** 192は小型製品で、体部最大径はやや下方に作られる。外面にはタテハケが観察可能だが、磨滅のためにミガキの有無は不明である。口縁部端部は内湾傾向を示す。底部形状はほぼ平底だが、底面中央が僅かにドーナツ状に上げ底される。196・199は口縁部がやや垂下し、196は口縁部外端面に刺突文が施される。198は小型の壺で、やや上げ底される。

**弥生土器高坏 (187・189～191・197・202)** 全て脚部である。187は磨滅が著しく、器面調整は不明である。189・197は外面に櫛描直線文が施文され、189は16条以上観察できる。197は3方に円孔が穿かれ、穿孔位置は高い。190・191・202は外面がタテヘラミガキで調整され、191はハの字状に開脚する。202は底部



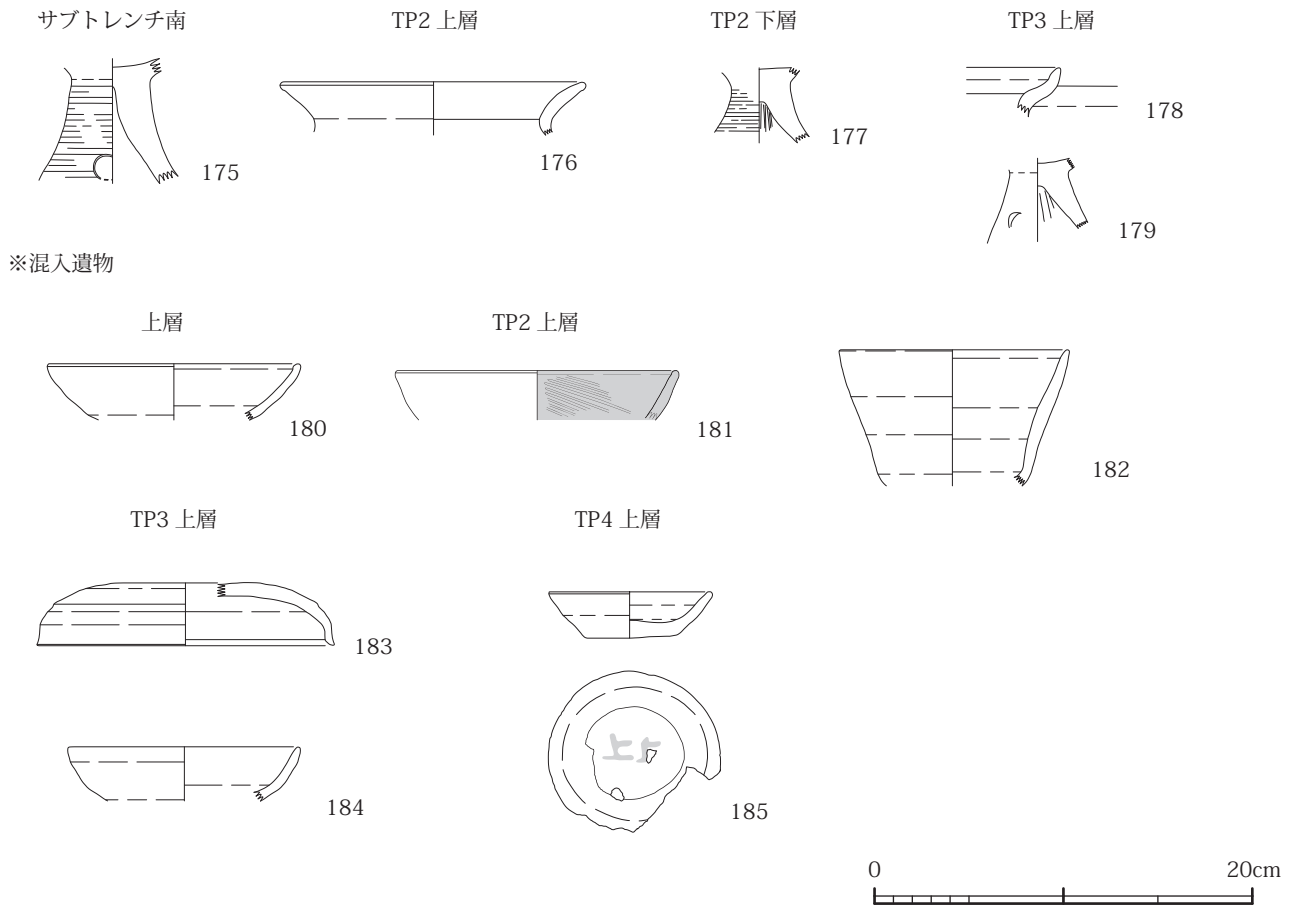


Fig.90 SD19004 出土遺物 (S=1/4)

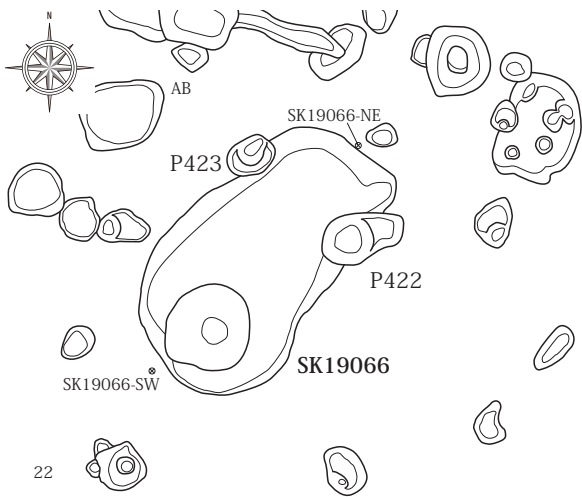
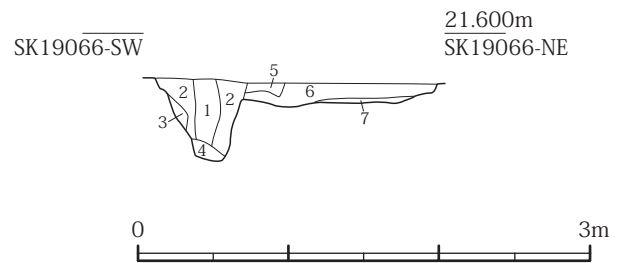


Fig.91 SK19066 平面 (S=1/50)



- 1 黒褐色細砂 (10YR2/2) 粘性強い 地山が斑状に混じる 礫を含む
- 2 黒褐色極細砂 (10YR2/1) 粘性弱い 地山ブロック・礫を含む
- 3 黒褐色シルト (10YR3/1) 地山ブロックを多量含む
- 4 黒褐色シルト (10YR2/2) 地山ブロック・礫を含む
- 5 黒褐色細砂 (10YR2/2) 粘性弱い
- 6 黒褐色細砂 (10YR3/2) 粘性弱い にぶい黄褐色土 (10YR4/3) が混在 直径1cmの礫を含む
- 7 褐色シルト (10YR4/6) 6 が混在

Fig.92 SK19066 土層断面 (S=1/50)

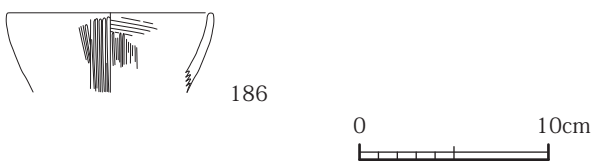


Fig.93 SK19066 出土遺物 (S=1/4)

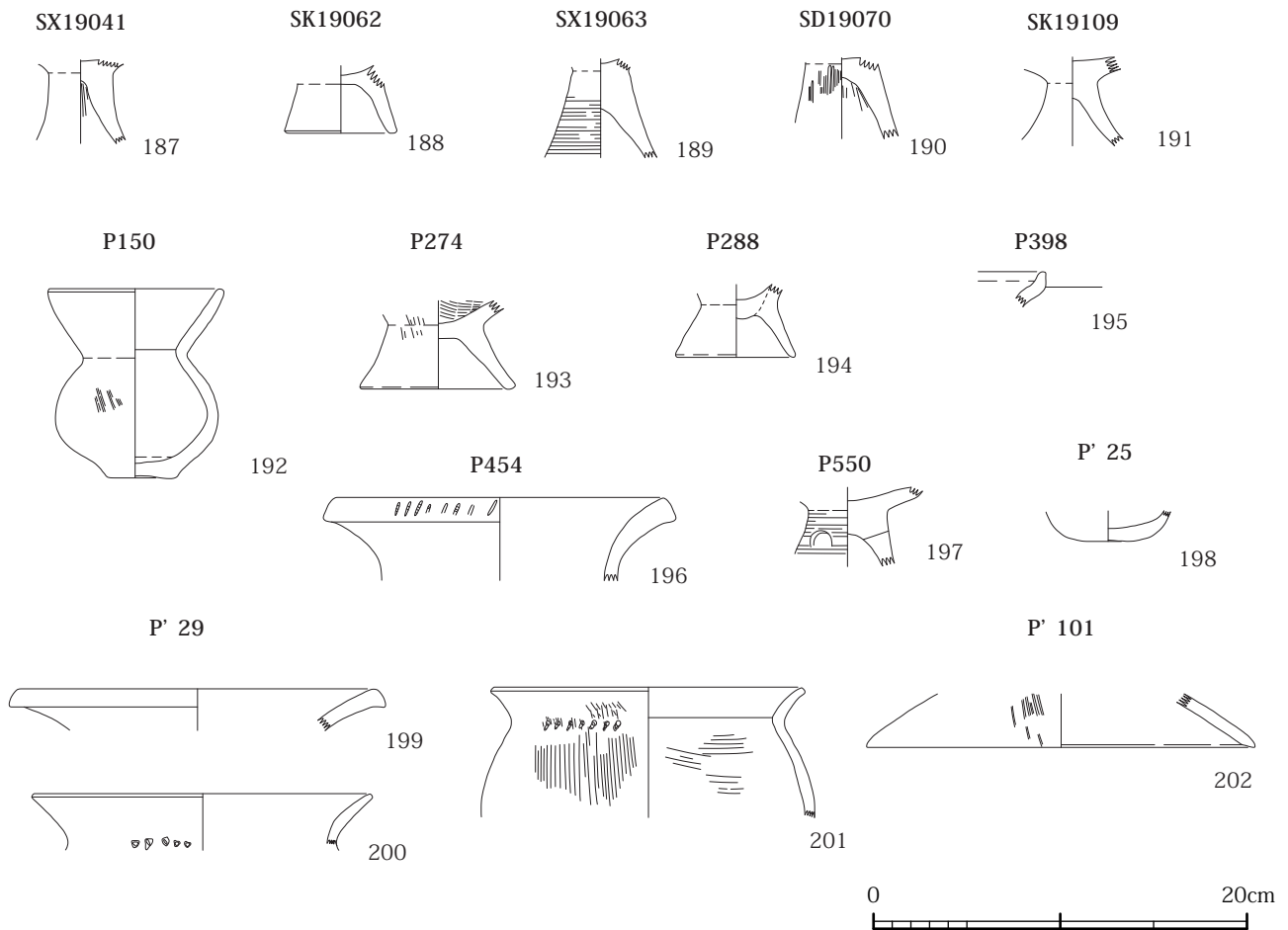


Fig.94 弥生・古墳時代の遺構出土遺物 (S=1/4)

端部のみ遺存する資料で、端部内面には内傾面を有する。

全て弥生時代後期～古墳時代初頭に位置付けられる。192 はほぼ完形品となる好資料で、廻間 I 式の段階に比定できる。また、201 の年代観は弥生時代後期前半の八王子古宮 I 式から始まり、古墳時代初頭の廻間 II 式頃に終焉する。この時期に営まれた集落や墓域の時間幅と概ね一致するものである。

### 3 古代の遺構 (Fig.95)

古代の遺構は、7 世紀後半頃から本格的に始まり、8～9 世紀代に隆盛する。それ以前の時期のものや 10～11 世紀に降る資料はあまり多くない。遺構の分布は、第 19 次調査区西部、東部～第 22 次調査区で密となり、中央部は疎らである。第 19 次調査区西部においては、直線的に開掘された道路遺構が中心となり、これが廃絶した後も生業が営まれる。第 19 次調査東部では掘立柱建物等による居住域を検出したが、全体的には土坑状の遺構の確認が主となる。なお、建物にまともらない単独のピットから、比較的良好に遺物が出土している特徴がある。

#### 【柵列 SA19044 (Fig.96・97)】

構成 P100・167～169・172。

重複 ピット (遺物なし) → P167。P168 → P112。P132・167・172 → SD19008。

平面・規模 5 間の規模を検出した。西側は不明であるが、東側一帯に既存建物にかかる攪乱範囲が広がるため、この方向に更に伸びる可能性を残す。総長 9.4 m で、柱間は西から 1.2 m + 1.5 m + 1.6 m + 2.1 m + 3.0 m を測る。東に向けて柱間を大きくする。主軸方向は W-6° -N とほ



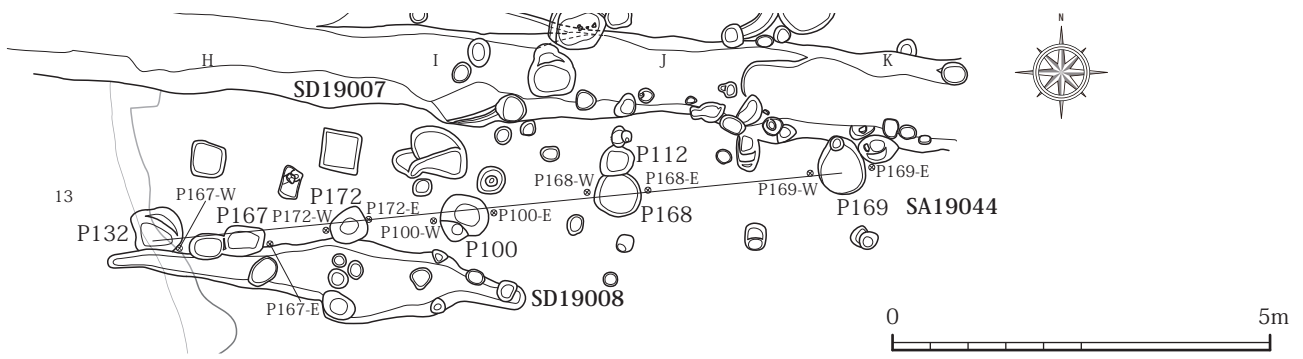
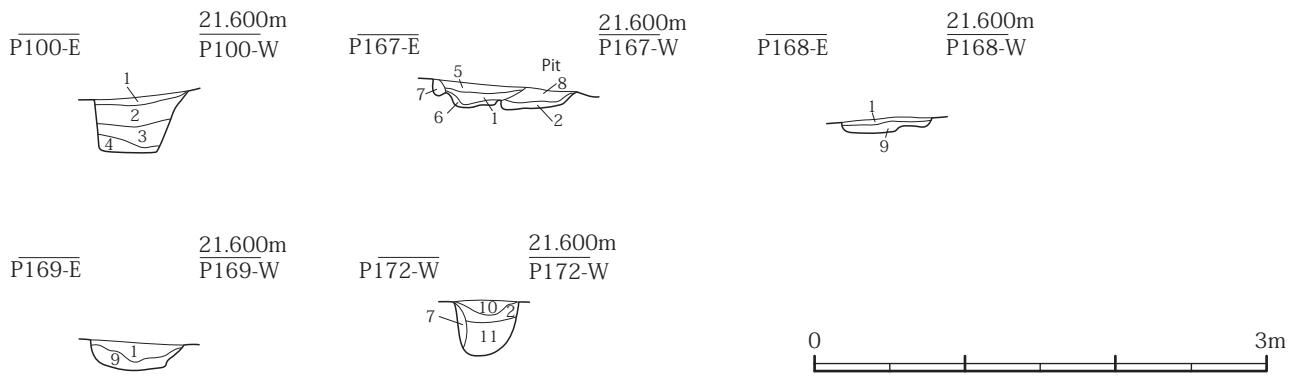


Fig.96 SA19044 平面 (S=1/100)



- |  |  |
|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>1 黒褐色細砂 (10YR2/3) 粘性弱い</li> <li>2 黒褐色シルト (10YR2/3) 粘性弱い 地山ブロックを少量含む</li> <li>3 黒褐色シルト (10YR2/2) 粘性弱い 細砂を含む</li> <li>4 3に地山ブロックを多量包含する</li> <li>5 黒褐色細砂 (10YR2/3) 地山ブロックを多量含む</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>6 黒褐色細砂 (10YR2/2) 地山ブロックを多量含む</li> <li>7 黒褐色細砂 (10YR2/2) 粘性弱い</li> <li>8 黒褐色細砂 (10YR2/2) 粘性弱い 地山ブロックを多量含む</li> <li>9 黒褐色シルト (10YR2/2) 地山ブロックを少量含む</li> <li>10 黒褐色細砂 (10YR2/3) 粘性強い</li> <li>11 黒褐色シルト (10YR3/2) 粘性弱い 地山ブロックを少量含む</li> </ul> |
|--|--|

Fig.97 SA19044 土層断面 (S=1/50)

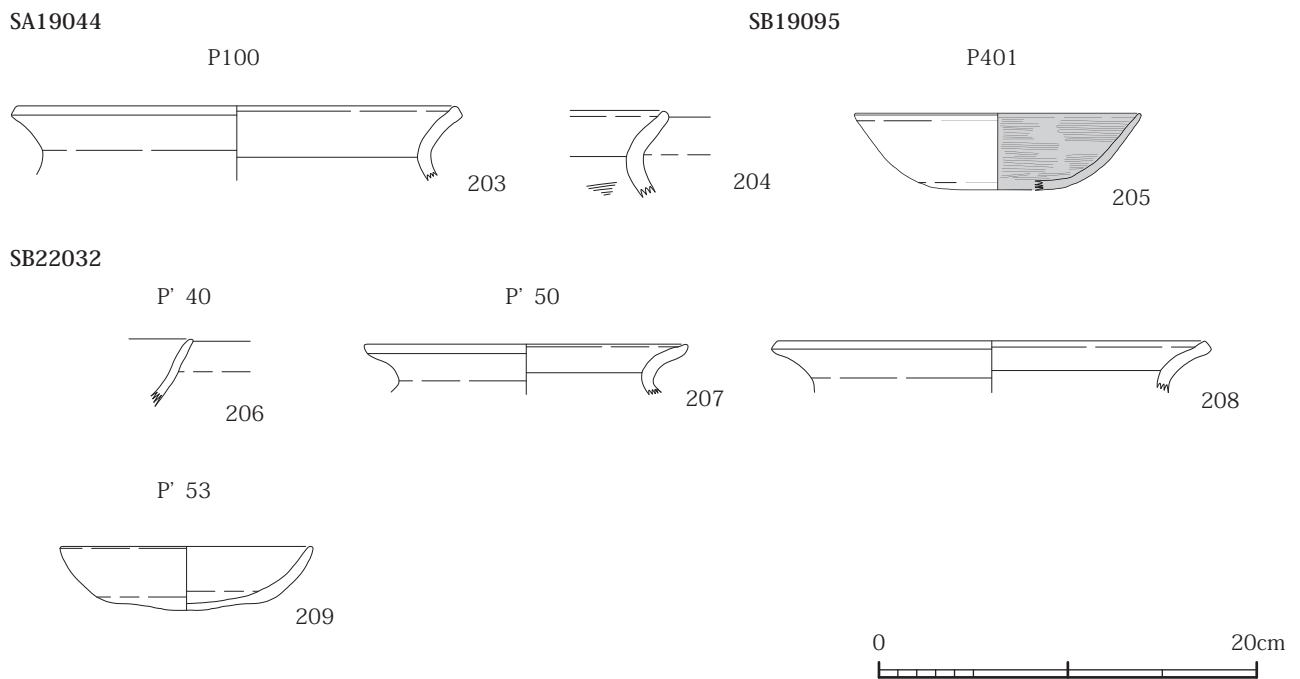


Fig.98 SA19044・SB19095・22032 出土遺物 (S=1/4)



ぼ正方位に直交する。構成するピットは、直径0.4～0.8 mのやや大振りの円形状を呈し、検出面からの深さは0.1～0.35 mを測る。

**遺物** P100から土師器甕(203・204)が出土した(Fig.98)。P172からも土師器及び須恵器が出土しているが、図化できる資料は得られなかった。

**土師器甕(203・204)** 共に口縁部端部をやや上方へ摘み上げ、口縁部内外面はヨコナデ調整される。203は口縁部外端に明瞭な面を有する。

**時期・性格** 203・204は口縁部の特徴から、概ね9世紀頃の産物であると比定できる。西部のピットを切るSD19008は中世の区画溝である。P168を切るP112からは古代の土師器及び須恵器片が出土しているが、時期の絞り込みに繋がる遺物はない。

**【掘立柱建物SB19095 (Fig.99～101)】**

**構成** P399～404・406～408・732。

**重複** SH19015→P406～408。P540→P400。P504→402。P405→P732。

**平面・規模** 3間×2間の側柱建物である。北方向には多数のピットが存在し、その方向へ延びる可能性もあるが、攪乱範囲と重複するために確証を得ない。梁間4.3m、桁行5.4mを測り、東西方向に長い長方形の平面形をなす。主軸はW-7°-S方向を向ける。構成するピットの規模は、直径0.35～0.8 mの円形状を呈し、検出面からの深さは0.1～0.45 mを測る。

**遺物** P401から黒色土器椀(205)が出土した(Fig.98)。他にも、P399・400・402～404から土師器が出ているが、細片資料につき図化は行っていない。

**黒色土器椀(205)** 平底で無高台である。口縁部は直線的に外反し、口縁部端部を丸く収める。内面全体に黒化処理が施され、丁寧にヘラミガキされる。

**時期・性格** 205は9世紀前半～中葉に属すると考え

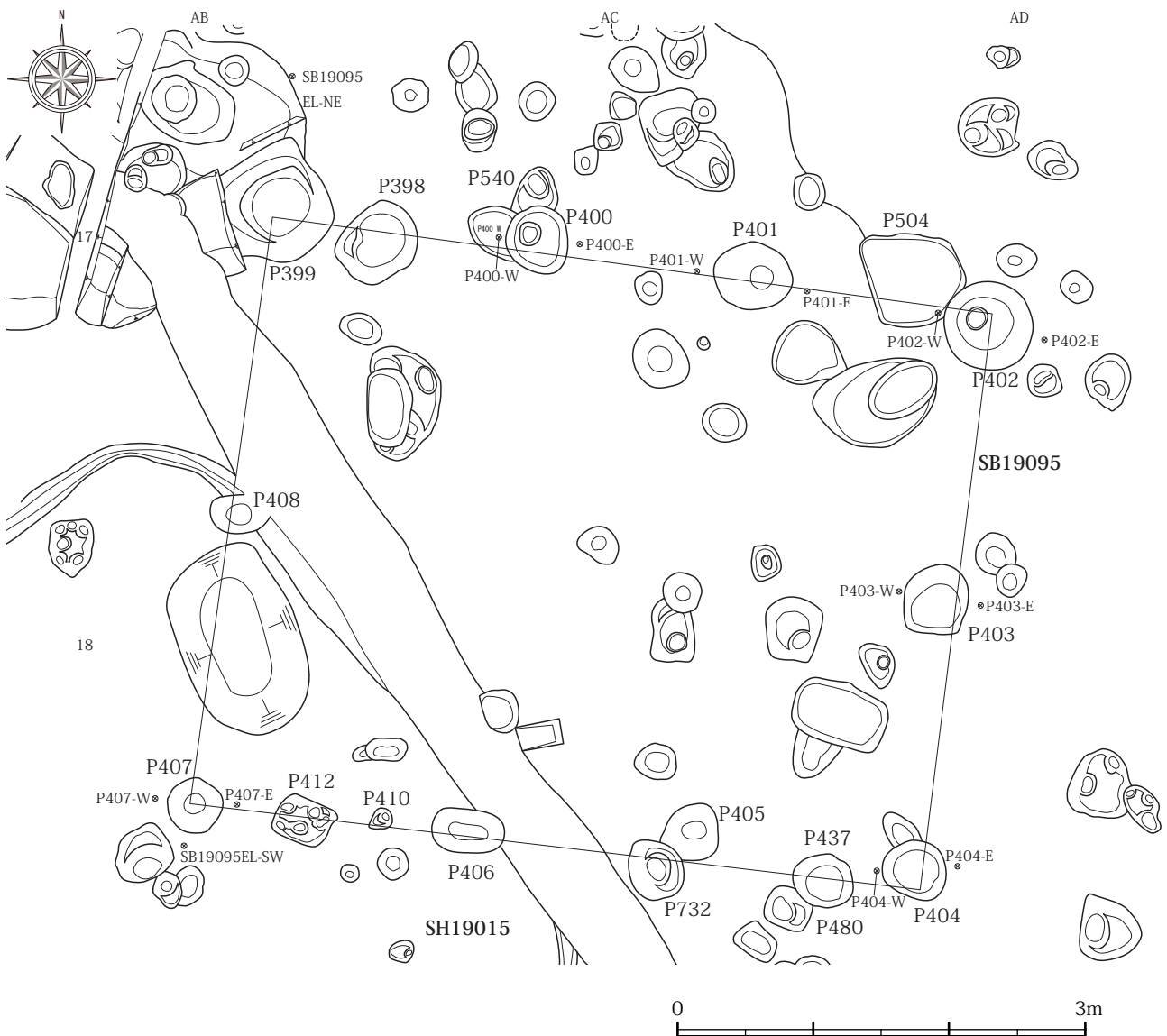


Fig.99 SB19095 平面 (S=1/50)

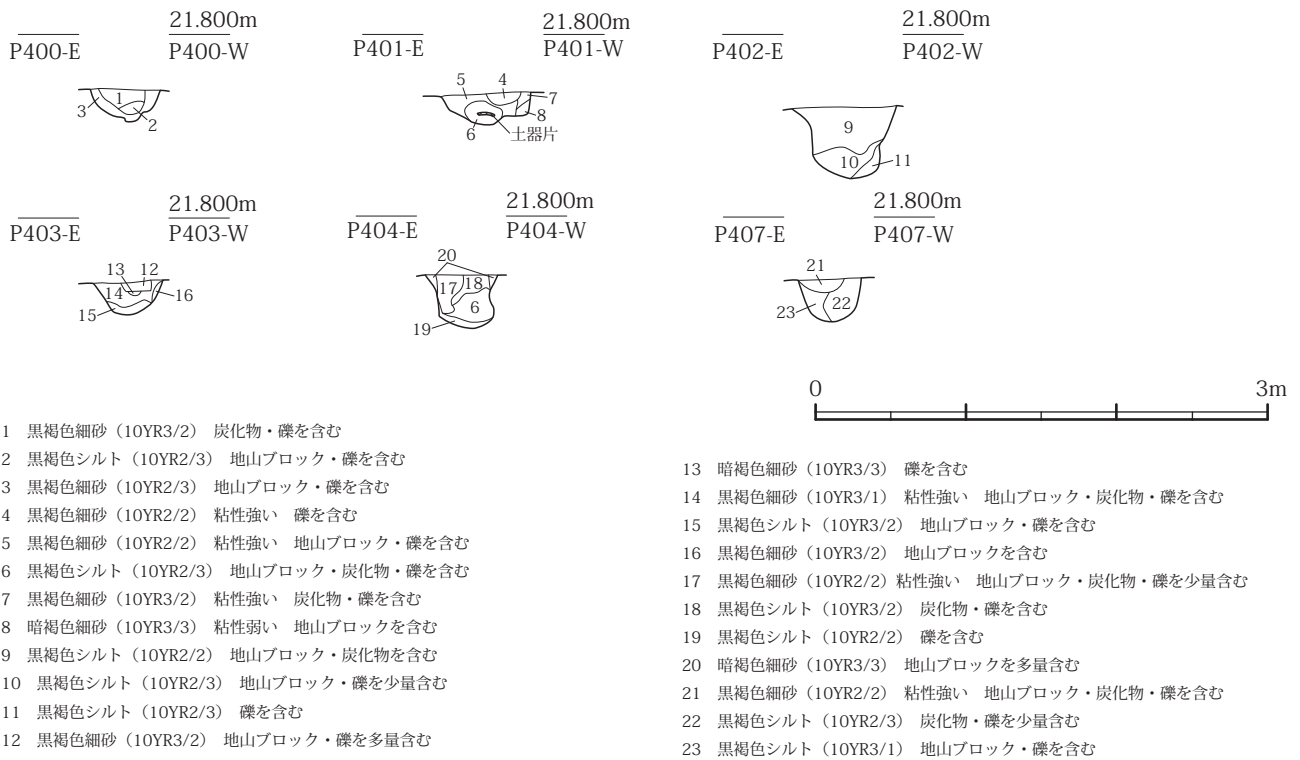


Fig.100 SB19095 土層断面 (S=1/50)



Fig.101 SB19095 断面 (S=1/50)

られる。古墳時代初頭のSH19015に後出するが、それ以外の重複遺構からの有意な遺物の出土はない。南辺の柱筋上東部に存在するP437からは縄文土器深鉢(23)、北辺西部のP398からは弥生土器甕(195)が出土している。

【掘立柱建物SB22032 (Fig.102・103)】

構成 P'40 (41 ?)・42・50・53・58・64・71・113。

重複 P'112 → P'50。P'73 → P'71。

平面・規模 2間×2間の側柱建物である。梁間2.8m、桁行3.1mを測る。主軸方向はW-5°-Nを示し、正方形に近い平面形状を呈する。構成するピットは概ね円形状をなし、直径0.4～0.55m、検出面からの深さ0.28～0.6mを測る。P'53・64は特に深く掘削される。なお、3辺は2間の規模に造られているが、西辺のみ3間になる可能性がある。北西部のピットは未検出であるものの、本来の西辺の規模を想定すると、これを等分する箇所に

P'40・42が配される。変則的な柱の配置になり、掘立柱建物の構造の詳細は不明であるが、非常に興味深い事例である。

遺物 P'40から灰釉陶器碗(206)、P'50から土師器甕(207・208)、P'53から土師器坏(209)等、比較的多数の遺物が出土した(Fig.98)。その他にも、P'42から土師器及び須恵器、P'64・71・113から土師器が出土しているが、全て細片資料であるため、図化が可能なものではない。

灰釉陶器碗(206) 口縁部一部のみを留める資料で、口縁部は緩やかに外反する。内外面に施釉が確認できる。外面の施釉は薄い。

土師器甕(207・208) 共に口縁部端部を僅かに上方へ摘み上げる。207は頸部の屈曲が強い。208は口縁部外端に明瞭な面をもつ。

土師器坏(209) 口縁部は直線的に外反する。底部に焼き歪みが生じており、薄手である。

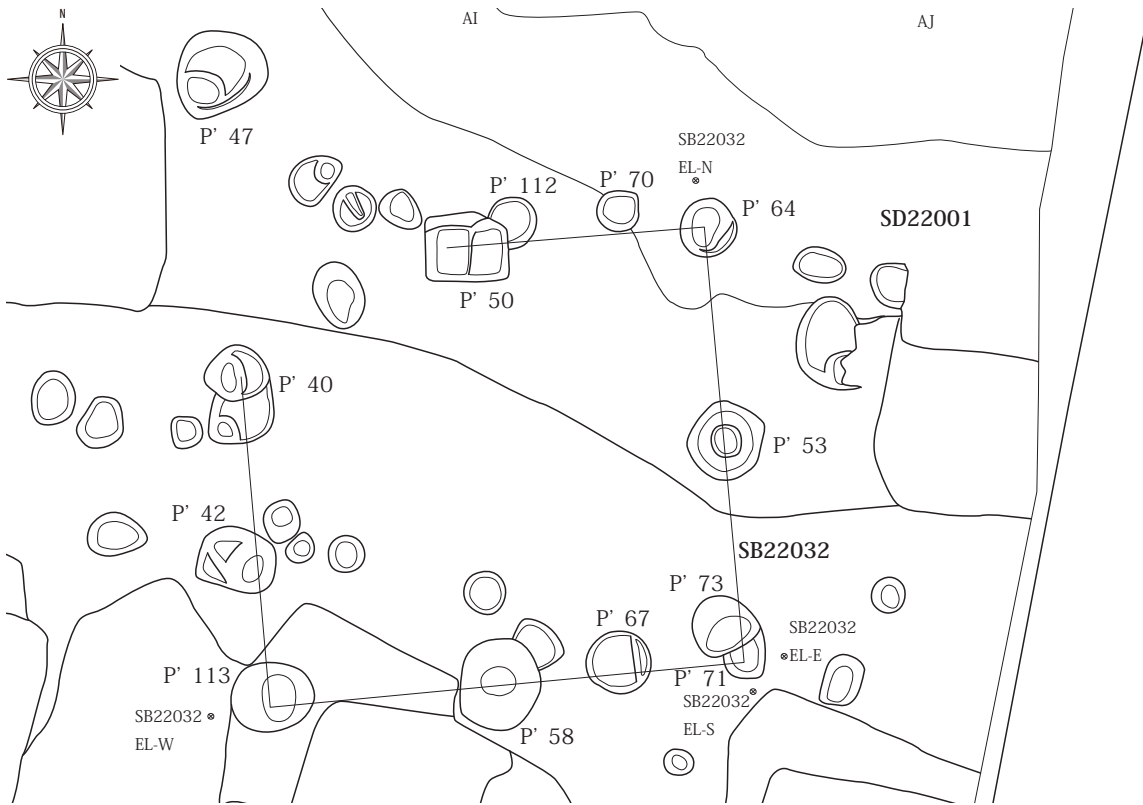


Fig.102 SB22032 平面 (S=1/50)

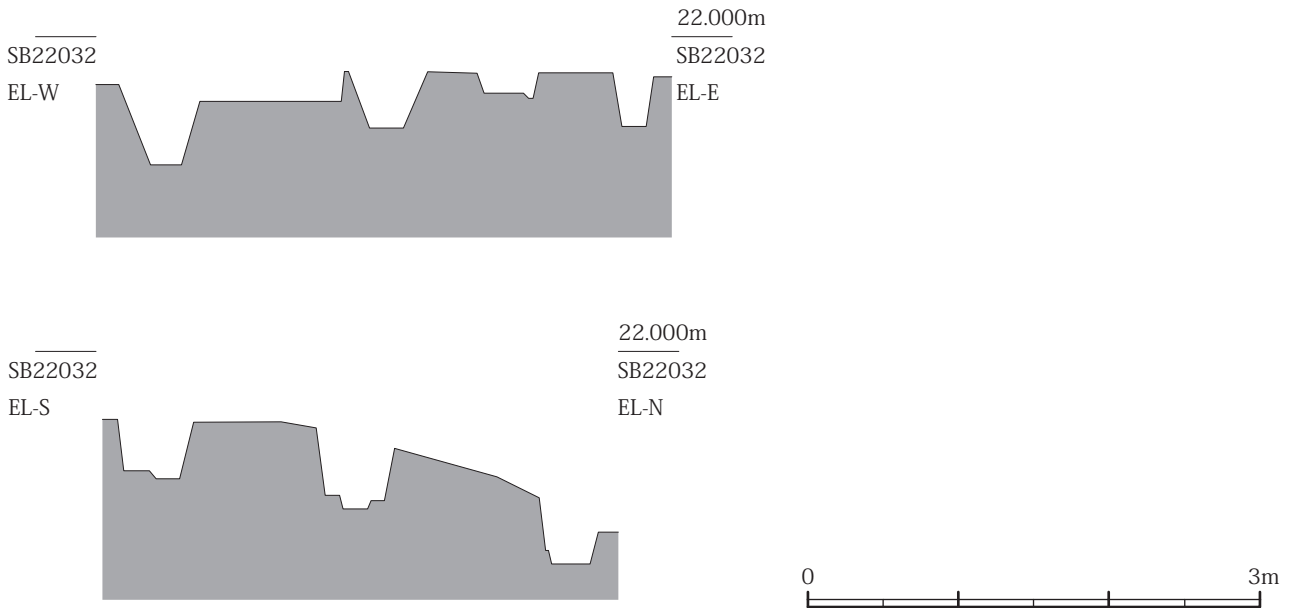


Fig.103 SB22032 断面 (S=1/50)

**時期・性格** 206 は猿投窯編年の K90 窯式の段階で、9 世紀後半に属するものと考えられる。南辺の柱筋上にある P'67 からは縄文土器、P'71 に先行する P'73 からも縄文土器、P'50 を切る P'112 からは古代の土師器が出土している。なお、西辺の北方向の延長上には P'47 が存在し、直径 0.6 m、検出面からの深さ 0.35 m を測る。柱の位置・間隔を鑑みると、SB22032 を構成するピツ

トとして申し分なく、土師器坏 (353) が出土している。しかし、単独で検出されたため、SB22032 に伴うとは言い切れない。

**【溝 SD19020 (Fig.104・105)】**

**重複** SD19004 → SD19020。

**平面・規模** 幅 0.55 ~ 0.8 m、検出面からの深さ 0.15 m を測る。東西方向は共に途切れており、検出した長さ

は 3.0 m である。溝の立ち上がりは緩やかで、断面は皿状を呈する。主軸は W-12° -N 方向を指す。

**遺物** 図化可能遺物ではないが、土師器甕及び須恵器壺が出土している。

**時期・性格** 弥生時代後期～古墳時代初頭の SD19004 の上面において検出した。土師器甕は長胴タイプになると見られ、7～8 世紀を中心とする時期に属するものと考えられる。位置的には SA19037 の柱筋上にあるが、新旧関係は不明である。また、溝の肩が 0.09 m と近接する SD19024 は中世の所産である。

**【溝 SD22021 (Fig.106・107)】**

**重複** ピット (遺物なし) → SD22021。

**平面・規模** 既存建物の下面において検出したため、攪乱の影響を強く受ける。北部及び南部は完全に削平されてしまっているため、全体の規模は不明である。幅 1.2 m を測り、検出した長さは 2.8 m である。検出面からの深さは、0.12 m を測る。

**遺物** 土師器甕 (210) が出土した (Fig.110)。

**土師器甕 (210)** いわゆる清郷型甕で、口縁部及び凸帯部は丁寧にヨコナデされる。凸帯部は上方に摘み上げられ、先端部はやや尖る形状を示す。

**時期・性格** 210 は永井宏幸氏による清郷型鍋 (甕) 編年 (以下、永井編年と呼称) の第Ⅲ期に比定でき、その年代観は 10 世紀後半～11 世紀に求められる。重複するピットからの遺物出土はない。湾曲する形状を示し、周溝状遺構のコーナー部分に該当するものと見られる。

**【溝 SD22022 (Fig.106・107)】**

**重複** SD22022 → ピット (遺物なし)。

**平面・規模** 大部分を攪乱され、僅かに南肩のみ残す。また、周囲には既存建物による攪乱と見られる SX22018 等が存在する状態で、遺存状態は著しく不良である。幅 0.6 m 以上、検出した長さは 3.3 m を測る。

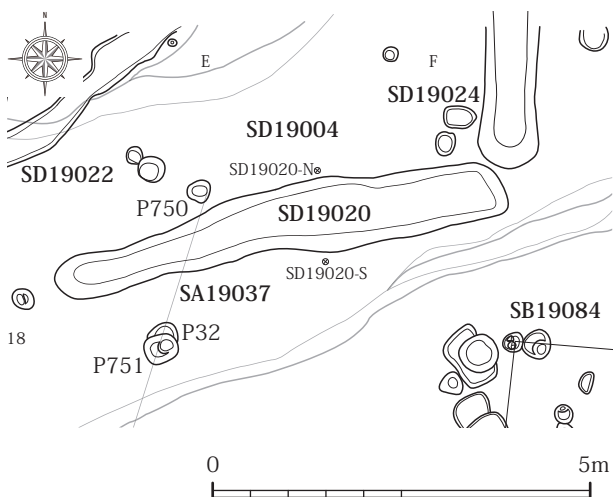


Fig.104 SD19020 平面 (S=1/100)

検出面からの深さは計測不能である。

**遺物** 土師器及び灰釉陶器壺が出土しているが、図化の対象となる遺物はなかった。

**時期・性格** 出土遺物から得られる情報は乏しいが、破片資料である灰釉陶器壺は山茶碗の前段階の資料で、猿投窯編年の百代寺窯式に属するものと見られる。後出するピットからは遺物が全く出ていない。形状及び埋土の状況を類推すると、SD22021 が湾曲して SD22022 に繋がり、一連の溝になると考えられる。併せて 11 世紀前半の年代観を想定したい。該当する平安時代後期の遺構はあまり多くなく、遺構の周囲への広がりも攪乱によって大変茫漠としている。

**【土坑状遺構 SX22005 (Fig.108・109)】**

**重複** ピット (遺物なし) → SX22005 → ピット (遺物なし)。

**平面・規模** 既存建物に起因する攪乱のため、方形遺構の北西コーナー部分のみの遺存に留まる。攪乱の影響か、北辺が不整となる。検出した規模は東西 2.6 m、南北 1.4 m を測り、検出面からの深さは 0.02～0.05 m と浅い。主軸方向は概ね W-38° -S を示す。

**遺物** 須恵器環 (211) が出土した (Fig.110)。

**須恵器環 (211)** 口縁部は外反し、底面に貼り付けられた高台は低い。直径 0.3～0.6cm の礫を包含する。底部は焼き歪んでおり、ほぼ接地する。

**時期・性格** 211 は猿投窯編年の NN32 窯式期で、8 世紀後半に帰属するものと考えられる。北部で後出するピットからは遺物が一切出土していない。SX22005 は部分的な確認に留まるために確証を得ないが、竪穴住居の可能性も考えられる。なお、「Ⅲ 調査の方法 3 解体工事 (第 22 次)」においても述べたが、既存建物内部の基礎等の解体・撤去時期にかかる問題で、第 22 次調査 1 区中央部及び東部に対しては、先行してトレンチ調査を行った。平面図に示した青色のラインは、トレンチ 2 調査区を表すものである (Fig.108)。トレンチ 2 の外側は既存建物基礎の直下にあたり、より攪乱の影響が強い。

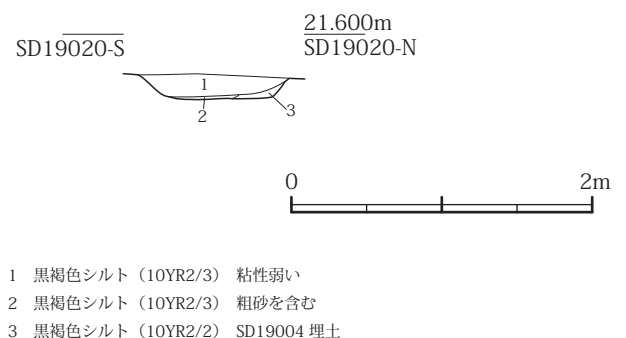


Fig.105 SD19020 土層断面 (S=1/50)



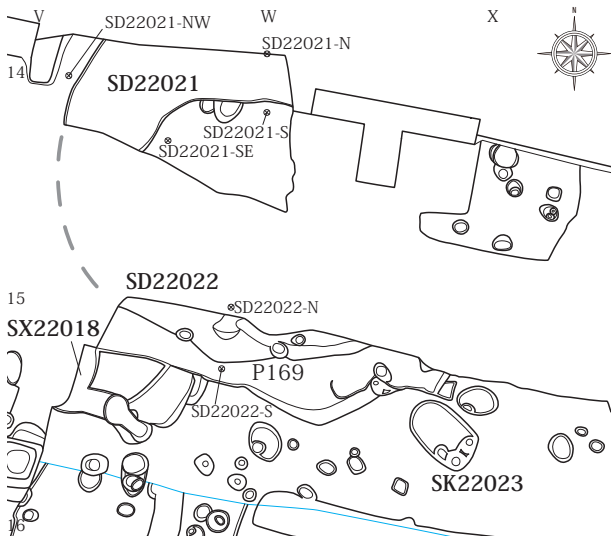
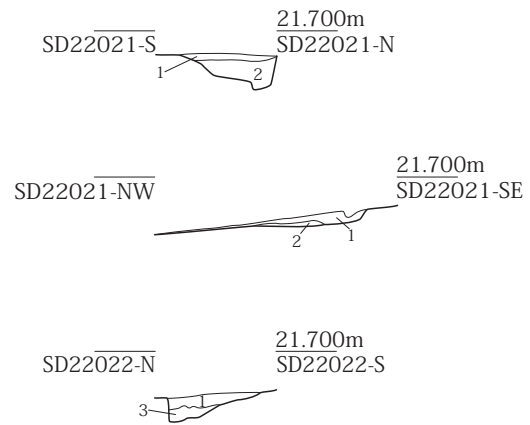


Fig.106 SD22021・22 平面 (S=1/100)



- 1 黒褐色シルト (10YR3/1) 地山ブロックを少量含む
- 2 黒褐色シルト (10YR3/1) 極細砂・地山ブロックを微量含む
- 3 黒褐色シルト (10YR3/2) 粘性強い 地山ブロック・焼土を微量含む

Fig.107 SD22021・22 土層断面 (S=1/50)

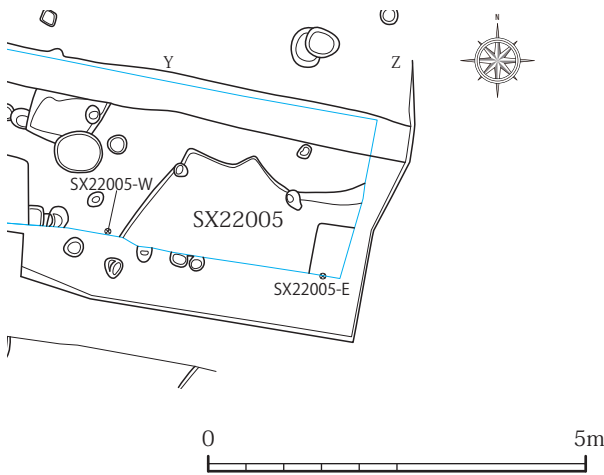
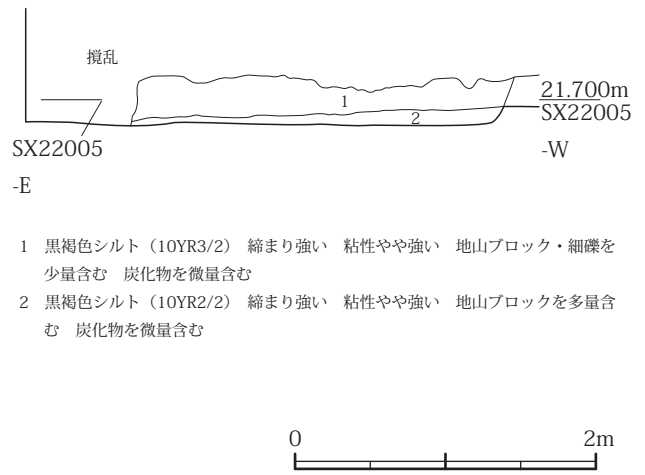


Fig.108 SX22005 平面 (S=1/100)



- 1 黒褐色シルト (10YR3/2) 締まり強い 粘性やや強い 地山ブロック・細礫を少量含む 炭化物を微量含む
- 2 黒褐色シルト (10YR2/2) 締まり強い 粘性やや強い 地山ブロックを多量含む 炭化物を微量含む

Fig.109 SX22005 土層断面 (S=1/50)

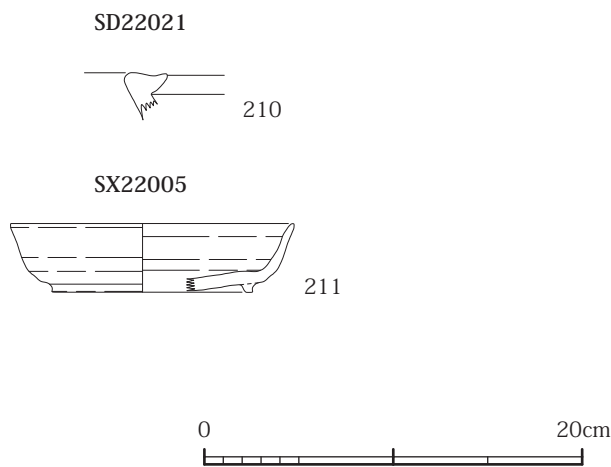


Fig.110 SD22021・SX22005 出土遺物 (S=1/4)

SX22005 の北辺及び西辺の延長等、掘り込みの浅い遺構は失われてしまったものと推測できる。SX22005 の西部にはピットを数基確認したが、関係性は判然としない。

【土坑 SK19073 (Fig.111・112)】

重複 SX19074 → SK19073

平面・規模 長軸 2.0 m, 短軸 1.8 mを測るやや大型の円形状土坑である。検出面からの深さは 0.25 mを測る。主軸方向は W-1° -S とほぼ正方位に直交する。周囲には先行する SX19074 が広範に存在する。

遺物 土師器甕 (212～216)・坏 (217) が出土した (Fig.114)。全体的に遺物を多量に包含しており、その遺存状態も良好である。

土師器甕 (213～217) 212 は口縁部を欠くが、長胴甕の体部の中央～下方の資料となる。内外面がハケ調整されるが、体部下半外面は横位のヘラケズリが施され

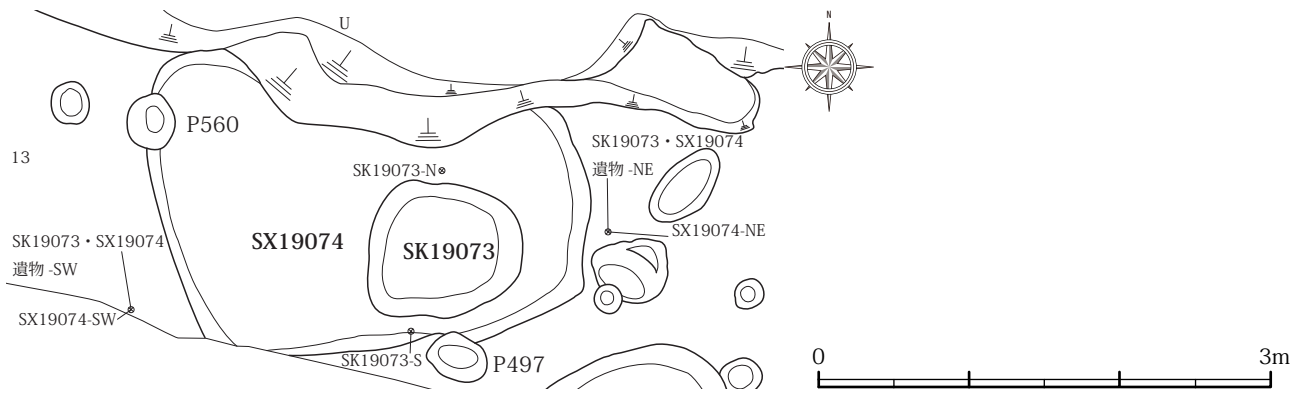


Fig.111 SK19073・SX19074 平面 (S=1/50)

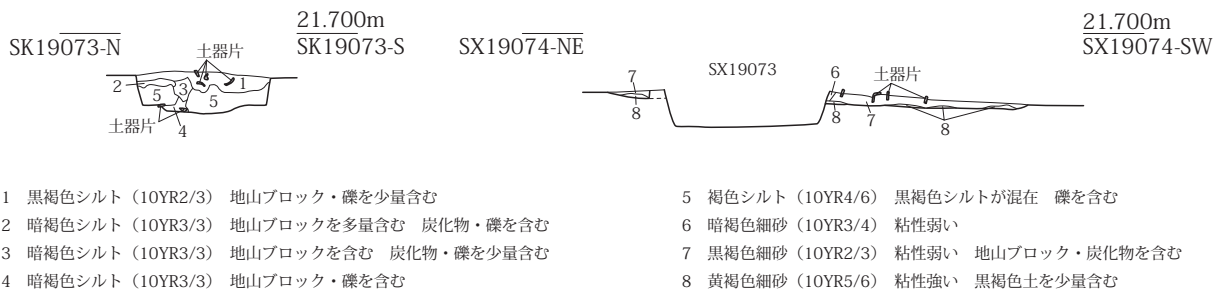


Fig.112 SK19073・SX19074 土層断面 (S=1/50)

る。213～216は全体的に粗いハケで調整される。214は口縁部端部をやや上方へ摘み上げられ、頸部の屈曲が強く、底部は上げ底である。215は口縁部上端に明瞭な面を有し、口縁部内面には僅かに凹みを観察できる。体部内面に施されたハケはやや細かく、外面とは異なる工具が使用されたものと考えられる。216は口縁部端部が上方へ直立するように屈曲している。

**土師器環 (217)** 小型で平底の坏である。口縁部は直線的に外方へ開く。口縁部端部はやや内傾する。

**時期・性格** 出土遺物の特徴から、9世紀の所産であると考えられる。遺物は良好に復元されるものが多かったが、その出土状況は破片資料が万遍なく分布し、特に上層に集中するものであった (Fig.113)。周囲のSX19074からも土師器甕が良好に出土しており、SK19073出土品とほぼ同レベルで近接しているが、SK19073はSX19074を明確に掘り込んで造られており、別遺構となる。

**【土坑状遺構 SX19074 (Fig.111・112)】**

**重複** SX19074 → SK19073, P497・560。

**平面・規模** 北部を水槽升、南西部を既存建物によって深く攪乱される。長軸 5.5 m、短軸 4.2 mを測る。方形状プランの北西・南東コーナーが遺存しているため、概ねこの規模に落ち着くものと見られる。検出面からの深さは 0.05～0.1 m程度である。主軸は W-13° -N 方向を向く。

**遺物** 土師器甕 (218～220)・甑 (221) が出土した (Fig.114)。

**土師器甕 (218～220)** 218・220は口縁部端部を僅かに上方に摘み上げ、体部のハケ調整は磨滅のために不鮮明である。219は口縁部端部が明瞭に摘み上げられ、口縁部外端には面を有する。この面の中央部は凹線状に窪められる。体部は下方に向けて薄手に作られる。

**土師器甑 (221)** 底部のみを残す資料であるが、体部は底部から上方に向けて直線的に立ち上がり、円筒状を呈するものと考えられる。器面の調整は体部外面をタテハケ、内面をヨコハケで調整する。底部下端にはヘラケズリが観察でき、内外面を円周に沿うように施される。

**時期・性格** 9世紀のSK19073に先行する。その他の後出するピットからは、時期の詳細を決定する遺物の出土はない。SX19074はその出土遺物の特徴から、SK19073とほぼ同時期、若しくはやや遡る時期に比定できよう。遺物の出土状況については非常に注目すべき点があり、土坑の中央部からやや南西寄りの箇所において、2個体の土師器甕 (219・220) が口縁部を上方に向けて出ている (Fig.113)。更に横断面の観察では、体部下半が失われ、打ち欠いて据え置かれたような状況であった。SX19074については、その形状及び規模から竪穴住居の可能性が考えられる。そうすると、特徴的な出土状況を呈する土師器甕の付近には竈が存在し、これらの遺物が燃焼部における支脚となる可能性が想定でき

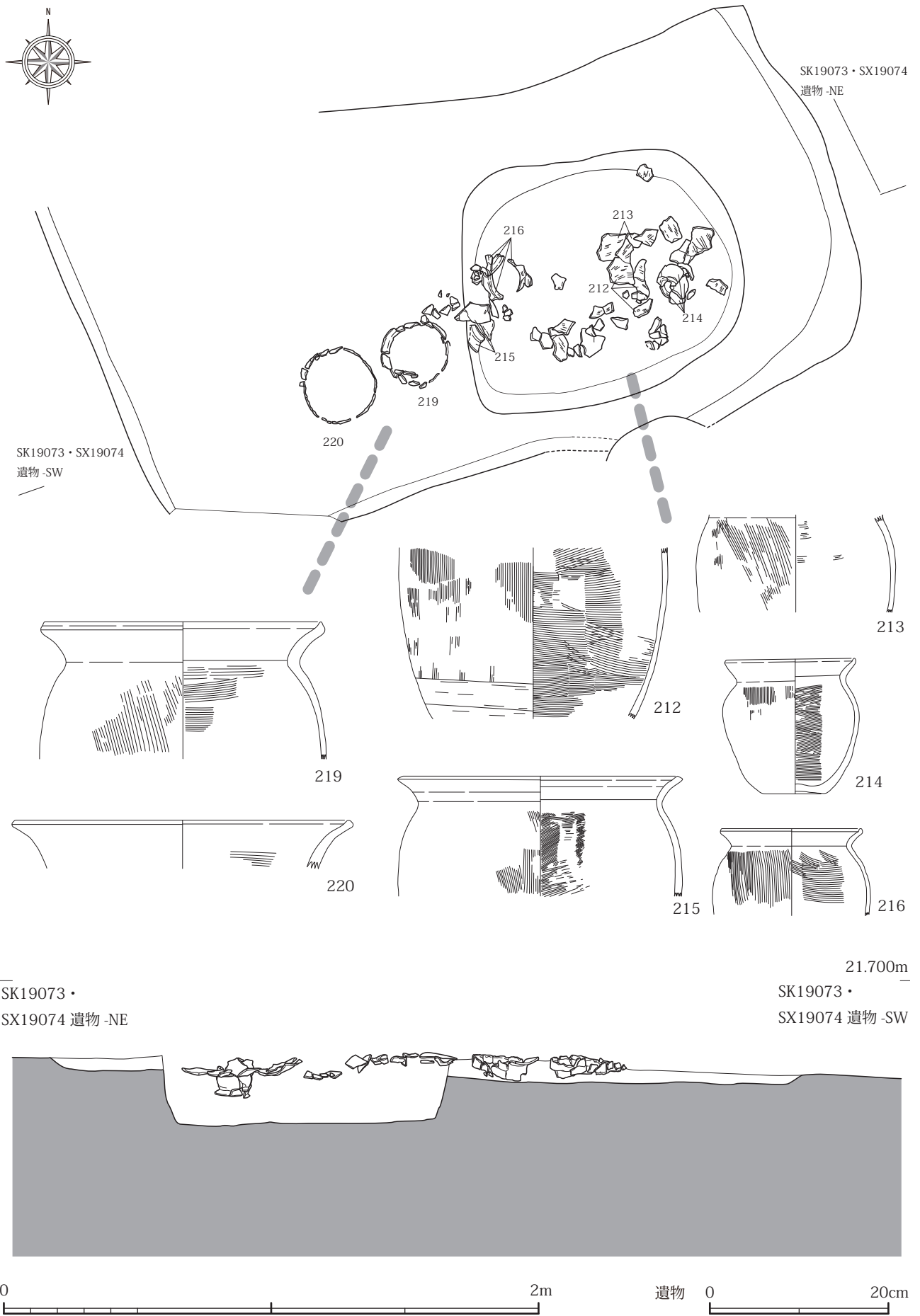
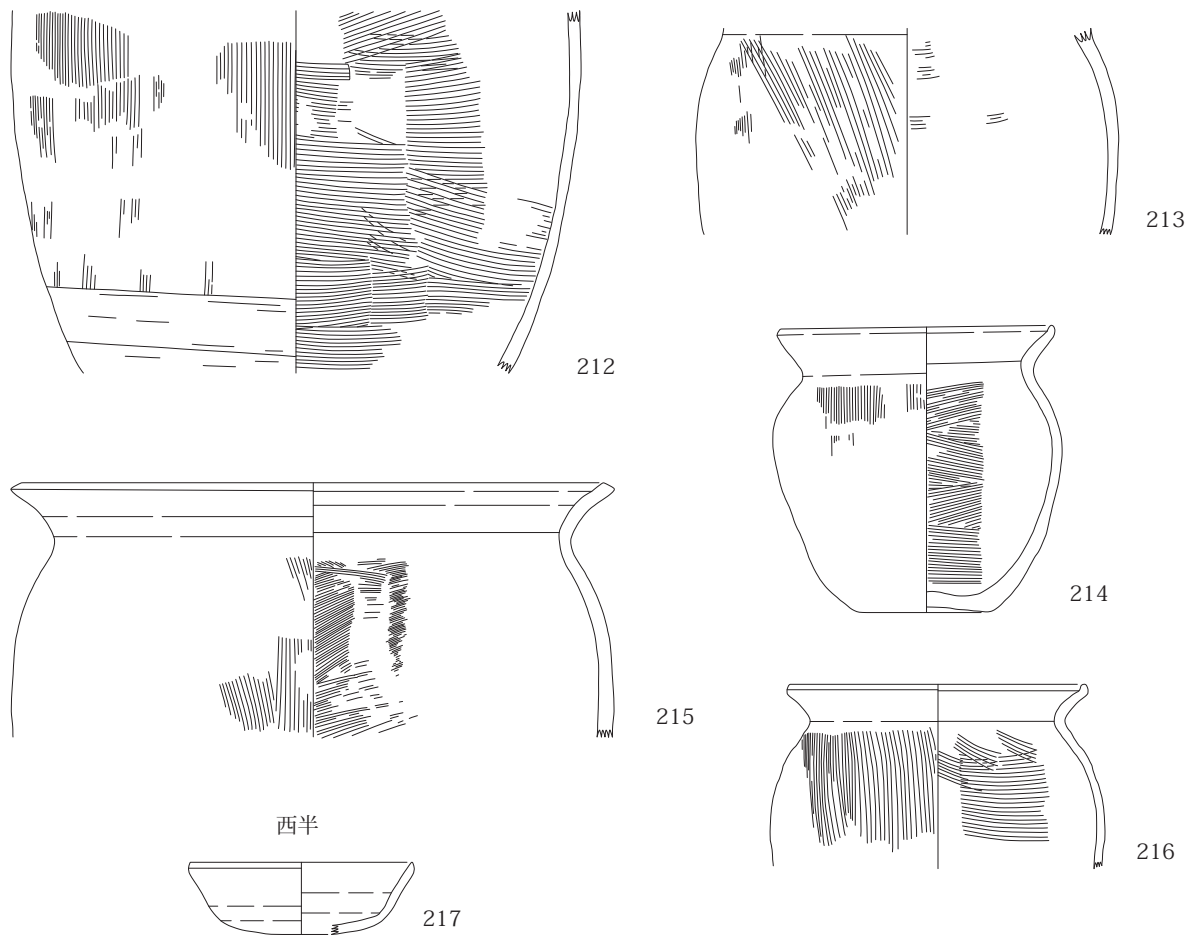


Fig.113 SK19073・SX19074 遺物出土状況 (S=1/20 遺物：S=1/6)

SK19073



SX19074

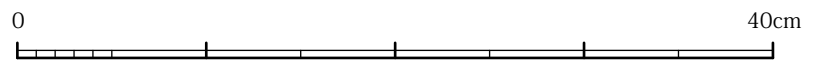
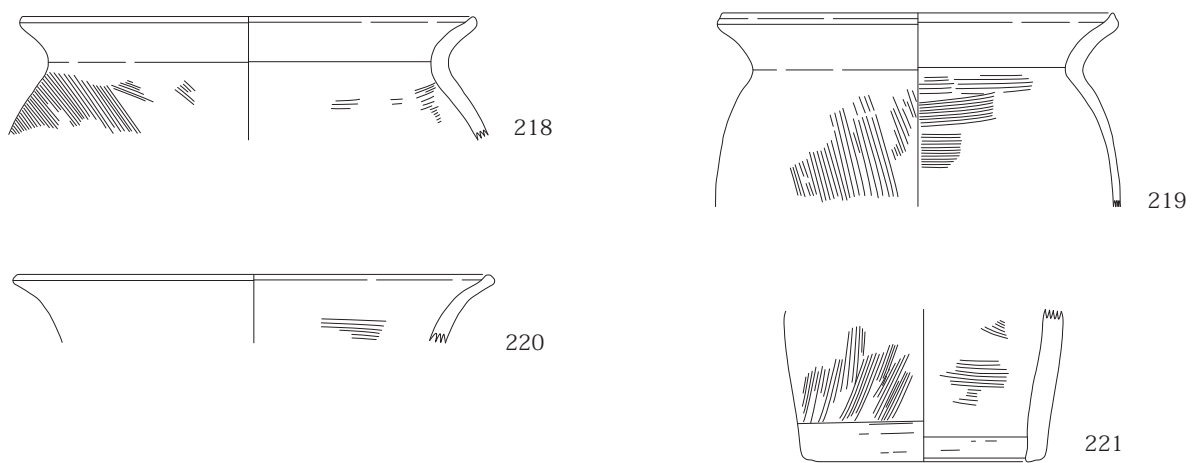


Fig.114 SK19073・SX19074 出土遺物 (S=1/4)



る。土師器甕の体部上半以上を残し、口縁部上面のレベルをほぼ同一になるように設置されている。但し、遺物の出土付近を含め、SX19074に明確な焼土や炭化物等は認められず、加えて前提となる竈のプランの検出にも至らなかった。特徴的な出土状況が見られる土坑であるが、現状ではその性格付けが困難であるため、類例の増加を待つこととし、今後の検討材料としたい。

【土坑状遺構 SX19017 (Fig.115・116)】

重複 SH19018, P682・685・686 → SX19017

平面・規模 長軸 2.8 m, 短軸 1.8 m, 検出面からの深さ 0.35 ~ 0.5 m を測る。主軸方向は N-35° -E である。大型の円形状の遺構で、西部中央部がくびれ、南東部が東側へやや張り出す形状をなす。

遺物 土師器甕 (222 ~ 224・227・229・230・233)・甕 (225)・高坏 (231), 須恵器壺 (226)・提瓶 (234)・

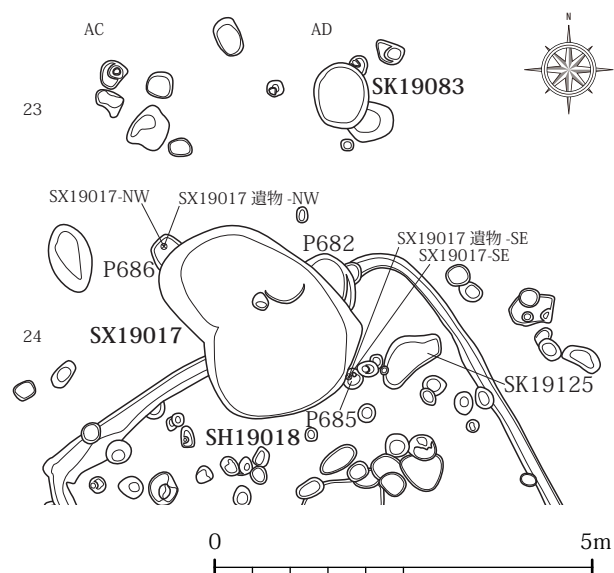
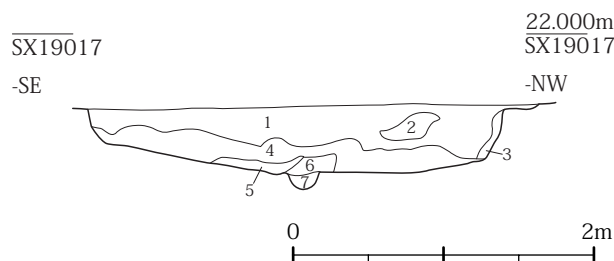


Fig.115 SX19017 平面 (S=1/100)



- 1 黒褐色細砂 (10YR2/3) 粘性弱い
- 2 黒褐色細砂 (10YR2/3) 5 が混在
- 3 黄褐色シルト (5/6) 黒褐色土を少量含む
- 4 黒色シルト (10YR2/1) 地山ブロックを少量含む
- 5 黄褐色シルト (10YR5/6) 粘性強い
- 6 黒褐色シルト (10YR2/2) 粘性強い 地山ブロックを含む
- 7 黒色シルト (10YR2/1) 粘性強い

Fig.116 SX19017 土層断面 (S=1/50)

長頸瓶 (228), 紡錘車 (232) が出土した (Fig.118)。全て上層からの出土であるが、弥生土器甕 (237)・壺 (235)・高坏 (236・238) は混入遺物である。多くは重複する SH19018 に関連するものと考えられる。

土師器甕 (222 ~ 224・227・229・230・233) 222 は把手の大部分が剥落している。丸底の甕で、体部外面にはハケ調整が密に施される。口縁部端部は丸みを帯び、僅かに摘み上げられる。胎土には金雲母を含む。223 は体部下半のみを残し、外面には密なハケ調整が観察できる。224 は口縁部が長く、体部とはくの字状に直線的に交わる。口縁部端部には内傾面を有し、体部内外面のハケは非常に細かいことが特徴である。227 は頸部の屈曲が強い。口縁部端部は強く摘み上げられ、口縁部外端は拡張して明瞭な面をもつ。229 の底部形状は丸底で、体部外面には煤が付着している。磨滅のため、ハケ調整は僅かに痕跡として認められる。230 は口縁部端部を僅かに上方へ摘み上げられ、233 の摘み上げは明瞭である。土師器甕 (225) 口縁部と底部を欠く資料である。体部は円筒状に直立し、把手を有する。把手は緩やかに上方へ向けて湾曲する。

土師器高坏 (231) 口縁部の外反が強く、開きの早い皿状の坏部を有する。口縁部外面はやや凹む。脚部との接合部で剥落しており、磨滅によって不明瞭であるが、外面にはヨコハケ調整が一部残る。

須恵器壺 (226) 口縁~頸部を欠き、肩部を残す資料である。底部が剥落しているため、高台の有無は不明である。壺と捉えたが、234 とは接合しないものの、胎土の質や器壁の厚さ等が類似しているため、提瓶になる可能性もある。234 はサブトレンチからの出土品であるが、サブトレンチ設定箇所と 226 の出土位置は乖離するものではない。

須恵器提瓶 (234) 体部は球形状を呈し、肩部には強く屈曲する耳が付帯する。耳は鉤状を呈し、先端部が尖る。

須恵器長頸瓶 (228) 口縁部は剥落しているが、長頸瓶になるものと考えられる。肩部の張り出しが強い。外面は頸部と体部との境が凹線で区別される。底部形状は平底である。

紡錘車 (232) 土師質で、直径 3.5cm の円形状を呈する。中央部が 0.6cm 程窪められ、そこに穿孔される。孔径は 0.4 cm を測る。

弥生土器甕 (237) 受け口甕で、頸部の屈曲が強い。口縁部端部の立ち上がりは明瞭で、ほぼ直立し、口縁部に外端面を形成する。古墳時代初頭に属する SH19018 との関連性が高いものと考えられる。

弥生土器壺 (235) 小型の壺である。底部形状はほぼ

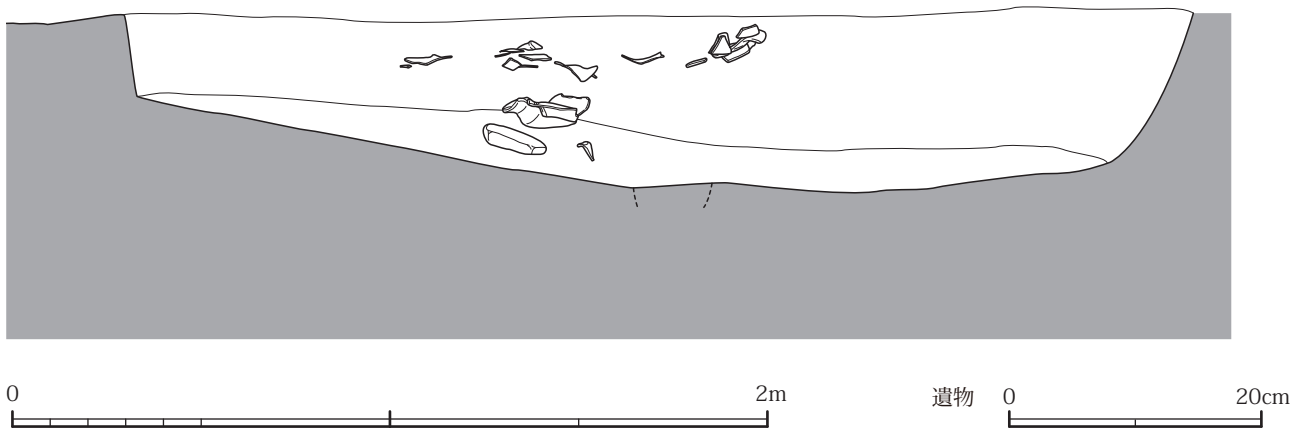
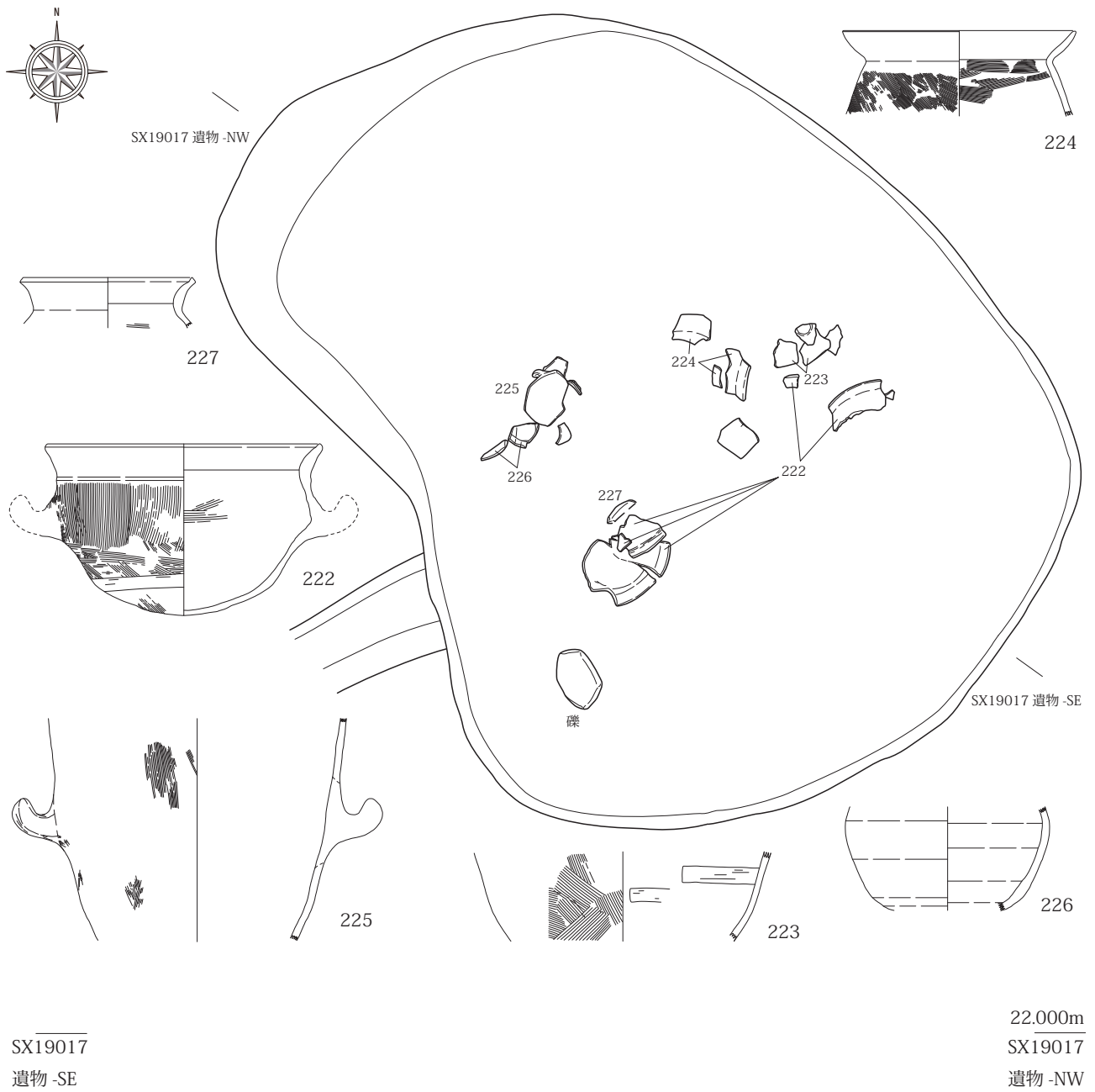
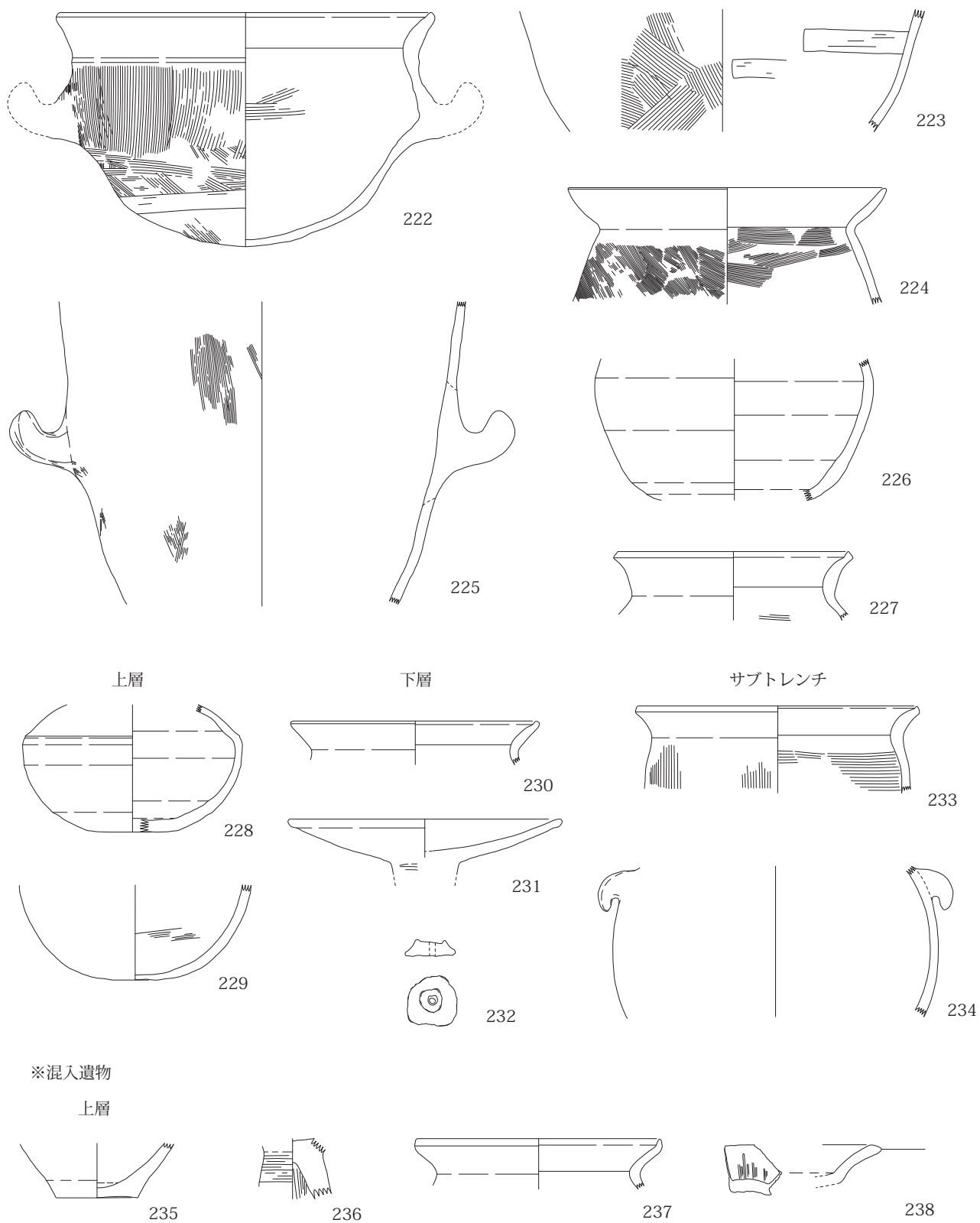


Fig.117 SX19017 遺物出土狀況 (S=1/20 遺物 : S=1/6)



0 40cm

Fig.118 SX19017 出土遺物 (S=1/4)

平底であるが、僅かに上げ底される。

**弥生土器高坏 (236・238)** 236 は外面が 10 条以上の櫛描直線文で装飾され、内面には絞り痕が密に観察できる。238 は有稜高坏である。強く外反する坏部上段のみ遺存する資料で、口縁部上端に明瞭な面を有する。内外面にタテヘラミガキ調整が施されるが、磨滅によってほぼ失われている。外面は黒変している。坏部が浅い段階のものであると推測され、SH19018 を遡る弥生時代後期の山中式前半～中期に比定できる。

**時期・性格** 古墳時代初頭の SH19018 を切り、同じく先行する P682・685・686 の時期の特定には至っていない。遺構の中央部を中心に遺物がまとまって出土した (Fig.117)。多くが上層からの出土であるが、227 は下層からの出土で、222 の出土位置は上層と下層の境となる。出土状況に有意な規則性はない。出土遺物は 8 世紀後半～9 世紀の年代観が考えられ、その他の古代遺構の時期と符合する。当該出土遺物の中では、234 が異質であり、本来であれば 6 世紀～7 世紀前半頃に遡る資料であると考えられる。但し、226 と同一個体である可能性があり、その場合は一括性の高いものとなる。別の古代の遺構と重複する可能性も低く、234 が 8 世紀後半～9 世紀に降ることを示す資料となるのかもしれない。

#### 【土坑墓 SX19035 (Fig.119)】

**重複** P219・221, ピット (遺物なし) → SX19035 → ピット (遺物なし)。

**平面・規模** 不整形の遺構で、北部は東西へ広がる。全体の規模は長軸 3.7 m, 短軸 1.3 m を測り、北部では短軸となる東西方向は 2.6 m にまで広がる。調査時点では認知せずに一括して掘削しているが、北部の SK19129 と南部の SX19035 で別遺構になり、楕円形状を呈する SX19035 が土坑墓になる可能性が高いものと判断される。SX19035 の規模は、長軸 2.9 m, 短軸 1.3 m, 検出面からの深さ 0.25 m を測る。主軸は N-14° -W 方向を向く。SK19129 は、検出面からの深さ 0.1～0.2 m とやや浅い。

**遺物** 土師器甕 (240～245)・坏 (249)・皿 (250・251), 黒色土器碗 (246～248), 須恵器坏 (239) が出土した (Fig.122)。

**土師器甕 (240～245)** 240 の底部は丸底と平底の中間のような形状を呈し、体部は球形状を呈する。240・241 は頸部の屈曲が強く、口縁部端部は丸みを帯び、上方へやや摘み上げられる。242・243 は頸部の屈曲が緩やかであり、口縁部端部の摘み上げは僅かである。243 は口縁部外端面に凹線状の窪みが観察できる。244 は頸部の屈曲が強く、口縁部外端の面が明瞭である。243 と同様、この面が凹線状に僅かに窪む。直径 0.5cm の礫を

包含する。245 は頸部～体部上方を残す資料である。長胴タイプの甕になると見られ、粗いハケ調整される。

**土師器坏 (249)** 小型の坏である。口縁部は直線的に外側へ開き、端部はやや内傾する。口縁部内面はやや凹む。

**土師器皿 (250・251)** 250 は口縁部が緩やかに立ち上がり、251 は口縁部が短く折り曲げられる。250 は口縁部のヨコナデが強く、内面が僅かに凹む。251 は金雲母を多量包含する。

**黒色土器碗 (246～248)** 全て内面全体が黒化処理される内黒である。口縁～体部が直線的に外反する。246・247 は口縁部内面がやや凹む。247 は無高台の平底であることが確認でき、内外面のヘラミガキは密に施される。

**須恵器坏 (239)** 高台はやや低く貼り付けられ、底部端部は接地する。

**時期・性格** 下面にはピットが数基埋没し、その他にも重複するピットが存在するが、時期の分かるものはない。南部下層において、下面に埋没するピットとの境から、239・240 が割れて重なるように出土している (Fig.120)。出土遺物の多くはこの箇所からの出土であり、9 世紀代に比定できる。239 は猿投窯編年の MN32～K14 窯式の産物である。加えて 247 の出土から、9 世紀前半の年代観が考えられる。比較的多量の遺物の出土に恵まれ、黒色土器碗が 3 個体出土しており、非常に注目される。

#### 【ピット P142 (Fig.119)】

**重複** P'57 → P'96。

**平面・規模** 直径 0.4 m を測り、楕円形状を呈する。検出面からの深さは 0.2 m である。プランが南西～南東方向に不整に広がるが、これは P142 の柱の抜き取り痕と考えられる。

**遺物** 土師器甕 (252～255)・坏 (256)・高坏 (257), 須恵器壺 (258) が出土した (Fig.122)。

**土師器甕 (252～255)** 252 は底部の完形に近い資料である。底部形状は丸底で、体部内面のハケ調整は密に施される。体部内面下方の調整は不明であるが、ヘラケズリされているものと見られる。253・254 は内面が細かいハケ調整されるのに対し、外面は粗い。異なる工具が使用されていると考えられる。254 は頸部の屈曲が強い。口縁部端部は丸く収められ、僅かに摘み上げ処理される。255 は磨滅のために調整が痕跡化している。体部の膨らみが強い。口縁部端部はやや面取りされ、外端面を形成する。

**土師器坏 (256)** 平底である。口縁～体部は直線的に開き、口縁部端部を丸く収める。



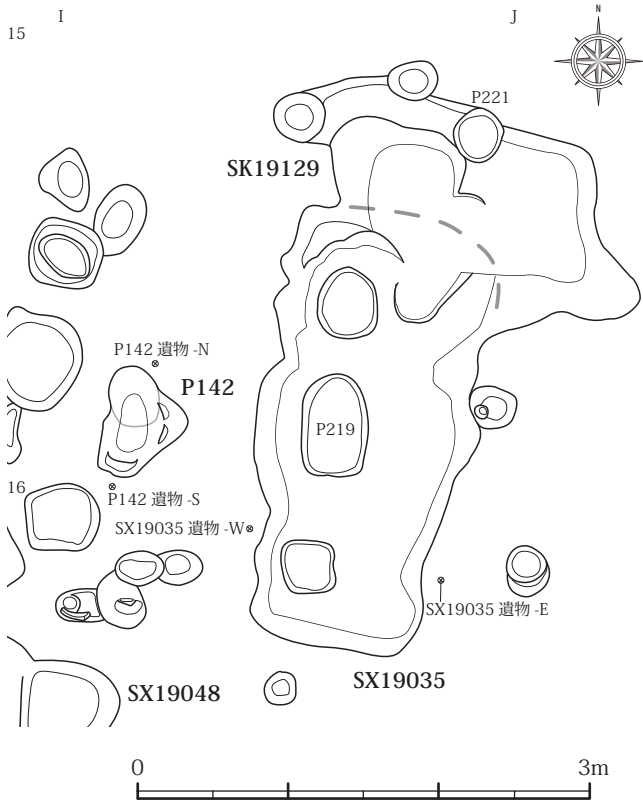


Fig.119 SK19035・SK19129・P142 平面 (S=1/50)

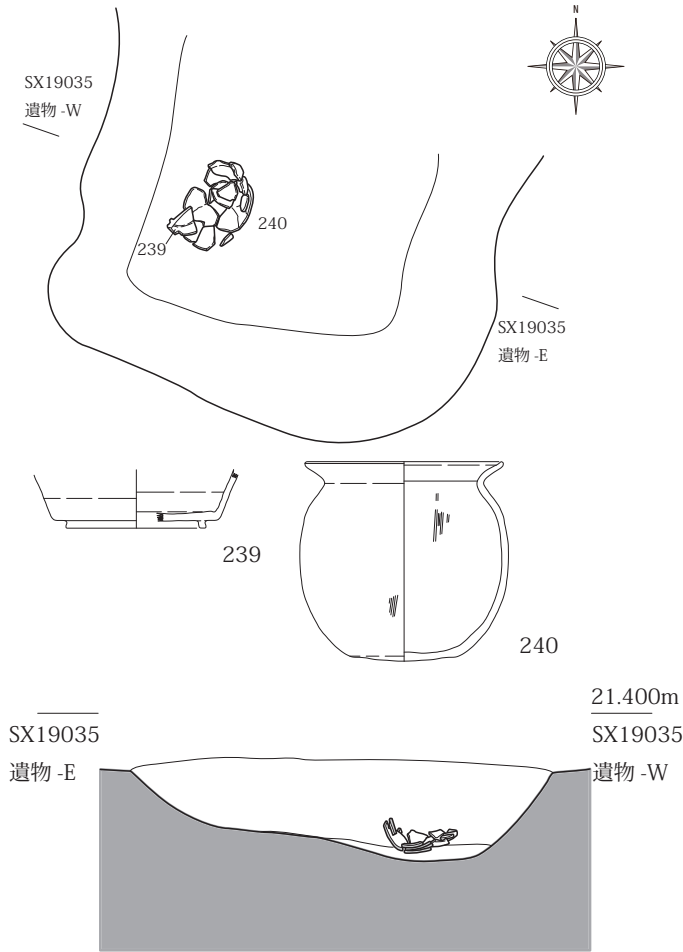
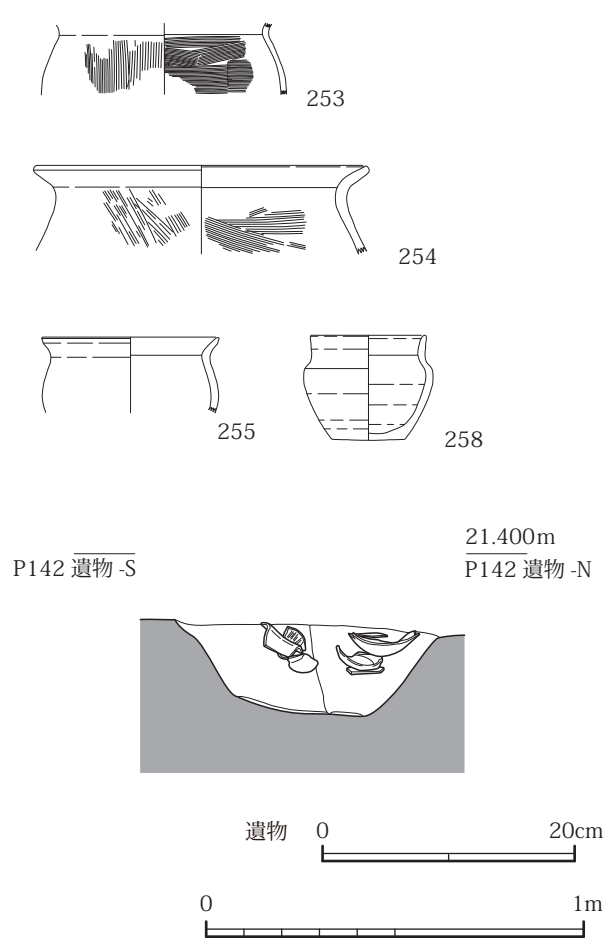
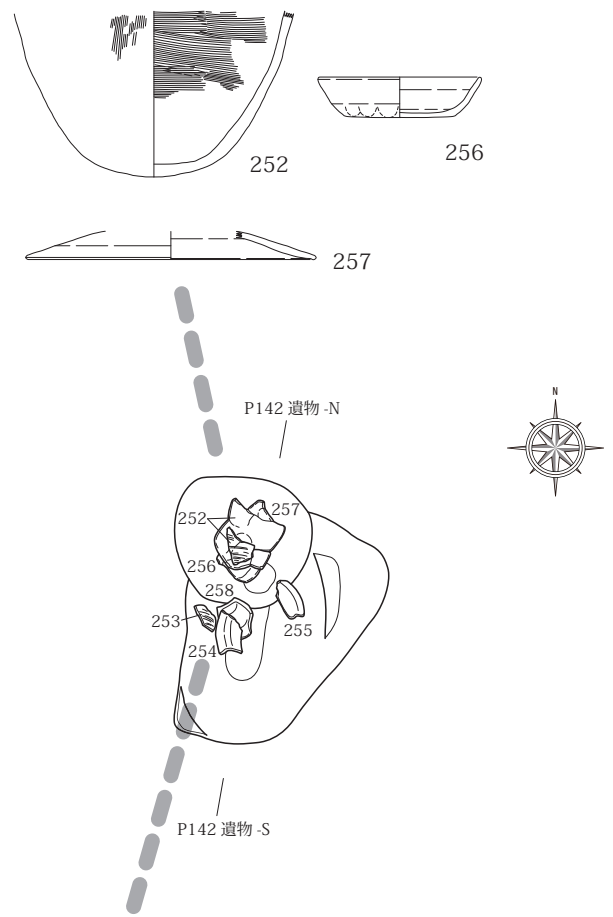
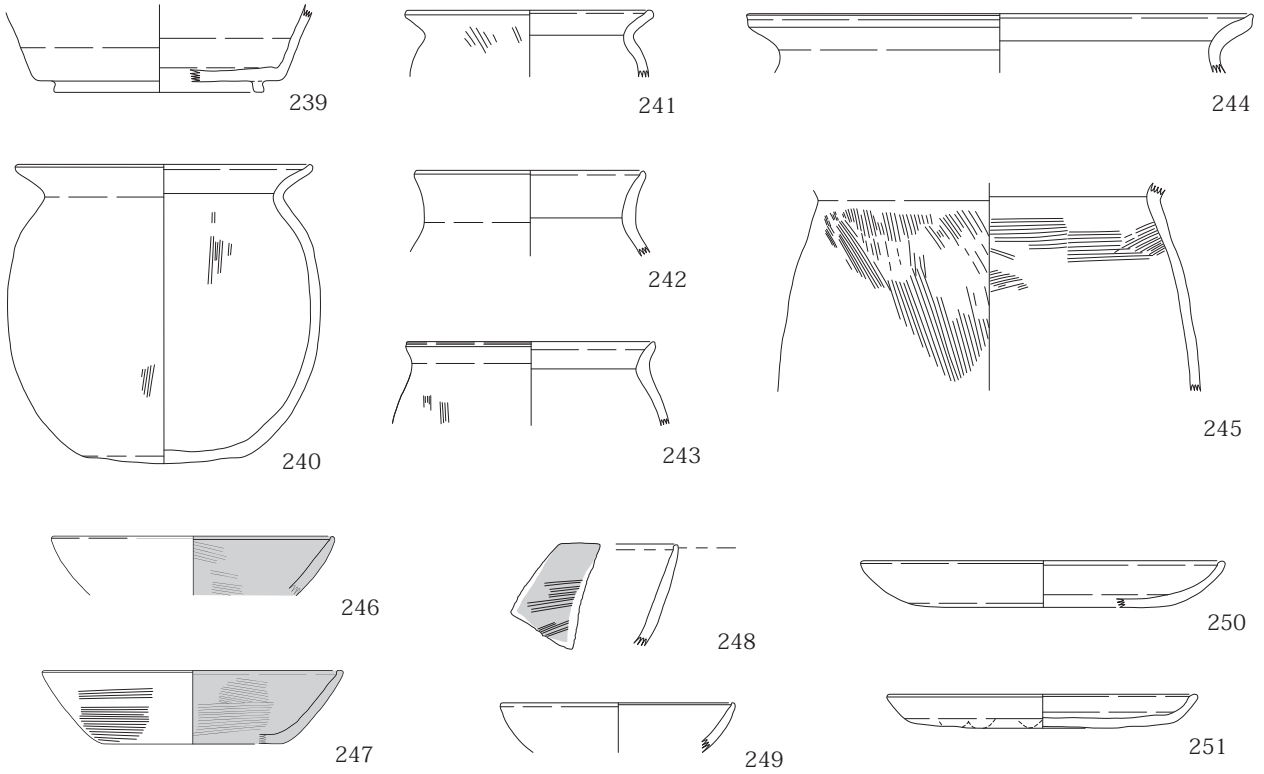


Fig.120 SX19035 遺物出土状況 (S=1/20 遺物：S=1/6)

Fig.121 P142 遺物出土状況 (S=1/20 遺物：S=1/6)

SX19035



P142

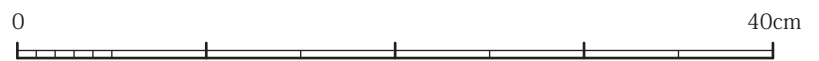
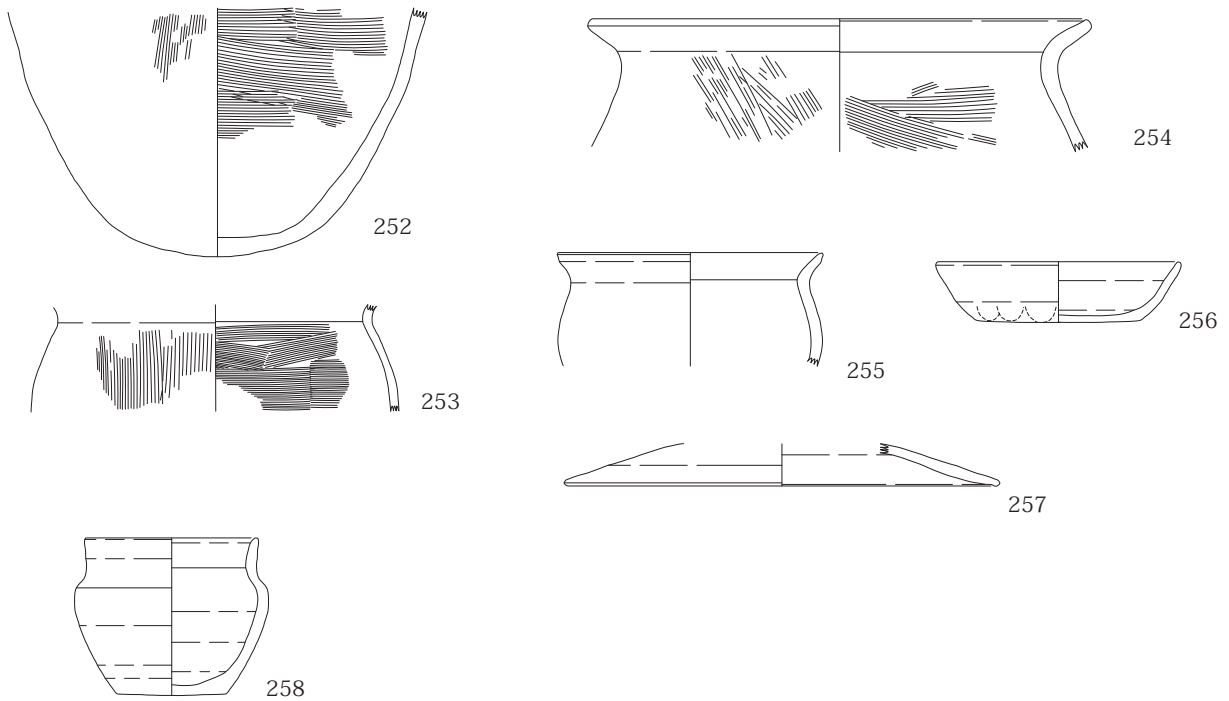


Fig.122 SX19035・P142 出土遺物 (S=1/4)

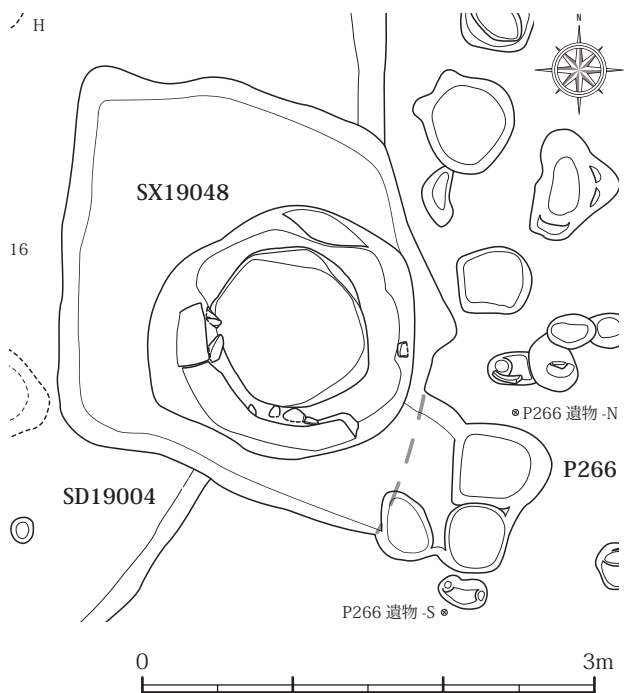


Fig.123 SX19048・P266 平面 (S=1/50)

脚柱部が剥落する。脚部端部内面はやや凹む。

**須恵器壺 (258)** 小型の壺で平底である。口縁部は短く立ち上がり、緩やかに外反する。肩部外面の一部には自然釉が観察できる。

**時期・性格** 単独のピットから豊富な出土品が得られた。抜き取り痕と考えられる痕跡を検出したため、柱の存在が大いに想起されるものの、建物等にまとまるものではない。遺物は全て上層からの出土であり、全体的に9世紀の特徴を留める (Fig.121)。抜き取り痕から出土した258は、猿投窯編年のNN268窯式期に相当し、9世紀前半の年代観である。P142の廃絶時期を示す資料であるが、その他の遺物との時期差は殆どないものと思われる。なお、関係は不明だが、P142の東側に存し同時期に帰属するSX19035とは0.68m離れる。P142及びその抜き取り痕は同色の黒褐色土 (10YR3/1) で埋没し、SX19035はこれに地山ブロックを含む。

【土坑状遺構 SX19048 (Fig.123)】

**重複** SD19004, ピット (遺物なし) → SX19048 → SE 19025

**平面・規模** 隅丸方形を志向する遺構であり、北東コーナーのみ曲がりの開きが大きい。東西及び南北共に2.5

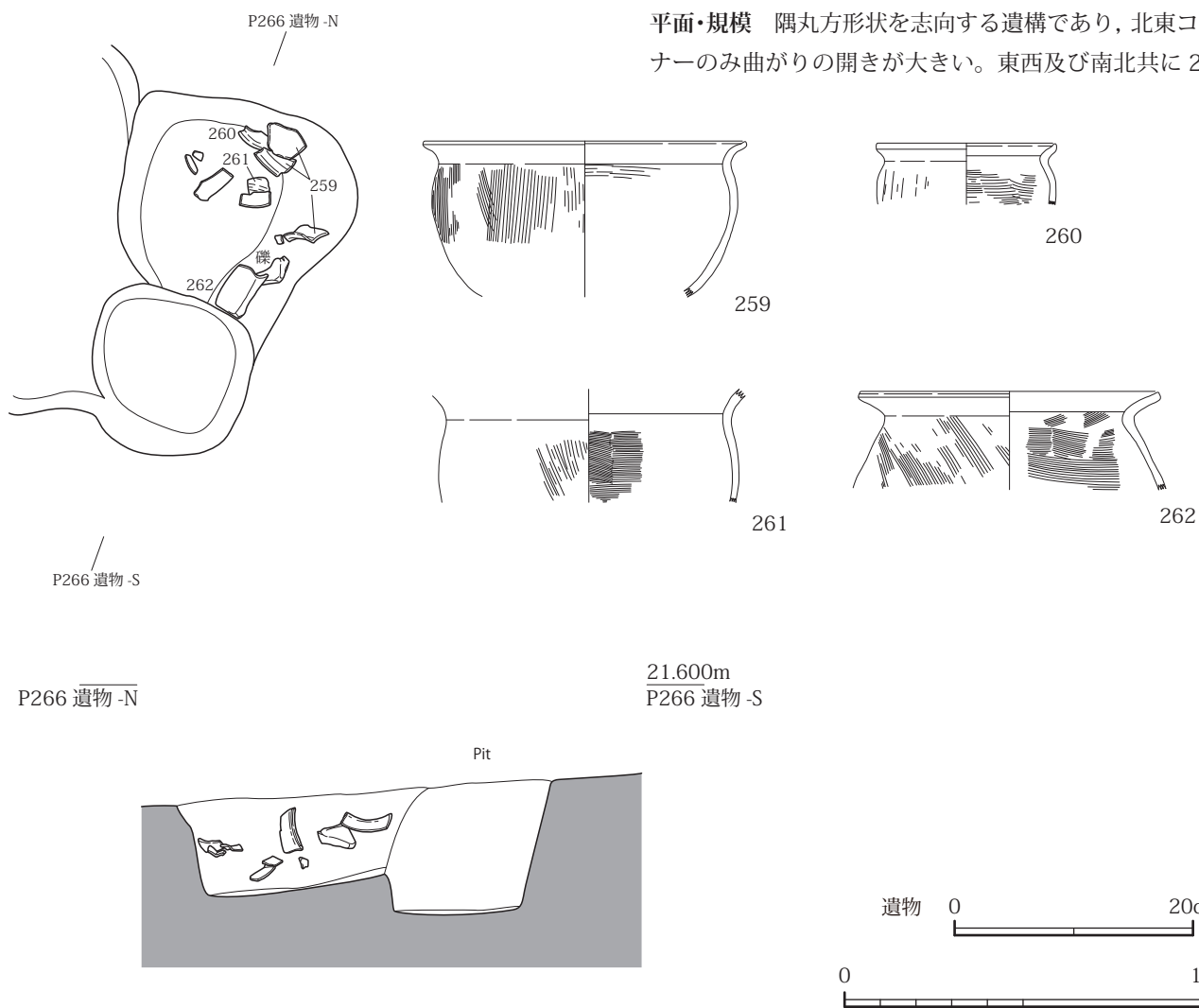
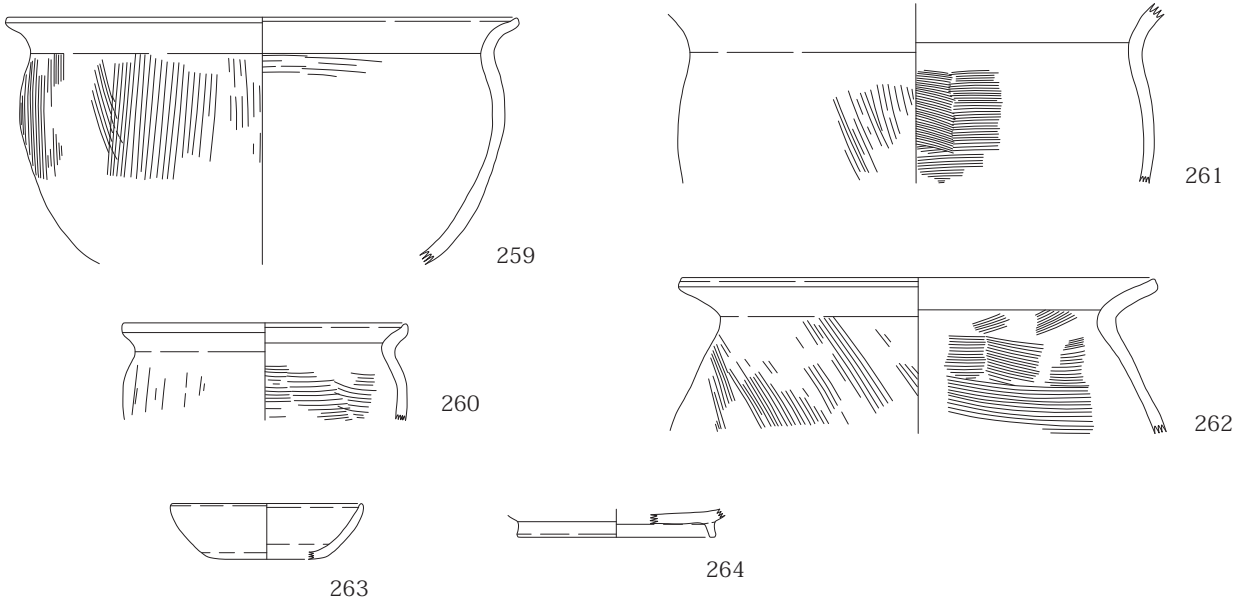
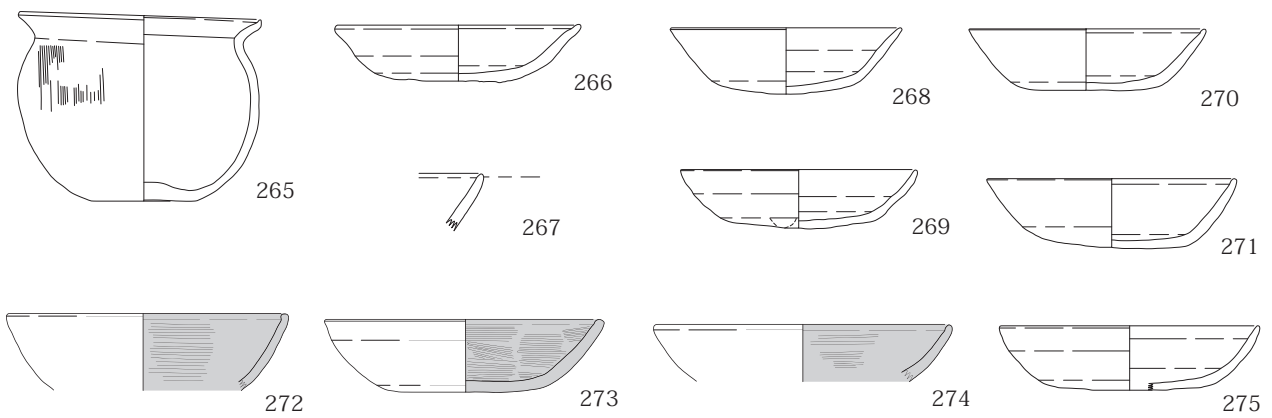


Fig.124 P266 遺物出土状況 (S=1/20 遺物：S=1/6)

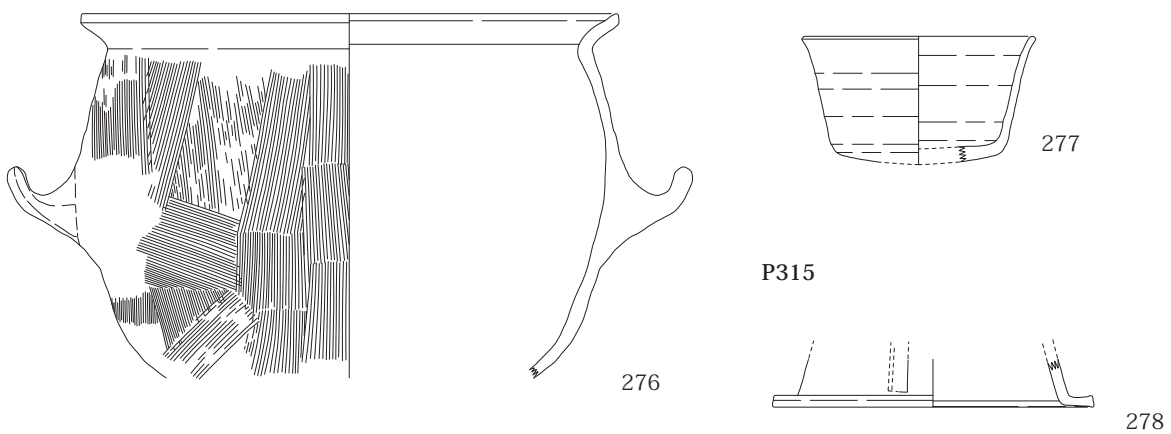
P266



P342



P461



P315



Fig.125 P266・315・342・461 出土遺物 (S=1/4)

mを測り、主軸方向はN-5°-Wを向く。検出面からの深さは0.2 mを測る。中央部を後世のSE19025によって広く攪乱されている。

**遺物** 土師器甕が出土しているが、図化の対象となる遺物はなかった。

**時期・性格** 大型の土坑状の遺構である。弥生時代後期～古墳時代初頭のSD19004を切り、中世のSE19025に先行する。出土遺物の特徴から古代に属するのは間違いないと言えるが、時期の絞り込みは困難である。他の多くの古代遺構と同様、8世紀後半～9世紀に帰属する可能性が考えられるが、確証はない。性格も不明である。なお、すぐ東側にあり8世紀後半～9世紀のP266と同色・質の黒褐色土(10YR3/1)で埋没する。

#### 【ピット P266 (Fig.123)】

**重複** ピット(遺物なし)→P266。

**平面・規模** 直径0.7 mを測り、円形状を呈する。但し、南西部が方形に収斂するため、本来はこの形であったのかもしれない。検出面からの深さは0.3 mを測る。

**遺物** 土師器甕(259～262)・坏(263)、須恵器坏(264)が出土した(Fig.125)。

**土師器甕(259～262)** 全体的に粗いハケ調整が施される。259は頸部の屈曲が緩やかで、体部に向けて丸みを帯びる。259・260・262は口縁部端部を僅かに上方へ摘み上げる。259・260の口縁部端部は丸みが強く、260は口縁部内面のヨコナデが強い。261は体部内面のヨコハケが細かく、外面とは異なる工具を用いて調整されたものと考えられる。262は口縁部が長く、体部とはくの字状に直線的に交わる。頸部の屈曲が強く、口縁部外端面は明瞭である。口縁部外端面には僅かに凹みが認められる。

**土師器坏(263)** 小型の坏で、口縁部はやや内湾気味に開く。口縁部内面には僅かな凹みが観察できる。

**須恵器坏(264)** 底部のみの資料である。貼付高台で、高台は高い。底部端部は接地する。

**時期・性格** 掘立柱建物等を構成するものではない単独のピットであるが、多くの遺物が出土した。遺物はピットの掘り方の縁辺部に沿うように出土した(Fig.124)。出土遺物は8世紀後半～9世紀のものである。先行するピットからは遺物は全く出土していない。前述したSX19048とは0.3 m離れるが、同色且つ同質の埋土で埋没しており、関連するものと考えられる。P266の北側には9世紀代のSX19035及びP142が近接し、概ね同時期の遺構が集中する様相を示す。

#### 【ピット P342 (Fig.126)】

**重複** SH19015, P568→P342。

**平面・規模** 長軸0.6 m, 短軸0.25～0.4 mを測る楕

円形状のピットである。段掘りされ、検出面からの深さは中段部分が0.2 m, 底面までは0.3 mを測る。

**遺物** 土師器甕(265)・坏(266～271・275)、黒色土器碗(272～274)が出土した(Fig.125)。

**土師器甕(265)** 小型で平底の甕である。歪みが生じており、底部はやや厚みをもつ。口縁部端部をやや上方へ摘み上げる。体部外面下半には煤が付着している。

**土師器坏(266～271・275)** 全て平底である。266は口縁部の外反が強い。268・270・271・275は外反する口縁～体部の直線性が高い。266・270・271は口縁部内面がやや凹む。口径は12cm～13cm台に落ち着く。

**黒色土器碗(272～274)** 全て内面のみ黒化処理される内黒である。口縁部は直線的に外反し、口縁部内面には凹みが観察できる。272・273はミガキが密に施される。273は平底で無高台であることが分かる。

**時期・性格** P342は建物等の一部を構成するものではないが、土師器と黒色土器が一括して出土しており、非常に興味深い。遺物は破片状態としての出土であるが、遺構全体に万遍なく分布しており、その出土位置はやや上位となる(Fig.127)。一括して廃棄されたものと考えられる。遺物は9世紀前半～中葉の産物であると判断される。267～271・275は橙～赤褐色の胎土で作られ、黒色土器(272～274)と共に都城の影響が色濃く反映されているものと考えられる。対して、266は白味の強い浅黄橙色の胎土であり、いわゆる在地産のものである。これらが混在する点で、大変貴重な資料となる。埋土の主体は黒褐色土(10YR3/1)に地山ブロックを多量含む様相であり、古墳時代初頭のSH19015の周壁溝を切る。同じく先行するP568の帰属時期は不明である。同時期に所属するSB19095の西側において、これと3.2 m隔絶する。

#### 【ピット P461 (Fig.128)】

**重複** なし。

**平面・規模** 直径0.45 mを測り、円形状を呈する。2段に掘削され、検出面から中段箇所までの深さは0.08 m, 底面までの深さは0.11 mを計測する。

**遺物** 土師器甕(276)、須恵器坏(277)が出土した(Fig.125)。

**土師器甕(276)** 把手を付帯する甕である。胎土には直径0.5cm程度の礫を含み、体部外面一部には煤が付着する。体部外面はハケ調整されるが、ハケは非常に細かい。口縁部端部は摘み上げられ、全体的に丸みを帯びる。口縁部内面はやや凹む。

**須恵器坏(277)** 無高台の坏身である。口縁～体部は直線的に外反する。口縁部端部は丸く収める。

**時期・性格** 前述したP142・266・342と同様、掘立



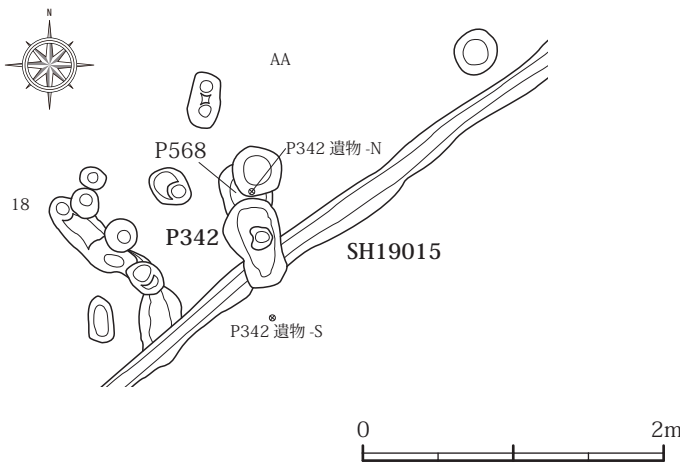


Fig.126 P342 平面 (S=1/50)

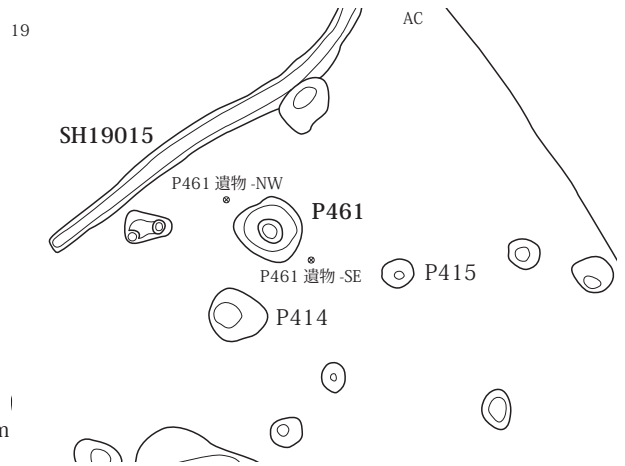


Fig.128 P461 平面 (S=1/50)

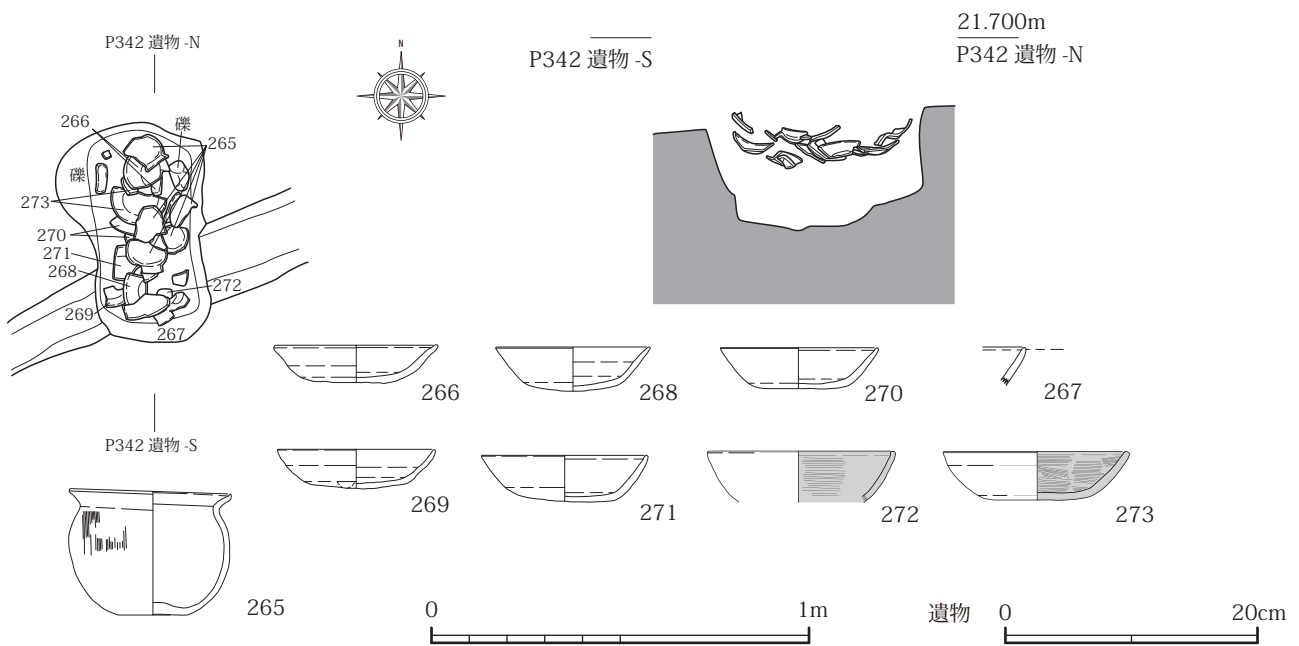


Fig.127 P342 遺物出土狀況 (S=1/20 遺物 : S=1/6)

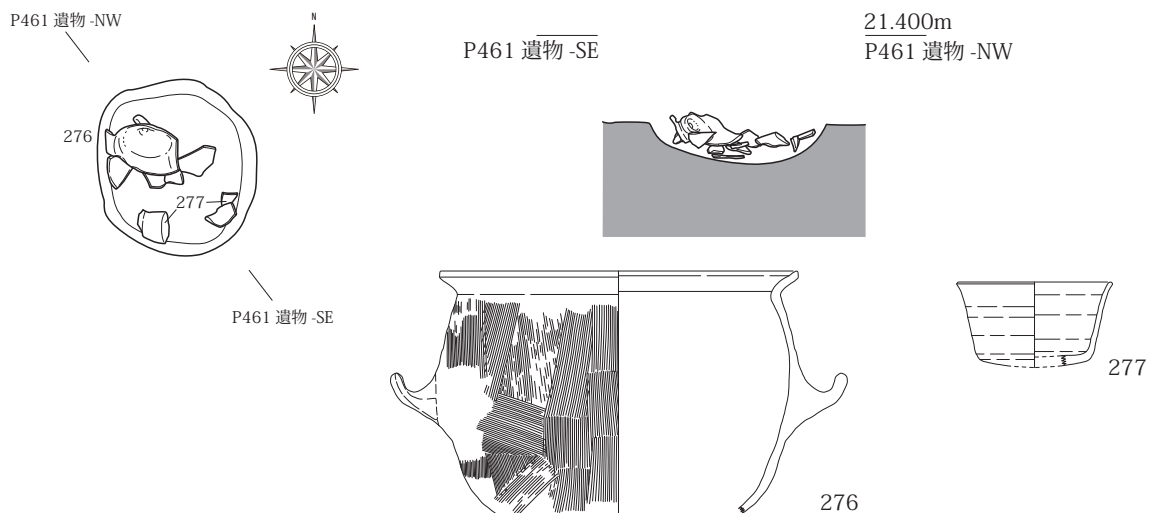


Fig.129 P461 遺物出土狀況 (S=1/20 遺物 : S=1/6)

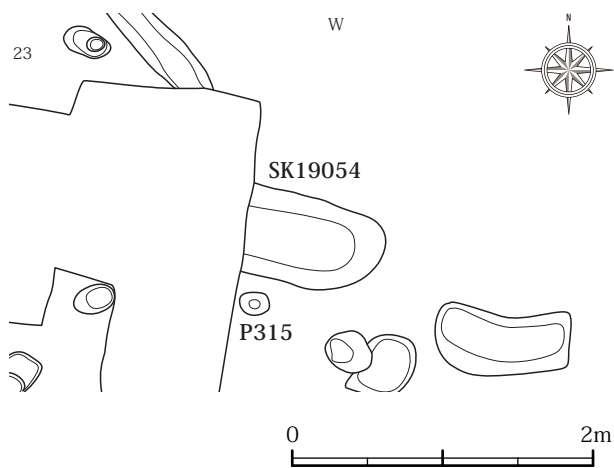


Fig.130 P315 平面 (S=1/50)

柱建物や柵列、竪穴住居等を構成せず、単独のピットであり、破片状態の出土ではあるものの、ピットの全面から土師器及び須恵器が良好に出土した (Fig.129)。出土遺物の年代観は、概ね 8 世紀後半～9 世紀に求められる。埋土は主に黒褐色土 (10YR3/1) で埋没する。9 世紀前半～中葉の SB19095 から南方向へ 2.8 m の距離をもつ。

#### 【ピット P315 (Fig.130)】

**重複** なし。

**平面・規模** 直径 0.2 m を測り、円形状を呈する小振りのピットである。検出面からの深さは 0.15 m を計測する。

**遺物** 須恵器円面硯 (278) が出土した (Fig.125)。

**須恵器円面硯 (278)** 脚部一部のみを留める資料で、底径 17cm とやや小振りである。脚部外端に明瞭な面を有し、この面にはやや凹みが認められる。大部分が欠落しているものの、方形の透かしをするものと見られる。

**時期・性格** 破片資料であるが、須恵質の円面硯が出土した。その他の出土遺物は、土師器細片のみである。埋土は黒褐色土 (10YR3/1) が主体となる。辛うじて攪乱を免れたが、すぐ北側に所在する SK19054 は遺物の出土がなく、詳細は不明である。

#### 【溝 SD19122 (Fig.131・132)】

**重複** SD19124 → SD19122 = SD19123, SK22010 → ピット (遺物なし)。

**平面・規模** 検出した長さは 3.8 m で、幅は 0.75 m を測り、中央部では 1.5 m にまで膨らむ。主軸方向は W-26°-S である。検出面からの深さは、西部で 0.05 m と浅いが、中央部で段掘りされ、東に向けて深さを増す。東部における深さは 0.5 m にまで達する。中央～東部を攪乱される。第 22 次調査 2 区へと延長し、SK22010 に繋がるものと考えられる。西部は忽然と途切れるが、埋土の様相からは SD19123 に接続する可能性も考えら

れる。SD19123 は不定形で、長軸 2.1 m、短軸 1.3 m を測る。検出面からの深さは、SD19122 西部とほぼ同レベルを示す。

**遺物** 土師器甕 (279)、土錘 (280) が出土した (Fig.133)。土師器甕 (279) 口縁部のみ遺存する資料で、口縁部端部はやや上方へ摘み上げられる。

**土錘 (280)** 棒状の形状を示し、ほぼ完形品であると考えられる。胎土は精製される。直径 0.4cm の円孔が穿かれ、直線的に貫通する。穿孔位置は中心である。

**時期・性格** 遺物の出土が限られるため、得られる情報は乏しいが、同一遺構と考えられる SK22010 は 9 世紀の所産である。SD19123 からは土師器の細片資料が得られただけである。また、7 世紀中葉～後半の SD22001 に繋がる SD19124 を切る。

#### 【土坑 SK22010 (Fig.131・132)】

**重複** P45 → SK22010 = SD19122 → ピット (遺物なし)。

**平面・規模** 長軸 1.7 m、短軸 1.3 m を測り、SD19122 を含めた全長は 5.5 m を計測する。底面は複数回段掘りされ、検出面からの深さは 0.3～0.68 m と西方向へ向けて深まり、SD19122 の東部底面と近似した標高を測る。東部はやや方形に収斂する。

**遺物** 黒色土器椀 (281) が出土した (Fig.133)。図化には至っていないが、他にも土師器甕や須恵器が出ている。

**黒色土器椀 (281)** 内面のみ黒化处理が施される。高台は内面端部が部分的に剥落している。

**時期・性格** 出土した 281 や土師器甕の特徴は 9 世紀代に帰属するものと考えられる。重複するピットからは、時期の絞り込みに繋がる遺物の出土はない。SD19122 と合わせ、長楕円形状の遺構となり、底面は階段状に凹凸を形成するが、遺構の性格は不明である。

#### 【溝 SD19124 (Fig.131・132)】

**重複** SD19124 = SD22001 → SD19122。

**平面・規模** 検出した規模は、長さ 5.3 m、幅 0.3～1.0 m を測り、細長い溝状の遺構として遺存する。底面はやや不均質で、検出面からの深さは 0.12～0.25 m を計測する。西部は北方向に湾曲しながら途切れ、東部は第 22 次調査 2 区へ延びて SD22001 に繋がるものと考えられる。中央部及び南東部が一部攪乱される。

**遺物** 土師器及び須恵器が出土したが、図化の対象となる遺物はない。

**時期・性格** 出土遺物は古代の産物であるが、時期の詳細は不明である。9 世紀に比定でき得る SD19122 に先行する。同一の遺構である SD22001 は 7 世紀中葉～後半に埋没したのと考えられる。

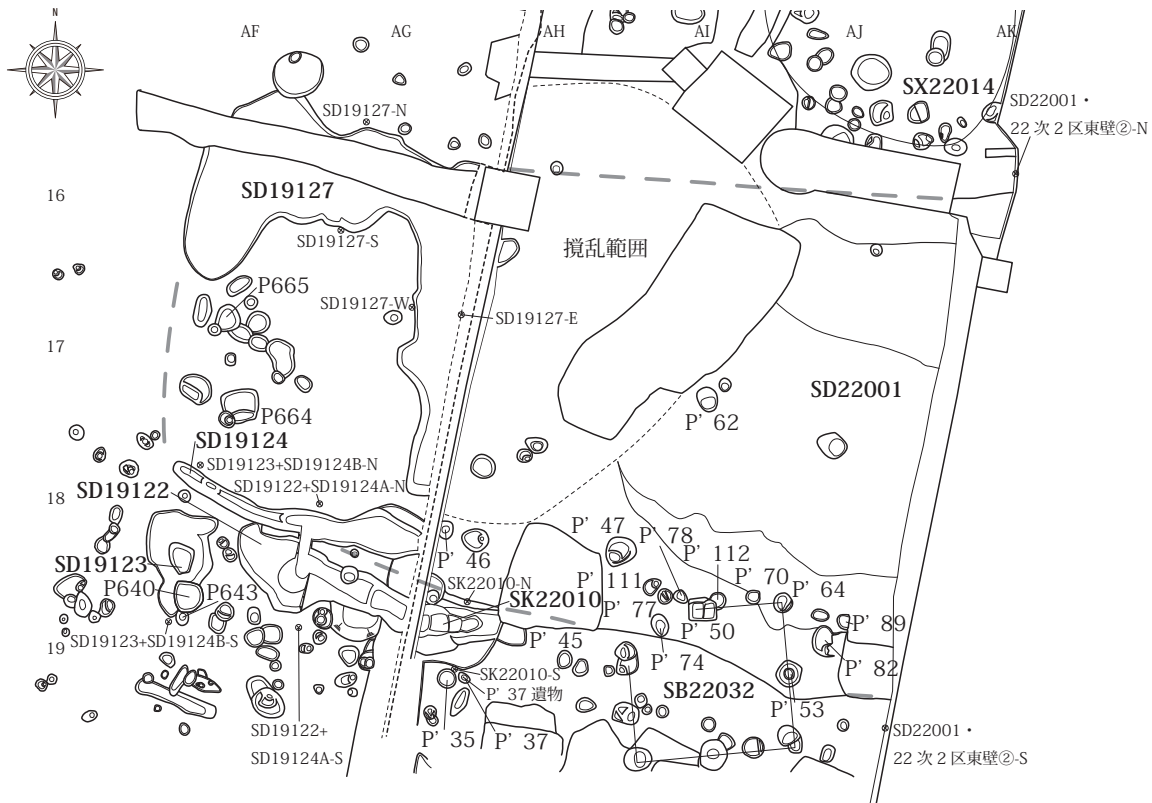
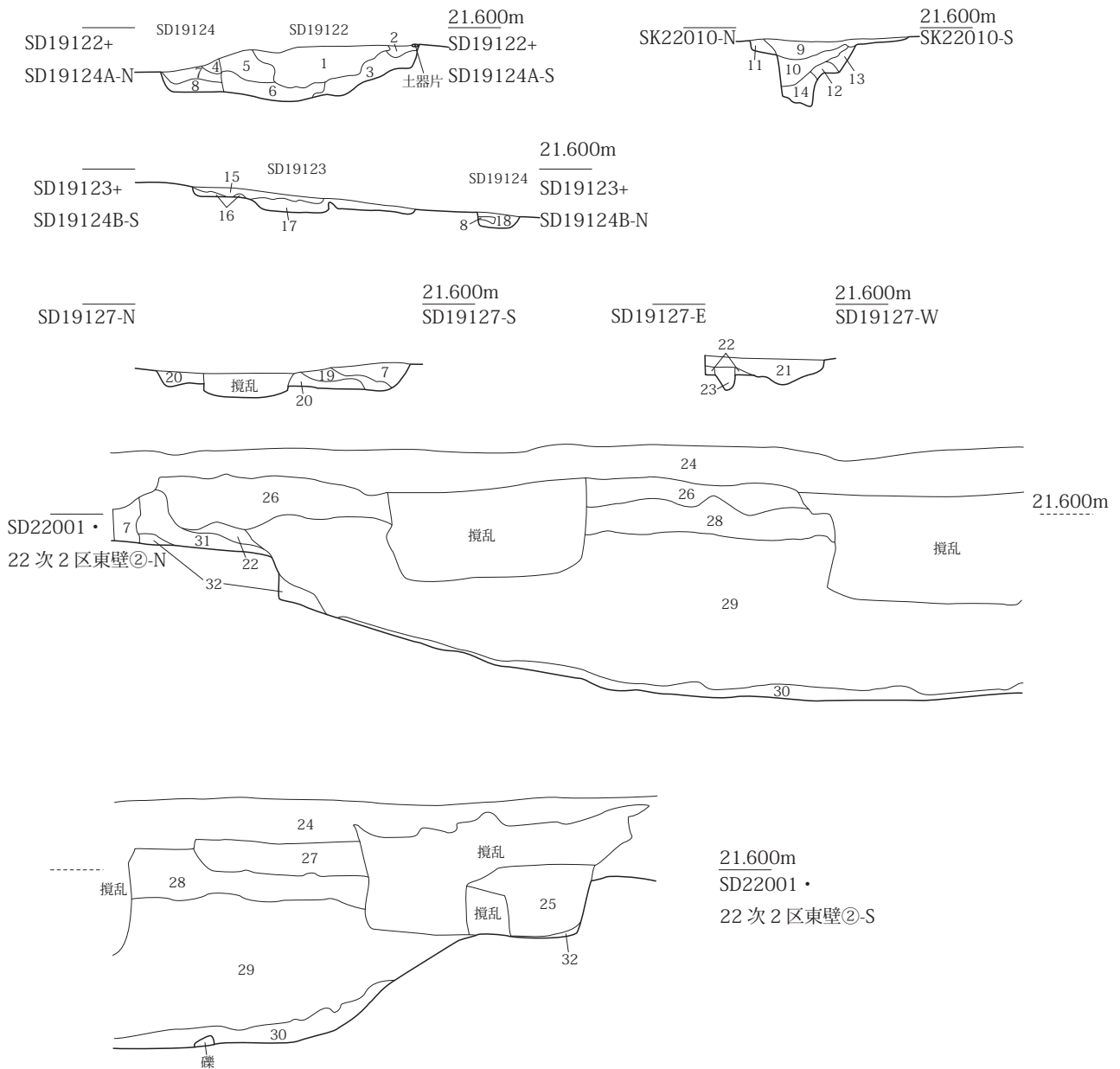


Fig.131 SD19122 ~ 124・127・22001・SK22010・P'37 平面 (S=1/150)



- |   |   |
|---|---|
| 1 黒褐色シルト (10YR2/2) 粘性強い 地山ブロックを少量含む           | 18 黒褐色シルト (10YR2/2) 粘性強い 礫を多量含む                       |
| 2 黒褐色シルト (10YR2/3) 地山ブロックを少量含む                | 19 暗褐色シルト (10YR3/4) 粗砂・礫・炭化物を含む                       |
| 3 褐色シルト (10YR4/4) 粘性強い                        | 20 黒褐色シルト (10YR2/2) 礫を多量含む                            |
| 4 褐色シルト (10YR4/6) 礫を含む 黒褐色土を少量含む              | 21 黒褐色シルト (10YR2/2) 炭化物を含む                            |
| 5 褐色シルト (10YR4/6) 細砂を含む                       | 22 黒褐色シルト (10YR3/2) 礫を少量含む                            |
| 6 黒褐色シルト (10YR2/3) 礫を少量含む                     | 23 黒褐色シルト (10YR2/2) 粗砂を含む                             |
| 7 黒褐色シルト (10YR2/2) 礫を少量含む                     | 24 灰黄褐色土 (10YR5/2) 表土                                 |
| 8 黒褐色粗砂 (10YR2/2) 礫を含む 黒褐色土を少量含む              | 25 褐色土 (10YR4/4) 締まり弱い 粗砂を多量含む                        |
| 9 黒褐色シルト (10YR3/2) 地山ブロック・炭化物・焼土を微量含む         | 26 暗褐色土 (10YR3/3) 礫を少量含む                              |
| 10 黒褐色シルト (10YR3/2) 地山ブロックを少量含む 焼土を微量含む       | 27 暗褐色土 (10YR4/4) 礫を多量含む 炭化物を少量含む                     |
| 11 黒褐色シルト (10YR3/2) 地山ブロックを多量含む 炭化粒を微量含む      | 28 黄褐色シルト (10YR5/6) 礫を多量含む 炭化物を少量含む 下部には地山ブロックがやや集中する |
| 12 黒褐色シルト (10YR3/2) 地山ブロックを多量含む               | 29 黒褐色シルト (10YR2/2) 礫・炭化物を多量含む 下部は黒味がやや強い             |
| 13 にぶい黄褐色シルト (10YR5/4) 黒褐色シルト (10YR3/2) を少量含む | 30 黒褐色シルト (10YR2/2) 地山ブロックを多量含む                       |
| 14 にぶい黄褐色シルト (10YR5/4) 黒褐色シルト (10YR3/2) を多量含む | 31 黒褐色シルト (10YR2/3) 礫を多量含む 地山ブロックを少量含む                |
| 15 黒褐色シルト (10YR2/3) 粘性弱い                      | 32 明黄褐色シルト (10YR6/8) 粘性強い 地山                          |
| 16 褐色シルト (10YR4/4) 細砂を含む                      |   |
| 17 褐色細砂 (10YR4/6) 黒褐色土を多量含む                   |   |



Fig.132 SD19122 ~ 124・127・22001・SK22010・22次2区東壁②土層断面 (S=1/50)

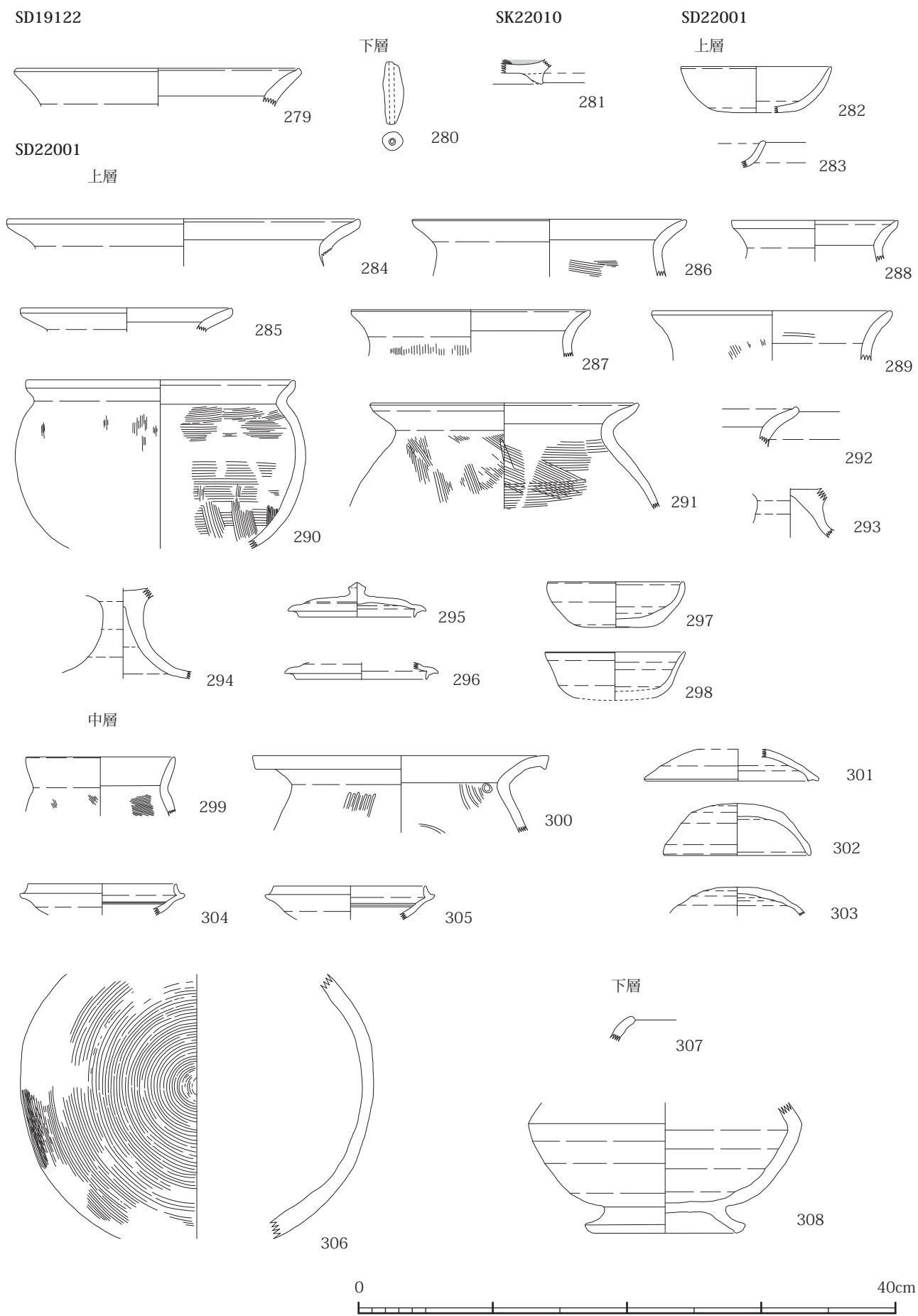


Fig.133 SD19122・127・22001・SK22010 出土遺物 1 (S=1/4)



※混入遺物

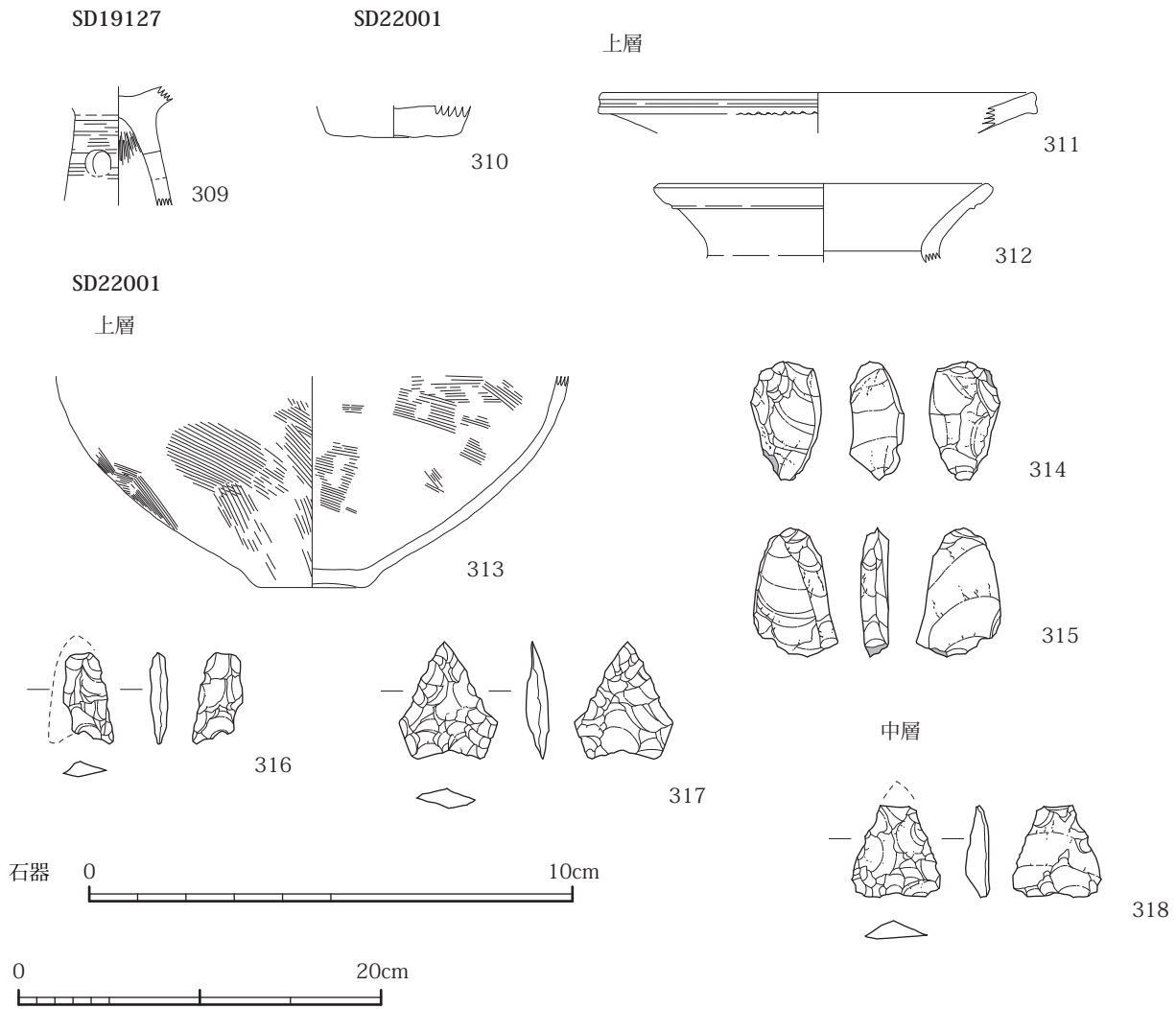


Fig.134 SD19122・127・22001・SK22010 出土遺物 2 (S=1/4)

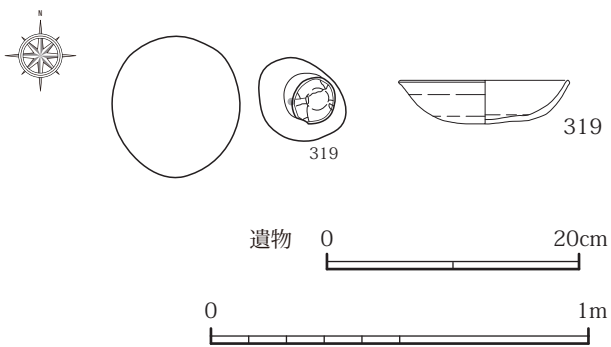


Fig.135 P'37 遺物出土状況 (S=1/20 遺物:S=1/6)

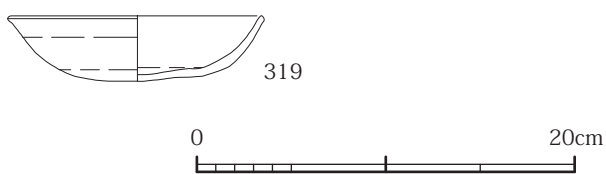


Fig.136 P'37 出土遺物 (S=1/4)

【溝 SD19127 (Fig.131・132)】

重複 SD19127 = SD22001 →ピット (遺物なし)。

平面・規模 全体的にプランは不整であり、東西 6.1 m, 南北 1.3 ~ 6.7 m の範囲を検出した。北部を攪乱され、僅かに北肩を残す。検出面からの深さは西部で 0.07 m, 東部で 0.2 m を測る。SD19124 と同様に東部は SD22001 に続くものと判断される。

遺物 弥生土器高坏 (309) が出土した (Fig.134)。SD22001 と同一の遺構になるため、309 は混入遺物である可能性が高い。

弥生土器高坏 (309) 外面は 14 条以上の櫛描直線文が施文され、内面には絞り痕が密に施される。3 方に円形透孔を有する。弥生時代後期～古墳時代初頭に属するものと考えられる。

時期・性格 SD22001 と同時期の 7 世紀中葉～後半の埋没が考えられる。北側で後出するピットからは遺物の出土がないため、その帰属時期は不明である。

### 【溝 SD22001 (Fig.131・132)】

重複 P'62, ピット (遺物なし) → SD22001 = SD19124・127 → P'47, P50・64 (SB22032), ピット (遺物なし)。

**平面・規模** 大規模に掘削された溝状の遺構である。検出面からの深さは、概ね 0.85～1.0 m で、最深部は 1.2 m と深い。南辺は大部分が遺存しているが、北辺は構造物による攪乱の影響を受け、東部のみ部分的に残る。西部を広く深く攪乱されており、検出した規模は南北 10.0 m, 東西方向は 6.4 m 程度である。前述した通り、SD19124・127 と一連の遺構を形成し、これらを合計すると東西 15.6 m に達する。東部は調査区外東方向へ延長するため、非常に大型のものとなる。なお、SD19127 は不整なプランを呈するが、本来はより南方向へ広がって SD19124 と一繋がりとなっていたものと考えられる。P664・665 とその付近に存在するピット群は、ピットというよりも、寧ろ SD19124・127 の下層が断片的に遺存しているものと考えの方が妥当であろう。全形が特定できず、プランもやや不整となるが、北肩のラインを繋いで計測すると、主軸は概ね W-8°-S 方向を向こう。

**遺物** 土師器甕 (284～292・299・307)・坏 (282)・皿 (283), 須恵器甕 (300)・壺 (308)・高坏 (293・294)・坏蓋 (295・296・301～303)・坏 (297・298) 坏身 (304・305)・提瓶 (306) が出土した (Fig.133・134)。また、縄文土器深鉢 (310), 弥生土器壺 (311～313), 石鏃 (316～318), ピエスエスキュー (314・315) の混入を確認した。これらの混入遺物については、北側に重複する構造物による攪乱付近からよく出ている。この箇所を中心とし、該当期の遺構が存在した可能性が想定される。なお、出土遺物については、上～下層と峻別して取り上げを行った。これは明確な層序をなさず、ほぼ一括の堆積状況を示す 29 層に対して人工層序を設定したものである。約 0.4 m ずつの深度で掘り下げ、上・中・下層と機械的に分類した。なお、29 層の下部には地山ブロックを多量包含する 30 層が薄く堆積し、これを最下層として扱ったが、この層からの遺物の出土はない。

**土師器甕 (284～292・299・307)** 284～292 は若干であるものの、口縁部端部を上方へ摘み上げられる。口縁部端部に内傾面が観察できる個体が多い。284 は頸部の屈曲が強い。口縁部内面はヨコハケ調整されるが、磨滅のために痕跡と化している。289 は頸部が緩やかに湾曲する。290 は口縁部端部の内傾面が明瞭で、口縁部内面には凹みが生じている。体部は球形状に丸みを帯びる。胎土には直径 0.5cm の礫を包含する。291 は頸部の屈曲が強く、口縁部と体部がくの字状に交わる。292 は

口縁部端部の摘み上げが明瞭である。299 は小型の甕で、体部内面は細かいハケによって調整される。頸部の屈曲が弱く、口縁部端部を丸く収める。307 は口縁部外面のヨコナデが強く、器面に凹みが発生している。

**土師器坏 (282)** 口縁～体部は外反する。底部形状は平底になろう。

**土師器皿 (283)** 口縁部の一部のみを留める資料で、口縁部は短く折り曲げられる。底部に向けて屈曲が早く、皿になるものと考えられる。

**須恵器甕 (300)** 口縁部が外反し、頸部が強く屈曲する。口縁部端部は垂下し、口縁部外端に面を形成する。体部外面には平行に、体部内面には同心円状にタタキ調整が施される。全体的に焼きが甘い。

**須恵器壺 (308)** 底部の完形資料で、肩部から上方が剥落している。底部には脚部が付帯する。脚部は厚く、外側へ踏ん張るように広がる。脚部端部は上下に膨らみ、明瞭な面を形成する。肩部が外側に強く張り出して稜を作る。体部内面中央には自然釉がかかる。器面には黒斑を多く観察することができる。

**須恵器高坏 (293・294)** 共に脚部である。293 は脚の開きが早く、比較的低脚になるものと見られる。294 はラップ状に大きく開脚し、底部に向けて外反が強い。

**須恵器坏蓋 (295・296・301～303)** 295・296・301 は天井部頂部に宝珠摘みを有し、302・303 は有さないタイプに分類できる。295 は天井部が一段高い膨らみをもち、天井部内面の膨らみも強い。295・296 は口縁部内面にカエリを有し、この先端は口縁部以下に突出する。296・301 は宝珠摘みを剥落し、301 はカエリの大部分が剥がれている。301 の口径はやや大振りである。302・303 の天井部は未調整である。302 の天井部の膨らみは大きく、天井部と口縁部の境界は不明瞭である。

**須恵器坏 (297・298)** 共に小振りの形状を呈する。297 の底部は未調整で、口縁部はやや内湾気味に直立する。298 の口縁部は外反し、底部は剥落している。

**須恵器坏身 (304・305)** 全体的にやや小振りの坏身であり、共に底部は剥落する。口縁部の立ち上がりは低く、内傾する。内面には 2 条の沈線文が回り、口縁部と底部が区別されている。

**須恵器提瓶 (306)** 体部前面には回転を利用したカキメが密に施される。部分的にタタキの痕跡を残している。

**縄文土器深鉢 (310)** 底部の一部のみを残す資料で、ほぼ平底を呈する。

**弥生土器壺 (311～313)** 311 は口縁部外端面が明瞭で、この面が凹線文で装飾される。口縁部外端面下部にはキザミが施される。工具の使用により、口縁部外端面下部は波状を呈する。312 は口縁部が直線的に外反し、

頸部の屈曲が強い。口縁部外面には凸帯文が施文される。313は底部の完形資料で、内外面をハケ調整される。上げ底状の底部形状で、体部内面中央はやや膨らみをもつ。311は弥生時代中期前半の資料で、312・313は弥生時代後期～古墳時代初頭の産物である。

**石鏃 (316～318)** 全てサヌカイト製で、肉眼観察では二上山産の製品である。316は逆突部片側のみ遺存し、318は先端部を欠損する。317は完形品である。

**ピエスエスキーユ (314・315)** 共にサヌカイト製品の楔形石器である。肉眼観察ではあるが、二上山産であることが分かる。314は完形資料で、両端に剥離痕が生じている。315は部分的に欠損する。

**時期・性格** 9世紀後半のSB22032・P'47に先行する。SD22001の南肩付近には複数基のピットが存在するが、これらはSD22001より後出する。底面にはP'62等のピットが埋没するが、帰属時期や関係は不明である。308は猿投窯編年のH50窯式の産物であり、295・302・304・305等、それ以外の遺物は概ね同窯編年のI17窯式期に位置付けられる。これらの結果から、人工層序による分類ではあるものの、上～中層から7世紀後半、下層からは7世紀中葉の遺物が出土し、やや時期を隔てた2時期に埋没したことが想定できる。SD19124・127・22001は、SD19127の西部が南方向へ湾曲して収斂する様相を呈している。これらの遺構の北西～西側には広く攪乱範囲が存在するため、確実に言えるものではないが、比較的良好に遺存するSD22001南肩の西側延長ライン上にはその痕跡を残さないため、SD19124・127を西限とし、この箇所での収斂の可能性が考えられる。SD22001を中心とするこれらの遺構については不明な点が多いが、SD19124・127付近を限りとして終わるのであれば大規模な水溜り的な施設、これらが北方向へ湾曲していくなら古墳の周溝との可能性を考えておきたい。7世紀代に比定できる明確な遺構は唯一となり、大型の規模を誇るため、非常に注目される。

#### 【ピットP'37 (Fig.131)】

**重複** なし。

**平面・規模** 直径0.2mを測り、円形状を呈する小振りのピットである。検出面からの深さは0.1mを計測する。

**遺物** 土師器環(319)が出土した(Fig.136)。

**土師器環(319)** 口縁～体部は外反が強く、口縁部端部は外側へ摘まみだされる。底部にはやや歪みが生じている。

**時期・性格** 出土遺物は319のみであるが、これが完形で、ピットのほぼ中央部において良好に出土した(Fig.135)。遺物の出土が限定されるものの、9世紀代に属し、すぐ北側に近接するSK22010、P'35と同時期

になるものと考えられる。

#### 【道路遺構側溝SD19009 (Fig.137・138)】

**重複** SH19034, P177, ピット(遺物なし)→SD19009→P18・198 (SB19084)・546, ピット(遺物なし)。

**平面・規模** 検出した長さ11.9m, 幅0.7～1.2mを測る。検出面からの深さは、0.05～0.15mを計測する。途中で途切れており、南北方向共に、その延長上に痕跡は確認できない。攪乱の影響か、ややプランが乱れる。

**遺物** 弥生土器壺(320)が出土した(Fig.140)。320は混入遺物である。他には土師器片が僅かに出土したに留まり、図化できる対象はなかった。

**弥生土器壺(320)** 底部の完形資料である。明瞭に上げ底される。底面には成形時のものと見られる板状の圧痕を観察できる。

**時期・性格** 帰属時期の特定に繋がる遺物の出土はない。古墳時代初頭のSH19034に後出し、中世のSB19084に先行する。その他、複数の遺構が重複するが、遺物が出土したピットに限っても、先行するP177からは弥生土器高坏、後出するP18からは土師器片、P546からは土師器甕(349)、灰釉陶器壺(348)が確認された程度で、弥生時代後期～10世紀前半と年代幅が大きい。道路遺構の東側側溝であり、西側側溝のSD19021・22と共に道路遺構SC19011を形成する。遺存状態によるものか、西側側溝に比較して規模が大きい。

#### 【道路遺構側溝SD19021 (Fig.137・138)】

**重複** SD19004, P122→SD19021→ピット(遺物なし)。

**平面・規模** 全体をSD19004の上面において確認した。検出した長さ4.9m, 幅0.4～0.5mを測る。南部で幅0.1m程度と非常に細く掘り込みを失い、ここで途切れる。北部についても途中で途切れ、SD19009と同様、以北にその延長を検出することはできなかった。検出面からの深さは、0.05～0.08mを測る。

**遺物** 土師器の細片資料が得られたのみである。図化対象遺物の確認には至らなかった。

**時期・性格** 出土遺物からは、所属時期を判断することはできない。弥生時代後期～古墳時代初頭のSD19004を切るが、重複するピットからの有意な情報はない。形状及び主軸方向、位置関係、埋土の状況から、SD19009と対になり、南側に存在するSD19022と接続して道路遺構の西側側溝となるものと考えられる。

#### 【道路遺構側溝SD19022 (Fig.137・138)】

**重複** SD19004, ピット(遺物なし)→SD19022→P156 (SB19036), ピット(遺物なし)。

**平面・規模** 部分的にSD19004の上面に存在する。検出した規模は長さ9.1m, 幅0.4～0.7mを測る。検出

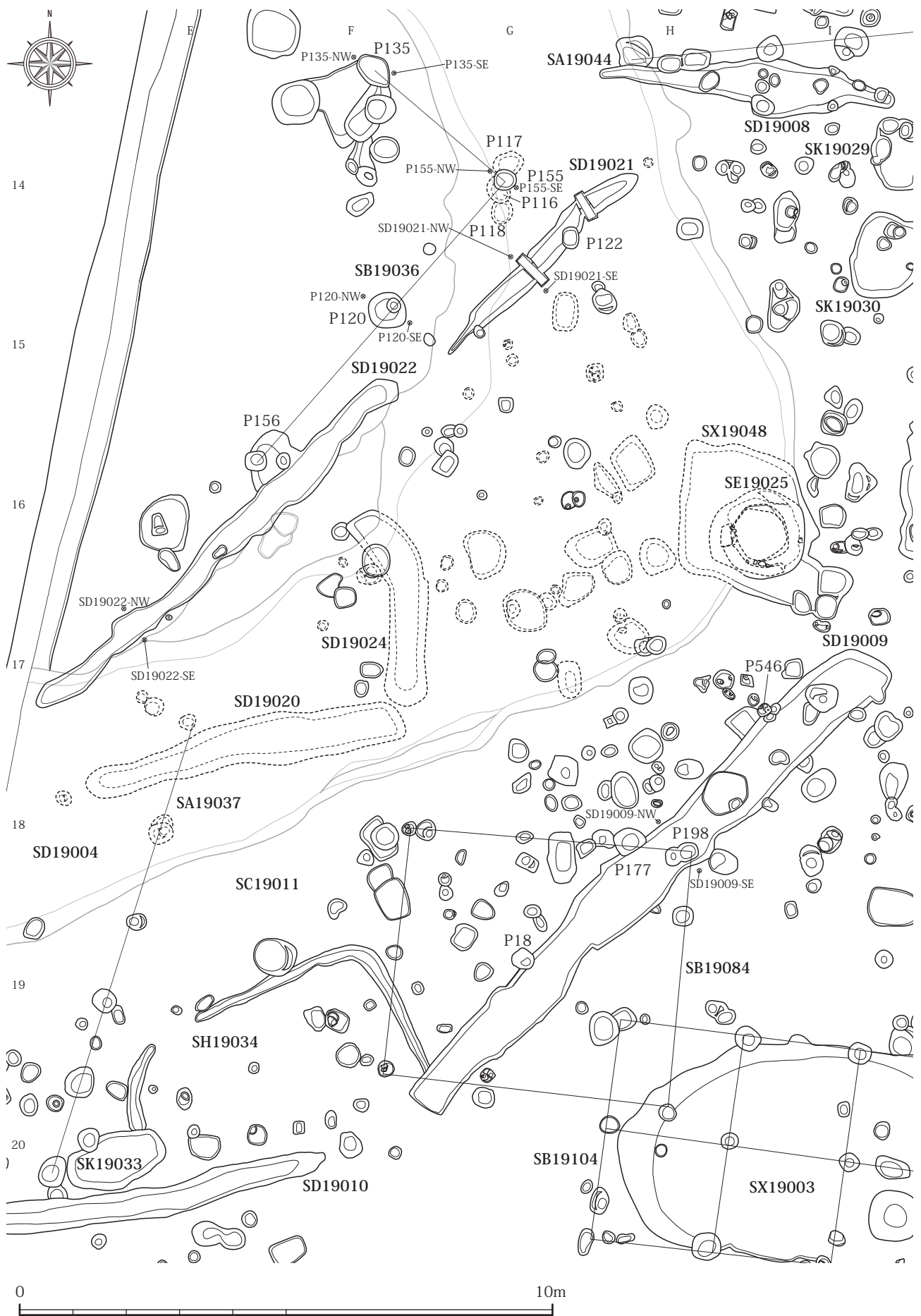


Fig.137 SD19009 · 21 · 22 · SC19011 · SB19036 平面 (S=1/100)



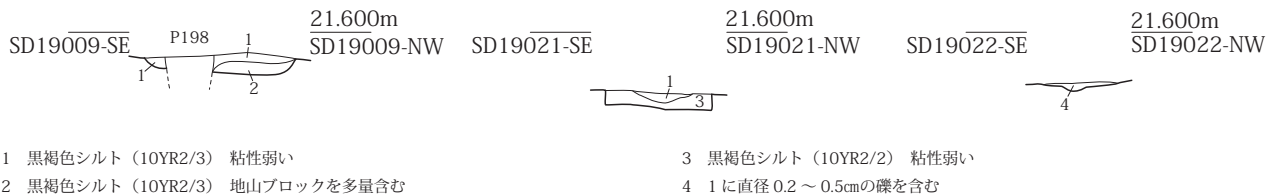


Fig.138 SD19009・21・22 土層断面 (S=1/50)

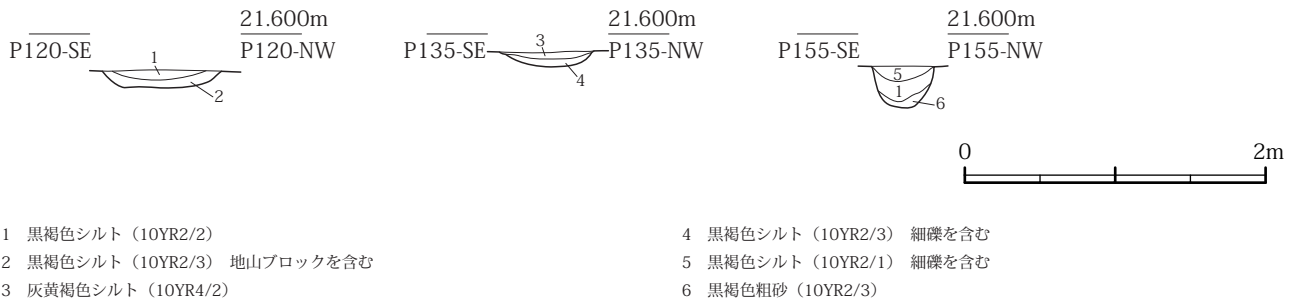


Fig.139 SB19036 土層断面 (S=1/50)

※混入遺物

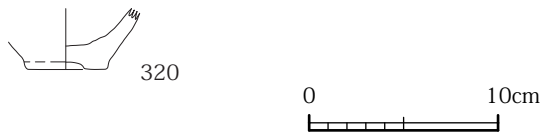


Fig.140 SD19009 出土遺物 (S=1/4)

面からの深さは、0.03～0.06 mと浅い。南部は調査区内で終焉するが、更に南方向へ延びるものと考えられる遺物 土師器及び須恵器の細片が出土したに留まる。実測が可能となる遺物の出土はなかった。

**時期・性格** 有意な遺物の出土はなく、帰属時期を比定することは困難である。弥生時代後期～古墳時代初頭のSD19004に後出し、古代のSB19036に先行する。SB19036は9世紀代の産物であると考えられる。北東方向に約1.1 m離れたSD19021とは一連の遺構であり、道路遺構の西側側溝であると判断される。

**【道路遺構 SC19011 (Fig.137)】**

**重複** SD19009・21・22の項を参照。道路の路面上には複数の遺構が存在するが、路面形状を留めないため、重複関係が不明な遺構も存在する。

**平面・規模** SD19009を東側側溝、SD19021・22を西側側溝とする道路遺構を総称し、SC19011とする。素掘りの側溝を付帯する。この2条の側溝が並行し、直線的に走行する。全体の規模は長さ15.8 mに達し、側溝の内法間の距離を測定した路面幅はほぼ9.0 mである。主軸方向はN-45°-Wを向き、正方位に対して斜位に造られている。

**遺物** SD19009・21・22の項を参照。

**時期・性格** 帰属する時期の詳細を特定できる遺物は得られず、重複する遺構との関係から、それを類推する程度である。時期を積極的に示す成果を得られなかったが、過去の調査の結果から、8世紀代に存続した可能性が高いものとされており、その見解に追随することが妥当であろう。今回の結果からも9世紀以前に比定されることは確実である。なお、中世に至るまでには完全に整地されたものと考えられ、路面形状は不明である。

**【掘立柱建物 SB19036 (Fig.137・139)】**

**構成** P120・135・155・156。

**重複** SD19004, P116・117 → P155。SD19022 → P156。

**平面・規模** 1間×2間以上の規模を有し、側柱建物であると考えられる。東辺の南続きや西辺を構成するピットの検出には至らなかった。確認した規模は東西3.2 m、南北7.0 mを測る。主軸はN-41°-W方向を向ける。構成するピットの規模は、直径0.45～0.75 mとやや大振りの円形状を呈し、検出面からの深さは0.1～0.3 mを測る。P135の南～南西部はやや不整に乱れ、木の根等で攪乱されている可能性もある。

**遺物** P120・135から土師器及び須恵器が出ているが、実測が可能となる遺物の出土はなかった。

**時期・性格** P155に先行するSD19004, P116・117は、弥生時代後期～古墳時代初頭の所産である。また、奈良時代に比定される道路遺構SC19011の主軸と近い数字を示すため、これとの親近性が考えられるが、P156が西側側溝のSD19022を切る。出土遺物の特徴も加味し、他の多くの古代遺構と同様、9世紀代に属するものと思われる。



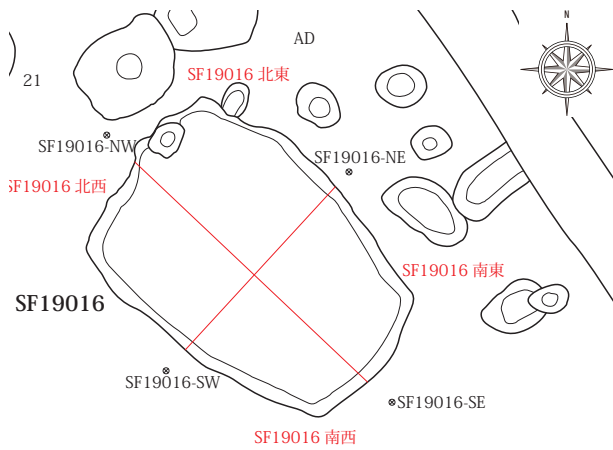
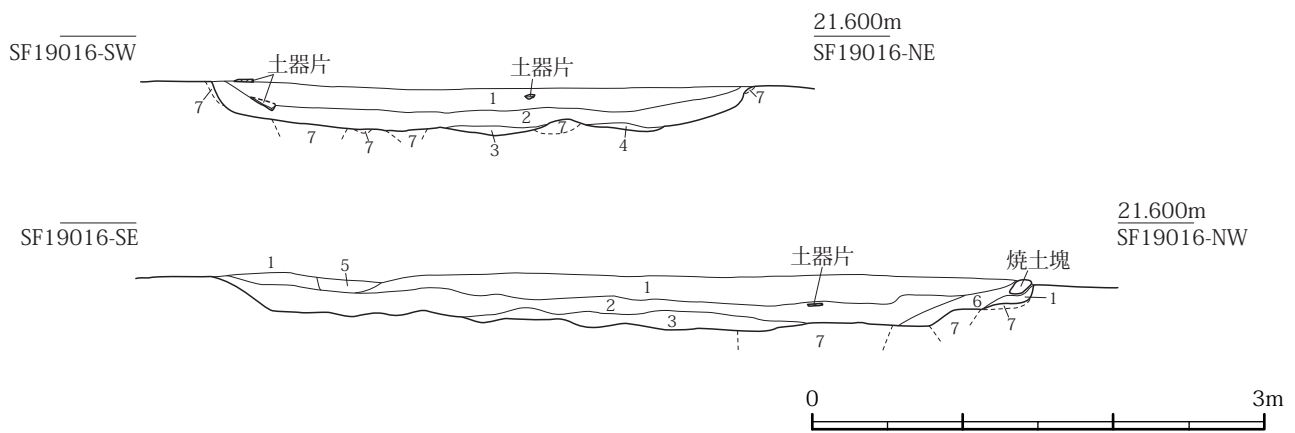


Fig.141 SF19016 平面 (S=1/50)



- |   |   |
|---|---|
| <p>1 黒褐色シルト (10YR2/3) 地山ブロック・焼土を少量含む</p> <p>2 黒褐色シルト (10YR2/3) 粘性弱い 地山ブロックを多量含む 焼土・炭化物を含む</p> <p>3 黒褐色シルト (10YR2/2) 粘性弱い 地山ブロック・炭化物・焼土を含む</p> | <p>4 暗褐色シルト (10YR3/3) 粘性弱い 細礫・地山ブロックを含む</p> <p>5 暗褐色シルト (10YR3/3) 焼土を含む</p> <p>6 黒褐色シルト (10YR2/2) と地山がブロック状に混在 粘性強い</p> <p>7 赤褐色焼土 (5YR4/6) 硬化面 締まり強い</p> |
|---|---|

Fig.142 SF19016 土層断面 (S=1/50)

**【土器焼成坑 SF19016 (Fig.141・142)】**

**区割** 北西～南東。

**重複** ピット (遺物なし) → SF19016。

**平面・規模** 長軸 2.2 m, 短軸 1.5 m を測る。検出面からの深さは 0.2 m 程度であり、底面はほぼフラットである。主軸は W-44° -S 方向を示す。楕円形状を呈するが、遺構のプランはやや波打つように不整である。

**遺物** 土師器の甕が数点出土しているが、全て細片資料のため、実測の対象となるものはなかった。

**時期・性格** 出土遺物の遺存状態が芳しくないため、得られた情報は限られるものの、古代の所産である可能性が高いと考えられる。全体的に細かいハケ調整が施され、いわゆる長岡京期以前の 7～8 世紀の段階に位置付けられよう。これに弥生時代後半～古墳時代初頭頃の遺物がやや混じる。該当期の主な遺構は 7 世紀中葉～後半の道路遺構である SC19011 とは主軸方向が直交するため、

関わる可能性がある。SF19016 は、SC19011 の路面中央部から南東へ約 70 m 隔絶する。また、SF19016 は当初、その形状から土坑墓の可能性を考えた。しかし、遺構の検出時点から、遺構の縁をなぞるように焼土及び炭化物が見られ、埋土にも比較的多く含まれていた。底面においては特に被熱の痕跡が顕著で、西部を中心に焼土が面的に広がり、炭化物がまとまって検出された (Fig.143)。また、硬化した被熱塊が中央～西部に集中する。相当期間の被熱が想定され、土器焼成坑であると考える。被熱箇所の分布からは、中央～西部が焼成室で、炭化物や焼土塊の範囲からは複数回の焼成が考えられる。上部は削平されていると判断され、その詳細な構造は不明である。煙道的な施設の確認にも至らなかった。

しかし、土層断面の観察では、北西部の壁面から崩れるように流れ込む 6 層を確認しており、これが上屋等の天井材の一部が崩れて混入した可能性がある。地山と黒褐色シルト (10YR2/2) を混ぜた粘質の強い土を用い、被覆させていたことが想定される。なお、出土遺物は破片資料が主となるため、焼成対象となる遺物の絞り込みは困難である。

**【ピット P353 (Fig.144)】**

**重複** なし。

**平面・規模** 直径 0.4 m を測り、円形状を呈する。検出面からの深さは 0.32 m を計測する。

**遺物** 土師器甕 (321・322) が出土した (Fig.145)。土師器甕 (321・322) 共に内外面にやや粗いハケ調整が観察でき、口縁部端部を丸く収める。321 は口縁部～体部上半の資料で、頸部の屈曲が弱い。322 は平底の底部形状で、体部外面下半はヘラケズリ調整が施される。

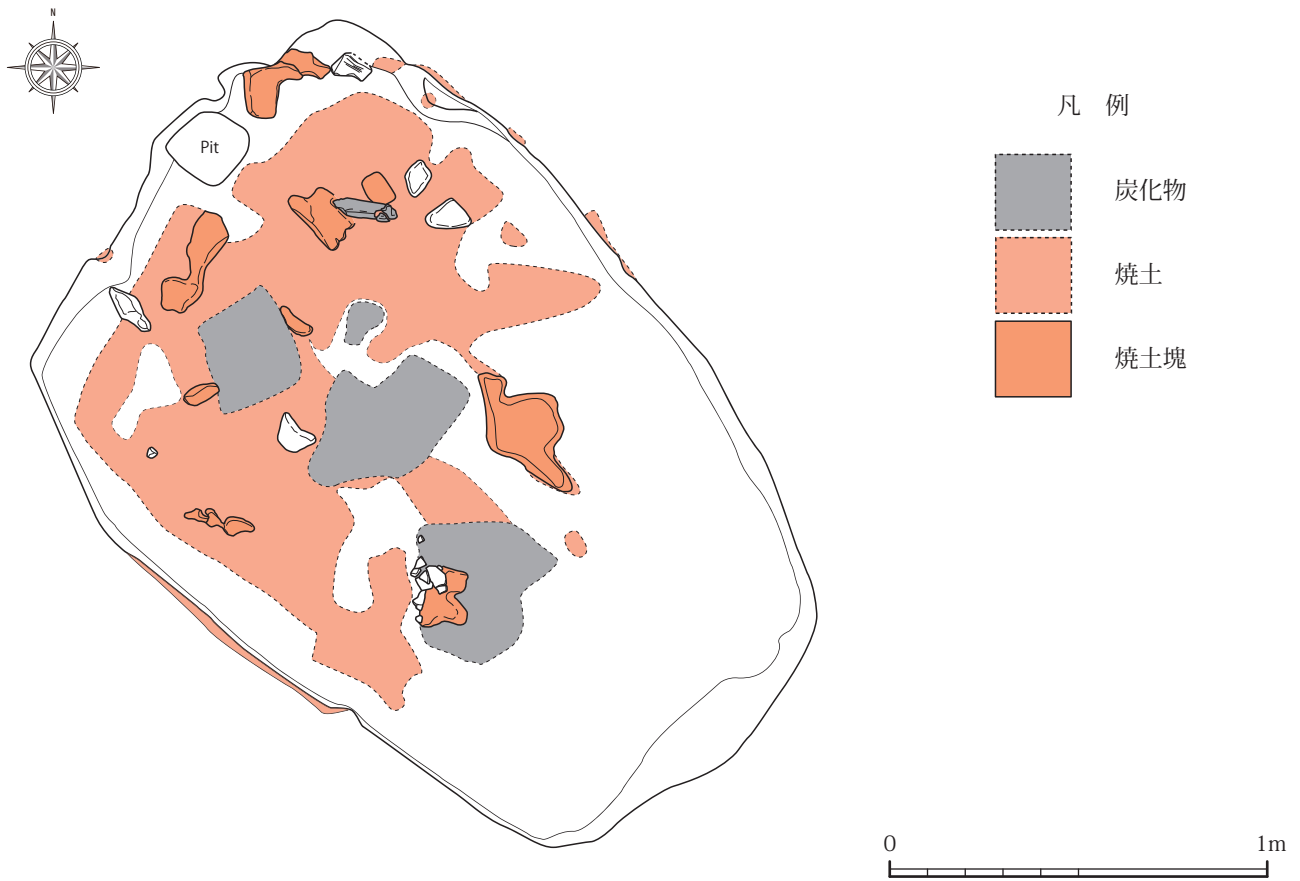


Fig.143 SF19016 出土状況 (S=1/20)

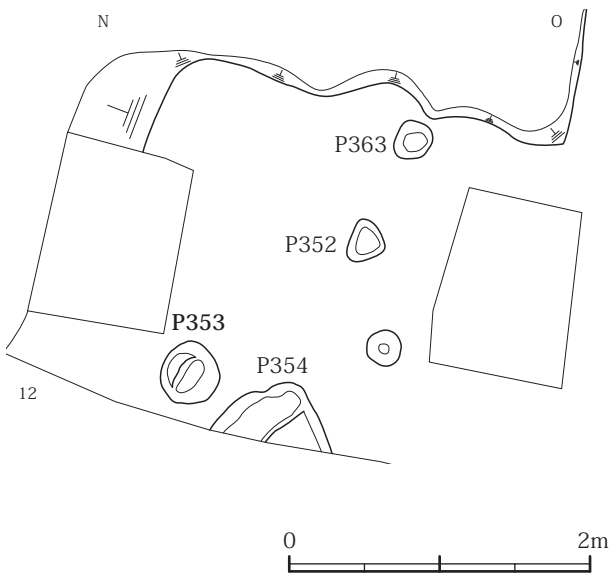


Fig.144 P353 平面 (S=1/50)

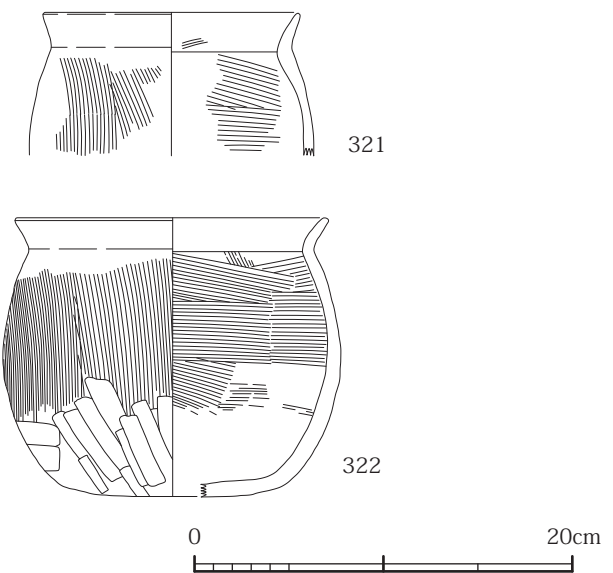


Fig.145 P353 出土遺物 (S=1/4)

**時期・性格** 既存建物北側において検出したが、建物や水槽升による攪乱を免れている。検出範囲においては、掘立柱建物等の一部になるかどうか判然としない。比較的良好的な遺物の出土が得られ、9世紀の所産であると判断される。

**【古代の遺構出土遺物】**

前に述べてきた以外にも、古代の遺構が存在する (Fig.

95)。ここでは、掘立柱建物等の建物にまとまることのないピット及び土坑から出土した古代遺物について記述する (Fig.146・147)。図化の対象となる遺物は、土師器甕を中心に黒色土器碗及び灰釉陶器碗、緑釉陶器碗、製塩土器等の希少なものが並び、該当期における生業の痕跡を示すものとして、非常に興味深い。

土師器甕 (323・326・331・333・335・338・340

・341・346・349) 323・324は頸部の屈曲が強く、口縁部端部を丸く収める。共に粗いハケ調整される。325は体部下方の資料である。体部は直線的に上方へ延び、長胴タイプのものになろう。内面はヘラケズリ調整される。326・331・335・338・341・346は口縁部端部を上方へ摘み上げられる。326は口縁部外端に面を有し、内外面に施されたハケは粗い。338は口縁部上端面及び内面にへ凹みが観察可能である。直径0.4cmの礫を含む。340は平底で内面のハケ調整が細かい。胎土には、直径0.5cmの礫及び雲母を多く含む。341は頸部の屈曲が強い。口縁部端部の摘み上げが著しく、端部をやや薄くされている。346・348は小振りの甕で、348の口縁部は短い。348は外面全体に煤が付着している。

**土師器坏(330・332・342・353)** 330・332は小振りの坏である。口縁部は外側へ開く。332の口縁部内面には凹みが観察できる。342は器面の磨滅が著しく、調整の痕跡を留めない。353は口縁～体部が直線的に外反し、僅かに上げ底の底部形状を呈する。

**土師器竈(344)** 移動式の竈である。胎土には金雲母を多量包含する。接合痕の観察が容易である。外面のタテハケ調整は磨滅によって不鮮明であり、内面はタテヘラケズリされる。

**須恵器坏(339)** 高台は外側に作られ、体部が立ち上がる箇所と近接する。

**黒色土器碗(328・329・334・343)** 全て内面のみが黒化処理される内黒である。328・334・343は口縁部の一部を残す資料で、口縁部端部はやや内湾する。口縁部内面には凹みが生じている。329は比較的大型の底部から、体部が外反しながら立ち上がる。内面は密にミガキ調整される。

**灰釉陶器碗(327・337・347・350・351)** 327・337は内面のみ施釉され、347・350・351は内外面に釉が施される。327は薄手で精緻な作りであり、口縁部端部は外方へ折り曲げられて屈曲する。337は口縁部端部が上方へ立ち上がり、内面には凹みが観察できる。347の施釉は体部内外面のみで、底部には確認できない。三日月高台が高く貼り付けられ、底部内面が一部剥落する。350は薄手の作りで、外面の施釉はやや薄い。

**灰釉陶器壺(348)** 頸部及び体部下方が剥落する。内外面に施釉されているものと見られるが、剥がれて観察できない。

**緑釉陶器碗(345・352)** 共に緑釉単彩が内外面に施釉される。345は口縁部端部の外反が強い。黒味の強い緑色を呈し、施釉後の被熱が考えられる。352は高台及び体部下半のみ遺存する資料で、小型である。精緻な作りで、ガラス質の良好な仕上がりである。高台は高く貼

り付けられる。

**製塩土器(336)** 志摩式製塩土器でたらい形のプローションを呈する。粗い胎土で、口縁～体部は直線的に外反する。外面のユビオサエ調整が顕著で、器面には凹凸が生じている、底部内面には凹みが観察できる。

出土遺物は、当該調査区における古代の生業の中心となる8世紀後半～9世紀の位置付けである。327・337は猿投窯編年のK14窯式で9世紀前半、347が同窯編年のK90窯式で9世紀後半の産物である。350・351も347とほぼ同時期に属するものと見られる。また、345はやや古手で8世紀代であると考えられ、348・349は猿投窯編年のO53～百代寺窯式の段階に比定でき、その年代観は10世紀前半～11世紀前半と時期を降る。黒色土器及び緑釉陶器、K14窯式期の灰釉陶器等、比較的流通量が限られるものが出ており、特殊な生産がなされていた可能性が考えられる。一般的な集落とは隔絶した特定の階層の居住を示すものとして、大いに注目すべき資料である。

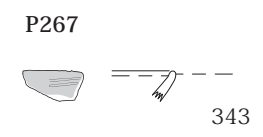
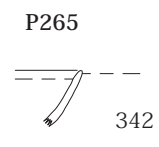
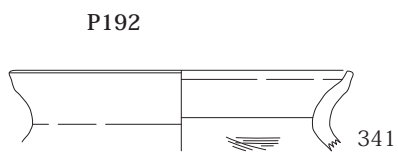
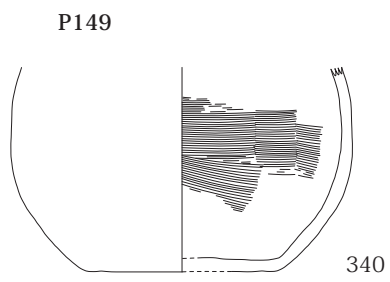
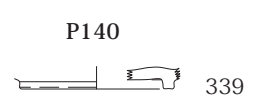
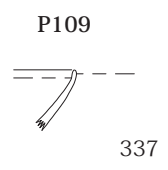
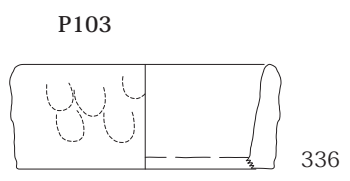
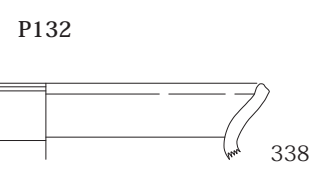
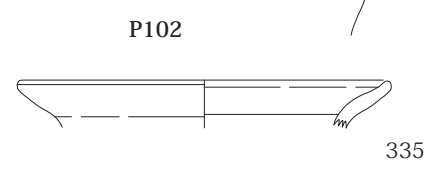
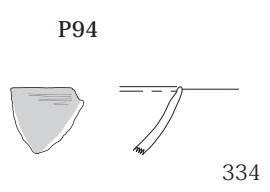
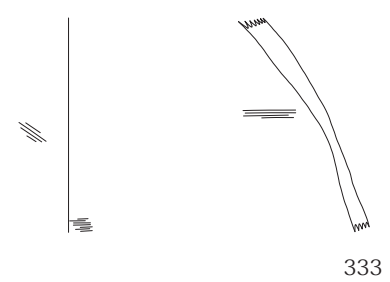
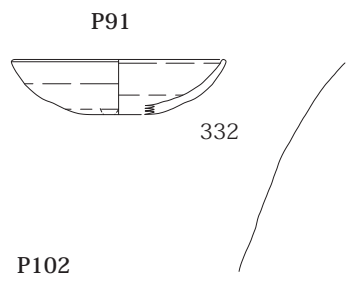
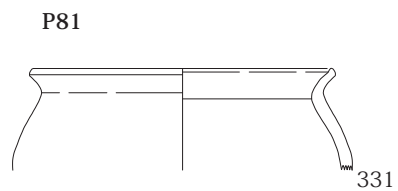
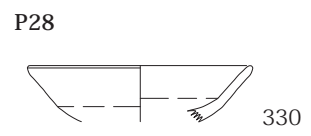
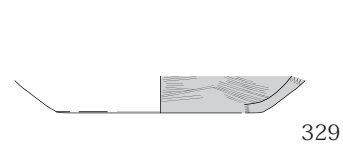
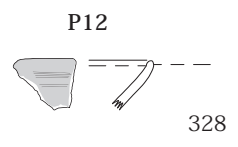
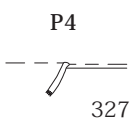
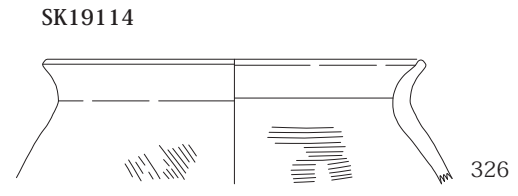
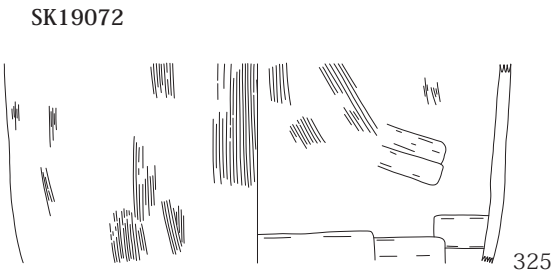
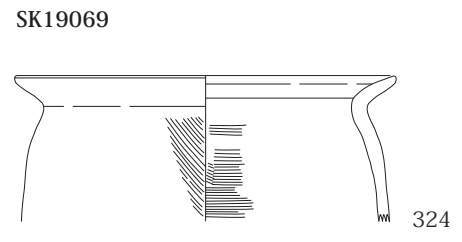
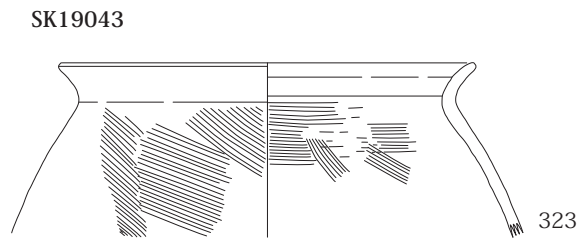


Fig.146 古代の遺構出土遺物 1 (S=1/4)

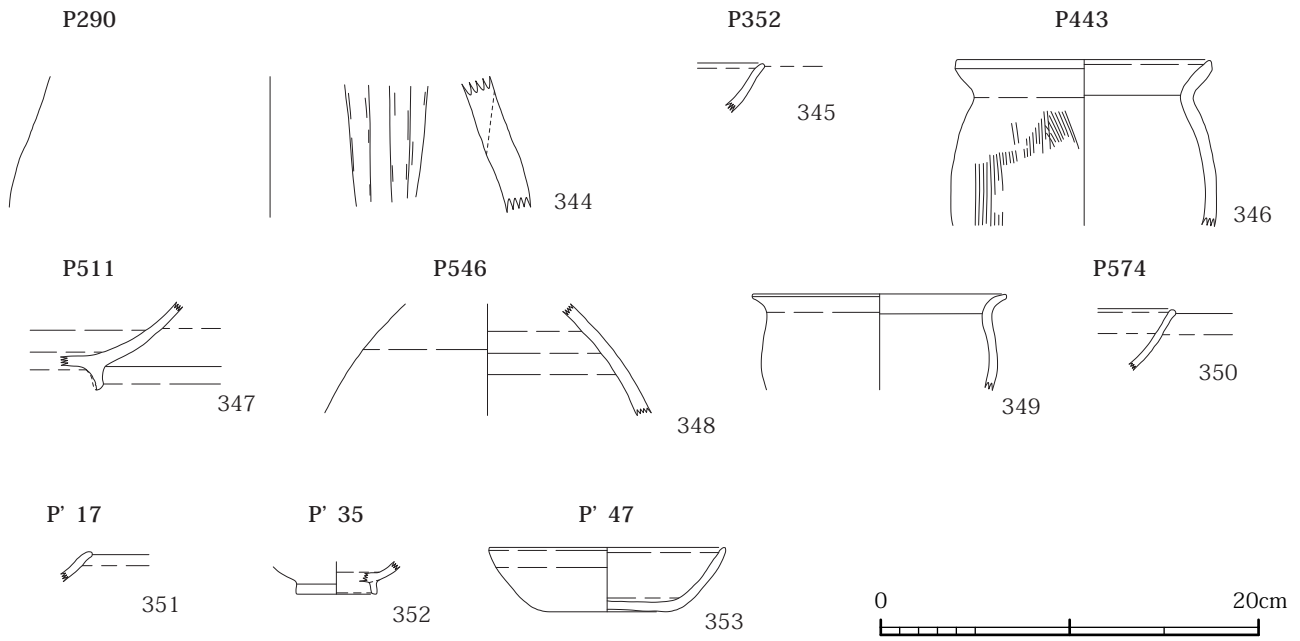


Fig.147 古代の遺構出土遺物 2 (S=1/4)

#### 4 中世の遺構 (Fig.148)

中世の遺構は、12～13世紀の中世前期の段階が中心となる。多量に出土した山茶碗の時期を見ると、藤澤編年の5～6型式のものが多数を占め、概ね12世紀後半～13世紀前半に盛行したと考えられる。反面、この前後の時期のものは非常に少ない。全体的として、この鎌倉時代初頭～前半期に比定できる遺物の出土量が最も多く、特に山茶碗の出土が顕著である。遺構の中心は第19次調査区の西～南西部で、二重の溝によって区画された屋敷地である。長方形を呈し、広大な規模を誇る屋敷地内において、掘立柱建物や大型の土坑、井戸等による生業を確認した。屋敷地の範囲外においては、該当期の遺構密度は極端に疎らとなる。

##### 【溝 SD19007 (Fig.149・150)】

**重複** SD19004・130, SH19060・61, P110・113・115・152・169 (SA19044)・515, ピット (遺物なし) →SD19007 →P95, ピット (遺物なし)。

**平面・規模** 検出した規模は、長さ19.8m、幅1.0～1.6m、検出面からの深さは0.07～0.35mを測る。掘り方は西部で薄く、段状に0.05m程度上がり、検出面とほぼ一体化する。主軸方向はW-17°-S方向を示す。西部はやや北側に湾曲しながら調査区外の西方向へ延び、東部は位置関係から第22次調査1区のSD22011へと繋がるものと判断される。

**遺物** 山茶碗 (354～365)・鉢 (368), 青磁碗 (367), 白磁碗 (366) が出土した (Fig.151)。また、上層からは弥生土器甕 (369・370) の混入を確認した。

**山茶碗 (354～365)** 全体的に低く扁平な高台を付帯

する。粗肌手の胎土で、南部系のものと推定される。354～357は口縁～体部が直線的に外反し、354・356は口縁部端部が内傾する。354～356の口縁部外面には凹みが認められ、354に顕著である。354は高台に粗殻痕が明瞭に観察され、底面には板状工具で押圧された痕跡が確認できる。355は内面の凹みにより、体部と底部の間が区別される。356・361・362・365は体部内面に自然釉が薄くかかる。357の高台は剥がれているものと考えられる。359・361・362・365の高台には粗殻痕を確認できる。359は体部及び底部の内面に朱墨が観察できる。朱墨は体部下方の一部でやや濃く施される。364は高台がほぼ剥離しているが、底面には墨書が施され、「一」と判読される。365は山皿の前段階で、高台を有する小碗になると考えられる。

**山茶碗鉢 (368)** 厚手の作りで、体部は直線的に外反する。ロクロ目が強く、体部外面一部及び内面には自然釉が見られる。無高台であるが、高台は剥落しているものと見られる。

**青磁碗 (367)** 体部下方から底部にかかる資料である。内外面に施釉される。

**白磁碗 (366)** 底部内面に厚く施釉が確認される。丁寧な作りである。高台は削り出され、扁平で幅広に作られる。内面には圈線が施され、体部と底部が明瞭に区別される。

**弥生土器甕 (369・370)** 共に口縁部外端面を刺突文で装飾される。369は受け口甕であり、口縁部端部の立ち上がりは明瞭で、やや外反する。370は薄手の作りである。頸部の屈曲が強く、口縁部は全体的に外反し、端





Fig.148 中世の主要遺構配置図 (S=1/500)

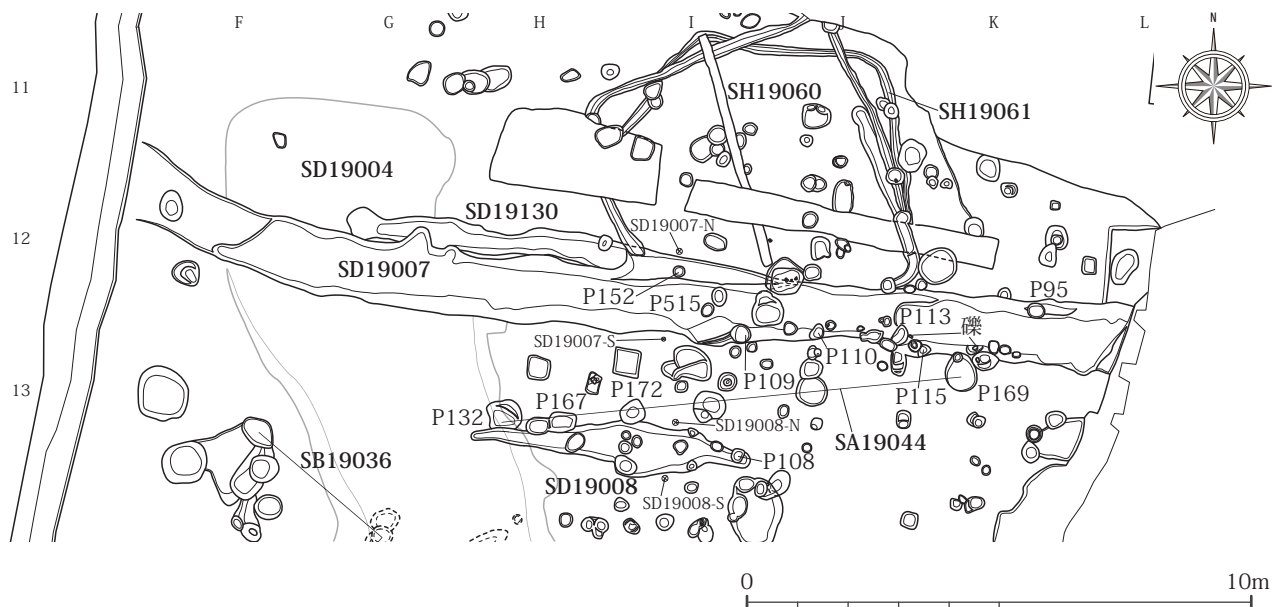


Fig.149 SD19007・8 平面 (S=1/150)

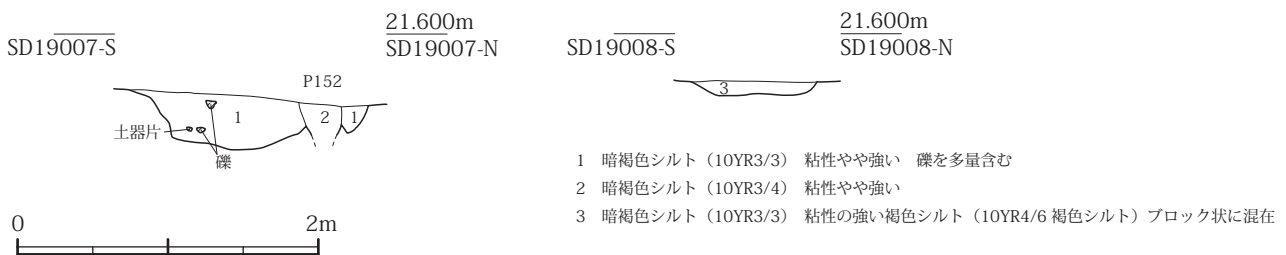


Fig.150 SD19007・8 土層断面 (S=1/50)

部は外側へ湾曲する。S字襖0類の段階に比定でき、その年代観は古墳時代初頭の廻間I式1～2段階である。  
**時期・性格** 出土した山茶碗は全体的に藤澤編年の5型式で、12世紀後半～13世紀初頭に属するものと考えられる。365のみ山茶碗小碗で、4型式以前に遡る可能性のある資料であるが、小型化する段階にあり、4形式の中でも新相に分類される。12世紀中葉～後半の年代観が求められ、他の遺物と整合するものと考えられる。遺構の重複関係を見ると、弥生時代後期～古墳時代初頭のSD19004、古墳時代初頭のSH19060・61、古代のSA19044・P109に後出する。SD19007を切るP95からは山茶碗(558)が出土しているが、時期差は乏しいものと判断される。また、北側で並行するSD19130はほぼ同色の埋土を呈し、近い時期の埋没が想定される。SD19007にやや先行するものと見られるが、遺物の出土がないため、詳細は不明である。屋敷地の周囲を二重に回る区画溝であり、北辺の外溝に該当する。

**【溝SD19008 (Fig.149・150)】**

**重複** SD19004, P132・167・172 (SA19044), ピット(遺物なし)→SD19008→P108, ピット(遺物なし)。

**平面・規模** 幅0.3～1.1m, 検出面からの深さ0.05～0.1mを測る。中央部でやや幅広となる。西部はSD19004上面において検出したが、東西方向共に途切れ、その延長は確認できない。確認した長さは5.6mを測る。検出範囲が限定されるため誤差が生じてしまうが、主軸は概ねW-7°-S方向を示すものと見られる。

**遺物** 山茶碗(371)が出土した(Fig.151)。

**山茶碗(371)** 底部の一部を留めるのみで、高台は低く貼り付けられる。内外面はロクロナデ調整が施され、底面は糸切りされる。胎土は粗肌手で、南部系のもものと推定される。

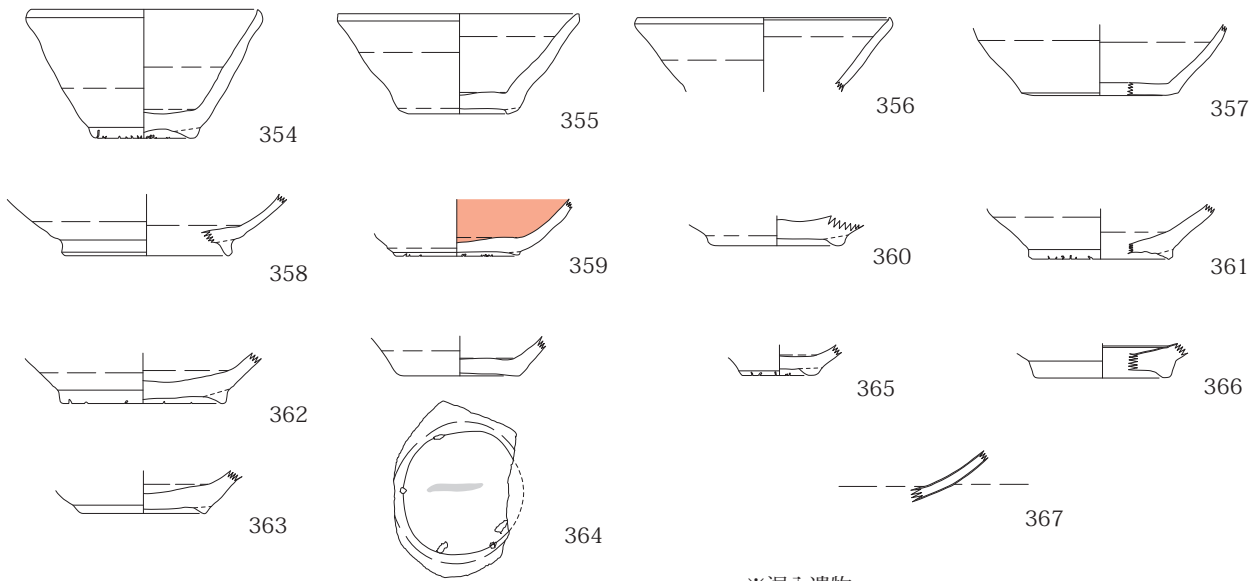
**時期・性格** 検出範囲が限定され、掘り込みも浅いため、出土遺物は僅少である。弥生時代後期～古墳時代初頭のSD19004、古代のSA19044に後出する。SD19007に並行しており、屋敷地の回りに設定された区画溝の一部であり、北辺の内溝になるものと考えられる。外溝のSD19007とは内法間で2.0mの距離をもつ。出土遺物からも齟齬は生じない。

**【溝SD19005 (Fig.152・153)】**

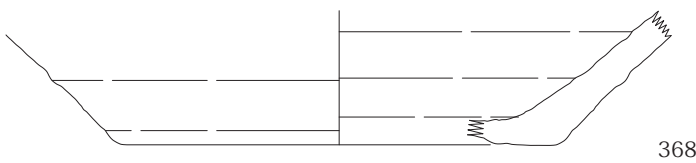
**重複** SD19005 東西, SK19049, SX19013, ピット(遺

SD19007

上層

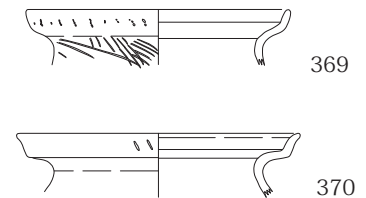


下層



※混入遺物

上層



SD19008

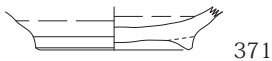


Fig.151 SD19007・8 出土遺物 (S=1/4)

物なし) → SD19005 →ピット (遺物なし)  
 平面・規模 検出した規模は、長さ 26.4 m、幅 0.8 ~ 1.5 mを測り、検出面からの深さは 0.2 ~ 0.45 mを計測する。調査区外の南へ延び、北方向は第 22 次 1 区の SD2011・12 に接続するものと考えられる。主軸方向は N-10° -W を向く。中央~南部を攪乱されるが、この中央部の外灯に伴う方形状攪乱付近において、急激に浅くなり、検出面からの深さは 0.06 ~ 0.15 mになる。底面のレベルは上昇傾向を示すが、攪乱範囲が重なるため、形状の詳細は不明である。方形状の攪乱箇所北側では底面は段状を呈し、この部分から直交するように東方向へ分岐する。この溝は幅 1.0 ~ 1.2 m、検出面からの深さ 0.35 ~ 0.45 mを測り、長さは 8.7 mを検出した。形状的には同一の溝であり、埋土の状況からも似ているが、当該東西溝が埋没した後に南北溝が開掘されていることが判明した。中央部で溝が浅くなる箇所を SD19005 出

入口、僅かに先行する東西溝を SD19005 東西と呼称し、遺構の主体となる南北溝 SD19005 から峻別し、細分して表現することとしている。

遺物 山茶椀 (372 ~ 387・391 ~ 399・402・406・407・411)・山皿 (408 ~ 410)・鉢 (388・400・403), 土師器皿 (389・404・405), 青磁椀 (390), 土錘 (401) が出土した (Fig.156・157)。上層には須恵器坏 (412) が混入し、また攪乱の影響によるものか出入口の上層にも平瓦 (413) の混入を確認した。

山茶椀 (372 ~ 387・391 ~ 399・402・406・407・411) 胎土は粗肌手であり、南部系の所産であると推定される。扁平な高台を付帯する。口縁~体部はほぼ直線的に外反し、374 ~ 377・387・391・393・394・406・407・411 の口縁部外面は凹む。375・378 ~ 382・385 ~ 387・391 ~ 393・395・397・399・406 の高台には初殻痕が観察され、382・395 は特に顕著であ

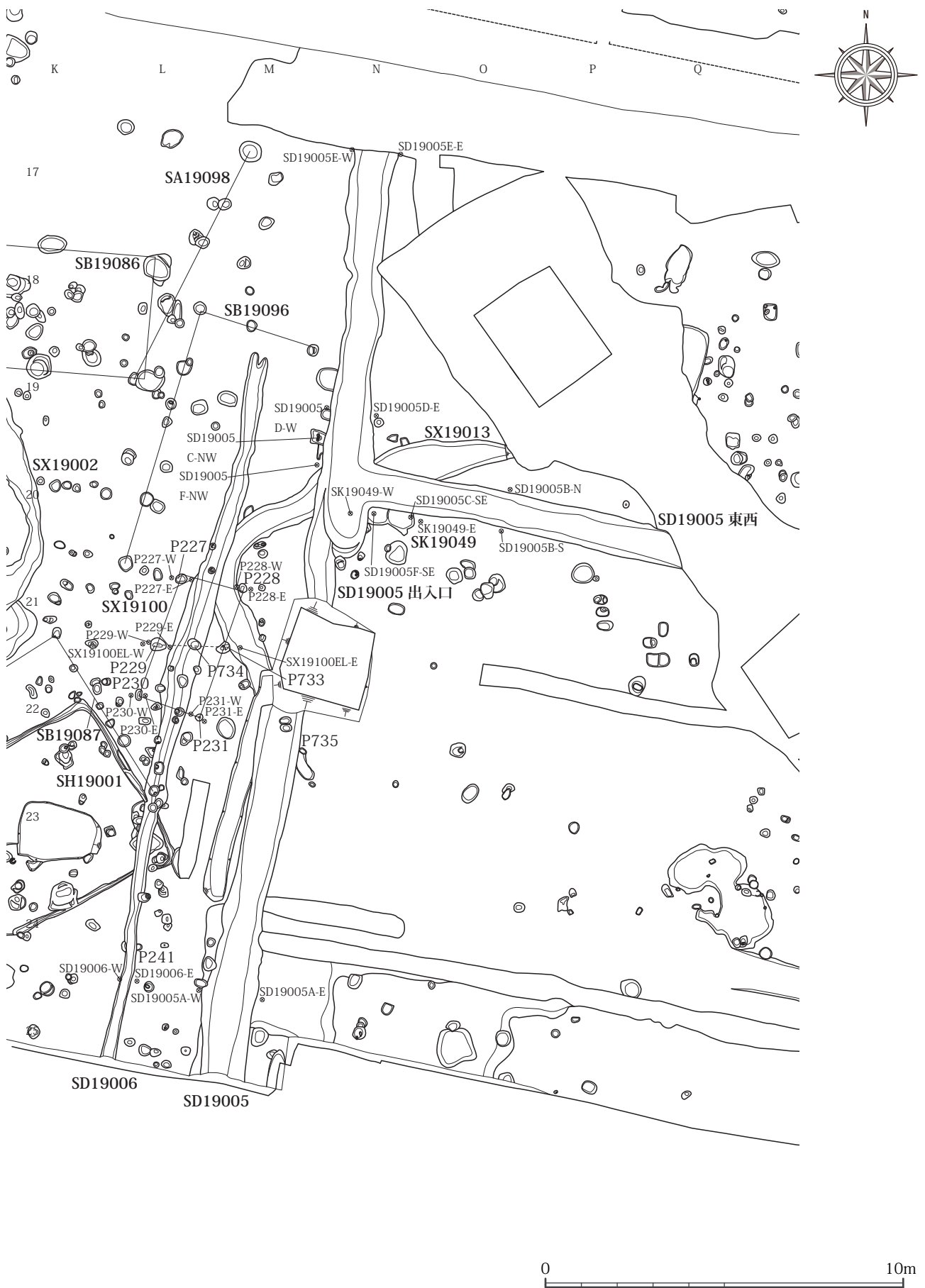
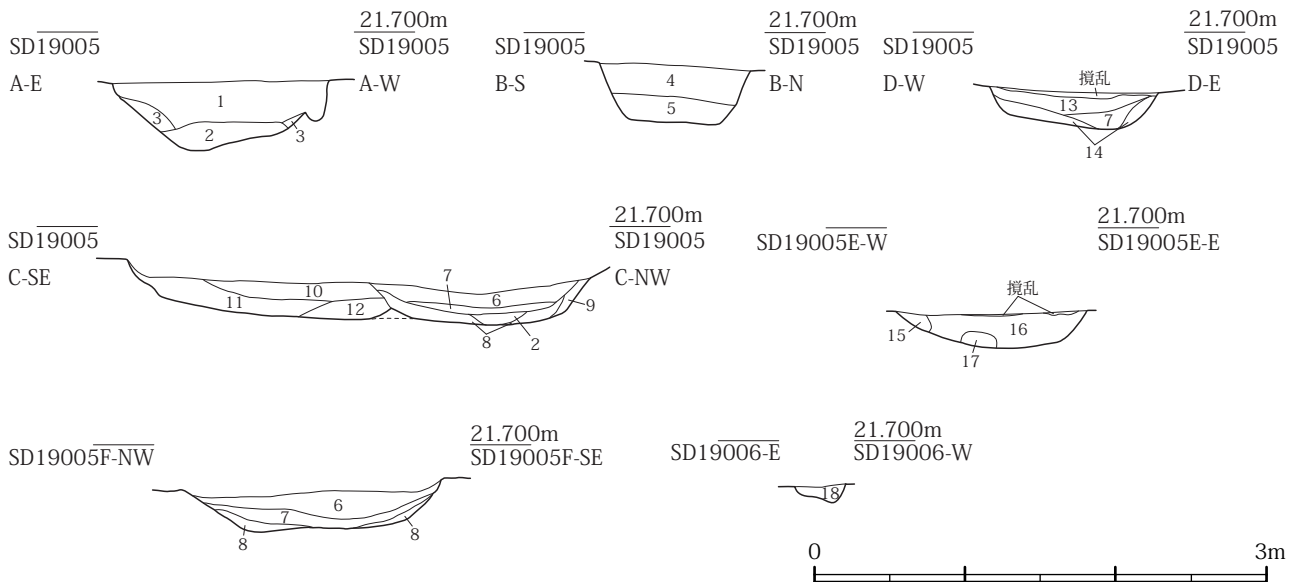
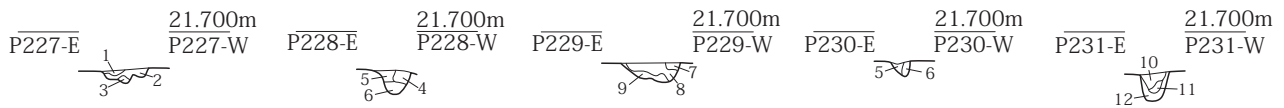


Fig.152 SD19005・6・SK19049・SX19100 平面 (S=1/150)



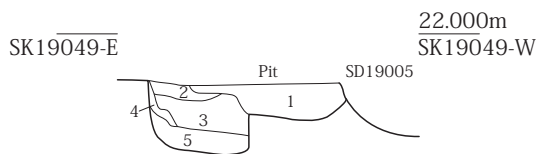
- |  |   |
|--|---|
| 1 黒褐色シルト (10YR2/3) 粘性やや強い、炭化物を少量含む         | 10 暗褐色細砂 (10YR3/3) 粘性弱い、細礫を多量含む           |
| 2 黒褐色シルト (10YR2/2) 粘性強い                    | 11 黒褐色シルト (10YR2/3) 粘性強い、細礫・地山ブロックを多量含む   |
| 3 1に地山ブロックを少量含む                            | 12 暗褐色シルト (10YR3/3) 粘性強い、地山ブロックを多量含む      |
| 4 暗褐色細砂 (10YR3/3) 粘性弱い、細礫を多量含む、地山ブロックを少量含む | 13 黒褐色シルト (10YR2/3) 粘性強い                  |
| 5 黒褐色シルト (10YR2/3) 粘性やや強い、細礫を多量含む          | 14 黒褐色シルト (10YR2/3) 地山ブロックを少量含む           |
| 6 黒褐色シルト (10YR2/3) 粘性強い、炭化物を少量含む           | 15 黒褐色シルト (10YR2/2) 細礫・地山ブロック・炭化物を少量含む    |
| 7 黒褐色シルト (10YR2/3) 粘性強い、細砂を含む              | 16 黒褐色シルト (10YR2/3) 細礫・地山ブロック・炭化物を含む      |
| 8 黒褐色シルト (10YR2/3) 地山ブロックを含む               | 17 黒褐色シルト (10YR2/2) 細礫・地山ブロックを少量含む        |
| 9 黒褐色シルト (10YR2/3) 地山ブロックを多量含む             | 18 黒褐色シルト (10YR2/2) 粘性やや強い、粗砂・地山ブロックを少量含む |

Fig.153 SD19005・6 土層断面 (S=1/50)



- |                                 |                                    |
|---------------------------------|------------------------------------|
| 1 黒褐色シルト (10YR2/3) 地山ブロックを含む    | 7 黒褐色シルト (10YR2/3) 細礫を含む           |
| 2 暗褐色シルト (10YR3/3) 細礫を含む        | 8 黒褐色シルト (10YR2/2) 地山ブロックを含む       |
| 3 黒色シルト (10YR2/1) 地山ブロックを含む     | 9 暗褐色シルト (10YR3/3) 細礫・地山ブロックを含む    |
| 4 黒褐色シルト (10YR2/2) 細礫・地山ブロックを含む | 10 黒色シルト (10YR2/1) 細礫・地山ブロックを含む    |
| 5 黒褐色シルト (10YR3/1) 細礫・地山ブロックを含む | 11 黒褐色シルト (10YR2/2) 細礫・地山ブロックを少量含む |
| 6 黒褐色シルト (10YR2/2)              | 12 黒褐色シルト (10YR2/2) 細礫を含む          |

Fig.154 SX19100 土層断面 (S=1/50)



- |                                    |
|------------------------------------|
| 1 黒褐色シルト (10YR2/2) 地山ブロック・炭化物を微量含む |
| 2 黒褐色シルト (10YR2/2) 地山ブロック・炭化物を少量含む |
| 3 黒褐色シルト (10YR3/1) 細礫・炭化物を含む       |
| 4 黒褐色シルト (10YR3/2) 細礫・地山ブロックを含む    |
| 5 黒褐色シルト (10YR3/2) 細礫を含む           |

Fig.155 SK19049 土層断面 (S=1/50)

る。373は口縁部外面一部及び体部内面に自然釉がかかる。376は口径が16.8cmと大きく、体部外面が部分的に黒変する。自然釉は内面に薄く見られる。377は口縁部外端に明瞭なさ面を有し、この面に自然釉が観察できる。379・383・385の底部は厚手であり、379は底面の糸切り痕が明瞭である。380～382・386は体部内面に自然釉がかかり、381・382は薄い。387は口縁部内外面及び体部外面の一部に自然釉が観察でき、底面には墨書が施される。墨書は「上上」と判読され、これが横並びに配置される。391は内面全体及び口縁部外面一部、392は口縁～体部内面に自然釉が施され、392は薄く観察できる。394は口縁部外端面が明瞭であり、内面全体及び口縁部外面に自然釉が見られる。396は剥落の



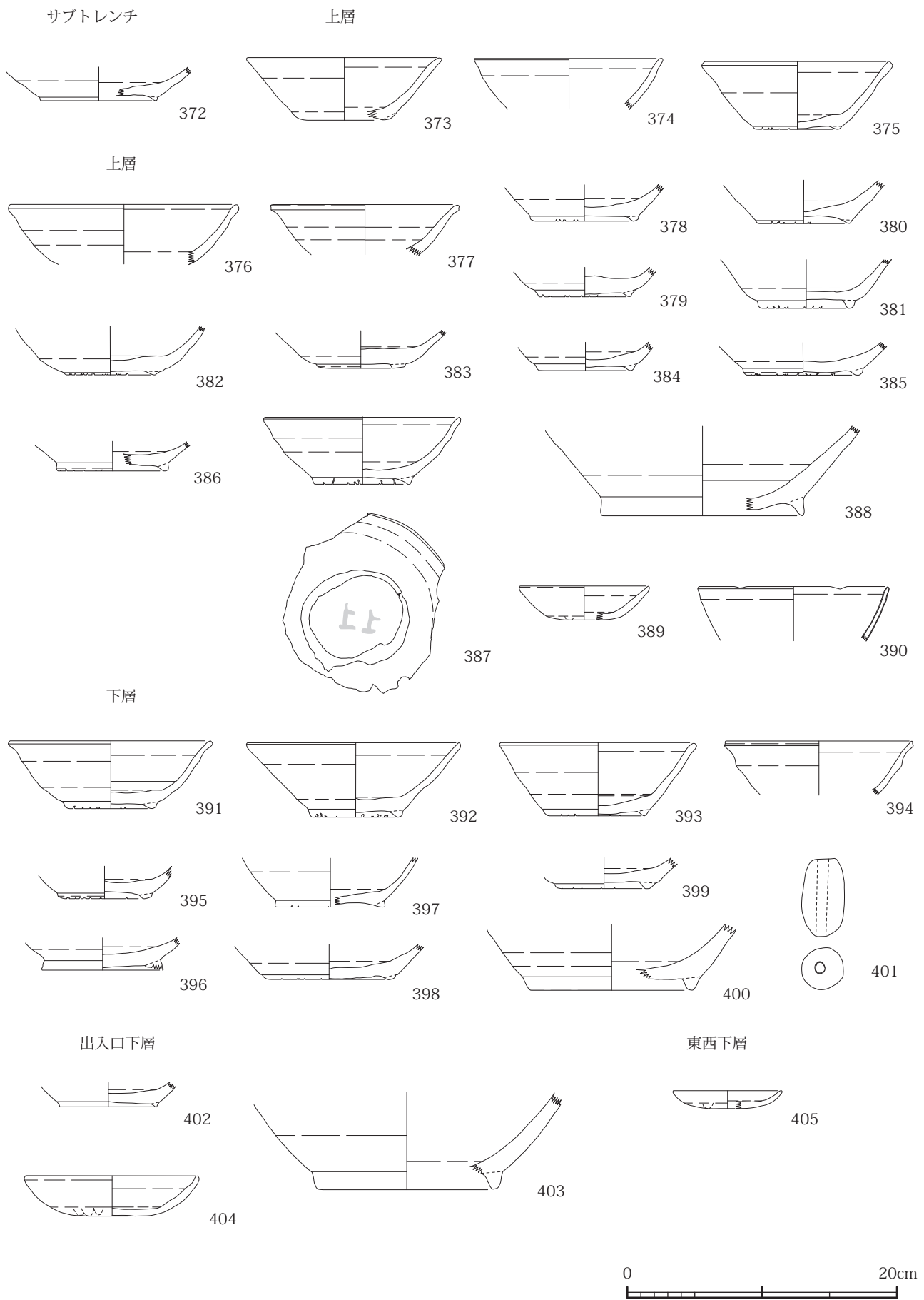


Fig.156 SD19005 出土遺物 1 (S=1/4)

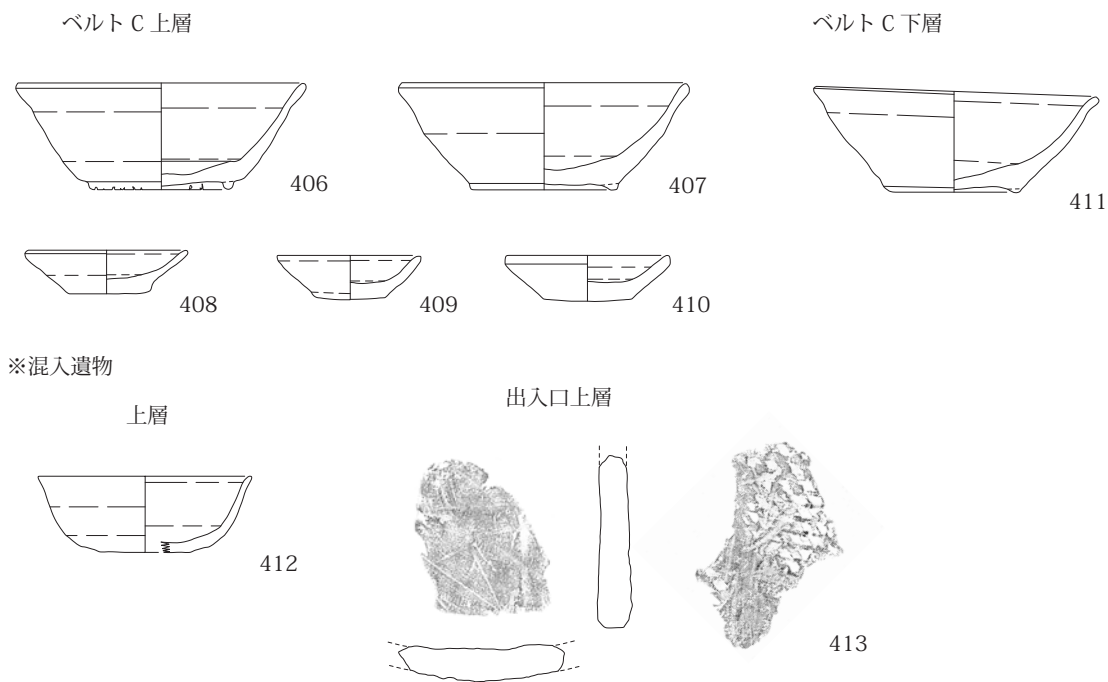


Fig.157 SD19005 出土遺物 2 (S=1/4)

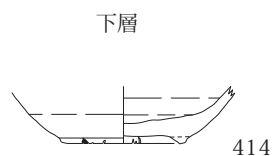


Fig.158 SD19006 出土遺物 (S=1/4)

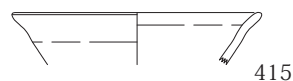
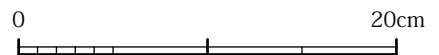


Fig.159 SK19049 出土遺物 (S=1/4)



ために高台形状は不明である。397の底部は未調整であり、体部内面下方に薄く自然釉がかかる。402の高台端部は尖り、断面は三角形状を呈する。393・406・411の内面はやや凹み、体部と底部が分割される。407の自然釉は体部内面に薄く、411は口縁部内外面に観察できる。411の口縁部内面の自然釉は厚く、その下地は黒変している。

**山皿 (408～410)** 全て高台を有さない山皿である。全体的に厚手の作りである。408・409の底部は突出して作られ、408・410は口縁～体部が直線的に外反する。409の口縁～体部はやや丸みを帯びる。

**山茶碗鉢 (388・400・403)** 全て体部下方～底部の資料である。389・403は体部内面に薄く自然釉がかかる。389は高台が高く貼り付けられ、内面の稜によって体部と底部が分けられる。400・403は断面が方形で重厚な高台を有し、底部端部の接地面が明瞭である。400は厚手の作りで、403は使用の痕跡によるものか、器面の内面が摩耗している。

**土師器皿 (389・404・405)** 389は口縁～体部が緩やかに外反する。404は口縁部端部が折り曲げられ、直立する。内面のナデは2単位観察できる。405は小皿で扁

平な作りである。

**青磁碗 (390)** 内外面に施釉され、口縁部には輪花が施される。口縁部は直線的に外反し、端部を丸く収める。無文である可能性が高いと判断される。

**土錘 (401)** やや厚手で棒状を呈する資料で、完形品であると見られる。精緻な胎土で作られる。直径0.8cmの円孔穿孔れ、これが直線的に貫通する。穿孔箇所はほぼ中央である。

**須恵器坏 (412)** やや小振りの器形で、無高台である。口縁～体部は緩やかに外反し、口縁部端部の外反が強い。猿投窯編年のI25窯式の段階であると考えられ、8世紀前半の混入品である。

**平瓦 (413)** 粘土紐桶巻作りによるもので、凹面には布目痕を確認し、それがダーツ状に綴じ合わされる痕跡が観察できる。挟端面のケズリはやや甘い。凸面は格子タタキが見られる。平田遺跡では同様の瓦が一定量出土しており、全体的に焼成が良好であり、黄褐・黄橙・橙色の色調を呈し、凸面調整が格子タタキされる特徴を有する。413のタタキの格子目は細長く、菱形状を呈しており、吉田真由美氏による平田遺跡出土瓦の凸面に対する工具(叩き具)分類(以下、吉田真分類と呼称)の

斜格子B類に該当するものと考えられる。7世紀後半～8世紀前半の年代観が与えられる。

**時期・性格** 山茶椀及び山皿は全体的として藤澤編年の5型式であり、その年代観は12世紀後半～13世紀初頭である。古墳時代初頭のSX19013を切る。また、SK19049やSD19005東西に後出するものの、出土遺物からは大きな時期差は見受けられない。屋敷地の周囲を二重に区画する溝で、東辺の外溝となる。なお、やや先行するSD19005東西は、この区画から外れるように東方へ延び、攪乱を挟んだ後にSD19023に繋がり、そして南方向へ湾曲して走るものと見られる。SD19005出入口については後述する。

**【溝SD19006 (Fig.152・153)】**

**重複** SH19001, P241, ピット(遺物なし) → SD19006 = P734 (SX19100) → ピット(遺物なし)

**平面・規模** 検出した規模は長さ20.2mを検出し、幅0.3～0.9mを測る。検出面からの深さは0.07～0.2mを計測する。中央部はテラス状を呈し、中段部分は検出面から0.05m程度掘削される。この中央部は幅広であるが、南部に向けて狭まる。南部は調査区外へ延びるが、北部の延長は未確認である。主軸方向はN-13°-W方向

を向く。

**遺物** 山茶椀(414)が出土した(Fig.158)。

**山茶椀(414)** 扁平な高台を有し、粉殻痕が観察できる。胎土は粗肌手で、南部系の産物であると推定される。

**時期・性格** 古墳時代初頭のSH19001を切るが、その他の重複するピットからは時期の絞り込みに繋がる遺物の出土がない。SD19005と並行し、屋敷地の回りを二重に走る区画溝であり、東辺の内溝に相当する。SD19005と比較すると、幅が狭く、深さも浅く掘削されており、特に遺物の出土量は圧倒的に少ない特徴がある。出土遺物の特徴からは、SD19005との時期差はないものと判断される。また、外溝であるSD19005との距離を内法間で測定すると、2.0mを測り、これは北溝における外溝SD19007と内溝SD19008の距離と近似する。

**【橋状遺構SX19100 (Fig.152・154・160)】**

**構成** P227～231・733・734・735？。

**重複** SX19013 → P733, P734 = SD19006。

**平面・規模** 1間×2間の規模を有し、長方形の平面形を呈するものと考えられる。主軸はN-18°-W方向を示す。構成するピットは直径0.2～0.4mの円形状を呈

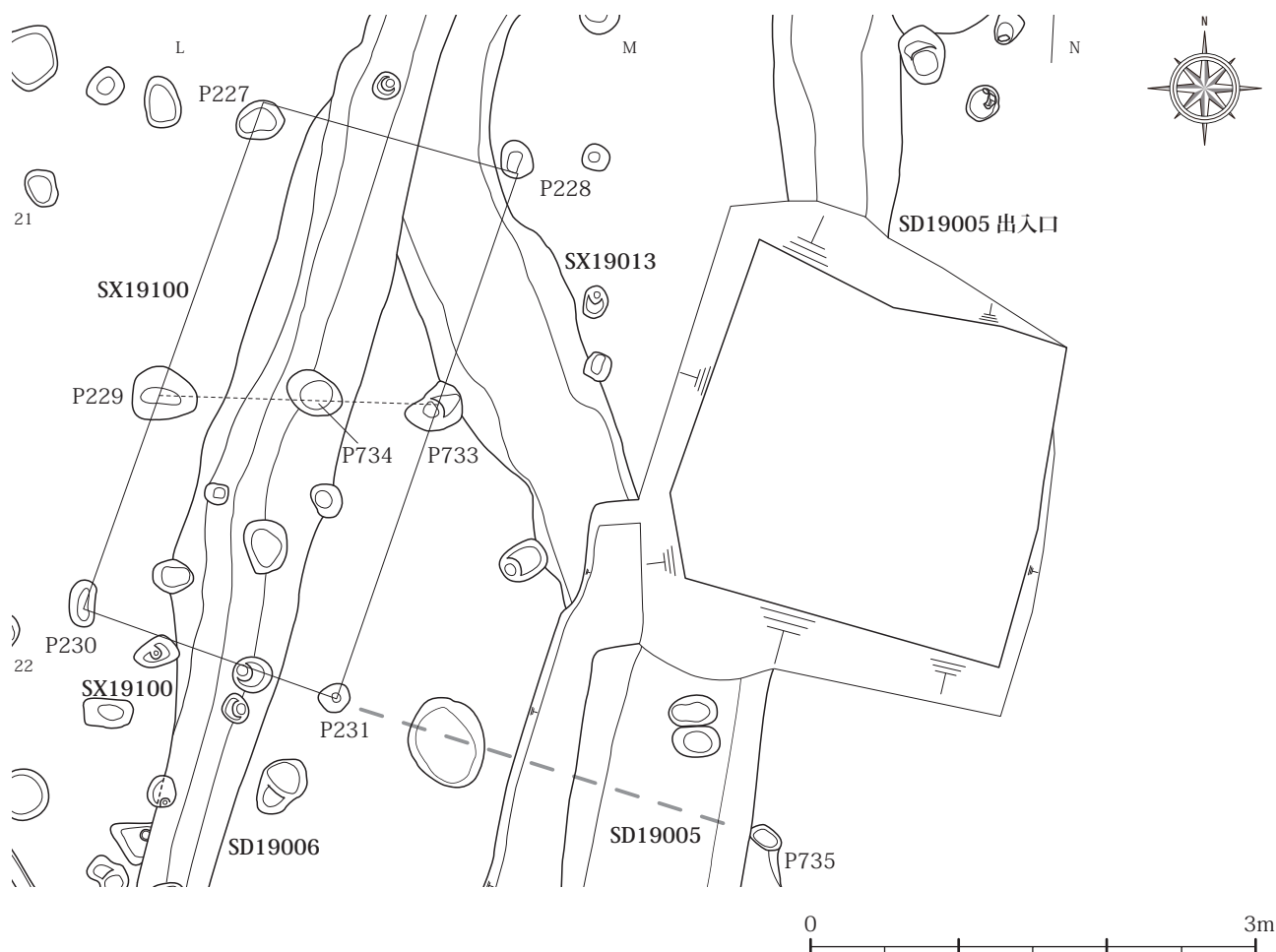


Fig.160 SX19100 平面 (S=1/50)

し、検出面からの深さは0.05～0.2 mを測る。主軸とはやや方向を異にするが、P229とP733を結ぶほぼ中間の箇所にはP734が存在し、これもSX19100を構成する可能性が高いと判断される。

**遺物** 遺物の出土は一切なかった。

**時期・性格** 屋敷地の東辺において、SX19100の短辺がSD19006を橋状に跨ぐように配置される。SX19100はSD19006とほぼ並行し、埋土の様相からもSD19006との親近性が窺われる。加えて、SD19006のすぐ東側は、ちょうどSD19005が浅く掘削されてSD19005出入口と考える箇所に相当する。SX19100が橋状にかかるSD19006とSD19005出入口付近を比較すると底面のレベルがほぼ同一になるように造られている。また、SX19100南辺の東方向の延長線上にはP735があり、全体的に東方へ延びる可能性も残すが、SD19005出入口付近の大部分が攪乱によって消失しているため、詳細は不明である。SD19005出入口とSX19100の存在及び形状を合わせて考えると、この箇所が屋敷地内における東西方向の出入口であったものと想定される。出入口であれば、門の存在も想起されるが、検出範囲においては確認されていない。不明な点が多いが、特にSD19005については、SD19006に合わせるために通常よりも0.15～0.2 m程度浅く造られており、計画性が窺われる。これが同様の橋状遺構を設定するためであったのか、それとも通行の便を講ずるために何らかの処置が必要となった結果であるのか、非常に興味深い。なお、当該出入口施設の設置箇所は、屋敷地の区画全体の北から1/3程度の位置に当たる。

#### 【土坑SK19049 (Fig.152・155)】

**重複** SK19049→SD19005 東西、ピット（遺物なし）。  
**平面・規模** 東西0.77 m、南北0.66 mを測り、円形状を呈する。SD19005東西に攪乱されるため北方向への広がり不明であるが、西部は重複するピットの下面でプランの確認に至ったため、概ねこの規模になろう。南部はやや不整である。検出面からの深さは0.5 mを計測する。

**遺物** 山茶椀(415)が出土した (Fig.159)。

**山茶椀 (415)** 粗肌手の胎土で、南部系であると推定される。口縁部外面には凹みが認められる。

**時期・性格** 12世紀後半～13世紀初頭のSD19005東西に先行するが、出土遺物を見ると時期差は乏しく、概ね同時期に比定できよう。後出するピットからは遺物の出土がない。

#### 【溝SD22011 (Fig.161・162)】

**重複** SD22013, P'130・132・133・135・136・141, ピット（遺物なし）→SD22011 = SD22012。

**平面・規模** 攪乱の影響を大きく受け、部分的な検出に留まるが、確認した長さは5.7 m、幅は1.5 mを測る。検出面からの深さは0.1～0.2 mを計測する。北西部ではややプランが乱れるが、北西方向へ向けて湾曲する志向が窺われる。

**遺物** 山茶椀(416～418・420～423)、土師器鍋(419・424)が出土した (Fig.163)。

**山茶椀 (416～418・420～423)** 全て粗肌手の胎土で、南部系の産物であると推定される。図化可能なものは、全て底部である。高台は全体的に低いか扁平な形状を呈する。418・422は体部内面に自然釉がかかる。420は内面の凹みによって体部と底部が分割される。体部はやや丸みをもちながら直線的に立ち上がる。

**土師器鍋 (419・424)** 南伊勢系の鍋である。口縁部は短く、内側へ折り返される。419は口縁部一部を残す資料で、口縁部の折り返しは僅かに認められる。口縁部端部は丸く肥厚する。424は小型製品で、頸部の屈曲が強い。口縁部の折り返しはやや厚手で丸みを帯びる。

**時期・性格** 出土遺物の山茶椀は、概ね藤澤編年の5型式に相当する。加えて土師器鍋は、伊藤裕偉氏による土師器鍋編年（以下、伊藤編年と呼称）の第1段階に比定できる。12世紀後半～13世紀前半の埋没が考えられる。また、遺構の重複関係を見ると、時期不明のSD22013等に後出する。先行するP'131から山茶椀(567)、P'136からも同様に山茶椀(568)が出土しており、時期差は大きくないものと見られる。その他のピットからは、時期の特定に繋がる有意な遺物は出ていない。SD22011は、既存建物の基礎梁によって攪乱・分断されるが、形状及び位置関係、埋土の様相から、北西方向へ湾曲してSD19007に繋がり、南方向はSD19005に接続するものと考えられる。そして、東側で並行するSD22012も同一の溝である。

#### 【溝SD22012 (Fig.161・162)】

**重複** SD22017→SD22012 = SD22011。

**平面・規模** 既存建物の基礎梁による攪乱のため、東肩を検出したのみである。検出した規模は長さ3.7 m、検出面からの深さ0.1 mを測る。SD22011・12を合わせた幅は、1.5～2.1 mを計測する。主軸方向はN-8°Eを指す。

**遺物** 山茶椀及び土師器片が出土しているが、図化可能となる遺物はなかった。

**時期・性格** 先行するSD22017からは遺物が一切出土していないため、その帰属時期は不明である。SD22011と一連の遺構で、屋敷地の周囲を回る溝の北東コーナーに該当する。過去の調査においては、当該屋敷地にかかる区画溝の明瞭なコーナーの確認には至っていないた



Fig.161 SD22011・12平面 (S=1/100)



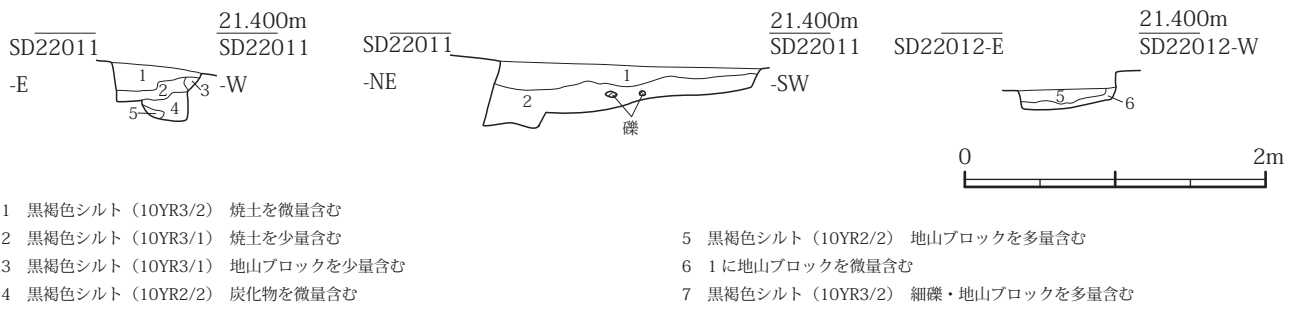


Fig.162 SD22011・12 土層断面 (S=1/50)

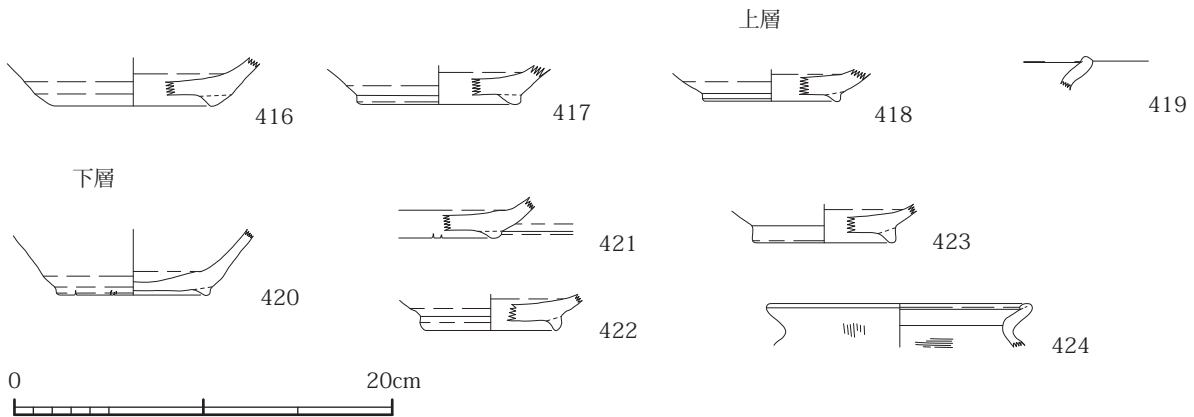
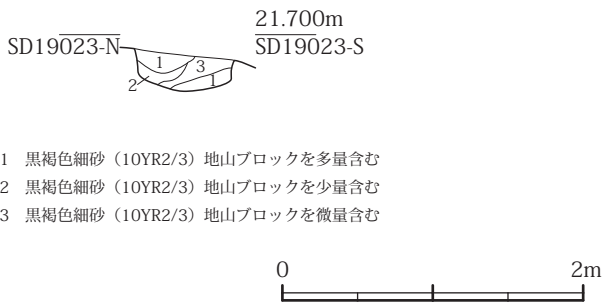


Fig.163 SD22011 出土遺物 (S=1/4)



Fig.164 SD19023 平面 (S=1/100)



- 1 黒褐色細砂 (10YR2/3) 地山ブロックを多量含む
- 2 黒褐色細砂 (10YR2/3) 地山ブロックを少量含む
- 3 黒褐色細砂 (10YR2/3) 地山ブロックを微量含む

Fig.165 SD19023 土層断面 (S=1/50)

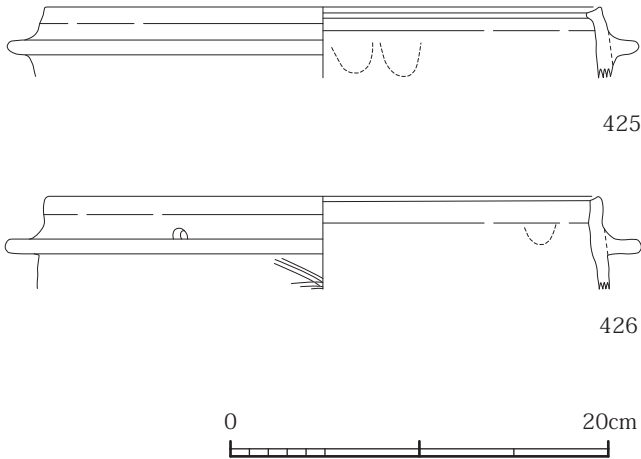


Fig.166 SD19023 出土遺物 (S=1/4)

め、その北限及び東限が確実となった。なお、区画溝は二重に回るため、本来であればSD22011・12の内側に同様の溝が走ることが想定されるが、SD19006・8の様相や過去の調査結果を鑑みると、全体的に細く浅く掘削されているため、削平されてしまったものと推測される。

**【溝SD19023 (Fig.164・165)】**

**重複** SH19012・57, ピット (遺物なし) → SD19023 → SX19028・51・56。

**平面・規模** 幅0.5～1.0mを測り、検出面からの深さは0.3mである。南部に向けて浅まり、0.05mになる。西部及び南部は攪乱範囲が広がるため、検出した長さは8.2mである。湾曲するコーナー部分をSX19056で攪乱されているが、主軸方向はW-13°-Sから南方へ湾曲し、N-5°-W方向へと向きを変えている。

**遺物** 土師器羽釜 (425・426) が出土した (Fig.166)。その他に土師器鍋等の破片が出土しているが、実測に至るものではない。

**土師器羽釜 (425・426)** 共に短い口縁部に鏝部が付帯し、鏝部下方には煤の付着が観察できる。口縁部は内傾し、口縁部上端は凹線状の窪みが認められる。426の鏝部上方には円孔が施され、その穿孔は焼成前に行われたことが分かる。

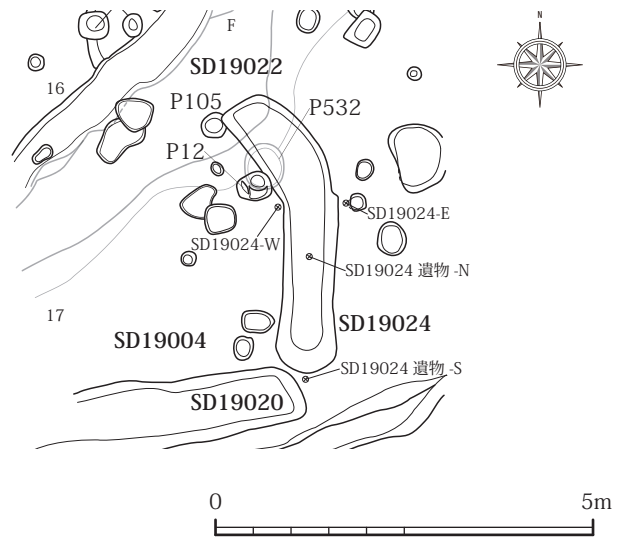
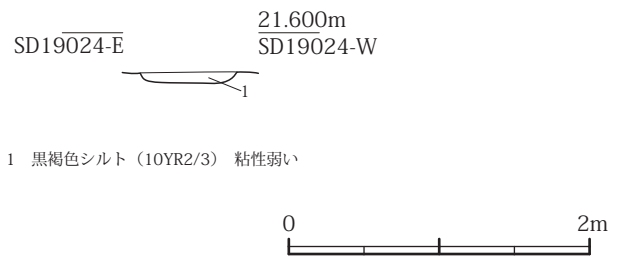


Fig.167 SD19024 平面 (S=1/100)



- 1 黒褐色シルト (10YR2/3) 粘性弱い

Fig.168 SD19024 土層断面 (S=1/50)

**時期・性格** 古墳時代初頭のSH19012・57に後出し、攪乱のSX19028・51・56に切られる。図化した土師器羽釜の特徴は、伊藤裕偉氏による土師器羽釜編年 (土師器鍋と同様、伊藤編年と呼称) の第3段階の所産である。14世紀後半～15世紀前半の産物であるが、SD19023は攪乱によって分断されるものの、埋土の状況と位置関係から、SD19005東西と繋がるものと考えられる。SD19005東西は、屋敷地の区画溝東辺の外溝であるSD19005より僅かに先行し、概ね12世紀後半～13世紀初頭の埋没が想定される。SD19023からは該当期に比定できる土師器鍋の破片も出ているため、SD19005東西と一連の溝となり、何らかの区画を形成する可能性が高いものと判断される。なお、南部は広範に攪乱されるため茫漠としており、攪乱を免れた調査区最南部にはその延長は現れておらず、全体像は不明である。

**【溝SD19024 (Fig.167・168)】**

**重複** SD19004, P12・105・532 → SD19024。

**平面・規模** SD19004の上面に存在する。幅0.7～0.8m、検出面からの深さは0.1mを測る。途中で途切れているため、検出に至った長さは3.9mである。主軸方向は正方位を示すが、北部は西側へ湾曲傾向を呈し、N-37°-E方向を向く。北～南方にはその延長は確認できない。

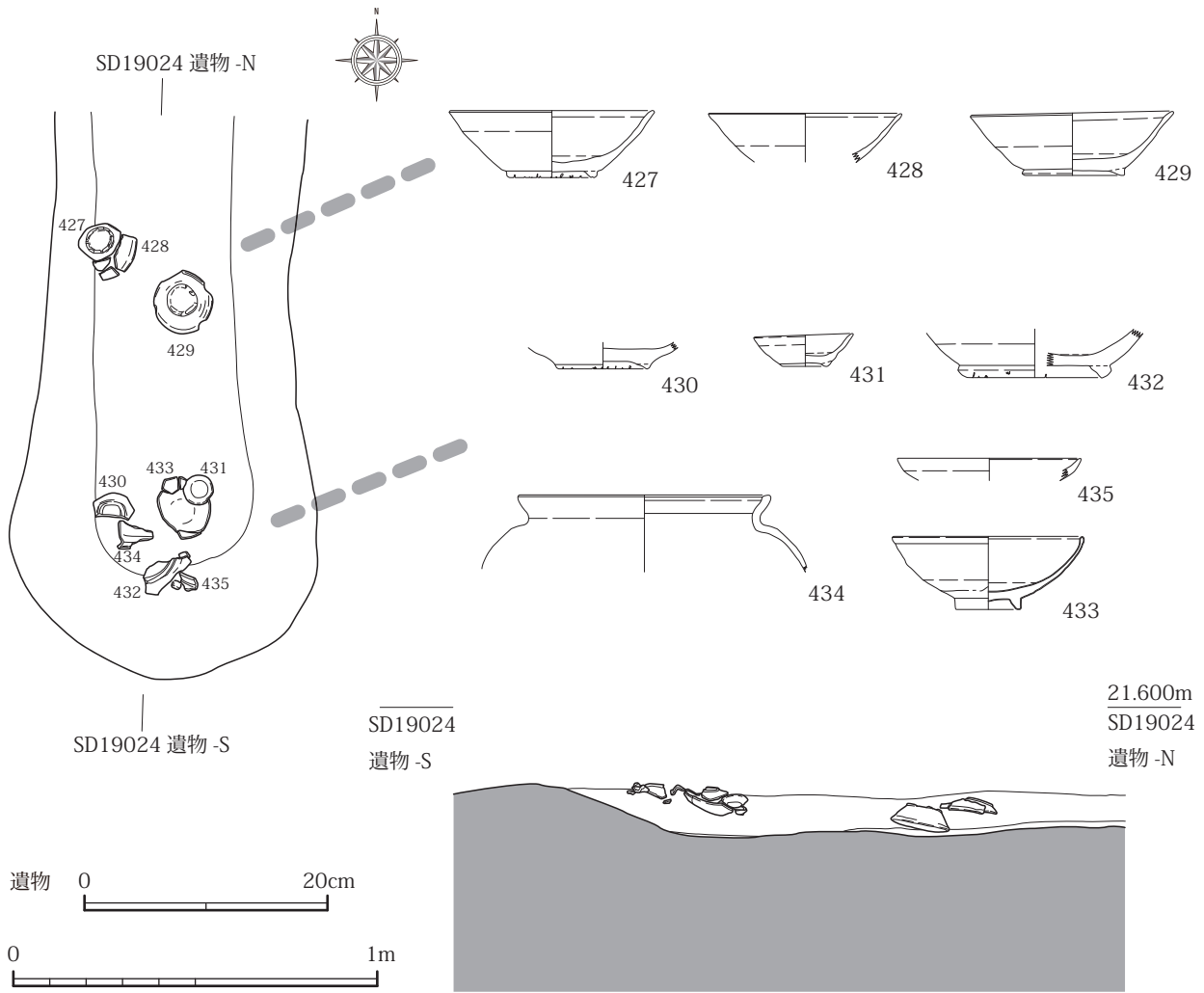


Fig.169 SD19024 遺物出土狀況 (S=1/20 遺物 : S=1/6)

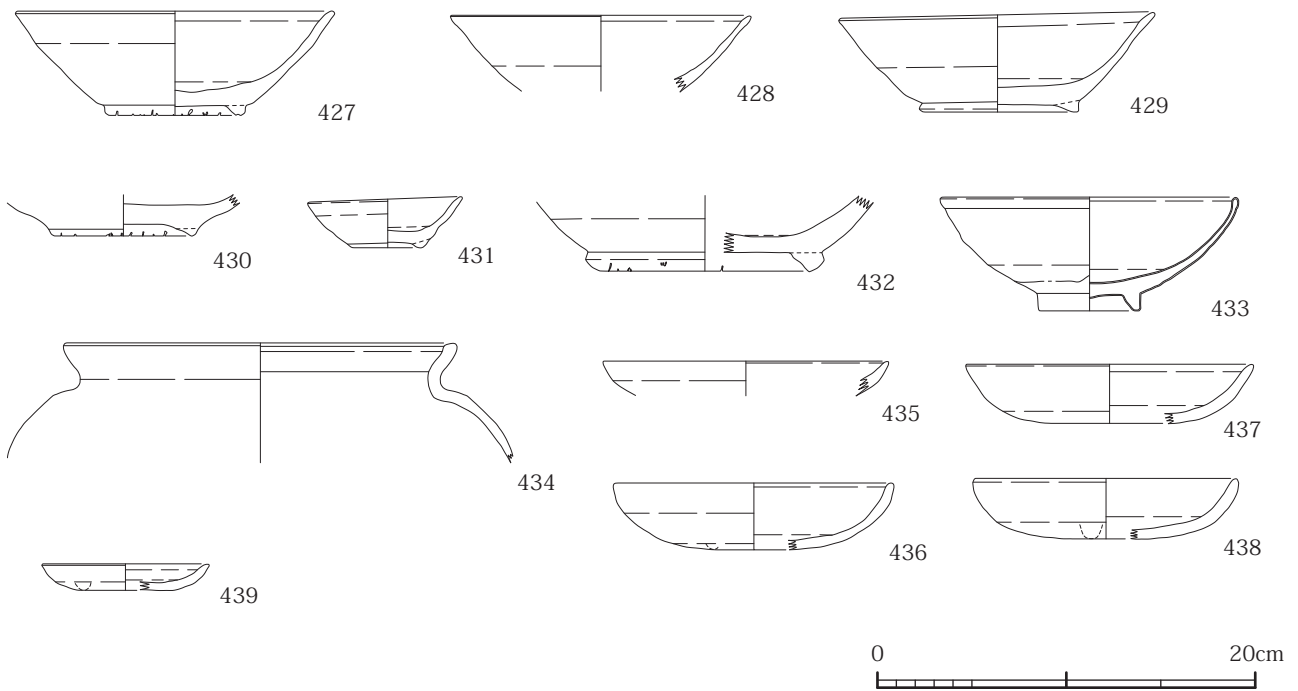


Fig.170 SD19024 出土遺物 (S=1/4)

**遺物** 山茶椀(427～431)・鉢(432),土師器甕(434)・皿(435～439),白磁椀(433)が出土した(Fig.170)。

**山茶椀(427～431)** 粗肌手の胎土で作られ,南部系の所産であると推定される。概ね扁平な高台が貼り付けられ,427・430は高台に粗殻痕が観察できる。427～429は口縁部が直線的に外反する。427・428は,口縁・体部内面に薄く自然釉がかかる。431は山皿の前段階となる小椀である。ほぼ完形資料で,扁平な高台を有する。429・431にはやや歪みが認められる。

**山茶椀鉢(432)** 重厚な高台が貼り付けられ,底部端部には外端面が作られる。高台には粗殻痕が確認できる。内面全体が黒変しているが,これは焼成時のものと考えられる。

**土師器甕(434)** 頸部の屈曲が強く,体部上方は丸みを帯びる。口縁部は短く,内面は内側へ突出し肥厚する。

**土師器皿(435～439)** 全て口縁部端部を丸く収める。435・436・438は口縁部を上方へ向けられる。437・439は口縁部が外側へ開く。437は内面に2単位のナデが施される。439は小皿で扁平な作りである。

**白磁椀(433)** 胎土が精製され,精緻な作りである。口縁部は直立し,底部は高台が削り出される。底部端部はほぼ接地する。灰白色の施釉が施されており,内面全体と口縁部外面,そして体部外面一部に観察可能である。

**時期・性格** 弥生時代後期～古墳時代初頭のSD19004,古代のP12に後出する。出土した山茶椀の特徴は,藤澤編年の4型式に該当すると考えられる。そして,434は伊藤編年の(仮)A段階に比定でき,12世紀前半～中葉の年代観である。屋敷地の区画内部には位置するものの,他の中世遺構をやや遡る。検出範囲は限られるにも関わらず,良好な遺物の出土に恵まれ,特に南部に集中する(Fig.169)。最南部では433が口縁部を上にし,それに重なり合うように431が底部を上方に向けて出土した。また,この北方には427・429が伏せられた状態で出ている。431はほぼ完形品で,429・433も遺存状態が比較的良好である。非常に精緻に作られ,高級品と見られる433の出土が特に注目される。

#### 【井戸SE19025(Fig.171・172)】

**重複** SD19004, SX19048 → SE19025。

**平面・規模** 前代のSD19004及びSX19048の上面から掘り込みが認められる。直径1.7mを測り,円形状の平面形を呈する素掘りの井戸である。検出面からは深く下がり,下層には粘質の強いシルト層である5層が厚く堆積する。安全面を考慮し,1.25m程度の深さで掘削を断念した。埋土の様相からは,底面まではまだ深く掘り下がるものと考えられるが,このレベルで一定量の湧水の発生を確認した。掘り方の円周に沿うように段掘り

され,テラス状に中段をなす箇所を検出面からの深さは,北部及び南部で0.4m,西部及び東部で0.6mを測る。南～西部にはこの部分に直径0.1～0.2mの礫の埋没を確認した。

**遺物** 山茶椀(440・441・446～451),山皿(442・452),土師器甕(443)・皿(445・453),青磁椀(444)が出土した(Fig.175)。

**山茶椀(440・441・446～451)** 全て粗肌手の胎土によって作られ,南部系の所産であるものと推定される。底部には扁平で低い高台が貼り付けられる。440・441・448・449の高台には粗殻痕が残存する。446～448は口縁～体部が直線的に外反する。446・448の口縁部外面には凹みが認められ,特に448に顕著である。446は胎土に直径0.4～1.0cmの礫を包含し,口縁部外面には自然釉が施される。447は口縁部内面に薄く自然釉がかかる。448にはやや歪みがある。448は内面の凹み,451は内面の稜により,体部と底部が明瞭に分割される。

**山皿(442・452)** 共に無高台の皿で,442は内面全体,452は口縁～体部内面に自然釉が施される。共に口縁部端部を丸く収める。442は底部が1/3程度残存しているが,底面には墨書が観察できる。欠落しているために確証はないが,残存範囲からは「天」と判読されるものと推測される。452は内面に明瞭な稜が作られ,体部と底部が区別される。

**土師器甕(443)** 頸部の屈曲が強く,口縁部端部をやや上方へ摘み上げる。口縁部はやや肥厚する。口縁部内外面及び体部内面はヨコナデされ,体部外面には粗いタテハケ調整を観察できる。

**土師器皿(445・453)** 共に小皿であり,445は扁平に作られる。445は口縁部が短く折り曲げられ,やや外反する。453は口縁部端部がほぼ直立する。丁寧な作りである。

**青磁椀(444)** 口縁～体部を残す資料である。薄手の作りであり,内外面を施釉される。口縁部端部は外側へ引き出され,口縁部上端に面を形成する。

**時期・性格** 弥生時代後期～古墳時代初頭のSD19004,古代のSX19048に後出する。出土した山茶椀及び山皿は藤澤編年の5型式に相当し,12世紀後半～13世紀初頭に属すると考えられる。出土遺物に大きな時期差は認められないため,比較的短期間に埋没したものと見られる。屋敷地の区画内部に存し,関連する遺構と同時期に比定される。

#### 【井戸SE19112(Fig.173・174)】

**重複** SK19113 → SE19112。

**平面・規模** 直径1.8mを測り,円形状を呈する。素掘

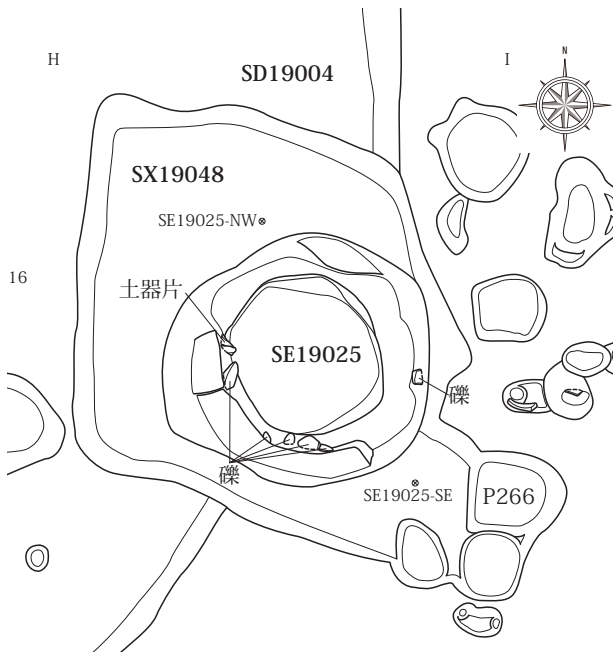
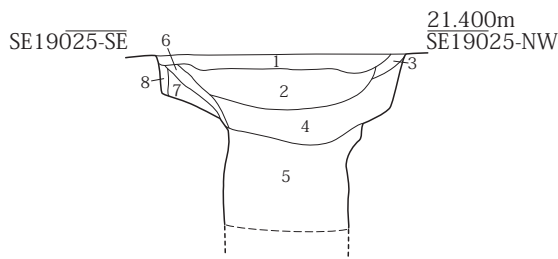


Fig.171 SE19025 平面 (S=1/50)



- 1 黒褐色細砂 (10YR3/2) 粘性弱い 細礫を含む
- 2 黒褐色細砂 (10YR2/3) 細礫を多量含む
- 3 暗褐色細砂 (10YR3/4) 地山ブロックを多量含む
- 4 黒褐色シルト (10YR2/3) 粘性強い
- 5 黒褐色シルト (10YR2/2) 粘性強い 細礫を多量含む
- 6 暗褐色細砂 (10YR3/4) 細礫・地山ブロックを多量含む
- 7 黒褐色シルト (10YR2/3) 粘性弱い
- 8 黒褐色シルト (10YR2/2) 粘性弱い 地山ブロックを少量含む

Fig.172 SE19025 土層断面 (S=1/50)

りの井戸である。検出面から 0.92 m掘削したが、底面までは到達せず、安全面を考慮してこの面で掘削を止めた。西部及び北～東部において、検出面から 0.3 m程度段掘りされる。湧水の発生は僅かであり、底面の到達までには相当な深さが必要であると考えられる。

**遺物** 山茶椀 (454～456・458・459), 土師器皿 (457) が出土した (Fig.175)。

**山茶椀 (454～456・458・459)** 胎土は粗肌手であり、南部系のものと推定される。口縁部外面には凹みを有し、ほぼ直線的に外反する。454・456・459の口縁部端部はやや肥圧し、外端面を有する。454・455は底部が遺存しており、無高台であることが分かる。454は、胎土に直径 0.2～0.4cmの礫を包含する。455はやや歪みが認められ、内面は焼成によって黒変している。  
**土師器皿 (457)** 小皿である。扁平な作りであり、口縁部は僅かに上方へ摘まんで作られ、体部との差が不明瞭である。

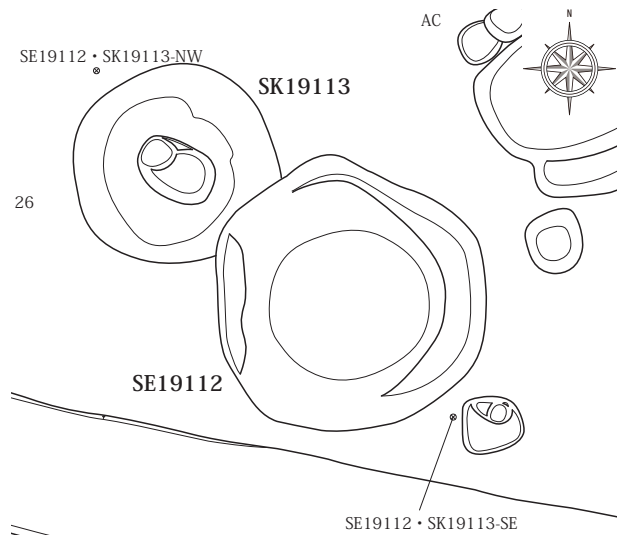
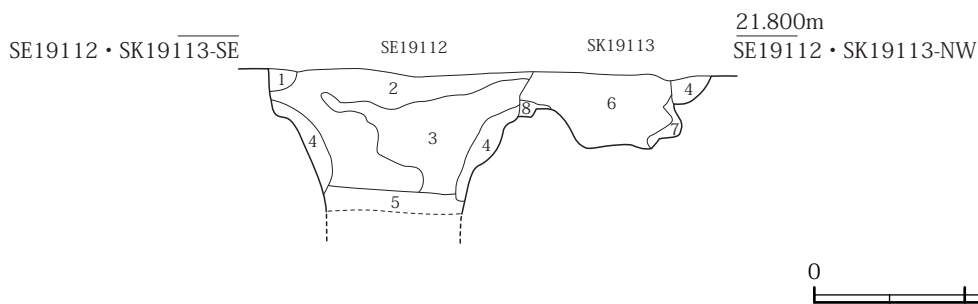


Fig.173 SE19112・SK19113 平面 (S=1/50)



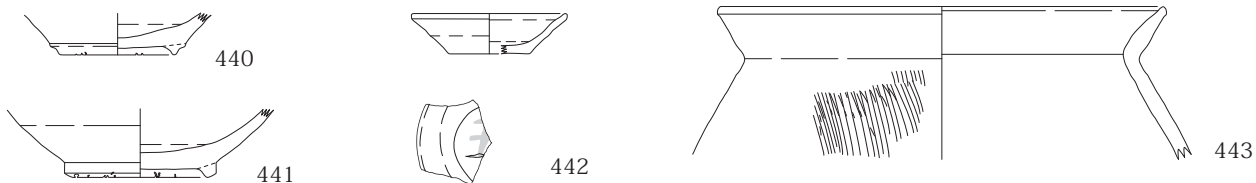
- 1 褐色細砂 (10YR4/6) シルト混じる 黒褐色土を少量含む
- 2 黒褐色細砂 (10YR2/3) 粘性弱い 地山ブロックを少量含む
- 3 黒褐色細砂 (10YR2/3) 粘性弱い 地山ブロックを多量含む
- 4 黒褐色シルト (10YR2/2) 粘性弱い 地山ブロックを少量含む
- 5 黒褐色細砂 (10YR2/3) 細礫を多量含む 地山ブロックを少量含む
- 6 黒褐色シルト (10YR2/3) 粗砂を含む 地山ブロックを少量含む
- 7 黄褐色シルト (10YR5/6) 黒褐色土を多量含む
- 8 黄褐色シルト (10YR5/6) 粗砂を含む 黒褐色土を少量含む

Fig.174 SE19112・SK19113 土層断面 (S=1/50)

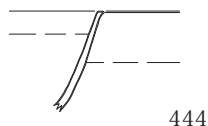


SE19025

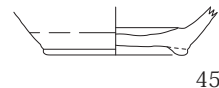
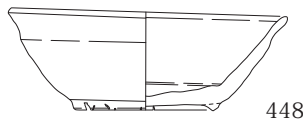
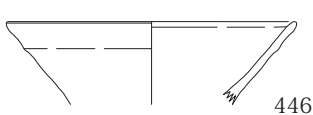
上層



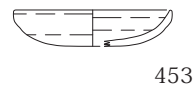
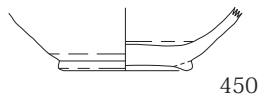
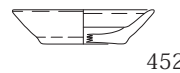
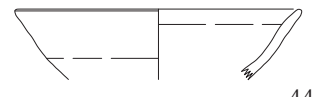
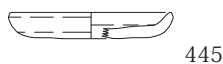
上層



下層

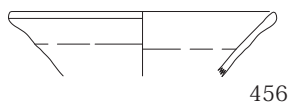
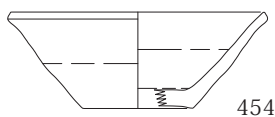


中層

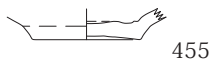
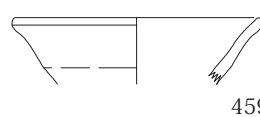
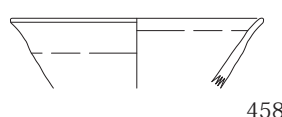


SE19112

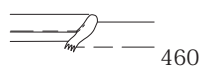
上層



下層



SK19113



※混入遺物

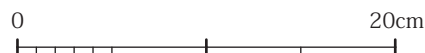
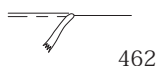


Fig.175 SE19025・112・SK19113 出土遺物 (S=1/4)

**時期・性格** 北西方向に隣接する中世のSK19113を切る。出土した平底の山茶碗を見ると、藤澤編年の8型式の段階に比定でき、その年代観は13世紀後半～14世紀前半に相当する。屋敷地の区画範囲からは東方向へ外れ、降る時期に造られている。

【土坑SK19113 (Fig.173・174)】

**重複** SK19113 → SE19112。

**平面・規模** 直径1.4mを測る円形状の土坑である。検出面からの深さは0.4mを測り、そこから長楕円形のピット状に段掘りされ、最終的には検出面から0.7m下がる。南東部を後出するSE19112によって削平されている。

**遺物** 土師器鍋(460・461)が出土した(Fig.175)。また、

灰釉陶器碗(462)の混入を確認している。

**土師器鍋(460・461)** 南伊勢系の鍋である。460は口縁部、461は体部一部を留める資料である。460は口縁部の折り返しが非常に薄く、扁平な中央部には凹みが観察できる。外面には煤が付着している。461は薄手に作られ、胎土には多量の金雲母を含む。体部外面はヨコハケ調整されるが、磨滅によって痕跡化している。

**灰釉陶器碗(462)** 口縁部は外反し、端部を丸く収める。内外面に施釉されるが、剥がれて薄いため、色調は判別できなかった。猿投窯編年のK90窯式期の所産で、9世紀後半のものである。

**時期・性格** 13世紀後半～14世紀前半のSE19112に

先行する。出土遺物は多くないが、土師器鍋は伊藤編年の第1段階で、12世紀後半～13世紀前半に帰属するものと考えられる。比較的大型の土坑で、遺物量が僅少である特徴を有する。土層断面の観察から、ほぼ一括して埋没したことが分かる。SK19113は検出時点では井戸の可能性を考えたが、何らかの事情で掘削を中断して一度に埋められ、後にSE19112に作り替えられたことが想定される。遺構の中心間を測定すると、SE19112はSK19113から南東方向へ1.5mの距離をもつ。確証を得ないものの、SK19112は湧水の発生し得ない中途半端な掘削深に留まり、生活臭が乏しく、人為的な一括堆積の様相から、造り替えのために掘削を放棄した事例となる可能性があり、非常に興味深い。加えて、底面が凹凸状に不均質である点からも、これを追認したい。

【土坑SK19029 (Fig.176)】

重複 P547・548, ピット(遺物なし) → SK19029 → ピット(遺物なし)。

平面・規模 長軸1.4m, 短軸1.1mを測る。楕円形状を呈する土坑で、検出面からの深さは0.1mを計測する。

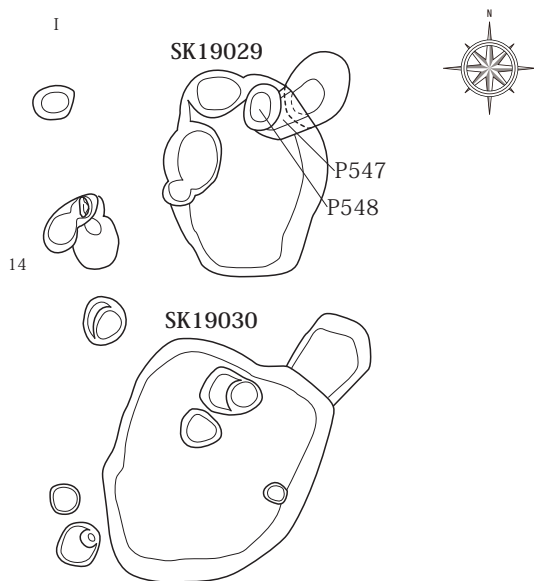
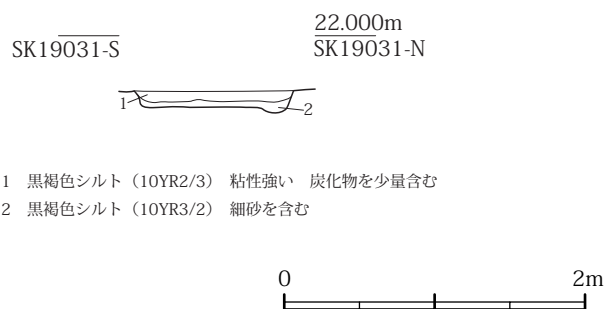


Fig.176 SK19029・30 平面 (S=1/50)



- 1 黒褐色シルト (10YR2/3) 粘性強い、炭化物を少量含む
- 2 黒褐色シルト (10YR3/2) 細砂を含む

Fig.178 SK19031 土層断面 (S=1/50)

主軸方向はN-3°-Eである。下面にはピットが4基埋没し、これらは検出面から0.15～0.2mの深さをもつが、この内、P548のみ0.4mとやや深い。北東部に重複するピットのみSK19029に後出する。

遺物 山茶碗(463)が出土した (Fig.180)。

山茶碗(463) 南部系と推定され、粗肌手の胎土である。口縁部は直線的に外反し、端部を丸く収める。

時期・性格 全体的に遺物の出土量が乏しい。463の出土に加え、SK19029と類似した形状及び埋土の状況を示すSK19030の存在から、これと同時期になる可能性を考えたい。SK19030は12世紀後半～13世紀前半の所産であり、SK19029を一回り大きくしたような規模である。なお、先行するP547からは山皿(566)が出土しているが、これとの時期差は大きくないものと思われる。その他に重複するピットからは、時期の特定に繋がる遺物が出ていない。

【土坑SK19030 (Fig.176)】

重複 ピット(遺物なし) → SK19030。

平面・規模 長軸1.6m, 短軸1.3mを測る楕円形状の

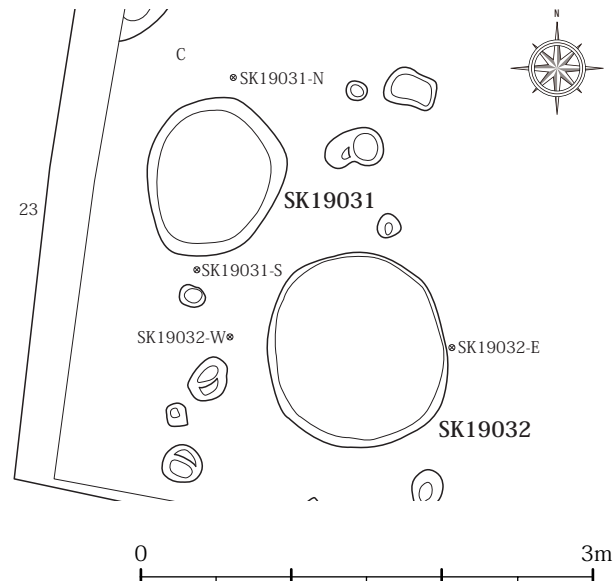
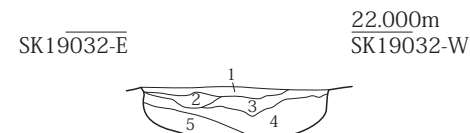


Fig.177 SK19031・32 平面 (S=1/50)



- 1 黒褐色シルト (10YR2/3) 粘性強い、炭化物を少量含む
- 2 黒褐色シルト (10YR3/2) 細砂を含む
- 3 暗褐色シルト (10YR3/3) 粘性強い、地山ブロックを含む
- 4 黒褐色シルト (10YR3/2) 粘性弱い
- 5 黒褐色シルト (10YR2/3) 細礫を多量含む

Fig.179 SK19032 土層断面 (S=1/50)

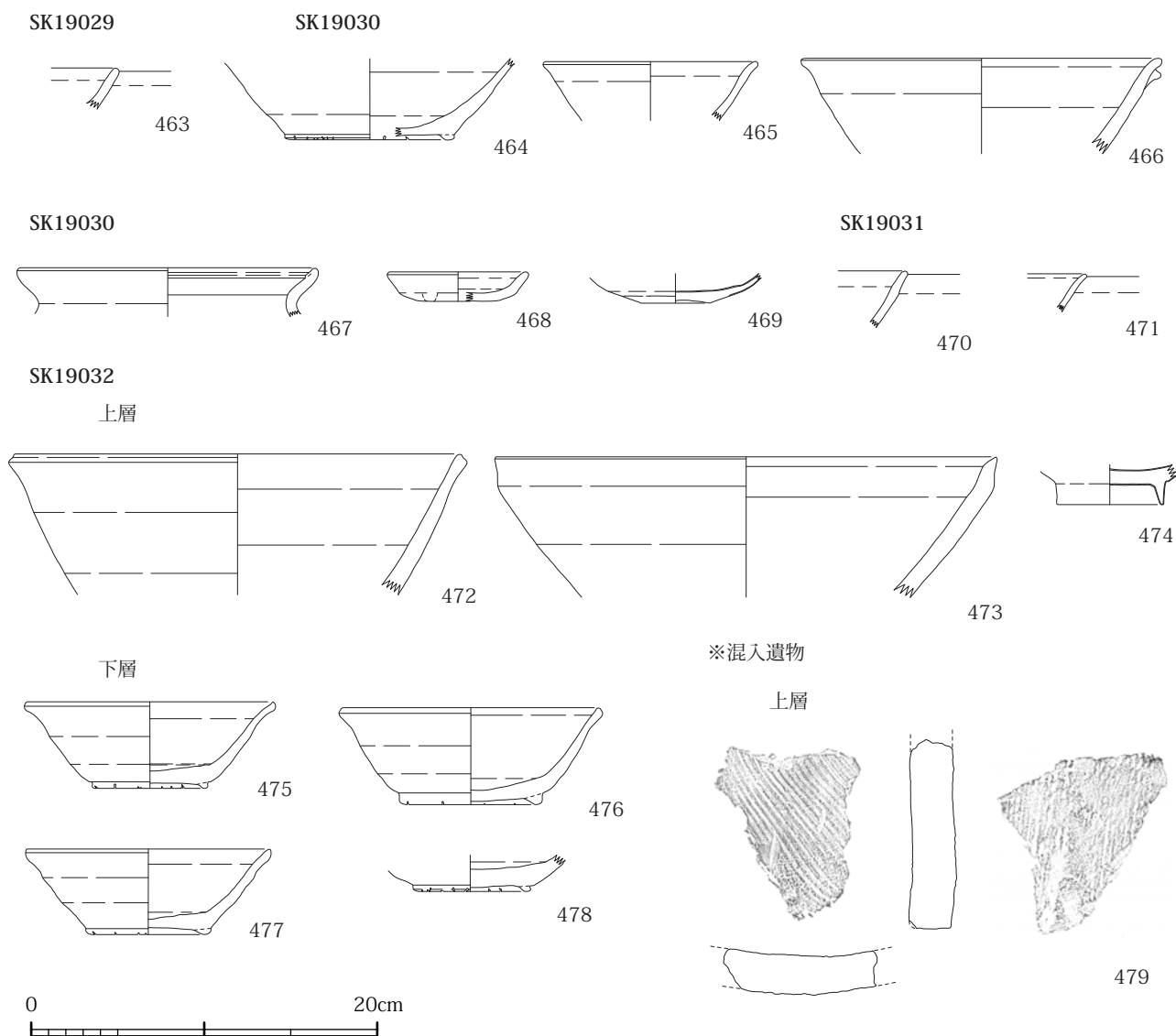


Fig.180 SK19029～32 出土遺物 (S=1/4)

土坑である。検出面からの深さは0.15 mを計測する。主軸方向はN-30°-W方向を向く。重複するピットに後出し、下面には3基のピットが埋没する。これらのピットは検出面から0.25～0.4 m下がる。

**遺物** 山茶椀(464・465)・鉢(466), 土師器鍋(467)・皿(468), 白磁皿(469)が出土した(Fig.180)。

**山茶椀(464・465)** 粗肌手の胎土で作られ, 南部系の所産であると推定される。464は扁平な高台が貼り付けられ, 高台には糊痕が観察できる。体部はほぼ直線的に外反し, 体部内面には薄く自然釉がかかる。465は口縁部外面にやや凹みが認められ, 口縁部内面には自然釉が施される。

**山茶椀鉢(466)** 口縁部端部は外反し, 口縁部には注口が付帯する。自然釉が口縁部内外面と体部外面にかかる。

**土師器鍋(467)** 南伊勢系の鍋で, 小型製品である。口縁部は短く, 頸部の屈曲が強い。口縁部の折り返しは

薄く, 中央部がやや凹む。

**土師器皿(468)** 小皿である。口縁部は外反し, 端部を丸く収める。

**白磁皿(469)** 体部外面及び体～底部内面に施釉が施される。底部形状は無高台で, 僅かに上げ底される。体部の外側への開きが大きく, 皿であると判断した。

**時期・性格** 先行するピットからは, 遺物の出土が得られなかった。出土した山茶椀及び山茶椀鉢は藤澤編年の5型式, 土師器鍋は伊藤編年の第1段階に比定でき, 12世紀後半～13世紀前半に帰属するものと考えられる。1個体ではあるが, 469の出土が特徴的である。北側に並ぶSK19029との関連が深いものと思われる。SK19029とは0.45 m離れる。共に屋敷地の区画範囲内に位置する。

**【土坑SK19031 (Fig.177・178)】**

**重複** なし。

**平面・規模** 長軸1.1 m, 短軸0.9 mを測り, 検出面か

らの深さは0.14 mを計測する。やや南北に長い楕円形状を呈し、主軸はN-19°-W方向に向ける。

**遺物** 山茶碗(470・471)が出土した(Fig.180)。

**山茶碗(470・471)** 共に粗肌手の胎土で、南部系であると推定される。口縁部一部のみを留める資料である。470はロクロ目が強く、口縁部外面は凹む。471は薄手の作りで、口縁部の外反が強い。内面には自然釉がかかる。

**時期・性格** 遺物の出土が僅かであり、帰属時期の詳細を掴むことは困難である。形状及び位置関係、埋土の様相、出土遺物等を鑑み、南東に近いSK19032と関係するものと考えられる。SK19032は12世紀後半～13世紀初頭の産物であり、これと同時期になるのか。

**【土坑SK19032 (Fig.177・179)】**

**重複** なし。

**平面・規模** 直径1.3 mを測り、円形状の平面形を呈する。検出面からの深さは0.3 mを計測する。

**遺物** 山茶碗(475～478)・鉢(472・473)、青磁碗(474)が出土した(Fig.180)。上層には平瓦(479)の混入を確認した。

**山茶碗(475～478)** 粗肌手の胎土で、南部系の産物であると推定される。全て扁平な高台が貼り付けられ、この箇所には靱殻痕が確認できる。475～477は体部下方が丸みを帯びつつ、口縁～体部がほぼ直線的に外反する。口縁部外面の凹みが強く認められる。475は口縁部外面に薄く自然釉がかかる。内面には浅い凹みが作られ、体部と底部が分割される。476は内面のロクロナデ調整が強い。

**山茶碗鉢(472・473)** 共に口縁部がほぼ直線的に外反する。475は口縁部上端に明瞭な面を有し、この面はナデ調整によって凹線状に凹む。473は口縁部外面が面取りされ、口縁部内面には外傾面が作られる。

**青磁碗(474)** 体部外面と体～底部内面が施釉される。高台は高く削り出され、その断面は方形状を呈する。底径は狭く、底部端部の接地面は明瞭である。

**平瓦(479)** 一枚作りによるもので、凹面には布目痕及び糸切り痕が観察され、凸面には縄目タタキが見られる。挟端面が残存している。8世紀中葉の所産であると考えられる。

**時期・性格** 出土遺物の観察から、山茶碗及び山茶碗鉢が藤澤編年の5型式に相当し、12世紀後半～13世紀初頭に属するものと思われる。比較的多くの遺物が出ており、474の出土が注目される。SK19031の規模をやや大きくし、これから南東方向へ0.38 m離れて造られている。SK19031・32は、前述したSK19029・30と共に大小のセット関係にあるものと見られる。SK19029・

30はやや不整な平面形を呈するが、やや規模の大きい方を南側に配置し、ここからの遺物量が多い点が共通しており、非常に興味深い結果となった。全て屋敷地内の遺構であり、土坑墓の可能性が高いものと判断される。規模が大きいSK19032は、SK19030から南西へ約30 m隔絶する。

**【柵列SA19098 (Fig.181・182)】**

**構成** P244・251～254。

**重複** P244→246。ピット(遺物なし)→P252。ピット(遺物なし)→P253。P235(SB19086)→P254。

**平面・規模** 検出した規模は4間で、総長7.0 mを計測する。柱間は北から1.6 m+1.2 m+2.0 m+2.2 mとP244・252間が狭く配置されている。主軸方向はN-27°-W方向を示す。構成するピットの規模は、直径0.35

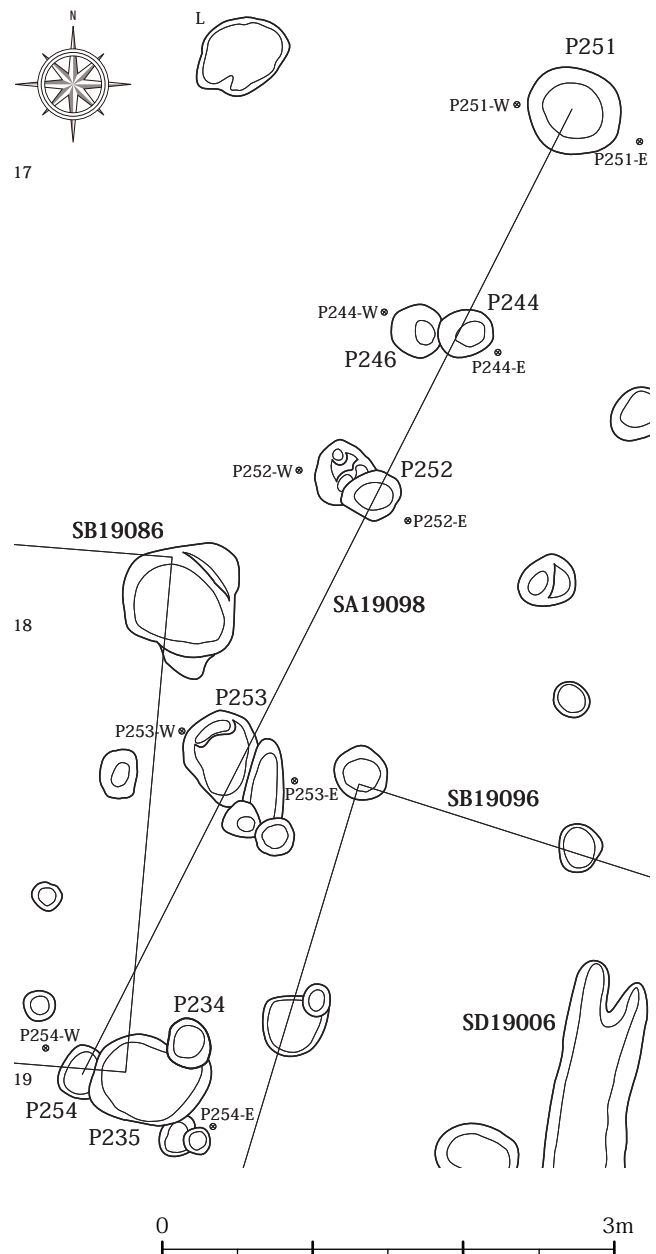


Fig.181 SA19098 平面 (S=1/50)

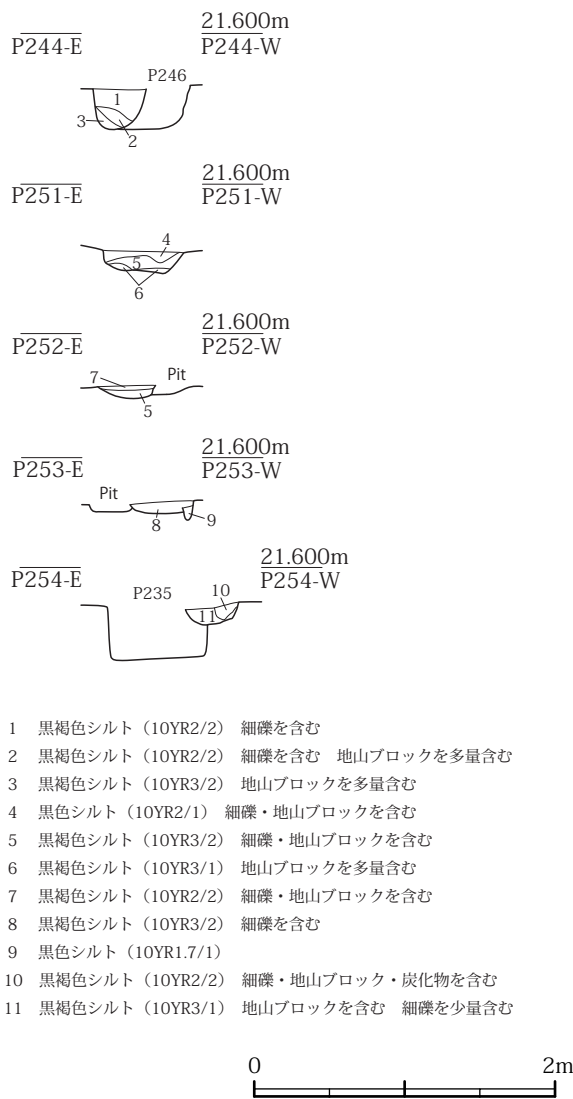


Fig.182 SA19098 土層断面 (S=1/50)



Fig.183 SA19098・SB19084 出土遺物 (S=1/4)

～0.6 mの円形状を呈する。検出面からの深さは0.07～0.25 mを測る。南方向には延長は確認できないが、北側には攪乱範囲が広範に存在するため、この方向に延びる可能性を残している。

**遺物** P244 から山茶椀 (480) が出土した (Fig.183)。その他のピットからは、全く遺物が出土していない。

**山茶椀 (480)** 粗肌手の胎土で、南部系のものであると推定可能である。口縁部の外反が強く、内面には自然釉がかかる。口縁部外面には凹みが認められる。

**時期・性格** 先行する P235 は縄文時代晩期前半の SB19086 を構成し、P244 からは古代の土師器及び須恵器片が出土している。出土遺物が山茶椀口縁部の一部を残す資料に留まるため、帰属時期の詳細は不明である。主軸方向にも有意な点は見受けられないが、屋敷地の区画内部に配されており、その他の中世遺構と同時期である藤澤 5 型式期の段階に比定したい。

**【掘立柱建物 SB19084 (Fig.184～186)】**

**構成** P20・23・177?・193・198・200?・736～739?。

**重複** P22→P23。P193→SX19003。SD19009→P198。

**平面・規模** 側柱建物で、梁間 4.8 m、桁行 5.4 m を測る。主軸方向は W-6°-S 方向である。構成するピットは、直径 0.25～0.35 m を測り、円形状を呈する。検出面からの深さは 0.07～0.32 m を測る。P20・23 の底面には、直径 0.3～0.45 m を計測する礫が 2 個重なるように埋没している。1 間×1 間以上の規模は確実であるとして、柱筋上には複数のピットが存在する。古代の土師器及び須恵器片が出土している P157 は除くとしても、北辺には複数基のピットが存するため、大変茫漠としている。加えて、西辺の P736 と東辺の P200 の位置関係が対をなさず、南辺の柱筋上にも適当となるピットが配されないため、疑義が残る。

**遺物** P20 から山茶椀 (481) が出土した (Fig.183)。

**山茶椀 (481)** 粗肌手の胎土によって作られ、南部系の産物と推定される。口縁部は外反し、上端には明瞭な面を有する。

**時期・性格** 古代の SD19009 に後出し、中世の SX19003 に先行する。現状においては 1 間×1 間の側柱建物を想定しているが、有意な遺物が出土しているのが P20 に限定され、また P20・23・193・198 以外のピットについては、埋土の様相からも決め手に欠ける状況である。但し、屋敷地の区画溝の内部に存在しているため、これらと関連する可能性が考えられる。なお、同様に屋敷地の区画範囲内にあり、12 世紀後半～13 世紀初頭に属する SX19003 によって P193 が埋没するため、これよりも若干遡るものと判断される。

**【掘立柱建物 SB19104 (Fig.187・188)】**

**構成** P199・291・740～749。

**重複** P740→P162。SB19104 = SX19003。

**平面・規模** 梁間 4.0 m、桁行 6.5 m を測る。主軸方向は W-8°-S 方向とやや南振りである。構成するピットは、直径 0.2～0.55 m の円形状を呈し、検出面からの深さは 0.1～0.5 m を測る。2 間×3 間の総柱建物であり、ピットは柱間 2.0～2.3 m 間隔で、ほぼ均等に配置される。



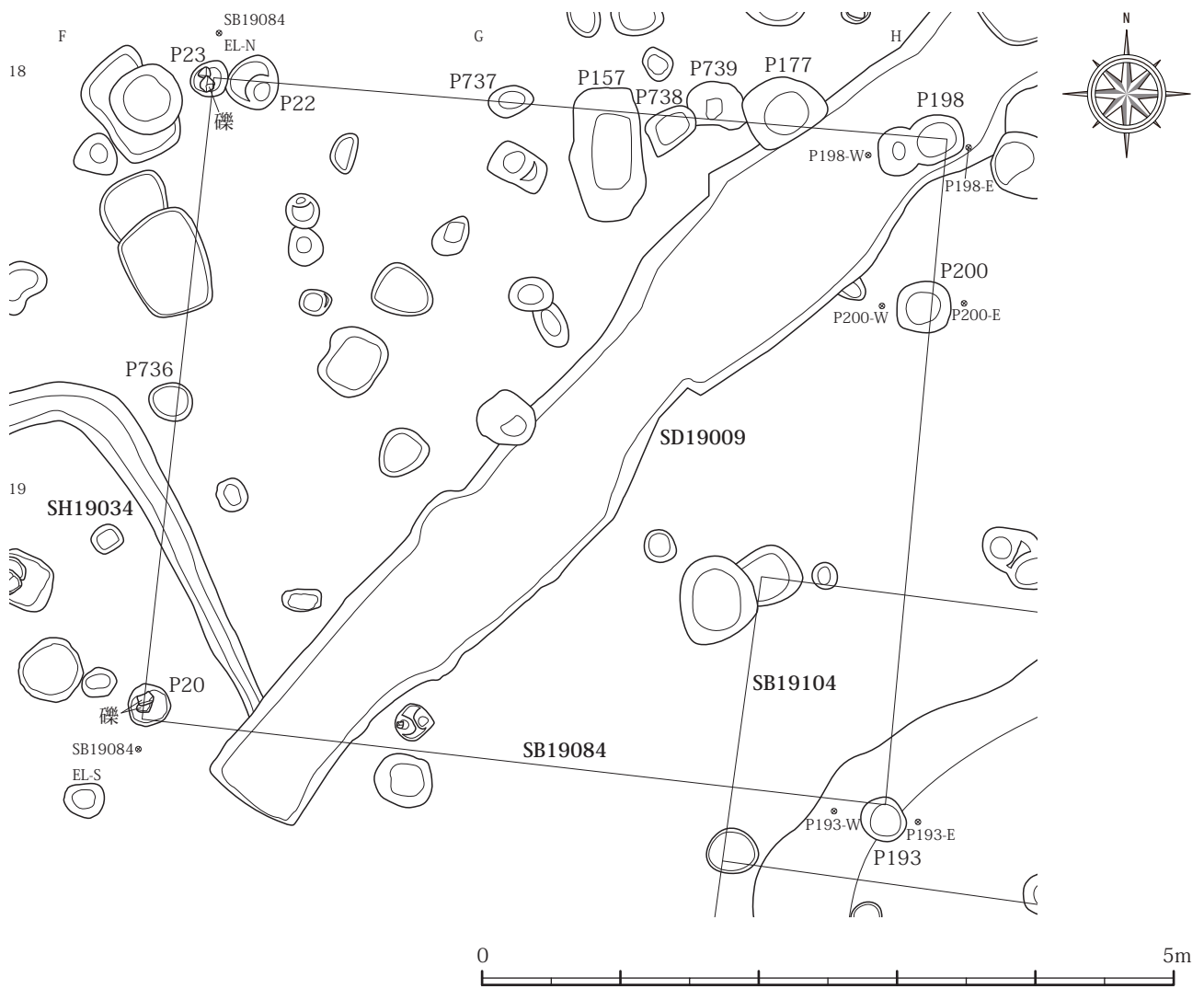


Fig.184 SB19084 平面 (S=1/50)

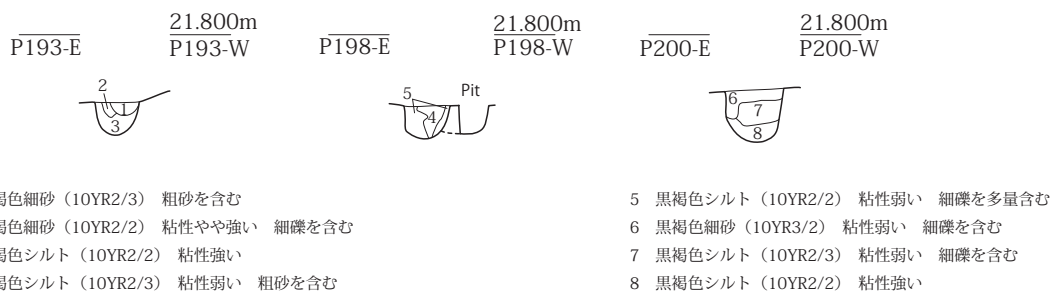


Fig.185 SB19084 土層断面 (S=1/50)

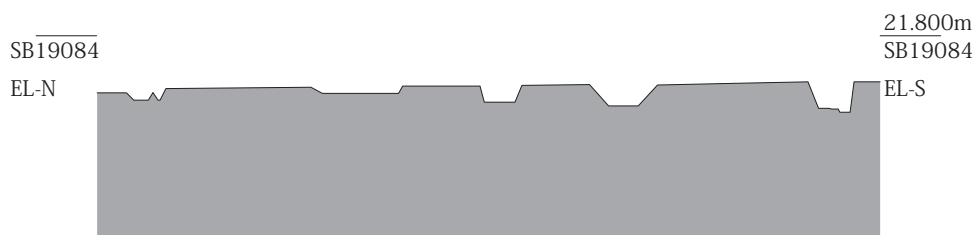


Fig.186 SB19084 断面 (S=1/50)

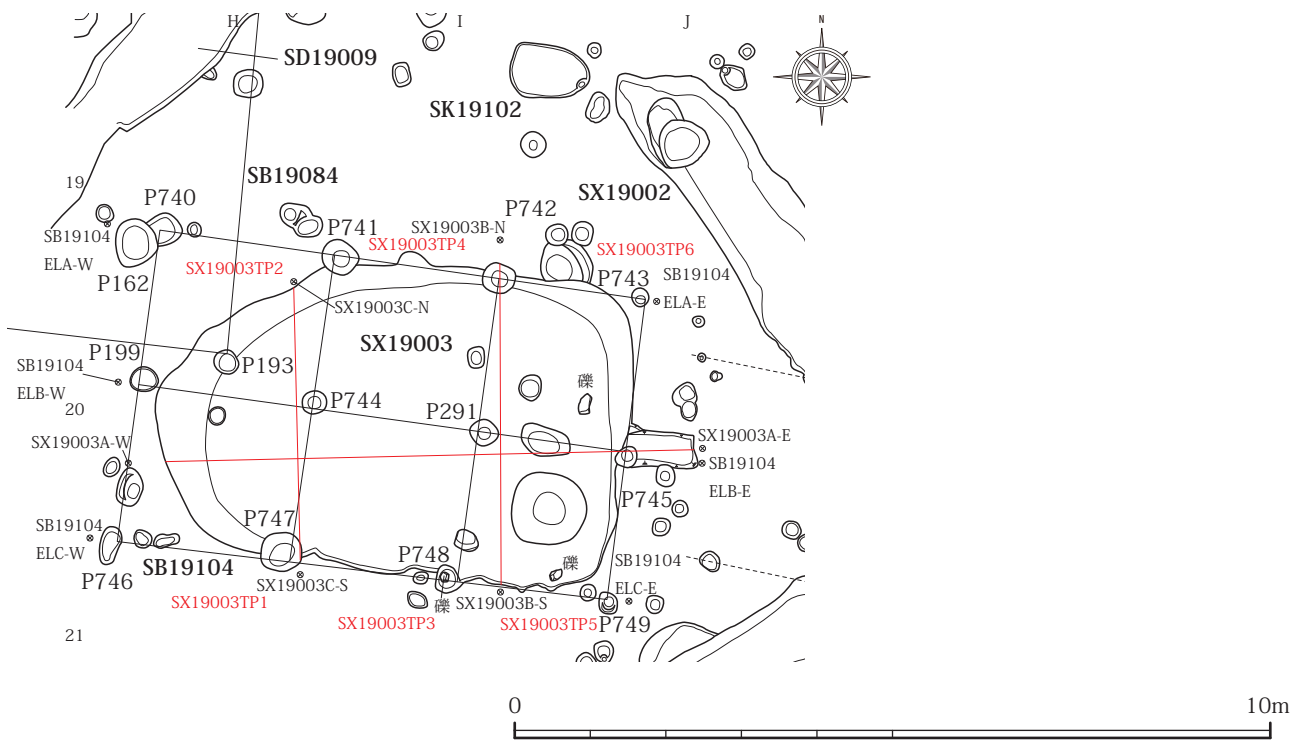


Fig.187 SB19104・SX19003 平面 (S=1/50)



Fig.188 SB19104 断面 (S=1/50)

建物範囲は大型の土坑状遺構であるSX19003 とほぼ重なる。SX19003 内部にある P291・744 は特に深く掘削されている。P745 はやや周囲を攪乱される。

**遺物** P291 から土師器皿(482)が出土した(Fig.190)。その他にはP199 から土師器片が出たのみで、図化可能なものが存在しなかった。

**土師器皿(482)** 小皿であり、扁平な作りである。口縁部は緩やかに外側へ開き、端部を丸く収める。

**時期・性格** P740 を切る P163 からは土師器の破片資料が出土するに留まる。出土した 482 は中世の所産であるが、帰属時期の詳細についての特定は難しい。なお、下面に存在する SX19003 とは一連の遺構を形成するものと考えられ、その年代観は 12 世紀後半～13 世紀初頭である。屋敷地の区画の内部に造られる。中世は元より、検出に至った掘立柱建物の中で、唯一の総柱建物となる。

**【土坑状遺構 SX19003 (Fig.187・189)】**

**区割** TP1～TP6

**重複** P193 (SB19084) → SX19003。SX19003 = SB19104。

**平面・規模** 長軸 6.2 m、短軸 4.2 m を測る大型の遺構である。平面形は隅丸形状で、西側がやや外方へ張り出す形をなす。主軸方向は W-8° -S と SB19104 と同一の方向を示す。東部でやや攪乱される。検出面からの深さは 0.15～0.2 m を測り、中央部が掘り鉢状に深められる。下面には関連する SB19104 のもの以外にも、数基のピットが埋没する。これらからは遺物が全く出でず、SX19003 の底面から 0.1～0.3 m 下がる。規模は直径 0.2～1.0 m と差がある。また、東部及び南東部の下面には、0.3 m 程度の大きさの礫を確認した。

**遺物** 山茶椀(483・484・487・488・492・496～504・525～531・535～546)・山皿(489・505・506・547～549)・鉢(493)、土師器鍋(494・507・556)・皿(508～514・532～534・550～555)、青磁椀(490・491・495・515～522)・皿(485)、白磁皿(523)、常滑焼甕(524)、土錘(486)が出土した(Fig.190・191)。南西部の TP1 には、須恵器坏(557)が混入している。

**山茶椀(483・484・487・488・492・496～504・525～531・535～546)** 粗肌手の胎土で、南部系の所産であると推定される。全体的に低く扁平な高台が貼り付けられ、487・488・502・503・531・537・543～546 の高台には靱殻痕が観察でき、特に 546 に顕著に認められる。口径は 15cm 前後に作られるものが大多数で、484・535 のみ約 12cm と小型である。口縁部は外反し、483・484・497・498・525・535～540 の口縁部外面は凹みを有する。口縁部端部は概ね丸く収めるが、535 はやや尖り、540 は外端に面を形成する。自然釉は 483 の内外面全体、488・546 の体部内面、496 の口縁～体部内面、497・540 の口縁部外面、537 の口縁部内外面の一部、538・539 の口縁部内外面に観察できる。483 の口縁部内面は厚く、496・540・546 は薄くかかる。492・501・527・528・530・543 は内面の凹みにより、体部と底部が区別される。501 は胎土に直径 0.2～0.3cm の礫を包含する。542 は高台がほぼ剥落しており、底面には墨書が観察される。「上上」と墨書されるが、2つの文字がやや斜めにずれて配されており、そこに整然性は見受けられない。

**山皿(489・505・506・547～549)** 506・549 の底部の突出は明瞭である。489・547 の底部もやや突出

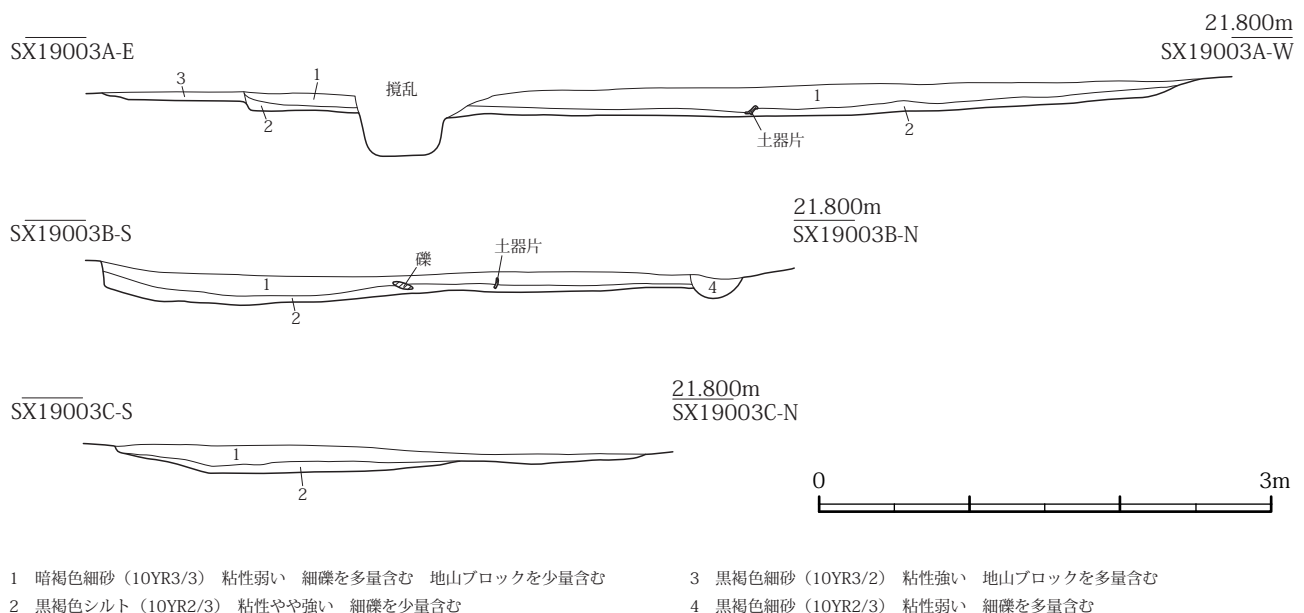


Fig.189 SX19003 土層断面 (S=1/50)

SB19104

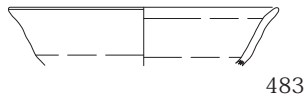
SX19003

P291

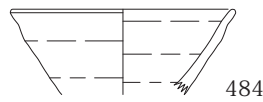
上層



482



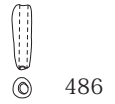
483



484



485

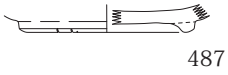


486

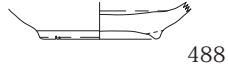
SX19003

TP1

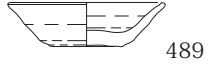
TP2



487



488



489

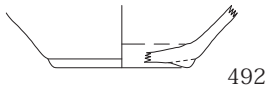


490

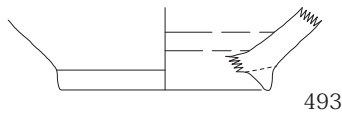


491

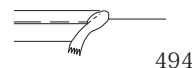
TP3



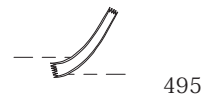
492



493

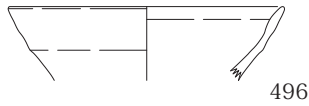


494

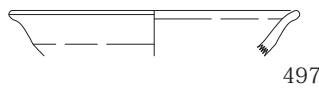


495

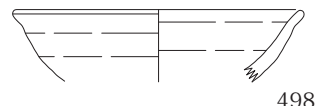
TP4



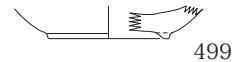
496



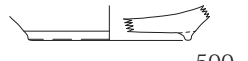
497



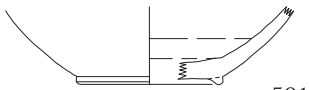
498



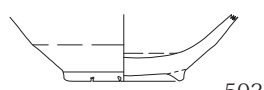
499



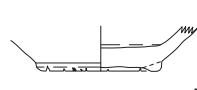
500



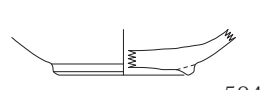
501



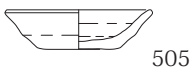
502



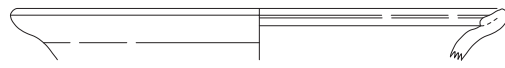
503



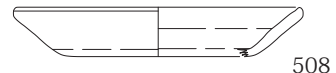
504



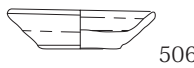
505



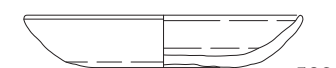
507



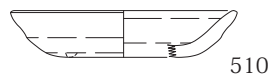
508



506



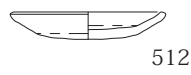
509



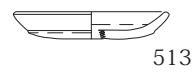
510



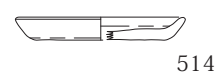
511



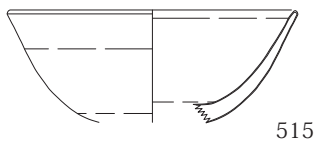
512



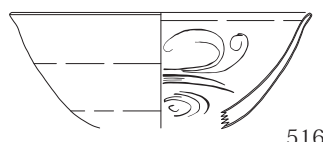
513



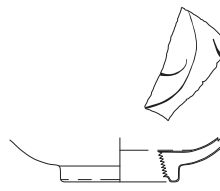
514



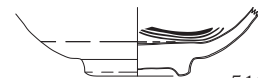
515



516



517



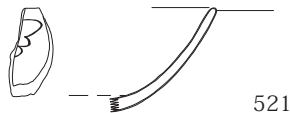
518



519



520



521



522



523

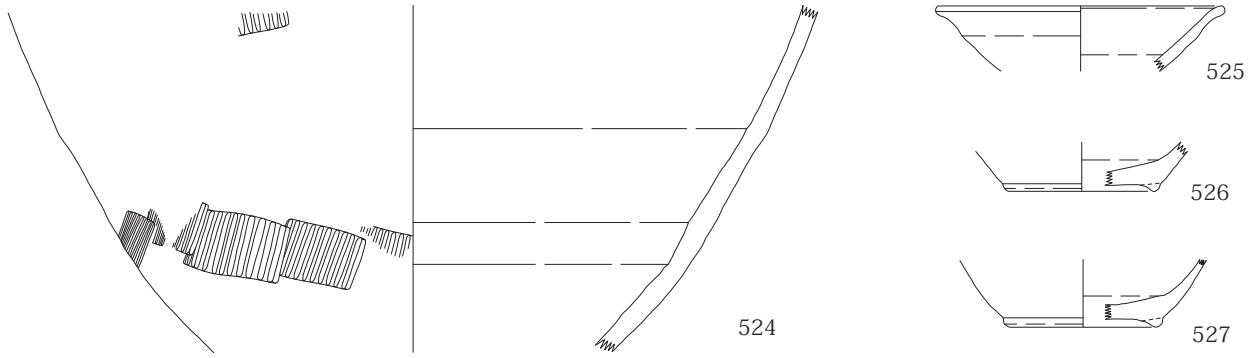


Fig.190 SB19104・SX19003 出土遺物 1 (S=1/4)

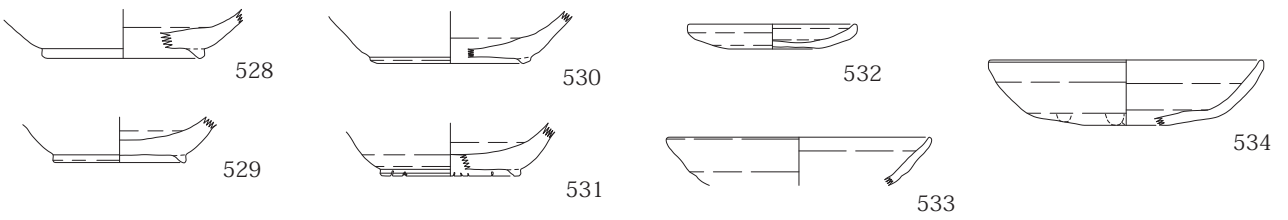
SX19003

TP4

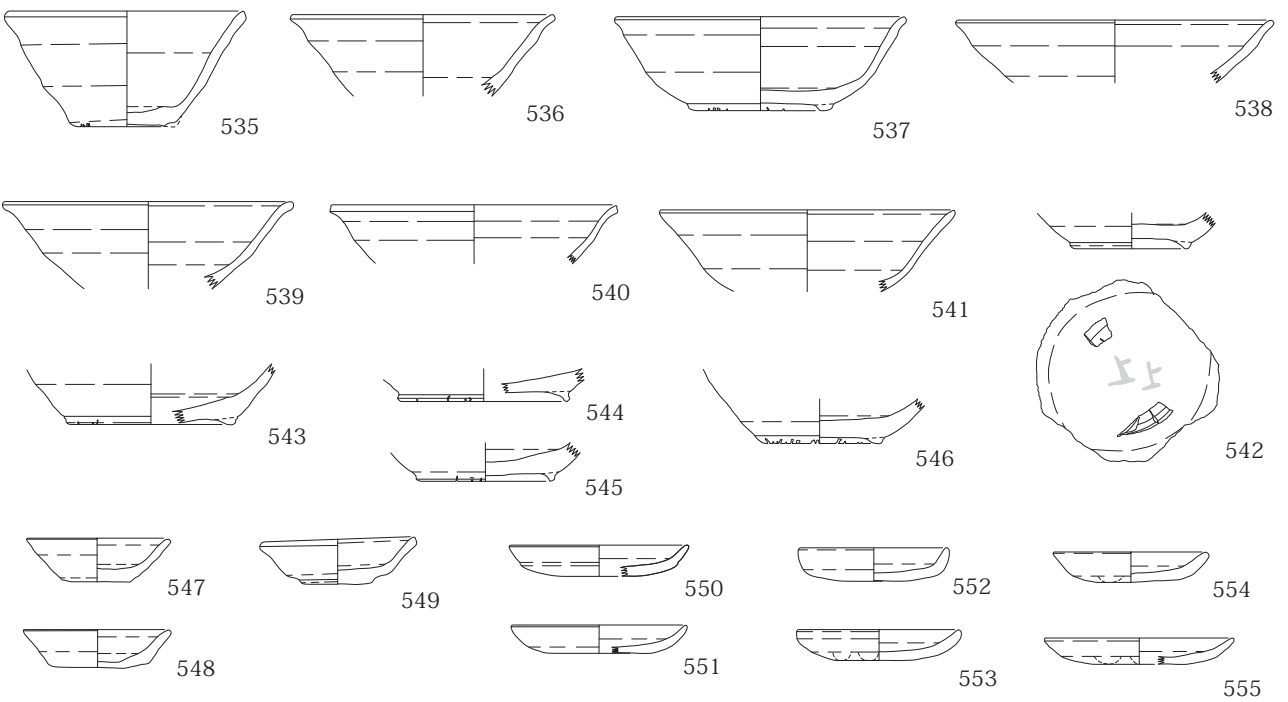
TP5



TP5



TP6



※混入遺物

TP1

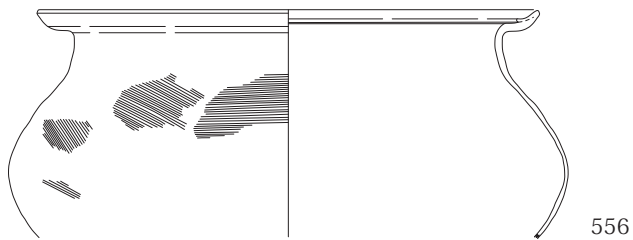
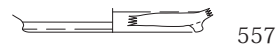


Fig.191 SB19104・SX19003 出土遺物 2 (S=1/4)



する。口縁～体部はやや丸みを帯びながら外反する。505は口縁部内面に薄く自然釉が施される。

**山茶碗鉢 (493)** 体部下方～高台のみ遺存しており、高台は高く貼り付けられる。厚手で重厚な作りである。**土師器鍋 (494・507・556)** 全て南伊勢系の鍋である。全体的に口縁部は短い。494は口縁部一部のみを残し、口縁部の折り返しは薄く、その上部はやや凹む。507は口縁部の折り返しが幅広で、中央部は強いヨコナデ調整によって凹む。口縁部端部は立ち上がり、やや受け口状を呈する。556は口縁部～体部下方を留める好資料である。非常に薄手に作られ、口縁部の折り返しも薄い。507と同様、口縁部のヨコナデ調整が強く、折り返しの中央部は著しく凹み、口縁部端部が立ち上がる。磨滅のために不鮮明であるが、体部外面に細かいハケ調整が観察できる。

**土師器皿 (508～514・532～534・550～555)** 口径10cm以下の小皿と口径が12cmを超過するタイプの2つに分類される。511～514・532・550～555は小皿である。512～514・532・555は器高が低く、扁平に作られる。511・513・534・550・551は口縁部のヨコナデ調整が強く、513・550は外面に段が生じている。534は内面のナデを2単位観察できる。口縁部の形状は、緩やかに外反するものが多い。但し、小皿である514・552は、口縁部が上方へ短く折り曲げられ、屈曲が強い。その他の小皿は口縁部端部が直立する511を除くと、外側へ開くものが主流である。

**青磁碗 (490・491・495・515～522)** 全て内外面に施釉される。釉薬はオリブ灰～明オリブ灰のものが多数である。491・516～518・520～522は内面に文様が施される。特に516は、施文が口縁～体部の内面全体に確認される。491・515・516・519・521は口縁部端部を丸く収め、516の口縁部外面には凹みが認められる。490は口縁部外面に段を有する。495・515・516・521・522は体部下方を残すが、高台部分が剥落しているものと思われる。517・518は高台が削り出され、518は断面が方形で重厚な高台が付帯している。518は精緻で丁寧に作られる。519は口縁部端部の外反が強い。

**青磁皿 (485)** 口縁部の一部のみ遺存する。内外面に施釉される。口縁部外面にはやや凹みが認められる。

**白磁皿 (523)** 口縁部の一部を留める資料である。薄手で精緻な作りであり、内外面に施釉される。口縁部端部は外反する。皿としているが、碗の可能性もある

**常滑焼甕 (524)** 体部下半の資料で、底部を欠く。やや厚手の作りである。内面には自然釉がかかり、下方へ向けて厚みを増す。外面はタタキ(押印文)で装飾され、

これが帯状に重なるように連続して施文される。

**土錘 (486)** 完形品である。細長い棒状の形状を呈する。直径0.4cmの円孔が穿かれ、これが直線的に貫通する。穿孔箇所は、ほぼ中央に配置される。

**須恵器坏 (557)** 低い高台が貼り付けられ、底部端部は接地する。高台はやや外側に作られ、体部の立ち上がりと近接する。

**時期・性格** ほぼ同時期に比定できるSB19084に後出する。出土遺物を観察すると、山茶碗製品は藤澤編年の5型式、土師器鍋は伊藤編年の第1段階に相当し、12世紀後半から13世紀初頭～前半に属するものと考えられる。また、524の常滑焼甕は、中野晴久氏による常滑製品編年(以下、中野編年と呼称)の3～5型式に比定でき、その年代観に矛盾はない。屋敷地の区画範囲内において、他の多くの中世遺構と同時期に帰属する。非常に大型の土坑状の遺構であり、SB19104と主軸を揃えて重なる。遺物は中央部北半のTP4～北東部のTP6に集中する傾向を示すが、青磁がまとまって出土している点も非常に興味深い。

#### 【中世の遺構出土遺物】

前述した遺構以外にも、中世の遺構が分布する(Fig.148)。以下に、掘立柱建物等の建物や柵列にまとまることのないピットから出土した遺物について記載する(Fig.192)。図化の対象となる資料は、山茶碗製品及び土師器皿である。

**山茶碗 (558～560・562・567・568)** 粗肌手の胎土で作られ、南部系の産物と推定される。558・560・568は高台が低く扁平に貼り付けられ、全て靱殻痕が観察できる。558・568の靱殻痕は顕著である。559・562・567は口縁部端部が丸く収められ、559・567は口縁部外面に凹みを有する。562の口縁部は直線的に外反する。567は口縁部上端面に自然釉がかかる。568は厚手の作りであり、体部内面には膨らみを有する。

**山皿 (566)** 底部はやや突出し、扁平な作りである。口縁部内外面には自然釉がかかる。

**山茶碗鉢 (563)** 口縁部の一部のみを残す資料である。厚手の口縁部が直線的に外反する。

**土師器皿 (561・564・565)** 561は小皿であり、ほぼ完形の資料である。口縁部の外側への開きが大きい。564は口縁部が上方へ立ち上がる。ヨコナデ調整が強く、口縁部外面には段が作られる。565は短い口縁部が外方へ開き、扁平なタイプであると思われる。口縁部を部分的に留めるのみであるが、口径は小皿のように小さくはないものと判断される。

出土した山茶碗等は、藤澤編年の5型式の段階に区分され、当該調査区において確認した生業の中心となる1

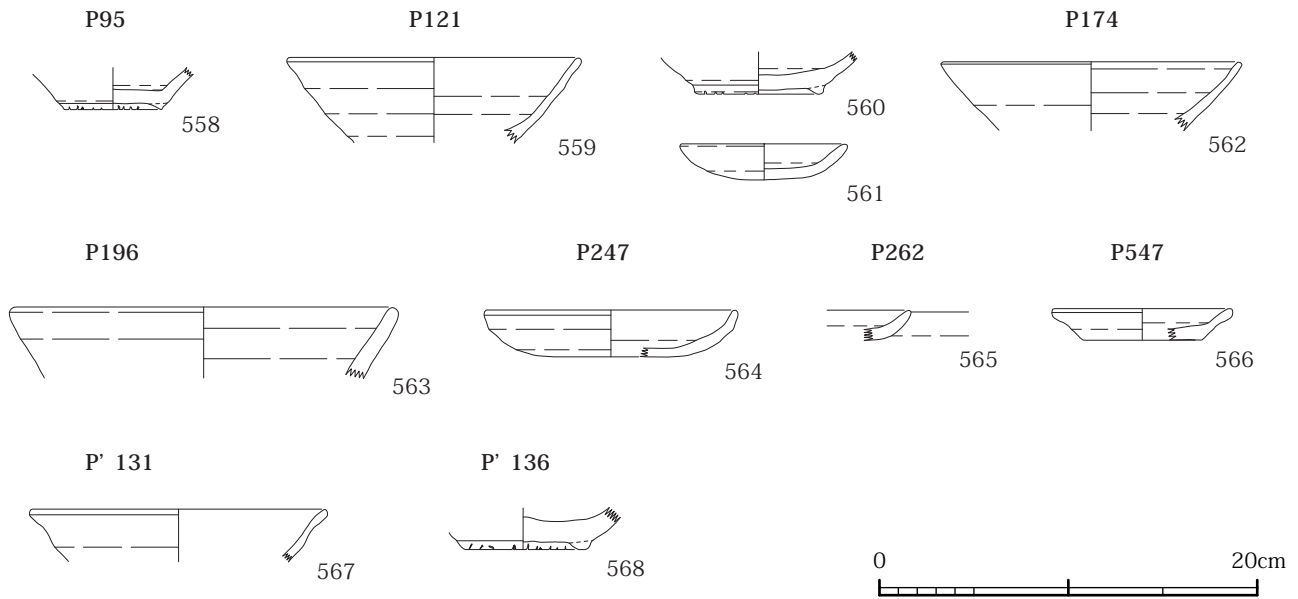


Fig.192 中世の遺構出土遺物 (S=1/4)

2世紀後半～13世紀初頭に位置付けられる。土師器皿についても、これと共伴する時期のものと考えられる。遺構の分布は、大多数の中世遺構と同様、第19次調査区西部における屋敷地の区画範囲内に限定される。

## 5 その他の遺構と遺物 (Fig.193)

### (1) 時期不明遺構

ここでは、特に建物等の重要遺構を抜粋し、その詳細について述べる。これらは出土遺物からの情報が乏しく、明確な時期区分が困難なものである。以下、遺構の規模やその所属時期を類推し、若干の考察を行うものとする。

#### 【柵列 SA19037 (Fig.194・195)】

**構成** P32・～35・750・751?・753。

**重複** SD19004 → P32・750・751。P751 → P32。P752 → P34。P754 → P753。

**平面・規模** 5間の規模を検出した。柱間は北から1.9 m + 2.1 m + 1.6 m + 1.6 m + 1.8 mを測り、総長は9.0 mに達する。主軸はN-17°-W方向を指す。構成するピットの規模は、直径0.3～0.6 mを測り、円形状の平面形をなす。検出面からの深さは0.15～0.42 mを測る。南北方向共に、その延長は確認されない。

**遺物** P32～35から土師器片が出土しているが、細片資料につき、図化には至らなかった。

**時期・性格** 出土遺物からは帰属時期の推測は困難である。弥生時代後期～古墳時代初頭のSD19004に後出するが、その他に重複するピットからは遺物の出土がない。主軸方向を見ると、SD19006・SK19031・SX19100と近似し、SD19005とほぼ直交する値を示す。これらは12世紀後半～13世紀初頭の産物であり、中世の屋敷地に関わる遺構である。SA19037も同時期になるうか。該当時期における大多数の遺構と同様、屋敷地の区画範囲内に位置する点からも、その可能性が高まるものと判断される。なお、P751はSA19037の柱筋上に存在し、P32に先行する。直径0.4 m、検出面からの深さ0.35 m



Fig.193 その他の遺構配置図 (S=1/500)

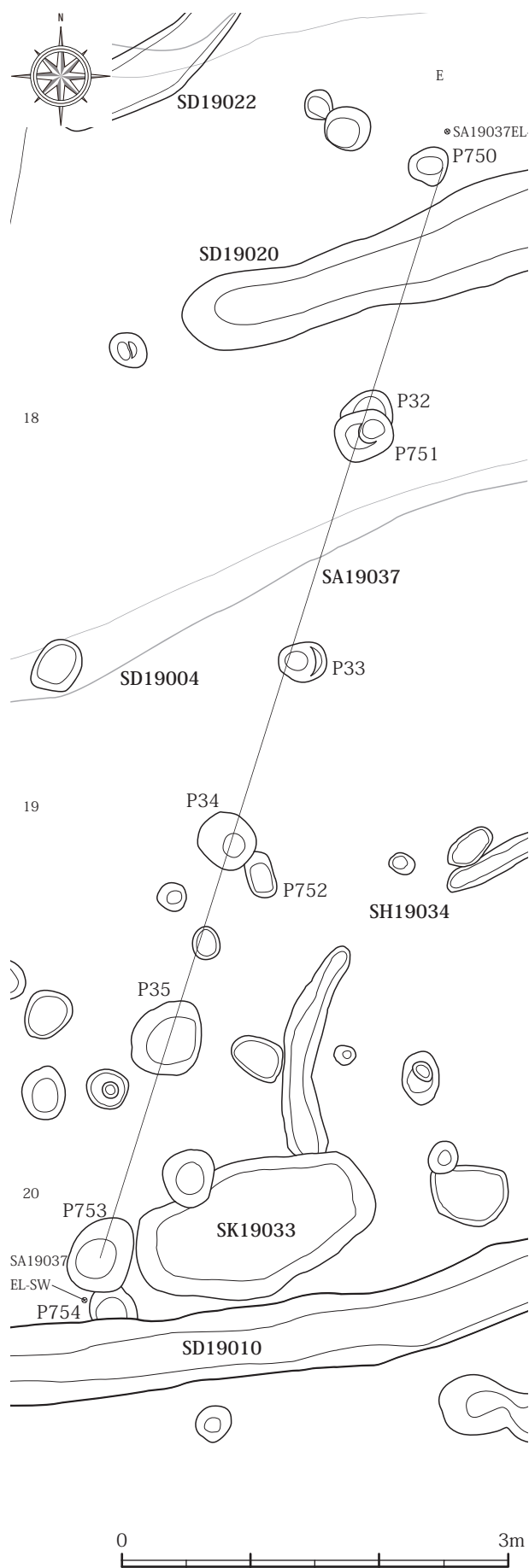


Fig.194 SA19037 平面 (S=1/50)

を測り、SA19037を構成するピット群と規模・形状が近く、また埋土の様相も類似する。何らかの事情により、P751からP32に造り替えたものと推測される。

【掘立柱建物SB19088 (Fig.196・197)】

構成 P207・209?・210～214・755・756?。

重複 P212→P539。ピット (遺物なし)→P213。P755→ピット (遺物なし)。

平面・規模 2間×3間の側柱建物である。梁間2.2m、桁行5.5mを測り、長方形の平面形を呈する。主軸方向はN-12°-Wを向く。構成するピットの規模は、直径0.2～0.5mの円形状で、検出面からの深さ0.05～0.25mを測る。南辺が確定し、北側にも延びることがないため、概ねこの規模に落ち着くものと思われる。

遺物 なし。

時期・性格 遺物の出土が一切なく、P212に後出するP539からは土師器片の出土に留まるため、所属する時期を掴むことは困難である。出土遺物からの情報は皆無に等しい状況であるが、主軸方向を見ると、比較的類似した数値を示すものに、SD19006・SK19029・31・SA19037・SX19100の中世遺構があるが、古代のSX19035・48・SA19044も比較的近い。遺構の分布を見ると、付近には古代遺構がやや散漫であるのに比較して、中世は屋敷地の区画内部となり、より関係性が窺われる。12世紀後半～13世紀初頭の掘立柱建物になる可能性が考えられる。なお、北東部はやや茫漠としており、北辺及び東辺の柱筋上のピットは未検出である。また、北東隅のP756は位置的には申し分ないが、プランが乱れているため、攪乱の影響を受けている可能性がある。直径0.4m、検出面からの深さは0.05mを計測する。建物内部には複数基のピットが見られるが、多くからは遺物の出土がなく、関係は不明である。

【掘立柱建物SB19096 (Fig.198・199)】

構成 P255～260・759?。

重複 P757→P257。P758→P255。

平面・規模 2間×4間の規模を検出し、側柱建物であると考えられる。梁間3.4m、桁行7.4mを測る。主軸方向はN-17°-Wを向く。構成するピットの規模は、直径0.3～0.4mを測り、検出面からの深さは0.06～0.25mを計測する。全て円形状の平面形を呈する。北辺及び西辺の検出に至ったが、北辺東部を延長するとSD19007と重なる位置に該当し、また西辺の南方向への延長も未確認である。南辺及び東辺は不明であるが、東辺はSD19007と重複して削平されている可能性が考えられる。

遺物 なし。

時期・性格 構成するピットからは、破片資料さえ出土



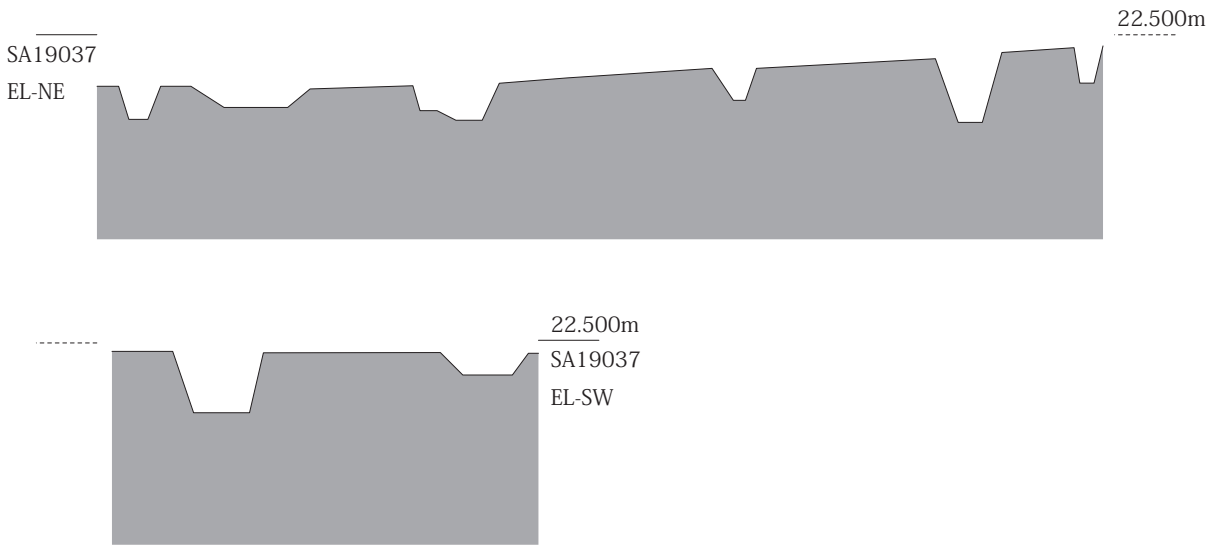


Fig.195 SA19037 断面 (S=1/50)

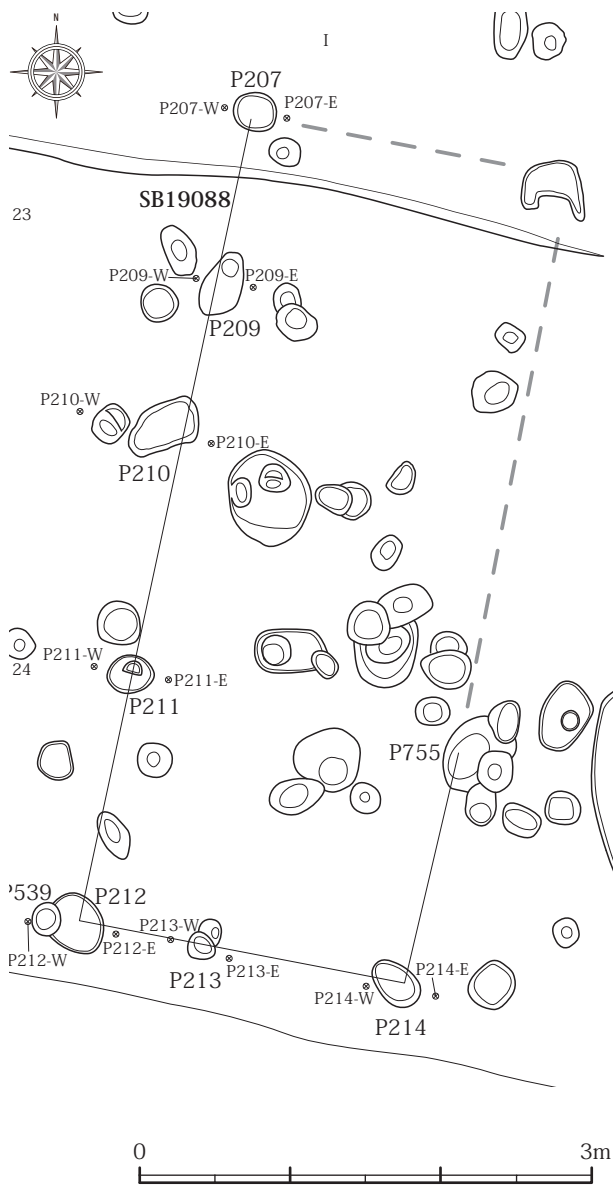
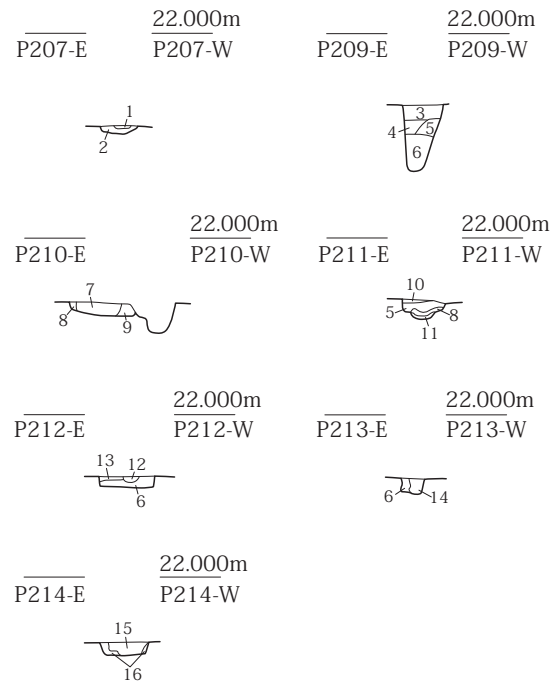


Fig.196 SB19088 平面 (S=1/50)



- 1 黒褐色シルト (10YR2/3) 粘性強い 細砂を含む
- 2 黒褐色シルト (10YR3/2) 粘性強い 地山ブロックを含む
- 3 黒褐色細砂 (10YR2/3) 粘性強い 地山ブロックを含む
- 4 黒褐色シルト (10YR3/2) 粘性強い 地山ブロックを多量含む
- 5 黒褐色シルト (10YR2/3) 粘性強い 地山ブロックを多量含む
- 6 黒褐色シルト (10YR2/2) 粘性強い 地山ブロックを含む
- 7 黒褐色シルト (10YR2/3) 粘性弱い 細砂を含む
- 8 黒褐色細砂 (10YR2/2) 粘性弱い
- 9 黒褐色細砂 (10YR3/2) 粘性弱い
- 10 黒褐色シルト (10YR2/2) 粘性強い 地山ブロックを多量含む
- 11 暗褐色シルト (10YR3/3) 粘性強い 地山ブロックを多量含む
- 12 黒褐色シルト (10YR2/2) 粘性強い 細砂を含む 炭化物を少量含む
- 13 黒褐色細砂 (10YR3/2) 粘性強い
- 14 黒褐色細砂 (10YR2/3) 粘性強い
- 15 黒褐色細砂 (10YR2/3) 粘性弱い 地山ブロックを少量含む
- 16 褐色シルト (10YR4/6) 粗砂を含む 15が少量混じる

Fig.197 SB19088 土層断面 (S=1/50)



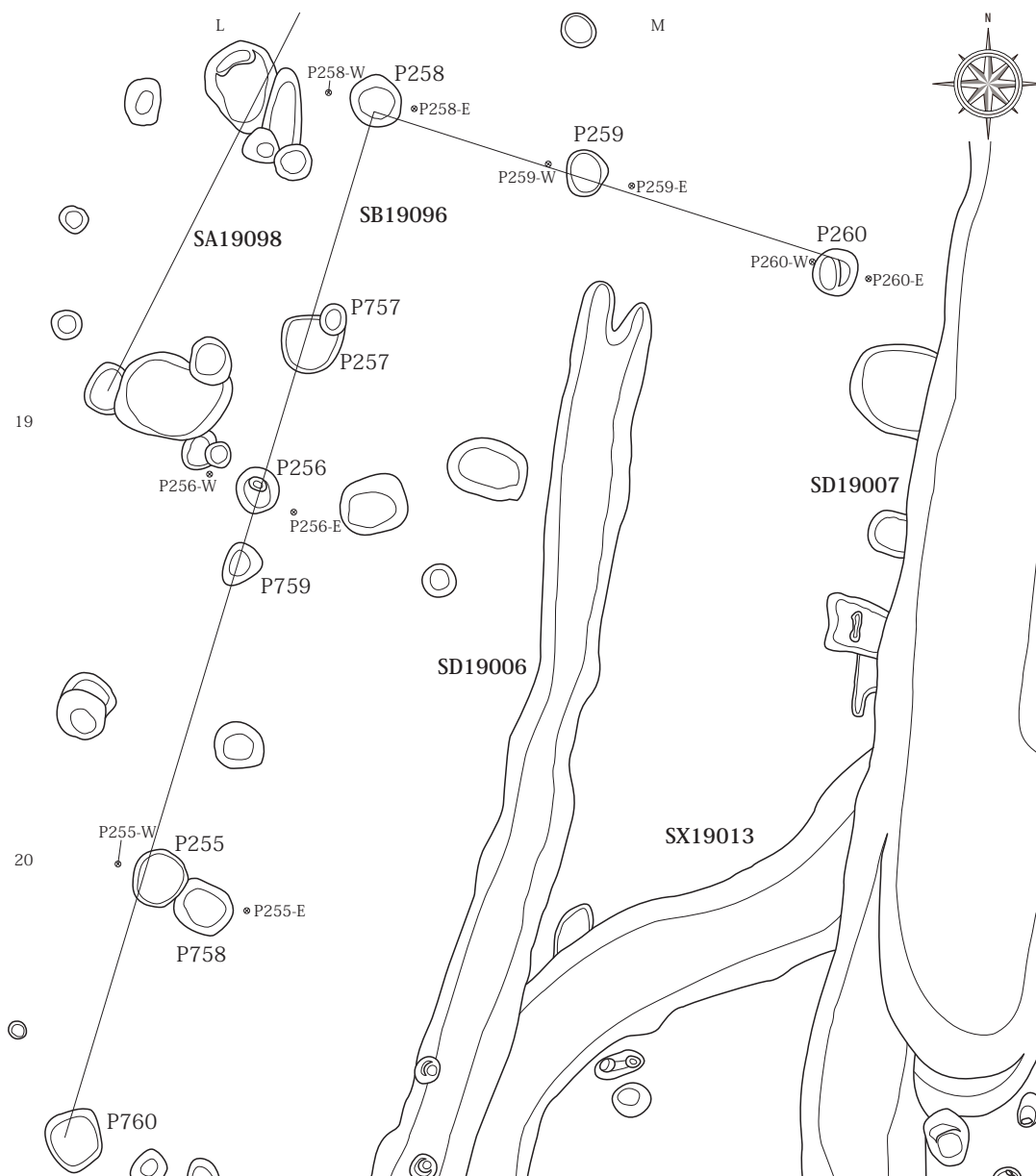
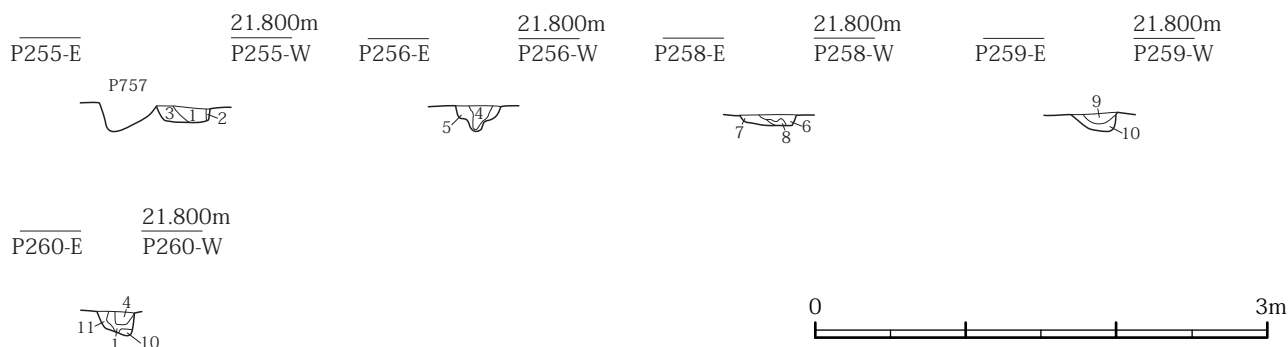


Fig.198 SB19096 平面 (S=1/50)



- |   |  |
|---|--|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>1 黒褐色シルト (10YR2/3) 細礫を含む</li> <li>2 黒褐色シルト (10YR3/2) 地山ブロックを多量含む</li> <li>3 黒褐色シルト (10YR3/2) 細礫を含む 地山ブロックを少量含む</li> <li>4 黒褐色シルト (10YR2/2) 細礫を含む</li> <li>5 黒褐色シルト (10YR3/2) 粗砂を含む 細礫・地山ブロックを含む</li> <li>6 黒褐色シルト (10YR3/2) 細礫を含む</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>7 暗褐色細砂 (10YR3/3) 細礫を含む</li> <li>8 黒褐色シルト (10YR3/2) 細礫・地山ブロックを含む</li> <li>9 黒褐色シルト (10YR2/2) 細礫を少量含む</li> <li>10 黒褐色シルト (10YR2/3) 細礫・地山ブロックを多量含む</li> <li>11 暗褐色細砂 (10YR3/3) 細礫を含む 地山ブロックを多量含む</li> </ul> |
|---|--|

Fig.199 SB19096 土層断面 (S=1/50)

していない。また、P255・257に切られるP757・758からも遺物の出土が全くない。主軸方向を検討すると、SA19037と同一の方向を示し、同じようにSD19005・6・SK19031・SX19100等の中世遺構と親近性が高いものと思われる。中世の屋敷地の区画範囲の内部に存在する点からも、これを追認したい。遺構の平面形は橋状遺構と捉えたSX19100のようにSD19006を跨ぐように配置されるが、SX19100のように東方向の延長上におけるSD19005が浅く掘削されるような有意な形状変化を見ることはできない。また、前述したようにSD19007と重なり、これを切るピットの検出には至らなかった。加えて、南辺を東方向へ延ばすとSX19100に干渉する

ため、別時期に比定できる可能性が高い。中世の中でもより古手の段階に位置付けられる。なお、構成するピットについては、P256を候補として考え、土層断面等の記録をとっているが、P257との距離が近すぎるため、P759の方が妥当であるかもしれない。P759は直径0.25mとやや小振りの円形状で、検出面からの深さは0.14mを計測する。

【掘立柱建物SB19106 (Fig.200・201)】

構成 P583～587。

重複 P763→584。P762→P586。

平面・規模 側柱建物であると考えられ、2間×2間の範囲を検出した。北西及び北東コーナーの確認により、北限と東西方向の規模は固まったが、南側一帯には攪乱範囲が広がるため、遺構範囲を掴むことができない。確認した規模は、東西2.9m、南北3.0mを測り、主軸方向はN-19°-W方向を向く。構成するピットは、直径0.3～0.6mの円形状を呈し、検出面からの深さは0.03～0.16mを計測する。

遺物 なし。

時期・性格 遺物の出土は一切ない。重複するP762・763からも遺物が全く出ていないため、帰属時期を特定することは難しい。主軸方向は中世遺構との類似性が挙げられるが、位置的には屋敷地を構成する区画溝の外側となり、同じく区画から外れたSE19112・SK19113との関係も乏しい。付近には古墳時代初頭のSH19012・57、円面硯が出土したP315が位置するが、明確な関連性は見受けられず、不明である。

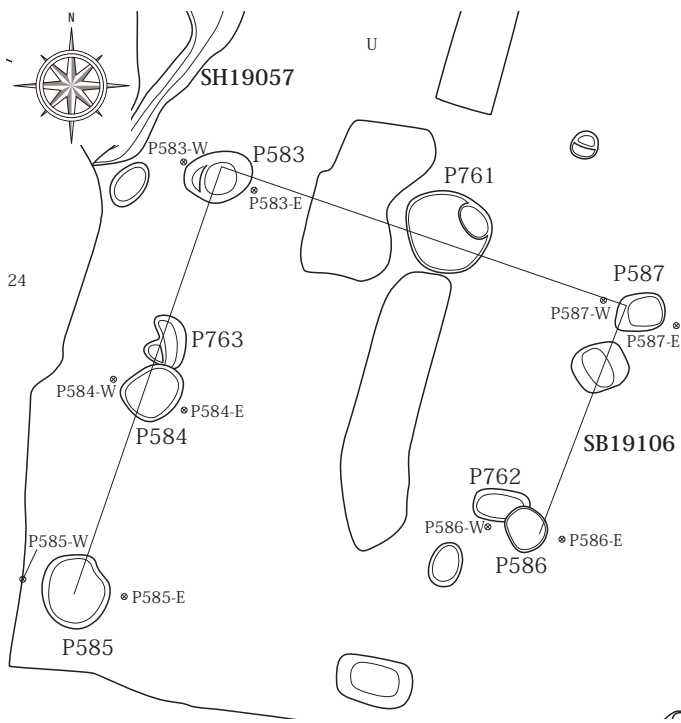
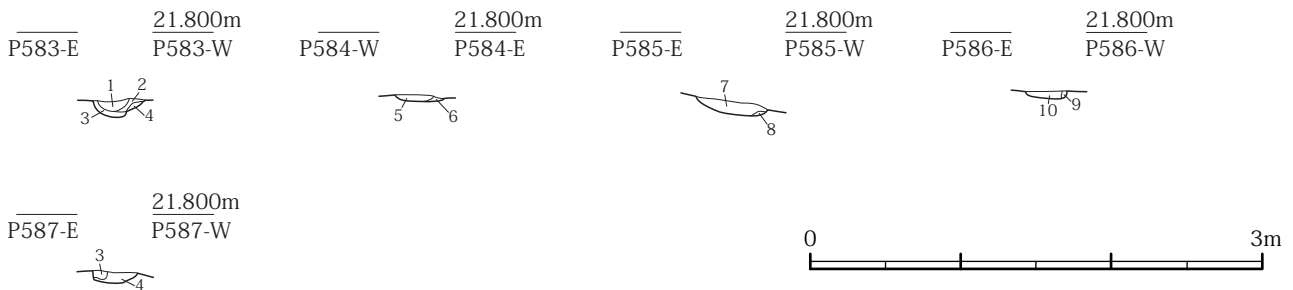


Fig.200 SB19106 平面 (S=1/50)



- |                                     |                                      |
|-------------------------------------|--------------------------------------|
| 1 黒褐色シルト (10YR2/2) 粘性強い             | 6 オリーブ褐色シルト (2.5Y4/4) 粘性強い、黒褐色土を少量含む |
| 2 黒褐色シルト (10YR2/2) 粘性強い、地山ブロックを少量含む | 7 黒褐色細砂 (10YR2/2) 粘性弱い               |
| 3 褐色シルト (10YR4/4) 粘性強い、黒褐色土を多量含む    | 8 灰黄褐色粘土 (10YR4/2) 粘性強い              |
| 4 褐色シルト (10YR4/4) 粘性強い、黒褐色土を少量含む    | 9 黒褐色細砂 (10YR2/3) 炭化物を少量含む           |
| 5 黒褐色細砂 (10YR2/3) 粘性弱い              | 10 褐色細砂 (10YR4/4) 粘性弱い               |

Fig.201 SB19106 土層断面 (S=1/50)

## (2) その他の出土遺物

表土及び包含層掘削、遺構検出時においても、比較的  
多量の遺物が出土し、比較的遺存状態が良好な個体を抽出した (Fig.202 ~ 204)。弥生・古墳時代から中世に至るまで、幅広い時代に跨る遺物が万遍なく確認され、少量ではあるものの縄文土器の出土も見られる。また、一部ではあるが、攪乱の可能性が高いSX22018・19からの出土品、建物等にまともでないピットから出土した  
帰属時期の特定が困難な遺物についても、併せてここに記述している。

**縄文土器深鉢 (609・610・612・613・615)** 609・612は凸帯文土器であり、共に凸帯文上には貝殻によるキザミが施される。609は口縁部端部からやや下がった位置に凸帯が貼り付けられる。610の外面は、3条1組で横位の沈線文によって装飾される。沈線文は半截竹管状工具を使用して施文されている。胎土には金雲母を含む。613は底部の資料で、ほぼ平底の底部形状である。胎土には金雲母が観察できる。615は口縁部上端にキザミを有しており、これは工具の使用によって小波状を呈する。口縁部の外反が強い。609・612は縄文時代晩期後半、615は縄文時代晩期前半の産物である。なお、610は縄文時代中期末の北白川C式の段階であると考えられる。

**弥生土器甕 (569・570・595・604・605)** 569はくの字甕で、頸部の屈曲が弱い。口縁部外端面は明瞭であり、体部内外面には粗いハケ調整される。570・605は受け口甕で、共に口縁部端部の立ち上がりは明瞭で、570は外反が強い。595はS字甕の口縁部である。口縁部は全体的に外反傾向を示し、端部は外側へ湾曲する。604は口縁部上端面が明瞭に作られ、口縁部端部はやや内湾する。胎土には雲母を多量包含する。595はS字甕0類の段階に相当し、古墳時代初頭の廻間I式1~2段階の年代観が与えられる。604は弥生時代後期前半の八王子古宮I式以降の資料であるが、口縁部端部が内湾傾向であるため、廻間式期の所産であると考えたい。

**弥生土器壺 (571 ~ 573・596 ~ 598・606・611)**  
571は直立する頸部を有し、口縁部は外側へ折り曲げられるように強く屈曲する。口縁部外端には明瞭な面を有する。外面はタテハケ後にタテヘラミガキ調整されるが、磨滅のために不明瞭である。572は口縁部上端面が明瞭である。573の底部形状は丸底で、底部が突出する。内面は密にハケ調整される。瓢壺になるのか。596は僅かに上げ底される。597は薄手の作りであり、口縁部の形状は直口である。598は送水場建物の北側中央部において、表土掘削中に出土した小型土器の完形品である。該当箇所は攪乱の影響が著しく、該当時期の遺構は検出さ

れていない。短頸で、口縁部が内湾する。体部は球形に膨らみ、その最大径は中位に作られる。底部形状は平底である。606・611は口縁部外端に明瞭な面を有する。606は口縁部外端面に凹みが認められ、外端面下部にはキザミが施される。キザミは工具の使用によって小波状をなす。611は口縁部外端面が4条の凹線文によって装飾される。外端面下部にはキザミを有するが、指頭による押圧が施されたものと考えられ、幅広に波打っている。口縁部内面には凹みが観察できる。571は弥生時代後期前半の八王子古宮式の段階になるのか。598は古墳時代初頭の廻間I式期の所産である。606・611は弥生時代中期前半に遡る資料である。

**弥生土器高坏 (574・607・608)** 574は有稜高坏の坏部で、坏部上段は直線的に外反する。坏部は比較的深く、脚部との接合部が剥落している。坏部外面のタテヘラミガキ調整は、磨滅のために痕跡化している。607・608は脚部で、607はハの字状に大きく脚を開ける。外面は櫛描直線文で装飾されるが、磨滅によって不鮮明である。608は小型で低脚である。有稜高坏の脚部になると考えられる。円形透孔が3方に穿かれるが、孔径は0.5cmと小さい。574は山中式後期の所産で弥生時代後期に比定できる。608は古墳時代初頭頃の産物であろうか。

**土師器甕 (575)** 体部はやや薄手の作りであるが、口縁部は肥厚する。口縁部端部は上方へ明瞭に摘み上げられる。体部内外面は粗いハケ調整される。平安時代後期頃の所産であると考えられる。

**土師器竈 (576)** 移動式の竈である。体部を部分的に留める資料であるが、切開部が残存する。把手部が剥落しているが、その下地にもハケ調整の痕跡が観察できる。口径は40cm強に復元され、大型のものとなる。

**須恵器壺 (578・603)** 578は大型の壺で、口縁部端部の外反が強い。口縁部外端には明瞭な面が形成される。口縁部内面には薄く自然釉がかかる。603は厚手に作られ、重厚な高台が貼り付けられる。底部端部は内傾し、内面には稜をもつ。内外面には自然釉が観察可能である。ロクロ目が強い特徴がある。

**須恵器坏 (577・601)** 共に底部の完形品である。577は体部が薄手であり、丸みを帯びて立ち上がる。坏としたが、碗の可能性もある。601は体部内面に自然釉がかかる。

**須恵器転用硯 (602)** 本来の須恵器坏の内面を硯面に転用しており、僅かに墨の付着が観察可能である。体部内面中央の平坦面が広いため、有用であったものと想像できる。高台は外側に作られており、体部が立ち上がる部分と非常に近接する。底部端部には内傾面を有する。

**灰釉陶器碗 (579 ~ 582)** 全て底部一部を留める資料

表土 (第19次)

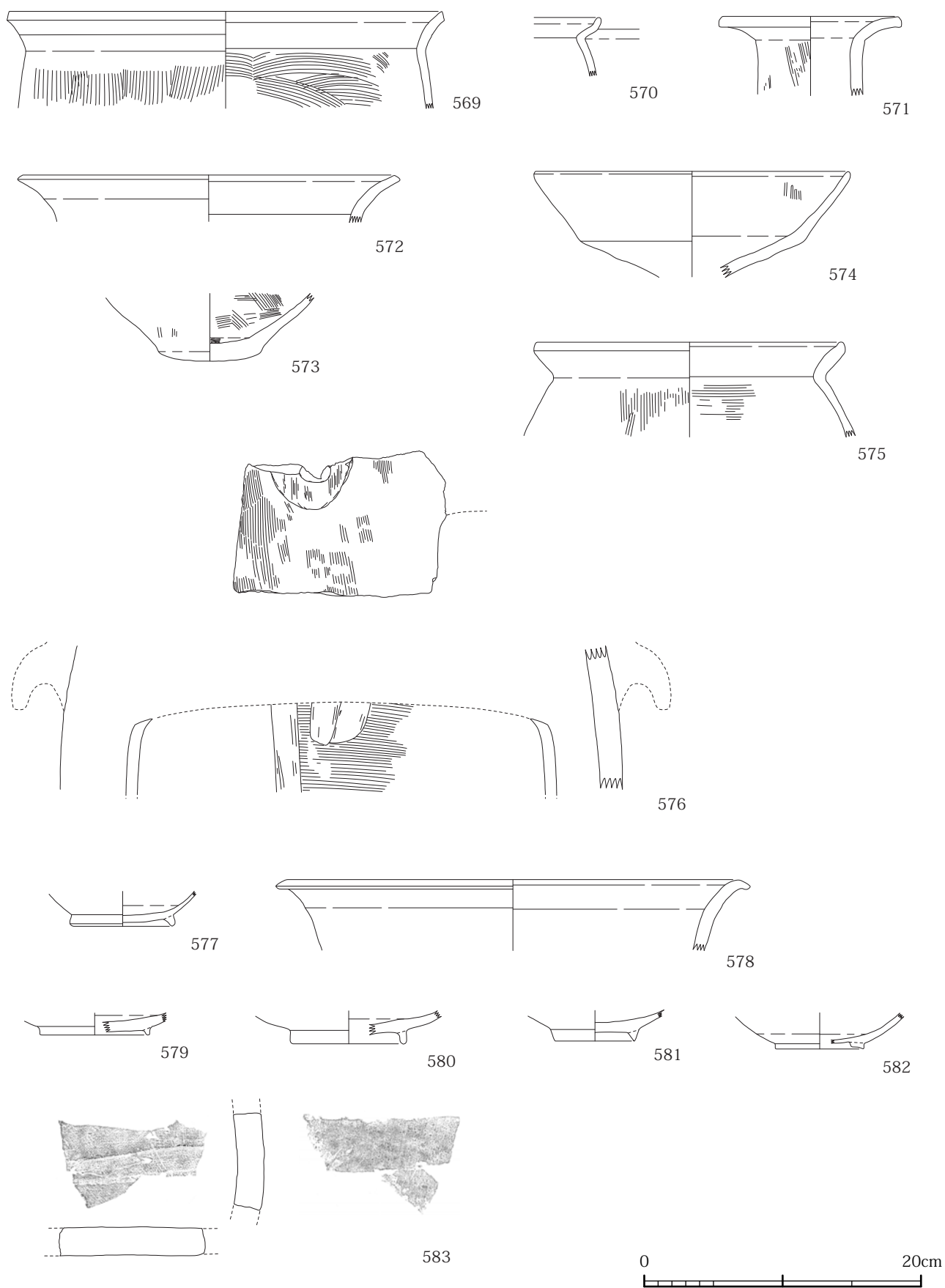
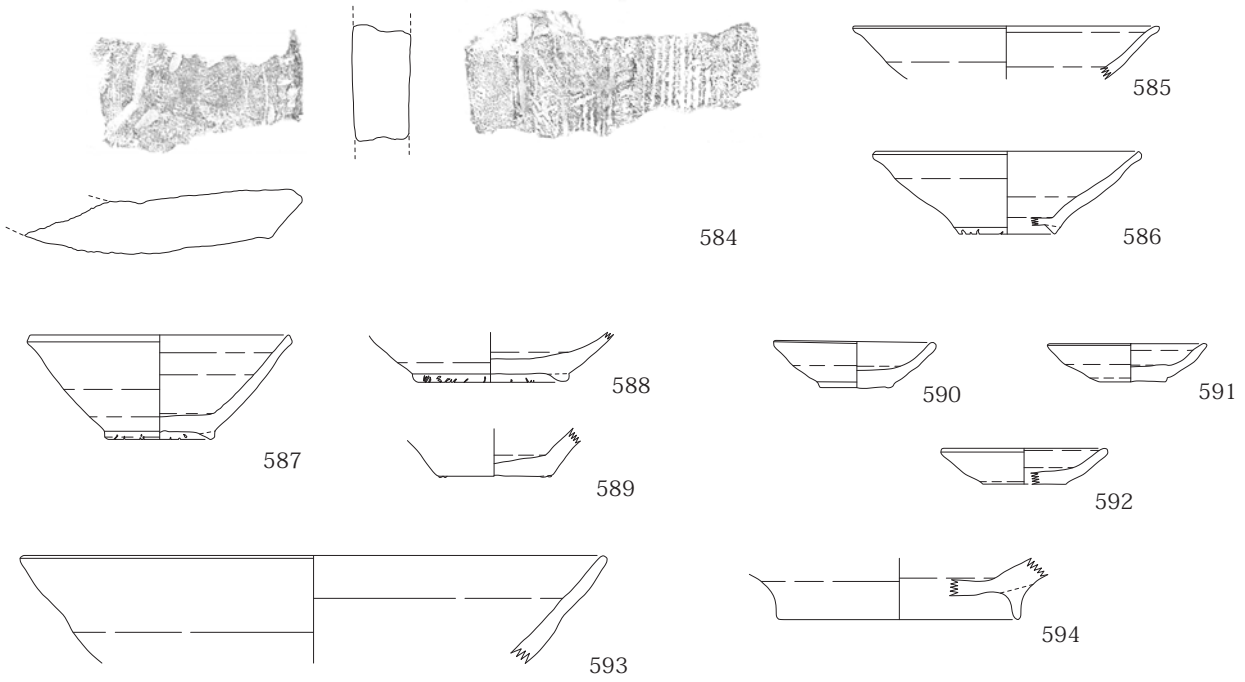
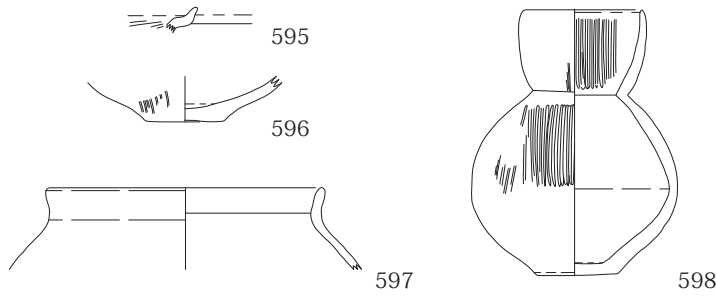


Fig.202 その他の出土遺物 1 (S=1/4)

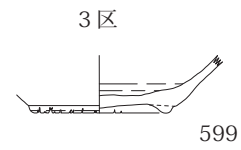
表土 (第19次)



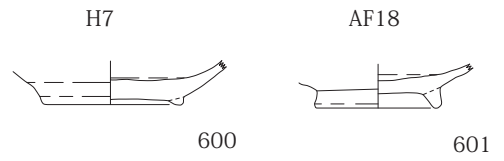
送水場建物北側



表土 (第22次)

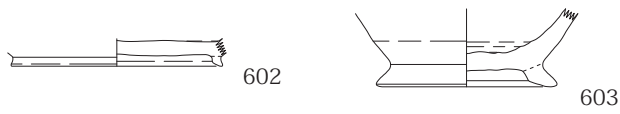


検出 (第19次)

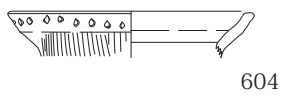


包含層 (第22次)

1区



1区 TP1



1区 TP4



1区 TP2

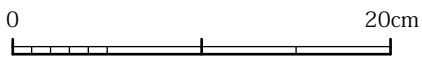
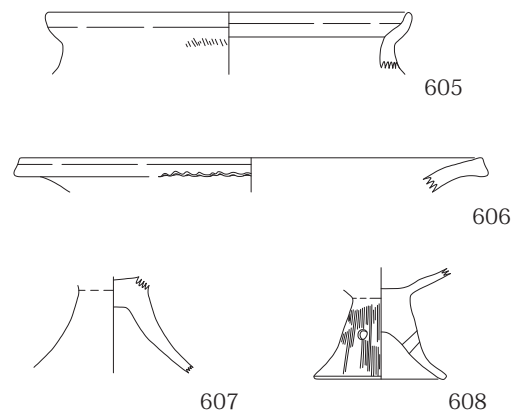


Fig.203 その他の出土遺物 2 (S=1/4)



包含層 (第 22 次)

2 区

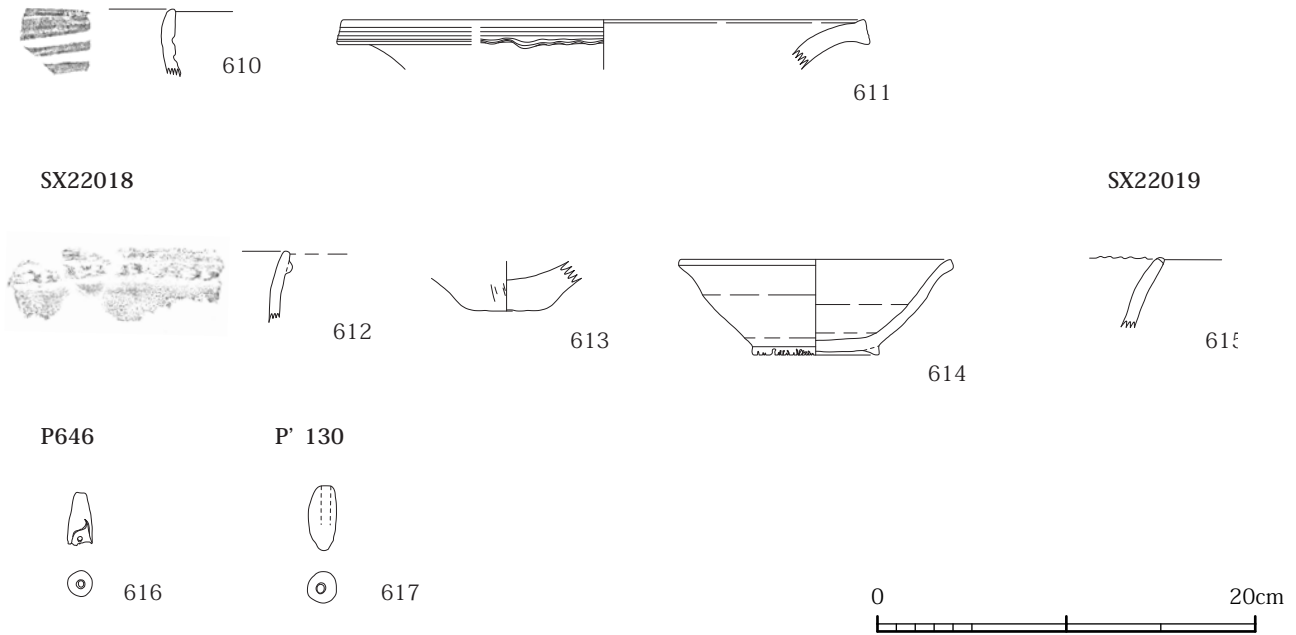


Fig.204 その他の出土遺物 3 (S=1/4)

で、灰白色の素地に対し、灰オリーブ色の灰釉が施される。579・581・582 は内面全体に施釉され、580 のみ体部内面に施釉される。580 については、トチンを用いずに直接重ね焼きが行われたと考えられ、高台接地面となる底部内面は無釉である。579・580・582 は断面方形の高台が貼り付けられ、581 は三角形を呈する。582 の高台は幅広で扁平であり、内面には段を有する。これらは猿投窯編年の K14 ~ 90 窯式の産物で、9 世紀代に比定できる。唯一、580 のみ K90 窯式の段階に限定でき、9 世紀後半の所産であると判断される。

**平瓦 (583・584)** 583 は粘土紐桶巻作りによるもので、両端部を欠損する。凹面には布目痕を確認し、その綴じ合わせ目の観察が可能である。凸面は丁寧にケズリ調整される。584 は一枚作りによるもので、厚手の作りである。側面が残存しており、凸面側縁が面取りされる。凹面には布目痕、凸面は縄タタキが確認される。583 は橙色系の胎土で、平田遺跡出土系統の瓦であると判断され、7 世紀後半 ~ 8 世紀前半の年代観である。584 は 8 世紀中葉の所産である。

**山茶碗 (585 ~ 589・599・600・614)** 全て粗肌手の胎土で作られ、南部系の産物であるものと推定される。これらの多くには、低く扁平な高台が貼り付けられる。586 ~ 588・599・614 の高台には靱殻痕が観察でき、588・599・614 は特に顕著である。585 ~ 587・614

の口縁部外面には凹みが認められる。585 は口径が 16.2 cm と大きく復元される。586 の外面全体、600・611 の体部内面には自然釉がかかり、589・600 は薄い。586 はロクロ目が強く、体部と底部の境が角張る。587・614 は口縁部端部が上方へ向けて尖る。589 は高台が剥離しており、焼成に起因するものか、内面が黒変している。これらの遺物は、当該調査区における中世の生業の中心となる藤澤編年 5 型式の段階に比定でき、12 世紀後半 ~ 13 世紀初頭に属するものと考えられる。

**山皿 (590 ~ 592)** 590・591 は底部の突出が強く、592 もやや底部が突出する。590・592 は口縁部端部を丸く収め、直線的に外反する。591 はロクロ目が強く、体部内面には薄く自然釉がかかる。592 の自然釉は口縁 ~ 体部内面に薄い。胎土には直径 0.4cm の礫を包含する。全て 12 世紀後半 ~ 13 世紀初頭に帰属すると判断される。

**山茶碗鉢 (593・594)** 593 は口縁部、594 は底部の一部を留める資料である。593 は口縁部が直線的に外反し、外面には凹みを有する。口縁部内面には自然釉が薄くかかる。594 は高台が高く貼り付けられる。体部に比較して底部はやや薄手に作られる。

**土錘 (616・617)** 共に完形品ではないが、棒状の土錘である。616 は 0.4cm、617 は 0.5cm の円孔が貫通するものと見込まれる。穿孔箇所はほぼ中心である。

### (3) SX22031 について

#### 【近代遺構 SX22031 (Fig.205・206)】

区割 TP1・2。

重複 SX22031 →平田送水場水槽升。

平面・規模 3区の大半を占めるコンクリート製の構造物で、その全てが水槽升を覆う土盛によって埋没する。西～南西部を現代の水槽升によって攪乱されるため、全形は不明である。検出した範囲は東西 13.7 m、南北 17.8 mを測る長方形を呈する。北辺東部のコンクリートは厚く、北方向へ 4.6 m突出する。構成するコンクリートの厚さは 1.2 mを計測するが、東辺のみ 1.8 mと厚い。内部は空洞であり、TP1・2間には厚さ 0.9 mの仕切り壁が存在する。この仕切り壁もコンクリート造りである。主軸方向は N-11° -W 方向を示す。矩形を志向する SX22031 の 4 辺はほぼ同一レベルに造られ、そのコンクリート上端の標高は 23.4 m、TP1・2の仕切り壁の上端は 23.1 mを測る。重複する水槽升上端の標高は 24.1～24.2 mを計測する。なお、SX22031 の埋土には、直径 1.0 mを超過するコンクリート塊が多数混入しており、調査は非常に難航した。表土掘削の段階において、SX22031 の建物の一部と見られるコンクリート塊が多量に露出し、この除去には多大な労力を要した。コンクリート塊はまた相当量埋没しており、安全面も考慮し、完掘には至っていない。そのため、調査は TP1 で標高 19.4～19.7 m、北部で 19.1 m、TP2 は 21.2～20.9 mまでを対象として行い、下面には前代の遺構が存在しないことを確認している。

遺物 なし。調査区全面においても、近代遺物の出土はない。SX22031 付近の表土からは山茶椀 (599) が出土しているが、水槽升を被覆する土盛中からの出土である。

時期・性格 第 22 次 3 区の調査において、調査区が面的に削平されている状況を確認した。また、平田送水場建物北側に埋設された水槽升を覆う土盛箇所について、その東～北東部が調査対象となっていたため、その表土掘削を行ったところ、SX22031 を検出した。SX22031 は重厚なコンクリート造りの構造物であるが、水槽升によって南西コーナーを破壊されている。

ここで、後出する水槽升を含む平田送水場について確認する。平田送水場については、鈴鹿市における上水道創設の水源送水場と位置付けられているが、その前身は鈴鹿海軍工廠の水道施設として供されていた。当該施設の南側一帯には、鈴鹿海軍工廠及び工員養成所、鈴鹿共済病院等が置かれた。建物の建設は、鈴鹿海軍工廠が開廠されたのと同年の昭和 18 年 (1943 年) に遡る。昭和 22 年 (1947 年) 9 月には、大蔵省 (当時) から施

設を一時的に無償借用し、給水した経緯があるが、これが鈴鹿市における水道事業の開始とされている。送水場建物は、増補改良工事が昭和 37 年 (1962 年) 9 月に着工され、1 年後の昭和 38 年 (1963 年) 9 月に完成している。以降、24,000 m<sup>3</sup>/日もの給水量を供給する鈴鹿市における重要な送水施設として利用されてきた。老朽化に伴い、今回の発掘調査の要因となった改築工事のため、平成 22 年 (2010 年) 1 月 6 日にその稼働を停止している。また、送水場の北側に併設する水槽升についても、詳しい資料はないが、本格的に水道事業が開始される昭和 38 年の送水場建物完成時には存在していた可能性が高いものと考えられる。つまり、SX22031 は昭和 38 年以前に建てられた構造物と言える。SX22031 の周囲はその掘り方で大規模に掘削され、近世以前の痕跡を留めない。

なお、近代における水道施設で著名なものとして、桑名市の諸戸水道の例を参考にする。諸戸水道は明治 37 年 (1904 年) に竣工され、新しい水道に替わる昭和 4 年 (1929 年) まで利用された施設である。桑名市における上水道の起源であり、現存する施設や資料により、水源地や配管、貯水池施設等の様子や貯水池施設の上屋構造も分かる貴重な資料である。ここで注目されるのは貯水槽である (Fig.207・208)。全体の規模は東西 13.4 m、南北 23.2 mの矩形を呈し、深さは 3.4 mに達する。側壁はコンクリート製で、内壁は全て煉瓦積みによって造られている。中央部には仕切壁が存在し、2 槽に分けられる。各槽にはそれぞれ煉瓦造の 2 枚の導水壁が 2 枚設置され、これが交互に配される。構成するコンクリートの厚さは 0.3 m～0.4 mを測り、煉瓦の大きさは 0.2 m×0.1m×0.6 m程度である。施設の廃絶後も水が溜まるため、付近の人々が水を汲み上げて利用していたと伝わる。当該遺構は、昭和 40 年 (1965 年) には、桑名市指定文化財に登録されている。

SX22031 は形状的に諸戸水道の貯水池施設に類似する。共にコンクリート造りによるもので、矩計形を志向する。内部には導水壁が存在する点も共通する。諸戸水道はコンクリート躯体を構築した後、槽の内側には煉瓦が積み上げられるが、SX22031 には煉瓦が見られず、埋土にも煉瓦片は全く検出されなかった。コンクリートの打ち直し仕上げによる構造であると思われる。また、断面の観察によると、断面 B においては、内壁東面に梯子状のステップが 5 箇所遺存し、乗降可能な構造であったものと判断される。また、断面 A でも確認できるが、導水壁の東西面が約 0.2 m掘り抜かれ、アーチ状の平面形を呈する。この装飾は壁の両面に 3 箇所ずつ施されている。内部構造を更に見ると、諸戸水道では中央仕切壁

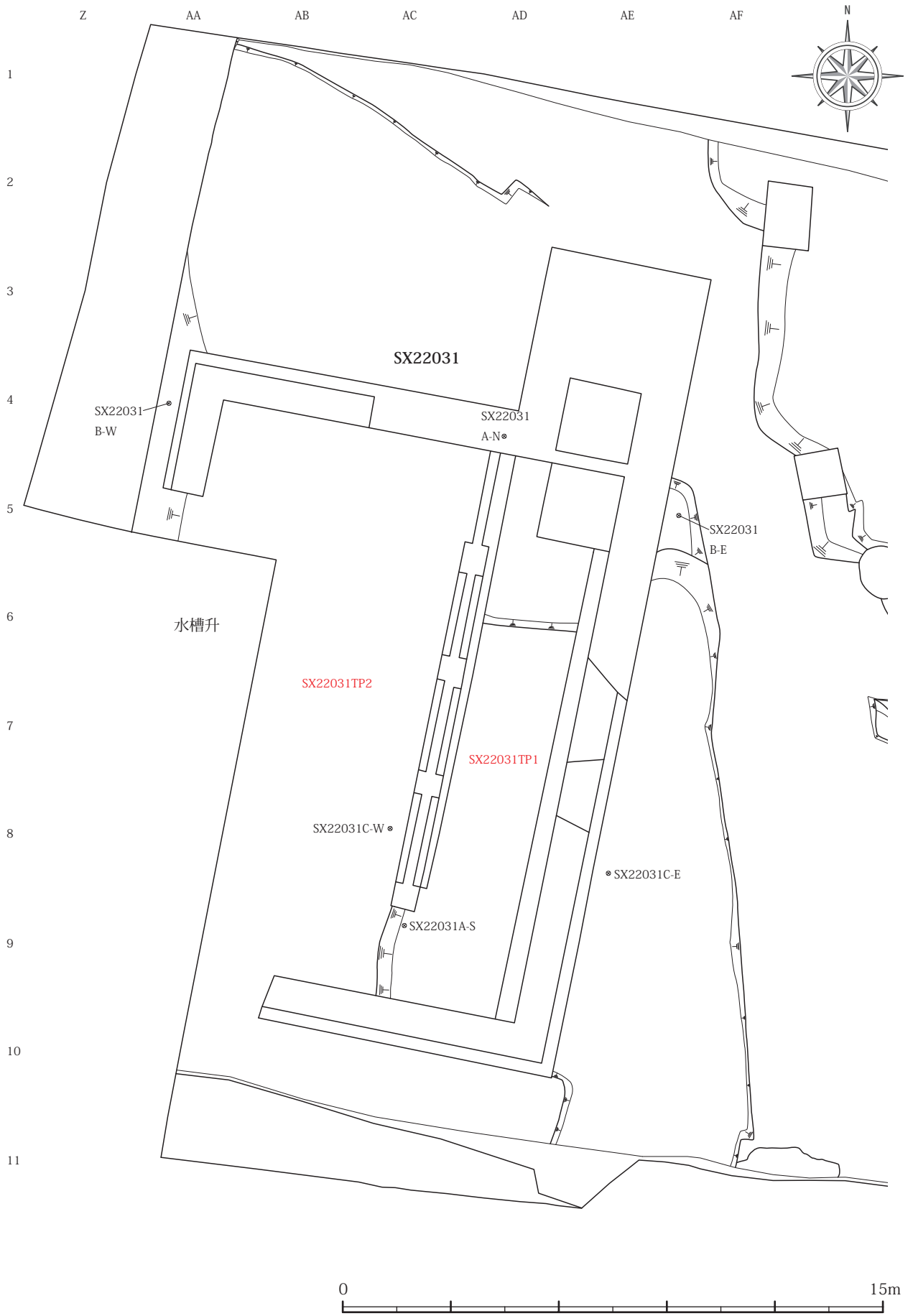


Fig.205 SX22031 平面 (S=1/150)

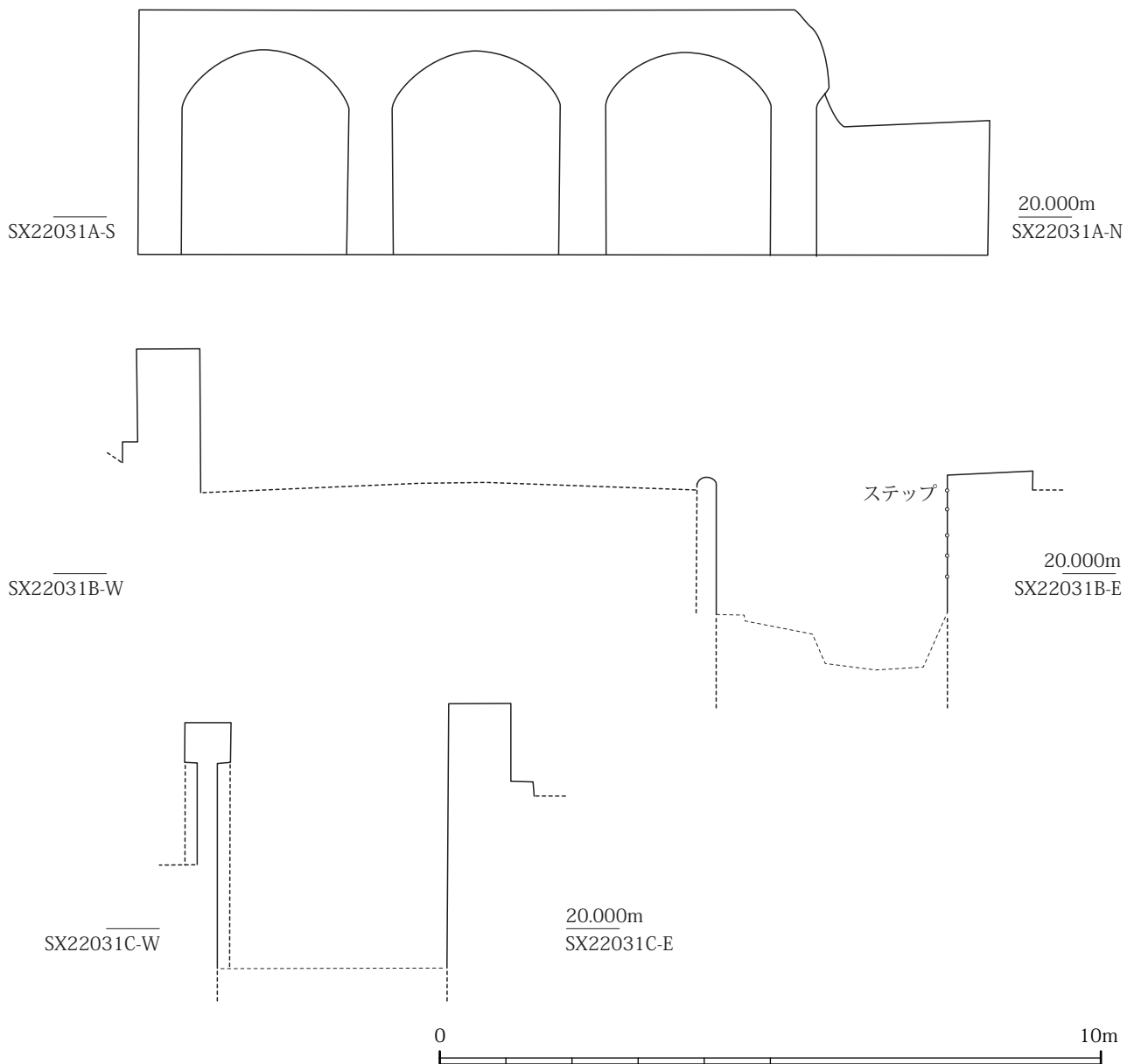


Fig.206 SX22031 断面 (S=1/100)

によって北・南槽に分割されるが、SX22031は現存する範囲では仕切壁は存在せず、導水壁も1枚のみである。

貯水容量の点から比較すると、まず諸戸水道は概ね $923.6\text{m}^3$ （内法測定：東西 $12.2\text{m}$ ×南北 $22.3\text{m}$ ×深さ $3.395\text{m}$ ）を測るものと考えられる。SX22031は深さが不明であるものの、底面積は $172.89\text{m}^2$ （内法測定：東西 $11.3\text{m}$ ×南北 $15.3\text{m}$ ）を計測する。深さはTP1北部で $4.3\text{m}$ を測るも、底面の到達には至らず、諸戸水道と比較しても深い。現存する規模から判断しても、諸戸水道の貯水容量に匹敵するものと考えられる。

以上のことから、SX22031は貯水槽としての性格を有していたと判断される。昭和38年を遡る時期のものであるが、国土地理院発行の米軍による空中写真を参照すると、昭和22年（1947年）11月4日に撮影された

USA-R470-70には、送水場の前身となる建物の北側に隣接し、SX22031と見られる構造物が建っていることを確認できる。写真では、SX22031は南西コーナーがそのまま形状に収斂するように見えるため、平面規模は概ね推測可能である。SX22031は、昭和18年に鈴鹿海軍工廠の水道施設として利用された時期の貯水槽であり、昭和38年までにはその機能を失っていたものと考えたい。平田地域は、昭和18年の鈴鹿海軍工廠開廠以来、鈴鹿市における拠点的な水源を供える地域として、非常に重要であるものと言える。

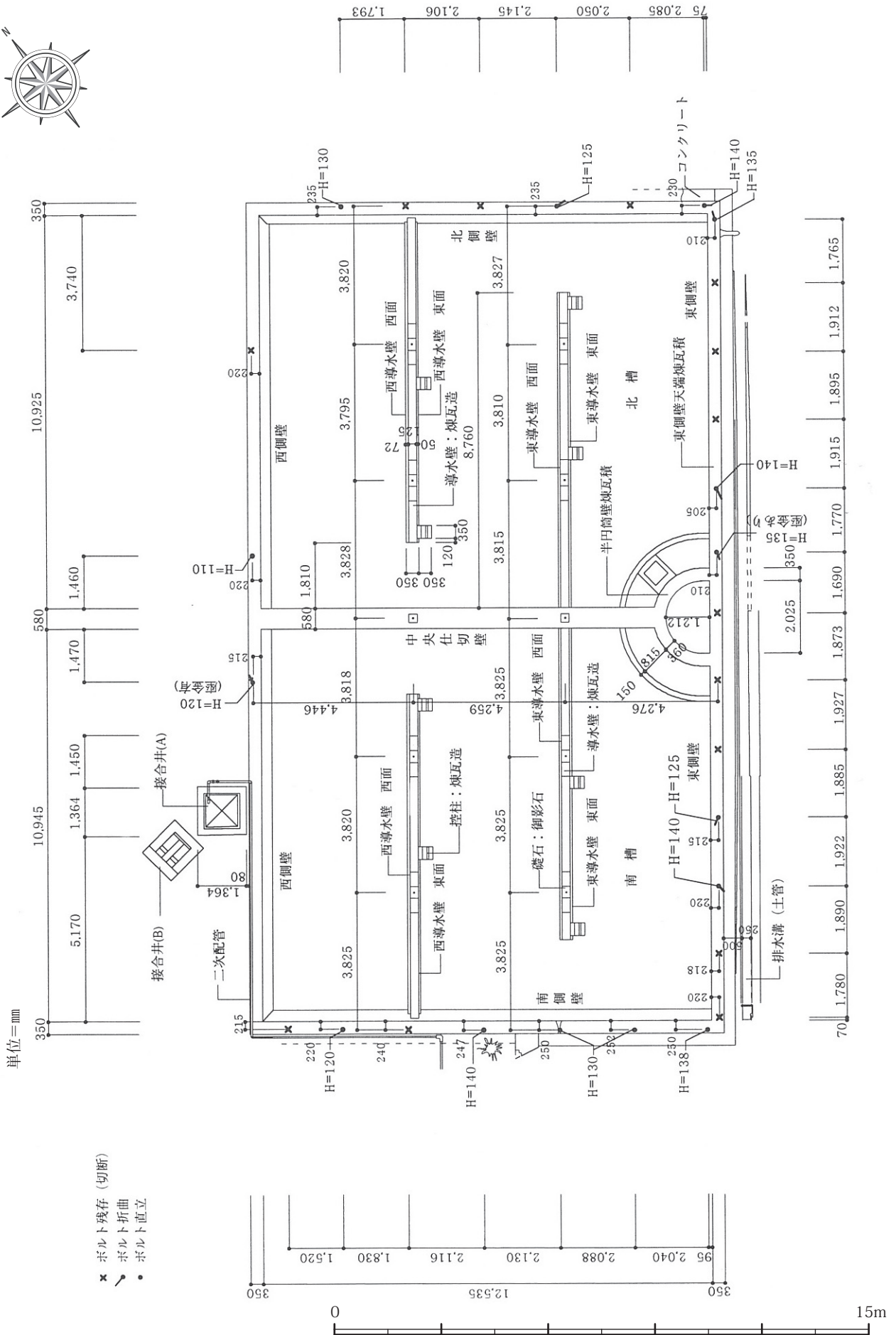


Fig.207 諸戸水道貯水槽平面 (S=1/150)



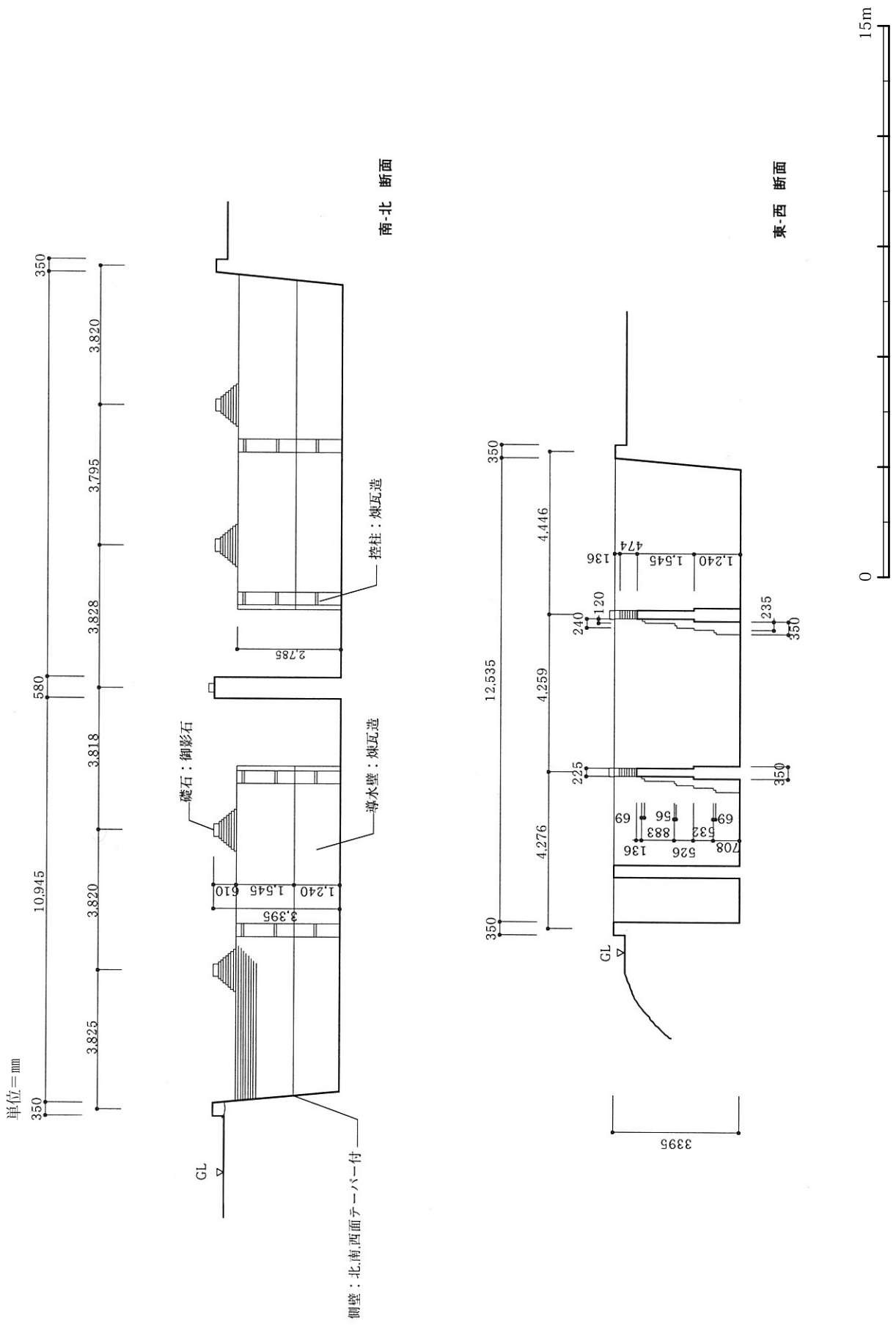


Fig.208 諸戸水道貯水槽断面 (S=1/150)

Tab.1 遺構一覧 (1)

遺構	調査	規模 (m)									主軸方向	時期
		辺長		床面積 (㎡)	床面 深さ	貼床 厚さ	周壁溝		土坑			
		東西	南北				幅	深さ	直径	深さ		
SH19001	19次	5.6	5.0	24.4	0.05-0.1	0.06-0.09	0.1-0.25	0.01-0.05	0.7-0.75	0.24	W-29° -N	古墳初頭
SH19012	19次	5.9	5.6	28.6	-	-	0.15-0.3	0.05	-	-	W-42° -N	古墳初頭?
SH19014	19次	5.5	5.1	23.5	0.04	0.02-0.15	0.2-0.25	0.08-0.13	0.65-0.9	0.13	W-2° -N	古墳初頭
SH19015	19次	6.2	5.5	29.6	0.02-0.05	0.08-0.15	0.15-0.3	0.03-0.1	0.8-0.9	0.3	W-37° -N	古墳初頭
SH19018	19次	5.8	5.3	26.0	0.02-0.06	0.03-0.12	0.2	0.05-0.1	1.4	0.3	W-30° -N	古墳初頭
SH19034	19次	5.5	-	-	-	-	0.15-0.3	0.1	1.05-1.9	0.1	W-23° -N	古墳初頭
SH19053	19次	(7.0)	(3.0)	-	-	-	0.07-0.2	0.1	0.75-0.8	0.1	W-24° -N	古墳初頭
SH19057	19次	-	(6.2)	-	0.04-0.07	0.03-0.04	0.1-0.3	0.05-0.1	(0.1)	0.58	N-43° -E	古墳初頭
SH19058	19次	(3.8)	(7.4)	(17.7)	0.1	-	0.25-0.35	0.05-0.1	-	-	N-2° -E	?
SH19059	19次	6.0	4.0	20.0	0.02-0.05	-	0.2-0.4	0.03-0.06	-	-	W-8° -S	弥生後期～ 古墳初頭?
SH19060	19次	5.7	5.7	28.6	0.1-0.2	-	0.2-0.3	0.03-0.12	0.6-0.7	0.45	W-21° -N	古墳初頭
SH19061	19次	5.1	4.6	(21.8)	0.07	-	0.15-0.2	0.06	0.75-0.8	0.42	N-20° -E	弥生後期?

【備考】

- ① (計測値) は攪乱・重複等によって消失し、規模が不明確であるため、検出規模を示す。それ以外の数値は、規模が確定しているものは実測値、コーナー等の検出によって容易に推測可能なものは推測値を記している。
- ② 東西・南北方向の辺長は、周壁溝の外法間距離を測定した全長を示し、床面積については、周壁溝2辺の内法間距離に基づいて算出している。
- ③ 床面深さは、遺構検出面から床面までの深さを表す。
- ④ 周壁溝深さは、床面から周壁溝底面までの深さを表す。
- ⑤ 土坑深さは、近接した周壁溝底面から土坑底面までの深さを表す。
- ⑥ ピット深さは、遺構を構成するピットの遺構検出面から底面までの深さを表す。
- ⑦ 形式は、側柱＝側柱掘立柱建物、総柱＝総柱掘立柱建物、平地＝平地式住居にそれぞれ対応する。

Tab.2 遺構一覧 (2)

遺構	調査	地区	規模 (m)				形式	主軸方向	時期
			桁行 間数	梁間 間数	ピット 直径 深さ				
SB19036	19次	-	(7.0) (2)	(3.2) (1)	0.45-0.7	0.1-0.3	側柱	N-41° -W	9世紀?
SB19084	19次	-	5.4 1	4.8 1					
SB19086	19次	-	5.7 2	3.4 1	0.65-0.8	0.4-0.55	側柱	W-5° -S	縄文晩期前半
SB19087	19次	-	(5.2) (4)	2.7 1					
SB19088	19次	-	5.5 3	2.2 2	0.2-0.5	0.05-0.25	側柱	N-12° -W	12世紀後半～ 13世紀初頭?
SB19089	19次	-	(5.3) (2)	(1.5) (1)					
SB19090	19次	-	(5.7) (2)	3.7 3	0.4-0.7	0.05-0.35	側柱	N-1° -W	縄文晩期前半?
SB19093	19次	-	4.1 2	4.0 2					
SB19094	19次	-	3.6 2	2.9 2	0.2-0.4	0.25-0.35	側柱	W-35° -N	縄文晩期前半?
SB19095	19次	-	5.4 3	4.3 2					
SB19096	19次	-	(7.4) (4)	(3.4) (2)	0.3-0.4	0.06-0.25	側柱	N-17° -W	12世紀後半～ 13世紀初頭?
SB19104	19次	-	6.5 3	4.0 2					
SB19106	19次	-	(3.0) (2)	2.9 2	0.3-0.6	0.03-0.16	側柱	N-19° -W	?
SX22014	22次	2区	南北 6.7 -	東西 5.0 -					
SB22032	22次	2区	3.1 2	2.8 2～3	0.4-0.55	0.28-0.6	側柱	W-5° -N	9世紀後半
SB22033	22次	1区	(4.7) (4)	1.5 1					

Tab.3 遺物一覧(1)

報告 番号	実測 番号	種別	器形	調査 地区	遺構	位置	法量 (cm)			胎土	焼成	色調	残存率	口縁部調整		体部調整		文様	特記事項
							口径	底径	器高					内面	外面	内面	外面		
1	464	縄文土器	深鉢	19次	P292				粗細礫多	硬	灰黄褐	体部一部			ケズリ	ケズリ 条痕		金雲母 接合痕	
2	465	縄文土器	深鉢	19次	P292				粗細礫多	硬	灰黄褐	体部一部			ケズリ	条痕		金雲母	
3	459	縄文土器	深鉢	19次	P226				粗細礫多	硬	にぶい褐	体部一部			ケズリ	ケズリ			
4	460	縄文土器	深鉢	19次	P226				粗細礫多	硬	橙	体部一部			ケズリ	ケズリ		金雲母	
5	453	縄文土器	深鉢	19次	P233				粗細礫多	硬	にぶい黄橙	体部一部				ケズリ		接合痕 金雲母	
6	450	縄文土器	深鉢	19次	P237				やや粗細礫多	硬	にぶい黄橙	口縁部一部	ケズリ	ケズリ					
7	483	縄文土器	深鉢	19次	P281				やや粗細礫多	硬	黒褐	口縁部一部	ケズリ	ケズリ				磨滅 金雲母 キザミ	
8	486	縄文土器	深鉢	19次	SK19076				やや粗細礫多	硬	にぶい黄橙	口縁部一部	ケズリ	ケズリ					
9	617	縄文土器	深鉢	22次 2区	SK22009				粗細礫多	硬	にぶい黄橙	体部一部			ケズリ	ケズリ			
10	604	縄文土器	深鉢	22次 3区	SK22030				粗細礫多	硬	灰黄褐	口縁部一部		ケズリ				金雲母	
11	599	縄文土器	深鉢	22次 3区	SD22028				やや粗細礫多	硬	橙	口縁部一部	ナデ	ナデ			○凸帯文	素文	
12	627	縄文土器	深鉢	22次 2区	P55				やや粗細礫多	硬	浅黄橙	頸・体部一部			ケズリ	ケズリ			
13	624	縄文土器	深鉢	22次 2区	P59				やや粗細礫多	硬	灰黄褐	口縁部一部	ケズリ	ケズリ				金雲母	
14	621	縄文土器	深鉢	22次 2区	P57			4.6	やや粗細礫多	硬	にぶい黄橙	底部完形			ナデ	ケズリ		上げ底	
15	603	縄文土器	深鉢	22次 2区	P94				やや粗細礫多	硬	褐灰	口縁部一部	ケズリ	条痕				金雲母	
16	622	縄文土器	深鉢	22次 2区	P94				やや粗細礫多	硬	灰黄褐	口縁部一部	ケズリ	ケズリ				金雲母	
17	625	縄文土器	深鉢	22次 2区	P94				やや粗細礫多	硬	灰黄褐	口縁部一部	ケズリ	ケズリ				金雲母	
18	626	縄文土器	深鉢	22次 2区	P94			26.2	やや粗細礫多	硬	褐灰	頸部 1/10	ケズリ	ケズリ	ケズリ	ケズリ		キザミ 金雲母	
21	467	縄文土器	深鉢	19次	P68				粗細礫多	硬	にぶい黄橙	体部一部			ケズリ	ケズリ		厚手 金雲母	
22	452	縄文土器	深鉢	19次	P73				やや粗細礫多	硬	にぶい褐	口縁部一部	ヨコナデ	ヨコナデ				キザミ 金雲母	
23	461	縄文土器	深鉢	19次	P295				やや粗細礫多	硬	にぶい黄橙	体部一部			ケズリ	ケズリ			
24	462	縄文土器	深鉢	19次	P295				やや粗細礫多	硬	にぶい黄橙	体部一部			ケズリ	ケズリ			
25	466	縄文土器	深鉢	19次	P357				粗細礫多	硬	にぶい黄橙	体部一部			ケズリ	ケズリ			
26	454	縄文土器	深鉢	19次	P364				やや粗細礫多	硬	褐灰	口縁部一部	条痕	ヨコナデ				金雲母	
27	456	縄文土器	深鉢	19次	P424				粗細礫多	硬	にぶい黄橙	体部一部			ケズリ	ケズリ		煤	
28	458	縄文土器	深鉢	19次	P436				やや粗細礫多	硬	褐灰	頸・体部一部			ケズリ	ケズリ			
29	451	縄文土器	深鉢	19次	P437				やや粗細礫多	硬	灰褐	口縁部一部	条痕	ヨコナデ				金雲母	
30	327	縄文土器	鉢	19次	P455				密細礫多	硬	褐灰	口縁部一部	ミガキ	ミガキ				黒色磨研 ミガキ密	
31	455	縄文土器	深鉢	19次	P577				やや粗細礫多	硬	橙	口縁部一部	ケズリ	ケズリ				キザミ	
32	449	縄文土器	深鉢	19次	P581				やや粗細礫多	硬	にぶい黄橙	口縁部一部	ヨコナデ	条痕				キザミ	
33	463	縄文土器	深鉢	19次	P602				粗細礫多	硬	橙	口縁部一部	ナデ	ナデ			○凸帯文	キザミ 金雲母 接合痕	
34	610	縄文土器	深鉢	22次 1区	P31				やや粗細礫多	硬	灰黄褐	体部一部			ケズリ	ケズリ			
35	613	縄文土器	深鉢	22次 1区	P31				やや粗細礫多	硬	灰黄褐	体部一部			ケズリ	条痕		金雲母 接合痕 2	
36	615	縄文土器	深鉢?	22次 2区	P39				やや粗細礫多	硬	灰黄褐	体部一部				条痕		金雲母	
37	628	縄文土器	深鉢	22次 2区	P54				粗細礫多	硬	にぶい黄橙	口縁部一部	ナデ	ナデ			○凸帯文	キザミ 金雲母	
38	608	縄文土器	深鉢	22次 2区	P63				やや粗細礫多	硬	にぶい黄橙	口縁部一部	ケズリ	ケズリ					
39	632	縄文土器	深鉢	22次 2区	P74				やや粗細礫多	硬	灰褐	口縁部一部	ケズリ	ケズリ ナデ			○凸帯文	素文	
40	618	縄文土器	深鉢	22次 2区	P90				やや粗細礫多	硬	灰黄褐	体部一部			ケズリ	ケズリ		金雲母	
41	616	縄文土器	深鉢	22次 2区	P93				やや粗細礫多	硬	灰黄褐	体部一部			ケズリ	ケズリ		金雲母	
43	612	縄文土器	深鉢	22次 2区	P105				やや粗細礫多	硬	褐灰	口縁・体部一部	ナデ	条痕	ケズリ	条痕		金雲母	
44	619	縄文土器	深鉢	22次 2区	P105				やや粗細礫多	硬	にぶい橙	口縁部一部		条痕				薄手 金雲母	
46	614	縄文土器	深鉢	22次 1区	P178				粗細礫多	硬	灰黄褐	体・底部一部			ケズリ			上げ底 金雲母	
47	629	縄文土器	深鉢	22次 1区	P179				粗細礫多	硬	灰黄褐	体部一部			ナデ	ケズリ		金雲母	
48	630	縄文土器	深鉢	22次 1区	P179				粗細礫多	硬	灰黄褐	口縁部一部	ケズリ	ケズリ					

報告番号	実測番号	種別	器形	調査	地区	遺構	位置	法量 (cm)			胎土	焼成	色調	残存率	口縁部調整		体部調整		文様	特記事項
								口径	底径	器高					内面	外面	内面	外面		
51	207	弥生土器	甕	19次		SH19001	北西	16.6			密細礫多	硬	橙	口縁部 1/14	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	○刺突文	磨滅 受け口
52	411	弥生土器	壺	19次		SH19001	北東	(頸) 14.8			密	硬	灰黄褐	頸部 1/8	ヨコナデ	タテヘラ ミガキ				磨滅
53	293	弥生土器	高环	19次		SH19001	南西		(後) 15.4		密細礫多	硬	橙	坏部一部						磨滅
54	192	弥生土器	高环	19次		SH19001	土坑		(後) 9.8		密	硬	浅黄橙	坏部一部			タテヘラ ミガキ	タテヘラ ミガキ		有稜 接合方法
55	362	弥生土器	壺	19次		P186		17.0			密	硬	浅黄橙	口縁部 1/5	ヨコナデ	ヨコナデ				垂下口縁
56	183	土師器	壺	19次		SH19001	北東	14.1			密細礫多	硬	橙	口縁部 ほぼ完形	ヨコナデ ヨコハケ	ヨコナデ タテハケ	ヨコハケ	タテハケ		磨滅 小型
57	149	土師器	鍋	19次		SH19001	北東	14.8			やや粗	硬	灰白	口縁部 1/12	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコハケ	ヨコナデ		南伊勢系 小型 折り返し
58	176	土師器	鍋	19次		SH19001	北東	23.4			やや粗	硬	灰白	口縁部 1/3	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ		南伊勢系 中型 折り返し
59	442	弥生土器	甕	19次		SH19057	上層	16.4			密	硬	にぶい黄橙	口縁部 1/10	ヨコナデ	ヨコナデ				くの字
60	440	弥生土器	壺	19次		SH19057	周壁溝	11.8			密	硬	浅黄	口縁部 1/9		ヨコナデ				磨滅 薄手
61	234	弥生土器	壺	19次		SH19057	土坑上層	17.4			密	硬	にぶい橙	口縁部 1/3	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ		
62	159	弥生土器	壺	19次		SH19057	土坑中層	18.2			やや粗細礫多	硬	にぶい黄橙	口縁部 1/9	ヨコナデ	ヨコナデ				垂下口縁
63	160	弥生土器	壺	19次		SH19057	土坑中層		3.0		密細礫多	硬	橙	底部完形			タテヘラ ミガキ	ヨコナデ		小型 丁寧 精緻
64	246	弥生土器	高环	19次		SH19057	土坑下層				密	硬	浅黄橙				絞り	タテヘラ ミガキ		
65	439	弥生土器	甕	19次		SH19014		11.2			密	硬	にぶい黄橙	頸部 1/6	ヨコナデ	ヨコナデ		ヨコハケ		受け口
66	144	弥生土器	甕	19次		SH19014	北東	15.2			密	硬	(内) 浅黄橙 (外) 黒褐	口縁部 1/12	ヨコナデ	ヨコナデ				受け口
67	153	弥生土器	甕	19次		SH19014	土坑		8.6		粗細礫多	並	橙	口縁部 ほぼ完形			タテハケ	ヨコナデ		
68	161	弥生土器	甕	19次		SH19014	土坑	18.2			密	やや軟	にぶい黄橙	口縁部 1/12	ヨコナデ			ナナムハケ		受け口 磨滅 薄手
69	205	弥生土器	甕	19次		SH19014	土坑	13.0			密細礫多	硬	にぶい黄橙	口縁部 1/12	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ナナムハケ	○刺突文	受け口 磨滅 薄手
70	410	弥生土器	甕	19次		SH19014	土坑	(頸) 10.0			やや粗細礫多	硬	浅黄橙	頸部 1/6	ヨコナデ			タテハケ		磨滅 小型
71	290	弥生土器	甕	19次		SH19014	土坑	15.6			密細礫多	硬	橙	口縁部 1/4			ヨコハケ	ナナムハケ		くの字 磨滅
72	438	弥生土器	鉢	19次		SH19014	土坑	12.4			密	硬	浅黄橙	口縁部 1/12						磨滅 小型
73	148	弥生土器	壺	19次		SH19014	土坑		5.2		やや粗細礫多	硬	浅黄橙	底部完形			ヨコハケ	ナナムハケ		上げ底 磨滅
74	292	弥生土器	高环	19次		SH19014	土坑		8.7		密	硬	橙	脚部完形			ヨコナデ	タテヘラ ミガキ ヨコナデ		
75	152	弥生土器	甕	19次		SH19053	土坑	6.2			密細礫多	並	にぶい黄橙	台部完形			ヨコナデ	タテヘラ ミガキ		小型 精緻
76	151	弥生土器	甕	19次		SH19053	土坑	8.6			やや粗細礫多	硬	にぶい黄橙	台部完形		ハケ	タテハケ			磨滅 円盤充填
77	150	弥生土器	甕	19次		SH19053	土坑	8.0			密細礫多	硬	浅黄橙	台部完形			ヨコナデ			磨滅 円盤充填
78	206	弥生土器	甕	19次		SH19015	ベルト	12.2			並細礫多	硬	浅黄橙	口縁部 1/10	ヨコナデ		ヨコナデ	ナナムハケ	○刺突文	磨滅 受け口 煤
79	193	弥生土器	高环	19次		SH19015	ベルト		9.2		密	硬	橙	脚部 2/5			ヨコナデ	タテヘラ ミガキ		碗形 円孔 3
80	204	弥生土器	高环	19次		SH19015	北西上層				密	硬	浅黄橙	坏・脚部一部					○櫛描直線文	磨滅 中実
81	291	弥生土器	高环	19次		SH19015	北西上層				密	硬	浅黄橙	脚部一部			ヨコハケ		○櫛描直線文	磨滅 円孔 1 円盤充填
82	188	弥生土器	甕	19次		SH19015	床面直上	16.6			密細礫多	硬	浅黄橙	口縁部 1/3	ヨコナデ	ヨコナデ		ナナムハケ	○刺突文	磨滅 受け口
83	201	弥生土器	高环	19次		SH19015	床面直上	28.6	(後) 24.7		密	硬	浅黄橙	口縁部 1/12	タテヘラ ミガキ		タテヘラ ミガキ			磨滅 有稜
84	203	弥生土器	高环	19次		SH19015	床面直上	26.0	(後) 19.6		密	硬	浅黄橙	口縁部 1/5						磨滅 有稜
85	242	弥生土器	高环	19次		SH19015	床面直上	22.8	12.2 23.9		密	硬	浅黄橙	坏部 4/5・脚部 2/5	タテヘラ ミガキ		ヨコナデ			磨滅 有稜 円孔 3 脚部内湾
86	297	弥生土器	壺	19次		SH19018	TP1	19.2			密	硬	浅黄橙	口縁部 1/6					○刺突文 擬凹線文	磨滅
87	405	弥生土器	壺	19次		SH19018	TP1 周壁溝	19.0			密	硬	浅黄橙	口縁部 1/10	ヨコナデ	ヨコナデ			○凹線文	磨滅
88	299	弥生土器	高环	19次		SH19018	TP3				並細礫多	硬	明黄褐	坏・脚部一部						磨滅 円孔 1
89	441	弥生土器	甕	19次		SH19018	TP3	10.2			密	硬	にぶい黄橙	口縁部 1/8	ヨコナデ	ヨコナデ				くの字
90	443	弥生土器	甕	19次		SH19018	TP3	10.6			密	硬	にぶい黄橙	口縁部 1/8	ヨコヘラ ミガキ	タテヘラ ミガキ				小型 くの字 精緻
91	446	弥生土器	甕	19次		SH19018	TP3	17.4			密細礫多	硬	にぶい黄橙	口縁部 1/10	ヨコナデ	ヨコナデ			○刺突文	くの字
92	309	弥生土器	高环	19次		SH19018	土坑				密	硬	浅黄	坏・脚部一部			ケズリ	タテヘラ ミガキ	○櫛描直線文	磨滅
93	289	弥生土器	壺	19次		P644			4.0		やや粗細礫多	並	橙	底部完形				タテヘラ ミガキ		小型 磨滅 上げ底
94	308	弥生土器	高环	19次		P667					密細礫多	硬	橙	脚部一部					○櫛描直線文	磨滅 円孔 3
95	298	土製品	土鍾	19次		P668		(長) 2.3	(幅) 2.6	(厚) 2.7	密	硬	にぶい黄橙	完形						球形状 円孔貫通



報告 番号	実測 番号	種別	器形	調査 地区	遺構	位置	法量 (cm)			胎土	焼成	色調	残存率	口縁部調整		体部調整		文様	特記事項
							口径	底径	器高					内面	外面	内面	外面		
96	258	弥生土器	高环	19次	SK19033				並	硬	にぶい橙	脚部一部						磨滅 円孔1 残	
97	394	弥生土器	高环	19次	SK19033				やや粗	硬	浅黄橙	脚部 1/3						磨滅	
98	447	土師器	甕	19次	P179			5.8	密 細礫多	硬	にぶい黄橙	底部 1/5				ハケ		金雲母 薄手 S字裏	
99	175	須恵器	环蓋	19次	SH19058	TP2		16.0	密	硬	灰	口縁部 1/8	ロクロナ デ	ロクロナ デ					
100	171	弥生土器	甕	19次	SH19059	TP3 下層		19.8	密	硬	浅黄橙	口縁部 1/8	ヨコナデ					磨滅 受け口	
101	179	弥生土器	壺	19次	SH19060			13.6	密 細礫多	硬	橙	口縁部 1/5	ヨコナデ	ヨコナデ				口縁部内湾	
102	157	弥生土器	壺	19次	SH19060			6.0	粗 細礫多	やや 軟	(内) 褐灰 (外) にぶい橙	底部完形						磨滅 上げ底	
103	164	弥生土器	壺	19次	SH19060			5.2	やや粗	硬	橙	底部 3/4			ナメハ ケ	タテハケ		磨滅 上げ底	
104	170	弥生土器	甕	19次	SH19060			14.4	並 細礫多	硬	にぶい黄橙	口縁部 1/8	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコハケ	タテハケ ナメハ ケ		くの字 磨滅	
105	191	弥生土器	高环	19次	SH19060			(稜) 13.0	密 細礫多	硬	橙	环・ 脚部一部			タテヘラ ミガキ	タテヘラ ミガキ		有稜 円孔 1	
106	158	弥生土器	甕	19次	SH19060			4.8	やや粗 細礫多	やや 軟	(内) 浅黄橙 (外) にぶい黄橙	台部 1/4			ナメハ ケ	ヨコハケ		磨滅 円盤充填	
107	180	弥生土器	甕	19次	SH19060			7.6	粗 細礫多	硬	橙	台部 1/4			ナメハ ケ	タテハケ		磨滅	
108	167	弥生土器	甕	19次	SH19060	ベルト		13.4	密	硬	にぶい黄橙	口縁部 1/5	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコハケ ナメハ ケ	ヨコハケ		受け口	
109	163	弥生土器	壺	19次	SH19060	TP1 上層		(体) 15.0	粗 細礫多	やや 軟	(内) 灰白 (外) 橙	体部 1/4			ヨコナデ	ヨコナデ		磨滅	
110	184	弥生土器	甕	19次	SH19060	TP1 上層		18.0	並 細礫多	硬	にぶい橙	口縁部 1/12	ヨコナデ	ヨコナデ				くの字	
111	165	弥生土器	甕	19次	SH19060	TP1 下層		20.0	粗 細礫多	硬	にぶい橙	口縁部 1/6	ヨコナデ	ヨコナデ				くの字 磨滅	
112	166	弥生土器	甕	19次	SH19060	TP2		8.4	やや粗 細礫多	硬	にぶい橙	台部 1/3						磨滅	
113	168	弥生土器	壺	19次	SH19060	TP2		4.4	やや粗 細礫多	硬	灰白	底部完形						磨滅	
114	181	弥生土器	壺	19次	SH19060	TP2 上層		15.2	やや粗 細礫多	硬	橙	口縁部 1/5	ヨコハケ	ヨコナデ				磨滅 垂下口縁	
115	187	弥生土器	壺	19次	SH19060	TP2 上層		16.0	並	硬	浅黄橙	口縁部 1/10	ヨコナデ	ヨコナデ					
116	189	弥生土器	壺	19次	SH19060	TP2 上層		14.8	密	硬	浅黄橙	口縁部 1/6	ヨコナデ	ヨコナデ					
117	162	弥生土器	壺	19次	SH19060	TP2 上層		4.0	やや粗 細礫多	硬	(内) 褐灰 (外) 淡黄	底部完形			ヨコナデ			磨滅 小型 上げ底	
118	177	弥生土器	壺	19次	SH19060	TP2 上層		7.0	密 細礫多	硬	灰白	底部 1/2						磨滅 上げ底	
119	182	弥生土器	壺	19次	SH19060	TP2 上層		7.2	密 細礫多	硬	黒褐	底部完形			タテハケ	ヨコハケ		磨滅	
120	185	弥生土器	壺	19次	SH19060	TP2 上層		4.0	並 細礫多	硬	灰黄	底部完形			ナメハ ケ			磨滅 小型	
121	245	弥生土器	甕	19次	SH19060	TP2 上層		16.0	やや粗 細礫多	並	浅黄橙	口縁部 1/6	ヨコナデ	ヨコナデ	タテハケ ナメハ ケ			磨滅	
122	403	弥生土器	高环	19次	SH19060	TP2 床面直上			密 細礫多	硬	橙	脚部一部						○櫛描直 線文	
123	172	弥生土器	壺	19次	SH19060	TP3 上層		13.7	密	硬	浅黄橙	口縁部 1/6	ヨコナデ	ヨコナデ				磨滅 円孔 1 垂下口縁	
124	186	弥生土器	甕	19次	SH19060	TP3 下層		3.6	密 細礫多	硬	灰白	台部 3/5			タテハケ			磨滅 ミニチュア 丁寧 薄手	
125	228	弥生土器	高环	19次	SH19060	TP4 上層			密	硬	橙	环・ 脚部一部			タテヘラ ミガキ			円孔 3 削り痕	
126	194	弥生土器	甕	19次	SH19060	TP4 床面直上		7.0	並 細礫多	硬	にぶい黄橙	台部 1/8						円盤充填	
127	402	弥生土器	高环	19次	SH19060	TP4 床面直上			密 細礫多	硬	橙	脚部 1/2						磨滅 円孔 1	
128	173	土師器	皿	19次	SH19060	TP2 上層		13.7	10.0	3.0	密	硬	橙	口縁部 1/10	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	コビオサ エ	ヨコナデ強い
129	314	弥生土器	高环	19次	P516				並 細礫多	並	浅黄橙	脚部一部			絞			円孔 3	
130	347	弥生土器	甕	19次	P359			17.6	密	硬	浅黄橙	口縁部 1/10	ヨコナデ	ヨコナデ				受け口	
131	294	弥生土器	高环	19次	SX19002	サブトレンチ北		11.8	密	硬	橙	脚部一部			ヨコハケ	タテヘラ ミガキ		磨滅 円孔 3	
132	178	弥生土器	高环	19次	SX19013			10.8	密	硬	浅黄橙	脚部 1/6			タテヘラ ミガキ			磨滅 円孔 3 脚部内湾	
133	295	弥生土器	甕	19次	SX19013	TP2 上層		4.4	密 細礫多	並	浅黄橙	底部 1/3			ヨコハケ	ナメタ タキ ヨコタ タキ		小型	
134	198	弥生土器	甕	19次	SX19013	TP3 上層		9.4	4.4	9.9	密 細礫多	硬	浅黄橙	口縁部 1/8	ヨコナデ	ヨコナデ	タテハケ ナメハ ケ		小型
135	397	弥生土器	甕	19次	SX19013	TP3 上層		9.0	密	硬	にぶい黄橙	口縁部 1/5	ヨコナデ	ヨコナデ	タテハケ			小型	
136	202	弥生土器	高环	19次	SX19013	TP3 上層		24.8	密	硬	橙	口縁部 1/12	ヨコナデ	タテヘラ ミガキ				磨滅 有稜	
137	425	縄文土器	深鉢	19次	SX19013	TP3 上層			粗 細礫多	硬	にぶい黄橙	底部一部			ケズリ			磨滅 尖底 小振り	

報告番号	実測番号	種別	器形	調査地区	遺構	位置	法量 (cm)			胎土	焼成	色調	残存率	口縁部調整		体部調整		文様	特記事項		
							口径	底径	器高					内面	外面	内面	外面				
138	584	弥生土器	壺	22次	1区	SX22015				密 細礫多	硬	にぶい橙	口縁部 3/4	ヨコハケ ヨコナデ	ヨコナデ		タテハラ ナナメハ ケ	○凸帯文 刺突文	広口壺 磨滅		
139	620	弥生土器	甕	22次	1区	SX22015				並	硬	にぶい黄橙	口縁 体部一部	ヨコナデ	ヨコナデ		タテハラ		磨滅 くの字 小型 薄手		
140	635	弥生土器	壺	22次	1区	SX22015			(頸) 16.3			密 細礫多	硬	にぶい黄橙	体部 3/5		ヨコハケ ヨコハケ ナナメハ ケ		磨滅 上げ底		
141	583	弥生土器	高坏	22次	1区	P124			17.2			密	硬	暗灰黄	口縁部 1/12	ヨコナデ	ヨコナデ	タテハラ ミガキ	タテハラ ミガキ	有稜 金雲母	
142	634	弥生土器	甕	22次	1区	P124			27.2			密 細礫多	硬	灰黄褐	口縁部 1/2	ヨコハケ	ヨコハケ	ヨコハケ ハケ	ヨコハケ ハケ	くの字 円盤充填	
143	363	弥生土器	器台	19次		SD19116	上層					密	硬	黄橙	脚部一部		絞り		○櫛描 直線文	磨滅 円孔 1 穿孔	
144	302	弥生土器	高坏	19次		SD19116	下層					密 細礫多	硬	浅黄橙	脚部一部		ヨコハケ 絞り	タテハラ ミガキ		磨滅 円孔 3	
145	516	弥生土器	甕	22次	2区	SD22002	TP1 上層		13.6			密	硬	浅黄橙	口縁部 1/8	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコハケ		○刺突文	磨滅 受け口
146	561	弥生土器	甕	22次	2区	SD22002	TP1 下層		22.8			密 細礫多	硬	浅黄橙	頸部 1/10	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコハケ	タテハラ		
147	571	弥生土器	甕	22次	2区	SD22002	TP1 下層		20.0			密	硬	浅黄橙	口縁部 1/16	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコハケ	タテハラ	○刺突文	受け口
148	514	弥生土器	甕	22次	2区	SD22002	TP3		12.2			密 細礫多	硬	浅黄橙	口縁部 1/8					磨滅 受け口 小型	
149	528	弥生土器	甕	22次	2区	SD22002	TP3		20.6			密 細礫多	硬	灰白	口縁部 1/9					磨滅 くの字	
150	539	弥生土器	甕	22次	2区	SD22002	TP3		24.2			密 細礫多	硬	にぶい黄橙	口縁部 1/10		タテハラ ミガキ			磨滅	
151	590	弥生土器	甕	22次	2区	SD22002	TP3		16.4			密 細礫多	軟	にぶい黄橙	頸部 1/6					磨滅 くの字	
152	570	弥生土器	甕	22次	2区	SD22002	TP3		(頸) 3.6			密	硬	橙	頸部 1/4			ユビオサ エ		磨滅 小型 接合痕	
153	527	弥生土器	甕	22次	2区	SD22002	TP3			7.0		密 細礫多	硬	橙	台部 1/5				タテハラ	磨滅	
154	511	弥生土器	壺	22次	2区	SD22002	TP3		14.2			密	硬	浅黄橙	口縁部 1/6					○刺突 羽状文	磨滅
155	526	弥生土器	壺	22次	2区	SD22002	TP3			6.4		密	硬	にぶい黄橙	底部 1/2			ハケ		磨滅 ハケ密 上げ底	
156	510	弥生土器	高坏	22次	2区	SD22002	TP3					密	硬	橙	坏部一部	タテハラ ミガキ	タテハラ ミガキ			有稜	
157	509	弥生土器	高坏	22次	2区	SD22002	TP3					密	硬	淡黄	坏部一部					磨滅 小型	
158	505	弥生土器	高坏	22次	2区	SD22002	TP3					密	硬	にぶい黄橙	脚部一部					磨滅 ミニチュア	
159	538	弥生土器	高坏	22次	2区	SD22002	TP3					密	硬	にぶい黄橙	脚部一部		絞り	タテハラ ミガキ		棒状刺突	
160	543	弥生土器	高坏	22次	2区	SD22002	TP3					密 細礫多	硬	浅黄橙	脚部一部		絞り			磨滅 円孔	
161	544	弥生土器	器台	22次	2区	SD22002	TP3					密 細礫多	硬	浅黄橙	脚部一部		絞り	タテハラ ミガキ		磨滅 円孔 3 穿孔	
162	576	土製品	土鉢	22次	2区	SD22002	TP3	(長) (4.9)	(幅) 1.5	(厚) 1.6		密	硬	にぶい黄橙	一部					棒状 円孔貫通	
163	574	弥生土器	高坏	22次	2区	SD22002	TP3 底面直上		17.3			密 細礫多	硬	黄橙	口縁部 1/3	ヨコナデ	ヨコナデ	タテハラ ミガキ	タテハラ ミガキ	椀形	
164	457	縄文土器	深鉢	19次		SD19115						やや粗 細礫多	硬	灰黄	体・ 底部一部		ケズリ	ケズリ		金雲母	
165	597	縄文土器	深鉢	22次	2区	SD22002	TP1 上層					粗 細礫多	硬	にぶい黄橙	口縁部一部		ナデ			○凸帯文	金雲母 キザミ
166	605	縄文土器	深鉢	22次	2区	SD22002	TP1 上層					やや粗 細礫多	硬	浅黄橙	口縁部一部	ナデ	ナデ			○凸帯文	素文
167	515	須恵器	坏	22次	2区	SD22002	TP1 上層		7.4			密	硬	灰黄	底部 3/5			ロクロナ デ	ロクロナ デ ヘラ切り	貼付高台 自然軸	
168	601	縄文土器	深鉢	22次	2区	SD22002	TP3					粗 細礫多	硬	にぶい黄橙	口縁部一部		ナデ			○凸帯文	素文
169	611	縄文土器	深鉢	22次	2区	SD22002	TP3					粗 細礫多	硬	灰黄褐	口縁・ 体部一部	ケズリ	条痕	ケズリ	条痕		キザミ
170	606	縄文土器	深鉢	22次	2区	SD22002	TP3					粗 細礫多	硬	橙	体部一部					○沈線文	
171	607	縄文土器	深鉢?	22次	2区	SD22002	TP3					やや粗 細礫多	硬	浅黄橙	口縁部? 一部					○凸帯文	素文
172	512	弥生土器	高坏	22次	2区	SD22002	TP3		9.0			密	硬	にぶい黄橙	口縁部 1/4	ヨコナデ	ヨコナデ			ワイングラス形 薄手	
173	545	弥生土器	高坏	22次	2区	SD22002	TP3		20.4	(稜) 17.2		密	硬	浅黄橙	口縁部 1/6	タテハラ ミガキ	タテハラ ミガキ	タテハラ ミガキ		磨滅 有稜 稜明瞭	
174	602	縄文土器	深鉢	22次	2区	SD22002	TP4					粗 細礫多	硬	浅黄橙	口縁部一部		ナデ			○凸帯文	素文
175	416	弥生土器	高坏	19次		SD19004	サブトレンチ南					密 細礫多	硬	橙	坏・ 脚部一部					○櫛描 直線文	磨滅 円孔 1 厚手
176	199	弥生土器	甕	19次		SD19004	TP2 上層		13.2			密	硬	にぶい黄橙	口縁部 1/10	ヨコナデ	ヨコナデ			くの字	
177	412	弥生土器	高坏	19次		SD19004	TP2 下層					密	硬	浅黄橙	坏・ 脚部一部		絞り		○櫛描 直線文	磨滅 絞り痕密	
178	485	弥生土器	甕	19次		SD19004	TP3 上層					密	硬	にぶい黄橙	口縁部一部	ヨコナデ	ヨコナデ			受け口	
179	413	弥生土器	高坏	19次		SD19004	TP3 上層					密 細礫多	硬	にぶい黄橙	坏・ 脚部一部		絞り			磨滅 円孔 1	
180	195	土師器	皿	19次		SD19004	上層		13.4	9.4		密	硬	浅黄橙	口縁部 1/6	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ			
181	256	黒色土器	椀	19次		SD19004	TP2 上層		14.6			密	硬	(内) 黒 (外) 橙	口縁部 1/12	ミガキ				内面黒化 ミガキ密	

報告 番号	実測 番号	種別	器形	調査 地区	遺構	位置	法量 (cm)			胎土	焼成	色調	残存率	口縁部調整		体部調整		文様	特記事項			
							口径	底径	器高					内面	外面	内面	外面					
182	200	須恵器	坏	19次		SD19004	TP2 上層	12.1	8.2		密	硬	黄灰	口縁部 1/5	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ				
183	197	須恵器	坏蓋	19次		SD19004	TP3 上層	15.8	10.8	3.3	密	硬	褐灰	口縁部 1/16	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	内傾面 凹線		
184	196	土師器	皿	19次		SD19004	TP3 上層	12.2	8.4		密	硬	浅黄橙	口縁部 1/7	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ					
185	225	山皿		19次		SD19004	TP4 上層	8.6	5.0	2.4	粗 細多	硬	灰白	口縁部 3/5	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		底面墨書「上上」?		
186	123	弥生土器	壺	19次		SK19066		11.0			密	硬	橙	口縁部 1/6	ヨコハク タテハラ ミガキ	タテハラ ミガキ	タテハラ ミガキ	タテハラ ミガキ		小型 口縁部内湾		
187	396	弥生土器	高坏	19次		SX19041					やや粗	硬	浅黄橙	脚部一部				絞り		磨減		
188	122	弥生土器	甕	19次		SK19062			6.0		密	硬	褐灰	台部 1/2						磨減 黒変		
189	361	弥生土器	高坏	19次		SX19063					密	硬	にぶい黄橙	脚部一部						○櫛描 直線文	中実	
190	395	弥生土器	高坏	19次		SD19070					密	硬	浅黄	脚部一部				絞り	タテハラ ミガキ			
191	255	弥生土器	高坏	19次		SK19109					密	硬	浅黄	坏・ 脚部一部					タテハラ ミガキ		磨減 小型	
192	401	弥生土器	壺	19次		P150		9.4	3.8	10.1	密	硬	黄橙	ほぼ完形	ヨコナデ	ヨコナデ			タテハケ		磨減 小型 上げ底	
193	330	弥生土器	甕	19次		P274			8.3		密	硬	浅黄橙	底部完形				ヨコハケ	タテハケ		磨減	
194	319	弥生土器	甕	19次		P288			6.4		やや粗 細多	硬	橙	底部 1/2							円盤充填	
195	472	弥生土器	甕	19次		P398					密	硬	黒褐	口縁部一部	ヨコナデ	ヨコナデ					受け口 黒変	
196	322	弥生土器	壺	19次		P454		17.4			密	硬	浅黄橙	口縁部 1/7							○刺突文 垂下口縁	
197	324	弥生土器	高坏	19次		P550					密	硬	浅黄橙	脚部一部							○櫛描 直線文	円孔 3
198	556	弥生土器	壺	22次 1区		P25			4.0		密	硬	橙	底部 3/5							小型 上げ底	
199	551	弥生土器	壺	22次 2区		P29		19.6			密	硬	浅黄橙	口縁部 1/8							磨減 垂下口縁	
200	554	弥生土器	甕	22次 2区		P29		18.2			密	硬	にぶい黄橙	口縁部 1/14	ヨコナデ	ヨコナデ					○刺突文	くの字
201	555	弥生土器	甕	22次 2区		P29		16.8			密	硬	にぶい黄橙	口縁部 1/10	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコハケ	タテハケ			○刺突文	くの字
202	560	弥生土器	高坏	22次 2区		P101			20.8		密	硬	にぶい黄橙	脚部 1/12					タテハラ ミガキ		磨減	
203	350	土師器	甕	19次		P100		23.4			並 細多	硬	にぶい黄橙	口縁部 1/10	ヨコナデ	ヨコナデ						
204	369	土師器	甕	19次		P100					密	硬	にぶい黄橙	口縁部一部	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコハケ	ヨコナデ				
205	333	黒色土器	椀	19次		P401		15.0	8.2	4.0	密	硬	(内) 黒褐 (外) 橙	口縁部 1/3	ミガキ	回転ヨコ ナデ	回転ヨコ ナデ				内面黒化 ミガキ密	
206	572	灰釉陶器	椀	22次 2区		P40					密	硬	(素) 灰白 (釉) 灰オリーブ	口縁部一部	ロクロナ デ	ロクロナ デ					施釉	
207	552	土師器	甕	22次 2区		P50		17.2			密	硬	にぶい黄橙	口縁部 1/8	ヨコナデ	ヨコナデ						
208	553	土師器	甕	22次 2区		P50		23.2			密	硬	にぶい黄橙	口縁部 1/16	ヨコナデ	ヨコナデ						
209	558	土師器	坏	22次 2区		P53		13.2	9.4	3.5	密 細多	硬	橙	口縁部 1/3	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ユビオサ エ		薄手 底部歪み	
210	623	土師器	甕	22次 1区		SD22021					密	硬	にぶい黄橙	口縁部一部	ヨコナデ	ヨコナデ					清癪型	
211	550	須恵器	坏	22次 1区		SX22005		16.0	11.6	3.6	密 細多	硬	灰	口縁部 1/4	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ			貼付高台 底部歪み	
212	435	土師器	甕	19次		SK19073					密 細多	硬	にぶい黄橙	体部 1/4			ヨコハケ ナメハ ケ	タテハケ ヨコハラ ケズリ			磨減	
213	407	土師器	甕	19次		SK19073		(頸) 19.6			密 細多	硬	浅黄橙	頸部 1/8		ヨコナデ	ヨコハケ	タテハケ			磨減 ハケ粗い	
214	244	土師器	甕	19次		SK19073		14.3	7.3	15.2	密 細多	硬	にぶい黄橙	口縁部 ほぼ完形	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコハケ	タテハケ			磨減 ハケ粗い 上げ底	
215	243	土師器	甕	19次		SK19073		30.8			密 細多	硬	にぶい黄橙	口縁部 1/10	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコハケ	タテハケ			磨減 ハケ粗い	
216	169	土師器	甕	19次		SK19073		15.6			密 細多	硬	橙	口縁部 4/5	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコハケ ナメハ ケ	タテハケ			ハケ粗い	
217	124	土師器	坏	19次		SK19073	西半	12.0	8.4	3.8	やや粗 細多	並	にぶい黄橙	口縁部 1/8	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ				
218	208	土師器	甕	19次		SX19074		24.0			密 細多	硬	浅黄橙	口縁部 1/6	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコハケ	ナメハ ケ			磨減	
219	247	土師器	甕	19次		SX19074		20.6			密 細多	硬	にぶい黄橙	口縁部 1/4	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコハケ	タテハケ			体部薄手	
220	248	土師器	甕	19次		SX19074		25.2			密 細多	硬	灰褐	口縁部 1/12	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコハケ				口縁部外反	
221	235	土師器	甕	19次		SX19074			11.0		並 細多	硬	にぶい橙	底部 1/3			ヨコハケ ヨコハラ ケズリ	タテハケ ヨコハラ ケズリ			円筒状	

報告 番号	実測 番号	種別	器形	調査	地区	遺構	位置	法量 (cm)			胎土	焼成	色調	残存率	口縁部調整		体部調整		文様	特記事項	
								口径	底径	器高					内面	外面	内面	外面			
222	436	土師器	甕	19次		SX19017		26.2		16.2	密	硬	にぶい黄橙	口縁部 ほぼ完形	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ ヨコハケ	ヨコハケ タテハケ ナナメハ ケ ヨコハラ ケズリ		把手 金雲母 ハケ密	
223	424	土師器	甕	19次		SX19017					密 細礫多	硬	橙	体部一部			ヨコハラ ケズリ	タテハケ ナナメハ ケ			
224	315	土師器	甕	19次		SX19017		22.0			密	硬	浅黄橙	口縁部 1/2	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコハケ ナナメハ ケ	タテハケ ナナメハ ケ		ハケ細かい	
225	431	土師器	甕	19次		SX19017					密 細礫多	硬	浅黄橙	体部一部				タテハケ		磨滅 把手 円筒状	
226	419	須恵器	壺	19次		SX19017					密	硬	褐灰	底部 1/5			ロクロナ デ	ロクロナ デ ハラ切り			
227	316	土師器	甕	19次		SX19017		16.0			密 細礫多	硬	橙	口縁部 1/5	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコハケ			磨滅	
228	326	須恵器	長頸瓶	19次		SX19017	上層		6.4		密	硬	灰白	底部 1/3	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ ハラ切り		凹線	
229	365	土師器	甕	19次		SX19017	上層		7.2		並 細礫多	硬	浅黄橙	底部完形			ヨコハケ	タテハケ		磨滅 丸底 煤	
230	311	土師器	甕	19次		SX19017	下層	17.0			並	硬	浅黄橙	口縁部 1/10	ヨコナデ	ヨコナデ					
231	366	土師器	高坏	19次		SX19017	下層	18.8			密	硬	浅黄橙	口縁部 1/7	ヨコナデ	ヨコナデ		ヨコハケ		皿状	
232	420	土製品	紡錘車	19次		SX19017	下層	(長) 3.5	(幅) 3.5	(厚) 1.2	密 細礫多	硬	褐灰	完形						円孔貫通 窪み	
233	313	土師器	甕	19次		SX19017	サブトレンチ	19.2			密 細礫多	硬	橙	口縁部 2/3	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコハケ	タテハケ			
234	444	須恵器	提瓶	19次		SX19017	サブトレンチ				密	硬	褐灰	肩部 1/8			ロクロナ デ	ロクロナ デ		耳 体部球形	
235	303	弥生土器	壺	19次		SX19017	上層		5.6		密 細礫多	硬	浅黄橙	底部 1/2						小型 上げ底	
236	304	弥生土器	高坏	19次		SX19017	上層				密	硬	橙	脚部一部			絞り		○柳描 直線文	磨滅 絞り痕密	
237	310	弥生土器	甕	19次		SX19017	上層	16.8			密 細礫多	硬	にぶい黄橙	口縁部 1/10			ヨコナデ			磨滅 受け口	
238	473	弥生土器	高坏	19次		SX19017	上層				密	硬	(内) 橙 (外) 褐灰	口縁部一部	タテハラ ミガキ	タテハラ ミガキ				磨滅 有稜	
239	174	須恵器	坏	19次		SX19035			11.0		密	硬	灰	底部 1/5			ロクロナ デ	ロクロナ デ ハラ切り		貼付高台	
240	296	土師器	甕	19次		SX19035		15.6	8.6	15.8	密	硬	にぶい黄橙	口縁部 2/3	ヨコナデ	ヨコナデ	タテハラ ミガキ	タテハラ ミガキ		磨滅 平底 体部球形	
241	210	土師器	甕	19次		SX19035		12.8			密 細礫多	硬	にぶい黄橙	口縁部 1/4	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	タテハケ		磨滅	
242	211	土師器	甕	19次		SX19035		12.0			密	硬	にぶい黄橙	口縁部 1/4	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ			
243	236	土師器	甕	19次		SX19035		13.0			並	硬	にぶい黄橙	口縁部 1/10	ヨコナデ	ヨコナデ		タテハケ		磨滅	
244	240	土師器	甕	19次		SX19035		26.6			密	硬	にぶい橙	口縁部 1/14	ヨコナデ	ヨコナデ					
245	406	土師器	甕	19次		SX19035		(頸) 18.2			密 細礫多	硬	橙	頸部 1/5	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコハケ	タテハケ		ハケ粗い	
246	239	黒色土器	椀	19次		SX19035		15.0			密	硬	(内) 黒褐 (外) 黄橙	口縁部 1/6	ミガキ	回転ヨコ ナデ	回転ヨコ ナデ	ミガキ		内面黒化	
247	249	黒色土器	椀	19次		SX19035		15.6	9.6	3.8	密	硬	(内) 黒褐 (外) 橙	口縁部 1/12	ミガキ	回転ヨコ ナデ	ミガキ	回転ヨコ ナデ	回転ヨコ ナデ	内面黒化 無高台 ミガキ密	
248	254	黒色土器	椀	19次		SX19035					密	硬	(内) 黒 (外) にぶい黄橙	口縁・ 体部一部	ミガキ	回転ヨコ ナデ	ミガキ	回転ヨコ ナデ	内面黒化		
249	237	土師器	坏	19次		SX19035		12.2			並	硬	橙	口縁部 1/6	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ			
250	209	土師器	皿	19次		SX19035		19.0	14.4	2.4	やや粗 密	硬	黄橙	口縁部 1/9	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ		ヨコナデ強い	
251	238	土師器	皿	19次		SX19035		16.2	14.6	1.8	密 細礫多	硬	橙	口縁部 1/4	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ヨコハケ	タテハケ	金雲母	
252	417	土師器	甕	19次		P142					密 細礫多	硬	にぶい黄橙	底部 ほぼ完形			ヨコハケ	タテハケ		丸底 ハケ密	
253	408	土師器	甕	19次		P142		(頸) 16.6			密 細礫多	硬	にぶい黄橙	頸部 1/7	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコハケ	タテハケ		ヨコハケ細かい	
254	346	土師器	甕	19次		P142		26.4			密 細礫多	硬	浅黄橙	口縁部 1/6	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコハケ	タテハケ			
255	352	土師器	甕	19次		P142		14.0			並	硬	にぶい黄橙	口縁部 1/4	ヨコナデ	ヨコナデ		タテハケ		磨滅	
256	344	土師器	坏	19次		P142		13.0	8.5	3.2	密 細礫多	硬	浅黄橙	口縁部 2/3	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ヨコハケ		
257	342	土師器	高坏	19次		P142		23.0			並 細礫多	硬	橙	口縁部 1/6	ヨコナデ	ヨコナデ					
258	371	須恵器	壺	19次		P142		9.2	5.8	8.4	密	硬	褐灰	口縁部 1/3	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ ハラ切り		小型 自然釉	
259	341	土師器	甕	19次		P266		27.0			密	硬	にぶい黄橙	口縁部 1/3	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコハケ	タテハケ		ハケ粗い	
260	351	土師器	甕	19次		P266		15.0			密 細礫多	硬	にぶい黄橙	口縁部 1/4	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコハケ	タテハケ		磨滅 ハケ粗い	
261	387	土師器	甕	19次		P266		(頸) 22.2			密	硬	にぶい黄橙	頸部 1/16			ヨコハケ	タテハケ		タテハケ粗い ヨコハケ細かい	

報告 番号	実測 番号	種別	器形	調査 地区	遺構	位置	法量 (cm)			胎土	焼成	色調	残存率	口縁部調整		体部調整		文様	特記事項	
							口径	底径	器高					内面	外面	内面	外面			
262	340	土師器	裏	19次	P266		25.0			密	硬	にぶい黄橙	口縁部 1/6	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコハケ	タテハケ		ハケ粗い	
263	329	土師器	坏	19次	P266		10.0	7.0	3.0	密	硬	にぶい橙	口縁部 1/7	ヨコナデ	ヨコナデ				磨滅	
264	380	須恵器	器	坏	19次	P266		10.4		密	硬	にぶい褐	底部 1/4			ロクロナ デ	ロクロナ デ			
265	318	土師器	裏	19次	P342		12.7	5.6	10.0	密	硬	にぶい黄橙	口縁部 4/5	ヨコナデ	ヨコナデ		タテハケ		磨滅 やや歪み 煤	
266	385	土師器	坏	19次	P342		13.0	8.4	3.0	密	硬	浅黄橙	口縁部 2/3	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ ユビオサ エ			
267	378	土師器	坏	19次	P342		13.8	9.6	3.5	密	硬	橙	口縁部 1/8	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ ユビオサ エ			
268	331	土師器	坏	19次	P342		12.2	7.8	3.6	密	硬	橙	口縁部 1/2	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ ユビオサ エ			
269	317	土師器	坏	19次	P342		12.4	8.7	3.1	密	硬	橙	口縁部 3/4	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ ユビオサ エ			
270	332	土師器	坏	19次	P342		12.5	6.0	3.3	密	硬	にぶい黄橙	口縁部 4/5	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ ユビオサ エ			
271	386	土師器	坏	19次	P342		13.2	9.9	3.7	密	硬	橙	ほぼ完形	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ ユビオサ エ			
272	328	黒色土器	椀	19次	P342		15.4			密	硬	(内) 黒 (外) にぶい橙	口縁部 1/14	ミガキ	回転ヨコ ナデ	ミガキ	回転ヨコ ナデ	内面黒化 ミガキ密		
273	409	黒色土器	椀	19次	P342		14.8	9.0	3.9	密	硬	(内) 黒 (外) 橙	ほぼ完形	ミガキ	回転ヨコ ナデ	ミガキ	回転ヨコ ナデ	内面黒化 ミガキ密 平底		
274	335	黒色土器	椀	19次	P342		15.6			密	硬	(内) 黒褐 (外) にぶい橙	口縁部 1/12	ミガキ	回転ヨコ ナデ	ミガキ	回転ヨコ ナデ	内面黒化		
275	379	土師器	坏	19次	P342					密	硬	橙	口縁部一部	ヨコナデ	ヨコナデ					
276	434	土師器	裏	19次	P461		28.4			密 細礫多	硬	浅黄橙	頸部 1/9	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	タテハケ ナメハ ケ		把手 煤 ハケ細かい	
277	307	須恵器	坏	19次	P461		12.2	8.6	(推) 6.8	密	硬	灰	口縁部 1/5	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ			
278	370	須恵器	面内碗	19次	P315			17.0		密	硬	灰	脚部 1/14			ロクロナ デ	ロクロナ デ		小型 方孔 1 残	
279	305	土師器	裏	19次	SD19122	上層	21.0			密	硬	にぶい黄橙	口縁部 1/16	ヨコナデ	ヨコナデ					
280	364	土製品	土錘	19次	SD19122	下層	(長) 4.7	(幅) 1.6	(厚) 1.4	密	硬	にぶい黄橙	完形						棒状 円孔貫通 胎土粘着	
281	548	黒色土器	椀	22次	2区	SK22010				密	硬	(内) 黒 (外) にぶい黄橙	底部一部			ミガキ	回転ヨコ ナデ	貼付高台 内面黒化		
282	523	土師器	坏	22次	2区	SD22001	上層	11.2	7.4	3.6	密	硬	浅黄橙	口縁部 1/4	ヨコナデ	ヨコナデ			磨滅	
283	578	土師器	皿	22次	2区	SD22001	上層			密	硬	黄橙	口縁部一部	ヨコナデ	ヨコナデ					
284	519	土師器	裏	22次	2区	SD22001	上層	26.2		密	硬	にぶい黄橙	口縁部 1/16	ヨコナデ	ヨコハケ				磨滅	
285	525	土師器	裏	22次	2区	SD22001	上層	15.8		密	硬	にぶい黄橙	口縁部 1/8	ヨコナデ	ヨコナデ					
286	524	土師器	裏	22次	2区	SD22001	上層	20.4		密 細礫多	硬	にぶい黄橙	口縁部 1/6	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコハケ				
287	536	土師器	裏	22次	2区	SD22001	上層	17.8		密	硬	浅黄橙	口縁部 1/9	ヨコナデ	ヨコナデ		タテハケ			
288	587	土師器	裏	22次	2区	SD22001	上層	12.6		密	硬	にぶい黄橙	口縁部 1/12						磨滅	
289	521	土師器	裏	22次	2区	SD22001	上層	17.8		密 細礫多	硬	にぶい黄橙	口縁部 1/16	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコハケ	タテハケ		磨滅	
290	577	土師器	裏	22次	2区	SD22001	上層	20.0		密 細礫多	硬	黄橙	口縁部 2/5	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコハケ タテハケ	タテハケ		磨滅	
291	582	土師器	裏	22次	2区	SD22001	上層	20.2		密	硬	橙	口縁部 1/5	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコハケ	ナメハ ケ			
292	579	土師器	裏	22次	2区	SD22001	上層			密 細礫多	硬	黄橙	口縁部一部	ヨコナデ	ヨコナデ					
293	537	須恵器	高坏	22次	2区	SD22001	上層			密	硬	褐灰	脚部一部			ロクロナ デ	ロクロナ デ			
294	540	須恵器	高坏	22次	2区	SD22001	上層			密	硬	灰白	脚部一部			ロクロナ デ	ロクロナ デ			
295	563	須恵器	环蓋	22次	2区	SD22001	上層			密	硬	灰	口縁部 1/5	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		宝珠揃み カエリ	
296	564	須恵器	环蓋	22次	2区	SD22001	上層	9.6		密	硬	灰	口縁部 1/6	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		揃み剥落	
297	520	須恵器	坏	22次	2区	SD22001	上層	10.2	6.2	3.4	密	硬	褐灰	口縁部 1/4	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		小型
298	566	須恵器	坏	22次	2区	SD22001	上層	10.4		(推) 3.6	密	硬	灰	口縁部 1/8	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		
299	533	土師器	裏	22次	2区	SD22001	中層	11.0		密	硬	にぶい黄橙	口縁部 1/5	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコハケ	タテハケ		ハケ細かい 小型	
300	589	須恵器	裏	22次	2区	SD22001	中層	22.0		密	並	褐灰	頸部 1/6	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ 同心円 タキ	平行タ タキ		頸部屈曲強い 垂下口縁	
301	531	須恵器	环蓋	22次	2区	SD22001	中層	12.0		密	硬	灰	口縁部 2/5	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		揃み・カエリ剥落	
302	567	須恵器	环蓋	22次	2区	SD22001	中層	11.0	6.6	3.9	密	硬	灰	口縁部一部	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		
303	580	須恵器	环蓋	22次	2区	SD22001	中層		5.0		密	硬	灰	天井部一部			ロクロナ デ	ロクロナ デ		



報告 番号	実測 番号	種別	器形	調査 地区	遺構	位置	法量 (cm)			胎土	焼成	色調	残存率	口縁部調整		体部調整		文様	特記事項	
							口径	底径	器高					内面	外面	内面	外面			
304	517	須恵器	坏身	22次	2区	SD22001	中層	11.0			密	硬	灰	口縁部 1/5	ロクロナ デ	ロクロナ デ			○沈線文	
305	530	須恵器	坏身	22次	2区	SD22001	中層	11.2			密	硬	灰	口縁部 1/9	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	○沈線文	
306	633	須恵器	提瓶	22次	2区	SD22001	中層		(体) 26.2		密	硬	灰	体部一部			ナデ 当て具痕	タタキ カキメ		偏球胴 カキメ密
307	591	土師器	甕	22次	2区	SD22001	下層				密 細礫多	硬	にふい黄橙	口縁部一部	ヨコナデ	ヨコナデ				ヨコナデ強い
308	585	須恵器	壺	22次	2区	SD22001	下層	(肩) 20.2	11.8		密	硬	灰	底部完形			ロクロナ デ	ロクロナ デ ヘラケズリ		脚付 自然釉 黒斑
309	306	弥生土器	高坏	19次		SD19127					密 細礫多	硬	浅黄橙	脚部一部			絞り		○櫛描 直線文	磨滅 円孔 3 絞り密
310	593	縄文土器	深鉢	22次	1区	SD22001			7.6		やや粗 細礫多	硬	橙	底部 1/6						平底
311	596	弥生土器	壺	22次	2区	SD22001	上層	24.0			密 細礫多	硬	橙	口縁部 1/12	ヨコナデ	ヨコナデ			○凹線文	キザミ
312	586	弥生土器	壺	22次	2区	SD22001	上層	18.6			密	硬	浅黄橙	頸部 1/8	ヨコナデ	ヨコナデ			○凸帯文	
313	588	弥生土器	壺	22次	2区	SD22001	上層		6.2		密 細礫多	硬	橙	底部完形			ヨコハケ ナナメハ ケ	タテハケ ナナメハ ケ		上げ底
319	562	土師器	坏	22次	2区	P37		13.5	8.4	3.5	密 細礫多	硬	橙	ほぼ完形	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ ユビオサ エ		
320	257	弥生土器	壺	19次		SD19009			4.2		密 細礫多	硬	にふい橙	底部完形				板状圧痕		磨滅 上げ底
321	336	土師器	甕	19次		P353		13.4			密 細礫多	硬	にふい黄橙	口縁部 1/6	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコハケ	タテハケ		ハケ粗い
322	421	土師器	甕	19次		P353		16.4	11.2	14.8	密 細礫多	硬	にふい黄橙	口縁部 1/2	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコハケ ナデ	タテハケ タテハラ ケズリ		平底 ハケ粗い
323	145	土師器	甕	19次		SK19043		21.8			密 細礫多	硬	橙	口縁部 1/12	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコハケ ナナメハ ケ	ナナメハ ケ		ハケ粗い
324	126	土師器	甕	19次		SK19069		20.0			やや粗 細礫多	硬	浅黄橙	口縁部 1/6	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコハケ	ナナメハ ケ		
325	481	土師器	甕	19次		SK19072					密 細礫多	硬	にふい黄橙	体部 1/4			タテハケ ナナメハ ケ ヨコハラ ケズリ	タケハケ		磨滅
326	312	土師器	甕	19次		SK19114		19.6			密 細礫多	硬	にふい黄橙	口縁部 1/16	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコハケ	ナナメハ ケ		磨滅 ハケ粗い
327	468	灰釉陶器	椀	19次		P4					密	硬	(素) 褐灰 (釉) 灰オリーブ	口縁部一部	ロクロナ デ	ロクロナ デ				薄手 精緻 施釉
328	359	黒色土器	椀	19次		P12					密	硬	(内) 黒褐 (外) 浅黄橙	口縁部一部	ミガキ	回転ヨコ ナデ				内面黒化
329	360	黒色土器	椀	19次		P12			11.0		密	硬	(内) 黒褐 (外) にふい黄橙	体部 1/5			ミガキ	回転ヨコ ナデ		内面黒化
330	355	土師器	坏	19次		P28		11.8			やや粗 細礫多	硬	にふい黄橙	口縁部 1/8	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ユビオサ エ		
331	357	土師器	甕	19次		P81		15.8			並 細礫多	硬	にふい橙	口縁部 1/9	ヨコナデ	ヨコナデ				磨滅
332	356	土師器	坏	19次		P91		11.2	5.6	2.9	密	硬	橙	口縁部 1/4	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ユビオサ エ		
333	418	土師器	甕	19次		P91		(頸) 20.4			密 細礫多	硬	にふい黄橙	頸部 1/6			ヨコハケ	ナナメハ ケ		磨滅
334	368	黒色土器	椀	19次		P94					密	硬	(内) 黄橙 (外) 黒	口縁部一部	ミガキ	回転ヨコ ナデ				内面黒化
335	349	土師器	甕	19次		P102		19.6			密	硬	にふい黄橙	口縁部 1/12	ヨコナデ	ヨコナデ				
336	445	製塩土器		19次		P103		14.0	13.6	5.5	粗	並	橙	口縁部 1/6		ユビオサ エ		ユビオサ エ		志摩式
337	367	灰釉陶器	椀	19次		P109					密	硬	(素) 灰白 (釉) 灰オリーブ	口縁部一部	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		施釉
338	345	土師器	甕	19次		P132		23.0			密	硬	にふい黄橙	口縁部 1/12	ヨコナデ	ヨコナデ				
339	471	須恵器	坏	19次		P140			8.2		密	硬	褐灰	底部 1/6			ロクロナ デ	ロクロナ デ ヘラ切り		
340	415	土師器	甕	19次		P149			10.4		密 細礫多	硬	にふい黄橙	底部 1/4			ヨコハケ			磨滅 平底 ハケ細かい
341	354	土師器	甕	19次		P192		18.2			密 細礫多	硬	にふい黄橙	口縁部 1/9	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコハケ			磨滅
342	373	土師器	坏	19次		P265					密	並	浅黄橙	口縁部一部						磨滅
343	372	黒色土器	椀	19次		P267					密	硬	(内) 黒褐 (外) にふい橙	口縁部一部	ミガキ	回転ヨコ ナデ				
344	474	土師器	壺	19次		P290					密	硬	にふい黄橙	体部一部			タテハラ ケズリ	タテハケ		接合痕 金雲母
345	383	緑釉陶器	椀	19次		P352					密	硬	(素) 灰 (釉) オリーブ灰	口縁部一部	ロクロナ デ	ロクロナ デ				施釉
346	334	土師器	甕	19次		P443		13.4			密 細礫多	硬	にふい橙	口縁部 1/3	ヨコナデ	ヨコナデ		タテハケ		磨滅
347	376	灰釉陶器	椀	19次		P511					密	硬	(素) 灰白 (釉) 灰オリーブ	体・ 底部一部			ロクロナ デ	ロクロナ デ		貼付高台 施釉

報告 番号	実測 番号	種別	器形	調査 地区	遺構	位置	法量 (cm)			胎土	焼成	色調	残存率	口縁部調整		体部調整		文様	特記事項	
							口径	底径	器高					内面	外面	内面	外面			
348	482	灰釉陶器	壺	19次		P546				密 細礫多	硬	灰白	体部 1/4			ロクロナ デ	ロクロナ デ		釉剥落	
349	325	土師器	甕	19次		P546	13.4			密 細礫多	硬	浅黄橙	口縁部 1/12	ヨコナデ	ヨコナデ				煤	
350	375	灰釉陶器	椀	19次		P574				密	硬	(素) 灰白 (釉) オリーブ灰	口縁部一部	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		施釉	
351	573	灰釉陶器	椀	22次	1区	P17				密	硬	(素) 灰白 (釉) 灰白	口縁部一部	ロクロナ デ	ロクロ ナデ				施釉	
352	568	緑釉陶器	椀	22次	2区	P35		4.2		密	硬	(素) 灰 (釉) オリーブ灰	底部一部			ロクロナ デ	ロクロナ デ		貼付高台 施釉	
353	557	土師器	坏	22次	2区	P47	13.0	8.4	3.3	密	硬	橙	口縁部 1/2	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ ユビオサ エ		上げ底	
354	42	山茶椀		19次		SD19007	上層	12.0	5.4	6.8	粗	硬	灰白	口縁部 1/3	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		貼付高台 粉殻痕
355	43	山茶椀		19次		SD19007	上層	12.7	5.1	6.4	粗	硬	灰白	口縁部 1/6	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		貼付高台
356	54	山茶椀		19次		SD19007	上層	13.4			粗	硬	灰白	口縁部 1/5	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		自然釉
357	45	山茶椀		19次		SD19007	上層		8.2		粗	硬	灰白	底部 1/5	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		高台剥離?
358	47	山茶椀		19次		SD19007	上層		8.8		粗	硬	灰黄	底部 1/4			ロクロナ デ	ロクロナ デ		貼付高台
359	52	山茶椀		19次		SD19007	上層		7.0		粗 細礫多	硬	灰白	底部 3/4			ロクロナ デ	ロクロナ デ		朱墨 貼付高台 粉殻痕
360	35	山茶椀		19次		SD19007	上層		6.6		粗	硬	灰白	底部完形			ロクロナ デ	ロクロナ デ		貼付高台
361	38	山茶椀		19次		SD19007	上層		7.6		粗 細礫多	硬	灰白	底部 1/3			ロクロナ デ	ロクロナ デ		貼付高台 粉殻痕 自然釉
362	48	山茶椀		19次		SD19007	上層		8.8		粗	硬	灰白	底部完形			ロクロナ デ	ロクロナ デ		貼付高台 粉殻痕 自然釉
363	49	山茶椀		19次		SD19007	上層		6.8		粗 細礫多	硬	灰白	底部 ほぼ完形			ロクロナ デ	ロクロナ デ		貼付高台
364	51	山茶椀		19次		SD19007	上層		6.4		粗	硬	灰白	底部 3/4			ロクロナ デ	ロクロナ デ		底面墨書「一」 高台剥離
365	53	山茶椀	小椀	19次		SD19007	上層		4.0		粗	硬	灰白	底部完形			ロクロナ デ	ロクロナ デ		貼付高台 粉殻痕 自然釉
366	44	白磁	椀	19次		SD19007	上層		7.2		密	硬	灰白	底部 2/5			ヨコナデ	ヨコナデ		削り出し高台 圏線 施釉
367	140	青磁	椀	19次		SD19007	上層				密	硬	灰白	体部一部			ヨコナデ	ヨコナデ		施釉
368	55	山茶椀	鉢	19次		SD19007	下層		22.8		並	硬	褐灰	底部 1/8			ロクロナ デ	ロクロナ デ		自然釉 ロクロ目強い
369	40	弥生土器	甕	19次		SD19007	上層	13.8		やや粗 やや軟	並	浅黄橙	口縁部 1/6	ヨコナデ	ヨコナデ			ナナメハ ケ	○刺突文	受け口
370	50	弥生土器	甕	19次		SD19007	上層	15.0		粗 細礫多	並	にぶい黄橙	口縁部 1/6	ヨコナデ	ヨコナデ				○刺突文	S字叢0類 薄手 磨減
371	87	山茶椀		19次		SD19008			8.2		粗	硬	灰白	底部 2/5			ロクロナ デ	ロクロナ デ		貼付高台
372	84	山茶椀		19次		SD19005	サブトレンチ		8.6		粗	硬	灰白	底部 3/5			ロクロナ デ	ロクロナ デ		貼付高台
373	1	山茶椀		19次		SD19005	上層	14.4	7.4	4.6	粗	硬	灰白	口縁部 2/5	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		貼付高台 自然釉
374	7	山茶椀		19次		SD19005	上層	14.0			粗	硬	灰黄	口縁部 1/6	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		
375	13	山茶椀		19次		SD19005	上層	13.6	6.2	5.0	粗	硬	灰白	口縁部 1/6	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		貼付高台 粉殻痕
376	30	山茶椀		19次		SD19005	上層	16.8			粗	硬	灰	口縁部 1/6	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		自然釉 黒変
377	32	山茶椀		19次		SD19005	上層	14.0			粗	硬	灰白	口縁部 1/8	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		自然釉
378	4	山茶椀		19次		SD19005	上層		8.0		粗	硬	灰黄	底部 1/2			ロクロナ デ	ロクロナ デ		貼付高台 粉殻痕
379	12	山茶椀		19次		SD19005	上層		6.8		粗	硬	灰黄	底部 ほぼ完形			ロクロナ デ	ロクロナ デ		貼付高台 粉殻痕
380	18	山茶椀		19次		SD19005	上層		6.8		粗	硬	灰白	底部 1/2			ロクロナ デ	ロクロナ デ		貼付高台 粉殻痕 自然釉
381	19	山茶椀		19次		SD19005	上層		7.0		粗 細礫多	硬	灰黄	底部完形			ロクロナ デ	ロクロナ デ		貼付高台 粉殻痕 自然釉
382	20	山茶椀		19次		SD19005	上層		7.1		粗 細礫多	硬	黄灰	底部完形			ロクロナ デ	ロクロナ デ		貼付高台 粉殻痕 自然釉
383	21	山茶椀		19次		SD19005	上層		6.4		粗	硬	灰白	底部完形			ロクロナ デ	ロクロナ デ		貼付高台

報告 番号	実測 番号	種別	器形	調査 地区	遺構	位置	法量 (cm)			胎土	焼成	色調	残存率	口縁部調整		体部調整		文様	特記事項	
							口径	底径	器高					内面	外面	内面	外面			
384	22	山茶碗		19次		SD19005	上層		7.0	粗	硬	灰黄	底部 3/5			ロクロナ デ	ロクロナ デ 糸切り		貼付高台	
385	26	山茶碗		19次		SD19005	上層		8.4	粗	硬	灰白	底部 1/2			ロクロナ デ	ロクロナ デ 糸切り		高台貼付 糊殻痕	
386	27	山茶碗		19次		SD19005	上層		8.2	粗	硬	灰白	底部 1/4			ロクロナ デ	ロクロナ デ 糸切り		高台貼付 糊殻痕 自然釉	
387	9	山茶碗		19次		SD19005	上層	14.4	7.0	4.9	粗 細礫多	硬	灰白	口縁部 1/6	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		貼付高台 糊殻痕 自然釉 底面墨書「上上」
388	46	山茶碗	鉢	19次		SD19005	上層		15.0	粗	硬	灰白	底部 1/4			ロクロナ デ	ロクロナ デ		貼付高台 自然釉 稜	
389	33	土師器	皿	19次		SD19005	上層	9.6	5.6	2.5	並	硬	浅黄橙	口縁部 1/10	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ユビオサ エ		
390	39	青磁	碗	19次		SD19005	上層	14.0			密	硬	(素) 灰白 (軸) オリーブ灰	口縁部 1/12	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ		輪花 施釉
391	17	山茶碗		19次		SD19005	下層	14.8	6.6	5.0	粗	硬	灰白	口縁部 1/8	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ 糸切り		貼付高台 糊殻痕 自然釉
392	25	山茶碗		19次		SD19005	下層	15.7	6.8	5.5	粗	硬	灰白	口縁部 2/3	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ 糸切り		貼付高台 糊殻痕 自然釉
393	28	山茶碗		19次		SD19005	下層	14.6	7.2	5.4	粗	硬	灰白	口縁部 1/2	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ 糸切り		高台貼付 糊殻痕
394	37	山茶碗		19次		SD19005	下層	13.8			粗	硬	灰白	口縁部 1/8	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		自然釉
395	2	山茶碗		19次		SD19005	下層		7.0		粗	硬	灰黄	底部 1/3			ロクロナ デ	ロクロナ デ 糸切り		貼付高台 糊殻痕
396	6	山茶碗		19次		SD19005	下層		9.0		粗	硬	灰白	底部一部			ロクロナ デ	ロクロナ デ 糸切り		貼付高台
397	10	山茶碗		19次		SD19005	下層		8.2		粗 細礫多	硬	灰白	底部 1/3			ロクロナ デ	ロクロナ デ		貼付高台 糊殻痕 自然釉
398	14	山茶碗		19次		SD19005	下層		9.4		粗	硬	灰白	底部 1/4			ロクロナ デ	ロクロナ デ		貼付高台
399	16	山茶碗		19次		SD19005	下層		7.0		粗	硬	灰黄	底部完形			ロクロナ デ	ロクロナ デ 糸切り		貼付高台 糊殻痕
400	8	山茶碗	鉢	19次		SD19005	下層		12.2		粗 細礫多	硬	褐灰	底部 1/4			ロクロナ デ	ロクロナ デ		貼付高台 断面方形 厚手
401	135	土製品	土鉢	19次		SD19005	下層	(長) 5.8	(幅) 3.2	(厚) 3.1	密	硬	黄橙	完形						棒状 円孔貫通 胎土精緻
402	23	山茶碗		19次		SD19005	出入口下層		7.2		粗	硬	灰白	底部 2/5			ロクロナ デ	ロクロナ デ		貼付高台
403	36	山茶碗	鉢	19次		SD19005	出入口下層		13.6		粗	硬	灰白	底部 1/8			ロクロナ デ	ロクロナ デ		貼付高台 自然釉
404	34	土師器	皿	19次		SD19005	出入口下層	12.6	9.0	3.0	密	硬	浅黄橙	口縁部 1/4	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ユビオサ エ	ナデ 2	
405	31	土師器	皿	19次		SD19005	東西下層	8.0	6.6	1.3	並	硬	浅黄橙	口縁部 1/6	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ユビオサ エ	小皿 扁平	
406	5	山茶碗		19次		SD19005	ベルト C 上層	15.2	7.4	5.6	粗 細礫多	硬	灰白	口縁部 1/2	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ 糸切り		貼付高台 糊殻痕
407	24	山茶碗		19次		SD19005	ベルト C 上層	15.0	7.7	5.7	粗	硬	(内) 褐灰 (外) 灰白	口縁部 1/4	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ 糸切り		貼付高台 自然釉 黒変
408	11	山皿		19次		SD19005	ベルト C 上層	8.4	4.4	2.3	粗	硬	灰白	ほぼ完形	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ 糸切り		底部突出 厚手
409	15	山皿		19次		SD19005	ベルト C 上層	7.6	3.6	2.3	やや粗 細礫多	硬	褐灰	ほぼ完形	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ 糸切り		底部突出 厚手
410	41	山皿		19次		SD19005	ベルト C 上層	8.4	4.6	2.4	粗	硬	灰白	口縁部 1/2	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		厚手
411	3	山茶碗		19次		SD19005	ベルト C 下層	14.8	7.0	5.6	粗	硬	灰白	口縁部 3/5	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ 糸切り		貼付高台 自然釉
412	29	須恵器	坏	19次		SD19005	上層	11.2	8.4	4.0	密	硬	灰	口縁部 1/3	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ ヘラ切り		無高台
413	478	瓦	平瓦	19次		SD19005	出入口上層				密	硬	にぶい黄橙	一部			布目痕	斜格子タ タキ		桶巻作り 布縫じ合わせ目
414	88	山茶碗		19次		SD19006	下層		6.4		粗	硬	灰白	底部 1/2			ロクロナ デ	ロクロナ デ		貼付高台 糊殻痕
415	393	山茶碗		19次		SK19049		13.2			粗	硬	灰白	口縁部 1/9	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		
416	501	山茶碗		22次	1区	SD22011			8.6		粗	硬	灰白	底部 1/6			ロクロナ デ	ロクロナ デ		貼付高台
417	534	山茶碗		22次	1区	SD22011			8.6		粗	硬	灰白	底部 1/6			ロクロナ デ	ロクロナ デ 糸切り		貼付高台

報告 番号	実測 番号	種別	器形	調査 地区	遺構	位置	法量 (cm)			胎土	焼成	色調	残存率	口縁部調整		体部調整		文様	特記事項
							口径	底径	器高					内面	外面	内面	外面		
418	502	山茶碗		22次	1区	SD22011	上層		7.2		粗	硬	灰白	底部 1/4			ロクロナ デ	ロクロナ デ	貼付高台 自然釉
419	507	土師器	鍋	22次	1区	SD22011	上層				やや粗	硬	にぶい橙	口縁部一部	ヨコナデ	ヨコナデ			南伊勢系 折り返し
420	503	山茶碗		22次	1区	SD22011	下層		8.2		粗	硬	灰白	底部 1/3			ロクロナ デ	ロクロナ デ	貼付高台 刷痕
421	508	山茶碗		22次	1区	SD22011	下層				粗	硬	にぶい黄橙	底部一部			ロクロナ デ	ロクロナ デ	貼付高台 刷痕
422	522	山茶碗		22次	1区	SD22011	下層		7.2		粗	硬	灰黄	底部一部			ロクロナ デ	ロクロナ デ	貼付高台 自然釉
423	535	山茶碗		22次	1区	SD22011	下層		7.4		粗	硬	灰白	底部 1/4			ロクロナ デ	ロクロナ デ	貼付高台
424	506	土師器	鍋	22次	1区	SD22011	下層	14.0			やや粗	硬	浅黄橙	口縁部 1/9	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコハケ	タテハケ	南伊勢系 折り返し 小型
425	98	土師器	羽釜	19次		SD19023		29.6			密	硬	にぶい黄橙	口縁部 1/16	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	煤
426	99	土師器	羽釜	19次		SD19023		29.2			密	硬	にぶい黄橙	口縁部 1/8	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	円孔 煤
427	62	山茶碗		19次		SD19024		16.8	7.4	5.5	粗	硬	褐灰	口縁部 1/4	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	貼付高台 刷痕 自然釉
428	68	山茶碗		19次		SD19024		16.0			粗	硬	褐灰	口縁部 1/8	ロクロナ デ	ロクロナ デ			薄手 自然釉
429	58	山茶碗		19次		SD19024		16.6	8.4	5.2	粗	硬	灰白	口縁部 3/4	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	貼付高台 薄手 やや歪み
430	67	山茶碗		19次		SD19024			7.6		粗	硬	灰白	底部 3/5			ロクロナ デ	ロクロナ デ	貼付高台 刷痕
431	56	山茶碗	小碗	19次		SD19024		8.1	3.7	2.7	粗	硬	灰白	ほぼ完形	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	貼付高台 やや歪み
432	59	山茶碗	鉢	19次		SD19024			11.6		粗	硬	褐灰	底部 1/4			ロクロナ デ	ロクロナ デ	貼付高台 刷痕 黒変
433	63	白磁	碗	19次		SD19024		15.4	5.4	6.0	密	硬	灰白	口縁部 2/3	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	削り出し高台 胎土精緻 丁寧 施釉
434	60	土師器	甕	19次		SD19024		20.4			やや粗	硬	浅黄橙	口縁部 1/6	ヨコナデ	ヨコナデ			磨滅
435	139	土師器	皿	19次		SD19024		15.0			密	硬	にぶい黄橙	口縁部 1/8	ヨコナデ	ヨコナデ			
436	57	土師器	皿	19次		SD19024		14.8	8.6	3.5	並	並	にぶい黄橙	口縁部 1/8	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ユビオサ エ	
437	66	土師器	皿	19次		SD19024		15.2	11.4	3.1	並	並	にぶい黄橙	口縁部 1/6	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ユビオサ エ	ナデ 2
438	71	土師器	皿	19次		SD19024		13.8	11.6	3.2	密	硬	浅黄橙	口縁部 1/4	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ユビオサ エ	
439	61	土師器	皿	19次		SD19024		8.8	7.4	1.4	密	硬	浅黄橙	口縁部 1/4	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ユビオサ エ	小皿 扁平
440	76	山茶碗		19次		SE19025	上層		6.2		粗 細礫多	硬	灰白	底部完形			ロクロナ デ	ロクロナ デ	貼付高台 刷痕
441	119	山茶碗		19次		SE19025	上層		8.0		粗	硬	灰白	底部完形			ロクロナ デ	ロクロナ デ	貼付高台 刷痕
442	70	山皿		19次		SE19025	上層	8.2	4.4	2.1	粗	硬	灰白	口縁部 1/8	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	自然釉 底面墨書「天」?
443	64	土師器	甕	19次		SE19025	上層	23.4			並 細礫多	硬	にぶい黄橙	口縁部 1/8	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	タテハケ	
444	138	青磁	碗	19次		SE19025	上層				密	硬	灰白	口縁部一部	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	無文 施釉
445	74	土師器	皿	19次		SE19025	中層	8.5	7.8	1.4	並	並	にぶい黄橙	口縁部 1/4	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ユビオサ エ	小皿 扁平
446	69	山茶碗		19次		SE19025	下層	15.2			粗	硬	褐灰	口縁部 1/6	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	薄手 自然釉
447	78	山茶碗		19次		SE19025	下層	15.0			粗 細礫多	硬	灰白	口縁部 1/6	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	自然釉
448	72	山茶碗		19次		SE19025	下層	14.5	7.6	5.4	粗 細礫多	硬	灰白	口縁部 2/5	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	貼付高台 刷痕 やや歪み
449	73	山茶碗		19次		SE19025	下層		7.1		粗	硬	灰白	底部完形			ロクロナ デ	ロクロナ デ	貼付高台 刷痕
450	75	山茶碗		19次		SE19025	下層		7.0		粗 細礫多	並	灰黄	底部完形			ロクロナ デ	ロクロナ デ	貼付高台

報告 番号	実測 番号	種別	器形	調査 地区	遺構	位置	法量 (cm)			胎土	焼成	色調	残存率	口縁部調整		体部調整		文様	特記事項
							口径	底径	器高					内面	外面	内面	外面		
451	79	山茶碗		19次	SE19025	下層		7.6		粗	硬	灰白	底部 1/2			ロクロナ デ	ロクロナ デ	貼付高台 稜	
452	83	山皿		19次	SE19025	下層	7.4	4.4	1.8	粗	硬	灰白	口縁部 2/5	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	扁平 自然釉 稜	
453	77	土師器	皿	19次	SE19025	下層	8.2	6.0	1.9	密	硬	橙	口縁部 1/4	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ユビオサ エ	小皿 丁寧	
454	96	山茶碗		19次	SE19112	上層	13.4	5.8	5.1	粗	硬	灰黄	口縁部 1/10	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	無高台	
455	97	山茶碗		19次	SE19112	上層		5.8		粗	硬	灰白	底部 3/4			ロクロナ デ	ロクロナ デ	無高台 やや歪み 黒変	
456	301	山茶碗		19次	SE19112	上層	14.0			粗 細礫多	硬	黄灰	口縁部 1/12	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		
457	120	土師器	皿	19次	SE19112	上層	8.2	5.8	1.0	密 細礫多	硬	橙	口縁部 1/4	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ユビオサ エ	小皿 扁平	
458	137	山茶碗		19次	SE19112	下層	13.2			粗	硬	灰白	口縁部 1/7	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		
459	437	山茶碗		19次	SE19112	下層	13.2			粗	硬	灰白	口縁部 1/8	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		
460	484	土師器	鍋	19次	SK19113					やや粗	硬	にふい黄橙	口縁部一部	ヨコナデ	ヨコナデ			南伊勢系 折り返し 煤	
461	400	土師器	鍋	19次	SK19113					粗 細礫多	硬	にふい黄橙	体部一部				ヨコハケ	磨減 金雲母	
462	389	灰釉陶器	碗	19次	SK19113					密	硬	(素) 灰白 (釉) 不明	口縁部一部	ロクロナ デ	ロクロナ デ			施釉 釉剥落	
463	388	山茶碗		19次	SK19029					粗	硬	灰白	口縁部一部	ロクロナ デ	ロクロナ デ				
464	133	山茶碗		19次	SK19030		9.8			粗	硬	灰白	底部 1/3			ロクロナ デ	ロクロナ デ	貼付高台 釉痕 自然釉	
465	392	山茶碗		19次	SK19030		12.4			粗 細礫多	硬	灰白	口縁部 1/8	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	自然釉	
466	143	山茶碗	鉢	19次	SK19030		20.6			粗	硬	褐灰	口縁部 1/6	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	注口 自然釉	
467	227	土師器	鍋	19次	SK19030		17.0			粗	硬	浅黄橙	口縁部 1/10	ヨコナデ	ヨコナデ			南伊勢系 小型 折り返し	
468	141	土師器	皿	19次	SK19030		8.0	6.8	1.7	並	硬	灰黄	口縁部 2/5	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ユビオサ エ	小皿	
469	156	白磁	皿	19次	SK19030			4.0		密	硬	灰白	底部 1/3			ヨコナデ	ヨコナデ	無高台 上げ底 施釉	
470	390	山茶碗		19次	SK19031					粗	硬	灰黄	口縁部一部	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロ目強い	
471	391	山茶碗		19次	SK19031					粗 細礫多	硬	灰白	口縁部一部	ロクロナ デ	ロクロナ デ			自然釉 薄手	
472	125	山茶碗	鉢	19次	SK19032	上層	25.8			粗 細礫多	硬	灰黄	口縁部 1/7	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		
473	155	山茶碗	鉢	19次	SK19032	上層	29.0			粗	硬	褐灰	口縁部 1/6	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		
474	132	青磁	碗	19次	SK19032	上層		6.2		密	硬	(素) にふい黄 (釉) 明オリープ 灰	底部 ほぼ完形			ヨコナデ	ヨコナデ	削り出し高台 施釉	
475	128	山茶碗		19次	SK19032	下層	14.2	6.6	5.0	粗 細礫多	硬	褐灰	口縁部 1/14	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	貼付高台 釉痕 自然釉	
476	142	山茶碗		19次	SK19032	下層	14.8	8.2	5.6	粗 細礫多	硬	灰白	口縁部 1/5	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	高台貼付 釉痕	
477	146	山茶碗		19次	SK19032	下層	14.0	8.6	4.9	粗 細礫多	硬	灰黄	口縁部 1/16	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	貼付高台 釉痕	
478	134	山茶碗		19次	SK19032	下層		6.8		粗	硬	浅黄	底部 4/5			ロクロナ デ	ロクロナ デ	貼付高台 釉痕	
479	479	瓦	平瓦	19次	SK19032	上層				密	硬	灰黄	一部			布目痕 糸切り痕	縄タタキ	一枚作り	
480	374	山茶碗		19次	P244					粗	硬	灰白	口縁部一部	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	自然釉	
481	358	山茶碗		19次	P20					粗	硬	灰	口縁部一部	ロクロナ デ	ロクロナ デ				
482	320	土師器	皿	19次	P291		8.2	6.4	1.4	密	硬	にふい黄橙	口縁部 1/5	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ユビオサ エ	小皿 扁平	
483	212	山茶碗		19次	SX19003	上層	14.0			粗	硬	灰	口縁部 1/9	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	自然釉	
484	230	山茶碗		19次	SX19003	上層	11.8			粗	硬	黄灰	口縁部 1/10	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		
485	426	青磁	皿	19次	SX19003	上層				密	硬	(素) 灰白 (釉) 灰オリープ	口縁部一部	ヨコナデ	ヨコナデ			施釉	
486	226	土製品	土鍾	19次	SX19003	上層	(長) 3.4	(幅) 1.1	(厚) 1.0	密	硬	灰黄褐	完形					棒状 円孔貫通	
487	259	山茶碗		19次	SX19003	TP1		9.2		粗	硬	灰白	底部 1/4			ロクロナ デ	ロクロナ デ	貼付高台 釉痕	
488	252	山茶碗		19次	SX19003	TP2		6.4		粗	硬	灰白	底部 1/2			ロクロナ デ	ロクロナ デ	貼付高台 釉痕 自然釉	



報告 番号	実測 番号	種別	器形	調査 地区	遺構	位置	法量 (cm)			胎土	焼成	色調	残存率	口縁部調整		体部調整		文様	特記事項
							口径	底径	器高					内面	外面	内面	外面		
489	275	山皿		19次	SX19003	TP2	8.2	4.0	2.3	粗	硬	灰白	口縁部 1/4	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		底部突出
490	422	青磁	椀	19次	SX19003	TP2				密	硬	(素) 灰 (釉) 明オリブ 灰	口縁部一部	ヨコナデ	ヨコナデ				施釉
491	429	青磁	椀	19次	SX19003	TP2				密	硬	(素) 灰白 (釉) オリブ灰	口縁部一部	ヨコナデ	ヨコナデ			○	施釉
492	260	山茶椀		19次	SX19003	TP3		7.4		粗	硬	灰白	底部 1/3			ロクロナ デ	ロクロナ デ		貼付高台
493	262	山茶椀	鉢	19次	SX19003	TP3		11.2		粗	硬	灰	底部 1/6			ロクロナ デ	ロクロナ デ		貼付高台
494	398	土師器	鍋	19次	SX19003	TP3				粗	硬	にぶい橙	口縁部一部	ヨコナデ	ヨコナデ				南伊勢系 折り返し
495	427	青磁	椀	19次	SX19003	TP3				密	硬	(素) 灰白 (釉) オリブ灰	体・ 底部一部			ヨコナデ	ヨコナデ		施釉
496	85	山茶椀		19次	SX19003	TP4	14.4			粗	硬	灰白	口縁部 1/8	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		自然釉 やや歪み
497	213	山茶椀		19次	SX19003	TP4	15.0			粗	硬	黄灰	口縁部 1/8	ロクロナ デ	ロクロナ デ				自然釉
498	286	山茶椀		19次	SX19003	TP4	15.4			粗	硬	灰白	口縁部 1/8	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		
499	215	山茶椀		19次	SX19003	TP4		6.4		粗	硬	灰	底部 1/3			ロクロナ デ	ロクロナ デ		貼付高台
500	223	山茶椀		19次	SX19003	TP4		8.6		粗 細礫多	硬	灰	底部 1/3			ロクロナ デ	ロクロナ デ		貼付高台
501	220	山茶椀		19次	SX19003	TP4		7.8		粗	硬	灰	底部 1/5			ロクロナ デ	ロクロナ デ		貼付高台
502	222	山茶椀		19次	SX19003	TP4		6.4		粗	硬	灰	底部 1/4			ロクロナ デ	ロクロナ デ		貼付高台 糊殻痕
503	232	山茶椀		19次	SX19003	TP4		6.5		粗	硬	灰	底部 3/4			ロクロナ デ	ロクロナ デ		貼付高台 糊殻痕
504	264	山茶椀		19次	SX19003	TP4		7.4		粗	硬	灰白	底部 1/3			ロクロナ デ	ロクロナ デ		貼付高台
505	263	山皿		19次	SX19003	TP4	7.8	4.4	2.1	粗	硬	灰白	口縁部 3/5	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		自然釉
506	276	山皿		19次	SX19003	TP4	7.8	4.4	2.1	粗	硬	灰白	ほぼ完形	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		底部突出
507	91	土師器	鍋	19次	SX19003	TP4	25.6			粗 細礫多	硬	にぶい褐	口縁部 1/12	ヨコナデ	ヨコナデ				南伊勢系 中型 折り返し
508	94	土師器	皿	19次	SX19003	TP4	15.0	11.2	2.6	並	硬	にぶい黄橙	口縁部 1/10	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ユビオサ エ		扁平
509	272	土師器	皿	19次	SX19003	TP4	14.6	10.2	2.8	密	硬	にぶい黄橙	口縁部 1/2	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ユビオサ エ		
510	90	土師器	皿	19次	SX19003	TP4	12.0	8.2	2.5	やや粗	並	にぶい橙	口縁部 1/6	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ユビオサ エ		
511	217	土師器	皿	19次	SX19003	TP4	8.0	4.6	1.8	密	硬	橙	口縁部 4/5	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ユビオサ エ		小皿 ヨコナデ強い
512	266	土師器	皿	19次	SX19003	TP4	8.2	5.4	1.4	並 細礫多	硬	にぶい橙	口縁部 1/3	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ユビオサ エ		小皿 扁平
513	278	土師器	皿	19次	SX19003	TP4	8.2	6.6	1.5	密	硬	にぶい黄橙	口縁部 1/4	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ユビオサ エ		小皿 扁平 ヨコナデ強い
514	241	土師器	皿	19次	SX19003	TP4	8.8	7.4	1.2	密	硬	にぶい黄橙	口縁部 1/8	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ユビオサ エ		小皿 扁平
515	287	青磁	椀	19次	SX19003	TP4	15.0			密	硬	(素) 灰白 (釉) 明オリブ 灰	口縁部一部	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ		施釉
516	273	青磁	椀	19次	SX19003	TP4	15.8			密	硬	(素) 灰白 (釉) オリブ灰	口縁部 1/8	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	○	施釉
517	285	青磁	椀	19次	SX19003	TP4		6.2		密	硬	(素) 灰白 (釉) オリブ灰	底部 1/4			ヨコナデ	ヨコナデ	○	削り出し高台 施釉
518	89	青磁	椀	19次	SX19003	TP4		5.6		密	硬	(素) 灰白 (釉) 灰オリブ	底部 2/3			ヨコナデ	ヨコナデ	○	施釉 削り出し高台 精緻
519	428	青磁	椀	19次	SX19003	TP4				密	硬	(素) 灰白 (釉) 明オリブ 灰	口縁部一部	ヨコナデ	ヨコナデ				施釉
520	430	青磁	椀	19次	SX19003	TP4				密	硬	(素) 灰黄 (釉) オリブ灰	口縁部一部	ヨコナデ	ヨコナデ			○	施釉
521	432	青磁	椀	19次	SX19003	TP4				密	硬	(素) 灰白 (釉) オリブ黄	口縁・ 体部一部	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	○	施釉
522	433	青磁	椀	19次	SX19003	TP4				密	硬	(素) 灰白 (釉) オリブ灰	体部一部			ヨコナデ	ヨコナデ		施釉
523	423	白磁	皿?	19次	SX19003	TP4				密	硬	(素) 灰黄 (釉) 灰白	口縁部一部	ヨコナデ	ヨコナデ				施釉 薄手 精緻
524	476	常滑焼	甕	19次	SX19003	TP4				密	硬	灰赤	体部 1/3			ロクロナ デ	ロクロナ デ		自然釉 タタキ

報告 番号	実測 番号	種別	器形	調査 地区	遺構	位置	法量 (cm)			胎土	焼成	色調	残存率	口縁部調整		体部調整		文様	特記事項
							口径	底径	器高					内面	外面	内面	外面		
525	214	山茶椀		19次	SX19003	TP5	15.2			粗	硬	灰白	口縁部 1/8	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		
526	80	山茶椀		19次	SX19003	TP5		8.2		粗 細礫多	並	褐灰	底部 1/3			ロクロナ デ	ロクロナ デ 糸切り		貼付高台
527	216	山茶椀		19次	SX19003	TP5		8.2		粗	硬	灰白	底部 1/3			ロクロナ デ	ロクロナ デ 糸切り		貼付高台
528	261	山茶椀		19次	SX19003	TP5		8.6		粗	硬	灰白	底部 1/4			ロクロナ デ	ロクロナ デ		貼付高台
529	267	山茶椀		19次	SX19003	TP5		7.0		粗	硬	灰白	底部 1/4			ロクロナ デ	ロクロナ デ 糸切り		貼付高台
530	268	山茶椀		19次	SX19003	TP5		8.4		粗	硬	灰白	底部 1/3			ロクロナ デ	ロクロナ デ 糸切り		貼付高台
531	277	山茶椀		19次	SX19003	TP5		7.4		粗	硬	灰白	底部 1/3			ロクロナ デ	ロクロナ デ 糸切り		貼付高台 粉痕
532	229	土師器	皿	19次	SX19003	TP5	8.8	6.4	1.2	密	硬	にぶい橙	口縁部 1/2	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ユビオサ エ		小皿 扁平
533	265	土師器	皿	19次	SX19003	TP5	13.8			密	硬	にぶい黄橙	口縁部 1/5	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ユビオサ エ		
534	95	土師器	皿	19次	SX19003	TP5	14.4	10.4	3.5	並	並	橙	口縁部 1/5	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ユビオサ エ		ナデ2 ヨコナデ強い
535	86	山茶椀		19次	SX19003	TP6	12.5	(推) 5.7	6.1	粗 細礫多	硬	灰白	口縁部 2/3						
536	92	山茶椀		19次	SX19003	TP6	13.8			粗	硬	褐灰	口縁部 1/6	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		
537	233	山茶椀		19次	SX19003	TP6	15.2	7.6	5.0	粗	硬	灰白	口縁部 2/5	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ 糸切り		貼付高台 粉痕 自然釉
538	218	山茶椀		19次	SX19003	TP6	16.8			粗	硬	灰白	口縁部 1/7	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		自然釉
539	221	山茶椀		19次	SX19003	TP6	15.0			粗	硬	灰白	口縁部 1/6	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		自然釉
540	280	山茶椀		19次	SX19003	TP6	15.2			粗 細礫多	硬	褐灰	口縁部 1/7	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		自然釉
541	282	山茶椀		19次	SX19003	TP6	15.6			粗	硬	灰白	口縁部 1/8	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		
542	253	山茶椀		19次	SX19003	TP6		6.3		粗 細礫多	硬	灰	底部一部			ロクロナ デ	ロクロナ デ 糸切り		底面墨書「上上」 貼付高台
543	81	山茶椀		19次	SX19003	TP6		8.8		粗	硬	灰白	底部 1/6			ロクロナ デ	ロクロナ デ		貼付高台 粉痕
544	93	山茶椀		19次	SX19003	TP6		9.0		粗	硬	灰白	底部 2/5			ロクロナ デ	ロクロナ デ 糸切り		貼付高台 粉痕
545	224	山茶椀		19次	SX19003	TP6		7.2		粗	硬	灰	底部 1/4			ロクロナ デ	ロクロナ デ 糸切り		貼付高台 粉痕
546	269	山茶椀		19次	SX19003	TP6		6.5		粗	硬	灰白	底部 ほぼ完形			ロクロナ デ	ロクロナ デ 糸切り		貼付高台 粉痕 自然釉
547	271	山皿		19次	SX19003	TP6	7.6	3.9	2.3	粗	硬	灰白	完形	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		底部突出
548	279	山皿		19次	SX19003	TP6	7.8	5.4	2.0	粗 細礫多	硬	灰白	完形	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ 糸切り		
549	288	山皿		19次	SX19003	TP6	8.2	3.8	2.5	粗 細礫多	硬	灰	口縁部 3/4	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ 糸切り		底部突出
550	190	土師器	皿	19次	SX19003	TP6	9.4	8.2	1.6	密	硬	にぶい黄橙	口縁部 1/3	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ユビオサ エ		小振り ヨコナデ強い
551	219	土師器	皿	19次	SX19003	TP6	9.2	7.8	2.0	密	硬	浅黄橙	口縁部 1/3	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ユビオサ エ		小皿 ヨコナデ強い
552	250	土師器	皿	19次	SX19003	TP6	8.0	7.4	1.8	密	並	浅黄	口縁部 1/8	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ユビオサ エ		
553	281	土師器	皿	19次	SX19003	TP6	8.6	7.0	1.6	密	硬	にぶい黄橙	ほぼ完形	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ユビオサ エ		小皿
554	284	土師器	皿	19次	SX19003	TP6	8.2	6.3	1.6	密	硬	にぶい黄橙	口縁部 3/4	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ユビオサ エ		小皿
555	270	土師器	皿	19次	SX19003	TP6	10.0	8.2	1.4	密	硬	にぶい黄橙	口縁部 1/5	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ユビオサ エ		扁平
556	283	土師器	鍋	19次	SX19003	TP6	26.4			粗	硬	にぶい黄橙	口縁部 1/4	ヨコナデ	ヨコナデ		ヨコハケ ナナメハ ケ		南伊勢系 折り返し 中型 薄手
557	251	須恵器	坏	19次	SX19003	TP1		9.6		密 細礫多	硬	黄灰	底部 1/3			ロクロナ デ	ロクロナ デ ヘラ切り		貼付高台
558	321	山茶椀		19次	P95			5.2		粗	硬	灰白	底部 1/2			ロクロナ デ	ロクロナ デ 糸切り		貼付高台 粉痕

報告 番号	実測 番号	種別	器形	調査 地区	遺構	位置	法量 (cm)			胎土	焼成	色調	残存率	口縁部調整		体部調整		文様	特記事項	
							口径	底径	器高					内面	外面	内面	外面			
559	337	山茶碗		19次		P121		15.6		粗	硬	灰白	口縁部 1/8	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ			
560	338	山茶碗		19次		P121			6.8	粗	硬	灰白	底部 1/4			ロクロナ デ	ロクロナ デ		貼付高台 粉殻痕	
561	343	土師器	皿	19次		P121		8.8	6.3	1.9	密	硬	浅黄橙	ほぼ完形	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ユビオサ エ	小皿	
562	353	山茶碗		19次		P174		15.8		粗	硬	灰白	口縁部 1/12	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ			
563	339	山茶碗	鉢	19次		P196		20.4		粗	硬	灰白	口縁部 1/14	ロクロナ デ	ロクロナ デ					
564	348	土師器	皿	19次		P247		13.2	10.0	3.0	密	硬	浅黄橙	口縁部 1/6	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ユビオサ エ	ヨコナデ強い	
565	384	土師器	皿	19次		P262				1.5	密	硬	にふい黄橙	口縁部一部	ヨコナデ	ヨコナデ		ユビオサ エ	扁平	
566	323	山皿		19次		P547		9.4	6.2	1.7	粗	硬	灰白	口縁部 1/12	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		扁平 自然釉
567	549	山茶碗		22次	1区	P131		15.8		粗	硬	灰白	口縁部 1/8	ロクロナ デ	ロクロナ デ					自然釉
568	559	山茶碗		22次	1区	P136			5.8	粗	硬	灰白	底部 ほぼ完形			ロクロナ デ	ロクロナ デ			貼付高台 粉殻痕 厚手
569	130	弥生土器	甕	19次		表土		31.2			密	硬	浅黄橙	口縁部 1/6	ヨコナデ	ヨコナデ	タテハケ	ヨコハケ ナナメハ ケ	くの字 ハケ粗い 磨減	
570	469	弥生土器	甕	19次		表土					密 細礫多	硬	にふい黄橙	口縁・ 体部一部	ヨコナデ	ヨコナデ				磨減 受け口
571	107	弥生土器	壺	19次		表土		12.6			密 細礫多	硬	淡黄	口縁部 1/16				タテハケ タテハラ ミガキ		磨減
572	129	弥生土器	壺	19次		表土		26.8			密 細礫多	硬	にふい橙	口縁部 1/10	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ		
573	127	弥生土器	壺	19次		表土			7.3	粗	硬	(内) 橙 (外) 浅黄橙	底部完形			ヨコハケ ナナメハ ケ	タテハケ		丸底 底部突出 磨減	
574	103	弥生土器	高坏	19次		表土		22.6	(稜) 16.2		並 細礫多	並	にふい黄橙	坏部 1/3	タテハラ ミガキ					磨減 有稜
575	414	土師器	甕	19次		表土		22.0			やや粗 細礫多	硬	橙	頸部 1/8	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコハケ	タテハケ		磨減 ハケ粗い
576	475	土師器	甕	19次		表土					密	硬	にふい黄橙	体部一部			ヨコハケ タテハラ ケズリ	タテハケ		切開部残存
577	106	須恵器	坏	19次		表土			7.6		密	硬	灰白	底部完形			ロクロナ デ	ロクロナ デ		貼付高台
578	108	須恵器	壺	19次		表土		32.6			密	硬	(内) 灰白 (外) 黒褐	口縁部 1/12	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		大型 自然釉
579	82	灰釉陶器	碗	19次		表土			8.4		密	硬	(素) 灰白 (釉) 灰オリーブ	底部 1/4			ロクロナ デ	ロクロナ デ		貼付高台 断面方形 施釉
580	101	灰釉陶器	碗	19次		表土			8.2		密	硬	(素) 灰白 (釉) 灰オリーブ	底部 1/4			ロクロナ デ	ロクロナ デ		貼付高台 断面方形 施釉
581	111	灰釉陶器	碗	19次		表土			5.8		密	硬	(素) 灰白 (釉) 灰オリーブ	底部 2/5			ロクロナ デ	ロクロナ デ		施釉 貼付高台
582	117	灰釉陶器	碗	19次		表土			6.4		密	硬	(素) 灰白 (釉) 灰オリーブ	底部 1/3			ロクロナ デ	ロクロナ デ		貼付高台 施釉
583	477	瓦	平瓦	19次		表土					密 細礫多	硬	にふい黄橙	一部			布目痕	ケズリ		桶巻作り 布織じ合わせ目 ケズリ丁寧
584	480	瓦	平瓦	19次		表土					密 細礫多	並	灰黄	一部			布目痕	縄タタキ		一枚作り 厚手
585	104	山茶碗		19次		表土		16.2		粗	硬	灰	口縁部 1/8	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ			
586	112	山茶碗		19次		表土		14.0	5.2	4.4	粗 細礫多	硬	灰白	口縁部 2/5	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		貼付高台 粉殻痕 自然釉
587	118	山茶碗		19次		表土		13.6	5.8	5.5	粗	硬	浅黄	口縁部 2/5	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		貼付高台 粉殻痕
588	100	山茶碗		19次		表土			7.8		粗	硬	灰白	底部完形			ロクロナ デ	ロクロナ デ		貼付高台 粉殻痕
589	113	山茶碗		19次		表土			6.0		粗 細礫多	硬	浅黄	底部 ほぼ完形			ロクロナ デ	ロクロナ デ		高台剥離 黒変
590	109	山皿		19次		表土		8.6	4.0	2.5	粗	硬	灰	口縁部 3/4	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		底部突出
591	110	山皿		19次		表土		8.4	3.9	2.0	粗	硬	灰白	ほぼ完形	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		自然釉 ロクロ目強い
592	115	山皿		19次		表土		8.6	4.4	1.9	粗	硬	灰白	口縁部 1/2	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		底部突出 自然釉
593	102	山茶碗	鉢	19次		表土		30.8			粗	硬	灰	口縁部 1/8	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		自然釉

報告 番号	実測 番号	種別	器形	調査 地区	遺構	位置	法量 (cm)			胎土	焼成	色調	残存率	口縁部調整		体部調整		文様	特記事項
							口径	底径	器高					内面	外面	内面	外面		
594	116	山茶碗	鉢	19次				12.8	粗 細多	硬	灰黄	底部 1/6			ロクロナ デ	ロクロナ デ		貼付高台	
595	470	弥生土器	甕	19次	表土	送水場建物北側			密 細多	硬	にぶい黄橙	口縁・ 体部一部	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコハケ			S字裏0類	
596	105	弥生土器	壺	19次	表土	送水場建物北側		4.2	密 細多	硬	浅黄橙	底部完形				タテハケ		磨滅 上げ底	
597	65	弥生土器	壺	19次	表土	送水場建物北側	14.4		並 細多	並	にぶい黄橙	口縁部 1/6	ヨコナデ	ヨコナデ				磨滅	
598	114	弥生土器	壺	19次	表土	送水場建物北側	6.3	4.4	14.0	密	硬	浅黄橙	完形	タテヘラ ミガキ			タテヘラ ミガキ	小型 磨滅 口縁部内湾	
599	547	山茶碗		22次	3区	表土		7.4	粗	硬	灰白	底部完形			ロクロナ デ	ロクロナ デ		貼付高台 粉殻痕 糸切り	
600	121	山茶碗		19次		検出	H 7	7.4	粗	硬	灰白	底部完形			ロクロナ デ	ロクロナ デ		貼付高台 糸切り 自然釉	
601	300	須恵器	坏	19次		検出	AF18	6.7	密	硬	灰白	底部完形			ロクロナ デ	ロクロナ デ		自然釉	
602	532	須恵器	転用碗	22次	1区	包含層		11.2	密	硬	褐灰	底部 3/4			ロクロナ デ	ロクロナ デ		貼付高台 墨	
603	569	須恵器	壺	22次	1区	包含層		9.6	密	硬	灰	底部 1/3			ロクロナ デ	ロクロナ デ		貼付高台 厚手 自然釉	
604	541	弥生土器	甕	22次	1区	包含層	TP1	12.8	密 細多	硬	にぶい黄橙	口縁部 1/5	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコハケ	タテハケ	○刺突文	磨滅 雲母	
605	546	弥生土器	甕	22次	1区	包含層	TP2	19.4	密 細多	硬	にぶい黄橙	口縁部 1/14	ヨコナデ			タテハケ		磨滅 受け口	
606	595	弥生土器	壺	22次	1区	包含層	TP2	24.6	密 細多	硬	にぶい黄橙	口縁部 1/12						磨滅 キザミ	
607	529	弥生土器	高坏	22次	1区	包含層	TP2		密 細多	硬	橙	脚部一部					○櫛描 直線文	磨滅	
608	542	弥生土器	高坏	22次	1区	包含層	TP2		密 細多	硬	淡黄	脚部 3/4				タテヘラ ミガキ		円孔 3 小型 低脚	
609	600	縄文土器	深鉢	22次	1区	包含層	TP4		やや粗 細多	硬	にぶい黄橙	口縁部一部	ナデ	ナデ			○凸帯文	キザミ	
610	631	縄文土器	深鉢	22次	2区	包含層			やや粗 細多	硬	にぶい黄橙	口縁部一部	ケズリ	ナデ			○沈線文	金雲母	
611	594	弥生土器	壺	22次	2区	包含層		27.6	密 細多	硬	にぶい黄橙	口縁部 1/10	ヨコナデ	ヨコナデ			○凹線文	指頭押圧 キザミ	
612	598	縄文土器	深鉢	22次	1区	SX22018			やや粗 細多	硬	灰褐	口縁部一部	ナデ	ナデ			○凸帯文	キザミ	
613	592	縄文土器	深鉢	22次	1区	SX22018		4.2	やや粗 細多	硬	にぶい黄橙	底部 1/3				ケズリ		平底 金雲母	
614	504	山茶碗		22次	1区	SX22018		14.5	6.8	5.0	粗 細多	硬	灰白	口縁部 3/4	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	貼付高台 粉殻痕
615	609	縄文土器	深鉢	22次	1区	SX22019			粗 細多	硬	灰黄褐	口縁部一部	ケズリ	ケズリ				キザミ	
616	382	土製品	土鉢	19次		P646		(長) (2.8)	(幅) 1.3	(厚) 1.4	密	硬	にぶい黄橙	一部					棒状 円孔
617	575	土製品	土鉢	22次	1区	P130		(長) (3.4)	(幅) 1.6	(厚) 1.7	密	硬	灰白	一部					棒状 円孔

Tab.4 遺物一覧 (2)

報告 番号	実測 番号	種別	器形	調査	地区	遺構	位置	法量 (cm)			石材	特記事項
								器長	器幅	器厚		
19	1006	石器	石籤	22次	2区	P94		2.51	1.99	0.38	サヌカイト	金山産
20	1008	石器	石刀	22次	2区	P94		(6.27)	(2.37)	(1.42)	緑色片岩	
42	1003	石器	石籤	22次	2区	P100		(2.16)	1.99	0.38	サヌカイト	
45	1011	石器	剥片	22次	1区	P175		(1.86)	(3.07)	(0.62)	サヌカイト	二上山産
49	1010	石器	石籤	22次	1区	P179		(2.21)	(0.65)	(0.46)	サヌカイト	二上山産
50	1009	石器	石籤	22次	3区	P192		1.87	(1.28)	0.39	サヌカイト	二上山産
314	1001	石器	ピエスエスキュー	22次	2区	S D 22001	上層	2.48	1.44	1.06	サヌカイト	二上山産
315	1007	石器	ピエスエスキュー	22次	2区	S D 22001	上層	(2.63)	(1.76)	0.53	サヌカイト	二上山産
316	1002	石器	石籤	22次	2区	S D 22001	上層	(1.85)	(1.03)	3.20	サヌカイト	二上山産
317	1004	石器	石籤	22次	2区	S D 22001	上層	2.41	2.02	0.39	サヌカイト	二上山産
318	1005	石器	石籤	22次	2区	S D 22001	中層	(1.96)	1.77	0.43	サヌカイト	二上山産

## VI 結語

平田送水場の前身は鈴鹿海軍工廠の水道施設として供されていた経緯がある。詳細な資料が残されていないため多くは不明であるが、第22次調査において送水場建物下面の調査を行う中で、明らかに当該建物以前の基礎が埋設され、それによって攪乱されている状況を確認した。過去の構造物は軍に関連するものと推測され、昭和18年以降に建てられ、昭和37～38年の平田送水場の増補改良工事によって壊された可能性が高いものと考えられる。第19・22次調査区においても、軍関係の何らかの事業によるものか一定の高さまで面的に切り土され、上部が削平されていることが判明した。そのため、多くの遺構の掘り込みは比較的浅く検出されているが、本来はより濃密に遺構が遺存していたと考えられる。遺構密度もさることながら、竪穴住居及び方形周溝墓、道路遺構、屋敷地等、各時代の重要遺構がより深く残存し、多くの遺物が得られる結果となればと想像すると、非常に残念である。鈴鹿市の歴史を考えるための情報がより濃密に詰まっていたことは間違いない。

今回の調査の結果に基づき、以下に考察を行う。なお、本章で取り上げた鈴鹿市内の遺跡については、Fig.2にその位置図を載せているため、参照されたい。

### 1 縄文時代晩期前半の建物について

今回の調査の結果からは、縄文時代晩期前半の滋賀里2～3式の段階を中心とし、晩期後半の凸帯文期に至る遺構及び遺物の確認に至った。縄文時代晩期の土器は、該当期の遺構の他にも表土や後世の遺構によく混入して

おり、その保有量は集落が機能していたことを想起させるものである。過去の調査結果においては、古代～中世の成果が主となり、縄文時代晩期の土器が少量混入する程度で、明確な遺構は確認されておらず、この時期の生業は舌状台地の先端部を中心とするものと考えられる。

三重県内においては、縄文時代の住居跡は竪穴住居の検出例が圧倒的であり、それ以外の住居跡は数例に留まるのみである。平田遺跡では「V遺構と遺物」で述べた通り、SX22014を平地式住居、SB19086・90・94・22033を掘立柱建物の候補とし、縄文時代晩期前半の集落が存在したのと考えている (Fig.14・18・20・23・30)。しかし、この内、SB19090・22033は全形の把握には至っておらず、それぞれ構成するピット1基から縄文土器片が出土した程度である。また、SB19094は構成するピットからは破片資料のみに留まり、該当期の遺物は柱筋上に存在する土坑からの出土であるため、その帰属時期を積極的に示すものではない。これら3棟は縄文時代晩期前半の掘立柱建物としての可能性を指摘するものであるが、その根拠としてはやや弱いものがある。そのため、確実に建物跡と言えるものはSX22014及びSB19086に限られることになる。

いなべ市に所在する宮山遺跡は、平地式住居を考察する上で非常に重要な遺跡である。宮山遺跡は員弁川右岸の段丘上にあり、縄文時代の埋蔵文化財包蔵地として周知されているが、平地式住居の可能性のある柱穴群が合計22棟検出されている。住居間には重複も認められ、その認定には慎重にならざるを得ない部分もあるが、ある程度まとまって存在することは間違いないだろう。ピ

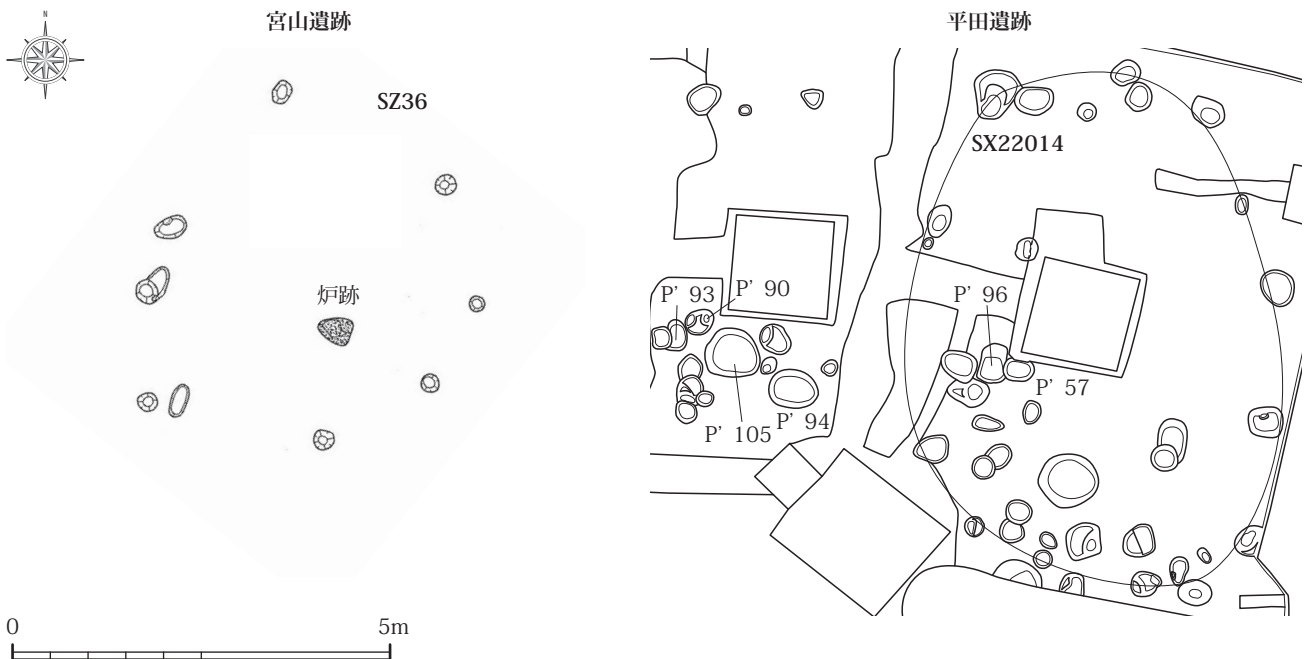
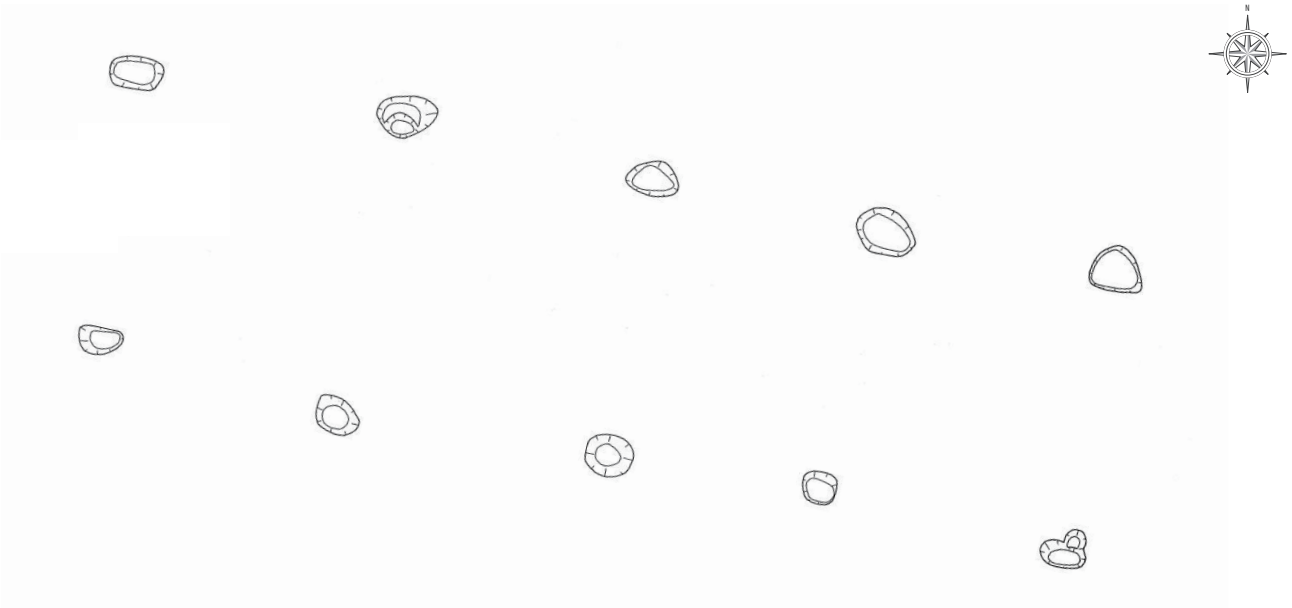


Fig.209 平地式住居 (S=1/100)



王子広遺跡



平田遺跡

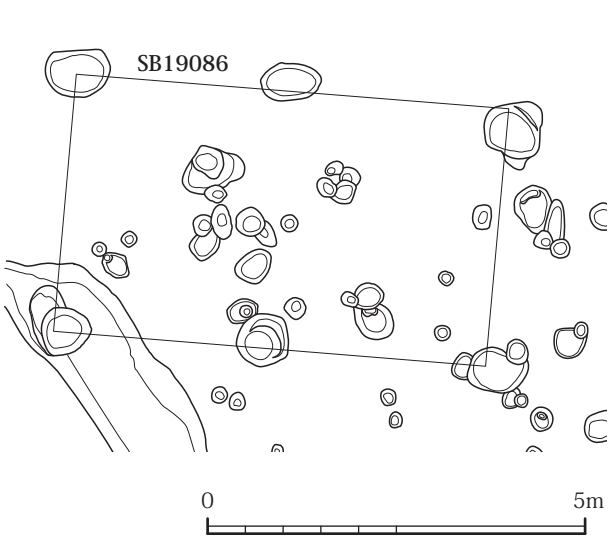


Fig.210 掘立柱建物 (S=1/100)

ット群はほぼ円弧状の配列を基調とする。これらのピットは円形状を呈し、直径0.2～0.3 mの小振りなものが多数を占める。その規模は直径5～8.0 mを測り、正円形状に整然とまとまるものもある。中でも、宮山遺跡SZ36では住居の中心に近い箇所に炉跡と見られる焼土が確認されており、非常に興味深い (Fig.209)。直径は5.0 mと小型の住居である。1棟のみの検出に留まるが、住居の内部に火処を付帯することから、平地式住居の可能性を積極的に示す資料となる。ピットで構成される遺構という性格上、出土遺物の例は限られるが、住居群が立地するB区の包含層からは、縄文時代晩期後半～末頃の遺物がまとまって出土しており、関連性が高いものと判断される。

対して、平田遺跡SX22014は、やや楕円形状にまと

まる。その規模は長軸6.7 m、短軸5.0 mと概ね同等であるが、構成するピットは、直径が0.65 mに達するものもあり、やや大振りの傾向がある。これらが概ね等間隔で環状に配され、縄文土器を含むため、有意な事象であるものと判断される。縄文時代晩期前半の所産であり、宮山遺跡を遡る。住居の内部や付近には、同時期に該当するピットが多数分布している点も特徴的である。平地式住居となれば、県内では遺跡としては2例目となる。

また、掘立柱建物を考察すると、松阪市の王子広遺跡において、県内で唯一となる事例が確認されている。王子広遺跡は櫛田川中流域の左岸にあり、舌状台地の先端部という平田遺跡と近い立地条件にある。縄文時代後期初頭の掘立柱建物が単独で1棟検出されている (Fig.210)。1間×4間で、梁間3.5 m、桁行12.5 m程度の規模である。平田遺跡SB19086も長方形の平面形をなすが、王子広遺跡の例は東西方向に非常に細長い点に差異が認められる。また、構成するピットは共にやや不整な円形状であるところは同様だが、王子広遺跡が直径0.4～0.6 mを測り、直径0.65～0.8 m、深さ0.4～0.55 mの平田遺跡SB19086よりも明らかに小振りである。時期や形状は異なるが、県内で2例目の事例となり、大きな成果である。

縄文時代の集落については、小規模なものが点在する傾向が見られ、特に県内では長期間に変遷するものが少ない様相である。縄文時代の全期にわたって竪穴住居が盛行するが、平田遺跡では未検出である。その中で掘立柱建物及び平地式住居の検出に至った点は、非常に画期的である。竪穴住居及び掘立柱建物、平地式住居、それぞれ用途が異なるのか、その構造や変遷についても大いに興味深い。現状においては圧倒的に検討材料が乏し



【備考】

- ・遺構については、視認性を高めるために色塗りにしているが、全形の不明なものに對しては、概ねその検出範囲に限って彩色している。そのため、遺構の本来の規模・形状を示すものではない
- ・ほぼ同時期になるうが、帰属時期の詳細が不明な竪穴住居及び掘立柱建物については、同じ寒色系でも薄い水色を以って、区別して表現している

古墳時代初頭の埋葬施設

古墳時代初頭～前期の埋葬施設

古墳時代初頭の建物

弥生時代後期～古墳時代初頭の建物

Fig.211 弥生・古墳時代の集落と墓域 (S=1/400)

い。類例の増加を待ちたいが、今回の調査結果は、県内でも数少ない縄文時代晩期の良好な資料として、今後の研究に繋がるものとなろう。

## 2 弥生時代後期～古墳時代初頭の集落と墓域について

縄文時代晩期と同様、舌状台地の先端部を中心として古墳時代初頭には集落が経営される。弥生時代後期後半の山中式の段階に遡る可能性があるものも一部存在するが、古墳時代初頭の廻間Ⅰ式期の資料が中心となる。当該集落は長期間に及ぶものではないが、竪穴住居の建て替えも行われている。併せて検出した掘立柱建物は、倉庫であろうか。眼下には広範に谷底平野が広がり、今でも鈴鹿川の伏流水を活用した水田が営まれているが、当時においても同様の土地利用を行っていたのであろうか。

古墳時代初頭頃の本調査区を俯瞰すると、竪穴住居がやや間を空けながら造られる (Fig.211)。特に SH19001・15・18・34・53・57・60 の 7 棟は、同一、ないしは類似した主軸方向を示し、同時に存続していたものと考えられる。そしてこれらと同時期に相当するのが、方形周溝墓の SX19002・13 と土器棺墓の可能性が

ある P'124 である。特に SH19001 は SX19002・13 の双方と、SH19034 は SX19002 と近接して存在する。SX19002 の全体の規模が不明であるため、SH19034 と重複する可能性があるが、少なくとも SH19001 はこれら埋葬施設の近隣に建つということになる。

この時期における集落域と墓域が近接する事例は、南山遺跡に見ることができる (Fig.212)。南山遺跡は鈴鹿川左岸の台地の先端部にあり、小規模な調査の蓄積によって、弥生時代後期の集落域が検出されている。平成 7 年に実施された第 2 次調査で、調査区の制約にも関わらず、同時期と考えられる竪穴住居 ST01 と方形周溝墓 SX02 を確認している。出土遺物からは、山中式の段階に属するものと考えられる。これらの距離は約 11 m を測り、間の空閑地には環濠や区画溝は存在しない。

平田遺跡においては、SH19001 と SX19002 が 3.4 m、SX19013 が 3.7 m と非常に近い。SX19002・13 が共に 2 辺の検出に留まるため、正確な数値は測定不可能であるが、SH19060 と SX19002 間は 18.0 m を計測し、SH19057 と SX19013 の距離は 10.0 m を下回る。SH19034 と SX19002 は更に近づく可能性がある。また、SH19060 も P'124 と約 10.0 m と近い。集落域と

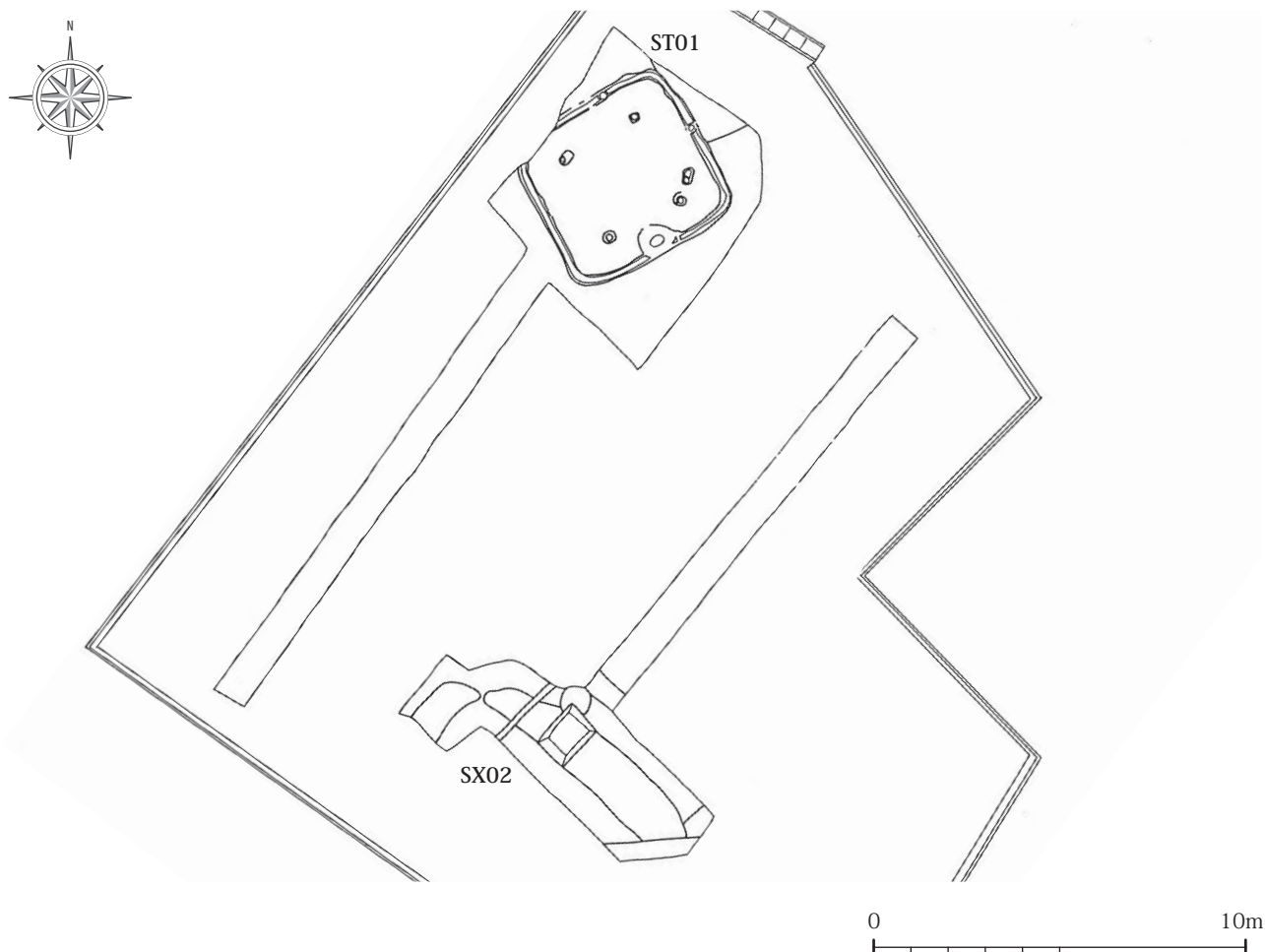


Fig.212 南山遺跡第 2 次調査区 (S=1/200)



近接する墓域の間には、南山遺跡と同じく、これらを区分する遮断施設としての溝は未検出である。そして、SH19001 を中心とする 7 棟の竪穴住居群と SX19002・13 の主軸がほぼ同方向を向く点からも、関係性が深いものと考えたい。

南山遺跡の例は、竪穴住居 1 棟と方形周溝墓 1 基による断片的な情報であるため、全体像は不明であるが、平田遺跡では第 19 次調査区を中心に、集落における土地利用の様相の一端を確認することができた。竪穴住居を帯状に結ぶ集落域の内部において、その一角を墓域が占める。溝によって分けをすることなく、墓域が生活圏内に組み込まれていたことが分かる。また、乳幼児の埋葬施設と見られる P'124 は方形周溝墓とは別に、これの北側へ 16 m 隔絶して配される。周囲の集落が廃絶した後、やや時期を降り、古墳時代初頭～前期には SX22015 が造られるが、これも乳幼児の埋葬に関わる施設であると思われる。この廻間Ⅱ～Ⅲ式期の生業が付近では未確認であるため、集落は移動したものと考えられる。しかし、墓域としての意識は残っており、継続して機能していた可能性が考えられる。乳幼児の埋葬箇所

も定められていたのであろうか。

### 3 古代の道路遺構について

調査当時、第 19 次調査区西部が過去の調査で認識されていた古代の道路遺構の延長線上に位置するため、その検出と存続時期の特定に繋がる重要な成果を得られることが大いに期待され、非常に注目された。当初の想定通り、直線的に走行する道路遺構を検出し、その側溝の北東続きの確認に至った。更に、並行する両側側溝を同時且つ明瞭に確認した点も大きい。SD19009 と SD19021・22 の同時存続により道路の存在を確固とし、その直線性を継承することから、官道である可能性も高まったものと言える。

しかし、従来の見解を大きく補完するものではない。遺物の出土量が僅少であり、その遺存状態も不良であったため、道路の存続時期を直接的に明らかにすることは叶わず、やや残念な結果となった。過去の調査結果からも分かるが、側溝の掘り込み自体が浅く、また大部分が中世の屋敷地内にあるために整地され、加えて後世の切り土によって上部を破壊されていることが大きな要因で



Fig.213 平田遺跡道路遺構 (S=1/1,000)

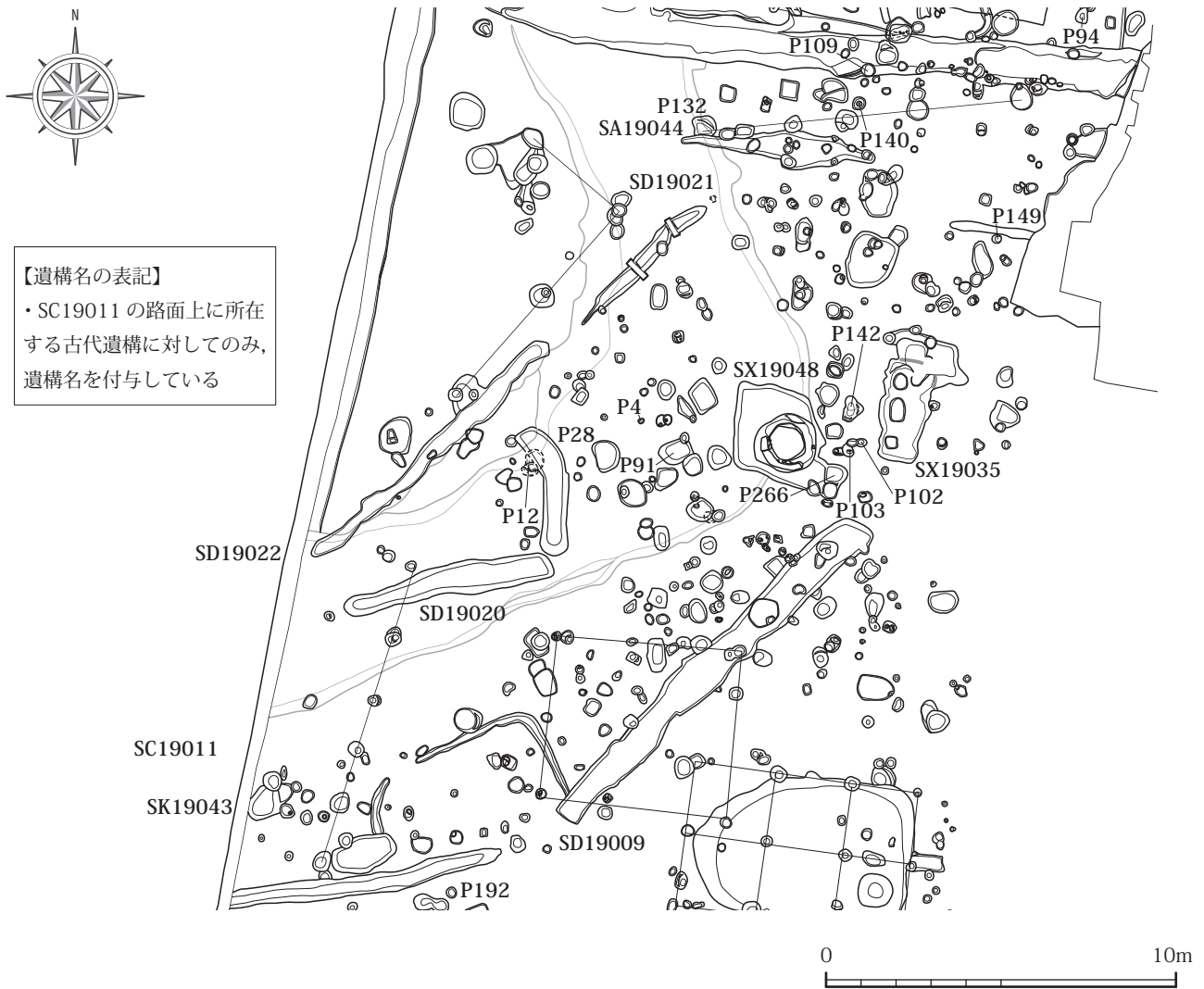


Fig.214 SC19011と路面上の古代遺構 (S=1/200)

あろう。過去の調査結果で得られた図面と合成すると、道路の総検出距離は130mに達し、平田遺跡内をほぼ縦貫する (Fig.213)。その走行方向はE-45°-Nであり、路面幅は約9m (側溝の内法間距離測定) を測る。側溝となる素掘りの溝を2条残すのみで、路面の痕跡は留めない。

道路の帰属時期については、別の角度から考察したい。遺構の重複関係である。SD19009・21・22と直接重複する遺構からは、時期の絞り込みに繋がる有意な遺物の出土はなかったが、SC19011の路面上には複数の古代の遺構が存在する (Fig.214)。直接の切り合い関係があるわけではないので、状況証拠にはならないが、参考資料として挙げたい。この内、所属時期が確実なものは、SA19044・SX19035、P4・109・142・266である。SA19044は9世紀、SX19035・P4・109・142は9世紀前半、P266は8世紀後半～9世紀の産物である。SA19044・P266については、時期に幅があるために除外するが、SX19035・P4・109・142は9世紀前半に

位置付けられ、猿投窯編年のNN268～K14窯式期の産物である。この時期には道路は既に廃絶し、居住地となる等、別の土地利用が行われていたと言える。特に、路面上を中心として古代の遺構が密に分布する点が特徴的である。路面上には具体的な建物は見当たらないが、良好な遺物が出土したP142・266等、多数のピットが存在し、土坑墓SX19035や柵列SA19044等が比較的速やかに、そして積極的に造られたように窺われる。

過去の調査においては、第1次調査の四面廂付掘立柱建物SB0101と重複し、これに切られる。SB0101からは出土遺物に乏しいため、時期決定は困難であるが、概ね9世紀前半頃の年代観が想定されている。加えて、路面上に飛鳥時代～奈良時代初頭の竪穴住居が重なることから、奈良時代を中心とする8世紀代の存続が想定されており、その可能性は高いものと考えられる。

更に注目すべきは、道路の走行方向である。古代においては、鈴鹿市西部に鈴鹿郡、東部に河曲郡、南部に奄芸郡が配置され、平田遺跡は河曲郡との境界付近となる



鈴鹿郡枚田郷に位置する。『倭名類聚抄』によると、北は鈴鹿川を挟んで鈴鹿郡高宮郷、東は河曲郡神戸郷、南は奄芸郡奄芸郷が置かれていたとされる。鈴鹿郡には伊勢国府、河曲郡には伊勢国分寺・尼寺が設置されており、伊勢国の中心であったものと考えられている。道路遺構は直線的形状を示すが、これを延長すると、北東方向は国分町に繋がり、伊勢国分寺跡及び狐塚遺跡（河曲郡家推定地）、国分遺跡（伊勢国分尼寺推定地）が存在し、南西方向は国府の推定地とされる国府町へと至る（Fig.2 15）。更に平田遺跡は両者のほぼ中間地点に立地する。

平田遺跡から北西へ3.8km 離れ、鈴鹿川を挟んだ左岸には長者屋敷遺跡が存在する。鈴鹿市広瀬町から亀山市能褒野町に分布する長者屋敷遺跡では政庁が確認され、近江国庁との類似点から、伊勢国府跡として国の史跡に指定されている。8世紀中葉に造営されたが、8世紀末には廃絶し、長期にわたって維持されなかったものと考えられている。また、長者屋敷遺跡及びそのごく近辺には、官衙に関連する遺物の出土がなく、生活臭に乏しい状況が確認されている。

対して、道路遺構の延長線上に当たる国府町は、「国府（こう）」という地名等から移転国府の推定地とされ、過去の調査からも、卓絶した結果が得られている。伊勢国総社の有力候補地とされている三宅神社を中心に方八町が国府域と推定されているが、三宅神社を含む三宅神社遺跡では、過去に8世紀末～12世紀の掘立柱建物及び井戸等を多数検出している。大規模な掘立柱建物や計画性の高い建物の配置状況が見られると共に、灰釉陶器及び緑釉陶器、円面硯、転用硯（朱墨付）、斎串、横櫓に加え、長者屋敷遺跡と同じ「小」が押印された文字瓦が確認される等、官衙的要素が非常に濃密である。三宅神社遺跡の南東に接する天王山西遺跡でも、8・10～12世紀の成果があり、灰釉陶器及び緑釉陶器、円面硯等が出土している。三宅神社遺跡から北東約800mの梅田遺跡においても、8世紀後半～9世紀の規格性の高い掘立柱建物等が検出されると共に、灰釉陶器や墨書須恵器等が出ており、国府関連遺跡と考えられている。国府町ではそれ以外に、三宅神社遺跡から北東へ約1kmの富士遺跡で、緑釉陶器及び転用硯、黒色土器、志摩式製塩土器、古代瓦等、富士遺跡の北側に隣接する平野遺跡で転用硯が出土している。富士遺跡では黒色土器が比較的良好とまり、全体の出土量に対してその割合は少なくない。三宅神社遺跡からやや隔離したこれらの遺跡においても、官衙に直接繋がる遺構は検出されていないものの、平安時代前期頃の国府や識字層にかかる公的性格を有する期間との関連を想定することができる。これらの遺跡は、道路の直線的経路の沿線に分布する点も特

徴的である。しかしながら、長者屋敷遺跡とは対照的に、国府地方においては国庁が未確認であるため、現状では確実に国府とする根拠に乏しいのも事実である。また、鈴鹿川左岸には、長者屋敷遺跡からやや離れ、伊勢国分寺方向に向けて川原井瓦窯跡群と津賀平遺跡が分布する。川原井瓦窯跡は、伊勢国分尼寺に対する生産遺跡で、伊勢国分寺とは異なる文様の瓦を供給している。津賀平遺跡では、特に8世紀後半～9世紀、平安時代後期の土器がそれぞれ一括して出土している点に特徴がある。灰釉陶器及び緑釉陶器、志摩式製塩土器に加えて石鈔や八棧鏡の出土も見られ、国府関連遺跡の一つと見られる。鈴鹿川左岸における貴重な事例である。

なお、長者屋敷遺跡と三宅神社遺跡は共に鈴鹿郡にあり、鈴鹿川を挟んで約3.5km 隔絶する位置関係にある。国府の移転については、この鈴鹿川を挟んだ長者屋敷遺跡→三宅神社遺跡、若しくは三宅神社遺跡→長者屋敷遺跡→三宅神社遺跡の説が論じられているが、現状では8世紀中葉～後半代という限られた期間において、長者屋敷遺跡に国庁が置かれたことのみが明白である。それ以外の時期の国庁の所在は不明であり、また国府の運営に関わる多数の人間が居住する場所も必要となる。ここで、平田遺跡の道路遺構の走行方向が重要な意味を示唆する可能性がある。直線的に造られた8世紀代の官道が伊勢国分寺・尼寺や河曲郡衙から、律令期の遺構及び遺物を豊富に含む国府町方面へと繋がる。国府町が重要な地点であったことの証左となろうか。また、当時の最重要施設を接続するものとなれば、官営の計画道路であることは勿論、駅路としての性格を有することになる。例えば、8世紀代の東海道である。

現状においては仮定レベルの話でしかないが、まずは平田遺跡以外の延長地点における道路遺構の確認が重要である。恐らく遺構としては側溝の検出が中心となろうが、側溝の掘り込みが浅いために、十分に意識して取り組む必要がある。道路遺構の更なる延伸に加え、文字資料による裏付け、更には国府町における官衙建物の確認等、課題は山積であるが、これらの解明は「伊勢国府」や「駅路」、そして「東海道」の姿を明らかにする上で必須となる。道路の造営には多大なる労力・技術・費用を要したものとされるが、平田遺跡における道路遺構の成果は、この地方の嘗ての政治構造を究明する上で傑出した知見となる可能性があり、今後の調査の進展や積み重ねによって、後に重要な成果へと繋がることを切望する。



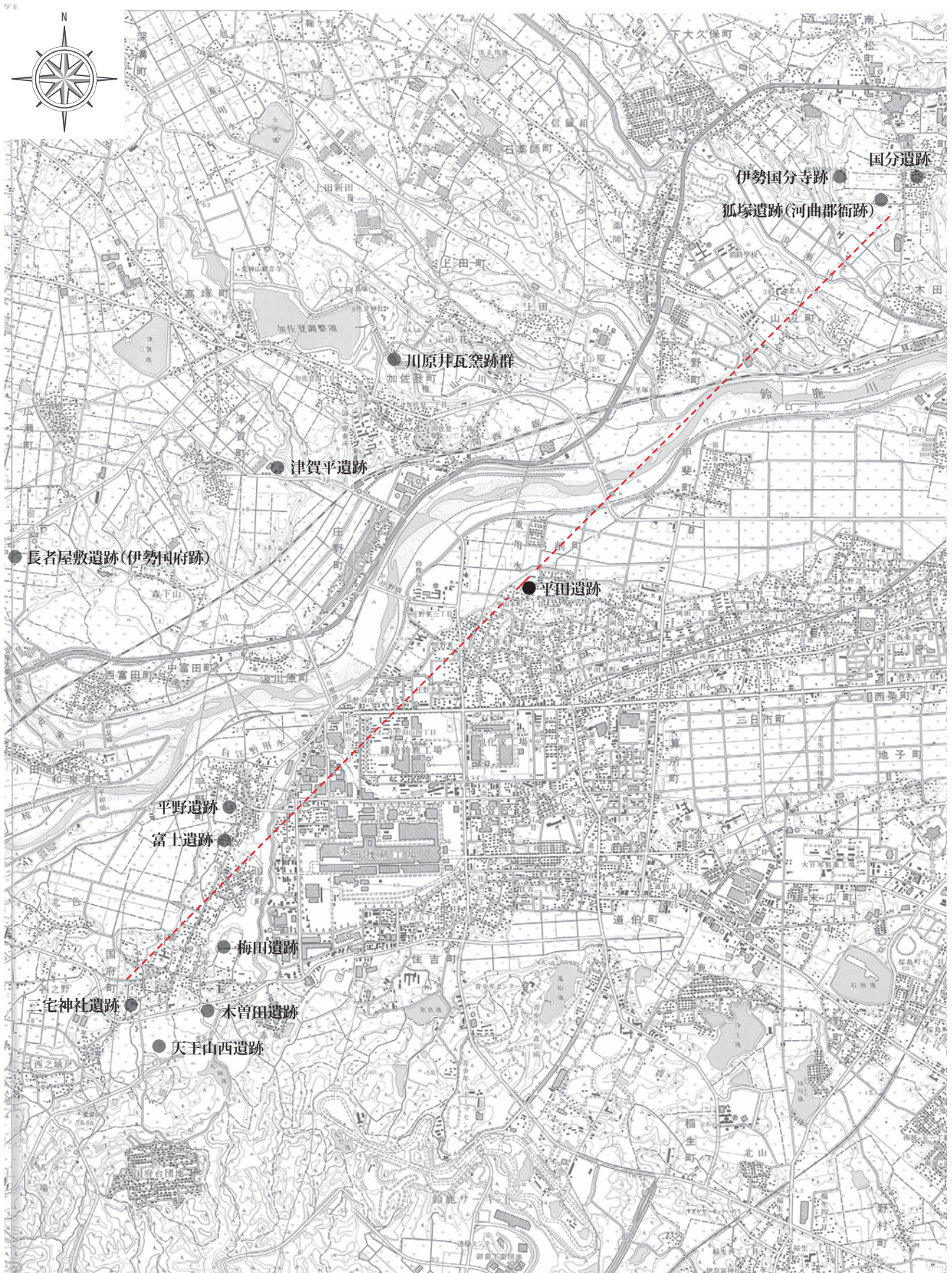


Fig.215 平田遺跡道路遺構の走行方向 (S=1/40,000) ※国土地理院 25,000 分の一地形図利用



## 5 中世の屋敷地について

中世前期となる12世紀後半～13世紀初頭を中心に屋敷地が造られる。敷地は二重の溝によってその周囲を区画されるが、今回の調査によって初めて区画の明瞭なコーナーの検出に至った。区画の北限及び東限が確実となり、その平面形は長形状のプランが志向されていることが分かる。南部の広がりやや疑義が残るものの、全体の規模は東西45.0m、南北72.0m程度（区画外溝の外法間距離測定）に達するものと考えられ、主軸方向はN-12°-W方向を向く（Fig.216）。

各区画内溝の内法間の距離を測定した屋敷地の敷地規模は2,200㎡を超過する広範なものであるが、その内部構造には不明な点が多い。屋敷地内の北から46.0m程度とやや南寄りの位置に掘立柱建物SB0129が存在す

る。東西方向はほぼ中央部に相当するが、この3間×4間の総柱掘立柱建物は主屋であろう。構成するピットからは礎盤と考えられる礫が出土している。主屋の東～南東側には近似した主軸方向を示す建物が2棟建ち、東側が2間×2間の側柱建物で、南東方向の建物が2間×3間の側柱建物であると見られる。居住域の中心はこの南部であると判断されるが、該当時期に帰属する可能性があるものも含めると、中央部やや東寄りの第19次調査区に2間×3間の側柱建物SB19088、やや北部に総柱建物SB19104、SB19104にやや先行する側柱建物SB19084が配される（Fig.217）。

掘立柱建物以外の施設としては、北部のほぼ中央に井戸SE19025が単独で存在する。また、土坑として扱っているが、SK19029～31は土坑墓の可能性が高く、そ



Fig.217 屋敷地と内部施設 (S=1/300)

それぞれSK19029・30とSK19031・32がセット関係をなすものと見られる。SK19029・31という規模の比較的小さい遺構を北側へ配置し、近接し、南北に並べて造られている点に特徴がある。特にSK19032からは青磁椀が出土している。SK19029・30は北部の区画内溝であるSD19008に非常に近接し、またSK19031・32は中央部のやや西寄りに存する。これらは約30mの距離をもつ。やや位置を離して小規模な墓域を形成し、屋敷墓であると考えられる。規模を異にする土坑墓を隣接して配しており、秩序なく造られたものではないものと考えられる。

その他、特徴的な施設に、総柱掘立柱建物SB19104に付帯する大型土坑状遺構SX19003が存在する(Fig.218)。SX19003は当初、SB19104に付帯するいわゆる南東隅土坑であると考えた。南東隅土坑は掘立柱建物の南東隅に造られることが多く、厩的な性格を想定されることもある施設であるが、近隣でも鈴鹿市梅田遺跡及び天王山西遺跡、中尾遺跡等で検出されており、同様の施設になる可能性を考えた。しかし、多くの場合に

付帯する排水溝のような溝状遺構が付帯せず、そもそもSB19104の南東隅に位置付けられるものではないため、別の性格が考えられる。慎重に検出し、検討を重ねたものの、SB19104の建物範囲が広がる可能性は低く、SX19003はSB19104のほぼ全域と重なり、その下面に掘削された遺構ということになる。埋土には焼土及び炭化物を含むものではないため、焼成坑でもない。削平された影響によるものか、掘り込みは浅いものの、出土遺物は当該調査区において検出した遺構の中で屈指の多さであり、主に北～北東部にまとまる。青磁が比較的多量に出土している他、白磁も出ている。このような点から、地下室をもつ倉庫的な性格を考慮したい。但し、攪乱を受けているとしても、破片資料が多数を占め、完形品の出土は僅かである。

SB19104及びSX19003のすぐ近辺には、「V遺構と遺物」において記述した出入口が所在する。南北方向の区画外溝SD19005が内溝SD19006とほぼ同じ深さになるように底面レベルを上げられ、この箇所にはSD19006に少なくとも1間×2間の橋状遺構SX19100

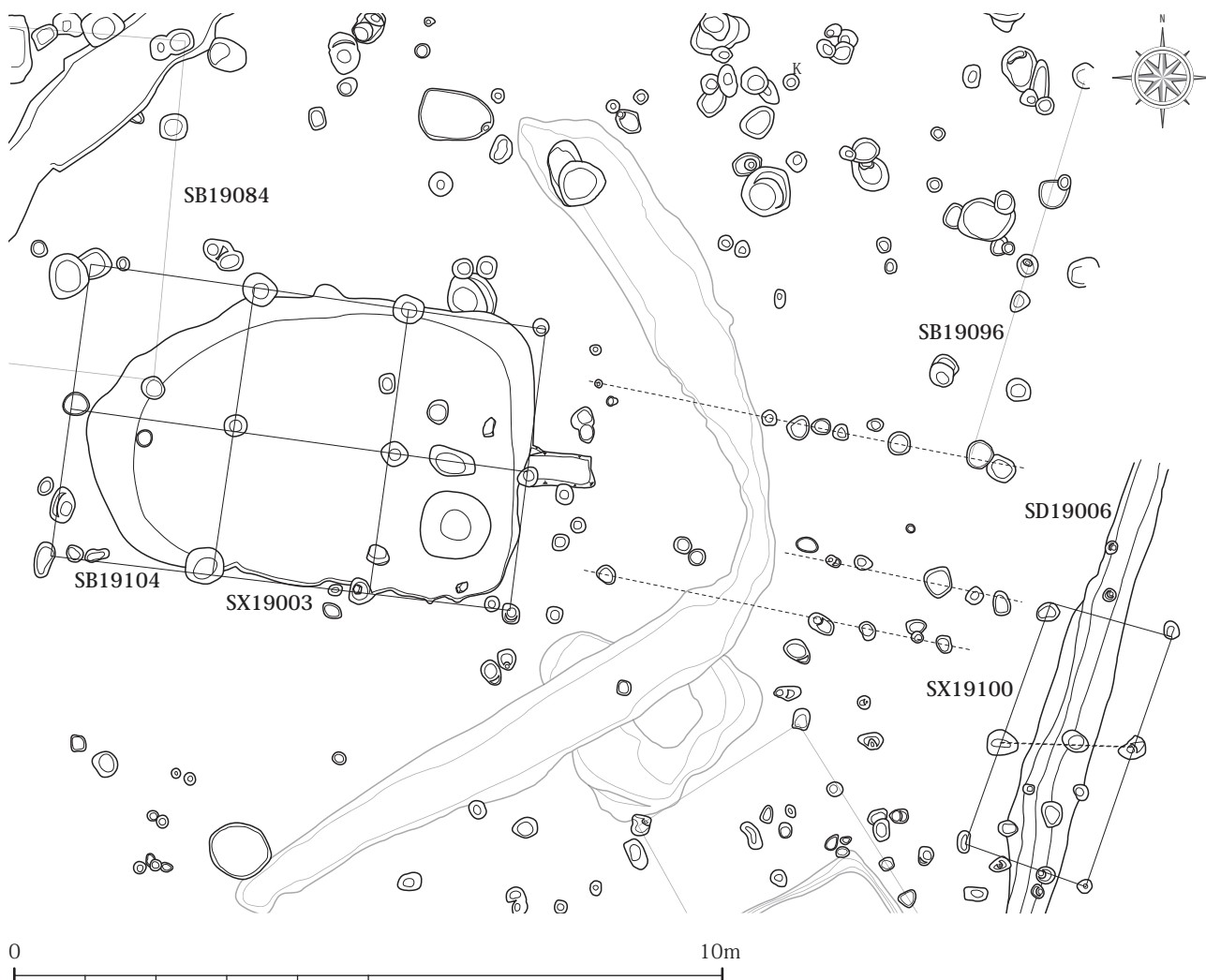


Fig.218 SX19003・100・SB19104 (S=1/100)

がかけられる。その築造段階から企画性が必要となる。屋敷地の敷地全体における北から 1/3 程度とやや北寄りに配置される。なお、出入口から SB19104 と SX19003 方面に向かって柵列状にピットが並ぶ可能性があり、通路的な要素も含むが、やや整合性に欠けるために確証は得ない。

屋敷地の外周を囲繞する二重の溝の間には、塀や土塁のような遮蔽施設が存在が想定できるが、土層断面の観察からは SD19005 のベルト C・F において、地山ブロックを多量に包含する 9 層が内側から崩落するように流れ込んでおり、その痕跡であると言えるのかもしれない (Fig.153)。同様の事例は過去調査における区画溝にも見られたとのことで、当該屋敷地は遮蔽・防御施設を伴う閉鎖的な空間を有していたものと考えられる。また、立地条件としても、鈴鹿川を望む舌状台地の先端部にあり、見晴らしに優れると共に、北側の平野部は 4～5 m 程度低い位置に広がるため、閉塞性も高いものと判断される。

比較的近隣における同時期の類例を見ると、亀山市の糶屋垣内遺跡がある。糶屋垣内遺跡は鈴鹿川左岸の開析谷によって形成された台地上に位置し、平成元～2 年に調査が行われている。8 世紀後半～14 世紀中葉に継続的に営まれた集落遺跡であり、平田遺跡の屋敷地とほぼ同時期となる 12 世紀後半～13 世紀前半には、溝によって画された区画と共に、掘立柱建物が 37 棟と濃密に検出されている (Fig.219)。主屋と見られる大規模な中核的建物の他に、溝を付帯する厠的性格が想定される建物や総柱建物に付帯する南東隅土坑、井戸等が確認されている。非常にバリエーションに富んだ内容を内包するが、やや蛇行する溝によって区画され、屋敷地を形成していたものと見られる。区画の内部についても、比較的小規模の溝によって細分されている特徴を有している。平田遺跡と同様、「上」の墨書が施された山茶碗が出土しているが、貿易陶磁器の包含量はやや乏しい。

また、雲出川北岸における自然堤防上に形成された雲出島貫遺跡においても、同様の施設が確認されている (Fig.220)。11 世紀後半から本格的に屋敷地 (報告上、区画を伴う居住空間について「居館」との概念で捉えられている) が営まれるが、二条の溝が敷地の外部を区画し、内部には複数の掘立柱建物群が建てられる。この時期には、土師器の消費量が突出する。12 世紀前半に入ると、敷地の内部の区画によって、居住域と墓域とが区分される様子が認められるようになる。居住域内も区画によって細分される。出土品には、鋳型片や貿易陶磁器品が多種・多量に見られ、商工業に関わる遺跡であったと想定されている。屋敷地は 13 世紀中葉までには洪水

等によって埋没し、以降は廃絶したものと見られ、その廃絶時期は平田遺跡の例に近い。糶屋垣内遺跡と雲出島貫遺跡の事例、平田遺跡とほぼ同時期には、大きな区画の範囲内を小区画で区分している。平田遺跡第 19・22 次調査区の屋敷地では、その外周を区画する敷地の内部にやや時期を遡る SD19024 を断片的に確認したのみで、細分化された可能性は低いものと見られる。居住域や墓域を区画溝によって分化するような志向は見受けられず、雲出島貫遺跡における 11 世紀後半～12 世紀初頭の段階で留まっている様相が窺われる。

それ以外にも、平田遺跡から南西に約 3.5km 離れた国府町に所在する梅田遺跡において、8 世紀後半～9 世紀に盛行し、10～11 世紀の空白期間を隔てた後、12 世紀頃には大規模な掘立柱建物を含めて 11 棟の建物が建てられる。これらは幅 1.4 m、深さ 1.0 m 程度の溝によって囲繞されたものと考えられる。「上」や「呈？」の文字や「モミジ」の絵が描画された墨書山茶碗の他、青磁四耳壺や白磁等の貿易陶磁器が多数出土しており、鈴鹿市におけるこの時期の成果としては卓逸している。しかしながら、本報告がなされていないため、遺跡の評価はこれを経た後に行うことが妥当であろう。

第 19・22 次調査区においてその主体を検出した屋敷地は 1 つの区画を形成するものでしかない。過去の調査では、宅地造成にかかる道路部分や個人住宅部分が対象であったため、面的に確認した場所は少ないが、同様の区画溝が当該調査区の西～南方に広がるものと考えられる。特に西側に隣接する区画は、ほぼ同規模になるものと見られ、主屋の可能性が高い 4 間×5 間の総柱掘立柱建物と小型の総柱建物が並ぶ。これらの建物の主軸方向は同一である。東側の区画の境には 2 条の溝が掘削され、第 19・22 次調査区の屋敷地と共用されていたものと見られる。この区画の南側にも区画溝と建物が存在し、更に区画範囲は広がり、同じような遺構が広がる可能性が高い。対して、第 19・22 次調査区の以東は極端に遺構及び遺物の密度が減るため、当該調査区が屋敷地範囲の北東限になろう。

これらの施設が廃絶した 13 世紀後半以降の生業は殆ど確認することができず、その後は文献を中心として平田氏の動向が伝わる程度である。『鈴鹿市史』及び『三重の中世城館』によると、応仁元年 (1467 年) に平田直隣が天下の乱れを見て、亀山市の海善城から枚田郷平田に城を移したとある。鈴鹿川から用水を引いて民力を養ったが、後に賢元のとくに武田信玄と結んで織田信長に対抗するも、1568 年に信長の伊勢平定に伴って攻撃されて落城し、自害したとされる。賢元の子である元綱は 1580 年に再興を図るも成らず、桓武平氏の子孫と



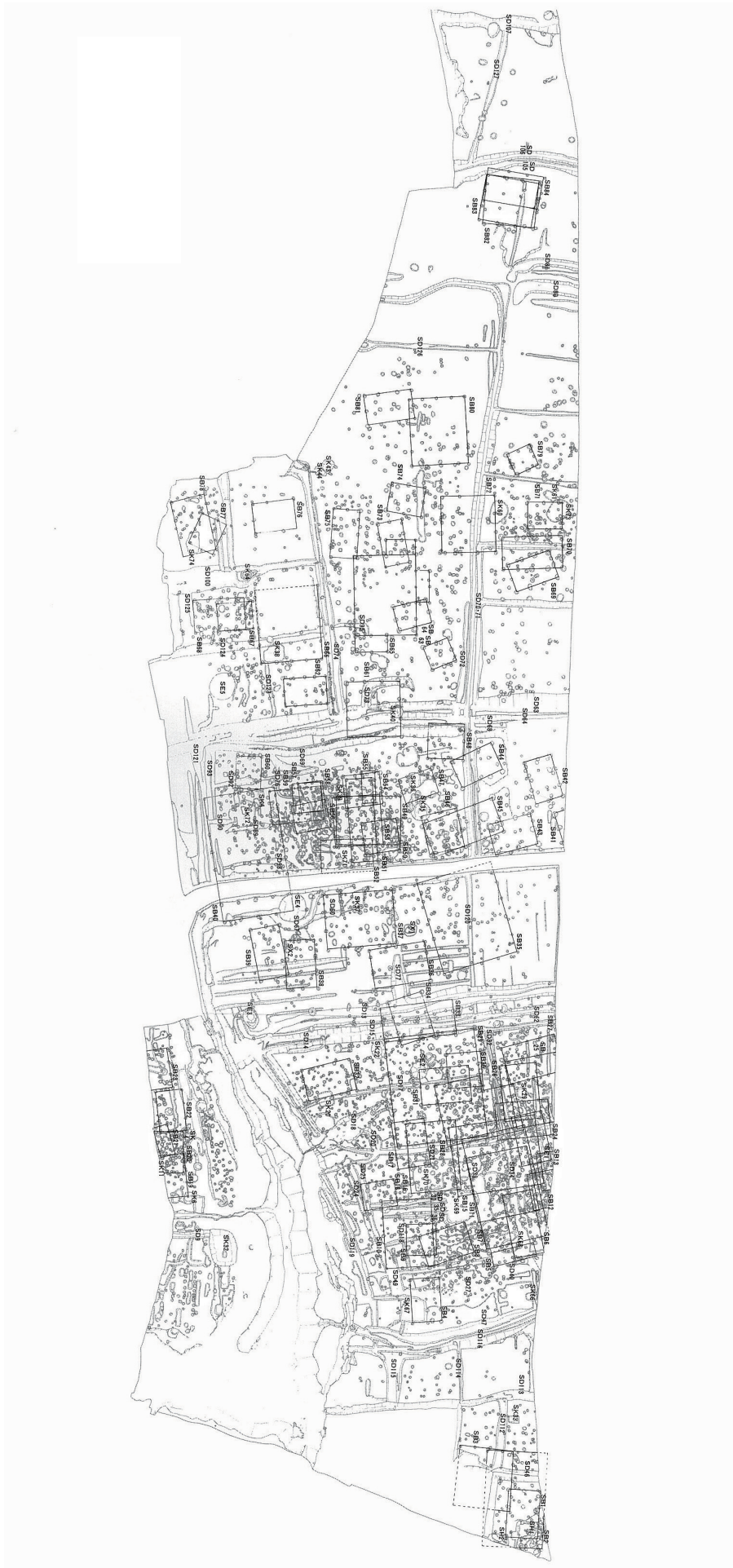
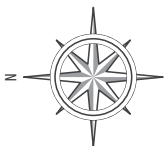


Fig.219 花屋垣内遺跡屋敷地 (S=1/600)

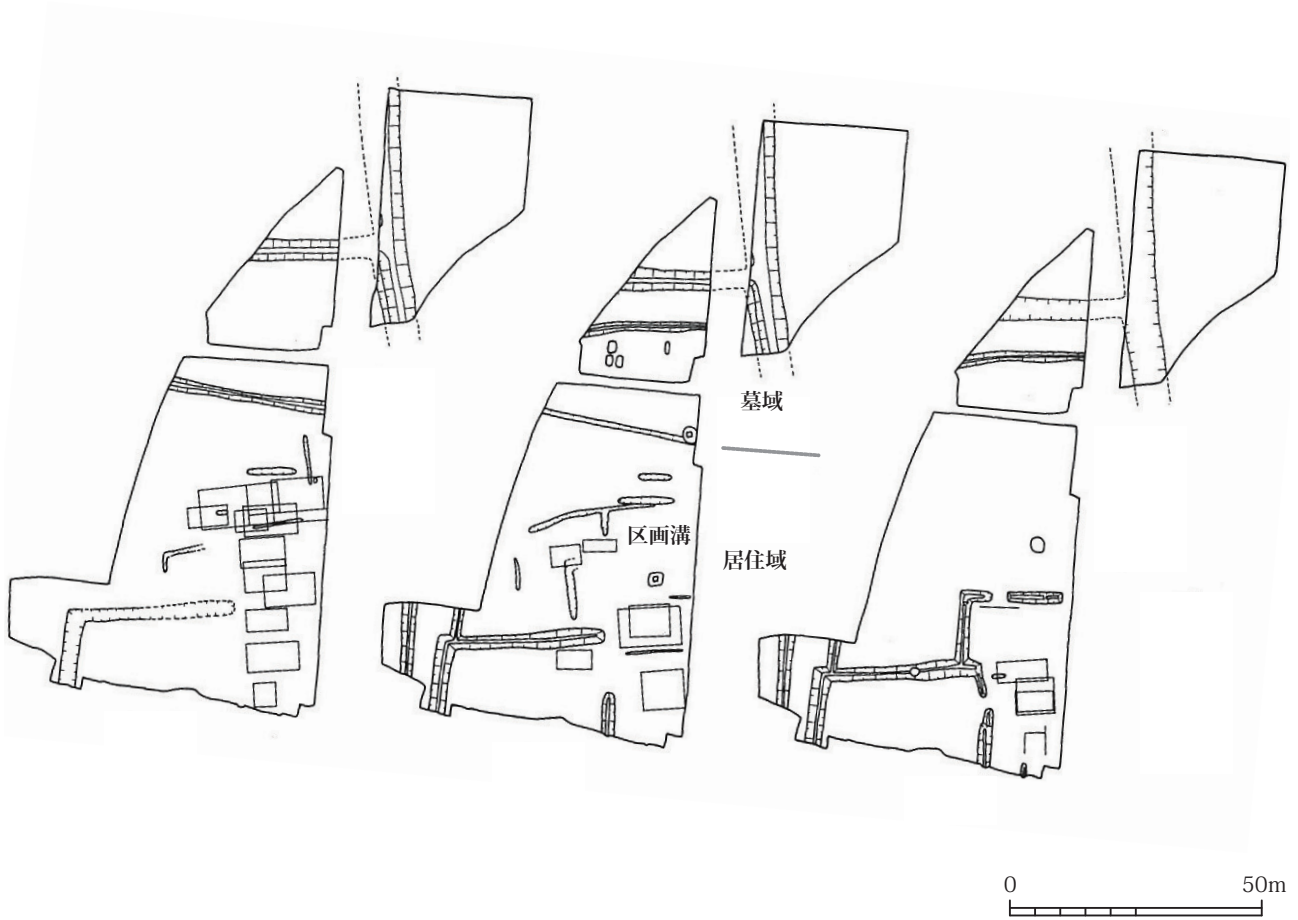


Fig.220 雲出鳥貫遺跡居館 (S=1/1,500)

伝わる平田氏は滅亡したと伝わる。約 100 年余もの間、当地において隆盛していたとされるが、現在では土塁及び堀の痕跡によって確認されるだけである。周辺地及び過去の調査においても、その存在を積極的に示す成果は得られず、この時期の出土遺物は極端に僅少である。発掘調査の結果からは、平田氏の動向は不明であると言わざるを得ず、更に中世前期における屋敷地の存在と平田氏も結び付かない。屋敷地の形成主体は特定できないが、区画溝やその内部からは貿易陶磁器が比較的まとまり、墨書山茶碗や朱墨が付着した山茶碗の出土から、在地有力者層の居住が想定される。

## 【参考文献】

- 仲見秀雄 1980 『鈴鹿市史 第1巻』 鈴鹿市
- 三重県教育委員会 1977 『三重の中世城館』 三重県良書出版会
- 吉田真由美 2005 『平田遺跡(第1次発掘調査概要報告)』 鈴鹿市考古博物館
- 吉田真由美 2005 「平田遺跡(2次)」 『鈴鹿市考古博物館年報 第7号』 鈴鹿市考古博物館
- 水橋公恵・林 和範 2006 「平田遺跡(3次)」 『鈴鹿市考古博物館年報 第7号』 鈴鹿市考古博物館
- 林 和範 2006 「平田遺跡(4次)」 『鈴鹿市考古博物館年報 第7号』 鈴鹿市考古博物館
- 林 和範 2006 「平田遺跡(5次)」 『鈴鹿市考古博物館年報 第7号』 鈴鹿市考古博物館
- 吉田真由美 2007 「平田遺跡(6～8・10次)」 『鈴鹿市考古博物館年報 第8号』 鈴鹿市考古博物館
- 吉田真由美 2007 「平田遺跡(9次)」 『鈴鹿市考古博物館年報 第8号』 鈴鹿市考古博物館
- 吉田真由美 2008 「平田遺跡(第12・14次)」 『鈴鹿市考古博物館年報 第9号』 鈴鹿市考古博物館
- 吉田真由美 2008 「平田遺跡(第11・13・15～17次)」 『鈴鹿市考古博物館年報 第9号』 鈴鹿市考古博物館
- 吉田真由美 2009 「平田遺跡(第18次)」 『鈴鹿市考古博物館年報 第10号』 鈴鹿市考古博物館
- 吉田真由美 2012 「平田遺跡(第20次)」 『鈴鹿市考古博物館年報 第13号』 鈴鹿市考古博物館
- 吉田真由美 2012 「平田遺跡(第21次)」 『鈴鹿市考古博物館年報 第13号』 鈴鹿市考古博物館
- 吉田隆史 2013 「平田遺跡(第23次)」 『鈴鹿市考古博物館年報 第14号』 鈴鹿市考古博物館
- 新田 剛 2013 「平田遺跡(第24次)」 『鈴鹿市考古博物館年報 第14号』 鈴鹿市考古博物館
- 藤原秀樹 1996 「中尾遺跡発掘調査概要」 『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報 IV』 鈴鹿市教育委員会
- 藤原秀樹 2007 『竹野一丁目遺跡』 鈴鹿市考古博物館
- 藤原秀樹 1996 「竹野一丁目遺跡(第2次)」 『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報 IV』 鈴鹿市教育委員会
- 藤原秀樹 2006 「竹野一丁目遺跡(第3次)」 『鈴鹿市考古博物館年報 第7号』 鈴鹿市考古博物館
- 新田 剛・吉田隆史 2009 「竹野一丁目遺跡(第4次)」 『鈴鹿市考古博物館年報 第10号』 鈴鹿市考古博物館
- 岡田雅幸 1996 「岡太神社遺跡発掘調査報告」 『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報IV』 鈴鹿市教育委員会
- 杉立正徳 1997 「岡太神社遺跡発掘調査報告(2次)」 『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報V』 鈴鹿市教育委員会
- 新田 剛 2009 「岡太神社遺跡(第3次)」 『鈴鹿市考古博物館年報 第10号』 鈴鹿市考古博物館
- 吉田真由美 2011 「岡太神社遺跡(第4次)」 『鈴鹿市考古博物館年報 第12号』 鈴鹿市考古博物館
- 吉田隆史 2013 「岡太神社遺跡(第5次)」 『鈴鹿市考古博物館年報 第14号』 鈴鹿市考古博物館
- 吉田真由美 2013 「岡太神社遺跡(第6次)」 『鈴鹿市考古博物館年報 第14号』 鈴鹿市考古博物館
- 杉立正徳 2000 「岡田南遺跡」 『鈴鹿市考古博物館年報 第1号』 鈴鹿市考古博物館
- 吉田隆史 2011 『岸岡山Ⅲ遺跡(第2次)』 鈴鹿市考古博物館
- 新田 剛 2010 『八重垣神社遺跡(第6次)』 鈴鹿市考古博物館
- 伊藤 洋 2010 『十宮古里遺跡発掘調査報告』 鈴鹿市考古博物館
- 新田 剛 1993 『上箕田遺跡』 鈴鹿市教育委員会
- 田部剛士 2010 『保子里遺跡発掘調査報告書』 鈴鹿市考古博物館
- 新田 剛 2010 『津賀平遺跡(第2次発掘調査報告書)』 鈴鹿市考古博物館
- 新田 剛ほか 1996 「富士遺跡発掘調査報告」 『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報 IV』 鈴鹿市教育委員会
- 田部剛士 2008 「富士遺跡(第2次)」 『鈴鹿市考古博物館年報 第9号』 鈴鹿市考古博物館
- 吉田隆史 2010 「富士遺跡(第3次)」 『鈴鹿市考古博物館年報 第11号』 鈴鹿市考古博物館
- 伊藤 淳 2005 「平野遺跡」 『鈴鹿市考古博物館年報 第6号』 鈴鹿市考古博物館
- 新田 剛 1996 「一反通遺跡発掘調査報告」 『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報 IV』 鈴鹿市教育委員会
- 岡田雅幸・林 和範 2003 「一反通遺跡(第4次)」 『鈴鹿市考古博物館年報 第4号』 鈴鹿市考古博物館
- 森川常厚 1994 『磐城山遺跡発掘調査報告』 三重県埋蔵文化財センター
- 杉立正徳 1997 『磐城山遺跡発掘調査概要』 『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報V』 鈴鹿市教育委員会
- 田部剛士 2012 「磐城山遺跡(第3次)」 『鈴鹿市考古博物館年報 第13号』 鈴鹿市考古博物館
- 新田 剛 1991 『南山遺跡・南山6号墳』 鈴鹿市教育委員会
- 新田 剛 1995 『南山遺跡発掘調査報告』 『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報 III』 鈴鹿市教育委員会
- 伊藤淳ほか 2007 「南山遺跡(第3次)」 『鈴鹿市考古博物館年報 第8号』 鈴鹿市考古博物館
- 藤原秀樹 2008 「南山遺跡(第4次)」 『鈴鹿市考古博物館年報 第9号』 鈴鹿市考古博物館
- 岡田雅幸・林 和範ほか 2001 『天王山西遺跡・三宅神社遺跡・梅田遺跡』 鈴鹿市教育委員会
- 吉田真由美 2009 「萱町遺跡(第2次)」 『鈴鹿市考古博物館年報 第10号』 鈴鹿市考古博物館
- 林 和範 2006 「天王遺跡(第13次)」 『鈴鹿市考古博物館年報 第7号』 鈴鹿市考古博物館
- 北条正則・林 和範 2003 「天王遺跡8次」 『鈴鹿市考古博物館年報 第4号』 鈴鹿市考古博物館



- 新田 剛・豊田祥三 2002 『天王遺跡（第5次調査）発掘調査報告書』 鈴鹿市教育委員会
- 仲見秀雄 1961 『上箕田』 三重県立神戸高等学校郷土史研究クラブ
- 真田幸成・大場範久 1970 『上箕田-弥生式遺跡第二次調査報告』 鈴鹿市教育委員会
- 上村安生 2002 「伊勢・伊賀地域」『弥生土器の様式と編年 東海編』 木耳社
- 上村安生 2005 「弥生土器編年概観」『三重県史 資料編 考古1』 三重県教育委員会
- 田中秀和 2005 「古墳時代須恵器編年概観」『三重県史 資料編 考古1』 三重県教育委員会
- 赤塚次郎 1990 『廻間遺跡』 財団法人 愛知県埋蔵文化財センター
- 赤塚次郎 1992 『山中遺跡』 財団法人 愛知県埋蔵文化財センター
- 赤塚次郎 1994 『松河戸遺跡』 財団法人 愛知県埋蔵文化財センター
- 赤塚次郎 2001 『松河戸・宇田様式の再編』 財団法人 愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財センター
- 赤塚次郎 1997 『西上免遺跡』 財団法人 愛知県埋蔵文化財センター
- 宮腰健司 1994 『朝日遺跡Ⅴ（土器編・総集編）』 財団法人 愛知県埋蔵文化財センター
- 赤塚次郎 2001 『八王子遺跡』 財団法人 愛知県埋蔵文化財センター
- 清水政宏 2003 『山奥遺跡Ⅰ』 四日市市教育委員会
- 清水政宏 2004 『山奥遺跡Ⅱ』 四日市市教育委員会
- 伊藤裕偉 2004 『河曲の遺跡 河田宮ノ北遺跡・宮ノ前遺跡・八重垣神社遺跡(第1～3次)発掘調査報告』 三重県埋蔵文化財センター
- 田辺昭三 1966 『陶邑古窯址群Ⅰ』 平安学園考古学クラブ
- 田辺昭三 1981 『須恵器大成』 角川書店
- 東海土器研究会編 2000 『須恵器生産の出現から消滅』
- 竹内英昭 1999 『宮山遺跡』 三重県埋蔵文化財センター
- 松阪市教育委員会 1990 『王子広遺跡発掘調査報告書』
- 小山憲一・川崎志乃ほか 2008 『大原堀遺跡発掘調査報告（第2・3次調査）』 三重県埋蔵文化財センター
- 三重県教育委員会 2001 『斎宮跡発掘調査報告Ⅰ』 斎宮歴史博物館
- 永井宏幸 1996 「清郷型鍋再考」『年報 平成7年度』 財団法人 愛知県埋蔵文化財センター
- 城ヶ谷和広 1991 「古代尾張の土師器 ～6世紀後半から11世紀の様相～」『年報 平成2年度』 財団法人 愛知県埋蔵文化財センター
- 伊藤裕偉 2000 『嶋貫Ⅱ』 三重県埋蔵文化財センター
- 伊藤裕偉・川崎志乃 2001 『嶋貫Ⅲ』 三重県埋蔵文化財センター
- 亀山 隆 1994 『糞屋垣内遺跡』 三重県埋蔵文化財センター・亀山市教育委員会
- 中世土器研究会編 1995 『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社
- 藤澤良祐 2007 『愛知県史 別編 窯業2 中世・近世 瀬戸系』 愛知県
- 藤澤良祐 1982 「瀬戸古窯跡群Ⅰ」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅰ』 瀬戸市歴史民俗資料館
- 藤澤良祐 1994 「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要 第3号』 三重県埋蔵文化財センター
- 尾野善裕 1997 「中世食器の地域性 東海・濃飛」『国立歴史民族博物館研究報告 第71集』 国立歴史民族博物館
- 中野晴久 1987 「知多古窯址群の山茶碗」『マージナル No.7 《特集》山茶碗窯』 愛知考古学談話会
- 中野晴久 1994 「生産地における編年について」『中世常滑焼をおって』 日本福祉大学知多半島総合研究所
- 伊藤裕偉 1993 「中世前期における伊勢の土師器皿について」『関西大学考古学研究室開設四拾周年記念考古学論叢』 関西大学文学部考古学研究室
- 伊藤裕偉 1999 「中世後期中北勢系土師器群に関する覚書」『研究紀要 第8号』 三重県埋蔵文化財センター
- 伊藤裕偉 1992 「南伊勢系土師器の展開と中世土器工人」『研究紀要 第1号』 三重県埋蔵文化財センター
- 伊藤裕偉 1990 「中世南伊勢系の土師器に関する一般試論」『Mie History』 三重歴史文化研究会
- 寺沢知子 1992 「カマドへの祭祀的行為とカマド神の成立」『同志社大学考古学シリーズⅤ 考古学と生活文化』 同志社大学考古学シリーズ刊行会
- 角正淳子 2004 「辻子遺跡出土の古代末から中世の土器について」『辻子遺跡』 三重県教育委員会
- 穂積裕昌 2002 「遺構・遺物のまとめと考察」『六大A遺跡』 三重県教育委員会
- 川崎志乃 2002 「墨書土器について」『里前遺跡』 三重県教育委員会
- 上村安生・竹田憲治ほか 1995 『北野遺跡（第2・3・4次）発掘調査報告』 三重県埋蔵文化財センター
- 竹田憲治 1996 『北野遺跡（第5次）発掘調査概報』 三重県埋蔵文化財センター
- 竹田憲治 1998 「県内における土師器焼成坑の調査」『研究紀要 第7号』 三重県埋蔵文化財センター
- 竹田憲治 2001 「土師器焼成坑の立地と形態について」『研究紀要 第10号』 三重県埋蔵文化財センター
- 上村安生 1998 「三重県内の土師器焼成坑について」『研究紀要 第7号』 三重県埋蔵文化財センター
- 花井圭一・浅尾 悟ほか 2002 『鈴鹿市のあゆみ（軍都から平和都市へ）』 鈴鹿市

鈴鹿市水道局 2011 『鈴鹿市水道事業年報 平成 22 年度』  
鈴鹿市水道局 2010 『鈴鹿市水道事業年報 平成 21 年度』  
鈴鹿市水道局 2000 『鈴鹿市水道事業年報 平成 11 年度』  
水谷芳春・宇佐美亜紀ほか 2008 『諸戸水道調査報告書』 桑名市教育委員会





# 写真図版

# 遺 構



19次調査区全景 真上から





22次調査区全景 真上から





19次調査区全景 西から



19次調査区遠景 北から



22次調査区全景 西から



22次調査1区全景 真上から





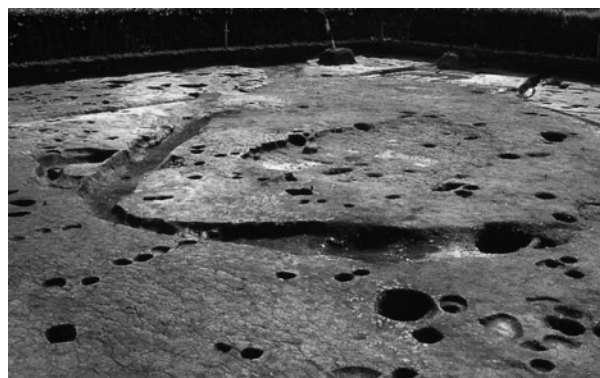
22次調査2区全景 真上から



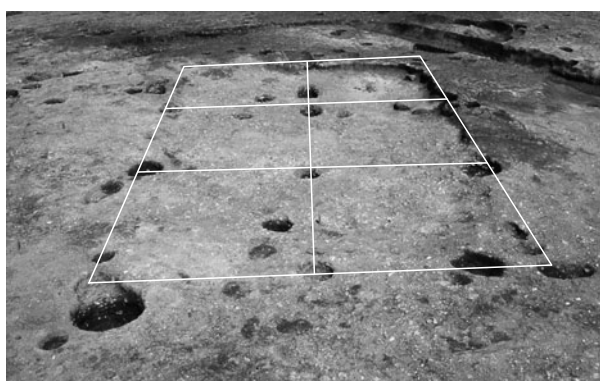
22次調査3区全景 真上から



SH19001 完掘 北西から



SX19002 完掘 北東から



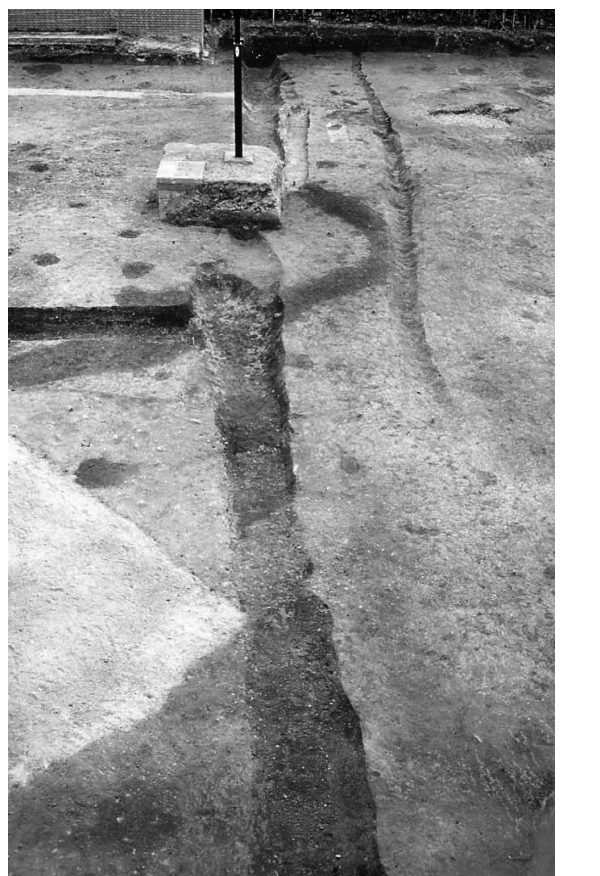
SX19003・SB19104 完掘 西から



SD19004 検出 北東から



SD19004 完掘 北東から



SD19005・6 完掘 北から



SD19005 東西完掘 北から





SD19007・8 完掘 東から



SD19009 検出 北東から



SR19011 完掘 北東から



SD19010 完掘 北東から



SH19012 検出・57 完掘 北東から



SH19012・57・SD19023 完掘 北西から





SX19013 完掘 北西から



SH19014 完掘・53 検出 南西から



SH19014・53 完掘 南から



SH19014 土坑遺物 南から



SH19053 土坑遺物 北から



SH19015 完掘 南から



SH19015 遺物 東から



SF19016 検出 南東から





SF19016 焼土・炭化物検出 北西から



SF19016 完掘 南東から



SX19017・SH19018 完掘 北西から



SX19017 遺物 北東から



SX19017 下層遺物 北東から



SD19020・24 完掘 北東から



SD19024 遺物 南から



SE19025 全景 北から





SH19034 完掘 北から



SX19035 遺物 南から



SB19036 完掘 北から



SA19037 完掘 北から



SA19044 完掘 東から



SH19058 検出・59 完掘 東から



SH19058・59 完掘 北から



SH19060 完掘・61 検出 東から





SH19060・61 完掘 東から



SH19060 遺物 北から



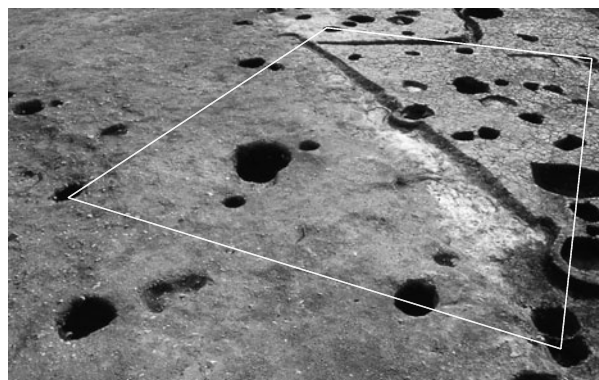
SK19073 遺物 北から



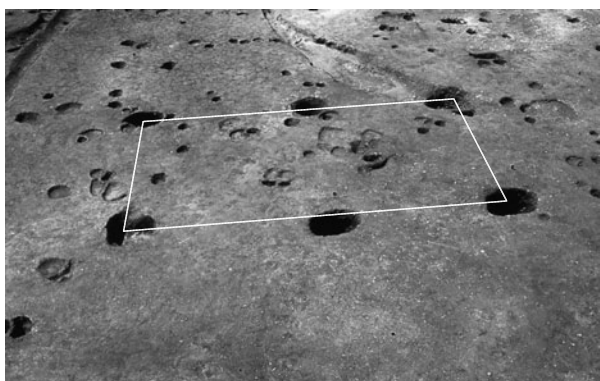
SX19074 遺物検出 北から



SX19074 遺物 北から



SB19084 完掘 北東から



SB19086 完掘 北から

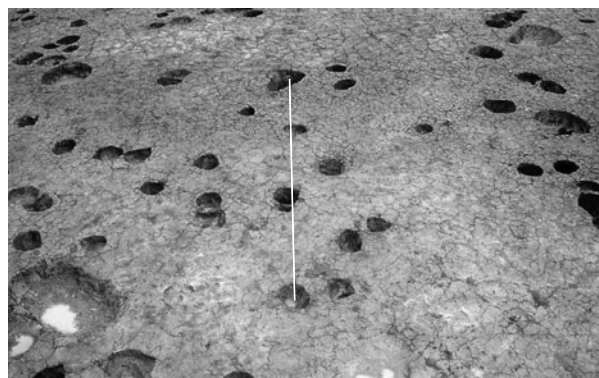


SB19090 完掘 南から

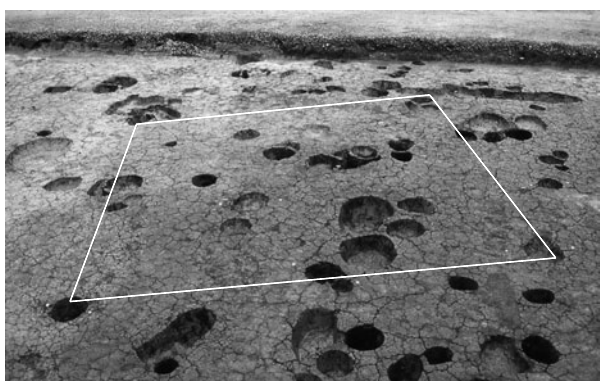




SA19091 完掘 北西から



SA19099 完掘 北西から



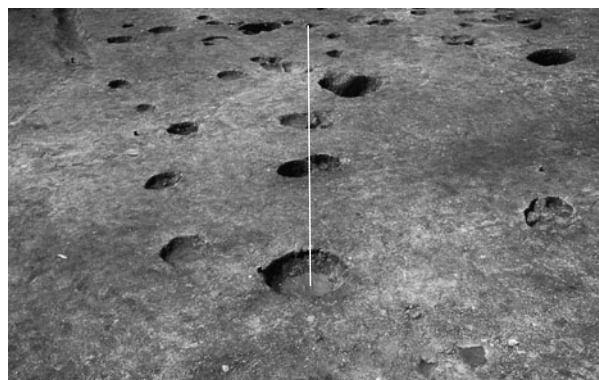
SB19093 完掘 北から



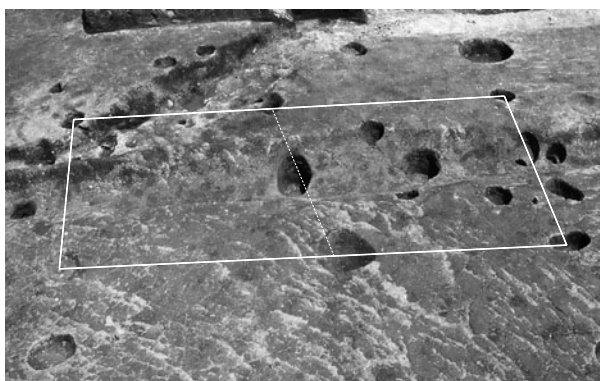
SB19094 完掘 南東から



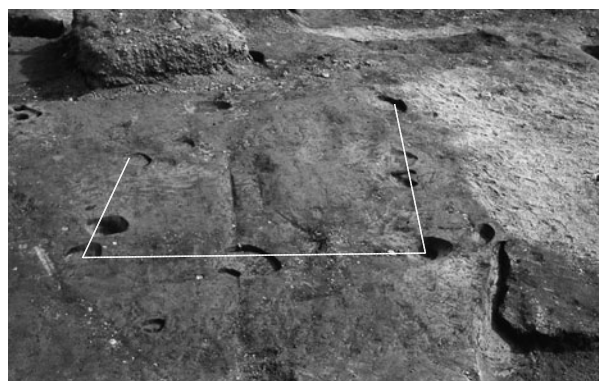
SB19095 完掘 南から



SA19098 完掘 北東から



SX19100 完掘 西から



SB19106 完掘 北から

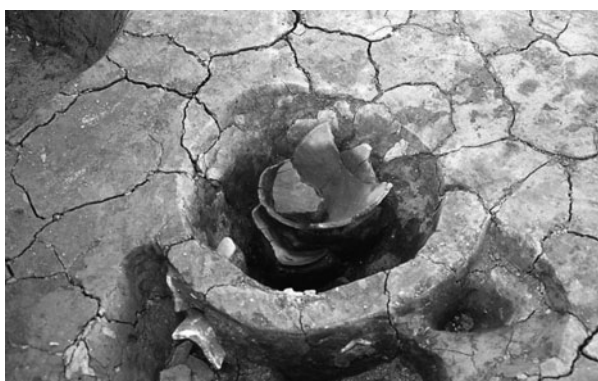




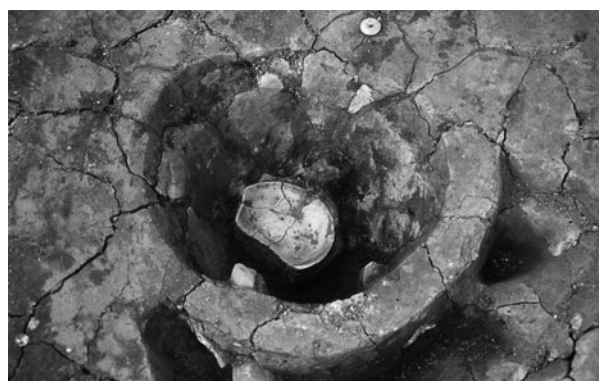
SE19112・SK19113 完掘 北から



SD19115・116 完掘 北西から



P142 遺物 南から



P142 下層遺物 南から



P266 遺物 南から



P342 遺物 南から



P461 遺物 南から



SD22001 完掘 西から





SD22001 土層 南西から



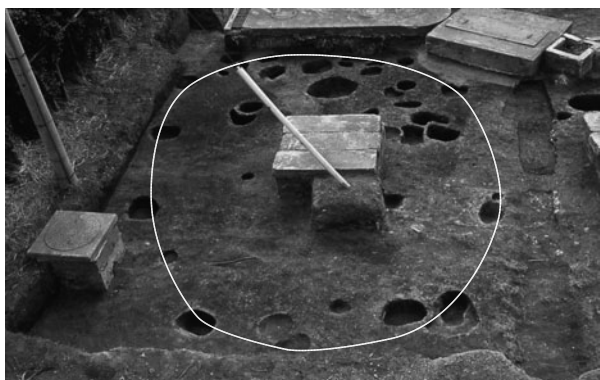
SD22002 完掘 北から



SD22002 遺物 東から



SD22011・12 完掘 南から



SX22014 完掘 北から



SX22015 完掘 西から



SX22015 遺物 西から



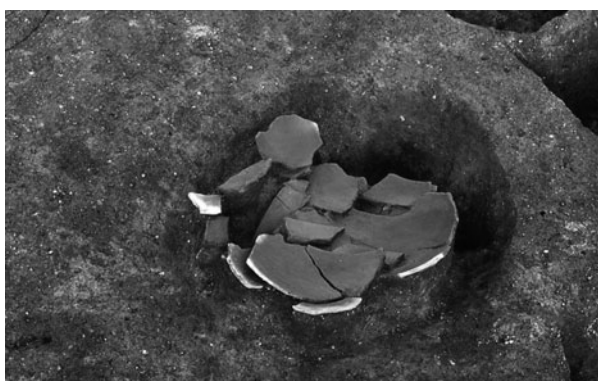
SB22032 完掘 西から



P'37 遺物 西から



P'57 遺物 東から



P'124 遺物 南から



SX22031 全景 東から



SX22031 全景 北東から



SX22031 全景 南西から



19 次調査区通路部分南～南東部全景 西から



19 次調査区通路部分北～東部全景 北から





19次調査区試掘トレンチ全景 西から



22次調査1区全景 西から



22次調査1区全景 東から



22次調査1区TP1全景 北から



22次調査1区TP2全景 北から



22次調査1区TP3全景 北から



22次調査1区TP4全景 北から





22次調査1区TP5全景 北から



22次調査1区トレンチ1南部全景 南東から



22次調査1区トレンチ1北部全景 北から



22次調査1区トレンチ2西部全景 南西から



22次調査1区トレンチ2東部全景 北西から



22次調査2区全景 北から



22次調査3区全景 南から



19次調査区作業風景 (西から)



SX19003TP4 掘削 南から



SF19016 掘削 南西から



19次調査区現地説明会風景 南東から



19次調査区現地説明会風景 東から



19次調査区調査前 西から



19次調査区調査前 東から



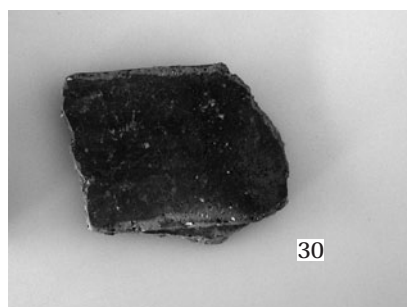
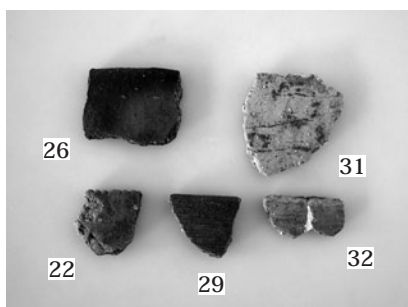
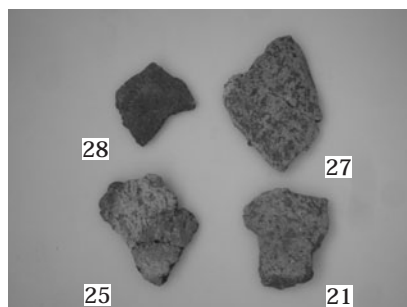
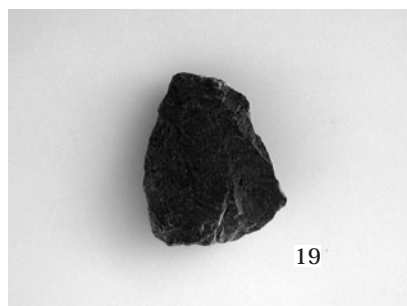
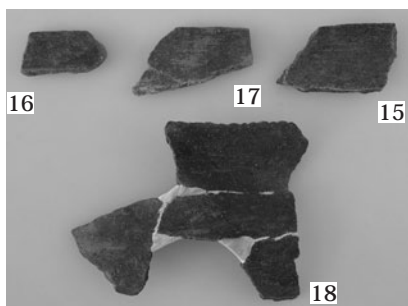
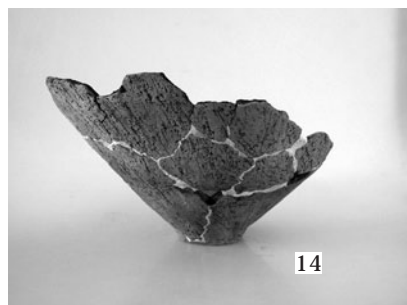
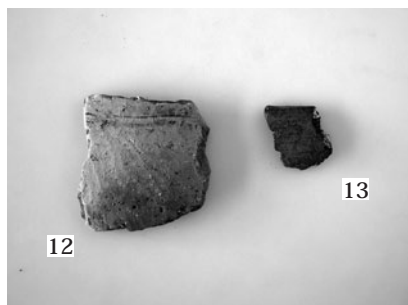
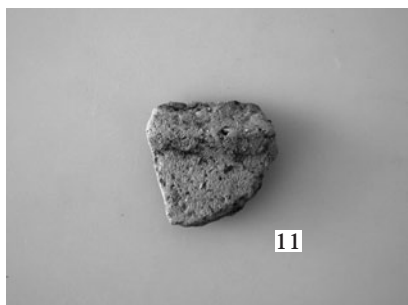
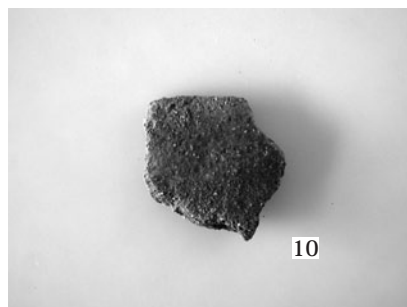
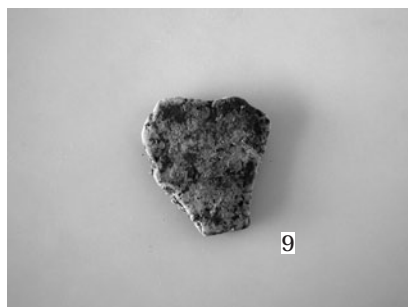
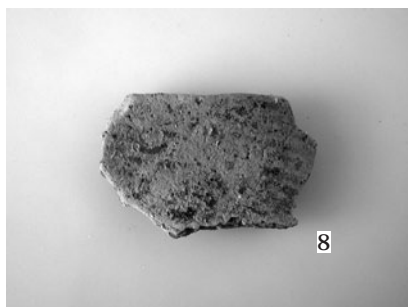
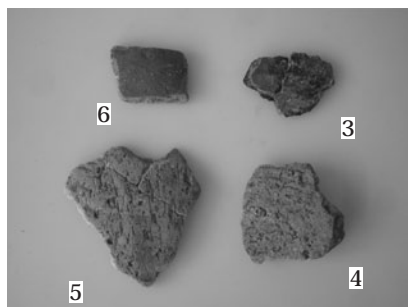
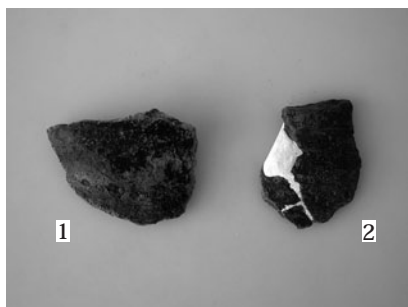
22次調査1区調査前 北東から

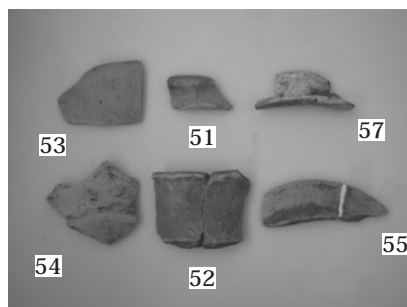
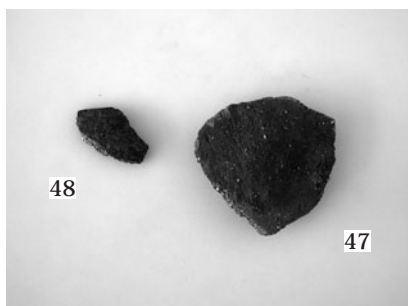
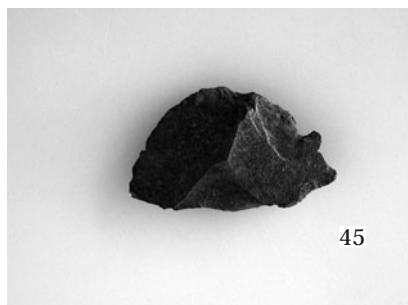
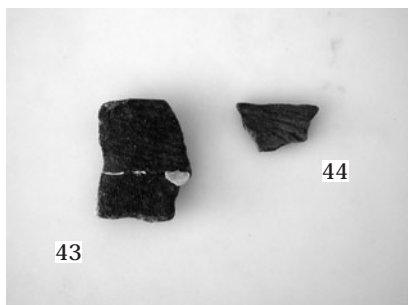
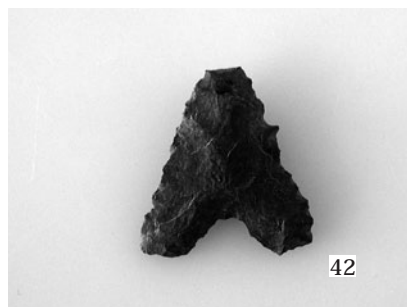
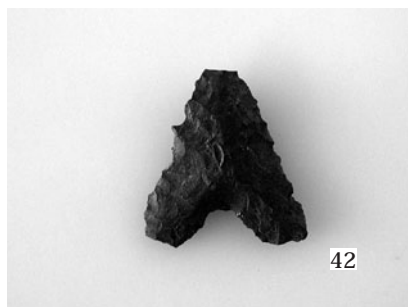
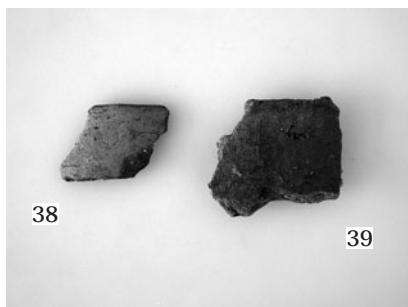
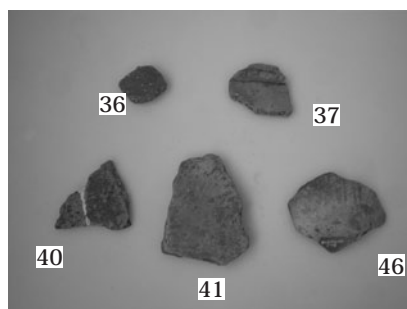
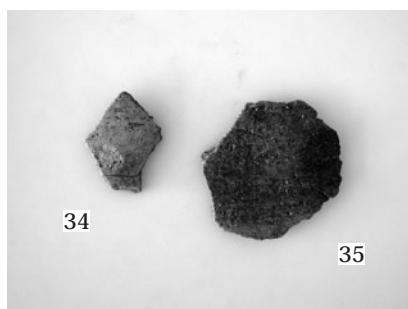


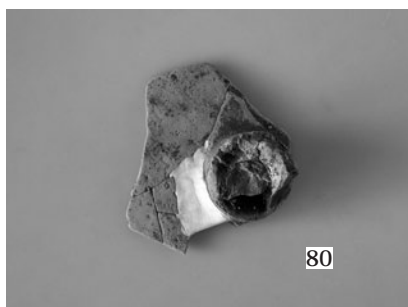
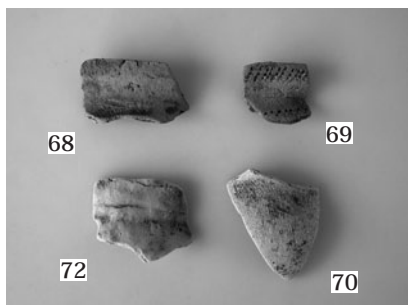
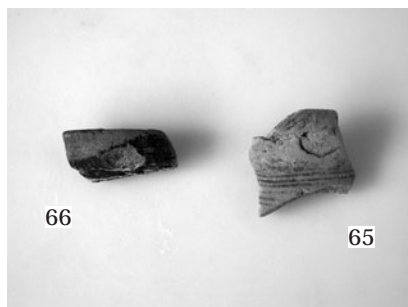
22次調査2区調査前 南西から

# 遺物

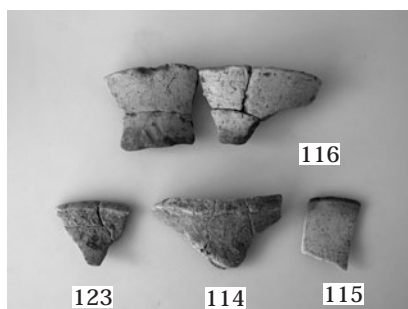
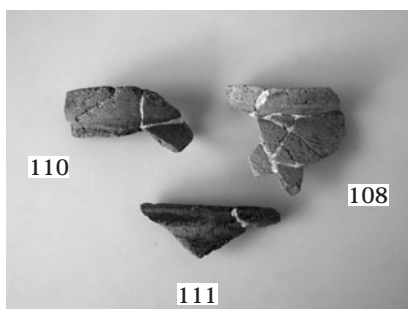
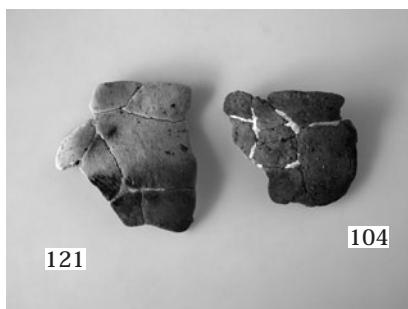
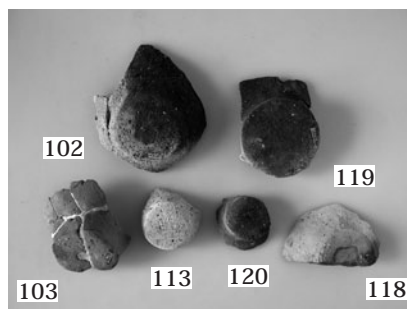
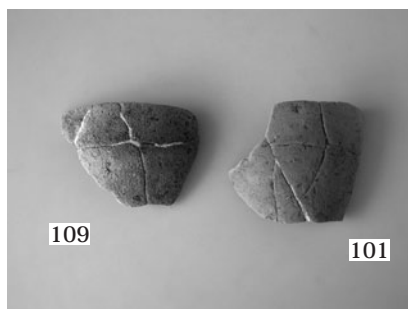
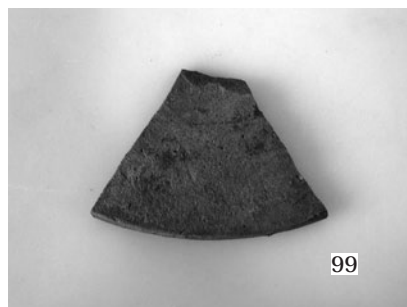
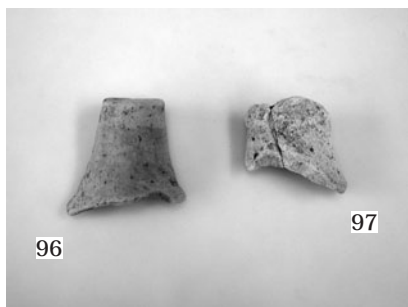
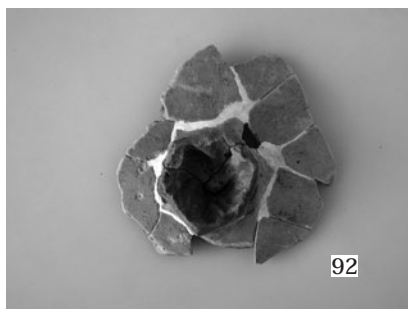
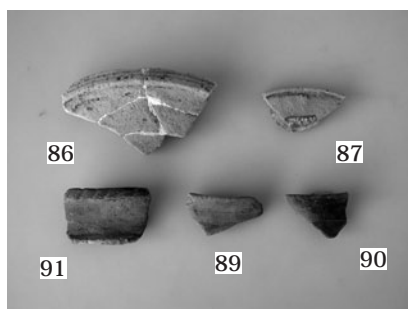
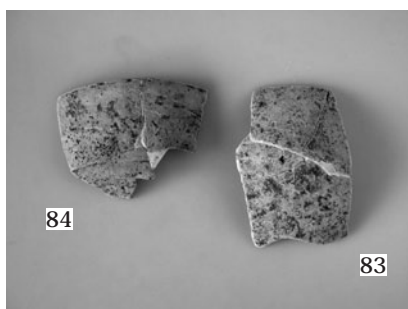




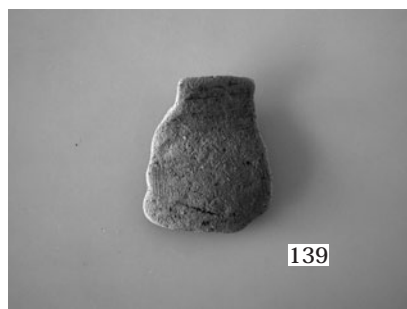
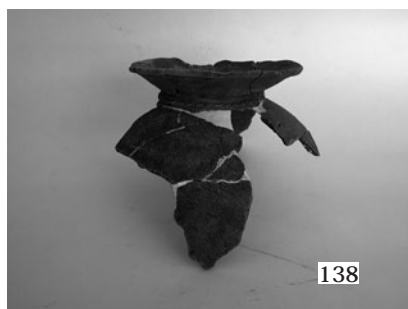
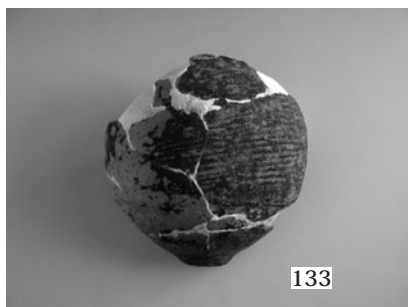
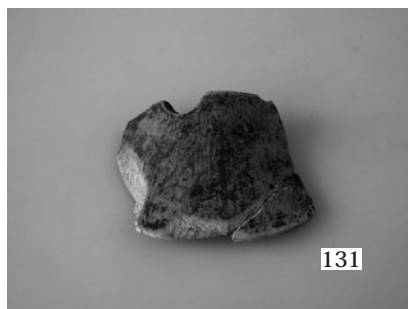
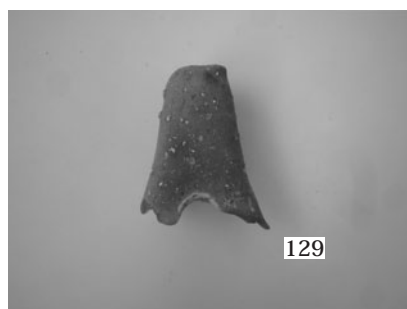


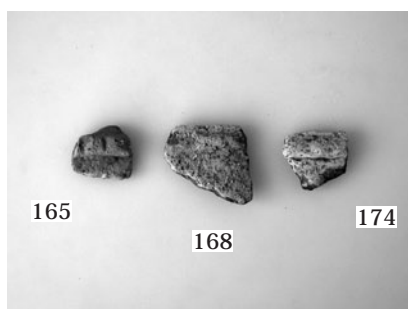
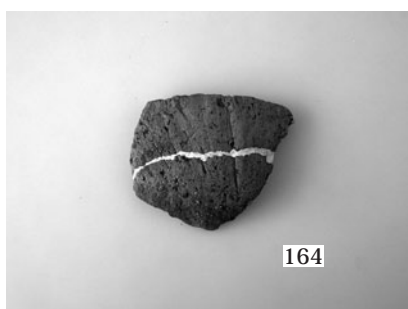
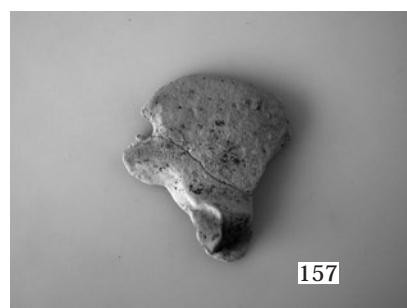
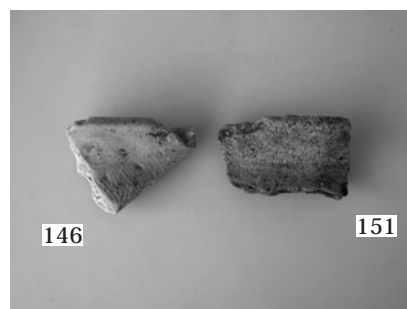
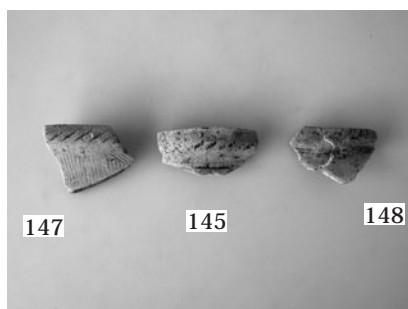


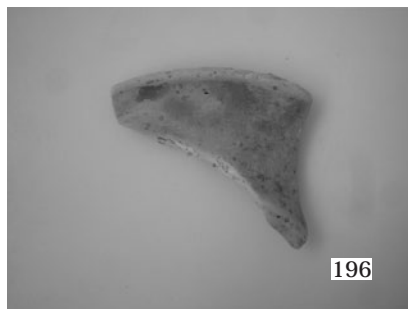
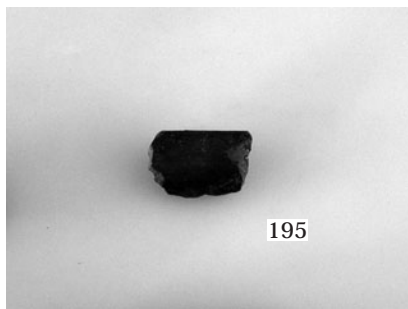
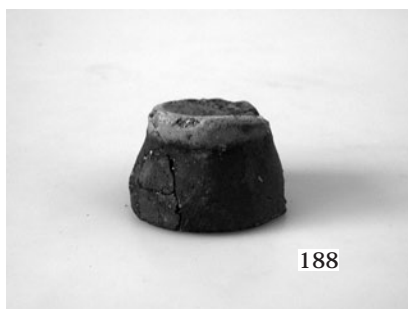
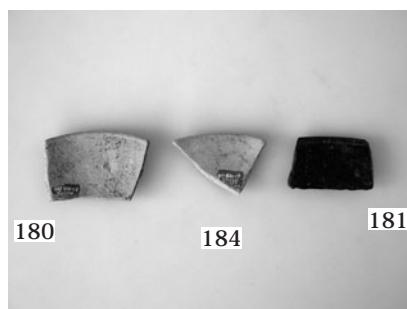




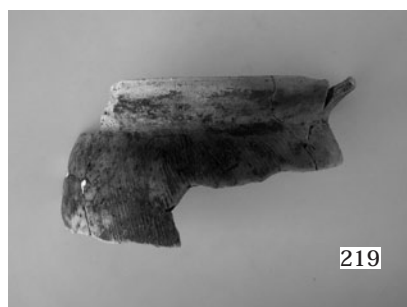
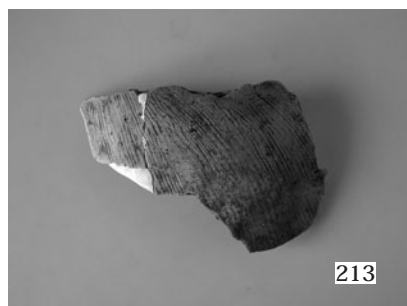
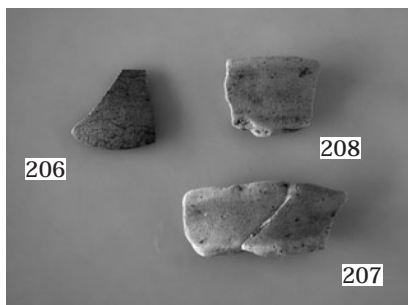
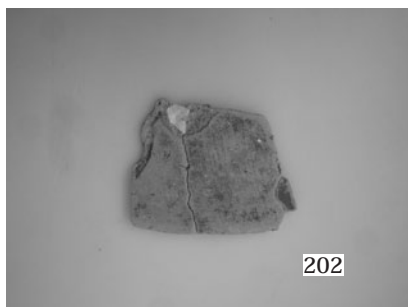
















221



222



223



224



225



226



227

237

230



228



229



231



232



233



234



235



236



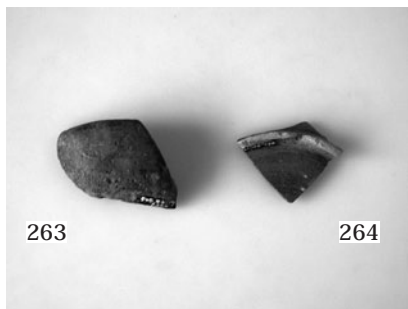
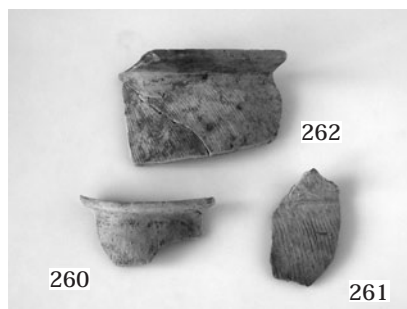
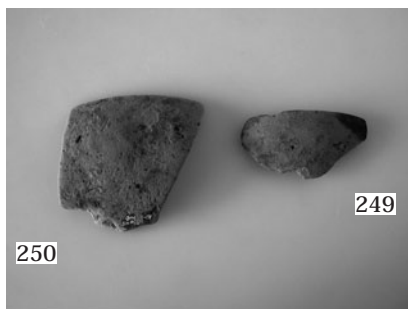
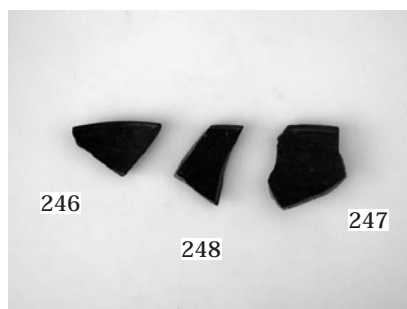
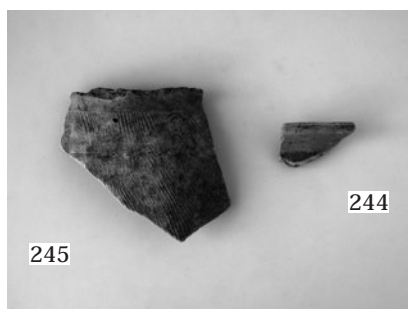
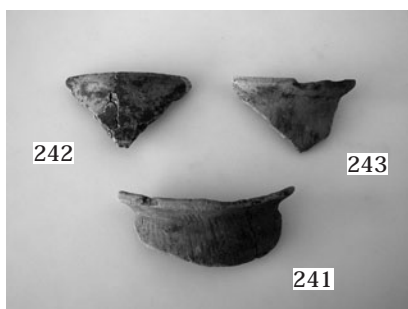
238

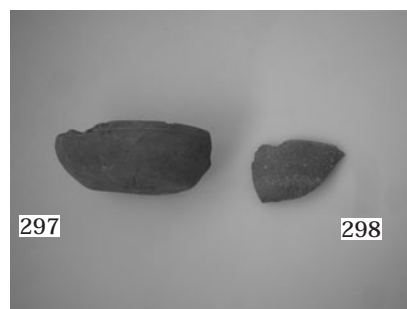
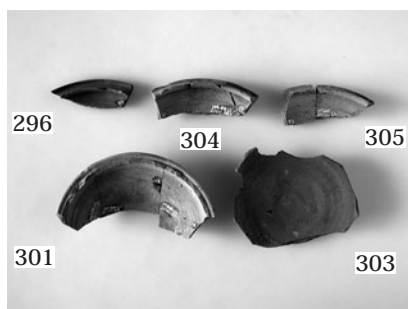
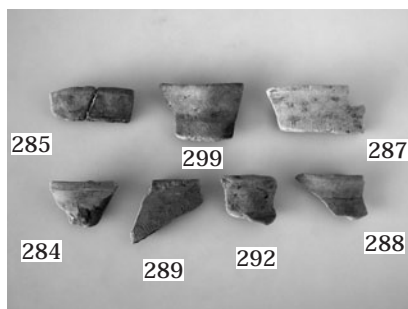
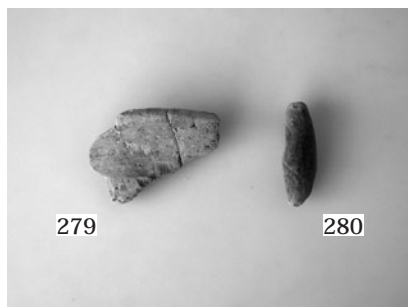
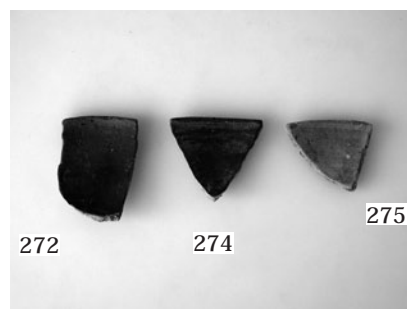


239

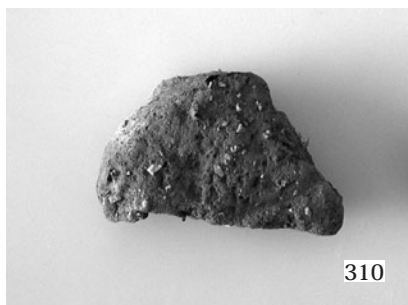
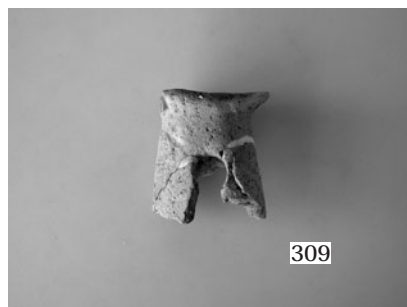
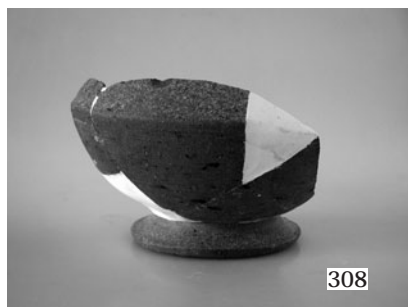
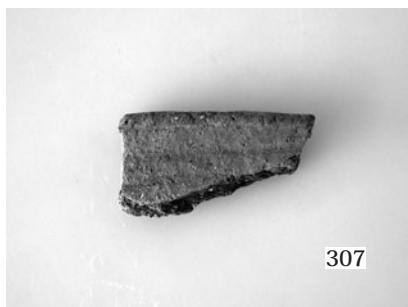
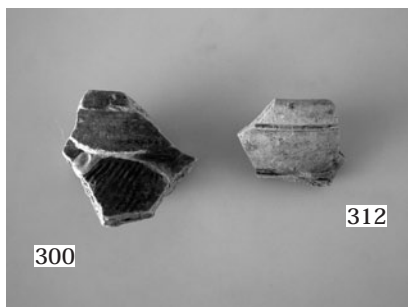


240

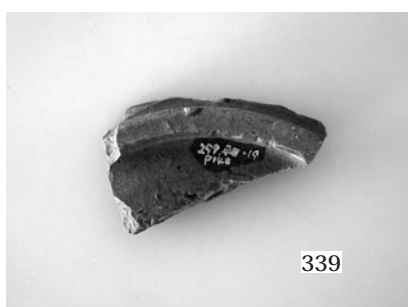
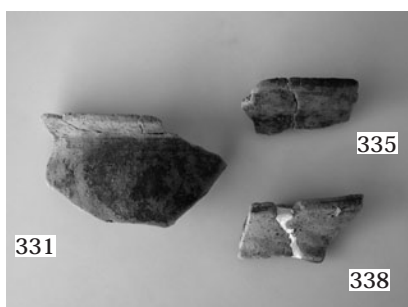
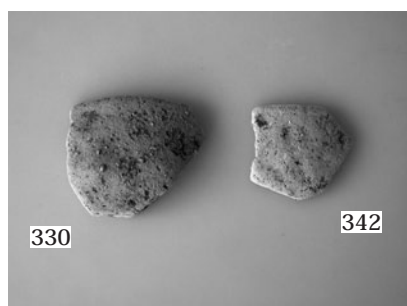
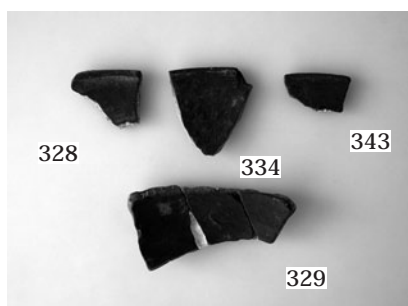


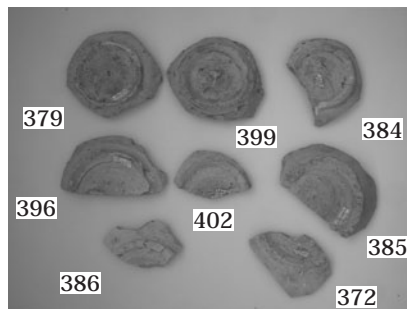
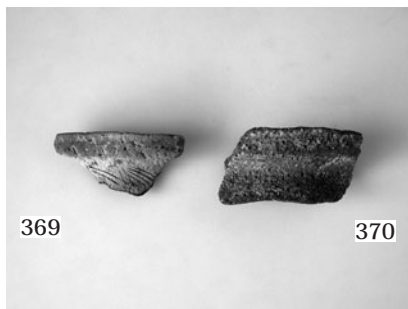
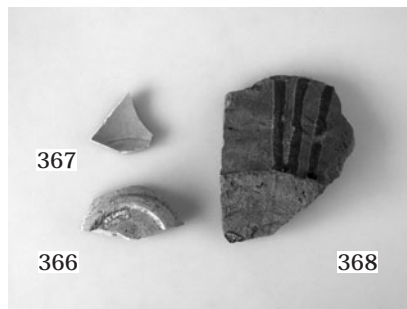
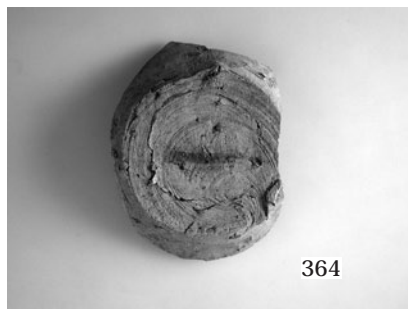
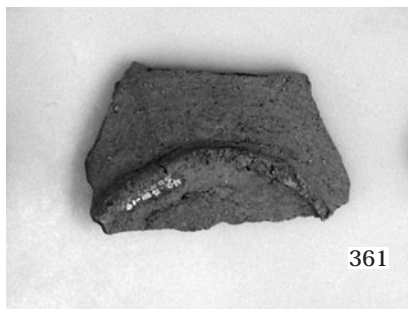
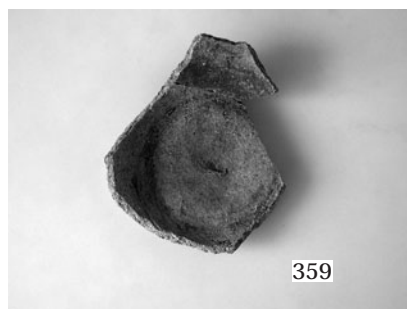
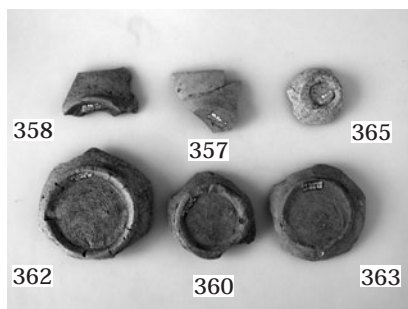
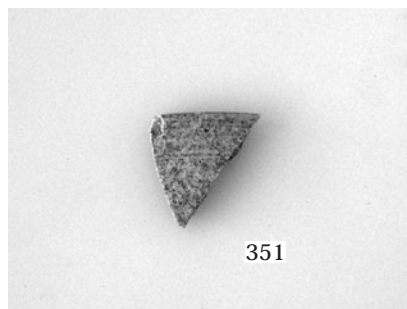
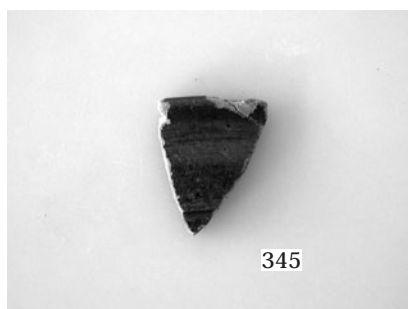
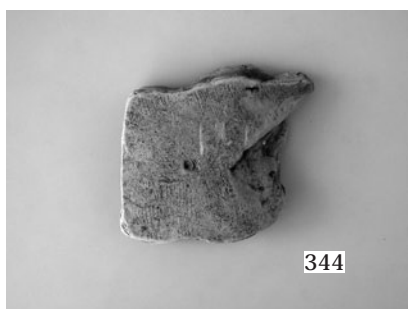


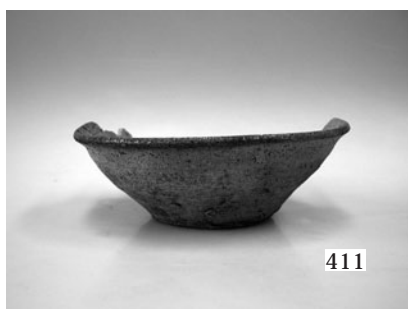
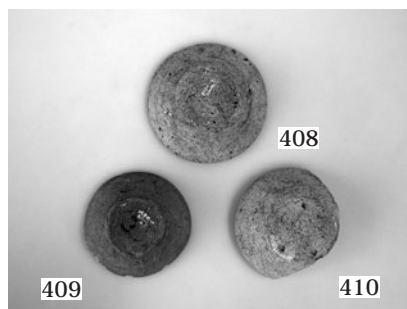
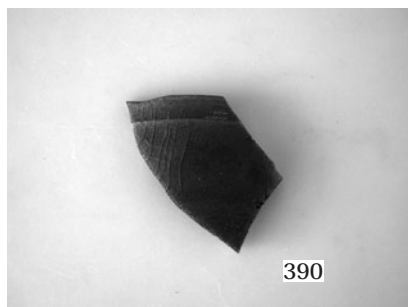
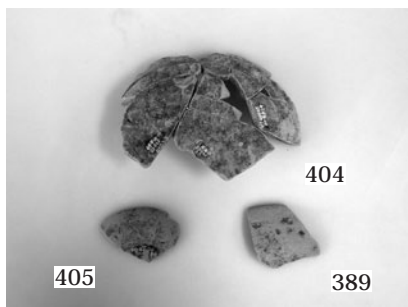
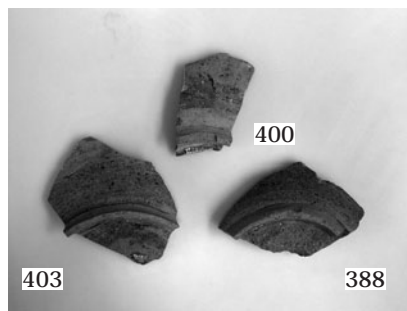
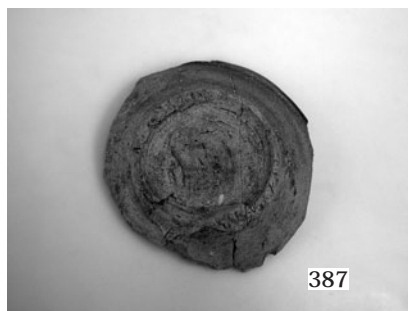
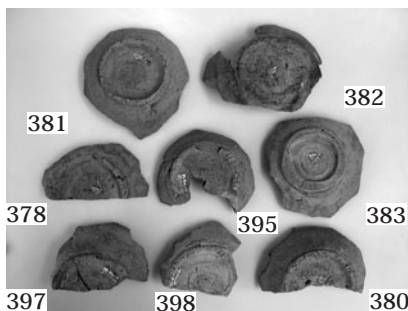




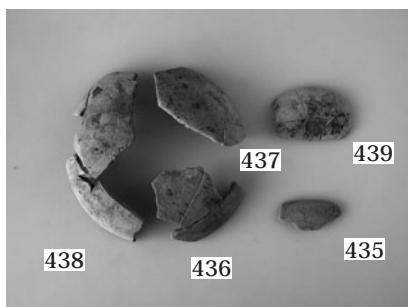
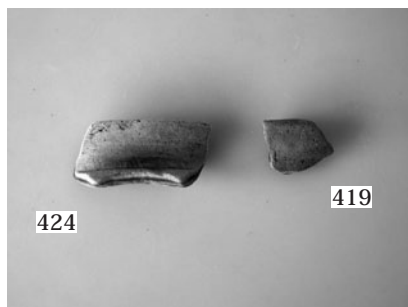
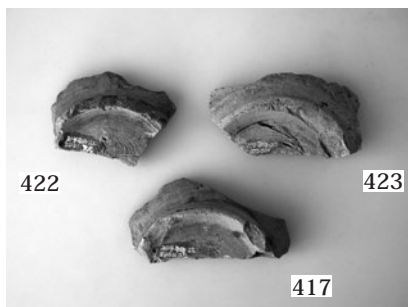
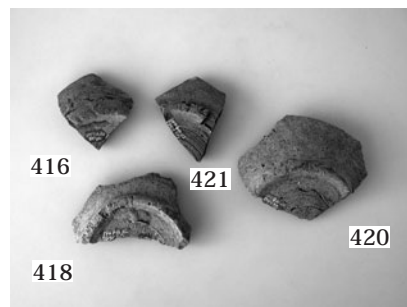




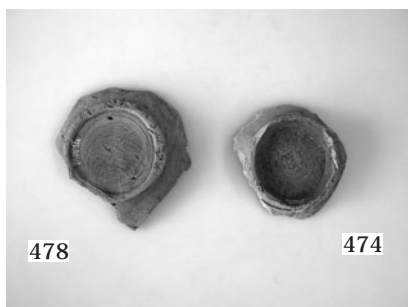
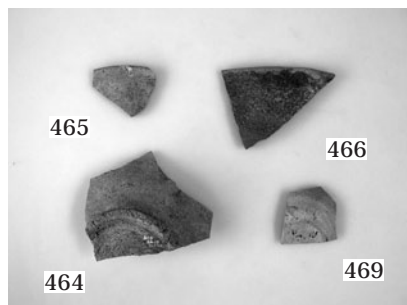
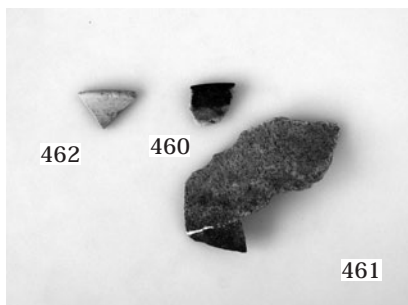
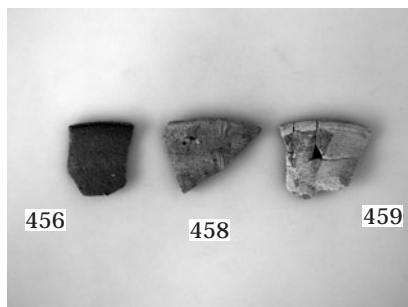
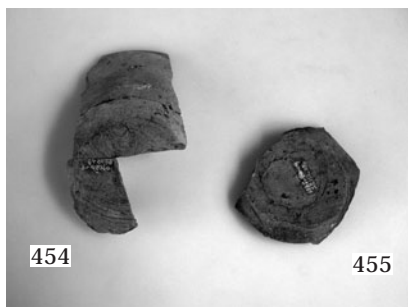
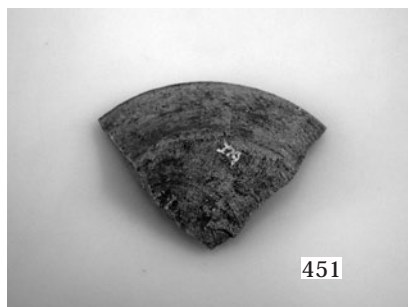


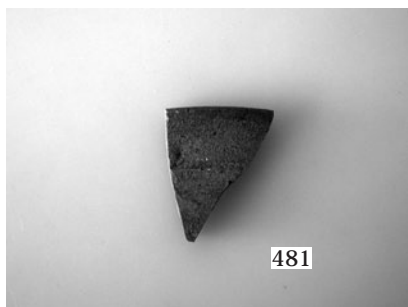




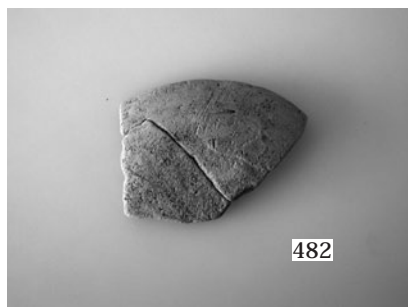




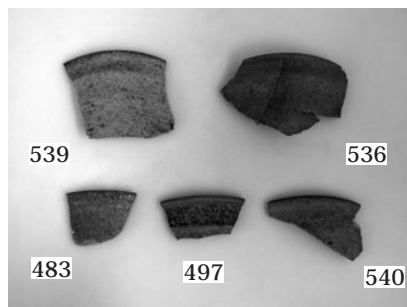




481



482



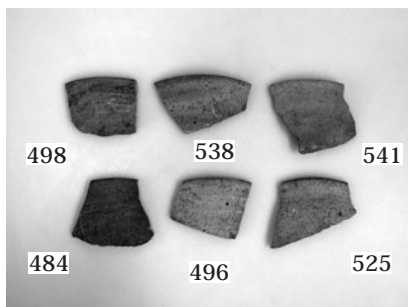
539

536

483

497

540



498

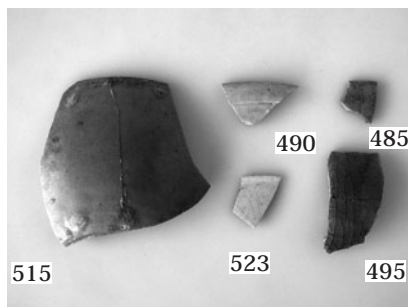
538

541

484

496

525



515

490

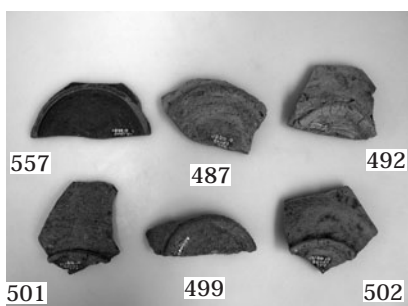
485

523

495



486



557

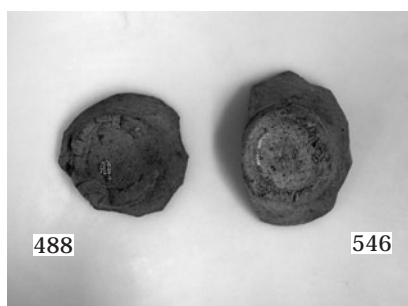
487

492

501

499

502



488

546



548

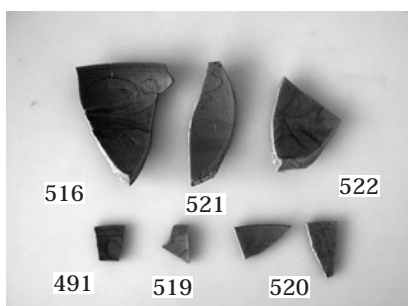
506

547

549

505

489



516

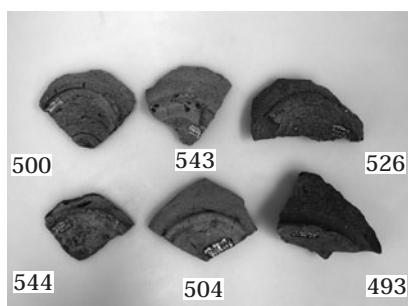
521

522

491

519

520



500

543

526

544

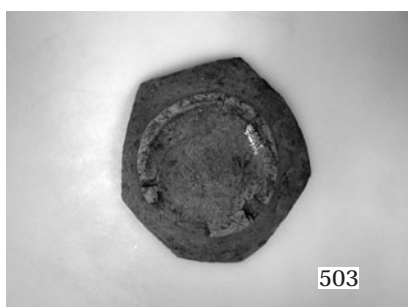
504

493

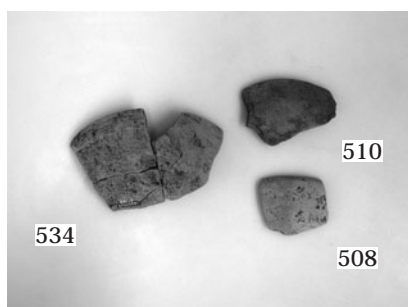


494

507



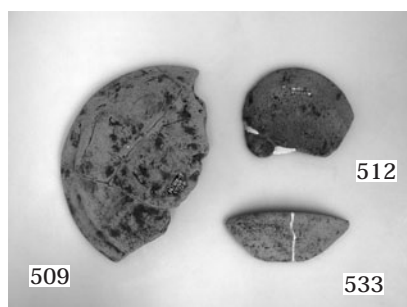
503



534

510

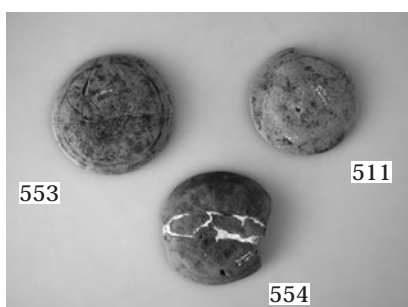
508



509

512

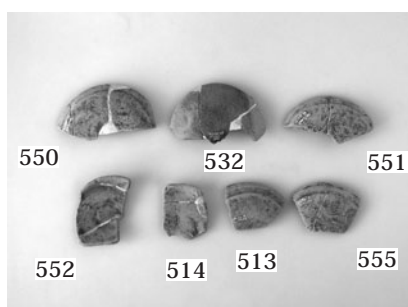
533



553

511

554



550

532

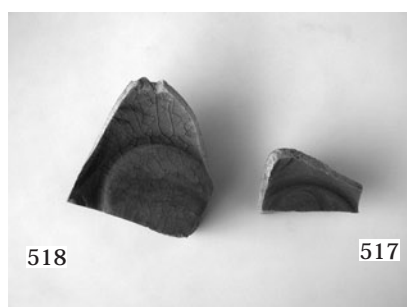
551

552

514

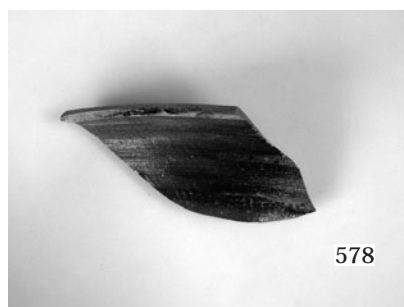
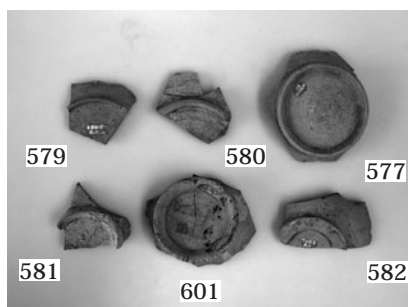
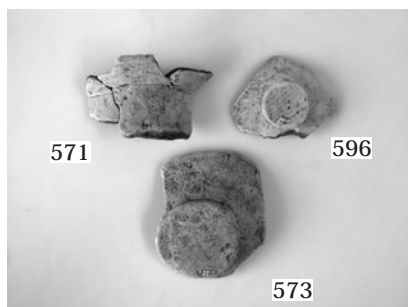
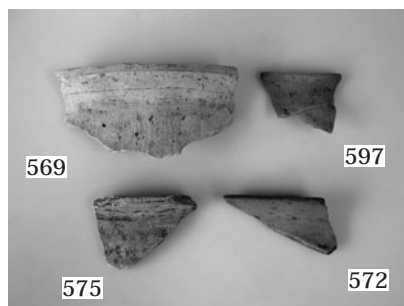
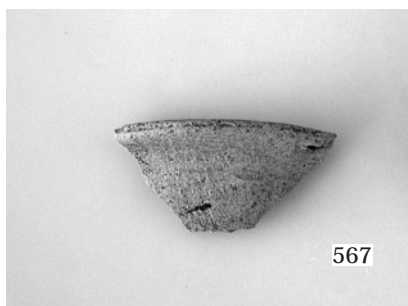
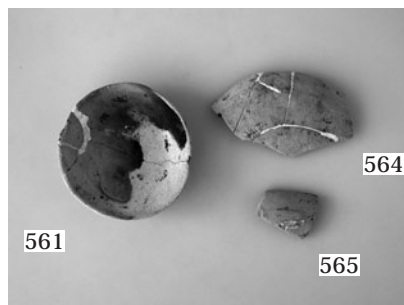
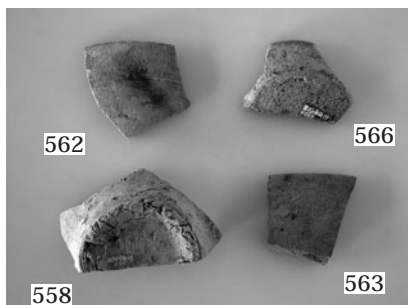
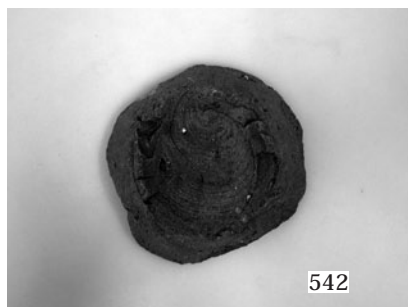
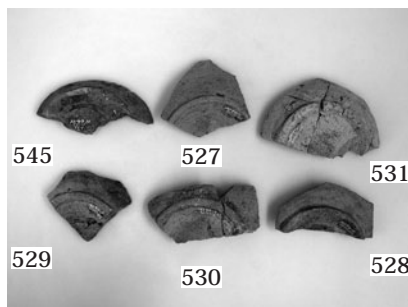
513

555

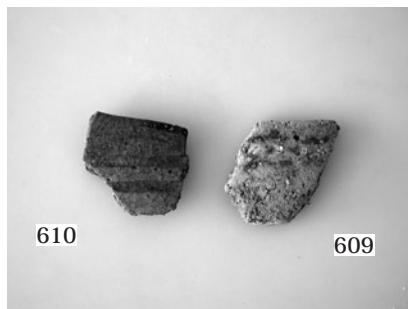
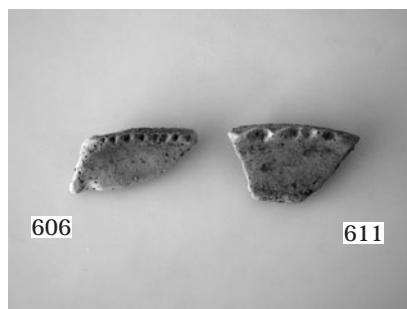
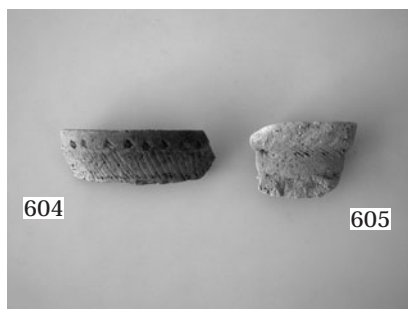
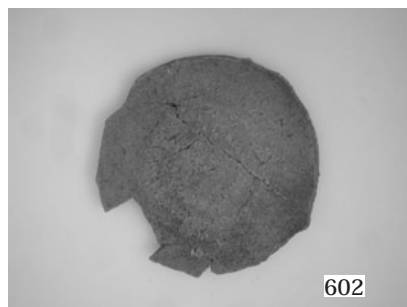
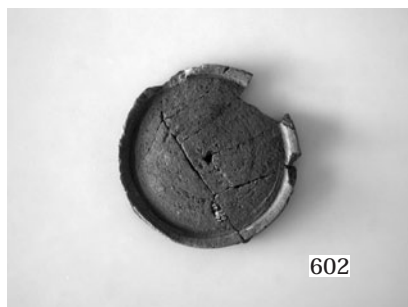
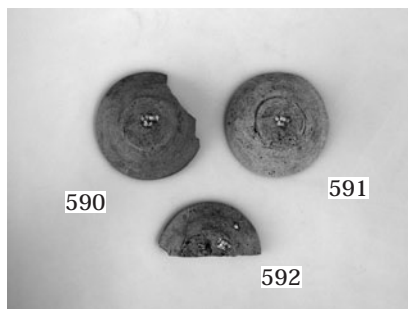
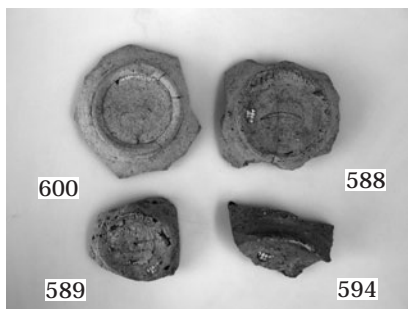
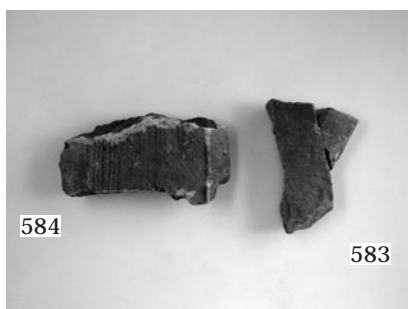


518

517











Tab.4 報告書抄録

ふりがな	ひらたいせき (だい 19・22 じ)							
書 名	平田遺跡 (第 19・22 次)							
副 書 名	平田送水場改築に伴う発掘調査報告書							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	吉田 隆史							
編集機関	鈴鹿市 文化振興部 考古博物館							
所在地	〒 513-0013 三重県鈴鹿市国分町 224 番地 TEL 059 (374) 1994							
発行年月日	2013 年 3 月 31 日							
所収遺跡名	所 在 地	コード		北緯	東経	発掘期間	調査面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
平田遺跡 (第 19 次)	三重県鈴鹿市 平田本町一丁目	24207	386	34°	136°	2010 年 2 月 2 日～ 2010 年 7 月 7 日	3,660㎡	送水場改築工事
平田遺跡 (第 22 次)				52′	32′	2010 年 11 月 18 日～ 2011 年 2 月 25 日		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
平田遺跡 (第 19 次)	集落	縄文時代 ～中世	竪穴住居 掘立柱建物 方形周溝墓 道路	縄文土器・弥生土器・土師器 須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器 黒色土器・瓦・山茶椀・山皿 青磁・白磁			古代の道路遺構の北東続き を確認し、過去の調査結 果と合わせた総検出距離は 130 m に達する。	
平田遺跡 (第 22 次)	集落	縄文時代 ～近代	平地式住居 掘立柱建物 溝 貯水槽	石器・縄文土器・弥生土器 土師器・須恵器・灰釉陶器 緑釉陶器・黒色土器・山茶椀			縄文時代晩期前半の平地式 住居を確認する。第 19 次 調査の掘立柱建物を含め、 県内では希少な事例であ る。	
要 約	<p>鈴鹿川右岸における標高約 22 m の舌状台地の先端部において、縄文時代晩期～鎌倉時代を中心とする成果が得られた。縄文時代晩期前半には、掘立柱建物及び平地式住居による小規模な集落が存在し、該当期の土器がまとまる。弥生時代後期～古墳時代初頭には、竪穴住居を中心とする集落域と方形周溝墓及び土器棺墓の墓域が近接する。特に古墳時代初頭の生業が中心となる。古代には 8 世紀代の所産と考えられる直線的な官営計画道路が造られ、遺跡内を縦貫する様相を確認できる。古代の遺構は 8 世紀後半～9 世紀代が中心となり、出土遺物からは有力豪族の川俣氏に関連の深い集落であったものと推測される。中世前期の 12 世紀後半～13 世紀初頭には屋敷地が広範に広がり、敷地の周囲は二重の溝によって囲繞される。内部には掘立柱建物及び井戸、屋敷墓等を検出した。貿易陶磁器が比較的まとまり、在地有力者層の存在が想起される。また、戦前の鈴鹿海軍工廠に伴う貯水槽を確認している。</p>							

平田遺跡 (第 19・22 次)  
～ 平田送水場改築に伴う発掘調査報告書 ～

発行日 2013 年 3 月 31 日  
 編集・発行 鈴鹿市考古博物館  
 〒 513 - 0013  
 三重県鈴鹿市国分町 224 番地  
 TEL 059 (374) 1994  
 FAX 059 (374) 0986  
 E-mail : kokohakubutsukan @ city.suzuka.lg.jp  
 URL : http : //www.edu.city.suzuka.mie.jp/museum/index.html  
 印 刷 株式会社三ツ星

